

デクのヒーローアカデミア 再履修！【完結】

くろわっさん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

緑谷出久とオールマイトはオール・フォー・ワンに敗北した。

目が覚めると出久は四歳の頃の身体になっていた。個性がないと診断され夢が破れたあの日まで時間が遡っていたのだ。

オールマイトを救うため、緑谷出久の新たな物語が今始まる！

完結済みです。

目次

プロローグ

少年の物語の終わり ————— 1

第一章 緑谷出久：Re：オリジン

緑谷出久：Re：オリジン ————— 8

緑谷出久14歳！なお、精神年齢（ry

————— 17

かわったようでも変わってない少し変

わった筋書き ————— 25

『ヒーロー』ってなんだろう？

33

原点帰りのタイムリーパー ————— 48

第二章 雄英高校ヒーロー科へようこそ

！

滾れ筋肉！越えろ！雄英高校入試！！

58

ムキムキ最強No.1 ————— 75

設立！1-A筋肉同盟！！ ————— 87

爆豪勝己：Re：オリジン ————— 100

お前に足りないもの！それh（中略）そ

してなによりも！はy（以下略）

111

『ここから』 ————— 120

第三章 騒乱のUSJ

委員長は眼鏡と三つ編みがいい

128

	遅刻は五分までならセーフ!?	138
	アオイカジツ	149
	騒乱の終わりに	164
	【番外編1】口田甲司改造計画!	181
	第四章 僕とオールマイトと、ときどき	
	サー	
	話をしよう!	199
	走り抜け! 限界突破マラソン!	
219	説明書ってのは大概ややこしい	
233	D E E P! D E E P! D E E P!!	
	競争!	355
	急がず焦らず、みんなを救ける障害物	
338	祭と喧嘩はセットなのかもしれない	
	第五章 愛と炎の雄英体育祭	
	ニテ美少女だったら【短編】	316
	【番外編2】もしもかつちゃん男装ポ	
	岳山優: Re:オリジン	294
	【編】	276
	生き残れ! 1ヶ月無人島生活!!	262
	【前	
247	生き残れ! 1ヶ月無人島生活!!	
	【後	

全力全壊！騎馬戦バトルロイヤル！

369

筋肉を、信じろ。

394

恋せよ乙女！アット・レクリエーショ

ン！

405

僕だけがないトーナメント

434

戦いは止まらないからススメ！

453

轟焦凍：Fw：オリジン

472

オールマイトの弟子

492

第六章 僕の名は。

my name

e.

遊ぼう、振り替え休日！

512

BIG3？パワーリフティングの話で

すか？

532

ルーム・イン・コミュニケーションライフ

w

ith クラブ

556

『大丈夫』

578

第七章 ヒーロー×ヴィラン×ヒーロー

殺し 保須 SOS

おじいちゃんの家は独特の匂いがある

急げよ若人、ダツシユ

路地裏の英雄問答

斜陽に燃ゆる街

小さな大戦の終幕

670

655

638

616

599

幕間 第七・ 五章 魁!!緑谷塾

徒手空拳は拳法じゃない 747

雄英高校一年A B組合同近接格闘自主

訓練会 713

拳藤一佳という少女 731

第八章 筋肉バカとテストと相棒

緑谷出久、相棒(サイドキック)になる。

オールマイイト杯(カップ)開幕! 747

771

通形ミリオ:ライバル 791

『相棒』 811

PLUS(プラス) ULTRA(ウル

991

トラ)

再履修(やりなおし) 855

【番外編3】メリッサ・シールドの日記

【劇場版公開記念】 886

第九章 リンカン・ウォーズ 連合の逆

襲

待ち人来たらず、備えよ憂いなく

911

林間合宿は青春の1ページ 928

マッチョと愉快的仲間達 949

不確定要因(イレギュラー) 970

ぶちこめ、1000000%! 991

003.	HEROES	1142	
002.	THE DAY	1121	
1094	001. ODD FUTURE		
	11 FOR ONE.		
	最終章 ONE FOR ALL, A	1072	
1048	最後の希望		
	出久(デク)と勝己(かつちゃん)		
	雄英高校 VS 開闢行動隊 [後編]	1027	
	雄英高校 VS 開闢行動隊 [前編]	1008	
	少年の物語は続く		1288
	平和の象徴の後継者		1263
	エピソード		
1221	008. ピースサイン		1240
	007. だってアタシのヒーロー。		
	006. アップデート		1202
1187	005. だからひとりじゃない		
	004. 空に歌えば		1165

プロローグ

少年の物語の終わり

それはたったひとつの小さな過ちだった。

少年は心のままに駆け出してしまった、その道が終わりへと向かうものとも知らずに。

「UNITED STATES OF SMASH !!」

顔のない男の”顔”に拳が突き刺さる。

それは平和の象徴《オールマイト》の揺るぎなき信念の一撃だった。

「僕の負けか…」

顔のない男、オールフォーワンが呟く。

その言葉とは裏腹に彼の”眼”はまだ死んでいなかった。

「だが僕だけではない……君の未来への希望だけでも一緒につれていこうじゃないか……」

そういうとオールフオーワンは枝にも槍にもみえるようなものに腕を作り替え、ひとりの少年のもとへと猛烈な勢いで伸ばす。

その少年は本来そこにいるはずのないものだった。

しかし心に駆り立てられた少年はそこに来てしまったのだ、皮肉なことにその心にはヒーローとしての素質を持っていたから。

”考えるより先に、身体が動いていた”

少年が憧れの存在によって認められ、大切にしていた素質が、少年を終わりへと導いていく。

「くっ!!」

オールマイトが気がつくも、一瞬遅れてしまった。

その一瞬の間にオールフオーワンの腕は少年が避けることのできないところまで伸びていた。

狂気を宿したその腕は肉を食い破り、腸をかきみだし、温かな血を辺り一帯にぶちまけた。

「オールマイトオ!!」

少年の悲痛な声が響く。

腕は少年とオールフオーワンの間にはいったオールマイトの左胸を貫いていた。

目に入ったその光景に目の前が白くなりそうになった、しかし少年はすぐに跳ね飛び、オールマイトを越えてオールフオーワンに肉薄する。

「スマアアアツシュツ!!」

雄叫びとともに振り抜いた少年の拳がオールフオーワンを捉え、その身体をくの字に折り曲げながら大きく吹き飛ばす。

同時にオールマイトを貫いていた腕が抜け、巨軀が地面に沈んでいく。

爆発的な力に耐えきれず、ボロボロになる少年の全身、そんな痛みなど少年は気にも

とめない。

身体を引き摺りながらオールマイトのもとへと近づいていく。

そう、少年は気にもとめない。自らの腹から背中にかけてポツカリと空いている穴のことさえも。

「オールマイト……オールマイト……」

少年が絞り出すように、名前を呼ぶ。何度も呼ぶ。

そうして少年は倒れ伏したオールマイトまでたどり着く。

「……や……少年……」

普段のオールマイトからは想像もつかないほどの消え入りそうな声が少年の耳に届く。

「緑谷少年……ほんとうに……すまない……」

そう言うとオールマイトの身体から力が抜けていく。平和の象徴が消え行く。その言葉が少年に届いたかどうかは、もう彼にはわからない。

「オールマイト！ 待って！ おいていかないでよ！」

緑谷と呼ばれる少年はオールマイトへボロボロになった腕を伸ばす。

「平和の象徴……そして次世代の希望の旗……その両方を僕の手で折ることが出来るなんてなあ」

瓦礫のなかで醜悪な笑みを浮かべながら、オールフオーワンが呟く。

「これからは混沌の時代がやってくるぞ……楽しくなるなあ」

指ひとつ動かせないほど満身創痍のオールフオーワンは、ないはずの“顔”で勝ち誇った表情をしていた。

「オールマイト……ごめんなさい……ごめんなさい……」

少年は動かなくなったオールマイトの手を掴みながら、うわ言のように届くことにな

い謝罪を繰り返す。

「必ず……必ず救^{たす}けるから……オールマイト……だから」

少年の命の鼓動が弱まっていく、それでもその手はオールマイトを強く掴んで離さない。

「……だから……また……」

少年の口から言葉の続きが出ることはなかった。

受け継がれてきた希望の灯が消えていく、少年はもう動かない。

たったひとつの小さな過ちによって狂った歯車は戻らない。

ここでひとつの小さな世界が終わる。

少年、緑谷出久が最高のヒーローになるための物語は——
ここで終わりを告げる。

第一章 緑谷出久：Re：オリジン

緑谷出久：Re：オリジン

「オールマイトオオオオオオオ!!」

僕は叫びながら起き上がった。

「オールマイト! オールマイト? オオオウルウ マアアアイト!!!」

オールマイトは? オールマイトはどこにいるんだ?

確かオールフオーワンにオールマイトも僕もやられてしまっただけで立ち上がれなくなっただけで覚えている。

でもそのあとの記憶がさっぱりだ! まったく思考がまとまらない!

「い、生きてる!? というかここどこだ!」

辺りを見回してみると、清潔感のある白い壁と灰色の長椅子、鼻にかかる消毒液の臭いがあたりに漂っているのがわかる。

よし、だんだんと落ち着いてきたぞ。

「ここは…病院の廊下かな? 何がどうなったんだ? あの後いつたいていどうなったんだろ

う、僕もオールマイトも病院に運ばれたのかな？だとしても僕も僕はベッドじゃなくて廊下の長椅子に寝かされているんだ？状況がさっぱり理解できない……」

「あら出久、起きたのね」

聞き覚えのある声が聞こえてきた。振り返るとそこには――

「母さん?!?なんでここに?」

なんだか違和感のある母さんが優しい笑みを浮かべてそこにいた。

「母さん、オールマイトはどうなったの?!?ここに居るの!?!」

そうして食いぎみに母さんへ今一番知りたいことを尋ねた。

「オールマイトって、出久の大好きなヒーローの?。いるわけじゃないじゃない、出久ったらまだ寝ぼけてるのかしら」

「今日はお母さんと一緒に個性の診断にきたでしょう?」

四歳になるんだから、そろそろ個性がでないとおかしいー周りの子はみんな個性持っているのにー

って出久が言ったんじゃない」

えっ?四歳?母さんは何をいつているんだらう?

僕はもうそろそろ16歳になる頃だよ、四倍も違うじゃないか。

「かあさんなにして――」

あれ、声がいつもより高いし、しゃべりかたもなんだか舌つたらずだ。

身体を見てみると手も小さくなってるし、なんだか子供みたいにいるんな部分がまるっこい。

僕は母さんを見返す、そこで違和感の正体に気が付いた。

「かあさんが…やせてるー！！！！」

「なにいつてるのよ出久！いつお母さんが太ったの!？」

僕の驚きに母さんも驚きで返す。

もしかして、僕は…

四歳の身体に…

いや、四歳の頃まで…時間が遡ってる!？」

そこから考え込んだりブーツとしたりしてらうちに、僕は母さんに連れられ診察室にいた。

「足の小指の第二関節が——これは——でして——」

病院の先生がなにか言っていたがいまいち頭に入らなかつた。

次の言葉を聞くまでは…

「今どき珍しいまったくの無個性ですネ」

個性！そう、個性だよ！もし時間が戻っているならこのときの僕はまったくの無個性だったはずだ。

よし、ならまずは個性を、オールナイトから貰ったワンフオーオールが僕の身体に宿ってるか確かめよう！

……よし、なんとなくだけどワンフオーオールは無くなってない、そんな気がする。身体の内底に確かな力を感じるぞ

「出久！出久、大丈夫？個性がないって言われてショックだったわよね」

母さんが心配そうにこちらを覗きこんでいる。

「かあさん、これゆめじゃないよね、ほほつねってみてくれない？」

なんだか夢を見てる気分になってきたので、母さんに現実なのかを尋ねてみた。

「出久！」

大きな声を出しながら母さんが僕を力強く抱き締めてきた。

少し痛いな、よしこれはどうやら夢じゃなさそうだ。とはいえやっぱり個性を改めて確認したいな、ワンフオーオールが本当に使えるのか、オールナイトに認められた証がなくなったりしていないのかを。

「かあさん、ぼくこせいつかえるきがするんだ！つかってみていい？」

流石にいきなりここでぶっぱなすわけにもいかなないので、母さんに聞いてみる。

「出久？お母さんの前では無理しなくていいのよ？出久が無個性だからってお母さん悪く思ったりしないわ」

完全に見栄っ張りだと思われてるー！！

まあそりやそうか、ここまで何の個性もなかった子供に言われてもそうとしか思えな
いものなあ。

でも諦めないぞ、僕は今すぐにでも確かめたいんだ！

「かあさん、せんせー、おねがいます。すこしだけでいいんです！」

「出久、だからね——」

「まあまあ、お母さんいいじゃあないですか、試すくらいなら。出久君、じゃあ向こうに
個性測定用の部屋があるからそこへ行こうか？」

母さんの言葉を遮って、先生が提案してくれた。

なかなか話がわかる先生じゃないか！まあ無個性だって、ばつさり切られてたけど。

「でも先生——」

「まあまあ、自分でやってみて駄目なら本人も納得しやすくなりますよ」

先生が小声で母さんにアドバイスをしている。

あつ、これ完全にだだっ子だと思われてるー！

くそう、早いとこワンフォーオールを発動させて、先生も母さんも見返してやる！
そうして僕らは測定室へと移動した。

「じゃあ出久君、あの的に向かつて個性を使ってみてくれるかい？」

先生が測定用の的を指さして言う。周りの計測機器には電源が入っていないのが見てわかる。

うわあ…子供だましまだなあ、少しくらい真面目にやってくれてもいいのに…

いや、今は個性を使える場を用意してくれただけでも感謝しよう。僕の目的は数値を
出すことじゃないんだ！

「わかりました！」

そう言つて僕はワンフォーオールの感覚を思い浮かべる。

…いける、右腕の力が高まっているのを感じるぞ！

でもどれだけ反動があるか分からないし、できるだけ最小限にだ！

小さく、ちいさく、小さく!!

よしいくぞ！オールマイイト直伝！

「すまーっしゅ!!」

甲高い掛け声とともに超スピードで右腕を的に向かって振り抜いた。

ビュンツという風を切る音と同時に的が跡形もなく砕け散った。

先生と母さんの目がテンになっているのが見える。

ハツハツハ！どんなもんだい！

——まあ、反動で僕の右腕も砕け散ったんですけどね…どうやらパワーの制御に失敗したみたいだ！

…いや、正確には砕け散るくらい痛い！めっちゃくちゃ痛いぞ!!

そうして僕はその強烈な痛みを感じながらも、同じくらいにこれは現実なんだなあと感じながら意識を手放した。

く六ヶ月後く

ようやく腕が治ったぞ！リカバリーガールの治療がないとここまで長引くものなんだな…

子供だったからか変な後遺症もなく無事に完全復活だ！

あのときのワンフオーオールは出力は5%ぐらいにうまく調整できたと思う、しかしそれでもまったく鍛えていない子供の身体には大きすぎる力だったのだろう。

なぜ時間が戻ってしまったかはさっぱりわからないままだが、これはチャンスだ！今度こそ僕の手でオールマイトを救けよう！

まずは身体を鍛えて、ワンフオーオールの制御の精度も上げよう。前よりもっと個性をうまく使えるようにならなくちゃいけない。

ヒーローやヴィランについても詳しく研究していこう、特にオールフォーワンは危険すぎる。複合する個性…それに対応するには兎に角たくさん個性のメリットやデメリットを知って、それに対策を立てるしかないだろう。

それに…なによりも…オールマイトに会おう…

子供の僕に何ができるのかはまだわからないけれども、僕の知っている前世でのことを全部伝えたい！

特にあの胸のキズがつけられた5年前の、いや今からだと約5年後になるのか、オールマイトの弱体化の原因となった事件の日までには、会わなくては。

Plus ^更に ^向こう ^へ Ultra の精神で頑張るぞ！
やらなければいけないことは多いけど、幸いにも時間はたくさんある。
待っていて下さい、オールマイイト！僕が必ずあなたを救ってみせます!!

その後、僕はオールマイイトに会えないまま、10年の時が過ぎた——

緑谷出久14歳！なお、精神年齢（ry

世界の総人口の約八割はなんらかの超常能力“個性”を持ち……ってこんなことみんな知ってるよね。

いまでは僕もその一人だ、本来の僕は無個性だったのだけでも。

オールマイトとオールフォーワンの決戦のあの日、僕はオールフォーワンに殺された。

気がつくと僕は、四歳の頃に戻っていた、オールマイトに託された個性“ワンフォーオール”をこの身に宿したまま……

それから10年間、オールマイトと出会うためにいろんなところを駆け回った。

あるときはオールマイトが解決した事件現場に向かったり……

「おーるまいとー！どー！？」

「ぼく！オールマイトならついさっき「次の現場に向かわねば！」って言って飛んでいったよ」

「おーるまいとはやい!」

また、あるときは出待ちをしてみたり…

「オールマイトまだかなあ…まだ出てこないかなあ」

「君!オールマイトならさつき裏口から出ていったよ」

「まさかの裏口から!?!」

あるときは町中を探し回ってみたり…

「オールマイト!ここですか!?!」

「君!いくら常識はずれのオールマイトとはいえ、流石にゴミ箱のなかに隠れたりはしないと思うぞ!」

「ですよねー、オールマイトどこなんだ…」

あるときは…

「オールマイト!オールマイトオオオオオ!!」ガンツガン

「こら出久！オールマイトが映ってるからってテレビの中に入ろうとしないの！壊れちゃうでしょ!!」

「…はっ！僕はいつたい何を…」

そんなこんなで一度もオールマイトには会えていない。

オールマイト、もうあの怪我をしてしまつて活動制限もでてしまつているんだろうなあ…

はあ、これじゃあ前世むかしとなにも変わらないじゃないか！

変わったことといえば、家にあるオールマイトグッズに前世で手に入れられなかった限定品らが増えていること、それと僕が——

「全員席ついてるかー、ホームルーム始めるぞー」

そんなことを考えているとすでにホームルームが始まつていた。

「これから進路希望の紙を配るけどー、まあ皆だいたいヒーロー科志望だよー」

そんな担任の言葉にクラス中が騒ぎ出す。

「先生エー！皆とかいっしょくたにすんなよー」

それに割つて入る声がある、かつちゃんの声だ。

「俺らはこんな“没個性”どもと一緒に底辺なんかいかねえよ」

「爆豪は確か…:雄英高校志望だったな」

かっちゃん先生と先生の言葉に周りがさらにぎわつく。

かっちゃんこと、爆豪勝己。前世から変わらず口が悪いなあ、そして相も変わらず――

「俺らは模試では雄英高でもA判定!あのオールマイトをも越えて、トップヒーローと成り!必ずや高額納税者ランキングに名を刻むのだ!!」

みみつちいのである。高額納税者つて…:それでいいのか、かっちゃん!

「なあ…:デク?」

うわあ…:巻き込まれたよ…:

「かっちゃん、オールマイトを越えるなんて簡単なことじゃあない、そう軽々しく口にするもんじゃないよ」

かっちゃんと僕の関係は前世と比べて結構変わっていた。

「確かに…:デクの言うとおりだな!オールマイトつて壁は低くねえ!でも俺らふたりなら必ずいつか越えられるぜ!」

そう、かっちゃんは僕のことを自分と同等の存在だと認めてくれてるんだ。

というのも、四歳の頃からことあるごとにかっちゃんは僕に勝負を挑んできた。僕は

それらすべてを悉く振り返り討ちにしてやったのだ。

それも当然で、いくらかつちゃんがいるんなセンスが冴えている才能マンであつても、前世から15年分の経験と個性を引き継いでいる僕が子供に遅れをとることなどないのだから。

「まあデクさんの頭脳とがたいのよさなら英雄もトップヒーローも余裕だよな」

クラスメイトが前世の僕には決してかけられなかつたような言葉を言ってくれた。

なぜならいまの僕は――

「身長 178cm・体重 88kg・体脂肪率は驚異の5%!! 鍛え上げられたその肉体はトップアスリートにもひけをとらねえ!! とも同い年の中三には見えないぜ!! 筋骨隆々とはデクのためにあるような言葉だぜ!!」

かつちゃんテンションおかしくない!? そんなキャラだったけ!?

「あはは、ありがとうかつちゃん」

かつちゃんの説明通り、僕はこの10年でかなりムキムキになったのだ、きつと幼い頃から続けてきた鍛練と健康的な生活習慣、それに母さんに作ってもらっている栄養満点の食事のおかげだろう。詳細は企業秘密だ!

「じゃあ週明けには進路希望表提出だからなー、ホームルーム終わりー」

先生がホームルームの終わりを告げる。

「デクのすごさは肉体だけじゃあねえぜ!なんとな——」

かっちゃんはまだ僕の話が続けていた。あのクソ下水煮込みとまでいわれた性格が丸くなったのはすごくいいことなんだけど、やっぱりなんだか違和感があつて気持ち悪い。

ああなるとかっちゃんは長くなるから今のうちにさっさと帰つてしまおう。

「しかしいつたいどうすればオールマイトに会えるんだろうか……」

僕は帰り道でこの10年の最大の悩みに宛のない答えを探していた。

長々と考え込みながら、帰り道にある小さなトンネルにさしかかっていた。

「XXXLサイズの……隠れミノ……!」

目の前のマンホールからドロツとしたヘドロが吹き出し、僕を勝手に品定めして、いきなり襲いかかっていた。

僕は咄嗟に横へと転がりヘドロを避ける。べちゃりと音を立てて地面に落ちるヘド

ロ。

「……………」

「……………」

ヘドロと目が合う、お互いに無言で見つめあい、僕とヘドロの間になんとも言えない空気が漂った。

「XXXLサイズの…隠れミノ…!」

そう眩きながら、再びヘドロが僕に襲いかかる。

「それ毎回言わないとダメなのかなあ!!」

ツッコミながらも僕も負けじと再び横へと避ける

「……………」

「……………」

「避けるんじやねえよ…なに苦しいのは45秒ほどだ…すぐに楽になる」

「知ってるよ!その45秒が滅茶苦茶苦しいから避けてるんでしょうが!!」

沈黙を破ったのちに、ヘドロと僕は言い合う。

ん、知ってる?そうだ僕はこのヘドロを知っている。それに包まれると息ができなく

て、死ぬほど怖くて苦しいことを、僕は知っている…なんで知ってるんだっけ?

その答えが出るまもなく、ヘドロの後ろでマンホールが真上へと吹き飛んだ。

「くそがっ…もう来やがった…!」

僕の求めていた答えが——

「もう大丈夫だ、少年!」

この10年求め続けていたその答えは——

「私 came!」

向こうからやってきた——

「オール…マイト…?」

かわったようで変わってない少し変わった筋書き

僕がこの10年会いたくても会えなかった、ずっと探し続けていた人、オールマイトがいきなり現れた。

「もう大丈夫だ！少年！私が来た！」

僕の聞きたかった声が聞こえる。

「ん？思っていたより大丈夫そうな状況だな！」

僕の見たかった姿が見える。

「オール…マイト…？」

僕の頬を一筋の涙が伝う、感情が不規則に荒ぶる、頭のなかが真っ白になっていく…

——感極まった僕はそのまま気を失った。

「…お…い…」

頭の中に遠くから声が聞こえる。

「…オーイ！」

オールマイトの呼ぶ声が聞こえてくる。

「つは!?!オールマイト!?!」

僕が目を覚ますと目の前には――

「よかったー! そう、私がオールマイトだ!」

相変わらず画風の違う、いい笑顔を浮かべたオールマイトがいた。

「えっ! あっ!?! ふあ?!? オ、オールマイト!?! 本物?!」

僕はまだまだ混乱していた。

「ハッハッハ! 熱烈なファンかな! でもその様子なら怪我とかなさそうだし大丈夫だね
!」

オールマイトは豪快に笑う、人々に安心を与える最高の声だ。

「じゃあ私は忙しいのでこれで失礼するよ!」

オールマイトは踵を返してしゃがみこむ。

「ちよつ、ちよつと待つて！ 伝えないと！ そう、貴方に伝えなくちゃいけないことが——」

僕は慌てて言葉を紡ぐ、しかしその言葉はオールマイトには伝わらない。

「液晶の向こうでも応援、よろしくね————!!」

そうしてオールマイトは飛び立った。

ダメだ！ オールマイトに伝えないと！ 話をしないと！

そう思ったときには僕の足は地を蹴つていて、僕の身体を宙へと飛ばし…僕の手は実
に10年振りにオールマイトを掴んでいた。

「オイオーイー！ 熱狂が過ぎるぞ、君い！ 離しなさい！」

いきなり足に抱きつかれたオールマイトは、足をじたばたしながら僕に言う。

「離しません！ 貴方に伝えなくちゃいけないことがあるから!!! あとこの高さから落ちた
ら普通の人間は死にます!!」

僕はオールマイトへ叫ぶ。10年待ったんだ、この程度で離すもんか！

「君ならわりと大丈夫な気もするが…まあそれもそうだな、その辺のビルで降ろしてあ

げるからしつかり掴まっていなさい！」

そうして僕とオールマイトの攻防は終わった。

—— 爆豪 side in ——

「あー、デクのやつひとりできつさと帰りやがって！」BOOM!!

俺はこの場にはいない友人、緑谷出久への怒りを爆発で撒き散らす。

『——つてな、わけよ。よし！そろそろ帰るか、行こうぜデク！』

『緑谷なら大分前にこそこそと帰ってたぞ』

『なにー!?デクのヤロー！置いてきやがって！』

やっぱ思い返しても腹が立つ、帰るなら俺に一言くらい声をかけるべきだろうが！

苛立つ俺の少し前の方に、ペットボトルが降ってきた。

ペットボトルが地面に当たり、中味が溢れてくる。

「いい個性の…隠れミノ…！」

中味のヘドロのようなものが喋りながら襲いかかって来やがった。

俺は咄嗟に横へ転がりヘドロを避ける。

「……………」

「……………」

ヘドロが無言でこつちを見ている、俺もヘドロにガンをくれてやる。

「いい個性の…隠れミノ…!」

「それ、毎回言わなきゃいけないのか!!」

再び襲いかかるヘドロ、だが俺もまたそれを横へ飛び避ける。

「何度も俺に…同じ事を言うんじゃないぞ!!」

「まだ一回しか言ってるねえだろうが!脳ミソくさってるのか!」

訳のわからないことを言うヘドロを罵倒してやる。

ひとがイライラしてるときに、更に苛つかせてくれやがって…このヴィラン風情が!

「まあちようどいい、俺のストレス解消に付き合ってもらうぜ!!」

俺は適当に怒りの矛先を目の前のヴィランへ向ける。

「オラア!吹き飛ばや!!」 BOOO——

『ダメだよかつちゃん!』

『なんだよデク、とめんなよな』

『かつちゃん、個性を人に向けて使ったりしちやダメだ』

『…なんでだよ』

『ヒーローの資格を持ってない人が勝手に個性を使つて人を傷つけたりすると、その資格がとれなくなつちゃうんだ！かつちゃんはヒーローに成りたいんでしよう？』

『そうか…まあものしりなデクがいうならほんとのことなんだろうな、わかつた！ヒーローになるまではひとにむけてこせいをつかつたりしねえ！』

『よし、一緒に立派なヒーローになろうね！』

『ああ、やくそくだ！』

『うん、約束だよ』

——目の前のヘドロヤローを爆破してやろうと、その手を構えたときに思い出した幼い日の約束。

構えた俺の手から個性がでることはなかった。

くつそ！なんでこんなときに思い出しちまうかなあ…

俺の目の前にウザったい顔を浮かべたヘドロが、すでに視界を覆い尽くすように広がっていた。

「よし、あそこでもいいかな」

僕とオールマイトは数分近く飛び回り、オールマイトが手頃なビルの屋上を見付けた。

「それで私に伝えたいこととはなにかな？少年！時間がないので手短かに頼むよ！」

オールマイトはビルの上に着地したあと、急かすように僕に言う。

やっぱり活動制限があるんだ、オールフオーワンにつけられた傷のせいだ。

「手短について言われても、いったいどこから話せばいいのやら。えーと、僕は貴方の、いや違うな、僕は——あれ？」

言葉がうまく纏まらないなか、僕はあることに気が付いた。

「マジで時間がないんだ！もういくからね！」

オールマイトが少し声をあらげて言う、でも僕の視線はその顔ではなく、オールマイトのズボンのポケットに向けられていた。

「オールマイト！ちよつと待って！」

「No！待たないよ！」

オールマイトはますますぐにでも飛び立とうとしているが、僕はそのポケットの中身が

無いことに気が付いてしまったのだ。

「あのヴィランを詰めたボトルはどこに…?」

「君、気絶してたのになんでわかるのさ? まあそれならこのズボンのポケットに——」

「ない!!!」

僕とオールマイトがハモる。

僕たちはさつき飛んできた方向に目を向ける。

それとほぼ同時に遠くから聞こえてくる爆発音、そして遠くで上がる黒煙が見えたのだった——

『ヒーロー』ってなんだろう？

僕はついにオールマイトと話をする機会を得た。しかし僕との小競り合いのせいで、捕まえたヴィランを逃がしてしまった。

遠くで黒煙が上がり、聞こえる爆発の音。それはヴィランが暴れ始めたという証明だった。

「私は行かなくてはならない！さすればだ少年！」

オールマイトはそういつてビルから飛び降りた。

「オールマイト！僕も行きます！」

僕もオールマイトの後を追う。

「君いまナチュラルにビルから飛び降りなかったかい!？」

「今はそんなことどうだっていいじゃないですか！急ぎましょう！」

僕の常人離れした動きにオールマイトは驚く、しかしそれを説明している余裕は今の僕にはなさそうだ。

「これから向かうのはヒーローが活躍する危険な現場だ！ついてくるのをやめたまえ少年！」

「僕が向かいたい先が貴方と同じなだけですよ！」

止めるオールマイトと聞かない僕、僕は速度をあげてオールマイトの前に出る。

「そういう屁理屈をこねるんじゃない！」

ナンセンスだぜ！……ヴツ……ゴホツ……」

「こつちを抜けると近道になります！」

僕はさらに走る速度を上げる、オールマイトが咳き込んでいたが、そっちの方へ振り向いて走る余裕はなかった。

それから数分ほど走ると、立ち込める黒煙が間近に見えてきた。爆発音が身体に響くほどの距離だ！

「オールマイト着きました！……ってあれ？」

振り向くとそこにオールマイトの姿はなかった、どうやら途中ではぐれてしまったようだ。

オールマイトを探しに行きたかったが、僕の記憶の通りなら、この事件に巻き込まれているであろう”彼”が心配だ。

オールマイトとはまた出会えればいい、とにかく現場に急ごう！

現場に着くとそこには何名かのヒーロー達とたくさんの野次馬がいた。大きな爆発音が響いている、どうやらヒーロー達も手をこまねているようだ。

僕は右足で地面を蹴りあげ大きく跳ねる、野次馬の上を飛び越えて、片膝と拳を地面につけて着地した、体勢を立て直して爆心地へ向かおうとしたその瞬間、僕の身の丈ほどはある巨大な”掌”に遮られた。

「ちよつとちよつと！どこにいこうとしているのよ！危ないから下がってなさい!!」

僕を制止する声がある。それはこの大きな掌の持ち主、Mt.レディのものだった。

Mt.レディは最近デビューしたにも関わらず、すでにファンクラブもできている期待の超大型新人ヒーローだ。その個性は身体の大きさを20m近くまで変えることが…って今はこんな説明をしてる場合じゃない!

「通して下さい！僕はいかなきゃいけないんだ!」

「いかせるわけじゃないでしょ！あなた怪我するわよ！こういうのはヒーローに任せて一般人はいいから下がって!!」

進もうとする僕をその巨体からは想像もつかないような可愛らしい声をあらげて止めるMt.レディ。

このギャップがこれまたいいな、確かに人気があるのも頷ける…ってちがーう！だか

らこんなこと考えてる場合じゃないってば！

不毛な言い合いをしていると、再び爆発音が響く。それに驚きMt.レディの掌が開く。

その隙間から見えたのは、あのヘドロのヴィランに囚われてもがき苦しむ、僕の友達—— かつちゃんの姿だった。

瞬間、全身に力みなぎる。かつちゃんを助けなきや、そう思ったときには、身体が勝手に動いていた——

「ごめん、Mt.レディ」

そういつて彼女の巨大な手首を掴む。

「…通してもらいます！」

僕は彼女の腕を大きく跳ね上げた、腕を跳ねられた衝撃でMt.レディは体勢を崩す。その間に僕はかつちゃんのもとへと駆け出していた。

「…うっそお…」

「なにやってんだ！おいバカヤロー！止まれ！止まれー！！」

「なんだあのマツチョコな学生!? やめるんだ!! 危険すぎる!!」

僕の後ろからヒーロー達の止める声が聞こえる。でも僕は止まらずに前だけを向く。

「かつちゃんあああんっ!!」

僕が叫ぶとかつちゃんがこちらに目を向ける、目線が合うとかつちゃんは一瞬ほつとした顔をするが、すぐに険しい顔へと変わる。

「デク!!来るんじゃねえ!!」

「かつちゃん!今助ける!!」

かつちゃんにも止められるが、握り拳をつくりながら僕は前へと進み続ける。

「助けるだつて!?!バカヤロー!こんなところで”個性”使っちゃったら——」

「……」

かつちゃんの言葉が胸に刺さる、何が言いたいのかはわかる、わかっているが足は止めない。

「ヒーローに成れなくなっちゃうだろうが!てめえ!!」

「…成れなくなつたつていいよ!!」

そう、成れなくてもいい——

「…っ!!…”約束”しただろうが!なあデクウ!!」

「ヒーローに成れなくなつていい!…友達ひとり助けられないような、そんなヒーローなんか!僕は成りたくない!!」

かつちゃんが目を見開く、僕はすでにかつちゃんを助けられる距離まで近づいてい

た。

「僕が成りたいのは、どんなに困ってる人でも笑顔で救^{たす}けちゃうような、超カッコいいヒーローさ!!!」

僕はかっちゃんを見つめながら笑顔で言った。

「だから…救けるよ、かっちゃん」

僕は腕を引き、拳を構える。

いまでできる僕の限界の個性^{ちから}でかっちゃんを救ける。ワンフオーオールが発動し、僕の身体にはち切れんばかりの力が駆け巡る。

「50%……デトロイト……」

「よく言った少年！ならば私も助力しよう！」

拳を放った瞬間に後ろからなにかが猛烈な勢いで近づいて叫ぶ、放たれた僕の拳はもう止められない。

「スマツツツシュ!!」

「DETROIT・SMASH!!!」

僕の拳と誰かの拳が同時に地を殴りつける、合わさった二つの衝撃が空気を揺るがし、辺りを呑み込む暴風を生み出す。

目を開けるのもやっとな風のなか僕はかっちゃんへ手を伸ばす、しかしその手はあと少しのところで届かない。

かっちゃんの身体が風に吞まれていく、その瞬間かっちゃんの腕を誰かが掴む、その誰かはついでのように僕を抱え、僕らが吹き飛ばないように支えてくれた。

風が止み見上げて見ると、その誰かの正体がわかる。

そこには笑顔を浮かべる《僕の憧れのヒーロー》がいた。

「ナイスガッツだったぜ少年！大丈夫かい！」

その力強い声に、自然と笑みがこぼれる。

「ありがとう、オールマイト——」

そのあと、飛び散ったヘッドロを警察とヒーロー達が回収し、事件は幕を収めた。オールマイトはマスコミからインタビューを受けていて、かっちゃんはヒーロー達にそのタフネスと個性を誉められていた。

僕はというと――

「まったく！いくら遅しいからとはいえ、一般人が無茶しすぎだ！」

ヒーロー達にこつてりと絞られていた。

「オールマイトが来てくれたからいいものの、君が怪我をするだけでなく、捕まっていた君の友達だつてさらに傷つくこともありえたんだぞ」

筋肉質な大きな身体と警戒色のヘッドギアとリストギアが特徴のヒーロー、デステゴロがいう。さらにデステゴロは言葉が続ける。

「あそこで個性まで使っていたら、君は犯罪者になっていたんだからね、わかっている？」
あの時の僕のスマツシユは他の人からは見えておらず、オールマイトがひとりでヴェイランを倒したことになっていたので。

「しかし友達を助けるために、渦中に飛び込む勇氣は素晴らしいな、ヒーローとは何かと
いうのを改めて感じたよ。まあ蛮勇に等しかったが……」

樹木のような身体をしたヒーロー、シンリンカムイがフォローをいれてくれる。最後に痛いところをしっかりと突つつきながら……

「すみません……」

蛮勇か……確かにこれは無茶でしかなかったなあ、正直なところヘドロ吹き飛ばせる確証もないままワンフオーオールを使ってしまったし、おかげで腕が痛い、周りのことを

見えてなきすぎた。素直に反省しておこう。

「君、ヒーロー目指してるんだろ？なら将来プロヒーローに成れたら俺のところをこい、たっぷりとしごいてやるよ」

「…えっ」

シンリンカムイの言葉に僕はおもわず、顔をあげる。

「おいおい、意外そうな顔するなよな、お前の勇気とヒーロー根性は認めてるってな。」

「シンリンカムイ…」

プロヒーローの彼が僕を認めてくれたことが、急に嬉しくなってくる。

「プロになったらちちゃんと敬語を使えよ、どっかの生意気な後輩デカいのと違ってな。えーと、確

か名前は——緑谷だな」

くだけた口調になったシンリンカムイがなにやら紙を捲って、僕の名前を呼ぶ。おそ

らく今回の事件の報告書かなにかだろう。

「じゃあ今日のところはこれで帰ってよし！プロ目指して頑張ってくれたまえ、緑谷君」

「はいー」

僕は元氣よく返事をして、そのまま帰り道へ歩いていった。

???

side in

「私さまさか人にあんなふうには振り払われることがあるなんてなあ…」

『…通してもらいます!』

私は今日の出来事を思い返す。この個性に目覚めてから誰かに力負けすることなんてなかったのに。

「それにすごくしつかりとした”ヒーロー”の心を持ってた、なんとなくの私なんかとは全然違う…」

『友達ひとり助けられないような、そんなヒーローになんかに…僕は成りたくない!!』
彼の心にあるヒーローとしての輝きは、今の私には眩しすぎた。

「なんて名前だったかな——つと、緑谷…なんて読むんだろ、出るに久しいって書いて

『デク!?来るんじゃねえ!!』

調査報告書を読んで彼の名前を見つける。名前の読み方がわからなかったが、彼の友達の名前を思い出す。

「緑谷デク君かあ…あんな子がいれば私も少しは変わってたのかな…」

「デク君がヒーローになれば、また会える日が来るのかな——」

彼に弾かれた手首をさすりながら、いつかの未来を想像する。私がその時までヒーローでいられたなら…

——
???
side out
——

帰り道を歩いていると、かつちゃんが僕を待ち構えていた。

「かつちゃん！大丈夫？怪我とかしなかった？」

「ナメんな！あんくらいよゆうだったっの、てかあんだけ無茶やっといて人の心配かよ」
心配する僕を逆に心配してくるかつちゃん、心配してるように見えないだろうけど、

彼はめんどくさいツンデレだ、前世を含めると20年来の幼馴染の僕にはわかる。

「心配してくれてありがとう、無事で本当によかったよ」

「ばっか！心配なんざしてねえっての！そもそもお前に助けられなくても俺は大丈夫だったんだよ!!」

「うんうん、そんだけ元気なら大丈夫みたいだね。ところでかっちゃん、なんでこんなところで僕を待つてたの？」

騒ぐかっちゃんをスルーして、僕は聞きたいことを聞いてみた。

「いや、おめえに言いたいことあつてな…つて！まってねえわ！たまたまだつーの！」
「ごめんごめん、そうだったんだね。それで言いたいことつて？」

かっちゃんの顔が一気に暗くなり、目に力がなくなる。

「…わりい…俺があのかつちゃんから捕まったせいで…デクにまで迷惑かけちまった」

意外！それはかっちゃんからの謝罪！

つてかっちゃんもだいたい丸くなってるから、そういうこともあるよね。

「かっちゃんが悪い訳じゃないよ、悪いのは個性をあんなふうに使って暴れまわったヴィランだよ」

それにかっちゃんが巻き込まれたのは、僕とオールマイトがじゃれているときにポトルを落としたせいでもある。でも知られるとかっちゃんが怒りそうだから内緒にして

おこう。世の中には知らない方が幸せって言葉もあるくらいだしね！

「あと、僕が救^{たす}けたいって思ったから動いただけだしね、それといつも言ってるけど——」

「余計なお世話はヒーローの基本！」 「だよ」 「だな」

僕とかつちゃんがハモる。

「まあ、今回はそういうことにしといてやんよ、でも次は——」

「次は？」

「次は俺がお前を救けてやる」

かつちゃんが僕の目を真っ直ぐ見つめる、その目には力強い光がみなぎりなんの曇りもない。

「ありがとう、じゃあそのときはよろしくね、かつちゃん」

「ああ、ぜってえ俺に助けさせろよなデク！約束だぞ！」

かつちゃんが拳をこちらに向けてくる。

僕はその拳に自分の拳を合わせる。

「うん！約束だ！」

そうして僕とかつちゃんは別れたあと、それぞれの帰り道へ向かったのだった——

「唐突に私 came 来た！」

「うわ！ビックリした!!」

「完全にもう終わりの流れじゃなかったのか！どうして貴方はそう急に現れるのか。
「オールマイト？どうしてここに？」

「驚いた僕を見ながら H A ! H A ! H A ! H A ! と笑っているオールマイトに尋ねる。

「どうしてかって？それはね——」

「君に会いに来たからだよ、君はいつたい何者なんだ、少年？」

本日3回目にもなるオールナイトとの邂逅が始まる——

原点回帰のタイムリーパー

時間を遡ってから10年間一度も会えなかったオールマイトに、1日で三回も会ってしまった。3年に一回とかにバラけてくれればよかったのに…

「君はいつたい何者なんだ、少年？」

「僕は…僕は貴方のことを知っているんです、オールマイト」

尋ねてきたオールマイトに一言だけ返す。

「H A H A H A！それはそうだろうね、私は有名人だからね！」

オールマイトは豪快に笑う、そして言葉を続けた。

「でもね私も君のことを知っているんだよ、緑谷…出久君」

「…つつつ!？」

オールマイトの予想外の言葉に僕は驚いた。

「驚いたって顔してるね、サプライズは成功みたいだな！」

オールマイトはイタズラに笑っている。

「まあ、さつき知り合いに電話で連絡をしてね、君のことを話してみただ。随分と前から私のことを追っかけてたみたいだね、君は。私が解決した事件の現場にいたり、事務所の前で出待ちしてたり、街中を探しまわってたりね。ああ、あと限定品グッズの販売会場でも見かけたとも言ってたなあ。彼もまたなんでそんなところにいたのやら……私に直接会いに来ればいいのに、まあそうもいかなかったか……」

オールマイトは、この10年間の僕の行動を次々と話していく。ドクドクと僕の心臓の鼓動が早くなってるのがわかる。

「——つと話がずれたな。緑色の癖毛と歳にみあわない筋肉質な体つき、特徴的だったからよく目についたと言っていたよ。これ君のことだろう？」

「……はい」

オールマイトの質問に一言だけ返す、それ以上の言葉が今は出てこなかった。

「ここまでなら只の熱烈なファンってことで、サインをあげて、ハグして、一緒に記念撮影して、応援ありがとう！これからもよろしくね……で済んだんだけどねえ——」

楽しげだったオールマイトの顔が一気に険しくなる。

「君、さつき個性を使っただろう？」

オールマイトから強烈な威圧感を浴びせられる

「そ、それは——」

「いや、別に個性の無断使用を咎めたいんじゃないんだ。ただね、さつき使った君の個性ワンフオール……私の個性にあまりにもよく似ていた、同じものじゃないかと思うくらいにね」

オールマイトが僕に一步だけ近付いてくる。

「本当に君は何者なんだろうな、君はいつたい何を知っているんだ？君は——ガフツ」僕の正体を探ろうと質問を投げ掛けてくる最中にオールマイトは吐血した。次に彼の身体から煙がたちこめ、その姿が見えなくなる。

そして煙が晴れていく。

骨と皮だけの細々しい腕、やせぎすの身体とだぼついた服、垂れ下がった金色の髪、くぼんだ影のなかに力強く光る碧眼、そこにはトゥルーフォームになったオールマイトの姿があった。

「オールマイト！大丈夫ですか!?!やっぱり身体がもう……」

僕はオールマイトに駆け寄る。

「この姿をみても驚かないばかりか、身体の心配をされとるはな。普通は、偽者!?!とか聞いてくるんだが……さて、私はだいたい話したし、見せた。次は君の番だぞ、少年!」

オールマイトはほっそりとした指でゆっくりと僕を差した。

「オールマイト…僕は…」

久しぶりに見た病的なオールマイトの姿に、僕は言い淀んでしまう。

「どうした、伝えたいことがあるんだろ？最初に会ったときに君は確かそうだったはずだ。身体のことなら心配しなくてもいい、もうこの姿でいる時間の方が長いからな」

オールマイトは黙りそうになっていた僕を促す。

「そうだ、伝えなきゃいけないことがあったんじゃないか！」

そのために何年間もオールマイトを探し続けてきたんじゃないか！

なに躊躇っていたんだ！なにやっていたんだよ僕は！

『必ず…必ず救^{たす}けるから……オールマイト…だから』

「そうさ、救けるんだ！オールマイトを！今度こそ!!」

「オールマイト、話があります。信じてもらえないかも知れない、ただ知っておいて欲しいんです。僕のこれまで話を——」

それから僕はオールマイトにすべてを話した。

僕とオールマイトとのかつての出会い、努力を認められワンフォーオールを託されたこと、雄英で過ごした日々、グラントリノとの修行、ヒーロー殺しとの闘い、期末試験でオールマイトと闘ったこと…そしてオールフォーワンとの決戦の果てに命を落とし、

時間を遡ってやってきたことを。

どれだけの時間話していたかわからない、30分くらいだった気もするし、3時間くらいだった気もする。その間オールマイトは様々な顔を浮かべながら、しっかりと話を聞いてくれた。

気がつけば僕の顔は涙と鼻水まみれになっていた。

「オール、マイト……僕は……んぐつ……ぼくは……！」

鼻水をすすり、オールマイトの目を見据える。

「僕は、貴方を救けるために、ここまで来ました!!」

暫くの沈黙が流れる、そしてそれを破るようにオールマイトは言った。

「よく話してくれた、確かににわかには信じられない話ではあるが、君が物知りだったのにも納得がいく。それになによりも……頑張ったな少年！ありがとう！」

そうしてオールマイトは僕の頭を力強く撫でる。

「信じて……くれるんですか……？」

僕は顔を上げて、オールマイトを見つめる。

「信じる信じないは関係ないさ！君はとても頑張った、そう私が思ったからだよ、だからもう一度言おう！少年よ、よく頑張ったな！」

オールマイトは胸を叩いて、自信たつぷりに言う。

「う、わああ、あ、ああ、オールマイト、オオオ、!!」

僕はオールマイトの胸に抱きつき泣き叫んだ、この10年間溜め込んできた後悔と行き場のない感情を吐き出すよう泣き続けた――

『――その泣き虫は直さなければいけないなって言つたろう?――まあよく頑張つたよ
うだし――今回はいいか。』

心のなかでそんな声が聴こえた気がした――

夕陽が沈みかけた頃に僕は泣き止んだ、眼は泣き腫れて声もがらがらだ。

まだまだ僕はダメダメなデクのままだ、これじゃ駄目なんだ。今の、いやこれから
の僕に必要なものを得るために、僕は顔を袖で拭つてからオールマイトに話しかける。

「オールマイト、お願いがあります」

「なんだい、少年?」

オールマイトが聞き返してくる。

「僕を……僕を弟子にしてください」「いいよ!」……いい?」

オールマイトは僕が言いきるまえに即答する。

「えっ?! いいんですか?! 僕はかなーり怪しげでそんなもってダメダメで、まだ貴方に認められるようなことを何も——」

「えっ? 君から言ってきたのに、弟子になりたくないの?」

「なりたいです!!」

僕の言葉を遮るオールマイトの問いに即答する。

「H A H A H A! 冗談だよ、実は君の正体を聞き出すのは目的のうちのひとつでね、いやまあ私としてはあとでもよかったんだが”電話の彼”が聞けつてうるさくつてね」

「ひとつつてそれはどういう——」

「私がここに来たのは、後継者を求めていたからさ! …つまり君を勧誘にきたんだ! 所謂スカウトつてやつだ!」

あまりの展開の早さに僕はついていけない。

「君はまだ認められるようなことをしていないと言ってたが、さっきの事件を忘れたのかい? 身を危険にさらし、自らの未来を捨ててでも、友達を救うために飛び込んで信念を貫き通すその姿を私は見ていた! だからこそ君の助けになりたいと思つたのさ! 認めていないわけが無いだろう!!」

オールマイトの言葉尻が段々と強くなってくる。

「君ならば私の力を受け継ぐに値する!! そう思っていたんだが——まさかもう持っているとは、流石に予想外だったぜ! H A H A! しかも君の方から弟子入りを志願してくるなんてこれまた予想外だ!!」

オールマイトは額に手をあてながら笑っていた。これほどまでに見ていてくれたとは、こつちのほうが予想外だよ。

「それでだ…改めて聞こう少年! 私の後継者にならないか?」

オールマイトは僕に手をさしのべながら聞いてくる。

「はい…なります! よろしくお願ひします!!」

僕はその手をとって、大きく返事をする。

「ああ、これからよろしくな、緑谷少年!」

なんだかとても懐かしい響きだ…そう感じた。

「ねえオールマイト、僕は貴方を救^{たす}けられるような、そんなヒーローになれるかな?」

僕はオールマイトに尋ねる。

「なれるさ、私だけじゃない。どんなに困ってる人でも笑顔で救ける、そんな…君はそんなヒーローになれる」

僕が言つて欲しいことを、言^{オールマイト}つて欲しい人が言つてくれた。僕はようやく原^{オリジン}点に戻つた。

願望^{ゆめ}は現実に、言い忘れてたけど、これは再び始まる僕が最高のヒーローになるまでの物語だ——

「しかし弟子入りしてきたかあ、個性を渡すだけのつもりだったから、そんなプランを考えていたのだが。弟子となるとこれは修行だな！」

「修行ですか!?!」

「ああ、修行だ！私の修行は厳しいぞお！もしかしたら死ぬかもしれん——」

「えっ!?!死んじゃうんですか僕!?!——」

「H A H A H A！そうならないための修行さ——」

「ちよつとオールマイト——」

こうして僕がオールナイトを救^{たす}けるための新しい物語が始まる——

第二章 雄英高校ヒーロー科へようこそ!

滾れ筋肉!越えろ!雄英高校入試!!

オールマイトにすべてを打ち明けた僕は、もつと強くなつて彼を救^{たす}けるヒーローになることを目指す。そのために僕がとつた手段はオールマイトへの弟子入りだった!

—— オールマイトに弟子入りして10ヶ月の日々が流れ、僕は雄英高校一般入試日の朝を迎えていた。

「この10ヶ月間、あつという間だったな、緑谷少年」

「ええ、本当にあつという間でしたね、オールマイト。まるでコミックなら2〜3巻読み飛ばしたんじゃないかと思うくらいに」

僕とオールマイトは海浜公園の浜辺で朝日を眺めながらしみじみと語る。

「いやしかしこの10ヶ月間、いろいろなことがあつたな、緑谷少年」

「ええ、本当にいろいろなことがありましたよ、オールマイト。ちよつとしたラノベ一冊分くらいにはなるような出来事の数々——」

「まあそれはさておき！ほんとーに！よく頑張ったよ、君は！」

僕の言葉を遮って、オールマイトが僕を誉める。

あの10ヶ月間をさておきで流されちゃったよ!!いろいろあつたんだよ!?!マラソンとか無人島とか死ぬかと思つたし…特に後半3ヶ月は忙しすぎてヤバかった。まさか僕が――

「私個人からの修行はこれでひとまずおしまいだ！おめでどう、緑谷少年！」

僕が考え事をしてる間にオールマイトは話を続ける。

「えっ…でもまだまだ僕は半人前で――」

「おいおい…どこまで謙虚なんだい君は…いやマジで強くなりすぎだからね君、まだ中学三年生だからね？ときどき玄田哲章みたいな声でるようになったちやつたし。まったく、強くなりすぎちゃって私から教えられるものももう殆んどないんだもの！」

またも僕の言葉を切って、オールマイトが矢継ぎ早に話す。

なんか今日の君の身体は…そう君の身体は…！

「だつていまの君の身体は…そう君の身体は！」

身長 188 cm!!!

体重 113 kg!!!

体脂肪率 10 %!!

その身に纏うは筋肉!そして筋肉だあ!!筋肉は鎧となり最強の盾となる!また筋肉は拳を最強の矛へと変える!!これぞ筋肉の矛盾!!しかしそこにはなんの疑問も生まれはしない!何故って?それが筋肉だからだ!!そしてその姿はまさに!筋肉の騎士だあ!!!」

「オールマイト!?!どうしたんですか急に!?!」

「いやあ、なんだかこう言わないといけない気がしてな」

「とにかく君は強くなった、これからは君自身の足でヒーローへと向かっていくんだ!」
「僕自身の…」

「そう!そのための雄英だ!そこには君と同じくたくさんさんのヒーローの卵達がいる、そのなかで君なりのヒーローの形を探していくんだ」

「はい!必ず見つけてみますよ、オールマイト!」

オールマイトが不安げな僕に声をかける、その言葉に僕は力強く返事をした。

そうだ!学校にはみんながいる!もう10年近くあつてないなあ…

そう思うとどんどん会いたくなってきたぞ!早く雄英に入学してみんなとの再会?を果たすんだ!

「まあ、その前に入試を突破しなければなるまい、本当は推薦入試が良かったんだが…あのときは忙しかったからな…」

「仕方ないですよ、忙しかったから…」

僕とオールマイトはまたしみじみと語る。

「とにかく、君ならなんの問題もなく合格出来るだろう、頑張ってきたまえ！少し早いが、早いに越したことはない、いつてくるといいき！」

そんなオールマイトの激励に心が昂る。

おおお！やるぞお！身体が、筋肉が滾ってきた！

「ありがとうございます！全力で挑んできます！！それじゃあいつてきます！」

そう言い残して僕は全力で走り出す。

待つてろよ！雄英高校！絶対合格してやるぞ！！

「うわあ…もう見えなくなっちゃったよ、しかし全力でって言ってたけど、やり過ぎないといいんだけどね！」

「いやあ……ここまで来たんだなあ……」

僕は足を止めて、その場に立ち尽くす。

雄英高校校門前、なにもかも懐かしい……って感慨に耽るのは後にしよう!そう思った矢先後ろから声をかけられる。

「ぼさつと突っ立ってんじゃねえ!どk——ってなんだデクか」

「かつちゃん!おはよう!」

かつちゃんが僕を見つけて挨拶をして来た。

挨拶に見えないって?あれは遠目から僕の姿を見つけたけど、素直に声をかけられず、とりあえず近くによつてこつちから挨拶してもらおうと思つての行動だ、自称フェイバリット幼馴染の僕にはわかる。

「ようデク、なんかまたでかくなつてねえか?暫く学校も休みがちだったし……いったい何してきたんだ?」

「まあ、なんといいかいいろいろあつてね……」

「そうか、しっかし背は10 cmくらい伸びてるし、ウエイトもかなり増してる」

かつちゃんが僕の身体を観察しながら、うんうんと唸っている。

「わかつたぜ！身長 188 cm！体重 113 kg！体脂肪率10 %！！その筋肉は——」

「そのくだりはもうやったからいいんだかつちゃん!!」

かつちゃんが僕の身体の解析を終えて叫ぶ、僕はそれをぶつたぎって止める。

「というか身長ならまだしもなんで体重や体脂肪率までピタリとわかるんだよ…新身の個性か!」

「そうなのか？まあでも当たってたる？」

「確かに当たってたけどさ、なんなのその特技？かつちゃんの個性って爆破でしょ——んっ？」

かつちゃん話をしてっていると背中になにかが当たった感触がする。

「っ、いったあー。壁にぶつかったやつた？って人お!」

そこには僕にぶつかって痛そうにしている、麗日さんの姿があった。

「てめえ！ひとにぶつかつてはいけませんの一言もねえのか!?!ああ?!」

かつちゃんが麗日さんを怒鳴り付ける。ぶつかられたのは僕なのに。

「ひっ…!顔こわっ!じゃなくて、すいません、すいません!」

麗日さんがかつちゃんの顔にビビりながら謝る、なぜかかつちゃんに…

確かにかっちゃんあのあの顔は慣れるまで驚くのはわかる、ヤバい顔してるもの。かっちゃんマジヴェイラン顔。

しっかし麗日さん可愛いなあ、10年ぶりに見たからかな?——

「謝る相手がちげえだろ!丸顔オ!!」

「ひいつ!あ、あのすいません!ほんとにすいません!!」

——いや違う……これは……身長差だ!!かなり高くなつた僕の顔の位置と麗日さんの顔の位置、必然的に見上げる形になる!それによつて生み出されるのは上目遣い!しかも涙目の追加武装^{オブシジョン}付き!涙は女の武器というが……この破壊力はすさまじい!!

つて、ちがーう!いまは僕がこの場を収めなくては!なるべく紳士的に、穏やかに、よし!いくぞ!

「いやあ……怪我はないかね、う……じゃなくてキミイ……」(玄田哲章ボイス)

あわわ、ドギマギしちやつてめっちゃ低い声出ちやつた!

「ひいひいっ!怖い!!すいませんでした……!!」

麗日さんはそう叫ぶと、ひええといいながら走り去つていった。

めっちゃびびられた……!僕の第一印象最悪じゃないか!!これもうダメかもしれ
ないですね……

僕は落ち込みながらかつちゃんとともに試験会場へと向かつたのだった。

筆記試験は特に問題なくおわり、僕は実技試験の説明会場に来ていた。隣にはかつちゃんも座っている。

「今日は俺のライブへようこそ！エビバディセイハイ！」

「ヨーコソー!!」……………」

ボイスヒーロー、プレゼントマイクの言葉に僕だけが返す。

「コールがひとりとはこいつはシビィー！それじゃあ実技試験の概要をさくつとプレゼンするぜ!!アューレディ!? Y E A A A H!!」

「イエアー………」

なんでみんなコールしないんだ!?プレゼントマイクのコールだぞ!!…ああそうか、緊張してるんだな、初受験の人が殆んどだし。まあ僕は二回目だからなあ…つて前の方に座ってる飯田君がすごい睨んでる……!!彼真面目だからなあ、騒いでる僕が気に入らないんだろう。

その後、プレゼントマイクの説明は淡々と進んでいった。飯田君はチラチラとこちらを睨んでいたが特になにも言っては来なかった。たぶん、僕とかつちゃんの「ダチと協力できないようなシステムになってんのか、デクとほかのやつらに目にもみせてやろうと思ってたのになあ」「ははは、残念だね、別々だけど頑張ろう」「楽勝だっつーの」み

たいな会話が聞こえていたのだろう。でも飯田君、人の話はちゃんと集中して聞かないやダメだぞ!

説明も終わり、僕達受験生はそれぞれの会場へと向かった。

みんなが試験前の準備をしている、そのなかに麗日さんの姿を見つけた。さっきのことを謝らなきゃ!印象回復!さっそく声をかけよう——

「君!その女子は精神統一を図ってるのではないか?」

飯田君が僕に注意する。

「先程の説明会でもそうだったが君は迷惑行為を繰り返すのか!余裕があるのかなにか知らないが、人の邪魔をするんじゃない!」

うわっ飯田君怒ってるよ!傍目から見ると迷惑だったのかなあ。でもプレゼントマイクにテンション上がるのは許して欲しいなあ。

「あの異形型みたいなマッチョに絡んでるよ、あの眼鏡すげえな…」

周りが僕と飯田君のやり取りにざわついている。

「はいスタート!!」

そんな中、急にスタートの音が響いた。プレゼントマイクの試験開始の合図だ。周りがまだざわついているなか、僕は一目散に駆け出す。

「悪いね！試験開始だ！おいとまさせてもらおうよ!!」

僕は後ろに手を振りながら、先へと進む。

よし！いまの僕なら仮想ヴィランも楽勝だ！今度こそたくさんポイント稼ごう!!

「ニンゲンメ、ブチコロシテヤルゼー!!」

「スクラップにしてやる!!この！メタルのゴミめ!!」

僕は試験会場の外周あたりを周りながら次々とロボを破壊していく。

ついつい勝ちなどにこだわるとドスを利かせて口が悪くなってしまう、確かに玄田哲章みたいな声だな。でもこれはきつと前世から続くかつちゃんの影響だろうなあ、やっぱり変わらないところは変わらないんだな！

「来いよ、ロボット！銃なんか捨ててかかってこい！」

「テメーナンカ、コワクネエ！」「ヤローブッコロシテヤル!!」

「地獄へ落ちろ、ロボット！」

僕はさらにロボットを破壊していく——

——これで99ポイント目！そろそろ撃破ポイントはいいかな、中央も人が集まってきたようだ。救助活動^{レスキュー}ポイントも稼ごう!!

僕はビルの上を跳ねていき会場の中央へと向う、中央では多くの受験生がすでにロボットと戦闘を繰り広げていた。

危なそうな人はいないかな?——つと見つけた!

「危ない!!」

僕は金髪を受験生に後ろから襲いかかっていたロボットを受け止める。その直後、彼の腹からレーザーが発射され、ロボを貫き破壊する。

「メルスイ、いい連携ができたね。君とはまた会いそうだ」

レーザーの個性、青山君だ!前と言ってることが真逆だけど!

——それからも僕は次々と受験生達を庇っていった。

「あぶなーい!」

「うお!?まさか上から来るとは、助かったぜ!」

「アブなーい!!」

「きやあ、まさか倒したと思って油断したところで首に噛みついてこようとするなんて、助かったわ!」

「危険が危ない!!」

「ふう、飛んでいるところに襲いかかってきて、身体を飲み込もうとするなんて、助かったよ」

——こんな感じで救助活動ポイントを稼いでいると、ついにあれが動き出した。

「見ろ！なんだあのバカでかいのは!」「お邪魔ギミックつてやつか!」「にげろ!!」

0ポイント仮想ヴィラン、超巨大ロボットが現れた、他の受験生が逃げだしていく。僕はその足元を見る、そこには瓦礫に足を挟まれた麗日さんの姿があった。

「麗日さんは瓦礫に挟まれる運命にあるのな?——つと!!」

僕は超巨大ロボットへむかって走り出す。麗日さんを救^{たす}けるために。

「もう大丈夫!救けに来たよ!」

僕はそう言つて笑う、そして瓦礫をどかして麗日さんを引つ張り出した。

「ありが——」

「気をつけろー!きてるぞー!!」

後ろから誰かの声が聞こえる。ふと見上げると、0ポイント仮想ヴィランの巨大な足が僕らを踏み潰そうとしていた。

「ちよつと失礼するね!ごめん!」

「ひゃああああ!!」

麗日さんを左腕で抱えてそのまま巨大ロボットの顔の方へと大きく跳躍する。

「しつかり掴まつててね!!」

麗日さんにそう告げて、僕は大きく腕を引いた。

いま僕が反動なしで打てる全力の一撃……!くらえ——

「88%!オレゴン・スマアツシュ!!」

力一杯振り抜いた僕の腕は、巨大ロボットの顔面を破壊しつつ、その巨体を地面へと沈めた。

「着地いくよ!気をつけて!」

「ひやつ……うわああああ!!」

僕は両手で抱えるとそのまま地面へと落下していく。そして着地の瞬間地面を強く蹴り、落下の衝撃を相殺した。地面はひび割れて陥没し、あたりに土煙が立ち込める。

ちよつと派手にやり過ぎたかな……? 周りがかかなり騒がしい。

「終わったよ、怪我とかしてない?大丈夫?」

「あつ……あの……はいい……大丈夫です……」

僕の腕の中で呆然としている麗日さんに声をかける、なんだか声に元気がない、怖い思いをさせてしまっただろうか。その顔は俯いていて、表情を見ることができない。

「試験終了……!」

土煙が晴れると同時に試験終了の合図が響き渡った。

「さつきからぼーつとしてるけどほんとに大丈夫?怪我とかあつたら治療してもらって帰るといいよ、それじゃあ僕はこれで——」

腕の中で動かない麗日さんをゆっくりと地面に下ろし、声をかける。

試験前に怖がらせてしまったし、きつといまも僕が怖いのだろう…結構凹む。その場を去ろうと歩き始めたときに麗日さんに声をかけられた。

「あの…えつと、ありがとう！」

「どういたしまして！」

麗日さんが感謝の言葉をくれる、僕はそれに笑顔と親指を立てて答えた。

やったー！麗日さんが微笑んでくれたぞ！！怖がらせてばかりだったけど、嫌われてはなさそうだ！！麗日さんマジ天使！！

僕は上機嫌になり、小走りして帰っていった。家までの間の記憶はなかった——

——一週間後、僕は日課のランニングを終えて、家に向かっていた。

うわあ、完全にやり過ぎちゃったよお…撃破ポイント99Pってアホか！獲りすぎだ！他の人の妨害だつて言われてもおかしくない…！救助活動もやり過ぎて妨害扱いになつてるかもしれない…！ヤバい！ヤバいヤバい！！

考え込むほど不安になってくる、もしかしたら失格になつてるかもしれない…

そうしてらるうちに家に帰りついていた。

「母さんーただいまー!」

「おかえり、出久ー」

母さんはリビングでテレビを見ながら返事をする。

緑谷引子、僕の母親で物を引き寄せる個性の持ち主だ。前世とちがって僕が個性を持ち、ゴリゴリと健康的に育っていったため、ストレスで太るようなこともなく、いまでも痩身麗人な奥さんになっている。

「そういえば出久——」

「なに?母さん」

「雄英から合否通知の郵便が来てたわ、合格だってね!おめでとうー!」

「えっ……えーっ!!なんで勝手に見ちゃうんだよ母さん!しかもしれっと合格だったとか言わないでよ!!」

母さんがおせんべいを食べながらなんでもなさげにいう。

合格?!なんでそんなに当たり前のように言うかなあしかし!僕はこの一週間、失格かも知れないってずっとドキドキしてたのに!!ひどいや!

「えー、だって出久なら絶対合格だってわかってたしいかなーって、ごめんね!」

「うーん、素直に言われるともうなにも言えないよ…」

母さんが自信満々に言う、すっかり肝っ玉お母さんになってしまったようだ。

まあぐちぐち言っても仕方ないし、僕も素直に喜ぶとしよう！切り替えが大切だよ
ね！

「今夜はご馳走にしましょう！」

「やったね！なにがいいかな——」

あとで手紙を開けてみると、僕の結果は撃破ポイント99P、救助活動ポイント99Pで、ぶっちぎりの一位合格だったらしい。春から教師になるというオールマイトがややウンザリ顔で言ってたので間違いないだろう。

それからの日々はあつという間だった——

残りの中学生生活を過ごし——

卒業式を経て――

そして雄英高校入学の朝を迎えた――

ムキムキ最強No. 1

オールマイトの修行を終え、雄英高校入試へ挑んだ僕は、圧倒的一位で合格した。今日からは雄英高校の生徒だ！

「出久、似合ってるわよ、頑張ってきたさいね」

「ありがとう、母さん。じゃあいつてきますす！」

特大サイズの雄英高校の制服を身に着けた僕を母さんが誉めてくれる。母さんの期待に応えるためにも頑張らなくちやな——

——電車を乗り継ぎ、慣れた通学路を少しはや歩きで進んでいくと雄英高校に着いた。ここから新しい生活が始まるんだなっと思いつながら、僕はマンモス校にありがちな広大な校内を案内図など見ることもなく、1—Aの教室へと向かう。そして教室の前に着く、僕は雄英独特の特大ドアを片手で開け、中へと入った。

「机に足をかけるな！雄英の先輩方や机の製作者に申し訳ないとは思わんのか！」

「思わねえよ！テメーどこ中だよ？端役が!!」

いきなりかつちゃんと飯田君が言い争いをしてるとこに遭遇してしまった。相変わらず二人はウマが合わなさそうだ。

とりあえずこの場はかつちゃんを静めるかな。かつちゃん、ウエイト！ドオードオー…

「おはようかつちゃん、その体勢は足腰のトレーニングとしては効率的じゃないから、僕が今度いいスクワットを教えてあげよう」

「鍛えてる訳じゃねえわ!!今日もぶつとんでんなあデクう!…でもスクワットは後で教えろ、ところで——」

かつちゃんが僕の言葉につっこみながらも、最後には落ち着いて机から足を下ろしていた。素直なのはいいことだよ、かつちゃん!

「やあ、僕の友達が迷惑かけたね。僕は緑谷出久、こっちは爆豪勝己君、見ての通りのやんちゃボーイさ!あつ、デクってのは僕のアダ名ね、そう呼んでもいいよ!よろしくね!」

僕は自分とかつちゃんの紹介を飯田君にした。

こんだけ騒いでたし、すでに注目の的だ。クラスのみんなにも聞こえてるだろう、ま

あ自己紹介の手間が省けて良かったかな？しかしスムーズに話せてよかったー！

「ああ、君は確か入試で大暴れしてた…ボ、俺は聡明中出身、飯田天哉だ、こちらこそよろしく頼む緑谷君！ところでその担いだ——」

「あつ！おつきい人！入試のときは助けてくれてありがとね！おんなじクラスだったんだー！」

飯田君の言葉を遮って、教室に入ってきた麗日さんが僕に話しかけてくれる。

麗日さん制服姿もやっべー！！てか普通に声かけてくれたよ、嫌われてるかと思っ
た！やっぱり入試のときは緊張してただけなんだな！

「ところでその肩に担いでる寝袋なに？」

「ああ、これね——」

僕は教室に入ったときから担いでいたその人を教卓の前に置く。

「担任の相澤消太だ、よろしくね」

「教室の前に落ちてたから拾ってきたんだ！」

相澤先生が喋りだし、僕が説明をした。

「担任ー!?拾ってきたー!!」「ヤベー担任とヤベーヤツいきなり揃い踏みかよ!」「てかな
んだよあの筋肉！異形型か!!」

クラスメイトがざわつく。そこ、異形型とか言わないの鍛えてるだけだよ失礼だな！

その後、相澤先生は体育着に着替えてグラウンドへ集合するように指示し、前世のように個性把握テストが始まった。最下位は除籍になるらしいが、おそらく相澤先生の合理的虚偽だろう。

「じゃあ先ずはソフトボール投げ、よし緑谷お前からだ。円の中から個性を使って全力で投げてみる」

相澤先生は僕を指名した、入試の成績が一番だったからかな？

よし！全力だな！前世と比べて僕がどこまでやれるようになったか再確認したかったんだよね。

全力、全力！ぜんりよくうーーー！！！！

「スマアアツシュツ！！」

僕は全力でボールを真つ直ぐと投げた、そう真つ直ぐと…

しまったあー！！いつも全力で物を投げるときは相手にむかって投げつけてきたから、ついついストレートで投げてしまったーっ！！

真つ直ぐと投げられたボールは勢いよく突き進み、そしてグラウンドを越えて、フェンスを突き破り、そのままの勢いで校舎の壁にぶち当たり……破裂した。

「初っぱなから測定不能が出たか、なかなかやるじゃないか緑谷。まあこんな感じで個

性を使つてやると普通とは比べ物にならない記録が出る、わかつたかー？じゃあ次——

相澤先生は少し驚いていたが、すぐに淡々と測定を進めていった。

僕の記録は麗日さんの記録 ∞

とならんで一位だった。まあ結果オーライだよね！

それから次々と測定は続いていく——

50 m走——

「記録、2秒88！」

「緑谷はええええ!!」

「4く5歩しか使つてないぞ！なんつー脚力だ!!」

「得意分野で負けた……」

飯田君を抜いて一位。

立ち幅跳び——

「記録、測定不能！」

「うおおお！跳びすぎだろあいつ!!」

「グラウンドの端のフェンスに掴まりながらこちらに手を振ってますわ！」

「おーい、緑谷が踏み込みで開けた穴塞ぐの誰か手伝ってー!!」

測定不能で一位。

握力——

「記録、測定不能！」

「何事もないかのように目盛りを振り切ったな……」

「見ろ！握力計が変形しちまって使い物にならなくなってる!!」

「これも測定不能で一位。」

反復横跳び——

「記録、測定不能!!」

「緑谷のやつ速く動きすぎて地面に埋まってるぞ!!」

「あの脚力で地面の方がもたなかつたんだ!!」

陥没してしまったため二位、一位は同じく測定不能の峰田君。

上体起こし——

「大変！あまりにも速すぎる上体起こしの衝撃で、足を支えていた障子君が失神したわ

!!

「誰かあいつを抑えるやつはいねえのか！」

「切島君の硬化ならいけるんじゃない!?」

「俺はまだ死にたくねえ!!」

支えられる人がいないため測定不能で一位。

長座体前屈——

「記録、58cm！」

「普通だ……」

「普通過ぎるね……」

「すげえ普通だ……逆にすげえよ！」

普通に普通の記録で10位。

持久走——

「ハアハア……緑谷のやつなんでひとりだけ……ハアハア……短距離走みたいなペースで走ってるんだ……」

「……ハアハア……何回抜かされたかわかんねえぞ……」

「…今ので23回目だ…ハアハア…クソがつ…」

「…ハアハア…ハアハア…数えてんのかよ…!」

最終的に28周回遅れにして、一位。

——以上で個性把握テストは終了した。総合結果だが、僕は他の追隨を寄せ付けな
いで一位をとることができた! やったよオールマイト! ちなみに最下位の除籍はやつ
ぱり合理的虚偽だった。相澤先生のうそつき!!

——そして授業が終わり、下校時間になった。僕は校門に向かっていると後ろから
声をかけられた。

「今日は凄かったな、緑谷君! 入試に引き続き驚かされてばかりだったよ」

「飯田君! お疲れ様、いやあ全力でやったら少しやり過ぎちゃったかなあと反省して
るよ…」

誉めてくれる飯田君にやや落ち込みながら返す僕。

「なにを! 手加減なんでもつての他だ! 自分の個性を見定めるテストだったのだからや
り過ぎなんていうことはない!」

即座に僕の言葉を否定してくれる飯田君、やっぱり彼は真面目でいい人だなあ、飯田
君のそういうところは前世から尊敬している。

「まあ、得意の走りで負けたのは流石に堪えたが…」

「なんかごめん…」

「謝ることはない！緑谷君は全力で取り組んだだけなのだから！むしろ俺が——」

落ち込む飯田君、僕が謝るとまたも直ぐ様フォローを入れてくれる、フォローも速いぞ飯田君！飯田君がなにか続けて言おうとしたときに再び後ろから声がかかる。

「おふたりさーん！駅まで？一緒に帰ろ？」

麗日さんだ！ツツテケテーつと小走りで近づいてくる、小動物みたいで可愛らしい。

「君は、∞女子！」

飯田君が返事をする、しかし∞女子って…君はどこまでも飯田君だな！

「麗日お茶子です！えーつと、飯田天哉君と緑谷…デクくん！だよね？」

「出るに久しいって書いて出^い久^くって読むんだ、デクはアダ名だよ。でもデクでいいよ！」

名前を呼ぶ麗日さんに、名前を教える。

すでに僕にとつてのデクは頑張れ!!って感じのアダ名なんだ！むしろ麗日さんには呼んで欲しい。

「アダ名だったかあ、頑張れって感じでなんか好き…だな」

「えっ…？…あつ！うん！ありがとう！」

麗日さんがとんでもないことを言う。

15歳なんて多感な時期の男の子に好きとか言わないでよ！勘違いしちゃいそうになるじゃないか!!…えっ精神的には26歳だろうって?…こと女性に関しては経験値ゼロに等しいんだよ僕は！スライムも真っ青だ!…:…なんだか悲しくなってきた。

「でもデクくんっていうよりはデクさん!って感じだよね!」

「確かに!緑谷君の凄まじさを見れば、デクさんの方が似合いそうだ!」

意外な麗日さんの言葉に飯田君も続く。

「だよねだよね!強いし、逞しいし、私も助けられちゃったりして:カツコいいし:」

麗日さんがすごく誉めてくれる、最後の方は声が小さくて聞こえなかったが。沈みかけた陽の光が麗日さんの顔を赤く染めている。なんだか照れて赤らんでいるみたいでとってもキュートだ!!

こうして僕たちは再び友達になることができた。オールマイトを救けるまではまだまだだけど、いまは喜んでもいいよね、オールマイト——

—— オールマイト side in ——

「緑谷の個性把握テストの結果です、まさに規格外。ありやとんでもない化け物ですよ、いったいどんな育て方してきたんです?それとも拾ってきたとか?ねえ、オールマイト」

相澤君が緑谷少年のテスト結果が書かれた紙を見せながら聞いてくる。彼が私の弟子だということは教師陣と一部のヒーローには伝えてある、つまり私の弱体化を知っている者達だ。

「うーん、どっちも、かな。ただね相澤君、彼は化け物なんかじゃないよ、すでに立派な志を持った”ヒーロー”さ」

私は片手間に明日の授業の準備をしながら、相澤君へ言葉を返す。

「そうですね、失礼しました。しかし貴方の後継が生徒だなんて私も肩の荷が重いですよ」

「解ってくればそれでよし！まあそんなに気張らずに他の子達と同じように接してくればいいからね！」

謝る相澤君に対して、少し大きな声で周りの教師にも聞こえるよう、彼への扱いを伝える。

「了解です、じゃあ明日の授業は頼みましたよ——」

そう言つて去っていく相澤君。

彼のことだからもう友達も出来たことだろう、将来彼の身に降りかかる重荷を考えると、この高校生活くらいは楽しく過ごしてもらいたいものだ……

……つといかないかん、今は私も一教師！明日の初授業に向けて気合い入れねばな！！

——
そうして私は明日の授業の準備を再開していった——

—— オールマイト side out ——

設立！――A筋肉同盟！！

僕は個性把握テストで圧倒的な記録を出し、一位を獲得した。そして飯田君、麗日さんと再び友達になった。僕のヒーローアカデミアでの生活がまた始まったのだ！

「おはようー！」

僕は教室のドアを開けて、とりあえず挨拶をしてみる。

「おはようー！緑谷君！」

「おはよーデクさんー！」

飯田君と麗日さんが挨拶を返してくれる、どうやら麗日さんの僕の呼び方はデクさんで固定のようだ。

いやー誰からも返事がなくて、無視されたみたいになっただろうかと思ったよ！やっぱ普通の友達っていいなあ。

そう思っていると更に僕に声をかける人がいた。

「よう緑谷！昨日はマジで凄かったな、同じ増強系としても可能性を感じたっつーかなんつーか……っとな誰だっただ感じだよな。俺！砂藤、緑谷と同じく増強系の個性持ちだ

!

1-AのNo. 2マッスルの砂藤君が話し掛けてきた、たしか砂藤君の個性は糖分を使つて自身の身体能力を5倍に増やすんだっけ。

強力な個性だ：仮に握力測定で彼が個性を使わずに90 kgを出すとしたら、それが450 kgになるわけだ。そしてパワーだけじゃなくスピードも上がるとしたら：握力 × 体重 × スピード Ⅱ 破壊力 となるから、それはそれは想像もつかないパワーになるだろう：

「おはよう緑谷、俺は障子目蔵。昨日の活躍見せてもらった、しかしその常に頑丈な肉体とパワー、実は俺と同じく異形型じゃないのか？」

続いて1-AのNo. 3マッスルの障子君が声をかけてくれる。彼の個性は複製腕だったな。

一見、その見た目以外は地味に感じる個性だが、そんなことはない。肩から伸びる腕の先は様々な体の器官にすることができ、しかもその性能は並みじゃないときたもんだ、汎用性の高い個性ということとは間違いないだろう。

だが、僕が気になったのはそのパワーだ。彼の握力測定の記録はたしか540 kg、彼の手を見るに、素の握力は100 kgくらいだろう、つまりあの副腕は一本で200 kgを超える握力があるわけだ、うん、凄いパワーだ！勿論強いのは握力だけ

ではないだろうし、それが二対四本もある…あの腕に掴まれて逃げられるやつはそういうないだろう…」

「砂藤君に障子君だね、よろしく！僕は異形型じゃなくて増強型の個性だよ。それに君達だつて凄い個性を持つてるじゃないか！」

僕は障子君の言葉を訂正しつつ、二人の個性を誉める。

「そういうつもりは無いんだろうけど、お前が言うと言つて嫌みにしか聞こえねー！」

「あれを見たあとに、自分が凄いなどと自惚れられないぞ…」

砂藤君が叫び、障子君がうつむきかげんになる。

「うーん…本当に凄いと思つてるんだけど。まあ僕が見てもらいたいのには個性よりも、パワーの源であるこの鍛えた筋肉なんだけどさ！」

「おお！やつぱり増強系ついたら己の肉体を鍛えぬくべきだよな！緑谷もかなりキレた筋肉してるもんな!!」

「それなら俺もだ、自分の素の力が個性に大きく反映されるからな。日々の鍛練は欠かせない」

僕の言葉に二人のテンションが上がってきた。やつたぜ。

「そうそう！僕は筋肉のキレを出すトレーニングをよくしてるかな、砂藤君はバルクアップ系だよな？」

「そうだぜ! 男なら筋肉をデカくするべき! つて考えてるからな! お前らは違うのか?」

「俺の場合は個性の関係上、デカくし過ぎると取り回しに影響がでるからな」

「僕も取り回し重視かな、パワー自体は個性で出るし、全体のバランスを意識してるんだ!」

「なるほど: : : そういう鍛え方もアリだな!」

三人でどんどん筋肉話が盛り上がっていく。

「お前らもぜつてえ飲んでるよな! プロテイン! 俺はココア味が好きだ!」

「僕はバナナとイチゴ味の二つかな! プレーンヨーグルトにまぜ混んで飲むと最高だよ!」

「なかなか旨そうだなそれは、今度飲ませてくれ。ちなみに俺はオーガニックプロテイン一筋だ」

「おお! 障子はこだわり派だな!」

「オーガニックってクセが強いイメージあるけど、どうなの?」

「最近のは味も良くできている、種類を選べば問題ない。俺のおすすみを分けてやろう! 楽しみだな!」

筋肉、三人寄ればなんとやら、話は尽きない。

「今度一緒にトレーニングルームいこうよ——」

「いいな！ビッグスリーの披露会しようぜ——」

「個性使ってもいいか——」

「そりやだめだろ——」

——新しい友達ができた！それは同時に1—A筋肉同盟の設立の瞬間でもあった。えっ？1—AのNo. 1マッスルは誰かつて？それは勿論僕だ！筋肉なら誰にも負けないし、負けられない。

「飯田君、あの三人がなにを話してるのかぜっんぜんわからんよ！」

「麗日君、俺もだ。プロテインが旨いということしか伝わってこなかった。しかし三人の筋肉に対する心掛け、俺も参考になるな」

「飯田君は真面目だなあ……」

楽しい時間はあつというまで、気がつくやと授業開始前の予鈴がなっていた。僕らは席に戻り、普通の授業を受けた。そんな普通の授業も終わり、午後になった。そうして僕が待ちに待った授業の時間がやってきた——

「わーたーしーがーしー!!」

「普通にドアから来た!!」

——オールマイイトの授業が始まる、クラス中が騒ぎ出す。そうだねシルバーエイジ時代のコスだね。

もう見れないと思ってたオールマイイトの授業風景だ!!懐かしい、素晴らしい!!うう…やっぱり雄英に入ってよかったよ…

「緑谷が涙を流してるぞ!」

「あー、あいつオールマイイト大好きだもんなあ」

「マツチヨが泣いてるとシユールで面白いわね」

みんなに好き勝手言われて自分が泣いていることに気がついた。泣いている場合ではない、オールマイイトの授業を目に焼き付けなきゃ!

「あー、ごほん!授業始めてもいいかな?」

オールマイイトがわざとらしく咳払いをする、周りが静かになったことでようやく授業が始まる。

「ん〜っババン!!というわけで今回は早速コレ!戦闘訓練だ!」

オールマイイトが”BATTLE”と書かれた札を掲げて、説明を始める。

前と同じで戦闘服コスチュームを着て、演習場で訓練する形になった。

「——来いよ、有精卵ども！」

オールマイトが凄味を出して言う、顔が濃い……そして痺れるなあ……!

その後、みんなコスチュームに着替えてから演習場へと集合した。

「あ、来た来た、デクさん——ってそのコスチューム——」

「おお、緑谷君！まるでオールマイトのようなコスチュームだな！」

「オールマイト好きすぎだろ、緑谷！」

麗日さんと飯田君、ついでに少し遠くの方で切島君が僕のコスチュームに気がつく。

みんなが言ったように、僕のコスチュームはオールマイトのものを緑色にしたようなデザインをしている。今の僕は彼風のコスチュームを着ることになった。なんの違和感もないくらいに強くなっているはずだ……！憧れるくらい良いよね？ね！

コスチューム自体はオールマイトとの修行の時にも着ていた。母さんがくれたジャンプスーツを元にしたかつてのデザインのものだ。しかし僕の激しい動きにスーツの方がついてこれず、衝撃でボロボロに破れてしまったり、摩擦で焼け落ちたりしてしまったのだ。

でもこのコスチュームは違う！緑色の全身スーツは伸縮性が高く、いくら激しく動いたところでシワすらつかない！さらに衝撃や摩擦にも強く、吹っ飛ばされて地面を転

がっても大丈夫だ!

さらに肩に摩^{なび}く真紅のマントだ! このマントは耐火性が非常に高くなっている、おかげで火災現場にも飛び込んでいけるぞ! その分重くなってしまったが僕の筋肉なら問題ない、それに速く動きたい時は脱げばいいのだ!!

極めつけはこの深緑のブーツだ! 地面やアスファルトをしつかり踏み込めるように、特殊合金素材のスパイクがついている、これで壁でも天井でも走れるぞ!! ついでにスパイクのポイントは自分で交換出来るようになっていて、消耗品故の嬉しい配慮だ!

ふう…年甲斐にもなく心の中ではしゃいでしまった、精神的にはもう大人だつてのに…

ん? なんだかやけに詳しいじゃないかって? そりや前に着たことあるからね、詳しいさ。

「うわあ、デクさんホントにオールマイティみたいでカッコいいよ!」

「ありがとう、麗日さん! 麗日さんのコスチュームもかっこよくて可愛くて、ヒロイン! っって感じだよ!」

「ヒロインだなんて…照れますなあ!」

僕と麗日さんはお互いに誉めあつて照れる。麗日さんはお世辞をいつてくれたけど、僕は本音だよ! まったく、僕じゃなきや勘違いしちゃうね!

「みんな揃ったね、じゃあ始めようか——」

オールマイトが戦闘訓練の詳細を説明していく。前と変わらずヒーローチームとヴィランチームに分かれてビルの中での核の防衛戦だ。

そして組み合わせも前と変わらず——

「じゃあ第一回戦はヒーローチーム緑谷&麗日 VS ヴィランチーム飯田&爆豪だ!!!」

かっちゃん和飯田君のチームとの対決だ！やはりこうなったか…

そうして僕らは作戦タイムに入る。

「頑張ろうね、デクさん！」

「うん、よろしくね麗日さん！」

お互いに挨拶をする僕達、チームワークは良さそうだ！

「しっかし作戦かくどうしようか？」

「私にいい考えがある！」

「わっ！ビックリした…よし！どんとこーい！」

既に作戦を考えていた僕はいきみに返事をした、思わず低い声になってしまい麗日さんを驚かせてしまったようだが、麗日さんは小さくガッツポーズを作って気合いをいれる。可愛い。

「おそらくかつちゃんも僕との一騎討ちを狙って単独行動すると思うんだ、今回はあえてそれにのってやろうと思う。僕とかつちゃんが闘ってる間に麗日さんは核の探索をして欲しいんだ、たぶん飯田君もそこにいるだろう。僕がかつちゃんを確保したら合流する、それまでの間に麗日さんが侵入経路を二ヶ所以上見つけられれば、勝ちは固いね。二ヶ所から同時に突入、飯田君には範囲攻撃はなさそうだから一人しか止められない、どっちかが核を確保出来るだろう。」

僕は一気に作戦を説明した、自分の話す番となると止まらなくなるあたりクソナードって感じだ。

「それ、作戦の大変なところ全部デクさんが引き受ける形になっちゃわない? 爆豪君を一人で倒す前提だし…大丈夫?」

「かつちゃんにだけは負けるわけにはいかない、絶対に勝つ。信じて欲しいんだ! それに——」

「それに?」

麗日さんが心配そうに聞いてくる、でも僕はかつちゃんには負ける気はないし、負けたくない。僕は言葉を続ける。

「それにこの作戦の要は麗日さんなんだよ、今回の目的は核の奪取、つまりいかに麗日さんが核を発見して、確保に対して有利な状況を作れるかが作戦の成功率を決める。僕は

ただのとどめの一撃でしかない。むしろ飯田君に隙があったら、一人で核を確保するのが一番スマートなんじゃないかな！」

「私、責任重大だったー！」

僕の作戦の詳細を聞いて、麗日さんが大声で驚く。やや涙目になっていて可愛い。

ヴィランチームが配置につくためにあつた、5分間の作戦タイムが終了する。

「それでは、戦闘訓練スタート!!」

オールマイトの掛け声と共に僕らはビルの入り口に向けて走り出す、そして入り口に着いたとき見えた光景に思わず足が止まる——

「うそ……」

「かつちゃん……君ってやつは……!」

——ビルの入り口から見える通路の奥、そこには掌に爆破をBOOM!と迸らせて、独りで僕らを……いや僕を待ち構えるかつちゃんの姿があつた。

一瞬の停止のあと僕らは動き出す。

「麗日さん! いって!!」

「わかった! 頑張れ! デクさん!!」

僕は麗日さんに合図をだし、通路の奥へと走る。麗日さんは僕にエールを贈ったのちに、階段を駆け上がる。

「いかせてよかったの? かつちゃん?」

「そんなこと俺に聞くんなんてつれねえなあ! デクウツ!!」

短いやり取り、僕は足を止めてからゆっくりとかつちゃんへ近付く。

「個性を全力で使った喧嘩が出来るっつー、折角の場だあ…タイマン以外ありえねえだろうが…!!」

「そうだね、僕もかつちゃんと本気で闘ってみたいと…! そう思ってたよ!!」

少しずつ二人の距離が近くなっていく。

「ぶっ殺してやる!! いくぞおお!!」

「絶対に!! 君には負けない!!!」

同時に駆け出して距離を詰める。

「デクウウウツツ!!」

「かつちゃあああんつつつ!!!」

僕は拳を振りかぶり、かつちゃんが掌を振りかぶる。

再履修やりなおしから11年目、初めて本気の本気でやり合う、僕とかつちゃんの喧嘩、今その火蓋を切る――

爆豪勝己：Re：オリジン

ついに直接対決することになった俺とデク、ガキの頃からの因縁にケリをつけてやるぜ！勝つのは俺だあ！さあ爆破の時間だぜええ!!

—— 爆豪 side in ——

ガキの頃から俺はなにをやっても他人より出来た、これは自惚れじゃなく客観的事実ってやつだ。ガキ特有の万能感と周りの大人たちからの賞賛、ちっぽけなガキだった俺が付け上がるには充分過ぎた。

それは急に終わっちまった、最強だったはずの俺はあっさりとその王者の座から引き摺り下ろされた。たったひとりの帰還によって：

「おいデク！おまえこそいのちよーせーにミスって大ケガしたんだってな！だつせえ!!」

緑谷出久、なにをやってもダメダメな俺の中でいつちやんすごくないやつだ。退院して園に戻ってきたそいつを、すぐさま俺はからかった。

嫌がるかと思った、悔しがるかと思った、泣き出すかと思っていた、だってデクはデクなんだから。

しかし返ってきたのは予想外の言葉だった。

「あはは、その通りなんだよ。個性が暴発しちやつて六ヶ月も入院しちやつたよ、いやー恥ずかしい！あつ…かつちゃんも個性の調整には気を付けた方がいいよ、ホントに痛いからこれ」

デクは泣くどころか、大人みたいに愛想笑いを浮かべておどける、あまつさえ俺の心配をしてきやがった。

—— 気に入らねえな…気に入らねえ!! デクの癖に！なんにもできない癖に!!

俺は怒りに任せてデクに殴りかかっていた、ぜつてー泣かしてやる！それしか考えていなかった。

—— 殴りかかっていたはずの俺は気がつくど地面に転がっていた。

「かつちゃんごめん！大丈夫？…でもなんで急に殴りかかってきたの？」

デクが心配そうな顔でこつちを見ながら手を差し伸べてくる。

今思えば、あるとき俺は手首を掴まれ、殴りかかる勢いを利用して投げられたんだろな。

—— クソがつ！デクの癖に！許さねえ!!

それは俺の初めてのデクへの敗北だった。

それ以来俺はことあるごとにデクに勝負を挑んでいった。だがすべてにおいてアイツは俺の上をいってやがった。

かけっこ、かくれんぼ、鬼ごっこ、水切り、早食い大食い、背比べ……子供の争いじゃ勝てなかった。

国語算数理科社会……勉強でも勝てない、勿論体育もだ。

サッカー、野球、バスケ、卓球、テニス、クリケット、カバディ……スポーツでも勝てない。

唯一勝てたのはトランプの”スピード”くらいだろう。反射神経　は俺の方が高い、先にカードに手を伸ばせる。でもあいつが本気を出せばあとから動いてもカードをとれるだろう、だがそれをあいつはしない。手と手がぶつかって俺が怪我をしないように手を出さない。つまり勝たせてもらってるようなもんだ……くそがっ!!

勝ちたくても勝てない相手がいる、いつしか俺はその事実から目を背けるようになっていた……

自尊心を満たすためまわりと自分を比べる、ほらやっぱり大したことねえやつばかりだ。——

——どいつもこいつも大したことねえ！俺はやっぱりすげえんだ！ってことはそ

れについてこられるデクもすげえんだな。

———そうか、そういうことだったんだなあ：周りのやつらはみんな雑魚の端役だ！
特別なのは俺とデクだけなんだ！俺らだけが主要人物なんだよ！！
メインキャラ

どうやらデクはヒーローに成りたいらしい、じゃあ俺もなる、俺とデクなら楽勝だ。
なんだって倒せるしどこまでもいける、きつとオールマイトを越えてトップにだって立
てる！

俺はいつのまにかデクに勝てない事実を忘れて、自分とデクを同列に置いていた。自
分の知る最強と並び立って歩いているという心地のいい幻想、そうして何年もの時が
経って、その幻想はデクに対する歪んだ信頼になっていた。

———でも、高校に入学して俺らの関係は変わった。

個性把握テストで見せたデクの圧倒的で規格外の力、まるで違う世界の住人だった：
———並び立てねえ！追い付けねえ！！……勝てねえ……

忘れていた現実が還ってくる、勝手に積み上げていたデクへの幻想がボロボロと壊さ
れていく、そこでようやく俺はデクに勝てなかったことを思い出した。

———俺は特別じゃなかったのか……いやそんなわけがねえ！俺は特別なんだよ！

ほかのモブどもなんかといっしょくたになんてされていいはずがねえんだ!!

ああ、そうだ：証明しなきゃならねえよなあ：俺が特別だつていうことをよお!!

そして戦闘訓練というデクに勝負を仕掛ける最高の機会が訪れた。

——ほんつと最高だぜえ！この戦いで俺はデクに勝つて、爆豪勝己特別な俺の原点オリジンを取り戻してやる!!

そうして俺らの殺し合いたたかいが始まった。

「ぶっ殺してやる!!いくぞおお!!」

「絶対に！君には負けない!!」

お互いに叫びながら一気に距離を詰める。

ぶっ殺すくらい本気でいかねえとデクには絶対に敵わねえ！俺はお前に勝つんだよ

！

「デクウウウツツ!!」

「かっちやあああんつつつ!!」

雄叫びを上げて互いの武器を構える、初撃は外さねえ！これで先手をとる！目眩ましがわりの顔面への一撃!!

「おらよお!!」 BOOM!!

俺の爆破がデクの首から上を覆い尽くす、しかしデクの拳は止まらずに俺の顔へと向かってくる。俺は爆破の勢いにとって回転し、拳を躲かわしながらデクの横へ滑り込む。

「がら空きだぜえ!!くらいな!!」 BOOOOM!!

すり抜け様に、拳を放つてがら空きになった脇へと爆破を叩き込む、そして爆風にのりそのまま3mほど距離をとる。デクはまだ体勢を崩したままで!

「息つく暇は与えねえ!オラオラオラ!!」 BOOM!BOOM!BOOM!!!

遠距離から連続で爆破を浴びせまくる、次第に爆炎でデクの姿が見えなくなる。だが手は緩めない、このまま封殺する!

——そう思った瞬間、爆炎が弾けて暴風が吹き荒れる、吹き飛ばされなかったために、両手で爆破を使い暴風を相殺して、体を支える。

「おいおい、デコピン一発でこれとか冗談だろお…!?!」

爆炎の弾幕を裂いたのはデクの砲撃デコピンのようだ、そして既に二発目の発射準備に入っていた。

あれをこの狭いところで連発されればこつちがじり貧になる!それに拳でやられたらまず躲せない、それだけはさせない!!

「させるかよお!!オオオア、!!」 BOOM!BOOM!BOOM!

俺は爆破を使つて縦へ横へと飛び回りながら接近していく。デクは俺に狙いを定め

られていない、そして砲撃が放たれた。俺はその上を飛んで回避する、よしうまくいった!!

「外れだぜ！くそがつ!!」 BOOOOM!!!

デクの頭上から両手で爆破を放つ、そしてそのまま接近戦へ持ち込んだ。

「オラオラア!!死にやがれよお !!」 BOOM! BOOM! BOOM!

BO

OM!

爆破、そしてその勢いで裏拳、踵落とし、廻し蹴り。爆発と格闘の旋風、嵐のように攻撃を続ける。しかしデクはそれを振り払うように拳を振り回す。

「当たらねえよお!!反応速度ならこっちの方が上だあ!!」

闇雲に振り回した拳など当たりはしない、それを回避しそのまま攻撃を続ける。

暫く俺の攻勢、縦横無尽にデクの回りを飛び跳ねながら攻撃を放ち続ける、デクも体を少し動かすなどして攻撃の軸をずらしていたがそれでもダメージはかなり溜まっているだろう。そしてついにデクが片膝をついた、俺は両手で爆破をくらわせ、そのまま距離をとる。

「ツ…ハアハア…マジかよ…ハアハア…おい…」

俺は両手を膝につけて息を整えながらデクを見据える。デクはゆっくりと立ち上がり、首をコキコキと鳴らしながらこちらへと振り向く。

「なかなかやるじゃないか、かつちゃん…かなり効いたよ」

そう言いながら手足の調子を確認めるデク。俺からはあまり効いてる様には見えねえぞ、くそがつ!!

「じゃあ今度はこつちの番…だなっ!——」

デクが大きく一歩踏み込んで俺に殴りかかる、俺はそれをギリギリのところで避けた。

「——っーツ!!」

俺の後ろの壁が粉々に砕け散る。あんなもん食らったら一発でお陀仏じゃねえか! 一撃ももらえない!

それからデクのラツシユは止まらない、俺は爆破で加速と目眩ましをしながらそれを避け続ける。

普通の爆破やそれを使った格闘じゃ決定打にならねえ! しかもただの打撃じゃ足止めにもならねえしな!! 大技で決めるほかねえ!! いまは隙を作るためにも逃げるしかねえな!!! ——

そうして俺はビルの中を逃げ回り、ついに広い会議室のような部屋の窓際の柱を背に追い詰められた。

「流石の反応速度だね、かつちゃん。こつちの攻撃が一度も当たらなかつたよ…」

そう言いながら少し離れたところから威圧感を放ち、ゆっくりと歩いてくるデク。ここで決めるしかねえ！俺はタイミングを見計らう。

「鬼ごっこはっ——終わりだっ！」

デクが今までより格段速く距離を詰めて殴りかかる、俺はギリギリのところまでそれを躲す。デクの腕が柱へと突き刺さる。馬鹿げたパワーだ、しかし腕を柱から引く抜くため一瞬の隙が出来た！今だ!!!

「ああ!!これで終わりだぜッ!!」

籠手の中に貯めておいた汗ニドロを開放し、俺の持ちうる最大級の攻撃をデクに向かって至近距離で発射する。超特大の爆破がデクだけでなくあたりを飲み込み、ビルの側面を吹き飛ばした。そして黒煙と土煙が辺りに立ちこめる。

「……これは訓練だぞ!!爆豪少年！相手を殺す気か!!!」

無線からオールマイトの声が響く、無論殺すつもりなどはない。というかデクなら重症ではあるが死にはしないだろう。

——バサツツという大きな音とともに煙が一気に晴れる。そこには埃と煤にまみれながらも無傷なデクの姿があつた。

「ば……バケモンかよ……」

「悪いけど…まだ人間だよっ!!」

そう言いながらデクが近づいてくる、動揺していた俺は一瞬反応が遅れ、咄嗟にデクの顔面に殴りかかっていた。

「しまっ——」

俺の拳はデクの顔面に突き刺さるも、デクはそれを意にも介さない。そのままその腕を掴まれ、振り上げられて背中から地面に叩きつけられた。

「…ガハツ——」

叩きつけられた衝撃で肺の中の空気が一気に吐き出される。俺は朦朧としながらデクを吹き飛ばそうとまだ自由な掌を向けて爆破を使った。

——爆破は起こらなかった、その瞬間俺の手に激痛が走る。個性の暴発!? そう思っ
て手を確認する、そこには真紅の布で包まれた俺の手、気が付かないうちに掌を封じられていた。

「くそがああああ!!!」

俺は起き上がりつつ宙返りをしながらデクに蹴りを叩き込む。しかしそれはデクの腕に阻まれた。

「もうテープも巻いたんだけど、まあ君は止まらないよね!——ごめん!!」

デクはそういうと、宙に浮いているため無防備な俺の鳩尾に拳を振じ込んだ。一瞬で

意識が遠のいていく…

——くそがつ！クソがクソがああああああ
!!!!

——また、負けちまった…

——ダメだなあ俺は、もう…

——そうして俺の意識は途絶えた——

——爆豪 side out——

お前に足りないもの！それh(中略)そしてなによりも！
はy(以下略)

ついにかつちゃんとの直接対決の時が来た！僕はかつちゃんの猛攻になんとか耐えて、腹パンでかつちゃんを気絶させて勝利を掴んだ。

しかしかつちゃん、最後のあの爆破は使う相手が僕以外なら死人が出ると思うんだけど！危ないぞ！

「デクさん！いまのすごい大きい爆発なに?!大丈夫!?!」

麗日さんから無線が入る、僕を心配してくれてるみたいだ。たしかにやばい爆発だった、まだ耳がキーンとしてるもの。このビル倒れないよな…?」

「大丈夫、なんとかかつちゃんを確保出来たよ、そっちの状況はどうなってる?」

「よかったあ、こっちは核の隠し場所を見付けたんだけど、核の前から飯田君が動かなくて全然隙がないよ!」

「わかった！今から合流するね——」

麗日さんはどうやら核を発見してくれたらしい、合流してこの訓練にラストスパートをかけよう!

「うわっ!デクさんボロボロじゃん!大丈夫なの?」

「うん大丈夫だよ、ちよつと焦げ臭くてごめんね。ところで侵入経路はいくつ見つかった?」

僕は麗日さんに謝りつつ尋ねる。麗日さんにくっさいなあとか思われてたら嫌だなあ、煤まみれだし早くシャワーを浴びたい…

「それが入れそうなところがあのドアくらいしか見当たらなかったんだよ!どうしよう!?!」

「良いところを陣取ったなあ飯田君、さてどうしようかな、うーん——」

麗日さんがやや慌てて話す。まともな侵入経路は一カ所、ならとれる選択肢は…これくらいしかないな!

「ひとつだけ作戦を考えたよ、ただ麗日さんの負担が大きいんだけど…いいかな?」
「なにになに!?!ここまでいいとこ無しだし、むしろばっちこいだよ!」

「それじゃ説明するね、まず僕が正面から突入するから、麗日さんは——」

——麗日さんが配置についた、作戦開始だ！

「ようやく見つけたぞ！ここまでだ、飯田君!!」

僕はドアを派手に蹴破り、中へ突入し飯田君に凄む。

「ふははは!!ようやく来たかあ、ヒーローオ!ここは地獄の三丁目、お前の方こそここま
でだあ!!」

様になった演技、ヴィランになりきった飯田君が僕に言う。至極悪そうだ、流石飯田君!こんなところまで真面目だ!

「僕は君にスピード勝負で一度勝っている!今回も勝たせてもらうよ、捕まえて確保
テープでぐるぐる巻きにしてやる!」

僕は飯田君を精一杯挑発する、ダメだ!下手くそすぎる!!

「ぐぬぬ!痛いところをついてくる…だが今回は負けるわけにはいかない!俺の必殺技
を見せてやる!!」

飯田君が悔しそうな顔をして返してくる。よかった、挑発にのつてくれたぞ!

「なにを!いくぞ!」

「来い!必殺、レシプロバースト!!」

僕が踏み出すと同時に飯田君が必殺技を発動する。レシプロバースト、飯田君の個性のエンジンを暴走させて超加速を生み出す技だ、そのスピードは——

速い!前世より格段に強化されているはずの僕のスピードでも追い付けないっ!?

——僕の速さを凌駕していた。しかしその真骨頂は最高速ではなく、超加速に合った。

飯田君は多少は広いはずの室内を柱をすり抜けながらところ狭しと逃げ回る。僕はそれを天井や壁を走りながらトリツキーに追い回すも、彼は僕から目を離さずうまいタイミングで切り返しを行う、切り返しの度に減速する僕と停止から最高速までの加速のロスがほぼゼロに近い飯田君、部屋の窓ガラスがすべて割れるほどの超音速のスピード対決、しかしその差は埋まらないまま10秒の時間が過ぎた。

そうして僕らは入り口のあたりで立ち止まる。

「やったぞ!必殺技が通用した!どうだ緑谷君、僕の勝ちだ!」

興奮ぎみに僕に勝利宣言をする飯田君、口調が素に戻っているよ!

「いいや、飯田君!僕らの勝ちだ!!」

「なにをいって——」

「ヒーローチーム、WIIIIIIIIIN!!」

飯田君が言いかけたときに、無線から僕らの勝利を告げるオールマイトの声が聞こえる。

「なにー!?はっ!麗日君!?!いつのまに?」

飯田君が核の方へ振り返るとそこには、核の模型に抱きつき喜んでゐる麗日さんの姿があった。だがその顔色は悪い、随分と無理をさせてしまったようだ。

「どうして…」

「シンプルな話だよ、僕は囿で飯田君を引き付ける役、その間に麗日さんが上の階の窓から個性を使つてここまで侵入して核を確保したつてわけ。いやあ走り回りながら君を引き付けつつ窓ガラスを割るのは大変だったよ!」

僕はシヨックを受けている飯田君に矢継ぎ早に種明かしをする。でもマジで追い付かなかったのはナイシヨにしておく、悔しかったからね!

「麗日さん大丈夫? 無理をさせてごめんね…」

「大丈夫…! うち、役に立てたかな? デクさん?」

「勿論だよ! この勝利は麗日さんの頑張りのお陰さ、ありがとう!」

「よかつたあ、じゃあお互いにお疲れ様! いえーい!」

互いの健闘を称えてハイタッチする僕と麗日さん。自分を浮かせると気持ち悪くなつてしまうというのに…やっぱりええこや!

「ッさあ、講評の時間だ、みんな戻ってきたまえ!」

その無線を聞いて僕は部屋をあとにした——

——ビルの入り口まで戻るとそこにはかっちゃんが入っていた。

「ほらよ、これお前のだろ?」

かっちゃんが僕にマントを手渡してくる、さつき気絶させたときにかっちゃんにかけておいたものだ。

「あ、うん。かっちゃん保健室とか行かなくて大丈夫?火傷とかしてたよね?」

「こんぐらいなんともねーよ、大体ヒーローならこの程度の怪我でダウンしてられないだろうが。講評のやるんだろ、先いくぞ」

「あつ…待つてよかっちゃん!」

そう言うてかっちゃんはスタスタと先に歩いていつてしまう。なんだか元気がないようにみえる、無理して普通に振る舞ってみたいな……心配だ。

——講評が始まり、今回の MVP は麗日さんとなった。理由としては最後まで隠密行動で核を確保したから、次に核を意識した立ち回りをしてた飯田君、僕とかっちゃんは屋内戦闘としては派手に立ち回り過ぎて減点だった。

なお以上のことを言ったのは八百万さんだ、やっぱり彼女は頭がいい、流石推薦入試組だ。オールマイトは言いたいことを大体言われて少し困った顔をしていた、ドンマイです!

そして第二回戦が行われ、もうひとりの推薦入試組の轟くんがその力を見せつけた。

ビルごと凍らすって…なんだそりゃ！反則だろ!!前回のときは保健室送りだったから見れてなかったんだよね。

その後もみんなそれぞれの個性を上手に使って戦闘訓練を行っていた。そうして授業が終わった――

――放課後になり、切島君たちが生徒だけで反省会をしようとして提案してきた。前は途中参加だったけど、今回は最初から居られそうだ。

「おーい、爆豪！かえつちまうのかよ？」

「ああ、今日はもう帰るわ」

「そ、そうか、またな！」

「……………」

切島くんとかつちゃんが話をしている、どうやらかつちゃんはもう帰るようだ。

……………やはりなにかおかしい、いつものかつちゃんなら――

「おーい、爆豪！かえつちまうのかよ？」

「ああ!?!テメーらモブどもなんかと反省会なんてやってられつかよ!!」

「しっかり聞いてんじゃねえか!!しっかしあれだな、みんなは自分の弱点とか改善点と

か見つけれられるのに、爆豪は参加すら出来ないのかくそつかく

「んだとコリア!!反省くらい出来るわっ!!誰よりも反省するわっ!!」

———みたいな感じで参加するはずなんだけど、やっぱり気になる、話をしにいろいろ!

「切島くん!僕がかつちゃんを呼んでくるよ!」

「おお、緑谷!ダチのお前の誘いなら来てくれそうだな、頼んだ!」

「頼まれた!」

僕がかつちゃんを追うために教室を出た、随分とはや歩きだったようで、かつちゃんに追い付いたのは校門前だった。いつの日かと同じような光景だな…

「かつちゃん!どうして帰っちゃうの?みんなで自分の欠点とか弱点とか改善してさらに強くなる機会だっていうのに…もしかして訓練の怪我が痛むの!?!ごめん!じゃあ保健室に———」

「うっせえな!!…ほっとけよ、俺には意味ないからよ」

かつちゃんの怒鳴り声が僕の言葉を遮る。ちよつと待てなんだそれは、その言葉はまるで…

「意味ないってどういふこと……？」

僕はかっちゃんに尋ねる、その言葉の真意を。

「俺は、雄英を辞める……」

その言葉は僕の予想通りで、でも僕が一番聞きたくない言葉だった——

『ここから』

かつちゃんが言った衝撃の言葉、それはこの雄英高校からの退学だった。いったいどうしたんだよかつちゃん!?

——かつちゃんが雄英をやめる? ヒーローを諦める? 僕がかつちゃんを問い詰める。

「なんで!?! どうしてだよ、かつちゃん!!」

「どうして?…どうしてだ?! そんなの、お前に勝てなかったからに決まってるだろうが!!!」

僕の叫びにそれ以上の叫びで返すかつちゃん、僕は言葉が出なかった。

「それだけじゃねえ、あの氷のやつにも勝てないかもしれないねえって思っちゃった! ポニーテールの言うことにも納得しちまった!! ああくそが!!」

自身の思いを吐き出すかつちゃん、その顔は苦悶の色を浮かべていた。

「俺が…俺達だけが特別だと、そう思ってたのに! 周りの奴等と比べても俺は特別でも

なんでもなかった…!! せれどころかお前からしてみれば俺なんてただの端役だ!! なあ
デクウ!!」

「そんなっ…! 僕は——」

「昔つからそうだったんじゃねえのか? 俺はなにをやっても、何度挑んでもお前に勝て
なかつたじゃねえか!! お前にとつては俺なんて道端の石ころと変わらねえじゃねえか
!!!」

かっちゃんは言葉を続ける、そこに僕の入る余地はない。

「だから俺はそんな自分を認めたくなくて、本気の本気でお前に勝負を挑んだ。殺して
しまつてもおかしくない、それぐらい本気で戦つたんだ!! なのに…なのに俺はお前に傷
ひとつつけれなかつた! 俺の本気はなにひとつ通用しなかつた!!」

「俺はもう特別でいらねえ…お前の横に並び立つて歩けねえんだよ…だから——
」

「俺は、雄英をやめ——」

「ふざけたこといつてんじやないよ!!!」

かっちゃんの言葉を遮つたのは僕の叫びだった。

「自分は特別じやない? 僕に本気でやつても勝てないから諦めて雄英をやめる? さつき

から聞いてればなにを自分勝手なこといつてんだよ!!」

「みんな…みんな本気でやってるんだ! それでも挫折して、そして立ち上がって強くなるんだ!! なんてそんなこともわかんないんだよ! 自分の才能に胡座かいてた君の怠慢だろう、それは!!」

僕の叫びは止まらない。僕は溢れかえる感情をかつちゃんにぶつける。

「それに僕が君のことを見てないだつて? かつちゃんは僕のなにを見てきたんだよ! おい!!」

僕はかつちゃんの胸ぐらを掴んで話を続ける。

「かつちゃん、僕の目標がなにかわかるかい?」

「……オールマイイトみたいなヒーローに成ることだろ」

かつちゃんは僕の目を見ず、俯きながら答える。

「そうだ、でもそれは最大の目標だ! 僕がいつつも意識してる目標が別にあるんだ!!」

僕はかつちゃんを突き放し、指を指しながら叫ぶ。

「それは君だ! かつちゃんに勝つことこそが僕の一番身近な目標なんだよ!」

「はあ? なにを——」

「僕が当たり前のように君に勝ってきたと思っていたのか!?! そんなの君の勘違いだ! 僕はいつだつて…: そうどんな勝負の時でも本気だった! 君より何倍も勉強して、君より何

十倍も鍛練してきたんだ!!」

そうだ、僕は元々ダメダメな人間だった、やりなおし再履修をして、知識や経験があってもそれだけではかっちゃんに勝てないとわかっていた。だからこそこの10年間ずっと努力してきたのだ。

「それに今日の対決のことだつてそうだ!僕だつてずっと本気だったんだぞ!攻撃は当たらない、避けられない、だから必死で耐えた!勿論普通は耐えられない、けど耐えられるように対策だつてしたんだぞ!!」

「なんであのマントを僕がつけてたか知ってるか!?あれは耐火性に特化した特別製の、火災現場に飛び込めるくらいにね。でもそれはおまけでしかない!あれの本来の目的は君への対策さ!わかるか?かっちゃんの強力な爆破に対抗するためにあのマントを作つて貰ったんだよ!!」

僕の叫びにかっちゃんが反応する、そうしてこちらを見上げてくる。僕とかっちゃんと視線が交差する。

「お前は、俺を見てたのか…?」

「そんなの当たり前だろ!君には分からないだろうけど、僕はずっと昔から君の背中を追いかけてたんだよ。追い付きたくて、前に行きたくて、だからこそずっと頑張つてこれたんだ」

そう、僕は前世からずっとかつちゃんを追いかけていた、何度勝っても変わらずに…

「かつちゃんがいたから僕は強くなれたんだよ」

「俺が…いたから？デク…お前は、ずっと前から俺を認めてくれていたのか？」

そう尋ねるかつちゃんの頬には一筋の涙が流れていた。

「もちろんさ、だって僕たちは…友だちでライバルだろ？」

僕は笑顔で答える。

「なんだよ…俺がひとりですぐ勝手に期待して失望して…バカみてえだな」

かつちゃんが泣きながら笑う。

「さあ、もう一度聞くとよ？かつちゃんはたった一度本気を破られたからって諦めるのか
いっ」

「俺は…俺は諦めない！」

かつちゃんの目に希望の光が宿る。

「そうだ…俺はここからだ。俺はここから特別になってやる！」

「そうさかつちゃん、ここからさ！ここは雄英高校ヒーロー科、君が望むものは全部揃っているよ」

「ああ、俺はここからお前の一番側にいく、氷のやつにもポニーテールにも…誰にも負けないくらい強くなつてみせる！」

かつちゃんは力強く宣言をする。かつちゃんがようやく僕をみてくれた気がする。

「かつちゃん、僕はこの雄英で、そして将来はヒーローとして、一番上に立つよ。オールマイトを超えてね」

僕は自分を奮い立たせる、そのための目標を口にした。

「ああ、俺はその一番近くでお前を支えてやるよ。きつとそれは俺にしか出来ねえことだ！だから俺は…俺は!!——」

「——ヒーローに成りたい、そしてデクの最高の相棒サイドキックに成つてやるよ！」

かつちゃんがこちらに拳を向けてくる。

「ああ、約束だ！」

僕はかつちゃんと拳を合わせる。

「また約束増えちまつたな——」

「だね、いま何個目だっけ——」

「——個目だよ、忘れんなよ——」

「——ごめんごめん——」

——こうして僕らはようやくほんとの意味でお互いを認め合う友達になった。きつと僕とかつちゃんならどここまでもいけるだろう、そう思った。

——次の日の朝、インターホンが鳴ったので僕は玄関に向かう、そこいたのは——

「ようデク、わざわざ迎えに来たぞ。さっさと学校いくぞ！」

「かつちゃん!? どうして? いままでこんなこと無かったじゃないか!」

そこには気だるそうに立つかつちゃんが出た、僕は疑問を隠すことなく伝える。なんのドツキリだよこれ…

「お前の強さの秘訣を知ろうと思つてな…とりあえず学校では大体観察してるからな、よろしく！」

「えっ？えええええー！！」

かつちゃんがなにを言っているかいまいちよく分からない！てか誰だよこれ！僕の知ってるかつちゃんはどこへ……？

「ぼさつとしてんなよ！早く準備して来いよ、先いくからなあデクウ！！」

「勝手に来といて先にいくのか!?ちよつと待つてよー！！」

ああ、この理不尽さ…かつちゃんだわ！——

——こうして少しだけ前と変わった僕のヒーローアカデミアでの生活がここから始まるのだった。

第三章 騒乱のUSJ

委員長は眼鏡と三つ編みがいい

僕とかつちゃんの本音のぶつけ合いをして、お互いを認め合うことが出来た。新たな目標とともに僕らのヒーローアカデミアでの生活が再び始まった。

—— あの時期が迫っている：僕がどうしても避けたいあのイベントが：

どうすれば避けられるんだ？クラスのみんなに事前に伝えておくか？それとも相澤先生に言うか：うーん、どちらもあまりうまくいく気がしない：

どうすればいいのか、僕が頭を悩ませていると——

「学級委員長を決めてもらおう」

相澤先生のその言葉が聞こえてきた。ついに来てしまった：

「学校つばいの来たー！！！！」

クラス中が沸き立つ、そしてみんな思い思いの言葉で立候補をしていく。峰田くん：膝上30cmって、もうわかめちゃん状態じゃないか！峰田さんのエッチ！

そして飯田君の提案により、委員長決め投票が行われた。その結果は——

「えー、緑谷5票、八百万2票、その他は1票だ。よって委員長は緑谷、副委員長に八百万で決定だな」

僕は結局、前と変わらず委員長になってしまった。そして教壇の横に立たされる。僕はクラスを見渡し、満足げな顔をしている四人と滅茶苦茶落ち込んでいる一人を見つけた。

おそらく僕に投票したのは、かつちゃんと麗日さん、それに砂藤君と障子君、あとは飯田君だろう。

かつちゃんは「当然だな!」とか言ってるし、麗日さんもキラキラした目でこちらを見て……。砂藤君障子君、やったな! みたいな感じで親指を立てるんじゃない! っていうか飯田君はそんなに落ち込むくらいならなんで僕に投票したんだ!!!

はああ…やりたくないなあ委員長。僕が委員長に向いていないってことはもうわかりきってる。前世より明るく元気になったとはいえ、僕は基本的には筋肉とヒーローの話以外口下手なクソナードだ。それにときどき空気を読めない発言をするらしい、変なところまでオールマイイトに似てしまった!

「じゃあ委員長、なんか一言」

「えっ!? それじゃあ、えーと、その…: 沢山の投票ありがとう! これからも応援よろしくね!」

相澤先生に促されて僕が喋った。そして空気が死んだ——

なにをいってるとんだ僕は——!!!コミックの人気投票じゃないんだぞ!テンパリ過ぎだ!!

ダメだ、やっぱり委員長を飯田君に代わってもらおう。メガネだし。あのメガネは委員長をやるためにあると言っても過言ではないだろう…

「あの——」

「じゃあ次、八百万」

「副委員長の八百万ですわ——」

僕の言葉は届かず、八百万さんの挨拶が始まってしまった。そして挨拶が終わったあとはクラス中から拍手があった、僕するときにはなかったのに…!僕はそのあとの進行を八百万さんに任せて、置物と化していた。はやく辞めたい…そう思っているうちに気がついたら昼休みになっていた——

「やっぱり僕に委員長なんて務まらないよ…!」

「ツトマル」「やれるさ」「いけんだろ」

僕の言葉に麗日さん、飯田君、かっちゃん三人が返す。

「さっきのあれ見てたでしょ!?!僕はああいうの緊張しちゃってダメなんだよ!」

「緊張つて、そんな山盛りのご飯食べながら言われても説得力ないよ?」

麗日さんが僕のご飯の量に驚きながらつつこむ。体が大きくなつたからご飯は多くないとダメな人間になってしまったのだ、仕方あるまい。

「まあさっきのあれは滅茶苦茶滑つてたけどな!」

「——つぐは!」

かっちゃんグサリと心に刺さることを言う。僕だつて言いたくて言つたんじやないのに!

かっちゃんは先日の宣言通り、学校では大体一緒にいる。なにか秘訣を掴めたかはわからない。なので僕、飯田君、麗日さん、かっちゃんの四人でお昼を食べることが習慣になつていた。

「君はなぜわざわざ人が傷つくことをいうんだ!」

「ああ? 只の事実だろうが! それにデクは滑つた程度で傷つく玉じゃねえよ!!」

「——つあべし!!」

「滑つたという事実をわざわざ言う必要がないと言つているんだ! どれだけ滑り倒そうと、それは悪ではない!」

「——つひでぶ!!」

「二人ともやめたげてよ!! デクさんがいくら滑り倒しても私は友達でいるからね、安心

してねー！」

「——我が人生に、一片の悔い無し……」チーン

「デクサー……ん!!」「緑谷君……!!」「デク……!!」

——こんな感じで僕たちの日常は過ぎていく。

そんな会話をしていると、突然校内警報が鳴り響いた。セキュリティスリーが突破されたらしい、食堂にいる生徒たちはパニックを起こしながら、一斉に出口へと逃げ出す。

「ちくしょう！なんだってんだ!!」

「ああ、デクさんですら人波に吞まれていつちやう!!」

「I, l i l l e b a c k . . . !!」

僕は大丈夫というサインとして親指を立てながら人波に沈んでいく。僕が無理して耐えると周りの人が怪我しちゃうからね、仕方ないね。

「ああうざってえ！黙りやがれってんだあ!!」BOOOOM!!

かつちゃんの上に向かって爆破を放ち、その爆音に辺りが静まりかえる。その隙に飯田君が麗日さんと連携して、ドアの上に非常口マークみたいなポーズで張り付いていた。

「大丈夫ー夫!!ただのマスコミです!!慌てるようなことはありません!!落ち着いて避難

してください!!!」

騒動の正体がマスコミの侵入であると看破した飯田君が、みんなを落ち着かせたことによつて、この騒動は終結した。前世よりバタバタしてたけど、やったね飯田君!

——その後、僕はその活躍をきっかけに、無事に委員長を飯田君に押し付けることに成功した。

——それから数日後、僕は仮眠室でオールマイトと密談していた。

「今度行われる救助訓練、それにヴィランが乱入してきます。この間のマスコミ騒動はその予告みたいなものでしょう」

僕はオールマイトに進言する。僕とヴィランの初めての戦闘が行われた前世での救助訓練、あれは危険すぎる。

「なぜ君が救助訓練のことを!?!———そうか、前世での経験というやつかね?」

オールマイトは少し驚いたあと、神妙な面持ちで尋ねてくる。

「そうです、ヴィランとの戦闘が起こり、相澤先生と13号先生が重症を負い、生徒達もほぼ全員がヴィランとの戦闘になりました。奇跡的にも生徒達は自爆した僕以外無傷か軽傷で済みましたが、あまりにもリスクが過ぎます。得られるものは多かつたかもし

れないですが、一歩間違えば誰かが死んでいましたよ……」

僕は起こったこととその結果をかいつまんで話し、その危険性を説く。

「まさかそんなことが起こりうるとは……経験を積めるからといって、生徒達を危険に晒している理由などないな。やはり？——」

「ええ、中止または大幅な延期をするべきだと思います。僕がここに来たのはその事をオールマイトから相澤先生達に伝えてほしかつたからなんですよ！」

僕とオールマイトの意見が合致する。信じてくれて良かった、これで先生やみんなが傷つくことがなくなるだろう。

「そういうことなら私に任せたまえ!!相澤君にはバシイつと言っておくよ！」

「オールマイト!ありがとうございます!流石No.1ヒーローだ!!」

「H A H A H A!そうかそうか我が後継よ!なにせ私はNo.1だからね!」

「ですよねお師匠!ハツハツハ!」

「H A H A H A!——」

「ハ—ハツハツ!——」

——いま思えばあのときの僕らは順調すぎる学園生活に対してかなり調子にのっていた気がする。

——その晩のことだった、オールマイトから僕の携帯に連絡が入った。

「もしもし、オールマイト?」

「すまん、緑谷少年! 相澤君の説得に失敗してしまった!!」

「そっかーオールマイトは相澤先生の説得に失敗したのかー、まあオールマイトなら当然……つてなにー!? 失敗したただとおお!? オールマイトが!?

「どどどどど、どういうことですか!? オールマイト?!」

「いやそれがな——」

「相澤君、今度の救助訓練の件で話があるのだが」

「救助訓練? USJでのあれのことですか?」

「ああ、まずはこの間のマスコミ騒動、あれはヴィランが裏で手を引いてるのではないかと考えているのだよ。そこでだ、そのUSJでの訓練なのだ——」

「オールマイト、あなたも同じ意見でしたか。あれはきな臭い事件でしたからね。」

「おお! 気が合うね相澤君! つまりはそういうことだね?」

「ええ、ですから今度の救助訓練には念には念を入れて、オールマイトにも参加してもらおうと考えていたんですよ。まさかそちらから声がかかるとは——流石はNo. 1

ヒーローですね」

「エツ?」

「私に13号、そしてN.O. 1ヒーローオールマイト。並の侵入者なら余裕で返り討ち出来る布陣だ、これで問題ないでしょう」

「いや、私達は大丈夫でも生徒達が危険な目に遭うことも想定しなければならぬだろう?」

「生徒達の中には轟、爆豪などといった俺より火力のある者もいる、そしてなによりうちの最強生徒の緑谷がいるじゃないですか、貴方の弟子でしょう。俺よりよっぽどあいつの方が強い、ヴィランが束になっても負けないですよ」

「それは…そうかもしれないが…しかしヴィランの襲撃があるかもしれないし…」

「そこまで警戒しますか…じゃあこうしましょう。授業の時間をヴィランの活動が統計的に少ない午前中に変更するんです。うん、合理的だ」

「たしかにそれは合理的だ…」

「でしょう?それとも自分の弟子の力を信頼してないんですか?」

「そんなわけがないだろう!彼はほんとに強くなったのだから!!」

「そうですね、まあそこに念押しで貴方がいるんだから大丈夫でしょう。頼みましたよN.O. 1ヒーロー」

「うむ、任せておきたまえ！ H A H A H A !」

「——みたいな、感じになってしまっただけな！」

「なにやってんですか N o . 1 ヒーロー！ うっかり N o . 1 ですか! ? 頭の中までワンフォーオールになっちゃったんですか! ?」

僕はオールマイトに対して叫ぶ、それは心からの叫びだった。

「なかなかひどいこと言うなあ……まあ私達が居れば問題ないさ！ 君も強くなったしね！」

オールマイトが楽観的に言う。そういえばやつらがオールマイトを狙って来てるってことを言い忘れてた……！ 僕も脳ミソワンフォーオールかよ!!

このままだと救助訓練にヴィランが殴り込んできてしまう！ どうしよう! ……ほんとうでしょう——

遅刻は五分までならセーフ!?

相澤先生の説得に失敗したオールマイト、USJでの救助訓練は予定通り行われることになってしまった。確かに僕の説明も悪かったけど、流されちゃダメでしょうNO。1ヒーロー!

——救助訓練当日の朝を迎えた。あの電話の後、僕はオールマイトといまからでも出来る対策を考えて、準備を行った、やや力押しになってしまったが、たぶん大丈夫だろう。

僕は対策その1を実行するため自宅の最寄り駅とは違う駅前に来ていた。

「やあ、緑谷少年!おはよう!」

「おはようございます、オー……じゃなくて八木先生!」

そこにトウルーフフォームのオールマイトが現れ、僕らは挨拶を済ませます。この姿でオールマイトと呼ぶわけにはいかなないので本名の八木俊典さんとして扱おう。

いまからでも間に合う!ヴィラン強襲対策!その1

オールマイトに力を温存させよう!

というわけで、オールマイトがさまざまな事件を通勤がてら解決して活動制限時間を使いきってしまったように、僕と一緒に登校することにした。

「じゃあいきましようか、遅刻しないようにね！」

「ああいこう、まあこの時間なら余裕で間に合うがね！」

僕はオールマイトに声をかけて出発する、たしかにこの時間なら早めに学校につけるな。そう思ったとき――

「キヤー！誰かー！」

遠くから悲鳴が聞こえてきた、僕らはそちらの方へと向く。なにか事件が起こったよ
うだ…

「緑谷少年！」

「ええ、行きましよう！」

僕らはその声の方向へと迷わずに駆け出していった――

—— Mt. レディ side in ——

私達ヒーローはひとりのヴィランに苦戦を強いられていた。

「いいか！俺を追うんじゃねえぞヒーローども!!追ってきたらこの裕福な家族をぶっ壊してやるからな！」

三メートルはあろうかという巨体を揺らしてヴィランが叫ぶ。

連続強盗殺人犯「僧帽ヘッドギア」、その筋肉による怪力と高い防御力、そして家族を人質にとる姑息さ、凶悪なヴィランね!!

「——強い上に姑息!」

お得意の樹木による拘束をあつさり引きちぎられブツ飛ばされたシンリンカムイが分かりきったことを言う。役に立たないわね…

「わざわざ分かりきったこと言わなくていいわよ!」

シンリンカムイに思ったことを言ってしまう。巨大化してしまえばこんなヴィラン一蹴できるのだが…

「助けてヒーロー!!」 「せめて子供だけでも!」

人質をとられているためそれは出来ない、かくいう私も防戦一方だ。

このままではマズイ… いったいどうすればいいの——
「もう大丈夫!」

少し離れたところに人影が現れ、そう叫ぶ。次の瞬間にはその人はヴィランの真後ろに迫っていた。

「ミズーリ・スマツシュ!!」

「デクくん!!」「デクか!!」

私とシンリンカムイの声が被る。デクくんはヴィランを一撃で倒す、そしてその傍らには人質を救いだしたオールマイルトがいた。

「通勤がてら私達が出来た!」

人質を解放したオールマイルトがそう宣言する。相変わらず暑苦しいわ!

「デクくん、来てくれたのね——」

「お前はっ! そんなに鍛えた筋肉で悪さをしてっ! 恥ずかしくないのかっ! その発達した僧帽筋が泣いてるぞっ!!」

デクくんは声をかけようと見てみるとそこには、ヴィランに馬乗りになってピンタをしているデクくんの姿があった。

「遅刻するとヤバイ、いくぞ緑谷少年!」

「——ハッ! はい、オールマイルト! 今行きます! : それとお前! またその筋肉を使って悪さをするなら何度でも僕が駆けつけるからな! 覚えておけ!!」

デクくんはフラフラのヴィランにそう言うって立ち去ろうとする。声をかけなきや!

「あの! デクくん!」

「Mt. レディ、大丈夫でしたか? 僕らはもういかなきやいけないのであとは任せます

! それじゃ!」

デクくんが笑顔を見せながら少し早口で話す。急いでるみたいなのにすっかり私を心配してくれる、やっぱりデクくんは優しいなあ。

「任されたわ！またねデクくん！」

私はデクくんに笑顔で返す。その後デクくんとオールマイトは飛び立っていった。

「嵐のようだったな、まあ相変わらずだが。しかしこれでは我々が廃業してしまう…」

シンリンカムイがしみじみと言う。

「なにみみつきいことってんのよ、その分頑張ればいいだけじゃない！」

私は彼に教えてもらったことを忘れない。また会えるかなあ…それまで立派なヒーローとして頑張ろうと——

—— Mt. レディ side out ——

—— 結局その朝僕らはひき逃げや立てこもりなど合計六件の事件を立て続けに解決した。おかげでオールマイトの活動時間は一時間ほどしか残らなかったが、まあ対策その1はある程度成功かな？

——だが、それと同時に僕とオールマイトの遅刻が確定したのだった。

——爆豪 side in ——

俺は救助訓練の会場である少し離れたところに向かうためのバスに揺られていた。デクのやつはどうやら遅刻してくるらしい、よってかなり退屈だ。

「しっかし緑谷が遅刻とか初じゃね？しかも救助訓練の日にとかやつぱ持つてるわ〜どうやってくんだろ？」

金髪のチャラ男のアホ面、上鳴がそう言った。お前はたまに遅刻してくるけどな、ヒーローは遅れてやってくる！って自信満々に言うことじゃねえからな。

デクの遅刻は高校入ってから初めてだな：ほんとに珍しいな。

「走ってくるんじゃないか？オールマイトみたいに規格外の男だしな」

角のような髪型をしたクソ髪、切島が返す。その髪型は規格通りなのか？

デクはいずれオールマイトすら超えてほんもんの規格外になるんだ、そう思うのは当然だろうな。

「オールマイトと緑谷ちゃんってほんとに良く似てるわよね」

蛙女、蛙吹がデクについて語る。お前は蛙に良く似てる。

デクはオールマイトを目指してるからな、しかし確かに似すぎだ。どういう関係なん

だ?あの身のこなしと技、そしてあの考え方を妥当に考えるなら弟子か、流派が同じな兄弟子つったところだろうな。

「もしかして、オールマイトの隠し子かなんかじゃないのか?」

水の半分野郎、轟が思いもよらない予想を立てた。お前は頭の中身も半分しか入ってねえのか!

「隠し子?それあるー!!」

黒目の女、芦戸が半分野郎に賛同する。ねえよ!蟻なのはてめえだろ!

それを皮切りに周りが一気にざわつき始める。アホか、アホなのかこいつらは?

「ねえよ!アホかてめえら!!」

そんな考えがいついっぴ口にでちまった。周りの視線が一斉に俺に集まる。

「爆豪、確か緑谷と幼なじみだったよな。そのへんどうなんだ?」

地味目のしょうゆ顔のやつ、セロハンだったか?そいつが俺に聞いてきた。

「ああ!デクの両親は健在だし、あいつの癖毛とそばかすは父親似で髪色と顔立ちは間違いない母親似だ。オールマイトの隠し子だなんてことはぜってえーにねえ!あつたとしたら俺に必ず言ってるはずだつーの!!」

俺は事実だけを教えてやった、あるわけねえんだそんなことはよお!

「爆豪君はデクさんのことほんと詳しいよね」

「あたりまえだろ、丸顔オ！」

「あー！また丸顔っていったー！女子に対して丸いとかひどくない!?——」

「うっせえ！事実だろうが!——」

「君はまた！事実だからといって——」

その後はなぜか俺が話題の中心になっていた、めんどくせえ。…まあ退屈はしなかったけどな。

——救助訓練の会場につくと、スペースヒーロー13号が待っていた、そして小言を言われた。この個性ちからが人を殺せることぐらいわかってるっの。あとこの施設はU S Jと言うらしい、アホくせえな！

俺の個性は救助に向いていない、それは自分がよくわかっていることだ。だから俺は敵を倒す、そうして他のやつが救えばそれでいい。そんなことを考えている時に異変は起こった。

広場の方に黒いモヤが見えた、そしてそこから大勢の人影が現れる。

「ひとかたまりになって、その場から動くな！13号！生徒を守れ！あれはヴィランだ!!」

相澤がそう叫ぶ。ヴィラン？俺らの敵、なぜここに!?——まあいい、ぶっ飛ばして

やるぜ!

そう思っている間に相澤は飛び出して、大勢のヴィランと戦っていた。流石はプロヒーロー、行動が早え。周りの連中は外部に連絡を試しているがダメそうだな…これは戦うしかねえ…そんなじゃ俺も——

「初めまして、我々はヴィラン連合。僭越ながらこの度、ヒーローの巣窟雄英高校に入らせていただきましたのは、平和の象徴オールマイトに死んで頂こうと思つてのことでありま——」

「話がなげえんだよ!!くそがつ!!」 BOOOOOOM!!

いきなり現れて長々と話す黒モヤ野郎に、俺は遠距離からデカめの爆破をくらわせる。

「危ない危ない……まだ話している途中だというのに…生徒といえど優秀な金のたま——」

「アホなのかてめえ!!」 BOOM!BOOM!!

さらに話している途中に爆破を放ってみる、効果はどうだ!?

「最近の子どもは堪え性がいいですね…さっさと役目を果たしましょう」

そう言う奴は俺に向かって黒もやを飛ばしてきた。

「オラア!!」 BOOM!!

俺はモヤを爆破で吹き飛ばす、やはり効果がありそうだ。

「やっぱりそいつは俺の爆破で対応出来るなあ！」BOOM!

「ダメなのは風か？」BOOM!

「それとも熱か！」BOOM!

俺は爆破でモヤを飛ばしながら奴に近付いていく。

「そういやあさつき危ないとか言つてやがった！なあ!!」BOOM!BOOM!!

話ながらも着実に近付く。

「無敵くせえが弱点みたいなのがありそうだなあおい!!」BBBBBOOOOOM!!!

さらに爆破でモヤを風ぎ払いながら進んでいく、あと一歩だ!!

「その金属プレートが！怪しいなあ！ああ!？」BOOM!BOOM!BOOM!!

「戦いながらベラベラとっ!!」

「俺は出来るからいいんだよ！おらチェックメイトだ!!」

黒モヤがなにかいつてきたが関係ない、そうしてついにプレートに手が触れる――

「なにつ!？」

――と想つた瞬間手応えがなくなる。奴は俺の後ろの離れたところに移動していた。自分も素早く消せるのか！くそがつ!!

「厄介ですね、先にお友だちをやるとしますかね…」

奴はクラスの連中に標的を定め、モヤを伸ばしていた。なにぼさつとしてやがんだよアホどもが!!

「させるかよおおお!!」 BOOM!! BOOOOOOM!!!

俺は特大の爆破でそのモヤを吹き飛ばす、しかしそれが仇となった——

「しまっ——」

俺は真後ろに伸びていたモヤに飲み込まれていく。

「くそがああああ!!」 BBBBBOOM!!

爆破で脱出を試みるも、飲み込む速度の方が速い。少しずつ体が飲まれていく。

「ああ!! てめえーてめえは俺が必ずぶつ潰す!! 必ずだ!!!」——「BBBBBBBBB——

俺は爆破で抵抗しながら、黒モヤに宣戦布告する。視界の端に走り去るメガネが見えたが今の俺にはどうでも良かった。

——そして俺は完全にモヤに飲み込まれた

「まずはひとり……」

—— 爆豪 side out ——

アオイカジツ

朝早くから余裕をもって出発するも、道中で事件を立て続けに解決してしまい、救助訓練への遅刻が確定してしまった僕とオールマイト。みんなが危ないかもしれない、急がなきゃ!!

「まずいぞ、このままだと遅刻が確定してしまう、なにか方法は———そうか、これなら!」

「オールマイト!このまま電車で向かうとなると遅刻確定です!」
「なんだと!?!ならばタクシーを使うか?」

僕の言葉にオールマイトが問いかけてくる。

「僕に考えがあるんです、まずはトウルーフオームに戻ってください!」

「そうか、なら試そうではないか!」

そう言ってオールマイトがボフッと煙をたててトウルーフオームになる。

「ありがとうございます、じゃあちよつと失礼して——つと!」

「ぬわぁー!!緑谷少年!？」

僕はオールマイトを肩に担ぎ上げる。

「このまま全力でショートカットしながら走ります!そうすれば授業に間に合います!!」

僕はオールマイトにそう告げて走り出す、その速度は並の車より速い、そして最短距離をいける。名案だ!やはり持つべきものは筋肉だな!

「うおおおおおー!!」

「ぬわぁぁぁぁぁー!!」

僕とオールマイトの声だけが街にこだましていった――

―― 爆豪 side in ――

「くそがああ!!」

俺はモヤに飲み込まれたあと、すぐに吐き出された。着地して直ぐに周りから視線を感じた。俺はすぐに体勢を整え辺りを見渡す。

「お、出てきた……なんだひとりかよ」

「ゲートから爆発が出てきたときは焦ったけど、こいつが原因だな」

「おい、ベラベラと喋るな。さっさと片付けるぞ」

そこにはヴィランが待ち構えていた、俺を囲むようにして喋り出す。ざっと10人はいそうだな…少し数が多い、やりづれえな。

「ああ!?!誰が!」BOOM!

俺はやつらが動き出すまえに、爆破の牽制攻撃を仕掛ける。

「誰を片付けるってえ!?!」BOOM!!BOOM!!

そして一気に近付いて続けざまに二発の爆破を放つ。

ちいつ!ひとり避けられたか!!だがこれで残り8い!!!

「このクソガキ!」

「死ねええ!!」

「当たるかよ!」BOOM!!

やつらのうち二人が同時に攻撃を仕掛けてくる、俺はそれを躲し爆破を放つ。だが浅い、戦闘不能には追い込めなかった。

「トドメだ——つとお!?!つぶねえ!!」BOO——

追撃に移ろうとした瞬間に別の奴から遠距離攻撃がくる、なんとか躲せた!

この人数差、一撃だけでももらってしまおうと立て続けにくらって動けなくなるか?な
らいまは回避に専念して状況の打破を——

俺はヴィランの猛攻をすべて避けながら辺りを観察する。ここは倒壊ゾーンの廃ビルの中のようなだ、わざわざピンポイントでこの部屋に送られたのだ、おそらく敵はほぼ全員この一室にいるだろう。

——よし見つけた！反撃開始だ、もうおしまいにしてやるよお!!!

「オラア！オラア！オラア！」BOOM！BOOM！BOOM！

「どこに撃つてんだよ、下手くそが！」

「ヒヤハハ！あいつ疲れてやがるぜ！」

俺は狙いを定めて爆破を撒き散らす。あとはあれだけだな、いけるはずだ…！

「じゃあくそどもっ!!運がよけりやあいいな!!」BOOOOOOM!!!

俺は大爆破を放ちながら、勢いに身体を乗せて窓から飛び出す。

「アホか、追われることとか着地とか考えてねえのか!!」

ヴィランがなにやら俺に向かって叫ぶ、まああいつもここまでだな——

次の瞬間には廃ビルの一室が潰れてなくなつた、俺が柱を爆破して回つたからである。かなり上層階だったようで、ビル自体は倒壊を免れたが奴らは全滅だろう。まあヴィランなんてのはしぶとい生き物だし死んじやいねえだろ！

「二丁上がりい…！」BBBBBOOM!…

俺は爆破を放ちながら着地する。ここにもう用はない、あの黒モヤをぶっ飛ばしに行こう。

そうして俺は広場の方へと爆破を放ちながら駆け出した――

―― 爆豪 side out ――

僕は走りながら前世での今回の事件のことを思い出していた。

確か僕と先生達以外はわりと無傷で終わってたってことは、相澤先生がやられるまえにU S Jにつけば、ほぼセーフといったところになるのか。先生達は生徒を守るために矢面に立って戦っていたからやられたわけだし、僕は戦闘で自爆しただけだ。峰田君と蛙吹さんがいなければあのときはダメだっただろうな。

――ん？ちよつと待てよ。前世で僕と一緒に峰田君と蛙吹さんはギリギリである状況を退けた、そしてその僕は今ここにいます。つまり……つまり!!――

「峰田君と蛙吹さんが危ない!!急ぎましょうオールマイト!」

「どうした急に……!ギリギリで間に合うのでないのか!」

「状況が変わりました、消耗覚悟で急ぎます!喋っていると舌を噛みますよ!!!」

88%フルカウル――!全身に今までより大量のチカラがみなぎる。

そうしてビルの上を跳び跳ねながら一気に雄英を目指す。遠くの方にはすでに校舎が見えていた――

―― 峰田 side in ―――

オイラたちは黒モヤのヴィランの個性で水難ゾーンに飛ばされてしまった、そしていま敵に囲まれた船の上にいる。オイラたちってのは――

「本当にまずい状況になったわね峰田ちゃん」

先程水の中からオイラを救助してくれた蛙吹だ、蛙のくせになかなかおっぱいがあった、しかし今のオイラにそれを楽しむ余裕はなかった。

「まずいってレベルじゃねーよ！ オールマイトを殺せる連中に囲まれてんだぞ!! しんじまうよお…」

「だからこそこどうするか考えなくちゃいけないじゃない?」

「でもよおー! 無理だつてえ!!」

オイラたちはさつきからこんな会話を繰り返していた。オールマイトを殺す算段がある奴らになぶり殺し宣言されたんだぜ! 生きて帰れねえよ!! ああせめてヤオロッパイにひとタツチしたかった――

「うわああああ!!」

船底から強い衝撃が走る、そうして船が沈み始めた。ヤバイよこれ!しんじまう!

「……うん、決めたわ。峰田ちゃん、今からあなたを私の舌を使って岸边まで投げるわ。陸地についたらそのまま走って応援を呼んできてちょうだい」

「えっ?お前何を——」

「私はそれまでここで持ちこたえてみせるわ。それじゃあ!頼んだわよ!!——」

「うわああああああ——!!」

蛙吹がどんと話を進めていき、ついにオイラを掴んで勝手に岸までぶん投げた。

「ぐええ!!——蛙吹のやつ無茶しやがる……!」

オイラは地面に身体を打ち付けて着地する、蛙吹に悪態つくが、船の沈んだ辺りで水柱が上がっているのが見えた。

蛙吹が頑張ってる!オイラも急いで応援を呼びに行こう!——

走りながら辺りを見渡す、どうやら暴風大雨ゾーンのドームの外側に近いようだ、遠目にセントラル広場が見える。

しかし助かったぜ、このまま応援を呼べばオイラたちはなんとか助かるな!——

——さてよ、助かる?応援??——応援って誰を呼べばいいんだ!?大雨ゾーンに誰

がいるのかもわからない、セントラル広場では相澤先生がひとりでヴィランを相手している、こつちこれるわけじゃないじゃないか!!

助かるって、助かったのはオイラだけじゃないか……オイラが怯えて喚いていたから蛙吹はオイラを助けてくれたんじゃないのか?まるでヒーローみたいに……!

それじゃあ蛙吹はどうなっちゃうんだよ!!

オイラは来た道に戻って水辺に向かった。そこには静かな水辺にだけがあつた、先程のような激しい戦闘の様子はない。

突然、水飛沫が上がった。オイラは慌てて近くの茂みに隠れる。

「いやー手こずったぜ、何人やられた?」

「二人かな」

「いや、三人だ」

気絶した仲間を抱えたヴィランが岸に上がってきた、さらにザバツという音と共に次々と出てくる。何人いるんだよ……!というか蛙吹はどうなったんだ……!

「さてこいつ、どうしてくれようか」

そして蛙吹を抱えたヴィランが上がってきた、岸に投げ出された蛙吹は小さな唸り声をあげながら動かない。

やられちゃまったのか!?蛙吹、オイラを助けるために……すまねえ、すまねえ……でも敵も

あんなに大勢いるし、オイラの個性は戦闘向きじゃねえし…どうしようもねえじゃねえか!!

ついこの間まで中学生だったガキのオイラになにが出来るとんだよ!!ちくしょう…すまねえ蛙吹、オイラここで隠れることしか——

「折角捕らえたJKだぜ、殺すまえにちよつとぐらいお楽しみしてもいいだろう?フヒヒ」

「シャハハ!ちげえねえ!散々やられたんだ、御返ししてやろうぜえ…」

ヴィラン達の下衆な会話が聞こえた、その瞬間頭のなかが真っ白になり、オイラは気がつけば茂みから飛び出していた。

「やめろおお!!」

オイラは精一杯叫ぶ、その声は震えていた。

「てめえ!さっきのチビじやねえか!そんなとこに隠れてたのか!」

「何しにわざわざ出てきた?声も体も震えまくってるじゃねえか!シャハハ!」

ヴィラン達がオイラを見ながら小バカにしてくる。

「女の子はなあ…女の子はなあ!たくさんの喜びがまったオイラの宝物なんだよおおお!!——」

自分に何ができるかもわからない、いやなにもできやしないだろう、それでもオイラ

は心の叫びを口にしていく。

「いいか下衆ども！女の子の胸には夢がつまつてんだよ！そのお尻には希望が溢れてるんだよ！その笑顔からは無限の勇気が湧き出てくんだよ！！」

「それをお前らみたいな下衆どもが好き勝手していい訳がない！！そんなのオイラが絶対に許さない！！」

そうだ、オイラは女の子にモテたくてヒーローを目指してるんだ……世界中の女の子を守るようなヒーローに成りたいんだ！！

「なんだこいつ？恐怖でとちくるちまつたか？」

「欲まみれじゃねえか！それでもヒーロー志望なのか？シャハハ！」

ヴィラン達がオイラを嘲笑う、笑えばいいさ！それでもオイラは——

「オイラは女の子を守るんだ！！うわあああ！！」

オイラは自らの個性のブヨブヨを手当たり次第投げまくる。

「うお?!なんだ!」

「うげっ!くつついた!なんだこれとれねえじゃねえか!!」

何発かは命中したが、ほとんど避けられてしまった。

「てめえ!なにしゃがんだ!オラア!」

「おい、バカまだどんな個性か——」

「——つぐへえ!!!」

オイラは怒ったヴィランに蹴飛ばされて、地面を転がる。ちくしよう、いてえ…

「なんだこいつう！全然大したことねえじゃねえか!!」

「杞憂だったか、ならば！とうつ!!」

転がっているところをさらに蹴飛ばされる。

「まだだ…！オイラが守るんだ…！！」

身体中が痛い、辛い、苦しい。でもオイラは立ち上がる、守りたいから!!

「なんだよこの雑魚はよお!!」

「サンドバッグにしてやるぜえ！シャハハ！」

また蹴飛ばされて転がる。でも立ち上がる。再び蹴飛ばされる、それでも立ち上がる。

——そんなことを繰り返し続けた

「…まもる……おいらが……まも——」

「いい加減しつげえんだよ！ぶつ倒れる雑魚!!」

助走をつけたヴィランの蹴りが腹に突き刺さり、オイラの体は大きく地面を跳ね、倒れている蛙吹の近くに転がる。

左手の感覚がない、右まぶたは腫れ上がり目が開けられない、鼻血がとまらねえ、視界が霞む。全身がもうズタボロだ……もう流石に立ち上がれない……限界だ——

「すまねえ、蛙吹……おいらは……もう……」

傷だらけの蛙吹を見つめて、自分の力のなさにうちひしがれた。そのとき蛙吹が目が開き、お互いの視線が合う。

「……みね……ちゃん……にげ……」

蛙吹は自身が動けないにも関わらず、オイラに逃げろと言ってきた。オイラの中でなにかが切れる感じがした——

——左がダメなら右がある！開けられる目を見開け！動かない身体を無理矢理にでも動かすんだよ!!限界を超えろ！超えろ！超えろおお!!ここで立てなきやいつ立つんだ！オイラはまだ……立ち上がれる!!

「ああああああ!!」

オイラは足を引きずり、左手をたらしながらも、右目を大きく開け、叫びながら立ち上がった。

「蛙吹には……もう指一本触れさせねえ!!オイラが相手だ！来いヴィランども!!オイラはまだ死んでないぞ!!」

ボロボロになった右手で指を指しながら叫ぶ。オイラは絶対に諦めない、だってオイ

ラは女の子を守るヒーローになるんだから。

「その死に体でそこまで吠えるか…根性だけは認めてやろう。だが時間をかけすぎた、そろそろ死んでもらおう」

リーダー格のヴィランがそう言う。たしかこいつは船を沈めた奴だ、その力がオイラに向けられ高まつていく。

「オイラは…蛙吹を守るんだ、死んでやれないぞ…」

蛙吹を庇うようにオイラは立ちはだかる。

「そうか……では死ぬ」

奴の力が高まりきった、おそらくあれをくらえばオイラは死ぬ。だが不思議と怖くはなかった、蛙吹を守ると思えば思うほど心の底から暖かいものが溢れてくる、最期の気持ちとしては…悪くないかな——

——ヴィランの一撃が放たれようとしたその瞬間に鉄板をハンマーで叩いたような甲高く大きな音がUSJ中に響いた。

「なにが起きた!?!——うおっ!?!」

驚いたことで奴の力が消える、そのとき大きななにかが水面へと飛んできて特大の水

柱が上がった。

「いったいなんだ!?——またかつ!」

続いてオイラたちとヴィラン達の間になにかが降ってきた。

「もう大丈夫!」

——それはオイラたちにとっての希望…

「僕が来た!!」

——ヴィランどもにとっては絶望…

「助けに来たよ、峰田君!蛙吹さん!」

——ヒロ緑谷出久ロウの登場だった。

|
峰田s
i
d
eo
u
t
|

騒乱の終わりに

僕は遅刻を回避するために全力で走って救助訓練に向かった。しかしヴィランの襲撃は始まってしまい、みんながピンチに！僕らは急いで救助に向かった。もう大丈夫！助けに来たよ、峰田君！蛙吹さん！

——峰田君の元へたどり着く少し前へ記憶を遡ろう。

「雄英につきます！そろそろ下ろしますよ、オールマイト！」

「……」

雄英がすぐ近くに見えてきた、マッスルフォームに戻ってもらうため、僕はオールマイトに声をかける。しかしオールマイトはぐったりして反応がない。

「オールマイト!!」

僕は少し大きな声で叫ぶ。

「——ッハッ!! 気絶していたようだ…速すぎるよ…緑谷少年!」

「すみません、急いでいたもので…もうつきますよ!」

「了解だ、自分で着地するから適当に投げてください」

オールマイトが気絶から回復し、僕に要求してくる。僕はそれにしたがって、学校とUSJの間の道に向かってオールマイトを投げる。

「よおつと!!——」「よいしょ!——」

二人同時に慣性で滑りながら着地する。滑り終えて前を向いてみるとそこには驚きながら息を切らせている飯田君がいた。

「オールマイト!?それに緑谷君!!」

「やあ、飯田しようね——」

「飯田君!?君がここにいてことはもうヴィランが!?!」

オールマイトの言葉を遮って、驚く飯田君に尋ねる。

「そうなんだ!ヴィランが現れてみんな散り散りに……僕は助けを呼びに走っていたんだ!!」

飯田君が血相を変えて説明してくれる。少し間に合わなかった……!急がなきゃ、特に二人が危ない!!

「オールマイト!対策その2をお願いします!僕はこのままその3に移ります!!」

「了解だ!緑谷少年!先にいきたまえ!!すぐに行く!」

「では広場前で合流しましょう!!」

僕はオールマイトに作戦開始を告げるとそのまま飛び立った。

「なんで今来たところなのにヴィランのことを……う？」

——USJの巨大の扉の前に着地した、僕は力任せに扉を殴って歪ませる。バンツという音が辺りに響いた。

「スマアアツシュ!!」

僕は扉を思い切り蹴りあげる、さっきのパンチは警告だ。まるで金属同士がぶつかるような音をたてて、巨大な扉が弧を描いてブツ飛んでいく。

「きゃあーなに!?!」

麗日さんの驚く声が聞こえる、中を見ると13号先生が黒モヤのヴィラン、黒霧にやられそうになっていた。ヤバい!先生を助けなきゃ!

「つんしょ!スマアアツシュ!!」

僕は余っていたもう一枚の扉を引きちぎって黒霧に投げつける。これが正しい投げスマツシュの使い方だ!

ぶん投げられた扉は黒霧に当たったかに見えたが、やつはワープゲートを使って姿を

消していた。扉はそのまま飛んでいき広場の方へ、そうして今まさに相澤先生に掴みかかろうしていた脳ミソ剥き出しのヴィラン脳無に直撃した。あの程度でやられてくれるとは思わないけど、暫くは動けないだろう！相澤先生もこれで大丈夫だ！

「デクさん！」

麗日さんが声をかけてきた。不安だったのだろう、目が潤んでいる。

「待たせてごめんね！すぐに応援が来るからみんな避難するんだ！」

僕はその場にいたクラスメイトに指示を出す。「いまからでも間に合う！ヴィラン襲撃対策その2、スナイプ先生達に警戒状態で待機してもらおう！」が発動中なのだ、応援はすぐに来るだろう。

「でも、デクさんは!？」

「僕は他のみんなを助けに行く！それじゃあまた後で!!」

僕はそう告げて一気に跳躍する、峰田君と蛙吹さんがいる水難ゾーンに急がなきゃ!!

最初に蹴りあげた扉が着水したあとに、僕は峰田君の前に着地した。

「もう大丈夫！僕が来た！助けに来たよ、峰田君、蛙吹さん！」

僕は笑顔でふたりに語りかける、

「…緑谷…すまねえ…オイラ蛙吹のこと守れなかったよ…」

血塗れで全身ボロボロの峰田君が僕に謝ってくる。左手は折れていて、足もガタガタだ…眼も虚ろでしつかりと見えていないだろう。すごいよ、峰田君、そんなになつてまで…

「そんなことはない！君はボロボロになつても立ち上がり続けて、蛙吹さんを守ろうとしたんだろ？——」

ボロボロの峰田君に傷だらけの蛙吹さん——僕は大体のことを察して、峰田君に声をかける。

「——だから君はもう、立派なヒーローさ!!」

そうさ！誰かのために立ち上がり続ける者、それをヒーローと呼ばずしてなんと呼ぶのか！峰田君は蛙吹さんにとってのヒーローに成つたに違いない！

「…ありがとう…緑谷…あとは頼んだぜ——」

そう言つて峰田君は氣を失つた。任せられたよ、ヒーロー。

「さて、お前ら覚悟しろ！峰田君が託した意思は僕が果たす！」

僕はそう言つてヴィランたちへと振り返る。そこにいたはずの大勢のヴィランは、ひとりを残して水場へと逃げ込んでいた。

「俺らのフィールドでなぶり殺してやる。これるものなら来てみるんだな！」
「素晴らしい残して水へと飛び込んでいった。」

「自分達が有利な状況でしか戦わないか……卑怯な奴らめっ!!」

僕は峰田君と蛙吹さんを背にして、岸辺に立った。

峰田君や蛙吹さんはどれだけ不利でも逃げたりしなかった!!諦めなかった!

そんな彼らをなぶった奴らに沸々と怒りがこみ上げてきた!そうして僕の拳に力が籠る。

「二人の思いをおお!!この拳に乗せてええええ!!」

僕は叫びながら思い切り拳を引く!僕のチカラと二人の思いが拳へと集まり――

「90%オオ!――デラウエア・スマアアアツシュツ!!」

限界を超えた力を拳に宿し、振り抜いた。その拳は水面を叩き、衝撃が水場全体に伝わっていく、そしてその力の奔流は水中を轟めく――次の瞬間、水難ゾーンの水場すべてが弾けて上へと吹き飛んだ。

――そして、屋内であるはずのUSJに雨が降り注いだ。

降り注ぐ雨のなかにヴィランの姿が点々と見える、無事に一掃できた。奴らはしぶとい、この程度では死なないだろう。さあ先を急ごう!

僕は峰田君と蛙吹さんを抱えてセントラル広場へと向かった——

——広場に着くとそこでは既にオールマイトが到着しており、脳無と激しい戦闘を繰り広げていた。かつちゃんも轟君がオールマイトの援護をしており、手を身体中に着けたヴィラン、死柄木と黒霧が脳無を援護している。切鳴君は相澤先生を抱えて下がっていた。

状況はわかった！僕も参戦しよう！！まずは——

「かつちゃん！轟君！助けに来たよ！早速で悪いんだけど峰田君と蛙吹さんを連れて下がって！！」

僕は素早くかつちゃんと轟君の後ろへ移動して指示を出す。

「緑谷!?なんだそりゃ、見てわかんたる戦闘中だ。下がれねえぞ」

「デクウ！おっせーよ！わかりがクソモヤは俺の獲物だ、やれねえぞ！」

二人が思い思いの言葉で拒否してくる、いまは説得する時間も惜しいってのに！

「いいから下がってくれ！君らがいるとオールマイトも僕も本気が出せないだろう！」

僕は低い声をだして二人を下がらせようとする。

「ちっ！下がるぞ半分野郎！おいデク、クソモヤは残しておけよ……！」

かつちゃんは事情を把握して蛙吹さんを僕から受け取り下がろうとする。いいぞ、

かっちゃん！

「はあ？ お前なにいつて——」

「スマアアツシュ!!」

僕は空いたばかりの右腕を振って、迫り来ていたモヤを吹き飛ばす暴風を生み出す。

「こういうことさ、巻き込んでしまおうし、庇いきれないかもしれない！」

「わかった……！ 峰田貸せ、あとは任せたぞ……」

納得してくれた轟君に峰田君を託し、前に出る。

「オールマイト！ お待たせしました！」

「来たか、緑谷少年！ こいつら君の話よりも手強いぞ!!」

僕は高速でオールマイトに近づいて、脳無に一撃をくらわせる。その移動と攻撃の余波で死柄木と黒霧は吹き飛ばされそうになり、身動きがとれなくなっていた。

「なんなんだよあの筋肉ダルマの化物は！ コンテニユーからの逆転勝利だと思つてたのにさあ!! おい脳無、こいつらをさっさと殺せよ!!!」

死柄木が痙攣を起こして喚き散らす。相変わらず大人の癖に子供っぽい奴だな。

「このまま一気にケリをつけます！ いきますよ、オールマイト!!」

僕はオールマイトにそう告げて、脳無にタックルをかまして吹き飛ばす。脳無が地面に転がる、僕はその上を飛び越えて腰だめに拳を構えた。そして脳無が立ち上がろうと

する、だがこれで終わりにする！

「スマアアツシュ！」

僕は拳を放ち、脳無の腹を真っ直ぐと打ち抜く。脳無はショックを吸収しきれずそのまま吹き飛ぶ、その先にいたのは――

「いくぞー！SMASH!!!」

脳無を待ち構えていたオールマイトが、飛んできた脳無を殴り付け僕の方へと吹き飛ばす。脳無の顔が大きく歪んでいる、しかしその個性によつて再生を始めていた。だが遅い！

「もういつちよ、スマアアツシュ!!!」

僕は飛んできた脳無を殴り抜き、オールマイトの方へと返す。次は脳無の身体が歪み始めた、再生を始めているが――もう逃がさない。

「SMASH!!!」

「スマアアツシュ!!!」

脳無が僕らの間で跳ね返り続ける、そして段々とその間隔は短くなっていく！

振るわれる拳、吹き飛ぶ脳無、それにより巻き起こる激しい風と衝撃。すでに辺りは嵐のようになっていた、死柄木や黒霧が手を出す余裕はない。

「スマツシュ！スマツシュ！スマツシュ！スマツシュ！スマツシュ！スマツシュ!!!」

「SMASH!SMASH!SMASH!SMASH!SMASH!SMASH!!」

吹き荒れる鉄拳スマッシュクラッシュの嵐、オールマイトを殺すための切り札だったはずの改人脳無はオールマイトと僕によつてただのサンドバッグになっていた。

「スマアアツシュ!!!」

「SMASH!!」

僕とオールマイトのクロスカウンタースマッシュが繰り出される、しかし受けるのはお互いではなく、脳無ただ一人だった。そしてようやく脳無の身体が地に着いた、シヨック吸収は限界をとうに超えて、超回復は機能不全を起こしていた。

「対策その3つでこれで本当に良かったのか…緑谷少年？死んでないよね、このヴィラン」

オールマイトが困り顔で聞いてくる。「いまからでも間に合う！ヴィラン襲撃対策その3！二人でとにかく全力でヴィランを倒そう」はこれで間違いない、えっ？ただのチカラ押しじゃないかって？ワンフォーオールはチカラの個性だ、問題無いだろう。

「そいつは只でさえしづといヴィランの中でも、僕が知る限り一番しづいですよ」

僕はオールマイトに事実を伝える。むしろどうやったらこの脳無を殺せるのか、想像もつかないよ。

「——さて、次はお前だぞ、死柄——ぎ!?!」

僕は死柄木の方へ振り返る、そこには黒霧の個性の黒モヤに沈みながら逃げ出そうと
している死柄木の姿があつた。

「おい!このチート野郎!!お前が先生の言つてたオールマイトの弟子つて奴だな!!次に
会つたときは絶対にころ——ぐぷえ!?!」

すでに肩まで黒モヤに沈んでいた死柄木に、僕は咄嗟にその場にあつたもの投げつ
け、それが死柄木の顔面に直撃した。

「うおお!!ごろぞ!!でめえ!!バラバラに砕いて絶対に殺すう!!」

死柄木は鼻血を流しながら叫び散らして、モヤからこちらへ飛び出そうともがいてい
る。

「死柄木叩!ここは撤退です、オールマイトにその弟子、さらには増援のプロヒーローも
来ますつて!それに——」

黒霧が飛び出そうとする死柄木を止めていた。そして手のようなモヤで掴んでいた
のは——

「脳無も返して頂きましたしね……それではヒーローの皆様、ごきげんよう!」

——ピクリとも動かない脳無だった。モヤが徐々に消えていく。

しまったー!!近くに落ちてたからつてヴィランを投げてしまった!なにやってん

だよ僕は!! 末端神経までワンフオーオールかよ!

「次は絶対に殺す、オールマイトの弟子い!!」——」

死柄木がモヤに消えながらそう告げて来る。

「お前からヴィラン連合は僕が絶対に潰す、覚悟しておけ!」

僕は死柄木に、ヴィラン連合に宣戦布告した、そしてモヤが消えていった。

その後すぐにスナイプ先生ら、プロヒーロー達の応援が駆けつけて、残りのヴィランを掃討した。警察が到着してヴィランを全員逮捕、そうしてU S J事件は終わった:

今回の一件、僕はなにが起こるかを知っていたが、結果的に何も出来なかった: ヴィランの襲撃は許してしまうし、それどころか遅刻をしてみんなをピンチに陥らせてしまった。峰田君や蛙吹さんは僕が居ないせいで怪我をしてしまった。そして最後は脳無も取り逃した:

前回と同じ処か状況は悪くなっている。僕は強くなったことで気が大きくなり、油断をし、そしてなにひとつ満足にこなすことが出来なかった。出来たのはチカラで敵を倒すことだけ:

怪我をした二人が心配だし、とにかく謝りに保健室へいこう——

「失礼します！二人とも大丈夫!？」

僕は保健室のドアを開けて中へと入る、そこにはリカバリーガールの治癒で怪我が治った二人の姿があった。

「よお、緑谷！おかげさまでな、まだ体力の関係でキズが残ってけど、大体治ったぜ！」
「私は無事に完治したの、緑谷ちゃんのおかげで助かったわ！」

二人が僕に返事をする、ああ無事で良かった……

「僕が遅れたせいで怪我をさせてしまって……ごめん！」

僕は二人に謝る、僕がちゃんとしていれば二人は、いや先生たちだって怪我をしなかったかもしれないのに……

「おいおい、なんで緑谷が謝るんだよ？感謝することはあれど、謝られる理由なんてないだろ？ それにこの怪我はオイラの力不足が原因だしな……！」

「そうよ緑谷ちゃん、あなたが来てくれなかったら私達今頃どうなってたかわからない……それに悪いのは襲撃してきたヴィランよ」

峰田君と蛙吹さんが僕は悪くないといってくれた。でも僕は――

「でも僕はみんなを助けられるだけの力があつたのに、それでもみんなを傷付けてしまった……僕はヒーロー失格だよ……」

僕は思っていたことを口にしてしまふ、こんなことを言つてもただの愚痴になつてしまふのに。

「なあ、緑谷。オイラはお前みたいにめちやくちやに強い訳じゃないから、お前の気持ちがよくわからねえ。なにか、緑谷にしかわからない理由で自分を責めてるのかもしれないねえ。ここでああしてればこうしてればって悔やんでるのかもしれない」

峰田君が僕に語りかけてくる、僕が黙っているとさらに話を続ける。

「でもよ、緑谷、一切合切すべてを救えなきゃいけないつてのは傲慢じゃねえか？ヒーローつてのは神様じゃねえだろ！今日の前の救えるものをどうしても救^{たす}けたいつて思つて、それで立ち上がるのがヒーローつてやつじゃねえのか？緑谷もそう思つたからあのときオイラをヒーローだつて呼んでくれたんだろ？それともあの言葉は嘘だつたのか？」

「そんなこと……ない。峰田君は立派なヒーローだつたよ！」

僕は峰田君の言葉を否定する、あのときの彼は誰がなんと言おうとヒーローだつた。「ありがとな、そう言つてくれてオイラすげえ嬉しかったんだよ。緑谷みたいになすげえやつに認められたみたいでな！——遅刻しなきゃとかみんなを救えたのにとか言つてたな、そういうや緑谷なんで遅刻したんだ？」

「それは……通学途中にオールマイトと一緒に事件を解決してたから……ごめん……」
僕は峰田君の質問に俯きながら答える。

「つてことは誰かが困つてたから遅刻するつてわかつてても、身体が動いちまったんだろ？誰かを救いたくつて止まれなかつたんだろ？違うのか!？」

「僕は……僕は救けたかつた!知らない誰かを!困つてる人を!傷ついたみんなを!!」

僕は震えながら、峰田君の言葉を聞いて、吐き出すように返事をした。

「そうだろ!じゃあ今度はオイラが言つてやるよ!誰かのために駆け出せるおまえは——立派なヒーローだよ!!」

「私もそう思うわ、緑谷ちゃん是谁かを救けたくて行動できる。優しいヒーローよ!」

二人の言葉に僕はハツとして顔をあげた、僕は気がつけば涙を流していた。

「でも僕はみんな傷つけて——」

「だからいつてんじゃねえか!悪いのはお前じゃないつて!!」

峰田君は僕が悪くないとまた言つてくれた。

「でも!それでも!——」

「そこまで納得できないならよ、これから成ればいいじゃねえか。なんでも救つちまうヒーローつてやつによ!だつてオイラたちはまだまだこれからだろ?」

「そうよ緑谷ちゃん、これから一緒にもつと強くなつていきましよう?」

僕はそこでようやく自分がどれだけ愚かだったか思い知らされた。

そうか、これからもっと強くなればいいんじゃないか！僕はちよつと強くなつたからつて勝手に一人前のヒーローに成れたと思ひ上がったのか！ほんとに僕はバカだな……！

「ありがとう、二人とも！ようやく目が覚めたよ！！僕はこれからもつと頑張つてもつともつと強いヒーローになるよ！！」

僕は涙を拭つて、力強く宣言する。

「よし！その意気だ緑谷！オイラだつて負けないぞ！」

「これから一緒に強くなりましょう？」

ふたりはそう言つて僕に手を差し伸べてきた。

「ああ！これからもよろしくね！！」

僕はふたりの手をとつてそう返した——

「じゃあオイラは世界一モテモテのヒーローになるぜ——」

「不純ね、峰田ちゃん——」

「不純だね、峰田君——」

「ええ！緑谷ならわかってくると——」

——僕はこれから強くなる、この雄英でみんなと一緒に、そう改めて決意した。
オールマイトが言っていた雄英で成りたいヒーローの形を探すって言葉の意味がわ
かった気がした。

僕のヒーローアカデミアはまだまだこれからだ、必ずあなたを救^{たす}けられるくらい強
くなりますよ、オールマイト——

【番外編1】 口田甲司改造計画！

僕が雄英に入学してからひと月程の時間が経った、午前中に普通の授業を受け、午後にはヒーローの授業を受ける。そして放課後は自主トレを行う。そんな日常を過ごしていたある日のことだった。

僕達、1-A筋肉同盟はいつもどおり、トレーニングルームで筋肉を苛めぬいた後、シャワーを浴びてからラウンジでプロテインを飲んで筋肉にご褒美を与えながら談笑していた。

「今日は二人に提案があるんだ……我らが筋肉同盟に新しい人を加えたいんだ！」

僕はバナナ味のホエイプロテインを混ぜ込んだ飲むヨーグルトを飲みながら話す。

ホエイプロテインってのは吸収の早いプロテインでトレーニング直後に飲むのが効果的なプロテインだ、他にもプロテインにはカゼイン、ソイっていう種類があつて——
——えっ聞いてない？……そう……

「新しい人？ついに爆豪をメンバーに加えるのか!？」

筋肉同盟の一員、砂藤君が僕の言葉に反応する。砂藤君はいつも筋肉に適度な量の糖

分の入った絶品スイーツを紹介してくれる。同盟の女子力担当者だ!

「いや違うよ、かつちゃんもよく一緒にトレーニングはしているけど……彼は筋肉を愛してない!」

僕は砂藤君にそう返す。かつちゃんも最初は僕と一緒にトレーニングルームに来ていた、そしてかつちゃんは僕と同じトレーニングメニューをやるうとしていたんだ。

そう、僕と同じ負荷でのトレーニングをしようとしていたのだ、僕とかつちゃんは筋肉量や体格が全く違う、そんな過剰負荷でのトレーニングは逆に筋肉を破壊し尽くしてしまい効果的ではない!と論じたところ、すっかり自分のペースで行うようになった。それでも週に2〜3日は一緒にトレーニングしてるけどね、かつちゃんの筋肉は僕が守ろう!

「ふむ、それさえあれば、あの前向きに強くなる姿勢は同盟の同士としては完璧なのだな……」

筋肉同盟の最後の一人、障子君がかつちゃんを評価する。障子君は筋肉同盟一のこだわり派で癖のあるトレーニングと食生活をしている。一度彼の提唱した、サプリメントやプロテインを一切使わず食事のみで筋肉に必要な栄養素を採るという、plus ultra式オーガニックトレーニング生活というものをやってみたがなかなか面白かった。流石は同盟のワイルド担当だ。

「それで誰を入れたいんだよ？」

砂藤君がテーブルから身を乗り出しながら聞いてくる。

「それはね……口田君だよ！」

「やはりか……」

「やつぱりそう来るか〜！」

僕の言葉に二人が納得している。それもそうだろう——

「あのポテンシヤルは素晴らしいよね！」

「高い身長、広がった肩幅、骨太そうな骨格、俺と同じ異形型ということで利点も多い」

「鍛えてなくても既にあのガタイだもん！あれは光るぜ！」

「ああ、彼は磨けば絶対に光る、ダイヤモンドの巨石さ！鍛え抜けば筋肉の権化に成れる

だろう……！」

僕らの意見が合致する、二人とも彼の可能性を見抜いていたようだ！それでこそ筋肉

同盟だよ!!

「じゃあ早速スカウトにいきましょうぜ！」

「善は急げだな」

「よし、いこうか！」

僕らは教室へと向かった——

——教室につくとまだ生徒が何人かいた、そのなかに口田君の姿を見つめる。どうやら飼育委員の仕事を終えて帰り支度を始めているようだ、急ごう!

「口田君!今帰り?、ちよつと話があるんだ、一緒に帰ろう!」

「なに、すぐに済む話だ!なあいいだろう?」

「…頼む!」

僕は畳み掛けるように口田君に頼み込む。

「——、——」

口田君は困った顔をしながらも、首を縦に振って頷いてくれた。よし、了承を得たぞ

!

「確保ー!!」

僕の号令で二人が動き出す。障子君が口田君を担ぎ上げて運んでいく、その後ろに荷物を持った砂藤君が続く。

「あつそつだ、常闇君も来て!」

「えっ!?!——つうお!?!どこにつれていく気だ!緑谷!おい!!——」

僕は傍らにいた常闇君を担いで教室を後にした。

「おい切島、口田と常闇が筋肉三人衆に拉致されちゃったぞ」

「そうだな瀬呂、まああいつらのことだからまた筋肉がらみでなんか企んでるんだろ」

——僕は口田君と常闇君を連れて駅前の方ミスレスに来た。

「いやあ付き合わせちゃって悪いね！ここは僕達が持つからなんでも好きなの頼んでよ！」

「付き合わせたというか半分誘拐みたいだったけどな」

僕の言葉に常闇君が突っ込む、確かに口田君の了承は得たが常闇君は違ったな、まさに半分だけ誘拐だなこれは……！

「わりいわりい、トレーニング終わりでテンション上がってつい、な？」

「まったく……まあそれならお言葉に甘えるところ、口田もそれでいいか？」

「そうか、お前は懐が広いな」

砂藤君の軽い謝罪にやれやれといった感じで常闇君が納得する、口田君にも納得してもらったようだ。やっぱり常闇君を通訳として連れてきて正解だった！

「結構がつつりいくな、俺はフライドポテトだけでいい」

「もう決まったかな?」

「ああ、フライドポテトと日替わりセットで頼む」

「いまの会話にそこまでの意味があつたのか……」

僕は注文を決めて店員さん呼び出す。

「ドリンクバー5つとフライドポテトひとつと日替わりセットひとつ、それとミックス
グリル単品で3つで。あと3つとも付け合わせのポテト抜きで。——あつちよつと
待つてください、常闇君僕らのポテトも食べる?」

「あ、ああじゃあいただきます」

「やっぱりそのまま、以上です」

「ご注文繰り返させていただきます——」

そうして店員さんの復唱が済み、僕は注文を終える。

「お前ら三人揃ってポテトが苦手なのか?」

常闇君が意外そうな顔をして僕らに尋ねる。

「いやあ苦手ってわけじゃないんだけど……」

「揚げた芋は脂質と糖質の塊だから、栄養管理にバカにならねえほどの影響がでちま
うんだわ!」

「筋肉の天敵とも言えよう……!」

「そういうものなのか……」

そんな感じのことを話しているうちに、料理が届いた。僕はそれを黙々と食べていく。男子高校生の外食なんてこんなもんさ、駄弁る、食べる、終わったらまた駄弁る、基本はこれだ。料理を食べ終わった頃に常闇君が話を切り出した。

「それで、口田に話してなんなんだ？それに俺まで連れてこられて……」

「ああ、それはね口田君をスカウトしようと思つてね。常闇君は通訳みたいな感じかな、僕らはまだ口田君の伝えたいことが全部わかる訳じゃないからね」

「スカウト……？」

僕の言葉に常闇君と口田君が不思議そうな顔をしている。

「口田（君）！一緒に筋肉を鍛えよう!!!」

僕は揃つて目的を告げた。さあどうでる口田君！

「……」

「そうだな、突然言われてもよくわからないそうだ」

口田君の意思を常闇君が通訳してくれる、一切話してないのにどうしてわかるんだらう？

「口田君！君は鍛えれば必ず素晴らしい筋肉を持った筋肉ヒーローに成れる！その才能を腐らすのが惜しい、僕らはそう思つたのさ!!」

「緑谷の言うとおりだ！お前はぜってえすげえ筋肉に成れる！それに筋肉があれば戦闘を有利に進められるぜ？」

「そのとおりだ、しかも俺と同じく口田は異形型だ、筋肉と合わさることで相手に威圧感を与えられる、これはかなり有利に働くぞ」

僕らは思い思いの言葉で口田君を勧誘していく。

「――――！」

「僕の個性は直接戦闘するタイプじゃないから、あまり筋肉は必要ないかも。とのことだ」

常闇君を通じて僕らにそう言う口田君、反応はあまり芳しくないようだ……でもこの程度では諦めない！

「口田！後方支援でも筋肉はあって困るもんじゃねえんだ！」

「そう、例えば筋肉があれば素早く支援に入れるし、逆に激戦地にも飛び込みやすくなる。それは支援する上で重要だろう？」

砂藤君と障子君が後方支援での筋肉の重要性を説く。僕はさらに追撃する。

「口田君、君の個性は生き物を操るものだよな？でもさ、もし周りに他の生き物がいなかったらどうする？戦えないからって諦める？後ろに守るべき人達がいたら？逃げ出せないよね？そこで筋肉が必要なんだよ！！筋肉があれば守れる！むしろ敵を倒せるよ

!!ねっ筋肉、必要じゃない?」

「……」
僕は筋肉の可能性を説く、なかなか効いているぞ!ここで畳み掛ける!!僕は二人に視線で合図を送った。

「僕は筋肉のおかげで雄英に合格できたよ!」

「俺は筋肉のおかげで試験に集中できるようになって成績があがった」

「俺は筋肉のおかげで自分に自信が持てるようになった!」

僕らの畳み掛けは終わらない。

「毎日健康に過ごせる!」

「金運が上がってお金持ちに!」

「おいそれは関係な——ンツ——!」

「シヤラップ!常闇君!」

僕は常闇君の嘴くちばしを掴んで黙らせる。

「筋肉があるとな、女の子にモテるぞ!!」

「!?!」

砂藤君のその言葉に口田君の反応が変わった!やっぱり君も男の子だな!女の子にはモテたかろう。まあ筋肉とさっぱり関係はわからないけど今はどうでもいい!とど

めを刺すんだ砂藤君！僕は目で指示を出す。

「耳を貸せ口田、…実はああ見えて緑谷は結構女子受けがいい、クラスの女子はみんな緑谷に好意的だ、特に麗日なんてわかりやすいだろ？…つまりはそれは筋肉のおかげなんだよ」

「———！！」

「だからよ、一緒に鍛えようぜ口田！！」

「———！！」

砂藤君の耳打ちで口田君の表情がみるみるうちに変わっていく、そしてしきりに縦に首を振っていた。なにを言っていたかは小声で分からなかったが、グツジョブだ砂藤君！

「ツーンー！——つぷは！口が割れるかと思っただぞ」

「ごめんね、常闇君…でも話はまとまったみたいだね！」

僕は常闇君の嘴を掴んでいたことを思いだし、離してから話を進める。

「じゃあこれから一緒に頑張ろう！君を一流の筋肉戦士に鍛えてあげるからね！」

「———！！」

「それでいいのか、口田よ…」

僕の言葉に口田君が腕を上げて同意する、常闇君は呆れ気味だったけど。

そうして僕らの口田甲司改造計画が始まった——

ビルドアッププロジェクト

それからの日々はあつという間だった。

——まずは余分な脂肪を落とすための減量

「——！！」

「お米が食べたい？ダメダメ！炭水化物なんてもつての他だ！ササミかバナナにしなさい——」

「口田！いまのお前はゴリラだ！ゴリラはバナナを食べるのが大好きなんだ！そう思い込め！今日からお前はゴリラだ！！」

——それが終わると筋肉量を一気に増やすためのバルクアップ

「——！！」

「もう食べたくないだつて!!?ダメダメそんなじゃ！筋肉をでつかくするには栄養補給が大切なんだ！たんぱく質、炭水化物、その他ビタミン等……食べて強くなるんだ!!出来るよ！お米食べろ!!」

——諦めてしまいそうな時もあった

「諦めんなよ…諦めんなよ口田君! どうしてそこでやめるんだそこで!! もう少し頑張ってみようよ! ダメダメダメダメ諦めたら。筋肉の事思つてよ、増大してく筋繊維の事思つてみてよ。あともうちよつとのところなんだから! 僕だつてこの炎天下のところ、ササミがトゥルルつて頑張つてんだよ!! ずっとやってみろ! 必ず目標を達成できる! だからこそNever give up!!」

——それでも僕らは 更Plus 向ult こra うへへの精神で頑張つた、そうしてひと月、またひと月と時は経ち、三ヶ月の時が経つた。

「なんとという仕上がった筋肉…完成だね、口田君!」

「すげえ! すげえよ! 口田!! お前はやっぱり天才だったんだ!」

「まさに可能性の獣だ。この三ヶ月、よく頑張つたな」

「——!!」

「おう、礼を言われることじゃねえよ!」

「頑張つたのは君自身だ!」

「自分に自信を持って、口田よ！」

いまではすっかり筋肉を通じてコミュニケーションがとれるようになった。そして口田君の姿は――

「身長 186cm！体重 118kg！体脂肪率はその異質さから測定不能だあ！！

すべてを打ち砕くような上腕二頭筋！砲丸のようにデカくなった三角筋！鬼の形相にも似た憎帽筋と広背筋！！腹斜筋と腹直筋が織り成すのは筋肉のプレートアーマーだあ！！そしてそれを支えるは大腿筋と下腿筋の大木ウ！！」

「それだけではない、岩のような肌は膨張した筋肉により鋭くひび割れて、裂け目には筋肉と血流の深紅のラインが浮かび上がっている！そして特徴的だった額の一本角は過酷な鍛練によって二つに裂けた！」

「この姿あ！！もはやかつての口田君とは別物オ！故にユエニ口田コイダ甲コウジ司シデストロイモ――」

「言わせねえよ！？それは不味いつて！」

砂藤君が僕の口を押さえた、この名称はなにか不味かったらしい、
 なんて止められたんだ……

「よし！早速この生まれ変わった口田君をクラスの皆に見てもらおう！！」

――！！

——1—Aの教室は放課後になってもまだ結構人が残っていた。よし、やろう! 照明暗転!

「うお!?!なんだ?急に暗くなったぞ!?!」

「デンツ!デンツ!〜♪タララ〜♪デンツ!デンツ!デンツ!〜♪」

「このメロディは……○ン・ジヨビのIt's O l i f e?!」

「なんかピカピカ光ってるんだけど!?!なにこの照明!?!」

「デアナナフーフンフツハーン〜♪ハンハフーフヘツフーン〜♪」

「歌詞が全くのうろ覚えだ!なんで歌った!?!」

「J A S ○ A C 対策か!?!」

「ハフフフーンフフ♪ハーハンヘーン〜♪」

「強引に続けてきたぞ!やべえよ!なんだこれ!?!」

「〜♪〜♪デンツ!デンツ!」

「「「いやあああああああああ!!!!」」」

「うお!?!びつくりした!緑谷!?!それに障子と砂藤、もうひとりは……?」

「なんでみんな上半身裸なのよ!」

「かつけえ……」「カツコいい……」

「その感性大丈夫か、爆豪!麗日!!」

——といった風に登場のインパクトは抜群だった!

「やあみんな!驚かせてごめんね!」

「今日はみんなに会わせたいヤツがいてな!」

「もうわかるだろうが我々のセンターにいる——」

「「生まれ変わった口田甲司の紹介だ!!」」

僕は声を合わせて口田君を引き立たせる。

「!!——!」

口田君がポーリングを決めている、いいよー!キレてるキレてるー!!

「ほんとにそいつが口田なのか……?」

「勿論さ!僕ら筋肉同盟によって鍛え上げられた新しい同士!口田甲司君さ!どうだい

みんな?」

僕は驚く切島君やみんなに尋ねる。

「お、おお!! かつけえよ! なんつうトゲトゲしき、漢らしいぜ!!」

切島君が口田君を誉める、やっぱりトゲトゲしいのが好きなのだろう。

「ああ、めちやくちや強そうだけ! すげえな口田!」

瀬呂君が強さを感じ取った、そうだろう実際めちやくちや強くなったのだから。

「デクの筋肉ばりに鍛え上げられてるぜ、流石はデクだな指導力も半端ねえ!」

かつちゃん! 筋肉鑑定がそこまで出来るとは! でも今は僕より口田君を褒めて欲しいな!

「ウエーイ、ウエーイ」

照明担当上鳴君、電気を使いすぎてアホになってしまった、ごめん、そしてありがとう!

これは完全勝利って感じだな! やったよ、口田君!!

「確かに強そうだけど……ねえ?」

麗日さんが歯切れの悪いことを言っている……ん? 流れ変わったな。

「うん……強そうだし、カツコいいとは思っただけだね……?」

芦戸さんが麗日さんに、同調する。普段だったらそれあるー! とか元気よく言うんだけど……なんだこれは?

女性陣の反応が芳しくない……それでも蛙吹さんなら……蛙吹さんならわかってくれるはず……!

「なんだか、口田ちゃん。ヴィランみたいね」

——ヴィランみたいね……ヴィランみたいね……ヴィランみたいね……
なに——まさか蛙吹さんがとどめを刺しにきた——口田君の反応は——

「——ッブファア！」

「口田が血を吐いてぶっ倒れたぞ!!」

「口田君——!!!」

「口田が死んだ!——」

「——この人でなし!——」

「——みんなひどいわ……でも口田ちゃんごめんね——」

「——梅雨ちゃん泣かないで——」

「——ちよつと男子——」

「——!——」

——こうして男子の高評価は得たものの、肝心の女子受けが悪かったため、完全敗北という形で僕らの口田甲司改造計画ビルドアッププロジェクトは終結したのだった。

第四章 僕とオールマイトと、ときどきサー

話をしよう！

僕はUSJでヴィランの襲撃を退けたが、死柄木と黒霧、あげく脳無まで取り逃がしてしまった。自分の不甲斐なさに落ち込む僕だったが、峰田君と蛙吹さんのおかげで立ち直ることができた！これからも強くなるために頑張るぞ!!

USJでの騒動が終わった次の日、騒動の後処理の関係で雄英高校は臨時休校となった。ニュースでは襲撃の件が報道されていて、やはり危険な事件だったことを実感させられる。

そんな中、切島君がどうせ休校で暇だし、みんなが集まって昨日の話をしようと提案してきた。

クラスの半分くらいのメンバーが集まり、結構な大人数のためどこへいこうかと悩んでいたところ、八百万さんが自宅へ招待してくれた。

そうして僕らは八百万さんの家の前についたのだが――

「でっけー、これほんとに家かよ」

「まさに御屋敷って感じで素敵ね」

その大きさに圧倒される瀬呂君と素直な感想を述べている蛙吹さん、みんな二人の意見に納得していた。

そうこうしていると門が開いて中から私服姿の八百万さんが出てきた。

「みなさん！ようこそいらつしやいましたわ！さあ上がってくださいいな！」

八百万さんがテンション高めで案内してくれる、なかなか見れない姿だ！

「こうしてお友だちを自宅に招待するなんて初めてでして……でも夢でしたの！」

歩きながら八百万さんが語る、ぴよんぴよんと少し跳ねながら歩く姿はなんとも可愛らしい。

なるほど、たしかに彼女のストイックな性格は他を寄せ付けないところがあるかもしれない、しかし自己主張の塊みたいなのーAのメンバーにはそんなことはお構い無しだったようで、いままではすっかり友達も増えたってわけだね。やったね百ちゃん！

そうして僕らは使用人の数や通された部屋の広さ、出されたお茶と茶菓子の味など様々なことに驚きながらも、昨日のことを振り返って話をしていた。

—— 思い思いに昨日の戦鬪のことを語っていくクラスメイト、みんなほんとに大変だったらしい、合流できなかった人の話を聞いてよかったな。でも火災ゾーンの話が！

度も出なかったけど、誰も飛ばされなかったのかな？

「そーいや、最後の方で雨が降ってきたけど、あれなんだったんだ？ スプリンクラーでも作動したのか？」

「あー、あれびつくりしたよね！ ヴィランも止まっちゃつてたし！」

切島君の言葉に芦戸さんが反応する、ああ、あれか……

「ごめん、あれは——」

「あれは緑谷ちゃんの水難ゾーンの水をパンチ一発ですべて吹き飛ばしたのよ」

僕が話そうとしたのを遮って蛙吹さんが説明をした。

「一撃で水難ゾーンを!? 相変わらず規格外だな緑谷！」

「俺はデクの仕業だつてすぐわかったけどな！」

蛙吹の説明に砂藤君が驚いている、かっちゃんは当たり前だろ？ みたいな顔をしてよく分からない誇り方をしていた。

「最後までスゴかったもんな、超強いヴィランをオールマイトと一緒にドツチボール見たいにバシバシぶつ飛ばして倒しちまったしな」

「デクさん、扉だけじゃなくてヴィランもぶつ飛ばしてたんだ……」

興奮気味の切島君と呆れ気味の麗日さんが僕の行動について話す。遠目から見ていたのか切島君！

「まああれはオールマイトのおかげで倒せたからね!」

僕はみんなにそう伝える、ひとりで倒せたなど口が裂けても言えない…一人ではみんなを守れなかったし、あんなに瞬殺出来なかったろう。

「そうだ、オールマイトといえば、緑谷お前やつぱりオールマイトの弟子だったんだな」

切島君が爆弾発言をする、死柄木の最後のあれが聞こえていたのか!?

「あー、やつぱりそうだったんだね」

「轟の隠し子説は面白かったけど、まあそれが妥当だな」

「半分野郎の発想がブツ飛びすぎてただけだろ」

みんなが普通に、だよね〜みたいな空気になってる!?!驚かないのか? まあ隠すつもりはなかったんだけど……

「確かに僕はオールマイトの弟子だけど、なんでみんなそんなに当たり前みたいな感じなの?」

「いや、個性把握テストの時から何となく思うだろ? スマッシュ!とかいってたし、隠す気なさすぎだろ!」

「しかもあの戦闘服みれば誰だっと思ってそう思うわ」

僕が思ってる以上にバレバレだったらしい…

「そーいやさ！オールマイトの弟子ってどんな感じなんだ！修行とかすんのか？やっぱり！？」

「私も気になりますわ、よかつたら教えてくださいさ？」

「俺も聞きてえなあデクウ……？隠れてコソコソなにやってたんだよ？」

みんなが僕とオールマイトの過去に興味津々だ、うーん、まあ口止めされてるわけでもないし、ワンフオーオールやりなおしの秘密と僕の再履修やりなおしのこと以外なら普通に話しちやってもいいかな！

「じゃあ期待にお答えして少しだけ話をしよう、僕とオールマイトの過ごした日々のお話を——」

——記憶はオールマイトに弟子入りした次の日まで遡る。

突然、僕のスマホが鳴った、ディスプレイの表示は昨日番号を交換したばかりのオールマイトだ。

「もしもし、緑谷です」

「あつ、緑谷少年？私だよ私！」

「オールマイトですよね?」

最初に短いやりとりをする、ああ、僕のスマホにオールマイトから電話が来るなんて夢のようだ!

「そうだよ! オールマイトさ! 今日電話したのは君に会ってみたい人がいるからなんだよ」

「会ってもらいたいひと?」

「ああ、昨日話にも出てきた『電話の彼』に君のことを話したら興味津々でね、どうしても会わせて欲しいっていうからさあ、会ってもらいたいんだよね!」

「僕に興味ですか? よく分からないですけど、オールマイトの頼みとあればなんでもやりますよ!」

「H A H A H A! なんでもは言い過ぎだ、じゃあ後で連れて行くからまた連絡するよ、よろしく!」

「はい!」

その後、オールマイトから連絡があり、夕方にあの海浜公園に集合することになった。僕が公園につくとすでに二人がいた、トゥルーフォームのオールマイトともうひとり

は――

「お待たせしました!」

「やあ、緑谷少年！来たね！」

「初めまして緑谷出久君、私は——」

「サササ、サーナイトアイ!?!」

そこにいたのは七三にピシッと整えられた黒髪、角ばった眼鏡に鋭い眼光の持ち主、オールマイトの元相棒^{サイドキック}のサーナイトアイだった。

「人の話を遮るな、落ち着きがないな貴様……私はサーナイトアイ、オールマイトに話を聞いてな、貴様に聞きたいことが有ってここに来た」

「彼とはちよつと前にいろいろあつて気まずくて会つてなかつただけど、この間仲直りしてね!」

「わざわざ教えなくていいですよ、オールマイト」

「H A H A H A! やつぱりそうかね? まあいいじゃないかこれから君も緑谷少年と関わりを持つことになるんだからさ!」

驚いたままの僕を尻目に二人の会話が続いていく。

「さて、本題に入る前に貴様を少しだけ試そう……」

「…試す?」

サーナイトアイが僕の方へ向いてそう言う。

「そうだ、貴様がオールマイトの傍に居るものとして相応しいのか……だ」

サーナイトアイの纏う空気が変わった…いったい何をする気なんだ…??

「オールマイトクイズだ!」

「オールマイトクイズ!?!」

僕とオールマイトの声が揃う、真面目な雰囲気だなにいつてんだ!

「真のオールマイトのファンなら簡単に答えられるだろう、ましては自ら弟子入りを志願した貴様ならば答えられなくてはいけない!」

サーナイトアイが凄む、そういうことなら負けられない!

「ではいくぞ!まずはジャブだ。問題です、オールマイトの身長、体重、出身地、好きなもの、全てお答えください」

「身長220cm!体重274kg!出身地東京!好きなものは屋久杉と映画!しかし、今は体重は少し減っていて255kgです!」

「正解だ、ファンブックにも載っていない今の体重を当てるとは、なかなかやるな…では次だ!」

ふふん、この程度は楽勝さ!

「問題です、オールマイトのクリスマスの恒例となっている予定はなんでしょう?」

「保育施設などでのチャリティーイベント！その一週間ほど前にはもみの木の間の伐の手伝いなども行っています！」

「正解だ、オールマイトはクリスマスにも子供達に夢を与えている、素晴らしい精神だ！
けっして寂しいクリスマスなどではない」

「なんで最後、私の精神を削りにきたのかね……」

「これも正解！よし今度はこっちから仕掛けてよく知ってることをアピールしよう！
では僕からも問題いいですか？」

「ほう、私を試すか……いいだろう、来るがいい！」

「ありがとうございます、では問題です。水質を変えられる個性の中学せ——「ビネガー
スーサイド事件」……正解です。水をお酢に変える個性の中学生をオールマイトが川か
ら救出した事件の名前ですね」

サーナイトアイが間髪いれずに答えてきた、やっぱりこの人相当にできる！

「流石にやりますね、では次の問題です、その事件で救助された中学生が感謝をのべ——
「こちらこそ、君のおかげでお肌10歳若返ったよ」……正解です。感謝を述べた中学生に
オールマイトが返した言葉ですね。また、お肌つてのがいいですよね」

「当然だな、あの事件の胆は——「中学生の家庭環境ですよね」……そうだ。なかなかわ
かっているじゃないか貴様」

「君達詳しすぎやしないかい?」

「では、次は私の番だ。問題です、オールマイトのか——「目元のしわは通常時で約0.6cmでシルバーエイジ時代からは0.8cmです!」…正解!オールマイトの顔の特徴である目元のしわの幅だな」

「細かいな!君達私の前でそこまでやるか?」

その後も僕らのクイズ対決は続いていき——

「もういいから!私の前でこれ以上私のクイズをしないでくれ!!恥ずかしさで死にそうだ!!君達ほんとに初対面か?仲良すぎだろう……」

オールマイトの鶴の一声で終わりを告げた。

「失礼しました、オールマイト。彼が思った以上に出来るので愉しくなってしまう……」

「すみませんでした、オールマイト!」

僕らは二人してオールマイトに謝罪する。

「でも最後にひとつだけ聞こう——」

サーナイトアイの空気がまた変わった、なにを聞いてくるんだ?

「——絶対に世間には知られてはいけない、オールマイトの個性の秘密とは?」

サーナイトアイの言葉に僕は動揺が隠せなかった。

サーナイトアイはワンフォーオールのことを知っているのか!? なぜそれを尋ねてきた? 言ってもいいのか? 試されている——

「答えてもいいんですね?」

僕はオールマイトをちらりと見る、オールマイトはなにも言わなかった。

「その名前はワンフォーオール、増強系の個性に見えますが、その本質は積み重ねた力を他人に譲渡できることです、今は僕の体にも宿っています……!」

僕はサーナイトアイに言い放つ、これでよかったんだよね……

「正解だ、そこまで知っているとすることは、自身に宿っているというのも妄言ではなさそうだな」

サーナイトアイは納得したような顔をしてそう言う。

「では私も貴様を、緑谷出久をオールマイトの後継者として認めよう」
「——えっ!?!」

サーナイトアイの言葉につい驚きが言葉に出してしまった、そんなにあっさり認められるのか!?

「なにを意外そうな顔をしている、オールマイトが認めた相手だぞ、私が否定する理由な

「ほとんどないだろう。そうだな、緑谷出久よ、オールマイトの個性はどれ程使える?」
「えっと、フルで使えるのは5割ほどですね」

「ふむ、その程度なら及第点といったところだな、私や並のヒーローよりはそれでも遥かに強い。それに貴様がまだ14歳だということを考慮すれば十分すぎるだろう。まあ、まだ5%しか使えません!などとぬかすようなら、私の育てていた後継者候補を宛がっていたがな!」

「サーナイトアイが矢継ぎ早に話す、前世のままだったら危なかったな…鍛えていてよかった!」

「認めて貰えてよかったな!緑谷少年!」

「はい、オールマイト!地道に努力してて良かったですよ!」

「僕はオールマイトと共に喜ぶ。」

「喜んでいるところ悪いが、そろそろ本題に移ろう」

「えっ?いまのが本題じゃなかったんですか?」

「まずは試すと言っただろう?人の話はちゃんと聞け。本題というのは他でもない——」

「——貴様はオールマイトが死んだ未来から時間を遡って来たと言ったそうだな、それは本当か？」

サーナイトアイは一步踏み出しながら、今までにない真剣な表情で尋ねてくる。

「それは……本当のことです。信じてもらえるとは思いませんが、それでも僕はオールマイトを救^{たす}けるためにここにいます」

僕はサーナイトアイに自分の信念を告げる。

「そうか……信じよう。本来なら未来から来たなどという与太噺は信じないのだがな。オールマイトがヴィランにやられて死んでしまうということは、誰も本気で想像すらしないだろう。それが出来るのは私とオールマイトだけだ……」

「ふたりだけ……？ どういう意味です？」

僕はその意味深な言葉の意味をサーナイトアイに訊く。

「そうだな……私の個性は“予知”だ、その個性でオールマイトの未来を視たんだ、今から1年か2年の間に彼が戦闘の中で命を落とす未来をな……」

「それは……！」

「そう、貴様が来たという未来、その結果と私の予知は一致しているんだよ。故にこのことを知っている私とオールマイトだけがお前を信じられるということだ、わかったか？」

「わかり……ました……」

僕はサーナイトアイの言葉に衝撃をうけて、返事もたどたどしくなってしまった。でもこれだけは訊かなくては！——

「ナイトアイ！その未来は変えられないんですか!？」

「私の予知が外れたことは今まで1度もない……」

「そんな！そんなことつて……くそっ!!」

僕はサーナイトアイの宣告に堪えきれず、悪態をついてしまう。じゃあ何のために僕はここに来たというんだよ!!

「落ち着け緑谷出久、ただそれだけなら私とオールマイルトが揃ってここに来てこんな話をするわけがないだろう」

「それはどういう——」

「私とオールマイルトは先日、貴様という存在とこれからの未来について話し合ったのだ、そこで未来は変えられるのではないか、という仮説を立てたんだ」

「——!!」

僕はサーナイトアイの話に言葉を失ってしまった。仮説？未来を変えられるのか!？

「H A H A H A! ついつい話が弾んで長電話になっちゃったがね！私も彼も、そして君も！諦めるにはまだ早いというわけさ!!」

「ええオールマイト、その通りです！さて貴様にもわかるように1から説明をしてやろう、聞き逃すなよ？」

「……はいっ!!」

僕は大きな声で返事をする、よし！まだ希望は残っているんだな？僕も諦めないぞ!!

「まず、貴様が未来で死んで過去に戻ってきたということについてだが、そんな超常現象を起こせるのはこの世に一つしかない……そう、個性“だ”」

「無個性だと思われていた貴様は実は死んでから過去に戻る類いの個性を持っていた、と考えるのが普通だろう、しかし私はそこに違和感を抱いたのだ、何かが違うとな……」

サーナイトアイが黙々と話していく、僕はただ黙って聞いていることしか出来ない。

「そこで引つ掛かったのが、オールマイトと出会ってからの貴様の半生だ。その半生はあまりにも運命的すぎる、まるでコミックの主人公のようにな。よって私達はひとつの推測を立てた、貴様の個性は自分の運命を変える類いの個性ではないか、というものだ」
「運命操作という強力すぎる個性だ、死んでからも作用を続けて自らの死を回避するため、記憶を持ったまま過去へと舞い戻るといふ現象を引き起こしたのだろう」

サーナイトアイの話に僕はもうなにも言えなかつた、僕が元々個性を持つていただつて!?なんだよそれ!

「齡14にして芽生えた超遅咲きの個性、それが貴様の運命を変え続けて来たのだろう。貴様の個性に名前をつけるならば、そうだな…貴様の母親の個性になぞらえて、〃運命を引き寄せる個性」とでもいったところか——」

「——っ！その個性があれば未来が変えられるんですね!!」

「人の話を遮るな、それは違うな。おそらくその個性は過去に戻ってきた段階でワンフォーオールと引き換えに消えてしまっているだろう。その証拠に昨日という日まで貴様はオールマイトに会いたくても会えていなかった、そんな強力な個性を持つてすれば簡単なことだろうにも関わらずだ！つまり貴様は死ぬ前に持つていた個性で変えてきた運命の残響をなぞらえているに過ぎないのだ!!恐らく、これからもそうなのかもしれない……」

サーナイトアイは立て続けに話していき、段々と言葉尻が強くなっていたが、最後は眩きが変わっていた。それはつまり——

「それじゃあ運命は変わらないうて言うんですか!?!オールマイトの死は避けられないと!?!ふざけるな!!そんなことがあつてたまるか!!」

僕はサーナイトアイの言葉が信じられずに喚きだす。だがそれはすぐに止められた

「落ち着け緑谷少年！まだ話は終わってないぞ!!運命を変えられる仮説を立てたと言っ

ただろう？ ナイトアイ、君もだ！ 話は最後までしなければな！」

「すみません、オールマイト…弱気になってしまいました。では残りは貴方からお願いします！」

「了解だ！ さて緑谷少年、確かに君は今まで、君が死ぬ前の過去、つまりは前世だな、その運命の跡を辿っていただけなのかもしれない。だがな緑谷少年！ その中で少しでも前世と変わったことがあつたんじやないのか？」

オールマイトが場を納めて話を進めて僕に尋ねてきた。変わったこと……？

「私達はその変わったことの原因こそが運命を変える力を持っているのだと思つたのだよー！」

「変わったことの原因……」

「そうだ！ 前世の君になくて今の君にあるもの！ それこそ運命を変える唯一の手段になるはずだ、わからないかい？」

オールマイトは笑顔を絶やさずさらに僕に尋ねる。なにかが引つ掛かつてきたぞー

「前世の僕になくて、今の僕にあるもの——ハッ!? そうか、わかつたぞ！ わかりましたよオールマイト!!」

「わかつたかい？ 緑谷少年よ!! そうそれは——」

——僕の中かで全てが繋がる。

「それは——」

——前世の僕になくて今の僕にあるもの…

「それは——」

——運命に負けないその力の名は……

「「筋肉だ!!!」」

「そう！筋肉こそが運命に抗うための唯一の力!!君はそれを知っているはずだね？」

「はい！大きな変化ではなかったけども筋肉によって僕らの出会いは確かに変わりました!!」

僕は希望を胸に大きく答える。

「そうだからこそ、私とオールマイトはここに来た！これから貴様を、貴様の筋肉を運命に勝てるように鍛えるためにな!!」

サーナイトアイが叫ぶ。

「その通りだ!!これから私とナイトアイ、二人で君を鍛え上げる！そして君と私！その死の運命を変えるんだ、筋肉によって!!」

オールマイトが力強く僕に語りかける。

「はい！僕は強くなります!!そしてオールマイトをこの筋肉で必ず救たすけます!!!」

僕は精一杯叫んで自分を鼓舞する。

「うむ、その意気だ!!では二人ともやるぞ!!」

オールマイトが拳を掲げる。その姿はいつのまにか平和の象徴そのものになっていた。

「応!!!」

僕とサーナイトアイが揃って拳を掲げた――

———こうして僕が筋肉によつてオールマイトを救けるための修行の日々が始まったのだつた。

走り抜け！限界突破マラソン！

オールマイトの紹介でサーナイトアイに出会った僕はサーナイトアイにオールマイトの弟子として認められる。さらにサーナイトアイの話によればオールマイトと僕は死んでしまう運命にあるらしい！しかし運命は筋肉で変えられる！そのために筋肉を鍛え上げるぞ!!

「さて、話もまとまったことだし、早速修行を始めようか!」

「はい!オールマイト!サーナイトアイ!よろしくお願います!」

僕はオールマイトの言葉に元氣よく返事をする、よーし!やるぞお!!

「まずは基礎トレーニングだ、何においても基礎は大切だからね!緑谷少年はすでに自分で鍛えてるようだし、そのメニューの改善から始めていこう!」

「緑谷出久、今の君のトレーニング内容を説明したまえ」

「はい、今のトレーニグはまず走り込みから——」

僕はオールマイトとサーナイトアイに今までやって来た基礎トレーニングの内容を

話す、オールマイトはいいね!とかなるほどね!とやっていたがサーナイトアイは次第に怪訝な顔になっていった。

「——以上です」

「なるほどね、そんな感じなのか!うんうん、よく鍛えてるね!でもなんというか…あれだな、合っていないよ!」

「えっ!?!」

「オールマイトの言うとおりだ、貴様のトレーニングはその体格にまるで合っていない。そうだな…貴様よりふたまわりは体の小さい奴が行っているような…そんなメニューだ」

「ほらでも緑谷少年も成長期だし、そこまで可笑しなことではないんだけどね!けどこれからは改善したメニューでトレーニングをしてみよう、いいね?」

「はい、よろしくお願いします!」

そうして僕のトレーニングメニューの改善が行われ、その日は解散となった。今回はアメリカンドリームプランとか変な名前を言われなかったな!

その日から僕はオールマイト達が考案したトレーニングを行っていった、今までのものよりきついがこなせないレベルではない、流星はオールマイトだ、僕の筋肉に合わせたベストなラインがわかっている!

それを続けて二週間程の時が経ったある晩、オールマイトからの着信があった。

「もしもし緑谷少年？今度の三連休にちよつと特訓するから予定空けといてね！」

「特訓ですか？なにをやるんです？」

「それは当日のお楽しみさ！あと親御さんはナイトアイが説得してくれることになったよ、ほんとは私が行きたかったんだがナイトアイから止められてしまつてね！」

「ナイトアイが家に来るんですか？」

「今後のことを考えてのことさ、これから帰るのが遅くなったり、帰れなかつたりするこゝとが出てくるからね、親御さんに話を通すのは筋つてもんだろ？」

「そうですね、ありがとうございます！僕も母さんを説得するために頑張つてみます！」
「よろしく頼むよ、じゃあ今度の金曜日にまた会おう！あ、ちゃんと動きやすい格好でき
てね！」

そうしてオールマイトとの電話は終わった。

次の日に早速サーナイトアイが家を訪ねてきた。母さんの説得は難航するかと思つたのだけれども、あっさり終わった。それどころが「出久は頑丈ですから、ガンガンし
ごいてやってくださいね、よろしくお願いします」といった感じで、サーナイトアイが
面を食らつていた。

それだけじゃなく、母さんは「出久の夢への一歩が開けたんでしょ？母さんが反対す

るわけないじゃない…頑張ってるね」と言ってくれた。なんだか気恥ずかしかったけど、嬉しかったなあ。

そうして無事に修行に打ち込める環境が出来た、そして金曜日の放課後になり、僕はオールマイトとの待ち合わせ場所に着いた。ちなみに僕の格好はジャージにランニングシューズだ、動きやすいぞ!

「お待たせしました!」

「緑谷少年、学校お疲れさん!私もいま来たところだ!」

「それでこの時間から集合してやる特訓ってなんですか?」

僕はオールマイトに一番気になっていることを尋ねる。

「やる気満々だね!じゃあまずは説明といこうか!緑谷少年、君はフルマラソンって知っているかい?」

「フルマラソンですか?昔の主流の長距離走競技でしたよね?個性を使わないで42.195kmを走るっていう」

「その通り、大体二時間ほどでその距離を走るのさ!いまでは走るのに特化した個性の人も多くいるからね、すっかり人気は下火だね」

「もしかして僕にそのフルマラソンをやれと?」

僕はオールマイトに聞いてみた、いまさら42.195kmでへばるべくじゃないん

だけどな…

「惜しいね！君に挑戦してもらおうのは…限界突破マラソンさ！」

「限界突破マラソン？なんですかそれ？」

「平たく言えば只のマラソンさ…でも君にはこれから三日三晩走り続けてもらう!!」

「——!?!」

僕はオールマイトの宣告に声がでなくなるほど驚いた。

「といつてもずっと走るわけじゃあないんだけどね、フルマラソンのペースで72時間分の距離…つまりは約1500kmを三日三晩で走り抜いてもらう。もちろんヒーローになるための取り組みだから、走るためなら個性を使ってもいい、それはこちらで許可しよう。そして途中で休んでもいいし、歩いてもいい、三日後のこの時間に1500km以上移動してここに帰ってくればね！」

オールマイトはトントン拍子で話を進める、1500kmだつて!?!東京—沖縄間くらいあるぞ!!?

「じゃあこれ手首につけて、はいこのリュック背負って、あとこれ食費ね、大事に使うんだ！」

「えっ?なんですかこれ!?!てかりユック重つ!!一万円が食費?」

「そのリストバンドはGPS搭載の時計だ、走行距離と現在時間が表示できる！」

リュックの中身は塩と砂糖、それに空のボトルだ、それで自由に水分補給するといい、日本はどこでも簡単に飲み水が手にはいるからね、いい国だ!食費はそのままの意味、それで食料を買うといい。1食につき千円も有れば余裕だろう!」

オールマイトが立て続けに説明をしていく、息つく暇すらない!

「じゃあ最後にルールの確認だ!!」

1つ!1500km以上移動して72時間後にここに戻ってくること!ルートは自由だ、但し私有地などには入らないこと!

2つ!絶対に眠らないこと!休んでも歩いてもいいが睡眠だけはとってはいけない、限界を超えるためだ!

3つ!他人に迷惑を掛けてはいけない!ヒーローになるための修行で他人に迷惑を掛けていたら本末転倒だぞ!

以上三点だ!わかったかな?」

「あ、はい!わかりました、オールマイト!」

「よろしい!では出発だ!よいスタート!!」

「えっ!?もう!?あっはい!いきまーす!」

そしてそのまま急かされるようにスタートを切った、オールマイトと会ってから3分も経ってないぞ!

—— 30分後

ようやく少し冷静になってきた、これはその名の通り限界を突破するためのマラソンだろう、限界まで走り続けることで自分の力量と許容範囲を知れる、それに精神まで鍛えられる気もするな。急なスタートはヴィランの急襲などを想定してのことだろうか、ヒーローに準備時間など与えられないしな！

しかもこれはただ走るだけではない、休憩や食事をとるタイミングや走るペースの管理、単純に見えてやることは多い、それを三日三晩続けるんだ、かなりきついものになるだろう。しかし、オールマイイトに与えられた試練だ！乗り越えて強くなってみせる!!

—— 2時間後

ここまでですでに80kmを走り終えた、ワンフオーオールを使えば原付程度の速度で走るのは楽勝だ。このペースを暫く維持するか、それともペースを落として体力を温存するか：悩みどころだ！

—— 6時間後

全体の1/12の時間が経った、走行距離は250km、かなりのハイペースだがまだまだ余裕だな！この際だから1500kmといわず3000kmくらい走ってしまおうか！——おっと油断はよくないな、ここらで食事をとりながら歩こう。余裕はたっぷりとあるしね！

—— 9時間後

時刻は深夜、人通りも少なく気温も下がってきた、でもまあ走りやすくなっているな！未成年がこんな時間に出歩いて補導されないのだった？この超人社会だ、昼夜逆転の個性を持つ人なんて山ほどいる、そんな古くさいことという人はもういないだろうな。

—— 12時間後

スタートから半日が経過して500kmは走ったぞ！やはり楽勝だな、ちよつと疲れきたけど少し休めば大丈夫！さあ今日中に1000kmくらい走っちゃうか！！

—— 24時間後

750km程走れた、もう半分走ったのか。でもやばい、見通しが甘かった…ペースが落ちてきている…すこし長目に休憩をして一気に体力回復だ！そしてそのあとにまたペースを上げよう！！

—— 36時間後

きつい…！脚が重くなってきた、ペースも落ち続けている…眠気もかなり出てきた、立ち止まったら眠ってしまいそうだ…いやオールナイトとの約束だ、絶対に寝ないぞ！！

—— 42時間後

なんだか眠気がなくなつて、気分も上がってきたぞ！！どこまでも行ける気がする！！な

—— 70時間後

辛いきつい、やめたい…なんで走ってるんだっけ?なんでこんなに頑張ってるんだ?!!
!!オールマイトを救^{たす}けるためだろ、忘れるな!救けるんだ!強くなるんだよ!!

—— 7 ■ 時間後

頭のなかが真っ白だ、なにも感じなくなつた、距離も時間もわからない、でも体を動かす、オールマイトのために、オールマイト…オールマイト…

—— ついに遠くの方にオールマイトが見えた、幻覚まで見るようになったらしい、でも嬉しい幻覚だな…:…オールマイト、救けてみせるんだ…:

「——や少年!!もう少——!頑——れ!!!」

声まで聞こえてくるとは豪華な幻覚だ、僕ちゃんと走ってるよな?実は夢でしたとか笑えないぞ。なんか不思議と足だけは動くんだな、笑える。

「——緑谷少年!!こつちだぞ!!」

ああ、オールマイト今行きますよ…:…:…というか段々と声が近付いてるな…:

「緑谷少年!よくやったぞ!!」

オールマイトのもとに辿り着けた、脚が止まった、もう動けないかも…:…:…ここまでか

……

「ゴールだ!! ホントによく頑張ったよ!!」

「ゴール? …… ああゴールね、はいはい …… ってなんだこれ、現実か!? いつの間にかゴールしていたのか——」

「よかつ …… た——」

—— 安堵し、限界を超えた反動が襲ってきて僕の意識は途絶えた。

—— サーナイトアイ side in ——

「そろそろ戻ってきますね、オールマイト」

私は発信器から送られてくる情報を見ながらオールマイトに告げる。

「そうか、しかし本当にこれで良かったのだろうか?」

オールマイトが心配そうな顔をして聞いてくる。

「限界を超えたその先へと至る、そこでようやくその人の本質が見えてくる、彼の本質が

正義のものなのか、平和の象徴として足り得るのか。そのための限界突破マラソンですよ」

「それはそうなのだから、流石に過酷な目にあわせすぎではないか？ 緑谷少年の弟子入りからまだ二週間だ、心が折れてしまうかもしれない……」

オールマイトは緑谷出久の精神を心配しているようだった。

「これで折れるならその程度の人間だったつてことですよ、それでは貴方の後継者としては相応しくない。それに、貴方が最初に提案した”とりあえず足腰立たなくなるまでボコボコにして限界を超えさせる”つていうプランよりは平和的だと思いますけどね」

「それは言わないでくれ……つい自分の経験と重ねてしまったのだ……」

「いいですよ、そのために二人で計画を練っているのですからね」

オールマイトがやや落ち込んでいる。オールマイトのそういつたところをフォローするのが私の役割だ、プラスのオールマイトにマイナスの私、そうやって昔はやってきたのだ。再び二人で何かを出来るなんて夢のようじゃないか！

「60時間経過したあたりからペースが変わっていない、とつくに限界は超えているようですね、おそらくいまは気力だけで走り続けている……大した精神力してますよ、彼は」

「うむ、前世での経験で得た尋常ではない精神力と14歳には見えない屈強な肉体。彼こそが私の後継者に相応しいと、そう心から思うよ」

オールマイトは緑谷出久をかなり高く買っている。確かに逸材だ、あれほどの人物はそういないだろう。しかし、彼の原動力はいったいなんだ？オールマイトか？なんにせよそれが崩れたとき、彼は平和の象徴に成れるのか……杞憂だといいいのだがな。

「姿が見えてきたぞ!!おーい!!」

「ちよつと待つてくださいオールマイト、貴方が迎えにいつてどうするんです……ここ
で彼のゴールを見届けなければ」

「ああ、すまない!」

緑谷出久の姿が見えた途端に走り出そうとしたオールマイトを止める。

「緑谷少年!!もう少しだ!頑張れ!!」

今度は声援を送り始めた、オールマイトも必死だ。

「おーい!緑谷少年!こつちだぞ!!」

彼はフラフラとオールマイトに近付き走ってくる。そしてついに辿り着いた、そのとき彼の脚が止まった。

「緑谷少年!よくやったぞ!!」

「ゴールだ!ホントによく頑張ったよ!!」

オールマイトが彼を激励する、その姿は本当に嬉しそうだった。

「よかつ……た……」

彼はオールマイトの顔をみると、そう呟いてその場に倒れた、どうやら気絶したようだ。

「大丈夫か!?!緑谷少ね——」

オールマイトが彼に近付いた瞬間、その身体から煙が吹き出した。

緑谷出久の姿が煙で見えなくなる、これは——

——煙が晴れた。その場に倒れていたのは……身長160cmほど、鍛えられてはいるが細い腕、だぼついたジャージに身体を包み、まだ幼さの残る顔立ちをした緑色の髪の少年だった。

「これは……まさか!?!」

オールマイトが動揺している。私も同じだ、この現象は……

「緑谷出久……これが貴様トゥルーフォームの本来の姿か——」

—— サーナイトアイ side out ——

説明書つてのは大概ややこしい

ついに始まったオールマイトの修行、僕はオールマイトに呼び出され三連休を使つて特訓することになった、その名も限界突破マラソン！僕は挫けそうになりながらも限界を超えて気合いで走った、でもゴールに着いてオールマイトを見たら安心して気絶してしまつた…！

「——つは…ここは!？」

どうやらゴールして気絶してしまつたようだ、僕は身体を起こして辺りを見渡す。長机にソファア、観葉植物に大量の書類のある棚……

「どこかの事務所？ソファアに寝かせられていたのか…」

どこなのか考えているうちに、ドアの開く音がした。

「おお！目が覚めたのかい緑谷少年！」

オールマイトがドアから現れる、なんだかすごい驚いているようだ。

「ご迷惑お掛けしました、オールマイト。それでここはどこなんです？」

「ああ、気にしなくていいよ、ここは私の支部の1つでね、君が気を失ったからとりあえず連れてきたんだよ」

「そうだったんですね、ありが——」

「気がついたか緑谷出久」

ドアから今度はサーナイトアイが出てきた、ふたりともいたのかホントに面目ないな
……

「ナイトアイ、御心配お掛けしました……」

「限界を超えたんだ、気絶くらいするだろう。それよりだ——」

当然といった顔のサーナイトアイ、しかし急に表情が固くなった。

「その身体について、説明してもらおうか？緑谷出久よ」

「身体？——」

僕は自分の身体を見る。いつもより小さな手、薄くなつた胸板、慌てて立ち上がるも低くなっている視界。

窓ガラスに反射して写る、見慣れていたはずの自分の姿——

——そこに写っていたのは前世と同じ姿をした僕だった。

「ハアー……ハアー……」

呼吸が荒くなっていくのがわかる、そして悪夢が甦ってくる——

『オールマイトオ!!』

貫かれたオールマイト、力なく倒れていくあの光景

『スマアアツシユ!!』

うすら笑う宿敵、貫かれる自らの身体

『オールマイト……オールマイト……』

無力な自分、血を流すオールマイトの姿、甦る甦る甦る……記憶

『……や……少年』

力のないオールマイトの声、消え入りそうな声。声。声。

そして終わりを告げる憧れ——

『緑谷少年……ほんとうに……すまない……』

「うわああああああああああ!!!」

僕は叫びだした。

何もできなかったあの頃に戻ってしまう！オールマイトを救^{たす}けられなかったあの頃に！この腕じゃ、足じゃ、身体じゃ、出来ない。出来ない。出来ない。何も出来ない!!!

救えない、救われない、無力な自分じゃないか！力が、力がたりない、無くなつてしまった。奪われてしまう、あの男に、オールマイトを、命を、未来を、希望を、全てを。

ダメだ駄目だダメだダメだ、ダメダメダメダメダメダメ——

——こんな身体じゃ、こんな僕じゃ、オールマイトを救^{たす}けられない!!!
「ああああああ!!!オールマイト！オールマイトオオオ!!!」

僕は叫び続ける、絶望にのまれもがくように。

「ああ！こんな身体じゃ戦えない!!救けない!!ああああ——ツハ!？」

叫び続けるなか——強烈な勢いで肩を叩かれた。

「落ち着け!しつかりするんだ!!個性ちからを使え!!」

マッスルフォームのオールマイトが僕の両肩を掴んで叫ぶ。

僕はその声に促されるまま、オールマイトワンフフォーオールの力を使う、そして全身に力が駆け巡り、矮小だった身体が屈強な肉体へと変化していく。

「…ハアハア……ハアハア……フウー」

力の鎧を身に纏い、だんだんと心が落ち着いていき、呼吸が少しずつ整っていく。

「落ち着いたか?緑谷少年?」

煙をたててトウルーフフォームに戻ったオールマイトが僕に聞いてくる。

「…はい、すみません…」

「目が覚めたと思えば、パニックを起こすとは…騒がしいな貴様は」

サーナイトアイが冷静に僕に言葉を投げかける。

「ホントにすみません…」

「まあいい、では落ち着いたのなら説明してもらおうか、先程までのあの姿と、貴様の現状について……詳しくな」

「はい、少し長くなるかも知れませんが、全部話します」

サーナイトアイの問いかけに肯定して、僕は話始める。

「まず、さっきの姿は……前世での僕の姿です。見てもらった通りの力のない今とは違う柔な身体でした」

「前世ではずつとあの姿だったということかね？」

「そうです、その結果は……以前お話しした通りです……」

僕はオールマイトの問いかけに肯定する。

「そうして過去に戻った僕は、あのままではいけないと思い、幼い頃から鍛え始めました。しかし身体を鍛え続けるだけでは限界がくることがわかりました。そう、僕の身体はそのままではあの姿以上に大きくならないということです」

「人間の成長の限界は決まっている……それがやり直しなら当然わかるということか……」

「そうです。ワンフォーオールは自らの肉体の強度で許容上限が変わるんです、前世の姿では5%程度でした。ですがそれ以外にも個性が身体に馴染むと許容上限が増えることがわかったんです。それで僕は個性を馴染ませる鍛練を行なったんです、小さく小さく力を身体に巡らせてひたすらにワンフォーオールを身体に馴染ませました」

僕は息継ぎをしてさらに話を続ける。

「それでもオールマイトの力を十分に扱えなかった、正確には肉体の限度で扱えないことが感覚的にわかったってところですが……」

「ではなぜいまの姿に？」

「そこがこの話の本題です！」

サーナイトアイが本質を引き出す質問を投げってくる、流石に話が早い。

「僕は肉体の強度を増すために出来ることがあるか考えました、そこで思い出したのが、オールマイトのマッスルフォームとトウルーフォームのことです。オールマイトは傷ついて弱体化した肉体を個性で無理やり全盛期の姿にしていますよね？」

「ああ、そうだがそれがどう繋がるのかね？」

「僕はその逆転の発想をしたんです、あの健康でひ弱な前世の肉体を弱体化した状態と仮定すれば、個性で無理やり身体を大きく出来るのではないか、とね。結論から言えばそれは成功しました、ここまでが第一段階です」

僕は一旦話を区切り、そしてまた続けた。

「個性で身体を大きくすることは出来たのですが、2つの問題点があったんです。ひとつはオールマイトと同じくその姿になっていくだけで消耗してしまうこと。もうひとつは元々筋骨隆々な身体をしていたオールマイトと違い僕はひ弱でしたから身体を大きくしてもひ弱なままだったんです、これではまともにワンフォーオールを使いこなせない」

「ふむ、それでどうしたのかね？その問題は？」

「はい、まずは持続時間を伸ばすことから始めました。使い続けることで馴染むことは分かってましたからひたすら変身し続けました、最初は1分、10分、そして1時間：少しずつ変身時間は伸びましたが、それでも気を抜くと変身が解けてしまったんです。そこで参考にしたのが異形型や常時発動型の個性です、それらの個性持ちは当たり前のようにその姿を保っていますよね、そして使いたいときにその力を強めて使っている。

個性つてのは身体機能の一部、僕も変身した姿が本来の姿だと自分に思い込ませて変身を使い続けました。そして数年の歳月をへて、息をするように、変身した姿の維持が当たり前になったんです。

それこそ寝てるときでも変身していたので、もうここ四年くらいは解けたことが一度も有りませんでした、たぶん個性が常時発動型か異形型のようなものに進化したのかと思います」

「それが今回の特訓により限界を超えたことで、変身が解けた。ということだね」
「おそらくはそうでしょう。なにせいままで自分から解除しようとしたことがなかったもので、確証はないんですが」

僕はわからないことを素直にオールマイトに伝えた。わからないことはわからないのだ。

「ではその筋肉は——」

「この筋肉は完全に自前です、個性に関係なく単純に長い年月をかけて鍛え続けただけで、普通の人と同じように筋トレをして、栄養を取り込み、筋肉を増大させる。筋肉を育てるにはこれしかありませんよね？筋肉は嘘をつかないし、筋肉に嘘はつけない！」

「それを聞いて安心したよ、個性に胡座をかいた偽筋かと疑ってしまったよ！すまない！」

「いえいえ、筋肉は筋肉、個性は個性ですから、安心してください。まあ筋肉のおかげでワンフオーオールワンフオーオールの許容上限も増えていって、ようやく5割の力を使いこなせるようになったんですけどね！」

そう言いながら僕とオールマイトはお互いの肩をバシバシ叩きあう。

「なるほど、つまり貴様の話をまとめるところか、

一つ目、個性を使って身体を大きく変身させる。

二つ目、変身を維持させ続けた結果、個性が進化。

三つ目、筋肉を鍛え上げてワンフオーオールワンフオーオールを使いこなす。

それが貴様のマッスルフォームマッスルフォームの真実というわけか」

「まあ正確にはいまの姿が本来の姿トゥルフフォームで小さい姿が前世アンマッスルフォームでの姿なんですけど」

「わかりにくいからマッスルフォームとトゥルーフォームで統一させてもらう、こちらの都合だがな。つまり貴様の個性はワンフォーオール異形型亜種とも言えるものになったということだ」

サーナイトアイが僕の長々とした話をまとめてくれた、分かりやすくなったかな？

「ここまでではわかった、ではなぜトゥルーフォームになったときにパニックを起こしてしまったのかね？」

「それが僕にもよくわからないんですよ、戻ったこと自体久々でしたが、以前変身が解けた時はあんなことにはならなかったんです。ただ急に嫌な記憶が甦ってきて絶望と恐怖を感じたんですよ」

僕はオールマイイトの間に答えられなかった。自分でもおかしな現象だと思う。

「あれは心的外傷^P後ストレス障害^Tのようなものだろう、オールマイイトと自らの死という強いトラウマによって引き起こされたと考えるのが妥当だ」

「PTSD!？」

「しかし以前は発症しなかったのだろうか？それがなぜいまになって……」

「それはオールマイイト、貴方が原因ですよ」

「「えっ!？」」

サーナイトアイの答えた意外な理由に僕とオールマイイトの声が重なる。オールマイ

トが原因…？？どういふことだ…？

「シンプルなことです。なにかを得られないことよりなにかを失うことの方がよっぽど辛いんですよ…つまりは緑谷出久はオールマイトと再び出会ったことによつて、同時に失う恐怖を抱いてしまったんです。緑谷出久、心当たりはないか？」

「あります…僕はこの10年間オールマイトに会いたくても会えなかつた…僕はいつしかオールマイトに会うことを諦めていたんです、この世界では会えないんじゃないかつてね。

でもがむしやらに鍛えることだけはやめませんでした、これはかつちゃん、僕の幼馴染がいてくれたから出来たことなんですけどね。いつの間にか強くなる目標が入れ替わっていたのかも知れません。

それで始めてオールマイトと出会つたあの日のことまで忘れてしまつていたんです、覚えていればあんなに動揺しなかつたでしょうね、その喜びが恐怖につながるなんて…」

「なるほど…そういうことか…」

原因がわかつたところで、僕ら三人は暫く黙り込んだ。

「しかし今の緑谷少年なら限界を超えることなんて早々ないだろうし、そこまで大きな

問題ではないだろう！弱点やリスクを持つているヒーローだってたくさんいる、かくいう私もその一人だ！」

「オールマイト……」

オールマイトが静寂を破ってそう言った。でもそれじゃあ……

「だから今は個性を伸ばして更なる強さを得る訓練を——」

「それじゃ、ダメなんですよ!!平和の象徴ってのは!!」

オールマイトの言葉を遮ってサーナイトアイが叫んだ。

「確かにリスクを抱えるヒーローは数多くいるでしょう、それで行動不能になるものもね。でも平和の象徴がそれじゃあダメなんだ、そうでしょうオールマイト？貴方は変身が解けたからって戦うことを……救うことを諦めますか？」

「それは……ないだろうな……」

「でしょう？つまり平和の象徴にはどんな姿になっても戦い続ける不屈の精神が必要不可欠なんだ！故に緑谷出久、今の貴様はオールマイトの後継者に相応しくない!!」

「……っ！」

サーナイトアイの正論に僕は返す言葉がない、このままじゃダメだ！

「サーナイトアイ！僕はオールマイトの後継者です！このトラウマからだって逃げ出したりしません……だって僕は……オールマイトみたいな最高のヒーローに成るのだから」

ら!!」

「緑谷少年……!」

「よく言い切った緑谷出久! なら私が責任をもって貴様の腐った根性を叩き直してやる。よし——明日の夜この場所に来い、わかったか?」

サーナイトアイは僕に一枚のメモを渡してきた、どうやら地図のようだ。

「はい! 必ず行きます!」

「いいだろう、あとオールマイトは来ないで下さい、この件は私がなんとかしてみせます」

「わかった……よろしく頼む!」

「では今日はもう帰れ、緑谷出久」

僕はサーナイトアイに宣言をしたあと、指示にしたがってその場を後にした。家に帰ると疲れがどつと出て来て僕は泥のように眠った。次の日の朝、僕は久々に学校に遅刻したのだった——

——夜になり、サーナイトアイが指定した場所へと向かった、どうやら闘技場のようなどころみたいだ。

中へとはいるとそこには闘技場の真ん中で一人で立っている胴着姿のサーナイトア

イがいた。

「お待たせしました、サーナイトアイ！その格好は…？」

僕はサーナイトアイの元に駆け寄りいつもとは違う装いについて尋ねる。

「来たか、緑谷出久…：…今回は荒療治だ！貴様のトラウマを克服させるため、決闘を行う
!!」

「はい!？」

僕はサーナイトアイのあまりにも脳筋な解決方法に驚きが口から漏れてしまう。

「足腰立たなくなるまでポコポコにしてやるから覚悟しろ!!」

サーナイトアイはビシツと僕を指差してそう宣言した。

———こうして僕はトラウマを乗り越えるため、サーナイトアイと決闘を行うこと
になったのだった。

DEEP! DEEP! DEEP!!

僕はマツスルフフォームからトウルフフォームに戻ると、過去のトラウマからパニック障害を起こしてしまった。そのトラウマを克服するために課された試験はサーナイトアイとの決闘だった！これを乗り越えてトラウマを払拭してみせるぞ！

「決闘って僕とナイトアイがですか？」

「無論、ただ戦うだけなら貴様が勝つだろうし、意味はない。今回行うのは個性なし、使うのは素手のみの決闘だ!!」

サーナイトアイがそう説明する。個性なしだ?!それじゃあつまり……

「体格差を考慮すれば私が有利だろう、だがこの決闘は貴様のトラウマを克服するためにある、不利な状況でも相手に立ち向かわなければならぬのだ。個性を使わないということはマツスルフフォームも禁止だ。そもそも貴様、トウルフフォームに戻るのか？怖くて成れませんなどと言うようなら、ここで修行は終わりだ。そんな貴様にオールナイトの後継者など務まらんが……どうなんだ？」

サーナイトアイが立て続けてに煽ってくる、怖くないと言えば嘘になるが、こんなと

「ここで躓いては行かない！」

「やりますよ、ナイトアイ！僕はトゥルーフォームでだつて戦つてみせます！」
「なら早くしろ、口で言つても始まらないぞ！」

サーナイトアイが僕を叱咤する、よしやつてやるさ！

「いきます——」

そう言つて僕は力を抜き、個性ちからの鎧を脱いだ。

煙とあげてトゥルーフォームへと変化していく僕の身体、その瞬間心の底から恐怖が込み上げてくる。身体が震えて、恐怖に叫び出したくなる、僕はそれを堪えて立ち続けた。

「まずは第一関門突破か、ではいくぞー！」

「ツツ——ツグハア!!」

サーナイトアイが踏み込んで僕の顔面に殴りかかる。避けようとしたところで、僕の足は全く動かず、もろに拳を浴びてしまった。

「どうした？守りも避けもしないのか、戦うんじゃないのか？」

身体を震わせながら立ち上がろうとする僕にサーナイトアイが皮肉を言う。

「そんなことでは、助けを求める人々を救えないぞっ!!」

サーナイトアイの蹴りが立ち上がれなかった僕の腹に入る、僕の身体はそのまま2く

3 m 転がって止まった。

「立ち上がることをすら出来ないのか？ そんなことでは平和の象徴の後継者など、夢のまた夢にも届かない！」

サーナイトアイが僕に現実を叩きつける、その通りだろうここで立ち上がらなければなんにもならない！

「っおおおおお!!」

僕は震える身体を無理やり立ち上がらせる、沸き上がり続ける恐怖と絶望に抗いながら……消えそうな心の炎を守りながら……

「ようやく立ち上がったか、ならば戦ってみせろっ！ 貴様が成りたいのは只の案山子かかしかっ!!」

「うぐっ！——ぐはっ！」

サーナイトアイがそう叫びながらワンツーのリズムでパンチを繰り出す。僕はそれを右と左の頬で受けることしか出来なかった。

「そんなヒーローなど、誰も求めてはいないっ——ぞっ!!」

「!?——ツゴハア!!」

サーナイトアイの姿が視界から消え、次の瞬間僕の鳩尾に拳が振じ込まれ激痛が走り、口から血反吐を吐いた。

40cm近い身長差をものともしない、しゃがみこみからのアツパー軌道のボディブロー。僕の身体はそのまま宙に浮き、重力に引き込まれて地面へと沈む。

まともに入ってしまった、内臓系に立ち上がれなくなるのに十分なダメージが加わった。痛みと恐怖で思考が深い深い絶望に吞まれていく……心の信念の炎が消えていく……

—— やつぱりこんな身体じゃ、前世の僕じゃ、戦えない……オールマイトを——

「どうした緑谷出久！貴様はオールマイトを救けるんじゃないのか!?そのためここにいるのではなかったのか!？」

サーナイトアイが倒れ伏せた僕へと言葉を投げかける、僕の心に僅かなに揺らぎが生じた。

「貴様もオールマイトの死を認めて絶望に沈んでしまうのか!？」

サーナイトアイの言葉が段々と変わってくる、またも心が揺れていく……

「貴様こそがオールマイトの後継者で、彼の救世主に成り得ると、そう思っていたのに!!
そうして沈んでいってしまうのか!？」

サーナイトアイの声が少しずつ震えていく、反対に僕の身体の震えは少しずつ収まっ

ていく。

「貴様も私と同じ様に諦めてしまうのか!? 運命に敗けを認め、オールマイトを失うことを……認めてしまうのか……?」

サーナイトアイの叫びは悲痛なものへと変わっていた、何かにすがるように、助けを求めるように……

僕の身体に熱が籠っていく、力が少しずつ湧いてくる、絶望と恐怖の中に微かな炎が燃え始める。

——彼を助けねば、求められているのだから、ヒーローにならねば!!

「僕は……! 諦めない!! 運命にだって抗い続ける!」

そう言って僕は再び立ち上がった。まだまだこれからだ!!

「そんな姿の貴様に……! 貴様になにができると言うんだ!!」

サーナイトアイが矮小な僕を罵倒する。なにができるか……だと?

そう思った時だった、心の奥から恐怖と絶望以外の記憶が甦ってくる。

『あの場の誰でもない、小心者で無個性の君だったから!』

「出来ますよ!——こんな姿でも!だって言ってもらったんだ!!——」
 僕はサーナイトアイに叫ぶ、震えを超えて、恐怖を塗りつぶして。

『私は動かされた!!——君もそうだったんだろう!?!』

「僕は……!僕は!!——」

暖かな記憶が鮮明に甦ってくる、絶望を振り払うように。

『君はヒーローになれる』

「——ヒーローになれるって!言ってもらったんだ!!」

僕は叫ぶ、心の奥底深くに絶望と共に沈み込めていた、僕の原点デイトプオリジンの原点の記憶を完全に呼び覚まして。

身体の震えも無くなり、絶望に沈んだ心は熱く激しく燃え盛りその闇を祓う。

「言って貰った!?!有象無象の一人にかっ!?!」

サーナイトアイは僕の言葉に反応しながら、拳を振るってきた。でももう僕の身体は

動く、その拳もよく見える！

「最高の、ヒーローにです!!」

僕はサーナイトアイの拳を受け止める。そしてそのまま手首と腕を掴み――

「うおりやああ!!」

雄叫びと共に投げ飛ばした。

「救けるって決めたんだ！オールマイトを――」

倒れたサーナイトアイにそのまま叫び続ける。

『――また救^{たす}けられちゃったな』

「何度だって！どんなに姿に成っても！救けるんだ!!」

僕はもう立ち止まらない、心の奥深く、芯から燃え上がる炎はもう消えない。

「だからあんたも立ち上がれよ！一緒に救けるって決めたんだろ？だったら一度くらい倒れた程度で諦めるんじゃない！運命に抗うんだろ？未来を変えるんだろ？立てよナイトアイ!!」

僕は倒れたまま動かないサーナイトアイに心から溢れる言葉を放つ、口調も乱れて荒っぽくなっていく。

しかしその言葉にサーナイトアイの目が見開く――

「――救いたいに決まっているだろう！さっきまで震えていたヤツが偉そうに!!」

サーナイトアイが叫びながら立ち上がる、そして再び拳を振り抜いてくる。

「そりやすいませんっ！――でもオールマイトを救けるのは僕だ!!」

僕はそう言ってサーナイトアイの拳に合わせて拳を振り抜く、拳と拳がぶつかり合つて弾かれる。

「私の方がオールマイトを救けたいに決まっている！」

サーナイトアイの右ストレートが僕の頬に刺さる。

「僕の方がオールマイトを救けたいって思ってる!!」

僕はサーナイトアイに右側から抉り込むようなボディブローをくらわせる。

互いに体勢を整えるため一瞬の静寂が訪れる…そして――

「私だ!」「僕だ!!」

互いの拳が交差してクロスカウンターが決まる。そしてそのまま泥仕合が始まった。

殴り殴られ、蹴り蹴られ、投げられては立ち上がり投げ返す。暫くの乱闘が続き、お互いにボロボロになっていった。

「勝つのは——僕だ!!」

勝ちたいという執念が僕を包み込む、そこからは無意識だった——

——5%フルカウル、僕の小さな身体に猛烈な勢いの力が駆け巡る。

「デトロイトオオオ!!スマ——」

「そこまでだ!」

必殺の拳を放とうとした瞬間割って入った人影によつて僕の腕が掴まれる。

「オールマイイト!」

僕とサーナイトアイが揃つて驚きの声をあげる。

「やっぱり様子が気になってね、こつそり見てたんだ。途中から恥ずかしくて目を逸らしそうになつたけどね!」

オールマイイトが照れ臭そうに語る、見られていたのか…恥ずかしいのはこつちだよ!

「さて、ナイトアイ。もういいんじゃないかな?」

「そうですね、もう終わりにしましょう。勝負も着きましたし」

オールマイイトとサーナイトアイが頷きあっている。ようやくこの決闘も終わりか、短いようで長かつたな…

「緑谷出久、貴様の敗けだ!」

「えっ!? どうして!?」

「いや、どうしてって貴様……最後に個性を使っただろう? よって貴様の反則敗けだ」
「あ……」

サーナイトアイの説明に気の抜けた返事をしてしまう。僕の負け……それはつまり

「……修行もここまで、ということですね……オールライト、すみません。僕は貴方の後継者には——」

「まてまてまて!! なんでそうなる緑谷少年! 見事にトラウマを克服したんだからこの決闘は成功だ! 勿論修行も継続に決まっているだろう!」

「緑谷出久……貴様は本当に人の話を聞いてないな……! 誰が負けたら終わりなどと言っただんだ?」

オールライトは驚き、サーナイトアイは呆れていた。そういうえばそんな感じで始まっていたな……戦うことに必死すぎて忘れていた!

「よかったあ〜」

僕は安堵の声をあげる、いやホントにダメだと思ってたよ。

「うむ、本当に良かったよ! 緑谷少年とナイトアイもよく頑張ってくれた! これからも三人で頑張っていこう! H A H A H A!!」

オールマイトが僕とサーナイトアイの肩を抱いて豪快に笑う。僕らもそれにつられて笑っていた。まさに大団円って感じだ！

こうして僕はサーナイトアイとの決闘をへて、トラウマを乗り越え次の一步を踏み出した。

——それから数ヶ月後、僕はスランプに陥っていた。

あれから毎日オールマイトとサーナイトアイの考案したトレーニングを続けていき、筋肉の量は倍増した。体重もそろそろ百キロの大台に乗りかかり、間違いなく身体は強靱になっていったのだが……

「伸びないねえワンフオーオールの身体許容上限」

「伸びませんね、肉体的には70%くらいになっててもおかしくないのですが……」
「なぜだか、55%辺りからすっかり伸びなくなりました……すいません」

僕とオールマイトとサーナイトアイ、三人で話し合いを行っていた。

「緑谷少年だけが悪いのではない、指導をしている我々の責任でもある！申し訳ない！」
「そんな、オールマイトが謝らないでください！」

「いえ、私の方針が悪かったのかも知れませんが、すみません、オールマイト！すまない、緑谷出久！」

僕たちは各々が悪いと謝りあう、この状況はホントに良くない……！なにか打破しないと……！——そう思っていたときだった。

「よし、やろうかどうか悩んでいたが、あの特訓をやろう！」

「あの特訓？なにをする気なんですか、オールマイト？」

オールマイトが特訓を提案をしてきた、僕は決心した顔のオールマイトに尋ねる。

「そろそろ緑谷少年は夏休みに入るだろう？そこで長期的な特訓を行おうと思っていたんだ、ただ……」

「ただ……？」

「ただその特訓てのは危険でね、もしかしたら君は死んでしまうかも知れない……」

「それほどに危険な特訓なんです……」

オールマイトから語られる死という言葉、それは僕にとって特別な意味を持つ言葉だった……なぜなら僕は自分とオールマイトの死を知っているのだから。それでも――

「それでも僕はやりますよ、僕が成りたいのは最高のヒーローで、貴方の後継者なんだから!!——それにヒーローはいつだって命懸け!死ぬのが怖くて務まりませんよ!そうでしょう?」

僕はオールマイトに大声で自分の覚悟を伝える。

「そうか……そうだったな!よし、君の覚悟はわかった!!ならば夏休み開始から三日後に再び会おう、それまでにこちらも準備を済ませておく、緑谷少年も夏休みの宿題を終わらせておくんた、学業は疎かには出来ないからね……それと遺書の用意も——」

「だから死ぬ気なんてありませんから!!……あと宿題は速攻で終わらせます……」

僕は死を仄めかすオールマイトを否定する、オールマイトを救って健康な老後を過ごしてもらうまでは僕も死ぬない!!

話が纏まったところで、その日は解散となった。そして時は過ぎ——

——夏休み開始から三日目、宿題をすべて終わらせた僕はオールマイトとの集合場所に行った。

ここは港、個人用の船舶が数多く停泊しているのが特徴的だ。オールマイトはなぜこんなところに集合を?

「おーい、緑谷少年ー!!」

そんなことを考えていると遠目でもわかるくらい存在感をひけらかして、オールマイトがやって来た。

「おはようございませす、オールマイト!」

「緑谷少年、おはようさん!じゃあ早速だけこの船に乗り込んで出発だ!」

挨拶を済ます僕とオールマイト、オールマイトはそそくさと船に乗り込み僕を招く。あ、このオールマイト、話を聞いてくれないときのオールマイトだ!

そうして、僕らに乗せた小型クルーザーは港から出航して沖へと出た。

「それで、わざわざ海にまで出て来て、今回はどんな特訓を行うんです?」

僕は船長気分でヨーソローなんて言ってるオールマイトへ質問する。

「ああ、今回の特訓か。それなんだが——」

オールマイトが笑顔ながら真剣な表情をする。なにをするんだ?

「君にはこれから1ヶ月間、一人で無人島生活を送ってもらう!!」

オールマイトはキメ顔でそう言った。えっ? 無人島で1ヶ月間? マジ?

「…えっ? えー————!!!」

——
再履修やりなおしを含めて25年。僕の人生の中で一番野性的ワイルドな1ヶ月が始まった。

生き残れ! 1ヶ月無人島生活!! [前編]

サーナイトアイとの決闘をへて、トラウマを克服した僕だったが、今度はスランプに陥り、ワンフオーオールを使いこなせないでいた。そこでオールマイトが提案した特訓は、1ヶ月の無人島生活だった!

「無人島で1ヶ月間生活ってどういうことですか? オールマイト!?!」

小型クルーザーとはとても思えない速度で航行している船に揺られながら、僕はオールマイトに詰め寄る。

「H A H A H A!! 今の君に足りないのは何かと考えてみたのさ。限界も知った、トラウマも克服した、身体も強くなった、かなり順調と言えるだろう!」

しかあし! 今の君には余裕が有りすぎると思つたのさ! あつて悪いものでもないが、有りすぎるとそれは毒になる。つまりこの特訓は再び君を追い込むための特訓なのさ!!」

オールマイトが口早に説明していく、確かに僕は順調過ぎたのかもしれない……

「その甘えがワンフオーオールの身体許容上限の伸びを止めてしまっている、というこ

とですね？」

「うむ、私はそう考えている。なので今回は生と死の瀬戸際で生き抜いてもらうのさ！」
ふむ、そういうことなら納得だ、強くなるための新たな試練！乗り越えてみせる!!
「そうだ！これだけは説明しておかないとね、これから君が過ごす島には沢山の野生動物がいる、それらは自然の摂理に乗っ取って生きているんだ。君にはこれからそれに加わってもらうって訳ね」

「なるほど、僕に人間社会の柵しがらみから飛びでて野生に帰ってみろというわけですね、わかりやすい！でもそんな島よく見つけましたね」

僕はオールマイトの説明に納得し、その島について尋ねる。

「その島は私の友人の管理している島でね、彼いわく「あの島はもう独立した食物連鎖が成り立ってるからね、人間ひとり加わったところで何の問題もないよ！好きに使ってよ！」とのことだ。つまり現地の動物を食べる分には問題ないってことさ！」

「豪快な友人ですね、一体どんな人なんですか？」

僕はオールマイトの友人に興味が出てきた。

「ネズミに良く似た人だよ、いや人に良く似たネズミなのか…？まあそんなところだ！」
「あー……あの校長先生でしたか…」

僕の脳裏にひとりの人？が浮かぶ、あの人は無人島の管理までやってたのか、ホント

にハイスペックだな。

「そういえば前世で雄英に通ってたんだよね、じゃあ根津校長のことは知ってるわけだ、なら話は早いね!あの人はいろいろハイスペックだから、まあ細かいことは気にせずやってくれればいいよ!」

「わかりました!自由にやってきたいと思います!」

「うむ、生き延びることが最重要課題だよ!——つともう島が見えてきたね!」

遠くに小山のある島が見えてきた、あれが今回の特訓の舞台……!

「じゃあ最後にこれ渡しておくね、はい」

「うおっと、なんですかこのリュック?また砂糖と塩ですか?」

「いいや、今回は違うよ。入ってるのは3日分の食料と非常用信号装置さ!」

「オールマイトが元氣良く説明する。信号装置はまだ分かるとしても、食料をくれるのか?サバイバルだと思っていただけなのに結構優しいな。」

「非常用信号装置はその名の通りさ、作動させるとGPSを通じて救難信号が発信される。本当に死にそうな時に使ってくれ、私も君を死なせたい訳ではないから、すぐ助けにしよう!」

「それはわかりました、なるべく使うような事態にならないよう気を付けます。ですが、食料とは?その辺も現地調達だと思っていたのですけど……!」

「ああ、最初の3日くらいはチュートリアルみたいなもんさ！あの島の動物たちは一筋縄ではいかない、食料調達は困難を極めるだろう。まあ行けば直ぐに分かるだろうけど普通じゃないからね!!」

オールマイトが僕を脅すように説明する。確かに僕はサバイバルなんてしたことないけど、今の僕にはワンフォーオールがある、野生動物程度に手こずりはしなと思うんだけど……なにが普通じゃないんだろう？

「あの、オールマイト、普通じゃないってなにが——」

「さあー島につくぞ!!私は訳あって島には近寄れないからね！下船だ、心の準備はいいかね?」

「えっ心の準備ってなんですか?って、あああああ——」

僕の質問を無視して話を進め、そうしてオールマイトは僕の背中のリュックを掴んで島の方へとぶん投げた。

投げられた僕はそのまま500m程ぶっ飛び、島の浜辺へと向かう。

なんでだ!?!説明無さすぎだろオールマイトオ!!てか地面近い近い!着地をちゃんとしなきゃこれでアウトだ!

「50%フルカウルウウウ!!——つとおお!!」

僕はワンフォーオールを全身に巡らせ、そのまま浜辺へと着地した。その衝撃で砂浜

が激しく吹き飛ぶ。

「あつぶなあ!これ岩場だったら死んでた!!」

その辺ちゃんと狙って投げたのだろうか、オールマイト?ねえ?

——これが僕の長い1ヶ月間の無人島生活の始まりだった。

浜辺に着き、早速辺りを見回す。砂浜から少し離れると直ぐに緑が生い茂っているのがわかる。全体的に森が多い島なのだろう。なにか他にないかと見ていると、目の前に白い小さな影が飛び出してきた!

「コケツコー!」

「鶏……?」

なんで無人島に鶏が?ていうか野生の鶏ってなんだ!?あれほとんどが養殖される動物だろう!」

「まあなんでもいいか……早速食料第1号確保だ、悪いけど食べさせて貰うよ!」

「コケツ!?コケツコー!」

鳴き声を上げながら逃げだす鶏、僕はその鶏を追いかけ始めた、これくらい個性を使わずとも楽勝だろう。

——そう思い始めた時だった、逃げていた鶏が急に振り返り、鋭い眼光でこちらを

睨んできた。そして嘴を大きく開ける。

「コケコツコー!!——」

大きな鳴き声と同時に火炎を吐き出す。その直径は裕に1mは超えていた。

「うわっあちち!!」

僕は咄嗟に砂浜に滑り込みそれを躲した。なんで鶏が火を吹くんだよ!!あやうく焼かれるところだった…!

「コケツコー!!」

「うわああああああ!!」

鶏は火を吹きながら僕を追ってくる!僕は慌てて逃げ出す、殺る気満々じゃないか、草食動物!!

森の中まで走ると鶏は追ってこなくなっていた。なんとか逃げれたらしい……なぜ追って来ないかはわからないが…

「なんなんだよ、あの鶏!焼鳥にされ過ぎて人類に逆襲したくなつたのか!」

動揺しすぎて訳のわからないことを言い出す僕。しかしこの島には人間は僕ひとりしかない、虚しい独り言が空を切る……

「!?!」

目の前の茂みがガサリと音を立てて揺れる、何かがいる…!

「ブルル、フゴッ!」

そこに現れたのは体長1.5 m程の大きな猪。前足で地面をかきながら鼻をならして、牙を見せつけこちらを睨んでいた。

完全に敵視されている…! よ、よし、今度は油断せずいくぞ!

—— 50%フルカウル、ワンフオーオールで身体能力を倍増させて猪と対峙する。

「フゴッ——!!!」

猪が突進してくる、かなりのスピードだがその軌道は直線的だ。

よし、ギリギリで横に避けてそのまま背後をとる! せーの! ——

「——(っ)お!」

僕は猪を引き付けてから横へと跳ねる。よし! 避けられ ——

「——グヘアッ!!!」

腹に衝撃が走る、なにが起きたのか分からずそのまま吹っ飛ばされた。

バカな! 完全に避けたはず…! それなのになんで攻撃を受けた!?! まさか二匹いたのか!?

「フスー! フスッ ——」

「えっ?!? 消え!?! ——」

目の前で威嚇を続ける猪を見ると、その姿が一瞬にして消えた。

「——グハッ！」

気がつけば後ろから突進をくらって再び吹き飛ばされていた、これはまさか……!!

「フゴッ！フゴッ！」

猪が鼻をならしながら、右へ左へ高速で移動している、サイドステップをしているわけではない——

この猪！瞬間移動してるう——!!?! 真っ直ぐしか突進できない猪がそれって、反則だろそんなの！

「うおおおおおおお——」

「フゴッ——!!——」

僕は絶叫しながらまたも走って逃げだした、野生の脅威をその身に刻みながら……

——そのまま暫く猪に追いかけられ、森の奥へとたどり着いた。全力で逃げたためか、なんとか振り切れたようだ。

「この島の動物たちの普通じゃないところって……間違いない、あれは—— “個性” だ！」

個性を持った野生動物の楽園、それがこの島の真実だった。

この島で1ヶ月間サバイバル生活か、きついってレベルじゃないな……オールマイト

の修行で最大の試練かも……!

「でもまだ肉食動物がいないだけ、マシってもんだな。この島で出逢ったらマジでヤバイな——」

「グオオオオ——!!!」

「——ああ?」

独り言を言っていると後ろから低い雄叫びが聞こえる、振り向いてみるとそこには身長3mくらいありそうな熊がいた。僕は間拔けな声をだす。

出逢っちゃったよ! 肉食動物!! どうせこいつも個性持ちなんだろう? 世の中の無個性に申し訳ないとか思わないのか! 主に前世の僕とかさ!!

熊がこちらを見ながら爪を立てて前足を振り上げていた、なにかヤバイと感じた僕は後ろへ跳んだ。

「グオオオオウ!!」

熊が前足を振り下ろすと、一瞬間が吹いたあと、さつきまで僕がいた場所が大きい爪痕のような形に深く陥没していた。

遠距離攻撃の出来る個性持ちの熊!! ヤバすぎる、危険なんてもんじやない!! もつと危ないにかだ!!

「グオオ!グオオ!グオオオオ!!!」

熊は手を休めずに攻撃し続けてくる、僕はそれをなんとか躲し続けるも周りの木々や地面がズタズタに引き裂かれていく。反撃に出なければなぶり殺される!!

「こんのおお!!55%オ!アラスカ・スマアアツシュ!!」

熊の攻撃を掻い潜り、僕の持ちうる全力のパンチを熊に叩き込む――

――しかしそのパンチは熊に届く前に透明な壁のようなものに阻まれた。バカな!?遠距離攻撃の個性じゃないのか?

そしてそのまま壁のようなものに吹き飛ばされ、木を何本もへし折りながらぶっ飛び、大きな木の幹にぶつかった。

「……ゴホッ……なんだよあれ……強すぎだろ!」

僕は木にもたれかかりながら悪態をつく。

遠距離攻撃が出来て、近接ガードと攻撃が出来る個性を持って、尚且つ自然界で上位に位置するフィジカルを持った野生の熊とかもうどうしていいかわからない……まさか全力の一撃が防がれるなんて……!

間違いなくこの島で出逢った中でも最強の動物だろう、むしろあれに勝てる人間を探すのも難しいかもしれない……!

「ゴアアアア!!」

少し離れたところできっさきの熊の遠吠えが聞こえる、こちらを探してるかもしれない！考えるのはあとにして今はここを離れよう……

——1時間程歩き回って、熊から無事逃れた僕は、小川の畔で一休みしながらオー
ルマイトから貰った携帯食料に口をつけていた。

「なんにせよ、あの動物たちをどうにかして捕まえて食べないと、食料が尽きて生活どころではなくなるなあ……勝てそうな奴から頑張つて捕まえるしかないか！」

僕は独り言を言いながらパサパサとした食料にかじりつく。

「キューー！」

近くの草むらから一匹の兎が飛び出してくる。なんとなくその兎を観察してみる。体毛は野うさぎにしてはめずらしい白色、片耳は欠けていて、左目には大きな切り裂かれたような古傷がある、また身体にもいくつかの傷痕が見当たる。

「お前も僕と同じで生存競争に負けそうになって、命からがら逃げ出してきたんだな……」

なぜだか僕は自分とその兎を重ねて同情してしまう。過酷だよねこの島での生活は

……

そんな気まぐれから僕は持っていた携帯食料をその兎の方へと投げる。

「キューー!! キツッ!」

白兎は少し警戒したものの、匂いを嗅いだ後に携帯食料に口をつけ始め、ガジガジと食べていく。

はあ、これくらいの癒しがないと心が荒み^{すさ}そうだ…! 確実に無駄な消費^{すさ}つてのは分かっているんだけどねえ。

「キュツキュッ!」

白兎は携帯食料を食べ終わると僕を一瞥して去っていった。もう行ってしまったのか、やっぱり野生の動物つてのは淡泊だな…!

「僕もいつまでも落ち込んでいられないな! さて辺りの探索と食料の確保だ!!」
そうして僕はサバイバル生活を生き残るための行動を始めたのだった——

——三日後、僕は窮地に陥っていた、食料が見事に底をついたのである。

この三日間の成果と言えば、飲み水の流れる川を見つけたことと、寝床になりそうな廃屋を見つけたことぐらいだ。

食料確保は悉く失敗、食べられそうな野草も分ならず、木の実を採ろうとすれば、その実を食料にしている野生動物に追い回される。

草食動物は数が多く、個性を使って滅多打ちにされてしまった。

あの熊にもその後2回ほど遭遇した、まあどちらも一蹴されたのちに追い回されたのだが……

そんなこんなで、朝からなにも食べていない……! 空腹で段々と判断力も落ちてきた気がする。そんな時だった――

「キュー!」

目の前にあの白兔が現れたのである、あのときはなにも思わなかったが、考えてみれば兎も立派な食料じゃないか! 傷付いた同志をいただくのは申し訳ない気もするけど、僕が生きたためだ!

「ごめんね、食べさせて貰うよ! うりゃあ!!」

僕は掛け声と共に兎に飛びかかった。しかし兎は捕まらなかった、しなやかかつ素早い動きで僕の懐に飛び込み――

「キューーーー!!!」

後ろ足で力強く僕の顎を蹴り抜いた。僕はその勢いで縦に3m程ブツ飛ばされて地面に落ちた。

こいつ……増強系の個性持ちだったのか……しかも滅茶苦茶強い——

——僕はその一撃で脳震盪を起こして気絶したのだった。

生き残れ! 1ヶ月無人島生活!!

[後編]

僕はオールマイイト考案の特訓として無人島に放り出された。そこは個性を持った動物たちの弱肉強食の世界だった。様々な動物たちに追い回され、極限状態だった僕は古傷の目立つ兎を食べようとして、返り討ちにあつたのだった。

「——ツハ!!」

僕が気絶から目覚めると、すでに白兎は居なくなっていた。蹴られた顎がまだ痛いけどその他に怪我は無さそうだった。

あんな小さな兎にすらやられてしまったのか……この島の動物たちはホントに強いな……いや、僕が弱いのだろう……動物たちに比べれば体格も大きい方、個性も強力、だけど僕は島の底辺から抜け出せないでいる。

彼らと僕の違いはなんだろう? 力の違いだけではないだろうな、それなら僕が勝っているものも多い。

では頭の下さか? それも違うだろう、人間は恐らくこの地球上で一番賢い動物だ、僕だってそのうちのひとりだし。まあ特別頭が良い訳ではないが、野生動物に負ける程で

はないだろう。

僕は思考の渦に呑み込まれていく——

数の多さに押されている？でも一個体でも強力な動物もここには沢山いる、あの熊が
いい例だろうし。

じゃあなんだ？もつと本質的なものなのか？…本質……なんか引つ掛かってきたぞ
！

そうだ、意識とか……そう、意思とかそういう類いのものだ！

オールマイトは言っていた、

「いまの君には余裕が有りすぎると思ったのさ！」

「生と死の瀬戸際で生き抜いてもらうのさ！」

……余裕はなくなり僕は追い詰められている、それは間違いない。あとは生き抜くこ
と、生き抜く……生きる……うん、なんかわかってきたぞ！

そうか！そうだよ、生きること、彼らと僕の最大の違いは生き抜くことに対する意思
の差だ!!彼らは常に生きることだけを考えている、生きられることが当たり前の人間と
の差は其処に尽きる！

僕は自分の中で答えに近付いていく——

ワイルド野生つてのは生きること、真摯に向き合うこと、じゃあ生きることってなんだ？生きて

いるってなんだろう？

糧を得て、食し、自分の血肉にすることだろう。それは身体を巡り、その身体を動かすために。つまり、息をして、心臓の鼓動を続けるためだ。

っことは……生きるっていうのは、身体を、心臓を動かすこと……？

それはなんだ？もう少し、もう少しで辿り着ける……！その全ては——

そして僕は答えに辿り着く——

「——筋肉だ……」

ふざけているわけじゃない、全ての答えは筋肉にあつたんだ。

——心臓の鼓動を放つのは心筋、息をするのは横隔膜を中心とした呼吸筋。

——そして、この身体を動かすのは、全ての筋肉なんだ……！

生きることとはすなわち、筋肉を動かすこと。つまり、筋肉は全、全は筋肉。すべての生は筋肉から始まり、筋肉の終わりは死へと終結する。

「だから、筋肉を中心に全てを考えれば、全てが解決する!!」

「ワンフオーオール——フルカウル!! 55%！そしてここから——」

今までは身体全体にワンフォーオールを巡らせることを考えていた、そこから踏み込んでPlus Ultraだ！

筋肉芯の芯まで行き渡るように、筋繊維一本一本にこの力を染み渡らせていく。

「身体許容上限……60%……65%……70%!!まだだ!まだいける!!」

筋肉に更に力が流れ込んでいく、生きるための糧として、それらを余すことなく筋肉は取り込んでいく。

「71%……75%……まだまだあ!!……来た!80%おおおお!!」

普段なら絶対に耐えられないであろう力の奔流が身体中を駆け巡る。しかしその力は暴走ではなく筋肉の道筋に沿って駆け抜ける、故に身体が破壊されるような負荷はなかった。

「いける……いけるぞこの力なら!待っている野生、今度は僕の番だつ!!」

そう言いながら僕は駆け出した、野生へ反旗を翻すため、生きるために……

——オールマイト、こういうことだったんですね……!すべてわかりましたよ、ありがとうございます……!!

「——ハックション!!」

「風邪ですか? オールマイト?」

私のくしゃみに反応して、監視衛星からの情報をチェックしているナイトアイが心配してくる。

「いや、ここ最近は快調過ぎて、人の風邪まで治す勢いだよ。それにこの感じは……」
「この感じは?」

ナイトアイが途中で止めた私の言葉の続きを引き出そうとする。

「緑谷少年が我々の予想を超えて、とんでもない方向へ躍進している気がする……」

「またですか……いい方向へ行けばいいですね……」

ナイトアイと共に緑谷少年の行く末を案じる。ホントにいい方向へ、いつていてほしいな……

—— オールマイト side out ——

—— 僕は砂浜に来ていた、まずはこの島での最初の挫折を味わったこの場所で、僕の反撃を始めるためだ。

「コケ?」

「見つけた……!」

僕は早速お目当ての獲物を見つけた、あの火を吹く鶏だ。

「コケツコー！」

鶏が早くも鳴き声と共に火を放ってくる。僕はそれを躲しながら、森の方へと誘導していく。そして――

「コケコツコー!!」

「――よつとおー！」

避け続ける僕に、痺れを切らした鶏が特大の炎を吐いた。これを待っていたんだ、それを大きく跳んで躲す。

炎は木に燃え移り、辺りが炎で包まれる。

「火を吹けるからつて、火に強い訳じゃないんだろ！だから海岸沿いで行動してたんだろ!? つおりやー!!」

そう言いながら鶏を火の海に叩き込んだ、鶏が火に吞まれ、燃え上がりながら飛び出してきた。

「コケツコー………コケツ………」

そして暫くして動かなくなる、焼鳥の完成、初の食料確保だ！

僕は火が燃え広がらないよう、海水をばら蒔いてからこの島での初の狩りの成果を味わった、生き残るために……！

——次の日、僕は木の実を食べながら森を散策していた。ちなみに木の実を採るときに現れた猿みたいな奴等は全力投球の投石で威嚇したらいなくなつた。

「ブルルツ! フゴツ!!」

そんなときにあの猪が茂みから姿を現す、またもやりベンジの時が来たようだ!

「フゴー!!」

「早速かつ——セーのっ!」

猪が脇目もふらず突進してくる、僕はフルカウルの出力を上げつつ、それを引き付けてから上へと跳んだ。

僕の跳躍に合わせて猪が腹に目掛けて瞬間移動してくる、だが分かっていたらば対応できない勢いではない! そのまま猪の胴体に手を回して押さえ込む、そして高度が上がるとき、重力に身体が引つ張られて落下していく。思った通りだ、掴まれている間は瞬間移動ができないぞこいつ!

「緑谷式! パイルドライバー!!」

猪を頭から地面へ叩きつける、僕と猪の体重が高く上がったことにより重力加速によつて、その威力を増していた。その力は全て猪の首に加わり、頑丈な首をへし折つた。これで今日の食料獲得!!

僕は貴重なタンパク源を余すことなくいただいた——

——それから数日後、ついにあの宿敵との邂逅を果たす。

「見つけたぞ！あのときの大熊ア!!!」

「グルルアアア!!!」

熊もこちらに気が付き、咆哮を上げる。僕はすぐさま飛びかかり、拳を振り抜く！

「スマアアツシュ!!!」

一瞬風が吹き、またも透明な壁に僕のパンチは阻まれる。間違いない……！こいつの個性は空気の操作だ！周りの空気を集めて壁や爪を形成していたんだ!!

「ゴアアアア!!!」

僕は壁に吹き飛ばされながら距離をとる、熊が空気の爪を振り下ろすも直線的な攻撃だ、当たりはしない！

パンチでは勢いが足りない！ならば……！腕より何倍もの筋肉を持つ足で……！いや全身の筋肉を使って一撃必殺の蹴りを放つしかない!!

「こいつは正面からぶち破る！そう決めたんだ!!」

僕は全身にワンフオーオールを滾らせて、熊へと駆け出す。熊も空気の爪で応戦するも僕には当たらない、そして全身の筋肉をバネとして一撃必殺の回し蹴りを放った。

「80%オオ! フロリダ・スマアアツシユ!!」

僕の蹴りは空気の壁を突き破り、熊の首へと到達した。そしてその首の骨をへし折った——

——かに思えたが、熊の分厚い毛皮と脂肪、そして野生動物ならではの発達した筋肉に阻まれ、致命傷には至らなかった。

「グオオオ!」

熊が咆哮と共に壁を作り出し、僕を吹き飛ばす。直ぐ近くの大樹の幹に激突し、その衝撃で一瞬身動きが取れなくなる。熊はその隙に必殺の爪を振り上げていた——

——やられる…! そう思った瞬間だった。

「キューー!」

僕の視界に白い塊が飛び込み、熊の鼻つ面をぶち抜いていった。その塊の正体は——

「あのとときの白兔!!」

前に食べようとして返り討ちにあつた、あの増強系の個性を持った白兔が僕を助けたのだ。

「なんで助けたんだ?! いや…今はどうでもいい! 奴を倒そう、手伝ってくれるよね、白兔

さん!!」

「キュー!」

僕は白兔と会話のようなものを交わし、熊を倒すため共闘を始めた。

「スマアアツシュ!!」

「キュー!キュツー!!!」

僕が壁を破り、白兔がダメージを積み重ねていく。そうして暫く攻撃を続けた。熊は抵抗するも二対一では対応しきれない、徐々に動きと個性が弱まっていく――

――そして決着の時が来た。

「これでっ!終わりだあ!!ルイジアナ・スマアツシュ!!」

僕の跳躍からの空中踵落としが空気の壁を突き抜け、熊の脳天へと振り下ろされ、その頭蓋を叩き割った。熊の巨体が地面へ崩れ落ち、動かなくなる。僕らの勝利の瞬間だった。

「うおおおおお!!!」

僕は関の声をあげて、両手を天に掲げた。ついにこの島での最大の脅威を退けたのだ、これくらいの喜びも大袈裟ではない。

「君もありがとうね」

「キュ、キュ〜〜!」

僕はそう言つて、疲れて寝転んでいる兎の頭を撫でた。兎は少し抵抗するも直ぐに大人しく撫でられていた。おそらくこの兎の傷は熊によつて付けられたものなのだろう、それでそのリベンジに僕の力が必要だったのかもしれない。

僕とこの兎に確かな絆が生まれた、そうして僕は残りの無人島生活を白兎と過ごしていった――

―― ある1週間は食料を集めて過ごし……

「あつちにいい感じの根菜があるよ、兎さん!」

「キューー!」

「そうだね、あれも集めよう!」

―― また1週間は謎の透明な生物と戦つて過ごし……

「このカメレオンみたいなのゴリラみたいのはなんなんだよ! いきなり襲いかかつて来やがって!!」

「キューーー!!!」

「血が出るなら、殺せる筈だ! そうですよ、兎さん!」

「キューー!!!」

——そうして一ヶ月の日々は過ぎていった。そしてこの生活の終わりの日が来た。

「おーい！緑谷少年ー！！迎えに来たぞお！！」

オールマイトの呼ぶ声が遠くから聞こえる、それと同時に森の動物たちの気配が消えた。野生の感で強者が来たことを感じ取って逃げたしたのだろう、ひと月前にオールマイトが島に上陸しなかった意味がようやくわかった。

「オールマイト、迎えに来てくれたのか……僕も帰らなきゃな……それじゃあ、兎さん。一ヶ月間ありがとう、君のお陰であの熊も倒せたし、この島の生活も楽しく感じられたよ」

「キューー！」

僕はそう言いながら白兎の背中を撫でる。僕と白兎はこのひと月の間にコミュニケーションがとれるまで仲良くなっていた、正直離ればなれになるのは寂しい、でも僕は人間で彼は野生の兎だ。僕がヒーローになるために、ここにはいつまでもいられない！！

「元気で暮らすんだよ、他の肉食動物に食べられないようにね！まあ君なら大丈夫だと思うけど……じゃあ、さようなら！！」

僕はそう告げて浜辺へと走り出した。その頬には一筋の涙が伝う。

さようなら、個性の楽園の島！さようなら、僕の小さな相棒！！——

「オールマイト! お久しぶりです!」

「おお、緑谷少年? なんだか滅茶苦茶ワイルドになったな! 背も延びたし、纏うオーラが変わったね!」

船に乗っているオールマイトに合流し、挨拶を済ませる。このひと月の間に結構見た目が変わったらしい。

「なにより声が玄田哲章みたいになった! 声変わりだな!」

「えっ!? そんなに変わってます!」

「ああ、お久しぶりですか、かなり低い声だったぞ! 声まで私に似てきたな!」

オールマイトが少し衝撃の事実を告げてくる、人の世から離れているうちに声までワイルドになっていたとは……!

「まあ、疲れたろう? そろそろ帰ろう」

「はい、オールマイト。帰りましょう僕らの守るべき街へ」

「ああ、帰って休んでから次のステップにいこう!」

「えっ!? 気が早いですね——」

そうして船は島を離れ始める——

——その時だった。

「キュー————！キュー————！！」

浜辺から白兔の鳴き声が聞こえる、こちらに向かつて鳴いているようだ！お別れに来てくれたのだろう……！ホントに彼はいいやつだ……！

「さようならあ————！！ありがとおおおお、お、————！！」

僕は大きく手を振りながら大声で白兔に別れを告げる。もう涙は堪えられなかった、さようなら、本当にありがとう、ひと夏の小さな友達——

——僕らに乗せた船は街へと向かう、こうして僕の人生で一番ワイルド野生的な1ヶ月間は幕を下ろした。

——無人島生活から約一週間後、人間の生活にも慣れ、そろそろ学校が始まろうとしていたある日。僕はオールマイトに呼び出されて、マンシヨンの多いとある住宅街へと足を運んでいた。

「おはようございます、オールマイト。1週間振りですかね?」

「おはよう、緑谷少年。あとあまりオールマイトと今は呼ばないでくれ、姿がこれだからね」

僕はトゥルーフォームのオールマイトに挨拶をして、早速注意されてしまった。

「すみません、ところで今日はどこへいくんです?」

「今日は君に書いてもらいたい書類とか諸々があるからちよつと来て貰ったんだ、まあ歩きながら話そう」

そう言つてオールマイトは先に歩き出した、僕もその後を追う。

「そういえばあの無人島つて結局なんだったんですか?個性を持った動物たちの世界つて感じでしたけど…」

僕はオールマイトにずっと気になっていたことを尋ねた。

「ああ、あの島はね…所謂マッドサイエンティストの実験場だったんだ。その研究者の個性は動物の個性を目覚めやすくするつていう代物でね、実験動物たちやその子供達がいまはあの島にいるつて訳さ」

「それであんなことに…」

「まあその研究者が亡くなつてから、島の管理を根津さんがやっているんだよ。私も島の外に出てしまいそんな危険な動物の駆除なんかを手伝つていてね、そのせいであの島

の動物たちは私にビビっちゃって近づけなかったってわけさ！H A H A H A！

オールマイトが説明を終えて豪快に笑っている、しれっと凄いこと言ってるなほんと。まあ細かく気にしたらダメなのだろう、そういうことにはしておこう。

「おっと、じゃあまずは私が一人で話をつけにいুকから、緑谷少年はその公園でちょっと待っていてくれないか？なに小一時間もかからず戻るよ！」

「わかりました、じゃあその辺のベンチで暇を潰します」

「うん、すまないね！じゃあまた後で！」

そう言つてオールマイトははや歩きで去つていった。

「とは言つても、小一時間かあ結構暇だぞ……ちよつとした鍛練でもしてようかなあ、でも汗臭くなるのもまずいかも知れないし……うーん……」

どうやつて暇を潰そうか暫く悩んでいると、目の前に人影が現れる。

「ねえ、あんた！緑谷君……よね？」

知らない人に声をかけられた。歳は二十代前半、緩く巻いたロングの金髪、切れ長の綺麗な眼、誰が見ても間違いない美人だと言うであろう整った顔立ち、薄手のシャツにタイトなジーンズがスタイルのよさを際立たせている。一言で言うなら大人っぽい綺麗なお姉さんだ。

僕を知ってるみたいだけど、こんな綺麗なひと知り合いにいたかな……？それともな

にかの罫か…?

「あの、すいません、どちら様でしたっけ? ちよつと思い出せなくて……」

「あんなことまでしたのに忘れちゃったの…?」

「えっ!?!」

僕は素直に切り出すも、予想外の言葉が返ってくる! なんのことだ!?

「あんなに激しくされたの、初めてだったんだから!」

「えっ—?!?!」

「いったい僕はなにをしたんだ—!! 全く思い出せない! てか心当たりがない!!」

「なーんてね、冗談よ!」

「えっ—!」

「そう言つてイタズラに笑うお姉さん。なんだよ、からかわれただけか……てかなんなんだこの人…かなり美人だが謎過ぎる…!」

「まあ初対面つて訳でも、ないんだけどね」

「えつと、どこかでお会いしましたっけ?」

「まあこの姿じゃわからないわよね」

お姉さんは意味深な言葉をいって、渋い顔をする。この姿…? 誰だ…?

「私は岳山 優、またの名を——」

「——M t. レディー!...どう? 思い出せたかしら?」

彼女は右手で丸を作って目元に当てながら無邪気に笑う。

——これが、僕の再履修やりなおしの人生を大きく揺るがす女性、岳山 優との出会いだつた。

岳山優：Re：オリジン

無事に一ヶ月の無人島生活を送り、スランプから抜け出すことができた僕は、そこで出会った小さな友達と別れ、人の生活に戻った。そしてオールマイトに連れられて来た住宅街で岳山優ことMt.レディに絡まれたのだった。

「Mt.レディ!? 岳山さんがあの人気急上昇中の大型新人ヒーローの!?!」

なんでまたそんな人が僕なんかに声をかけてきたんだろう？

そんなことを考えていると彼女が話始めた――

―― 岳山 side in ―――

私は岳山 優、まだ22歳の駆け出しヒーローよ、突然だけどもから私の半生を振り返ってみたいと思う。

ことの始まりは20年前、まだ私が2歳の頃だった、その年は個性に目覚めた。

きっかけはお友達との些細な喧嘩、感情を爆発させた私は、個性を発現させて暴れま

わった。ここまでならこの超常社会に有りがちなよくある出来事なのだけれども、私の場合は違った。

持っていた個性が強力すぎたのだ、体を19m程大きくする巨大化の個性。大きくなった私は感情のままに暴れたらしい、周りの大人はどころか、止めに来たヒーローですら私を止められなかったという話だ。

何故こんなに他人事みたいに話すかというと、私はまだ幼く当時の記憶が曖昧だからだ。覚えているのは友達だった子や大人たちの怯えるような目、まるで化け物を見ているかのような話、ということだけ。

それからというもの私はつま弾きにされた腫れ物だった、他の子からはデカ女だの怪獣だのと言われ、大人たちからは変に気を使われる。もう普通の子供ではなかったのだ、こんな個性いららない！ と何度思ったことかわからない。

そんな私にひとつの転機が訪れた、ある日テレビで見た大勢の人々を救うヒーローのニュース。幼い私は思った、こんな風に誰かを助けることが出来れば、みんながわたしを怖がって避けることもなくなるんじゃないかなって。

それから私はヒーローを目指して生きることにした。

小学校を卒業して、中学に上がり、ヒーロー科を受験し合格して、高校生になった。その間も私は疎まれ続ける。

元々地頭は悪くなかったので勉強は辛くはなかった、それにこの個性があれば実技などはほとんど楽勝で、大した苦勞もせずにトップレベルの成績で高校を卒業しプロヒーローの資格を得た。勿論ここでも私の踏み台になっていた人達から逆恨みされたりしたが、もうそんなことは気にもかけなくなっていた。

そして念願のヒーローになったとき、私の志はすっかり廃れたものになっていた……上京して、中堅ヒーローの事務所に鳴り物入りでサイドキックとして入った、そこでも私を待っていたのは退屈な日々だ。

私の可愛い見た目に嫉妬した先輩からの陰湿な嫌がらせ、個性の特性故に増える街への被害による風当たりの強さ、しかしこの十数年ですっかり面の皮が分厚くなった私はそれらを一蹴した。

実力による評価と美貌による人気、このふたつを兼ね備えていた私は、あつというまに中堅事務所から独立して、自分の事務所を構えるまでになっていた。

独立して好きにやれるようになればなにかが変わると、少しは思っていたがなにも変わらなかつた……

圧倒的なパワーの個性による破壊を含むヴィランとの戦闘、見た目だけに惹かれて集まる変わり者のファン達。

目立つのは嫌いではない、むしろちやほやされるのは大好物だ、ファンのこと勿論

大切している……しかしなにかが違うだろうと、そう思い始めていた。

そんなある日だった、私はとある事件に遭遇した。

通称ヘドロ事件、ヘドロで人を取り込む個性を持ったヴィランが、爆発系の個性を持った中学生を取り込んで暴れ回った事件だ。狭い商店街の中で暴れまわるヴィランに、私を含めたヒーロー達はうまく立ち回れず後手後手になっていた。

その現場に一人の学生が現れた、その男の子は火中に飛び込もうとしており、私はそれを止めた。なにもできないとはいえ巻き込まれて怪我をする人間が増える必要は無いだろうとそう思っただけ。

しかし彼は私を力で振り払い、他のヒーローの制止も振り切って、危険な場所へと飛び込んでいった。あとから聞いた話によればヴィランに囚われていたのは彼の友人で、それを助ける為だけに駆け出していたようだ。

自らの身を危険に晒し将来の夢も放棄する、自分を犠牲にしても誰かを助けようとするその姿は……私が憧れたヒーロー像そのものだった。

ただ資格があるから、なんとなく上手くやっていけているから、それだけでプロヒーローをやっている私なんかより、彼の方がよっぽどヒーローだろう。

私は成りたいものに成れなかった現実をそこで思い出す。

それからのヒーロー生活はなんだか苦痛だった、ヴィランを捕らえて、ファンに手を振りながらまるでアイドルのような扱いを受ける日々。理想と現実の違いに心のモヤモヤは溜まっていく一方だった……

それから数ヶ月、もうヒーローなんて辞めてしまおうか、そう思い始めた時に彼は再び私の前に姿を見せた。というより私が彼の姿を見て駆け寄ったのだが……

辞める前に一度でいいから彼と話してみたかった、聞いてみたかった、
“ヒーロー”とはなんなのかということ。

私は公園のベンチで唸っている彼に声をかけた――

―― 岳山 side out ―――

「私ね、あんたに聞きたいことがあったのよ」

「聞きたいことですか？」

僕は尋ねてきた岳山さんに尋ね返す、僕に聞きたいこと……前のヘドロ事件のことかな？

「あなたにとつて“ヒーロー”ってどんなもの……？」

「ヒーローですか？結構漠然とした質問ですね……うーん、僕の将来の夢ですかねえ」

漠然としたことを聞いてきた岳山さんにフワツとした回答をする僕、もつと上手く言えないものかな……うん、クソナード!

「じゃああなたの成りたい、ヒーロー」って何?どんな人がヒーローなの!」

「えっ、えーと……僕の成りたいヒーローってのはある人への憧れでして——」

「その人って?どんな人?ヒーローなの?」

岳山さんは矢継ぎ早に質問攻めしてくる、なんか余裕がないって感じだけど……どうしたんだろう?

「僕の憧れの人はですね、どんなに困ってる人でも笑顔で助け^{たす}ちやうような、そんなヒーローなんですよ!僕はそんな人になりたくてヒーローを目指しているんです!」

「……それは、立派な人なのね……」

「ええ、すごい人ですよ!僕はその人すらも助けられるようなヒーローに成りたい……そう思っています努力してるんですよ」

僕は聞かれてもないことをベラベラと喋りだす、オールマイトへの想いとなると言うことはたくさんあるのだ。

「あなたはきつとそんな人に成れるわ……あなたの目には迷いが無いもの」

「あはは、ありがとうございます。じゃあ岳山さんにとってのヒーローってなんですか?」

「それは……」

僕が照れながら質問すると、岳山さんは俯いて黙りこんでしまった。俯く前に一瞬見えた表情はとても悲しそうだった……

「……それが今、わからないのよ、私はヒーローという仕事をしてる。でも〃ヒーロー〃つてのがなんだかわからなくなっちゃったの……」

岳山さんは暗い顔でそう語った、僕に何が出来るかわからないけど、この人を救けたたすい！そう思った。

岳山さんはなにか思い詰めてるみたいだ、そんな人を救けるのもヒーローなんじゃないか？——そうですよ、オールマイト!!

「あの！岳山さん、もしよかった貴女の悩み、僕に話してみませんか？話だけでも楽になるかもしれません。僕に貴女を助けさせてくれないでしょうか？」

「ホントにヒーローみたいね、緑谷君は……」

僕の提案に岳山さんの少しだけ表情が明るくなった。

「じゃあ聞いてくれる？私の話を——」

岳山さんは自らの過去と僕に会ってから抱いていた思いを話してくれた。僕はときどき相槌をうちながら話を聞いていく、岳山さんは段々と悲痛な表情になっていくが、僕は目を逸らさずそれに向き合っていた——

「——それで、自分が求めるヒーローってのがなんなのか、わかんなくなっちゃったのよー!」

「もう私はヒーローじゃないのかも知れない……もうヒーローでいられないわ……」
そう呟く岳山さんの目尻には涙が浮かんでいた。

話は全部聞いた、岳山さんは勘違いをしている! 少なからず僕はそう思う、だって—

「岳山さんはヒーローですよ、僕はそう思います」

「慰めなんていらぬのよ!! だって私はただちやほやされたくて、いまさら辞められなくて、ヒーローって仕事をしているだけなんだからっ!!」

岳山さんが僕の言葉を否定して叫ぶ。

「いいじゃないですか? ちやほやされたくてヒーローやっても」

「……………えっ?——」

「僕はいいと思いますよ、そういうヒーローがいても!」

「それってどういう意味よ……」

岳山さんが涙目でこちらを睨みながら聞いてくる、別にバカにしている訳でもないのだけれども……

「僕はいろんなヒーローがいて当たり前だと思ってます、みんながみんな僕の求めるよ

うなヒーローじゃないことくらいわかってますよ。

だって僕、ヒーロー大好きなんですよ、オタクって言われるくらいのヒーローマニアです。だから色んなヒーローがいること、知ってるんです」

「色んなヒーロー…?」

「ええ、正義を貫き通して平和の象徴となったヒーロー、そんな人に憧れて手助けをするヒーロー。」

一番に成りたくて常に研鑽を重ね続けるヒーロー。

両親のためにお金が稼ぎたいって思える優しいヒーロー。

規則を重んじて人々を先導するヒーロー。

ホントにたくさんさんの思いを持ったヒーローが世の中にはいるんです!!」

僕は自分が求める知っているヒーロー達のイメージを上げていく。

「でもそんなたくさんさんのヒーロー達が絶対に思っていることがひとつだけあります、それさえあれば誰でもヒーローに成れる、僕はそう思うんですよね」

「…そのひとつって何?」

「誰かを救いたいって心ですよ!」

僕は不思議そうな顔をする岳山さんに言い切った。

「お金が稼ぎたいなら企業家に成ればいい、みんなに愛されたいならそれこそ本業のア

イドルに成ればいい。強くなりたいたけならどこかで修業に明け暮れているだけでもいいでしょう。力を誇示したいだけで、暴れたいだけでヴィランになってしまふ人だっている……」

「やつぱりそうなんじゃない……」

「でもヒーローは同じようなことを思っていて、その行動で人を救けたいって思っていることが前提じゃないですか！ 貴女は違いますか？」

僕は未だに俯いている岳山さんに尋ねる。

「そんなこと考えたこともなかったし……やつぱりよくわからないわ、私がヒーローなのか……」

「じゃあ僕が教えて上げます！ 岳山さんは、いやMt. レディは立派なヒーローですよ！」

僕は岳山さんに断言する、彼女はヒーローに違いないさ。

「だから慰めなんていらなくて言つて——」

「だつてヘドロ事件の時、僕を止めようと……助けようとしてくれたじゃないですか？ それって見知らぬ誰かを救けたいって思つてやつてることですよ？」

「——っ!!」

僕の言葉に岳山さんが声にならない声を出し、顔を上げる。その顔は齒をくいしばつ

て、涙を必死に堪えているものだった。

「でも、私は……」

「岳山さんが自分自身を認められないなら、貴女が救けたひとを見てみてください、きつとみんな幸せそうな顔してると思いますよ？ 助けてくれてありがとうって言われたことありませんか？ 思い出して下さい！」

「でも……でも！」

岳山さんは意固地になつて自分を認めようとしない、きつと相当悩んできたのだろう、僕の想像もつかないくらいに……でも僕はそんな彼女を救いたい、そう思つてしまつたのだから！

「岳山さんが認めないなら……僕が認めます！ 貴女はヒーローだ!! 世界中の誰もが貴女をヒーローと認めなかったとしましょう、それでも、たつた一人でも僕は……貴女がヒーローだつて叫び続けますよ!! だつて誰かのために手を差しのべられる、貴女はそんなヒーローなんだから!!」

僕は心の底からそう思つている、それを言葉にして、岳山さんに真つ直ぐぶつける。

「私……ヒーローでいていいの……?」

「勿論ですよ、M t. レディ。貴女は立派なヒーローです。胸を張つて名乗つていいと思いますよ」

瞳から大粒の涙を流しながら尋ねてきた岳山さんに僕は笑顔で答える。

「まだまだ駆け出しで半端者な私でも……ヒーローを続けてもいいの?」

「いいんですよ、誰だつて最初は駆け出しで半端者です!これから成りたいヒーローに成つていけばいいじゃないですか!」

僕だつてまだまだ道半ばだ、でもヒーローに成るために前に進むのは間違つていないことくらいわかる。

「でも私、途中で諦めちゃうかもしれないわ……」

「そうですね……じゃあ岳山さんが倒れそうなその時は——」

「その時は?」

「——その時は僕が必ず貴女を救いますよ!だつて僕もヒーローに成りたいですから、貴女のヒーローにだつてなつてみせますよ!!」

僕はポロポロと涙を流す岳山さんの手を握りながら、力強く宣言した。救けてみせる、いまそう決めた!

「わたし、私は……う、うわああああんっ!!」

岳山さんが遂に堪えきれずに子供のように泣き出す、僕はあやすようにその頭を優しく撫でた。

「あ、あああ、あああ——」

岳山さんはいつそう強く泣き出して、僕の胸に顔を埋めた。そうして暫くの間泣き続けた、これまでの悩みや不安を吐き出すように。僕はそれを許すように頭を撫で続けた、少しでも彼女が楽になれるように……助けになれるように。

僕が泣き出してしまったときにオールマイトも同じようにしてくれたな……あのときのオールマイトもこんな気持ちだったのかもしれない。

——少し時間が経った後、岳山さんは泣き止んでこちらを見上げてきた。

「もう大丈夫ですか？少しはすつきりしたならいいんですけど……」

「——っ！あの、その……ホントにごめんなさい！」

岳山さんは顔を真っ赤にしながら僕に謝ってくる、気にすることなんてないのにな。ははーん、さては僕が年下でその胸を借りて泣いてしまったものだから、申し訳なきを感じているんだな！お見通しさ！

「いえいえ、僕が勝手にやったことですから、ホントに気にしないでいいんですよ！」

僕は岳山さんに笑顔で告げる、気にすることはないと。

「いやいや、でも君みたいな年下にこんな恥ずかし——私ホントそういうんじゃないかと、いやそうじゃないのかと言われるとそうでもないっていうか——じゃなくて、その、あの違うのかも知れないけど、違うのよ!!」

岳山さんは顔を茹で蛸のように真っ赤にしながら支離滅裂に言葉を発し続ける、半分以上意味不明、つまり……どういうことだ？

まあそれほどまでに年下に泣きついたことが恥ずかしかったのだろう。でも岳山さん安心してください、僕はこう見えても精神年齢で言えば26歳、恐らく貴女よりも年上です、気にすることなどなんにもないんですよ……！

「岳山さん、僕が年下だつてことを気にしてるならそれこそ大丈夫！ たぶん貴女が思っているより（精神的に）年を重ねてますから！」

「えっ、どういうこと……？ 緑谷君、三年生よね？」

「ええ、（中学）三年ですよ、もう（精神的には）大人に近いですね」

僕は岳山さんに事実をぼかして伝える、岳山さんは顎に手を当てながら考え込んでいく。元気が出てきたようではなかった！

「つまりは、じゅ……歳……ギリギリセーフつてことに……いやでもまだ学生だし……それに年下は……いやありかもって思えてきたわ、将来的には寧ろあり？……うーん……」
岳山さんはブツブツと呟きながらさらに考え込んでいるようだ。

言葉の断片から察するにやはり年下の僕に慰められたことを気にしているのだろうな！ 岳山は一度決めるとなかなか頑固なタイプみたいだ！

「岳山さん！ 年のことなら気にしなくていいんですよ、僕は（精神的に年上なんで）気に

「しないでですからー！」

「えっ、緑谷君……それってつまり……そういうことなのよね？いいのね？」

「ん？ええ、いいですよ！というか（精神的には）あんまり年も離れていないと思うし……」
「何かが噛み合っていないような気もするけど、会話は成立してるし、たぶん大丈夫だろう。」

「そう、そうなのね！えーと、貴方の名前、緑谷……デク君で良かったかしら？」

「ああ、デクって書いていずくって読みます、緑谷出久です。デクってのはあだ名ですね、でもデクって呼んでくれてもオッケーです！好きなあだ名なんで！」

「僕は名前を聞かれたので、訂正をしつつ答えた。デクもいいあだ名だと本気で思ってるしね！」

「じゃあデク君って呼ぶわね、私のことは優でいいわ！」

「いやいきなり名前呼びはハードルが高いですよ、岳や——」

「優よー！」

「岳山さんが未だに真つ赤な顔をずいっと近づけて訂正を求める。なんか目が血走っているし、おかしなテンションじゃないか!？」

「じゃ、じゃあ優……さん……」

「まあ、それでよしとしましょう！それでさっきの言葉に嘘はないわね!？」

「はい!? さつきと言いますと!」

「年上でも気にしないってやつよ! 言わせないでよ恥ずかしい! いやでも恥ずかしいのは私だし——でもここまでできたなら…: よしいっちゃ私!」

僕は優さんの気迫に押されてたじろぐ、彼女はまたもブツブツと呟き考え込み始める。

意外とこういう感じの人なのか!? でもなんだかそんなところは僕と似てるかも…! つまり、人のこと言えないな! ここは聞きに徹しておこう……

「で!? どうなの!」

「はい! さつきまでの言葉全てに嘘はありません!」

僕は思わず直立姿勢で答えてしまった、まさにたじたじってやつだ!

「よろしい…: よし、じゃあ言ってしまうわ! ええ! いましかない気がするものね!」

優さんの目がぐるぐると回っているのが見てとれる、明らかにおかしな状態だが僕は抵抗ができない!

ホントにこと女性関係は耐性がない、そんなにぐいぐい来られると、なにでもできなくなってしまうじゃないか!

こんな時に筋肉もオールマイイトの力も役に立たない!

あー意識したらドキドキしてきてしまった、なんか距離感近いし、いい匂いもする

……って考えたら更にだめじゃないか!!

この状況から抜け出したい……! 誰か、誰か助けてくれ! 助けてヒーロー!!

「緑谷出久君、いえデク君!」

「ひゃい!」

「私ね……貴方のことが、す——」

「おーい! 緑谷少年——! お待たせ——!」

「きゃあ!」

優さんがなにか言いかけたところでオールマイトの声が飛び込んできた。

助けにきてくれたんですね、流石は僕の憧れのヒーロー!!

「あれ、緑谷少年、お取り込み中? そちらは誰だい?」

「えつとこちらは岳山優さん、あのMt. レディですよ、オ——……」

僕はオールマイトの名前を言いかけたところで止まる、今のオールマイトの姿はトゥルフフォームだ、この事実を優さんに勝手に教える訳にはいかない……! オ、お、おじさん……いやオールマイトはおじさんじゃない! だからえつと、えいと……そうだ!!

「おー、えいと、叔父貴!!」

「叔父貴?! いったいどういうことなの!?!」

咄嗟に出てきた僕の誤魔化しに優さんが驚く、なんだよ叔父貴ってヤーサンじゃない

んだぞ!!

「あの…緑谷少年、普通に八木でいいから…ね?」

「すいません、八木さん……」

オールマイトに呆れられ、平謝りする僕。ほんと面目ない!

「それで、なんか話途中みたいだったけど、続きはいいのかい?」

「あつはい!大丈夫です!緑谷君お借りしました!」

「…いいんだ、まあそういうことならいいんだけどね」

オールマイトの質問に慌てながら答える優さん、それでもさつきよりは落ち着いてきているようだ。

「じゃあいこうか、緑谷少年」

「あつはい、八木さん。それじゃ優さん僕らはここらで失礼します!」

「あ、うん、ありがとうね、デク君!そういえばデク君の学校ってどこ?」

「折寺中学校です!ここから一時間くらいのところですね、じゃあ失礼しまーす!」

ぎこちなく別れの挨拶をして、なにやら驚く優さんを尻目に僕とオールマイトはその場を後にした――

—— 岳山 side in ——

私はデク君と別れて家路についた、少し歩いて直ぐに部屋に着く。

それにしても自宅のあんな近くで出会うとは……とんだ偶然もあったものね。

「それよりもおとおお!!なにやっつてんのさ私いい!!」

部屋に帰って直ぐにベッドに飛び込む、そして枕を抱き締めながら叫ぶ。

「あんな年下の子の胸でわんわん泣いちやつて!なによ折寺中つて、まだ中三じゃないの!?!しかも……しかもそんな子に——」

『私ね……貴方のことが、す——』

「わああああ!!なに言おうとしたのよ!シヨタコンか私は!!!」

先程の出来事がフラッシュバックしてまたも叫びだす。

「ハアー、ハアー……でも救^{たす}けられちゃったのは事実で、この気持ちもきつと本物なんだろうなあ……」

私は息を整えて、少し冷静になってから再び思い返す。

「また会いたいな……今度は大人の余裕を見せなきゃね!……でもいつになるやら——」

その時の私はまだ知らなかった、再会の機会はわりとすぐだということに——

—— 岳山 side out ——

「ところで話をつけてくるとか言ってみましたけど、なんの話だったんですか？」

「ああ、そのことか。もう話はまとまったよ、それでなんだが——」

僕はオールマイトに今日呼び出された原因の話について尋ねると、オールマイトは神妙な面持ちで答えた。

「今日から家を出てこの街に住んでもらうから、そのつもりでよろしく!!」

オールマイトの言葉は僕の予想の斜め上を通りすぎ、もはや意味不明なものに感じられた。——

「——というわけで、その次の日から僕は家を出て暮らすことになったんだ！」

「おー、中学ですでに家を出て修行とかやつぱすげえな！」

僕の話に切島君が興奮ぎみに相槌を打つ。八百万さんちでの僕の話はまだ続いていた。

オールマイトの秘密とワンフォーオール秘密はぼかして話してたけど、結構話したな。

「それでそれで！そのあとはどうなったの!？」

「中学の途中で通学路が変わったのってそういうことだったのかよ！」

麗日さんとかつちゃん、それぞれ言いたいことを言っている。僕は話の続きをする前に時計をちらりと見る。

「もういい時間だし、そろそろ帰ろうかみんな！」

時計の針は既に人様の家に入り浸っていい時間を通り過ぎていた。

「えー、気になるー！教えてよ緑谷ー!!」

「そーだそーだ！気になるじゃねえか！」

芦戸さんと瀬呂君がぶーたれている、でもこれ以上は八百万さんの家の人に迷惑だろう。

「ヒーローが他人に迷惑かけちゃだめだろ？続きは今度話すからさー！」

「まあそれもそうだな、迷惑かけたな八百万——」

「いえいえ、私も楽しい時間でしたわ——」

「ありがとね、八百万ちゃん——」

「じゃあ帰ろう——」

—— 僕らはそれぞれの家路についた、明日からはまた学校も再開して、ヒーローアカデミアでの生活が始まる。

それとさつきも言ったようにこの話の続きは……また今度だ。

【番外編2】もしもかつちゃんが男装ポニテ美少女だった
ら【短編】

僕はオールフオーワンに殺され、オールマイトもその命を落とした。

気がつくとは僕は四歳の頃まで時間を遡っていた、やり直しの人生でオールマイト救ける、僕はそう誓った。そして前世とは違い、驚くべきことにこの身体にはオールフオーマイトオールの力が宿っていた！

しかし本当の驚きは、僕がその個性を暴発させて、半年の入院生活を終えたあとにやってくるのだった——

「今日は怪我が治って、病院から出久君が帰ってきました。できないことも多いかもしれないけどみんなで助けてあげてね」

保育園の先生が僕のことを説明して、僕は幼児生活に飛び込むこととなった。

「しつてるぜ、デクのやつこそせいのおちよーせーにしっぱいして大ケガしたんだ！だつせー！」

園児の中の一人がそう叫ぶ、この声と挑発的な態度……これは——

「こら！ かつきちゃん！ そういうこといわないの、お友達でしょ？」

先生がかつきという名の園児を叱る。やっぱりかつきちゃんじゃないか！ ん……？ なんだいまの違和感？

「でもほんとのことだろお！ まったくデクはおれがいないとなんもできねえんだから……しようがないからおれがめんどうみてやるぜ！」

口は悪いが面倒見のいいことをかつちゃんが言う。でもなんだろうこの違和感は……見た目も性格も昔のかつきちゃんだったと思うんだけど……

「まあ、ちよつとお口が悪いけど、とつてもいい子ねえかつきちゃんは。面倒を見て上げるだなんて流石は女の子！」

「えっ!？」

先生がかつきちゃんを誉めるが聞き捨てならないことを言ったように聞こえた。かつちゃんが——なんだつて!？」

「かつちゃんが女の子!?! うっそだあ！」

「こらあ！ 出久君!! なんてこと言うの、かつきちゃんはかわいい女の子じゃない! 嫌なこと言われたからつてそういうこといっつちやだめよ！」

僕は驚きが口から飛び出し、そのせいで先生に怒られてしまった。

かつちゃんが女の子？あのかつちゃんだぞ!?それにいつもの口調にあの性格じゃないか、やつぱりなにかの間違いだ!!

「ついにそんなことまでわかんなくなつたのか!やつぱりデクはバカだな!バーカバーカ!!」

かつちゃんが僕を煽ってくるがやや涙目になっている、この程度で泣きそうになるなんて……まさかホントに女の子になつてしまつたのか……!!

あまりの衝撃の事実、結局その日は一日中ぼーつとしていた。

——お昼のときも

「おいデク!右手まだダメダメじゃねえか!おれがたべさせてやるよ!」

「あつうん、ありがとうかつちゃん……」

——お遊戯の時間も

「デクはダメダメだからおおきくなつてもだれともけつこんできねーだろうな!だからおれのおむこさんにしてやるよ!かんしやするんだな!!」

「あつうん、ありがとうかつちゃん……」

——帰るときも

「なあデク、おんなのこはかみがながいとかわいいってほんとか?」

「あつうん、そうだねかつちゃん……」

「ふーん、やつぱデクもそーなのか」
妙に優しく、でもいつも通りなかつちゃん、僕は慣れそうになかった……

——それからあつという間に幼稚園を卒園して、僕らは小学生になった。ここ数年で変わってしまったかつちゃんにもだいぶ慣れてきたところだ。

わかったことをまとめると、

名前は爆豪勝姫ばくごうかつき、元の名前の己が姫になって女の子らしい名前になっていた。

話し方や勝ち気な性格は前世と変わらず、まるで男の子みたいな話し方だ。

服装についても前世と同じような男の子みたいな格好をしている。髪が長くなり、よく結わいている姿を見かけるので、一目で女の子ってわかるけど、男装女子ってことではないのかな。

そして、ことあるごとに僕に構ってきて勝負を仕掛けてきた。その都度僕は全力で打ち負かした、女の子って感じが余りしないのと、前世から続くかつちゃんコンプレックスがそうさせた。

その結果僕への態度がかなり軟化したように思える、まあ厳しいところはそのままなんだけど……

つまるところ、かっちゃんが僕を駄目な奴じゃないって認めてくれた以外はほとんど前世と同じような感じだ。

「おいデク、なにぼーつとしてんだよ。置いてくぞー」

「ああ、ごめんかっちゃん、すぐいくよ！」

かっちゃんに呼ばれて、僕は登校班への合流を急ぐ。かっちゃんとは登下校も一緒に、いつも一緒にいる。普通に仲のいい幼なじみみて感じた。

「ホントにデクは勝負事以外ではダメダメなあ、なんでこんなやつに勝てねえんだ？」

「はは、手厳しいね、かっちゃん——」

「優しくしてなんか得するのか——」

「そう言われると——」

こうして僕は小学校時代を過ごした、女の子になってもかっちゃんはかっちゃんだった。きつとこの先もこんな関係が続いていくのだろう、そう思っていた——

——しかし中学に上がる頃には僕らの関係は少しづつ変わっていった、男と女がすっぱりと別れる頃に……つまり二次成長期の始まりだ。

僕は日々の鍛練の成果と個性の調整がうまくいったことからどんどんと逞しく成っていった、それはオールマイトみたいになれてるようで喜ばしかった。しかしそれと同時にかつちゃんとの距離もどんどん開いていった。

かつちゃんは手足も伸びて、出る所も出ている女の子らしい体つきになっていき、顔立ちも美人になっていった。ポニーテールのよく似合う活発な女の子ってイメージかな。

そして中学に入った頃から周りの人に女口調で話すようになっていた、その声はc. v. 岡本信彦のように声変わりをすることもなくc. v. 国立幸って感じの美人系ボイスになっている。

それと中学が上がってからは勉強以外で僕に挑んで来ることが無くなった、男女の身体能力の差が如実に出てきたからだ僕は思っている。

昔は毎日の様に一緒にいたが、いまでは登下校も別々、部活もクラスも別々になり、月に1〜2回遊ぶことがあるかないかというものになっていた。

男らしくなっていく僕と、女らしくなっていくかつちゃん、距離は確かに離れていく。それでもかつちゃんは変わらなかつた。

「おいデクウ！数学の教科書貸してくれ！ついつい忘れちゃったんだよ！」

「あ、うん、いいよかつちゃん。四限目までには返してね」

「サンキューデク！ やっぱやればできるじゃねえの！」

「こんなことで誉められても……」

相変わらず僕に対しては男の子みたいなしやべり方で話してくる、距離感も昔のまんまだ。たまに遊びに行くときも纏めた長い髪を揺らしながらも、男の子みたいにシャツにジーンズ、それにパーカーを羽織ってみたりとそんな格好をしていた。

かっちゃんの中では僕はいつまで経っても変わらず、デクのままなのだろうな。なんか僕だけ変に意識しちやっつてバカみたいじゃないか……！

——そうしてなんとも言えない関係のまま日々を過ごしていき、ついにあの日が訪れた。僕とオールマイトが出会った日、かっちゃんがヴィランに襲われてしまう日が……

最近妙に気になるかっちゃんのことと頭がいっぱいで僕はその事を忘れていた。それに10年間探してもオールマイトに会えなかったことで心の底で諦めていたっていうのも原因だと思う。

前世と同じくマンホールから湧き出たヘドロからオールマイトに助けてもらい、なんやかんやとオールマイトに絡み、ヘドロを取り逃がしてしまった。その時によく僕はその日の出来事をすべて思い出した。

かつちゃんが危ない！そう思ったときには考える前に身体が動いていた。

「すいません、オールマイト！僕はいなくなっちゃいけないところがあるので、これで失礼します！また会いましょう！」

そう言つてビルから飛び降り、全力疾走で騒動の現場へと向かう。

「フルカウル50%オオオ!!——」

僕の出せる全力のワンフオーオールを身に纏い、道を、壁を、屋上を駆け抜けていく。かつちゃん！かつちゃん!!——

現場に着くとそこには大勢の野次馬と手をこまねいているヒーロー達がいた。爆発が起き続けていることから、かつちゃんが巻き込まれているのは間違いないかった。

「なに焦れたいことしてんだよ！そこをどけえええ!!」

僕は叫びながら、特大のジャンプでそれら全てを飛び越える。そして驚く野次馬とヒーローを尻目に騒動の中心へと駆けていく。

そして僕の目に飛び込んできたのは、ヘドロに呑まれかけてとても苦しそうな顔をしているかつちゃんの姿だった。

「かつちゃああああああんつ!!!」

僕がかつちゃんの名前を叫びながら近付くと、かつちゃんがこちらに気がついた。一

瞬その顔が明るくなるがすぐに悲痛な顔に変わり——

「デク!?来るんじゃないやねえ……!逃げろ……!」

かっちゃんは自分が辛くて助けてもらいたい筈なのに僕を安じて逃げろと言ってくる。僕のなかでなにかが高まつていく……

逃げろだと……?そんなことしてやるもんか!かっちゃん、必ず救ける!!

「かっちゃん!今救けるから!!」

「邪魔すんじゃないやねえよクソマツチョ……折角の若い女の身体だ……絶対頂くぜえ……?」

ヘドロがその口からクソみたいなことを言う。その瞬間僕の中のかなにかがついにブチキレた。

かっちゃんを頂くだと……?この下衆が!ふざけたこといいやがって!!そんなこと絶対にさせない!!

「かっちゃんはお前なんかに渡さない!!かっちゃんは——僕のものだ!!」

僕は感情のままに叫びながら、跳び跳ねてヘドロに突撃する。

「うおおおおおああああ!!!」

身体にワンフオーオールが滾り、迸る。僕の限界などとうに超えた力が流れ込むもそれらは暴走することなく全てを制御され、かっちゃんを救けるための力となる。

「デトロイトオオオオオオオオ!!!——」

「青春だな！少年！！私も助太刀しようじゃないか！」

僕が限界を超えた一撃を放とうと拳を振り上げた瞬間、空から巨大な人影が降ってきてそう言った。

「スマアアアツシュツ!!」

「DETROIT・SMASH!!!」

僕とその人の拳が振り下ろされ辺りに、天候すら変えてしまうであろう暴風が吹き荒れる。その風でヘドロ口がかつちゃんの身体から引き剥がれるも、かつちゃん自身も風に飛ばされそうになっていた。普通なら目も開けられないほどの暴風を、僕はものともせず足を踏み込み、かつちゃんを抱き寄せた。

かつちゃん！絶対に放すもんか!!——

僕はかつちゃんを守るように覆い被さるが、風に煽られる。そんな僕とかつちゃんを誰かが飛ばされないように庇ってくれた。

風が止み、そこに立っていたのは笑顔で胸を張るオールマイトだった。

「ありがとう、オールマイト……！」

「どういたしまして！無事かい、おふたりさん——」

その後は警察とヒーロー達が飛び散ったヘドロ口を回収して騒動は幕を収めた。前世と同じくオールマイトは報道陣に囲まれ、かつちゃんは賞賛されていた、そして僕は相

変わらずヒーロー達に絞られるのだった。

でもヒーローが今まで言われなかったことを言ってきた。

「女の子のために飛び出せるなんて、男だな！そんなガッツはいいと思うけどな！」

その言葉に僕はなんだか、気恥ずかしい思いをしたのだった——

——騒動の後の帰り道でかっちゃんが僕を待ち受けていた。

「よおデク、今日は迷惑かけちまったな……」

かっちゃんは俯き加減で僕に謝ってくる、垂れた前髪でその表情は何えないが、見なくても落ち込んでいるのがわかった。

「かっちゃんが気にすることないよ！悪いのはヴィランだし、それに僕も考える前に身体が動いてたっていうかなんというか……」

落ち込むかっちゃんにやや早口でフォローを入れる。

僕はかっちゃんに落ち込んで欲しくなかった、理由はよくわからないけど胸がズキズキするんだよなあ。

「そつか……まあデクだしな、ヒーロー上等って感じか」

「う、うん。そうだね、ヒーローに成りたかったのかもかもしれない！」

かっちゃんの表情が少しだけ明るくなり、軽口を言ってきた。僕はそれに乗って肯定

する。

ああよかった……ん？……なんで僕はかつちゃんの感情にこんなに一喜一憂するんだ？あれ、これってまさか……嘘だろ……!?

「——でも、助けてくれてありがとうな、デク！」

かつちゃんが顔を少しだけ赤く染めて、頬を軽く掻きながらお礼を言ってくる。僕はその光景に胸の奥がキュツとなる。

ああ、まさか……そんなことがあるのか……僕が？かつちゃんに……？自分でも信じられないけど、これはもう……そうなんだろうな。

「いや、その助けてくれたのはオールマイトで僕は大したことしてないっていうか——」

「俺がわからないわけないだろ？あのとキ、個性”使ってたじゃねえか！お前も俺を助けてくれたんだよ！」

動揺して言葉がうまく出てこない、そして僕がスマッシュを放ったことはかつちゃんにはお見通しだったらしい。ああ、顔が熱い……!

「それによお……」

「それに……?」

かつちゃんがいたずらっ子みtainな顔で笑う、なにを言うつもりなんだ？

「かっちゃんは僕のものだ！つてどういう意味かなあ？デクウ？」

「——つゝ!!」

かっちゃんの言葉に僕はぎよつとして、顔が滅茶苦茶にひきつる。聞こえていたのか!!ヤバイ、超恥ずかしい!!

「ハハハ！おつもしれえ顔！」

かっちゃんは長いポニーテールを揺らしながら楽しそうに笑っている、僕はその笑顔を見て——

ああ、そうか……僕はかっちゃんに——恋をしていたんだな、自分でも気付かなかった……！かっちゃんのその笑顔が本当にいとおしく感じる。

僕はやり直しを含めた25年間で初めて本気で人を好きになった。

「んで、どういう意味なんだよ！ほらほら！デクさんよお！」

「いやあ、あのお、あれは言葉の綾というか、つい言っちゃったというか、まだ僕のものでもなんでもないのに——」

「んんゝまだあゝ？それつてどういう意味かなあ？おい！」

僕はまたも口を滑らせる、かっちゃんは目敏めびとくそこに突っ込み僕の肩を笑顔で叩いてくる。

ああ、これ、かっちゃんわかってやってるな……！僕の気持ちなんてお見通ししてワケね………まったくかっちゃんには敵わないな。

「なあデク、お前もしかして俺のこと………す——」

「ちよつとストツプ！かっちゃんには僕の想いなんて筒抜けみたいだし、せめて僕の口から言わせて欲しい！」

「ふうん？」

かっちゃんの言わんとしてることを察して僕は止めた。かっちゃんはニヤニヤした顔で僕の言葉を待つ。ほんとにせめて最後の一押しくらいは自分で決めたい。

ああああああ！うるさい！うるさいぞ僕の心臓！——なんて緊張するんだ！もうバレてるとはいえやつぱり恥ずかしい！でも言おう、この際玉砕しても構わない！！

「あの……かっちゃん！僕は……自分でもいつからかわからないけど………君のこと——好きになってみたいなんだ！！」

僕はかっちゃんへの思いを素直に伝える。かっちゃんは腕を組みながらじろじろとこちらを見ながら黙っている。そして、暫くの沈黙——

「そうか………いつからだ？いつからそう思ってたんだ？」

「えっ？——だからわからないよ！」

「だいたいでいいから教えろ!!」

沈黙を破ったかつちゃんからの問いかけ、ホントにわからないんだけど、なんでそこが気になるんだ!?!……マジ?とかありえねえ!とかそういうんじゃないのか?

「ええ……うーん、中学に上がった頃くらいかなあ?でも気が付いたのはついさつきだしなあ——」

「よおし!俺の勝ちい!!」

僕の返答の途中にかつちゃんが割り込んで勝利宣言をして小さくガッツポーズを作る。勝ちってなんだよ勝ちって!?

「えっ?かつちゃん、勝ちって何?」

「デクウ……俺はなあガキの頃からお前が好きだったんだよ!」

「マジで!?!」

「マジもマジだつーの!全然気付きやしねえんだからこの朴念仁はつー!」

かつちゃんはそう言いながら僕にデコピンをしてくる、身長差があるので一歩近づいてきてから打った、そのため僕とかつちゃんの距離がかなり近くなる。か、顔が近い……!!

「それでもってそのなっがーい片想いからお前を振り向かせたから……俺の勝ちだ!どうだ!」

かっちゃんは勝ち誇った顔で、右へ左へひよいひよいと動きながら僕を見てくる。かっちゃんの髪の毛の香りが僕の鼻をくすぐる。

「ありえない……！ そんなに昔から……？」

「なんか他に言うことねえのか!? ほんとダメデクだな！」

「て、手厳しいね……」

僕はあまりの驚きにそれ以外口から出なかつた、そんな僕を叱咤するかっちゃん。まあ概ねその通りであるから文句は言えない……！

「いや、でもおかしいじゃないか！ かっちゃんは昔っからずつと変わらず、男の子みたいに僕に接してきてて、そんな素振りちつともなかつたし！」

「あー、なんつーんだろな、昔は男みてーな格好してないとお前とふつーに遊べないとか思ってたんだよ……！ それからはその名残って感じだな！」

かっちゃんは少し照れ臭そうに僕の疑問に答える。そういうことだったのか！ 全然気付かなかつた……！

「でもそれならなんで髪型だけは女の子らしかつたの？」

「てめー！ ホントにダメデクだな！ お前がガキの頃に長い髪の方がいいって言ってたんじゃねーか!!」

僕の気の抜けた質問に、かっちゃんは怒りながら答える。

そんなこといったような言っていないような……うーん、覚えてない……しかしそんな昔から意識されてとは……！ホントに僕は朴念仁だなあ。

「まあ……ダメダメなのになんでも俺より強い……そんなお前が好きになったんだけどな！」

かつちゃんは頬を少しだけ赤くしながら、僕の胸を小突いて来た。

「僕も……手厳しいながらもいつも僕を見てくれた……そんな君が好きだ！」

僕も自分に素直になって、かつちゃんへ再び気持ちを伝える。

「俺ら……両思いつてことでもいいんだよな……？」

「いい……と思います……」

「そうか……」

僕らは真つ赤になったお互いの顔を見ながら黙り込む、恥ずかしいながらも心地のいい沈黙が流れる——

「よし！デク、目え閉じろ！」

「えっ?!なに急に!?!僕なにされんの、怖いんだけど?!」

「——っー!!このバカ!いいからさっさと!と・じ・ろ!!」

僕はかつちゃんの言葉の意味が判らず混乱する、かつちゃんはそんな僕の胸ぐらを両手で掴んで引き寄せる、僕はその氣迫に負けて両目をぎゅっと瞑った。

僕の予想していた衝撃や痛みはいつまでたっても来なかった、その代わりに——
「んっ……」

僕の唇に柔らかい感触、そして漏れるかっちゃんの吐息が聞こえた。

その感触が離れていき、目を開けるとそこには顔を耳まで真っ赤にしたかっちゃんの姿があつた。

「……バーカ!」

かっちゃんはそう言いながら、言葉では言い表せないほど魅力的な顔で笑っていた——

——そこからの記憶は曖昧で、かっちゃんとふたりで並んで帰り、かっちゃんを家に送り届けたあと、僕は自分の家路についていた。

「やあ!少年!青春だったね!おじさん胸キュンしすぎて死ぬかと思つたよ!」

「フア!?!オールマイト!?!」

僕の目の前に乙女なポーズをしたオールマイトが現れた、てか見てたのかよ!!

「さて、君が一体何者なのか教えて貰おうか——」

——僕はオールマイトに前世とこれまでの話をして、なんやかんやで弟子にしてもらうことができた。

その後はきつい修行の日々を過ごすこととなったがかつちゃんの献身的な支えもあり無事に様々な試練を乗り越えることが出来た。ついでにその最中にオールマイトの後継者としても認めてもらえた。

そして中学を卒業し、僕とかつちゃんは揃って雄英高校に入学した、ちなみに入試は二人で対策を立てていたので1—2フィニッシュだった。

僕の規格外の力と、入学前からカップルという異様さから僕らはかなり悪目立ちしたが、結果的にクラスの中心となったため悪くはなかったのかもしれない。それから楽しくも厳しいヒーローアカデミアでの生活を送っていた。

この世界でもやっぱりUSJでの救助訓練にヴィランが襲撃してきた。かつちゃんに危険が及びそうだったので僕はそれらを一撃で蹴散らし、大勢のヴィランとヴィラン連合の中心メンバーである死柄木 弔、黒霧の両名を捕らえることができた。

それから体育祭、職場体験、中間・期末試験などヒーロー的で学生的なイベントが目白押しだったけど、どれも僕は無事に終えることができた。

そしてやって来た林間合宿。かつちゃんを拐うとかふざけたことをぬかす連中にブチキレた僕は全員まとめてポコポコにしてやった、そのためかつちゃんが拐われること

なく事件は幕を収めた。

前世と違ってかつちゃんが拐われなかったので神野町での奪還作戦もなくなり、オールフォーワンが表舞台に姿を現すこともなく、僕とオールマイトは死なずに今も生きている。結果的にだがオールマイトを救うことができた!!

——時は流れ、高校を卒業し僕はプロヒーローになった、そしてオールマイトから直々に“二代目オールマイト”を襲名した。それと同時にオールマイトは自身の弱体化と現役引退を発表、それはそれは世間を騒がせた。その時のオールマイトの活動時間はまだもう5分も無くなっていた…

だがしかし、僕が一瞬だけオールフォーワンと出会うという事件が起き、それを聞いたオールマイトはまさかの現役復帰、スリーミニッツ“オールマイト3min”として生涯現役を表明したのだった。

僕らとヴィラン連合の戦いはこれからも続く。

——そして時が更に経ち、今日は……

「とつても綺麗だ、かつちゃん……!」

「あつたり前だろお、まあデクもなかなかカッコいいぞ!」

僕とかつちゃんの結婚式の日だ。僕らの家族や雄英高校の元クラスメイト、オールマイトをはじめとしたプロヒーロー達、いろんな人がお祝いに駆けつけてくれた。みんなに支えられて生きてるんだなってことを実感させられたね……!

——恙^{つつ}無く結婚式は進行していく、そして……

「それでは誓いのキスを」

神父さんに促されて、僕とかつちゃんは向き合う。かつちゃんが目を閉じて顔を上げた……僕はゆっくりとその唇に唇を近付け——

「キヤー!!誰かあ!!!」

——その瞬間、遠くの方で悲鳴と爆発音が聞こえた。

「かつちゃん……」

僕はこちらを見上げるかつちゃんの名前をただ呼ぶ。

「ああ、デク……」

かつちゃんも不敵な笑みを浮かべて僕の名前を呼ぶ。

「「いこう!!」」

僕らはタキシードとウエディングドレスのまま駆け出す。

だって僕らはヒーローなんだから、誰かを救うために飛び出さずにはいられない！
——これからも僕とかつちゃんの波乱万丈で幸せな生活は続いていくだろう、これはそんな物語だ。

—— 完 ——

デクのヒーローアカデミア 再履修！

〜 I F エンド もしもかつちゃんが男装ポニテ美少女だったら〜

原作 僕のヒーローアカデミア 作 堀越耕平

作者 くろわっさん

Special Thanks 読者の皆様

第五章 愛と炎の雄英体育祭

祭と喧嘩はセツトなのかもしれない

僕は八百万さんのお屋敷でクラスメイトに過去の一部を語った。続きが気になるところで時間となり、その日は解散となった。休校が終わりこれからまた僕のヒーローアカデミアが始まる！

時は放課後、クラスのみんなが浮き足だっている。このきつかけはそう、ホームルームでの相澤先生の一言だった——

「おはよう」

教室のドアを開けて、相澤先生が挨拶をする。USJの騒乱でわりと重症を負っていた相澤先生だが、前世のときよりは怪我が少なかった。そのためカバリーガールの治療により、この二日で完治するまでに至っていた。

「突然だが——雄英体育祭が迫ってる！」

相澤先生のその一言にクラスの中が驚喜に包まれる。切島君、クソ学校つばいってなんだ？ 雄英はクソじゃないぞ！

その後相澤先生は雄英体育祭の説明をしていき、みんなの興奮はどんどんと高まっていった。その興奮は昼休みを挟み午後の授業を終えても収まらず、放課後になった今に至るといいうわけだ。

「緑谷ちゃん……いえデクさんと呼ぶべきね。デクさん、体育祭頑張りましょうね」

「そうだな蛙吹！ オイラもデクさんって呼ぶぜ！ オイラもモテモテになるため頑張るぜえー！」

蛙吹さんと峰田君が話しかけてきた、またデクさん呼びする人が増えるのか!? なんだ!?

「あ、うん体育祭頑張ろうね。ところでなんで蛙吹さんも峰田君もデクさんなんて呼ぼうと思ったの？」

「はあ？ そんなのUSJでお前に助けられたからに決まってるだろー？」

「そうよデクさん、峰田ちゃんの言うとおりだわ。これでも私達結構感謝してるのよ？ ……あと梅雨ちゃんと呼んで頂戴」

二人が揃って同じ事を言ってくる、なるほど僕が助けた人はデクさん呼ばわりしてくるわけか……まあいいかデクってあだ名は好きだし！

「わかったよ峰田君！梅雨ちゃん！」

「意外とあっさり呼んでくれるのね、もう少し照れたり戸惑ったりするかと思ってたわ」
「まあ、ある人にその辺は鍛えられたっていうかなんていうか——」

そんな話をしていると、教室のドアの辺りが騒がしくなっていることに気が付いた。

「わかったつーの、意味ねえからどけ、モブ共」

「誰がモブだ！こらあ!? チョーシのつてんじやねえつてんだろ!!」

「いやあ本当にヒーロー科にはガツカリだなあ」

教室のドアの前にはたくさんの他クラスの人達、その先頭にはB組の鉄哲君と普通科の心操君がいて、かっちゃんと言いつ争っていた。

とりあえずかっちゃんを止めよう、放っておくと余計なヘイトとトラブルを生み出しそうだ……！

「かっちゃん！とりあえず知らない人のことモブって言うのやめよう?」

「ああ!?!——んだよデクか、それはこの道を塞いでる邪魔な石ころ共のことか?」

「てめえコノヤロー誰が石ころだ!こちとら鉄だつーの!!」

かっちゃんに注意するも、聞く耳を持たない。これはかっちゃん、だいぶイラついてるなあ、こうなると僕の話もなかなか聞かない。あとその返しでいいのか鉄哲君!?

「うーん、どうしたものか……んっ?」

この状況をどう鎮めようか考えていると、虫が飛んでいるのが目につく。

「英雄にもこういう虫がいるんだ——なっと!!」

僕はぼそぼそと低い声で呟きながら、ドアに止まっていた虫を叩き潰した。その結果、英雄特有の特大ドアはバンツという大きな音を立てながら外れてしまった。

「おっと、意外と簡単に壊れそうだ……気を付けないとな——んん?」

僕はまたをぼそぼそと低音で独り言を呟く、手をティッシュで拭いていると、視線を感じたので周りを見してみる——

「やべえ、やべえよ、あいつ!」 「俺らのことしれつと虫とか言ってたぞ……!」 「あのドアが外れるところ初めてみたぞ……!」

周りの人達がなんだがざわついている……: どういう状況なんだ!?

「やるなあデクウ! 邪魔物はそうやって黙らせるのか!」

かつちゃんが目を輝かせながらよく分からない賞賛をしてくる。たかだか虫を潰しただけだろう? なにをそんなに感心してるんだ? :

「ああ、邪魔物って程でもないでしょ? 普段は気にも止めないけど、今日はたまたま目についてねっ!!——つと、気が付いたら普通潰さない?」

僕は外れたドアをはめながら、かつちゃんへ笑顔で説明する。かつちゃんって虫も殺

せない程の博愛主義だっけ?——んなわけないか。

「つ、潰されるぞー!!」「プチつといかれるぞ!!」「にげよう!やべえよあいつ!」「これがヒーローのやることかよお!!」「今日のところはこの辺にしといてやる!覚えとけー!!」

他クラスの人は思い思いに叫びながら走り去っていった。

敵情視察に来てたんじゃないのか……?なんか怯えてるみたいだったけど……一体なんだったんだろう……!

「帰っちゃったよ、なんだったんだろうね?」

「その平常運転すげえな緑谷……」

切島君が呆れている、いったいなんだったんだよ!

その日はそのままかつちゃんと一緒に帰った、かつちゃんは終始興奮ぎみだったのがよくわからなかったが……

——その後日「A組にはラスボスみたいなヤバい奴がいる」という噂が流れていたらしいが、まあたぶん僕には関係ないだろう。

雄英体育祭まであと二週間、前世と違ってオールマイトとの修行で圧倒的な力を得た僕なら、準備なんていらぬな——

——なんて言うと思ったか!? もう僕は自分の力に慢心したりしないよ! 前世の記憶を呼び起こして、出来る限りの準備をしてやるぞ!! ——まずはあそこに電話だな……

「もしもし、私オールマイト事務所の緑谷と申しますー。イ——」

——別の日、今僕は大きな日本家屋の玄関先にいた。

「こんにちは、突然すいません。僕は緑谷つて者なのですが、お父様はご在宅でしょうか?」

「えっと、父ですか? 居ますけど、失礼ですがどのようなご用でしょうか?」

僕が出てきた白髪の女性に笑顔で話しかける、少し不審がられているが、ここで引くわけにはいかない!

「オールマイトの弟子が来たって伝えてもらえばわかると思います」

「はあ、わかりました。少々お待ち下さいね——お父さん——」

女性は家の奥へと小走りで向かっていった。たぶんこれで話くらいは出来るだろう、

さあ踏ん張りどころだ——

——数時間後、僕はその家をから出ていった。

「思ったよりやられたなあ……コスチューム持つてくればよかったな」

僕は独り言を言いながら家路を歩く、服はボロボロで、結構火傷もしてしまった。

でもまあ、これでだいたいの仕込みは出来たかな。あとは結果次第！頼みますよ——

——そして雄英体育祭当日、僕はかつちゃん和麗日さんと一緒に会場へと向かっていった。

「結構出店とか出てるねえ、流石は雄英体育祭！まさにお祭りって感じだ！」

「そうだねデクさん！ほらみて、屋台だけじゃなくてお面屋さんまであるよ！」

僕と麗日さんはその光景にテンションが上がる、やっぱりお祭りは楽しまなくちゃね

！

「これから競技があるつてのに呑気なもんだなあ丸顔お！」

「丸顔じゃなくて麗日だよ！、爆豪君こそ余裕無さすぎるんじゃない？緊張しちやった？」

「はあ？緊張なんてぜんっぜんしてねえわ！よゆうだっつーの!!」

麗日さんとかつちゃんと言ひ合ひをしている、こんなものは最早日常風景だ、僕もいちいち止めたりしなくなつた。

でもかつちゃん緊張しているのは本当だ、いつもより顔が険しくなっているもの、真の幼なじみの僕にはわかる。

そんないつも通りの会話をしながら出店の間を歩いていると、前から誰かが小走りで寄ってくる。

「デクくん！おーい！」

「あ、優さ——じゃなくて、Mt. レディ！暫く振りですね、今日は警備で来たんですか？」

そう言つて僕を呼んだのはMt. レディだった、話すのはUSJに遅刻した日にチラツと会つた以来だろう。僕はなんとなくの事情を察して話をする。

「そうなのよ、ホントは応援に来たかつただけど、こればかりは仕事でね……」

「今年は警備の数が例年の5倍くらいいるらしいですからね、どこみてもヒーローだらけでもう最高ですよ！」

「そ、そう。それは良かったわね……」

やや興奮ぎみに語る僕に、引き気味のMt. レディ。プロヒーローになると他のヒー

ローにテンション上がることとかなくなるのかな？

「そうそう、さっきたこ焼き貰ったのよ！はい、あーん」

「えっ——んごお!？」

「ひゃあ!Mt. レデイがデクさんにあーんって……あーん!って……!!」

突然口にしたこ焼きを突っ込まれて、僕は吹き出しそうになる。隣にいた麗日さんが壊れたラジカセのように同じ言葉を繰り返す、びつくりしたのは僕だ！麗日さんじゃないだろう……？

「おいデクっ！くだらねえことやってんじゃねえよ！んなババア置いてさっさと行くぞ!!」

「はあ？私はまだ23よ！このクソガキ、誰がババアですって!？」

「てめえしかいねえだろ角マスクのババア!!」

「あーんって……デクさんがあーんって……私もやったら食べてくれるやろか……?」

思ったよりたこ焼きが熱々で、未だにハフハフしている僕を尻目にかっちゃんとなにかを呟いている……なんだこの状況!？」

「ロリコンみたいな声してるからって、ふざけたこといってんじゃないわよ、クソガキ!」

「ああん!? 誰がロリコンみたいな声だゴラア!!」

「あんたよ、クソガキ! どうせ「中学生はなあ……ババアなんだよ……!」とか普段からいつてんでしようが!!」

「ぜつて一言わねえわ! てか、いちいちデクに絡んで来やがつて。てめえこそシヨタコンさんですかあ? デクはまだ高校1年の16歳なんですけどお?」

「あんたみたいなクソガキと違ってデク君は落ち着きが有るからいいのよ!! あんたこそ、いちいち絡んできて……もしかしてホ○なの? そうなの?」

「ぎっけんなババア!! 誰がホ○だ! 頭ん中腐つてんじゃねえのか!? ああ!」

「へっ…!? いや、その……つて!! 腐つてないわよ!!」

かっちゃんとうとMt. レディの悪態言争い戦争は白熱していく、僕が口を挟む余地すらないかも! この状況を打破するにはどうすれば——

「あの、二人ともその辺で——」

「デク(君)は黙つてろ(て)っ!!」

—— どうしようもない! 僕には無理だ!! 麗日さんも機能停止中だし、どうすんだよこれえ……

「おいMt. レディ! そこまでにしておけ!」

「我らを置いて居なくなつたと思えば学生と口喧嘩をしているとは……なにをしにきて

いるのだ？」

そこに二人を止めるヒーローがやって来た。

「デステゴロ！シンリンカムイ！二人を止めるのを手伝ってください!!」

「よお、オールマイトの弟子！久し振りだな！勿論そのつもりだから安心しな！」

デステゴロが心強いことをいってくれる！流星は危険・安全確認の工事看板にもなったヒーローだ！

「デクよ、憎坊ヘツドギアの件以来だな。我も止めに——」

「あれ、あのときカムイっていましたっけ？」

「いたよ！ポロポロになりながら頑張ってたじゃねえか!!」

「カムイ、口調が素に戻ってんぞー」

下らないやり取りをする僕とカムイとデステゴロ、いまはそんなことをしてる場合じゃない、そろそろ止めないと殴り合いにでもなりそうだ！

「おい、迎えがキテンぞババア！こつから先は一方通行だ！大人しく尻尾才巻きつつ泣いて無様に元の居場所へ引き返しやがれエ!!」

「いい加減にしなさいよ、こんのっロリコンボイス!!踏み潰すわよ!!」

とか言ってる間に今にも火が付きそうだ！ヤバい!!

「かつちゃん！ストップだ、この辺にして会場へいこう？遅刻しちゃうよ！」

「Mt. レディ、お前もいい加減にしろ、いい大人が高校生と張り合うなっての！」
僕とデステゴロが二人を止める。

「先いつてろデク！このババアを速攻でブツ飛ばしてすぐにいくからよお！」BOM!
「ぬかすじやないのクソガキ……先輩、こういうヒーローなめきつたクソガキに現実を
教えてあげるのも大人の役目だと思っうんですよ……！」

かっちゃんも爆破を掌で迸らせ、Mt. レディはファイティングポーズをとりはじめた。

これはホントにまずいぞ……仕方ない、ここは僕が一芝居しよう！これで止まらな
きゃ——

「いい加減にしないか二人とも！そんなに暴れたいなら……相手になつてやる、二人ま
とめて大人しくさせてやろう……こっちだ……ついてこい……」（玄田哲章ボイス）

僕はそう言つて、筋肉を唸らせワンフオーオールを身に纏いながら威圧感を放つて二
人に背を向ける。

——本当にボコボコにして、止めるしかなくなつてしまう！頼む、落ち着いてくれ

!!

「……わりい、ちよつと熱くなりすぎたわ。迷惑かけたな……」

「ごめんなさいデク君！私も大人げなかつたわ……デク君を困らせるつもりなんてな

「かったのよ……」

二人が揃って謝ってくる、だいぶ落ち着いた……というより落ち込んだみたいだけど、ここは心を鬼にしてもう一押しだ!

「どうした……? 暴れたいんだよね……? もう喧嘩なんてやりたいと思えないほど、足腰立たなくしてやろう……」(玄 (ry))

さらに威圧感を増しながらふたりに問いかける。

「そんな喧嘩なんて、ねえクソガ……かつちゃんくん!」

「バ……Mt.レディの言うとおりで、喧嘩なんてしないぜデク!」

二人はそう言って握手をしてこちらを見てくる。そろそろいいかな、やりすぎちゃったみたいだし……!

「そうだったんだね! 勘違いしてたよ、ごめんね二人とも!!」

「ふう……」

振り返り二人に笑顔で話しかける、二人とも安堵の顔を浮かべていた。そんなに怖かったかな僕……

「じゃあ、いこうか! 麗日さんもいくよ!」

「あーんって……あーんって……」

そういつて故障中の麗日さんの手を引いて、僕は会場へと歩きだした

「あの威圧感を向けられると流石に怖いわね……」

「デクは昔つからキレるとこえんだ……」

「そう……」

「そうだ……」

——会場に着いたあと僕らは体育着に着替えて控え室に集合する。前世と違い、轟君が宣戦布告をしてこなかったが、チラチラと僕の方を怖い顔で睨んでいた。

んだてめえ！さつきからガン飛ばしてんじやねえぞ半分野郎!!

って感じでかっちゃんなら行くんだろうけど、僕の柄じやないな。

そして時間となり、僕らはプレゼントマイクの大袈裟な説明と共に入場した。クラスのみんなは大勢の観客にそわそわしている、そんな中僕は——

「ねえ、さつきからこつちをチラチラと見てたよね？なにかな、轟君？」

「——！緑谷……お前には——いやなんでもない、睨んで悪かったな」

「そう……気にしてないからいいよ。体育祭、全力で頑張ろうね！」

「ああ……」

轟君にさつきの真相を尋ねるも、はぐらかされてしまった。ついでに轟君にエールを送ってみたけど、まあ響いてないよね……

1年生が全員入場し終わると、壇上に18禁ヒーローミッドナイトが現れる。今日もエッチいぞ！

「選手宣誓！選手代表！1—A、緑谷出久!!」

「はいー」

選手宣誓で呼ばれたのは僕の名前だ、やはり予想通り、昨日から宣誓の言葉を考えておいてよかった！

「やっぱり代表はデクか！」

「爆豪君じゃなくてよかったよ〜荒れそうだし！」

「喧嘩売ってんのか丸顔お！」

僕が壇上に上がるまでの間にかつちやんと麗日さんのそんなやり取りが聞こえる、悪いが今回は僕が入試一位通過だからね！

「宣誓！私達選手一同はヒーローシップに則り、正々堂々戦うことをここに誓います!!」
「普通だ……」「すげえ普通だ……」「逆にすげえよ！」

僕の宣誓に何故か周りがざわつく、ここまでは普通の宣誓の筈なのに!?

まあいい、これからが宣誓の本番だ……力を貸して下さい、オールマイト……！——
よし！いくぞ!!

「そしてもうひとつだけ！」

「まだ続くのか!?」「何をするつもりだ、ラスボスめ……」

僕が宣誓を続けたことで周りがまたもぎわつく、これは予想通り!

「この体育祭、僕が一位になる……ヒーロー科、普通科、サポート科、経済科……全員!!
余すことなく全力で挑んでこい、有精卵共!!」

僕はワンフオーオールを纏いながら、低い声でいい放つ。今度は僕が宣戦布告をする番だ!!

「いいぞお!デクウ!!」「いいだろう、いくぞ緑谷君!!」「か、カッコいい……」

「ぎっけんな、こらあ!!」「なめてんじゃねーぞA組い!!」「自信満々だなあ、恥かかなきゃいいなあ……」

賛否両論入り乱れた喧騒が巻き起こる、会場のボルテージも一気に上がっていくのがわかる。

「いいわあ!みんな上がりまくりじゃない!!それじゃ早速第一種目いくわよ!——」

僕が壇上から降りるとすぐにミッドナイトが壇上に駆け上がり、興奮ぎみに話します。

第一種目は前世と変わらず障害物競争だ、なんでもありのデスレース……あれ、やりきれるかなあ?いや、やるしかない!!

「——さあさあ位置につきまくりなさい！」

そして雄英体育祭、最初の競技が——

「スター——スタート!!!」

——ついに始まったのだった！

「〴〵おーつとおい?!——A緑谷あーなんとスタート位置から動いていなあ——い?!? 一体どうしたんだ?あの優勝宣告はなんだったんだ——?!?」

プレゼントマイクの実況の通り、僕はスタートラインから一步も動かないまま、第一種目が始まった——

急がず焦らず、みんなを救ける障害物競争！

ついに始まった雄英体育祭、僕は万全の準備をして挑む。途中かっちゃんもM t.レデイの小競り合いがあったけど、事なきを得て開会式へと進んだ。そこで僕は宣誓を交えた宣戦布告をした、絶対に一位になるんだ!!

「おーつとお?!ーA緑谷あ!なんとスタート位置から動いていなあーい!!? 一体どうしたんだ?あの優勝宣告はなんだったんだー!?!?」

プレゼントマイクの実況の通り、僕はスタート位置から一步も動かないまま第一種目が始まった。僕のこの行動の発端は昨日の出来事に遡る――

――雄英体育祭の前日、僕はオールマイトにいつもの仮眠室へと呼ばれていた。

「失礼します、オールマイト。話ってなんです?――って相澤先生?どうしてここに?」

僕はドアをノックしてから仮眠室へと入る、そこにいたのはオールマイトと相澤先生だった。

「やあ、緑谷少年。お疲れさん！」

「俺がいるのは、今日の話に俺が一枚噛んでいるからだ」

オールマイトが軽く挨拶をしてきて、相澤先生は真剣な表情で話してくる。なんの話だろうか？

オールマイトの態度が軽いからそこまで危険だったり、重い話ではないのかな？――

「いや、オールマイトは笑顔でヤバい修行を言い渡すことがあつたけな……油断は出来ない！」

「それで、話ってなんです？」

「単刀直入に言おう、明日の体育祭、お前にはハンデを負って挑んでもらおうと考えている……」

「えっ?! ハンデを?!」

相澤先生の言葉に僕は驚いて、おうむ返ししか出来なかった。どうしてこうなった!

「正直、一人の生徒に負荷を与えるのは不平等で好きじゃないんだが……お前はあまりにも規格外過ぎる……普通にやっても恐らくお前が圧倒的な一位を獲得し、優勝するだけだろう……」

「いや……そんなことは——」

「あるだろう、お前。個性把握テストでやりたい放題やったのを忘れたのか？あの結果を見れば誰だつてそう思うだろう」

「……………はい……」

「H A H A H A!!痛いところ突かれたね、緑谷少年!」

相澤先生の正論に言葉がなくなる僕、オールマイトはそれでも豪快に笑っていた。確かにあれはやり過ぎたかもしれないと思っていたんだよね……

「雄英体育祭は生徒に同士を競わせて、お互いに高め合うことを目的としているが、その他にも各所メディアへの雄英のアピールの場でもある。お前一人がやりたい放題やると、他の生徒が目立てないし、雄英が弱体化したとakaありもしないことを言われるかもしれない……」

職員会議ではお前の参加を禁止する案も出たんだが、流石にそれは俺が蹴った、そこまでの不平等は許せん。しかしそこでハンデつけさせることが決まってしまった……」

「そこでだ!緑谷少年にはただ競技に参加するだけでなく、雄英をアピールしながら参加してもらおうと思うんだよね!」

「アピールがハンデ?つまりどういうことですか?」

相澤先生の話で事情は理解した、しかしオールマイトの言ってることがよくわからな
い。

「先ずは第一種目、そこで君には出来るだけ多くの生徒を『救つて』ほしい。この言葉
の意味は実際競技になれば解るだろう」

「競技内容を先に漏らすわけにはいかないからな、不明瞭なのはすまないが、そういうハ
ンデを負ってもらおう。救いすぎてお前が脱落する形でも雄英のアピールにはなる、高い
ヒーロー精神を持った者がいるってことでな」

「第一種目で『救う』ですね、わかりました……」

僕はオールマイトと相澤先生の説明に了解した。

「もしそこでお前が一位になるようなら、第二種目でもハンデを用意しておく、それは
こつちでやるから覚悟だけしておいてくれればいい。レクリエーションと最終種目に
関しては要らないだろう、そこまでいけばあとはお前の強さを披露することが一番のア
ピールになる。それと……大人の都合に巻き込んでしまつてすまない、緑谷……」

「いえ——」

「緑谷少年！これは君に課せられた試練だ！つまりは久々の修行だな!!」

相澤先生のシリアスな大人の都合を吹き飛ばすようにオールマイトがそんなことを
言う。なんだつて？修行!?

「えっ！修行はもう終わったんじゃ——」

「私個人からの修行はな！これは世間から課せられた君への修行さ、これからプロヒーローに成れば様々な逆境やハンデが君をがんじがらめにするだろう！それに対する対応を学んでもらいたいんだよ、なにせここはヒーロー科。そのための学校だからね!!」

「なるほど……」

「それにね、相澤君はああいったが……私個人としてはハンデを負ってでも、君には一番になつて欲しいんだ！そして世間に知らしめて欲しい——誰よりも輝く次代の希望が、平和の象徴の最強の後継者が、緑谷出久が来たつてことをね!!」

「オールマイト……!!」

オールマイトが僕の目を見ながら力強く語る。オールマイトが期待してくれてるんだ！戸惑つてる場合じゃない!!

「オールマイト！僕はやりますよ！どんなに困難も逆境もこの筋肉と個性ちからで乗り越えて、僕が来たつてことを知らしめてやりますよ!!」

そう言つて僕は決意を固めたのだつた——

——というのが昨日あつたことだ。

みんなを救うため、僕はスタート地点で待機してるってわけさ、何故かって？それは

「うわあ！なんだよこの氷!!」

「う、動けねえ……!」

「A組のやつ個性だっ!」

——ほら始まった、轟君の妨害。大勢の生徒が足元を氷漬けにされて動けなくなっている、さあ僕のスタートはここからだ!!

「大丈夫！今救^{たす}けるからねっ!」

僕はスタート地点から走り出して、ひとつ跳びで人混みを跳び越え、少し開けたところに着地する。

「アリゾナ・スマッシュ!!」

僕は地面を震脚で強く踏み込み、絶妙な力加減で氷を砕いた。生徒の足を壊さず、氷だけを壊すのはなかなか大変だな!

「〴〵ここで緑谷が、轟が氷漬けにした生徒を救出したあ!!これを見越してスタートを遅らせていたみたいだぞ!やるう!!」

「競い合う中でもヒーローシップを忘れないか、これぞ雄英ヒーロー科だな」

プレゼントマイクが少し大袈裟に僕の救出劇を実況し、相澤先生が追撃をする。雄英

のアップールってこういうことでもいいんだよね!?

「助かったぜ! ヒーロー科のムキムキさん!」

「サンキュー、マツチヨメン!」

「怪我した人は無理せず救護室へ行ってね! それじゃあね!」

僕は助けた生徒達にそう告げて走り出した、関門はこれからだ!

もう目の前には第一関門のロボインフェルノが開始しており、遠目でも巨大ロボットが氷漬けにされているのが見えた。あれはそろそろ倒れて誰か下敷きになってしまうな、急ごう!

「アイダホ・スマアアツシユツ!!!」

僕は一気に他の生徒を追い越すと、倒れてきてた巨大ロボットの氷塊をジャンプを加えたアツパーカットですべて砕き去る。

「〴〵ここで緑谷! バカデカイ氷のオブジェを砕き、またも生徒の窮地を救ったあー!!」

なんとか下敷きになりそうな人たちを救えた! まったく轟君め! 彼こそがこの競技で一番の障害物なんじゃないか!?

「緑谷!?! あれを一撃で全部こなごなとか、なんつー昇〇拳だよ!」

「げえ! A組に邪魔されたと思ったらA組に助けられた!?!」

潰されそうだったのは切島君と鉄哲君だった。あれ、これ助けられない方が彼らの為になつたのでは……？いや、たぶんこれでよかつたはず……？——おのれ轟君、なんて危険なことを！

「——つと危ない！」

そうこうしてる間に他の生徒が小型ロボットと戦闘に入り、やられそうな人が目にはいる。僕はその間に割って入り、行動不能にならない程度にロボットを破壊する。

ヒーロー科の生徒はともかく、他の科の生徒は戦闘に慣れていないみたいで危なっかしいな。出番を奪わない程度に助けよう！

「ふんっ！せいっ！とりゃ！いいいやあつ!!」

僕は流れるようにロボットの間をすり抜け、手足などの一部のみを破壊して回る。うーむ、手加減つて難しいな！

「うおお、はええ！筋肉さんすげえな！」

「危ないとこだったぜ、ありがとう！」

「戦闘に自信がない人は無理に一人で戦わず、協力して数で押すんだ！冷静になればそんなに強いロボットじゃないよ！それじゃ頑張つてね！」

僕は苦戦している生徒達に呼び掛け、先を急ぐ。結構時間を食ってしまったな……！そして第二関門の地獄の綱渡り、ザ・フオールについた。すでにトップの轟君は渡り

終えそうだが、そして他の生徒もそのあとを追って綱を渡っていた。

それぞれの個性をうまく使ってみんな綱を渡っていく、しかし中には気持ちが焦ってしまふ人もいるだろうな——あつ、ひとり落ちた。

「きゃあ——————」

「どっこいしょ——————つと！キャッチ！アンドダツシユ!!————つと、大丈夫？」

「——……ありがとう、死んだかと思ったわ……」

僕は助走を着けてかつとび、落ちそうになった生徒をキャッチして、壁を走って登る。そして足場に下ろしてあげた。スパイクシューズが靴として認められてよかった。

「〃緑谷またしても生徒を救出——！救助ポイントは無いが、これはこれで応援したくなるぜ——!!」

「〃彼がどれほどの生徒を救助できるか、見物みものですね」

プレセントマイクの感情丸出しの実況と相澤先生の感情の籠かごってない解説、温度差激しすぎだろ！

しつつかし、今の救出劇でここでもすつかり注目の的になったな……！

「筋肉の人、凄い目立ってますねー、あんまり目立たれると私のドツ可愛いベイビー達が目立たないんですど、フフフフ——」

サポート科の発目さんがこちらを見ながらワイヤーを使って滑空していた、これこれあんまり余所見していると――

「フフ、ふぁー!?滑る、滑りますよこの足場ああ!!」――

滑空から着地した発目さんが、凍った足場に足をとられてそのまま滑り落ちていく。言わんこつちやない!というかまた轟君の仕業か!どんだけ妨害上手なんだよ!!

「ああああ――つわあ!?!――筋肉の人!?!」

「大丈夫?ちゃんと前見て進まないといけないよ!」

落ちる発目さんを飛び込みながら両腕で抱えてそのまま足場を目指す、僕は注意をしてから発目さんを足場に下ろす。きりがいな……

「おい、みんな自分の個性や能力に合った渡り方をするんだ!落ちたら元も子もないからね!!それじゃ僕はいくから、気をつけてね!!」

大声でこれから綱を渡ろうとする生徒達に注意喚起をして、僕は足場を一步步つ跳びながら進む、綱?そんなものは僕には関係ないね!

「凄いですねえ筋肉の人……あの人と一緒に居れば目立ってますねえ、フフフフ……」

ザ・フォールを抜けると、最終関門の一面地雷原、怒りのアフガンが見えた、既にトッブは地雷原の終盤に差し掛かっているようだった――

——しかし、トップの争いが激しすぎる……かつちやんと轟君が足を引つ張り合いながらお互いの個性を存分に撒き散らし、辺りに爆破と氷塊をばらまいて、後続の生徒を吹き飛ばしていた。

ここにきても轟君！まあた君か!! ヴィランか？ヴィランなのか轟君？——よし！これ以上好きにはさせない！轟君を、いやあの二人を止めてやる!!

「いい加減にいいいっ!!」

僕は助走をつけて両足で地面を踏み込む、その瞬間全身に力をみなぎらせる。

ワンフォーオール、フルカウル！88%!!

「——しろおおおおお!!」

そして両足で地面を蹴り飛ばし、加速しながら低空飛行で真っ直ぐと飛び跳ねる。

「〃おお!! 緑谷ここで一気に猛追い——! 地雷原をワンジャンプで飛び越えていくつもりか——!」

「かつちやああんっ!! 轟くううんっ!!」

「なっ!! デク! いつの間に——」

「緑谷?! つはやっ——」

僕は二人の名前を叫びながら飛ぶ、そして二人が僕に気が付きこちらを向いて驚く。

僕はその頭を両手で一つずつ鷲掴みにして——

「——ステイっ!!!」

——地面へとめり込むように叩きつけた。これで悪は滅びた……!

結果、二人は地雷を踏み抜き、爆発で上へと飛ばされた。僕はその爆風にのってそのまま地雷原を飛び越える。

「〴〵ここでトップ二人が吹き飛び順位が大きく入れ替わるかあ?!?そしてトップに躍り出たのは——A緑谷だあ!!」

僕はそのままゴールへと全力で駆け抜けて——

「〴〵そして緑谷、独走状態でそのままゴールへと向かううー!!!このレース一位で通過したのは、途中多くの生徒を救出しながらも、その圧倒的な力を見せつけた男!!緑谷出久だあー!!!」

——無事に一位でゴールすることができた。

僕がゴールしてから少しして、後続の人達がゴールしてくる。

二位につけたのは、なんとかつちやんだった。あの爆発で飛ばされてから体勢を立て直して後続を振り切ったのか……すごいな、流石は才能マンと呼ばれるだけはある……そして三位は轟君だった、彼もまた才能マンだ……そうだね、もう特に言うことはないね。

そのあとの順位はだいたい前世と変わらないものだったと思う、そして上位42名が

揃った。

ミッドナイトが壇上に上がり、上位42名の紹介をしたのちに次の種目の発表を勿体ぶる、そして――

「次の種目はこれ！騎馬戦よ!!」

次の種目をミッドナイトが発表し、周囲にどよめきが起こるも。ミッドナイトは説明を続けていく。確か、下位から段々と持ちポイントが増えていつて、そして一位のポイントは――

「――1000万ポイントよ!!」

そう、ずば抜けて高い驚異の1000万ポイントだ、やはり前世と同じだ、でも今の僕なら1000万のハチマキも守りきれぬだろう!さあ、かかってこいみんな!!

「そして、一位のハチマキはなんと特別製よ!」

「えっ!?!」

ミッドナイトの説明の続きに驚きの声のでてしまった。なんだそれ、聞いてないぞっ!!

「長さ15mの超極長ハチマキ!!奪われないようにするのは困難よお、さあ頑張りまくりなさい、一位の緑谷君?」

「――っく!!」

僕はもう驚きで声がでなくなる。そんな長いハチマキ踏んだり引つ張られたりですぐちぎれちやうんじやないのか?! いいのか!?

「そのハチマキは俺の拘束具と同じ素材で出来ている、軽さと強度は俺のお墨付きだ。存分に奪い合うといい、頑張れよ、先程やりたい放題やって一位の緑谷……!」

そんな僕の心を読んだかのように、相澤先生がハチマキの説明を始める。

ちくしょう! 第二種目のハンデってこれかよ!! なが「覚悟だけしておいてくれればいい」だよ! 覚悟じゃどうにもなんないだろこれえ!! あれか、やりたい放題やるなって言われたのにやりたい放題やったからか!?

「さあ障害物競争一位の緑谷、始まる前から大ピンチだぞ!! これからどういう戦いを見せるのか、ヒツジョーに楽しみだあ!!」

プレゼントマイク……僕はぜんっぜん、楽しみじゃないよ……! どうすりゃいんだよっ!! 助けて、オールマイトオオオオ!!

———こうして僕は雄英教師陣の期待悪意によって、前世より更に追い詰められた騎馬戦へと挑むことになった。

全力全壊！騎馬戦バトルロイヤル！

雄英体育祭、第一種目は障害物競争だった。僕は数々の障害と轟君からみんなを救いながら走り抜き、無事に一位を獲得した。

そして第二種目の騎馬戦で僕に渡されたのは1000万ポイントの重圧と15mの超極長ハチマキだった、どうする？僕!!

「——それでは早速、15分間のチーム決めの交渉タイムスタート！」

ミッドナイトのその言葉と同時に僕の周りから人が一斉に居なくなる。

そりやそうだ、いくら障害物競争で一位を獲得する人間とはいえ1000万はリスキー過ぎる、それに加えてあのハチマキだ、誰も進んで組みたくはないだろう。だからこそ、僕は自分から動かなきゃいけないんだ!!

「障子君！砂藤君！口田君！僕と騎馬を組んでくれないか!?僕の身体を支えられる強力な騎馬を作れるのは君達だけなんだ!!」

僕は目当ての三人に一気に声をかける。筋肉同盟プラスアルファなら最強の騎馬が

作れる!」

「すまねえが、俺はお前と戦いたいてえんだ!一緒に組むことはできねえ!!」

「俺も砂藤と同じ意見だ、雄英体育祭という絶好の機会、お前に挑ませてもらう」

「そつそんな!」

二人は僕の提案を断り、僕と戦う道を選んだ。筋肉同盟の鉄の絆が逆に彼らの対抗心に火をつけたらしい……!

「……………」

口田君も首を横に振り、拒否を示す。そんなに仲がいいわけでもないし、当然か……こんなことなら筋肉同盟に誘うなりすれば良かった……

まずいぞ……当初の計画が一気に崩れた!あと僕を支えられそうな人はハッ!いるじゃないか!誰かに獲られる前に早く誘わなきゃ!!

「おーい!麗日さーん!!」

「デクさん!?!まさか——」

「よかったまだ誰にも獲られてなかったんだね、僕と一緒に戦って欲しいんだ!!」

僕は麗日さんに声をかける、幸いにもまだ誰とも組んでいないようだ。

「とられてないって……私でいいの?あんまり役に立ってんかもよ?」

「麗日さんじゃないとダメなんだ！僕には（騎馬を組むために）君が必要なんだ!!」
「じよ…情熱的だね…！そんな風に迫ってくるなんて…断れんやん…！」

麗日さんは頬に手を当てながら俯いている、断れないって言ってくれてたし、オツケーでことなんだろうか？今そんなに脅すような言い方してたかな…？

「麗日さん？本当に大丈夫？無理強いはしな——」

「やります！折角デクさんから声をかけてくれたんだもん！…少しでも近くにいかんと勝てんよ！」

「う、うん。ありがとう！じゃあよろしくね、麗日さん！」

なんだか麗日さんは燃えている、どこにスイッチがあつたんだ…？うーむ、女の子って難しいなあ。

「ところでデクさん、私に声をかけてくれたのってそういうことだよね…？」

「ん？ああ、もしかしてわかつたのかな？いやあ、恥ずかしいね！」

「やつぱり…！私の勘違いじゃなかつたんだ…！それって私が——」

「そう、麗日さんの個性なら僕を浮かして騎馬を組めるよね！」

「——思つてたのちがつた——!!」

僕の発言にずっこける麗日さん、関西人の性分なのか!?というかわかつて聞いてたんじゃなかつたのか…？一体なんだと思つてたんだろ…？

「そっかー、デクさんだもんね……そっかー」

「えっ?!麗日さん、顔が全然うららかじゃないよ!?!」

麗日さんが面白い顔で遠くを見始める、一体なにがどうしたってんだ!?

「ていうか……ハア……デクさんが騎馬になれば大体の人は騎手にできるんじゃないの……?……ハア……」

「!?その発想はなかった……!」

麗日さんがなんかどっかで聞いたことあるようなため息を吐きながら進言してくれる。あまりにシンプルすぎて忘れていた、今の僕なら誰だって担げるし、強力な騎馬になれるんじゃないか!バカだな僕は……過去にこだわり過ぎた……!

「つまり、デクさんは誰でもよかったってことね……」

「それは違うよ麗日さん!」

「えっ?——」

「もし最初からそのことに気が付いてたら、真っ先に麗日さんを誘ってたと思う。だって麗日さんなら絶対に僕と一緒に戦ってくれるって、そう信じてるからね!!」

そうさ、麗日さんは前世でダメダメだった僕でも一緒に戦おうって、そう言ってくれたんだ!そんな麗日さんをこの騎馬戦で僕が蔑ろにするわけがない!!

「デクさん……本当に私でいいん?」

「勿論さ！麗日さんとならきつと勝てるよ！」

「デクさん……！私、頑張るよ!!デクさんの役に立ちたいもん！」

「ああ、改めてよろしくね、麗日さん！」

「うん！よろしく、デクさん！」

僕と麗日さんは固く握手を交わす、落ち込ませちやつたりしたけど、麗日さんとさらに仲よくなれた気がする。雨降って地固まるってやつだな！

そんなことを考えていると後ろから声をかけられる。

「見つけましたよ筋肉の人！私と組みましょう!!さあさあ！」

「うわっ！近っ!?!発目さん？」

「あれ、ご存知でしたか？私、サポート科の発目 明を！先程はどうも助かりました、そこでその恩返しとして私と騎馬を組みましょう、そうすれば私のベイビー達によるカーンペキなサポート得ることができますよ！お得でしょう、もうこれは組むしかありませんね！そして一位の筋肉の人と組めば注目度は抜群中の抜群!!私のドツ可愛いベイビー達も目立ちに目立つわけですよ!!フフフフ！まさに一石二鳥！いや三鳥四鳥くらいありますよ!!さあさあ組みましょう、いいですよね!?!」

発目さんは振り乱した髪が当たるくらいのに至近距離でマシンガントークを炸裂させて、僕に組むように迫ってくる。ちっ近い！近すぎる……！

「わかった! わかったからちよつと離れて!」

「ありがとうございまーす! フフフフ、これで私のベイビー達も安心ですねえ、フフフ
フフフフ……」

「凄いい勢いの子や! 私も見習おう……!」

「いや、麗日さんはそのままです!」

あまりの気迫に僕は押しきられて承諾してしまった、まあ悪い選択ではないからいいのだけれども……というか麗日さんは今のどこを見習うつもりだったんだ……!!

「さあさあ、私のベイビー達を見てください、これなんかおすすりですよ!」

「これは! あのヒーローの!」

「そうなんですよ! あれを私なりに改良しまして!」

「おお! 僕、あの感じが好きでさ! わかるわかる!」

「……話に入っていない……こんなはずじゃあなかったのに……!」

——そんなこんなで暫くの間、発目さんのサポートメカを見ながらつついっぴい口話に花が咲いてしまった。しまった、作戦が決まったのはいいけど、時間をかけすぎたかな? こうなったら前世と変わらないが、常闇君を誘わなきゃ!!

「おーい! 常闇く!」

「はい、終——了! 了! 了! 了! さてさて、みんなチームは出来たみたいね!」

しかし、その瞬間に時間となり、常闇君を誘うことが出来なかった……ていうかみんなチームが出来てるってことは常闇君は誰かと組んだのか！一体誰と……？

「さあ早速始めるわよ！騎馬を組んで散らばりなさい！」

ミッドナイトの合図にみんなが散らばりながら騎馬を組んでいく。僕らも騎馬を組まなきや！

「頼むよ、麗日さん！」

「任しといて！私、頑張る!!」

「振り回されないように気をつけてね、発目さん！」

「了解です、フフフフフ」

僕らの騎馬は、騎手に麗日さん、前騎馬に僕、後騎馬に発目さんの構成だ。

といっても麗日さんは僕の左肩に乗っており、発目さんは麗日さんの個性とホバーブーツで浮きながらワイヤーを僕に絡み付けて引つ張られる形だ、ちなみに超極長ハチマキはホバーブーツの風で常にヒラヒラと舞っている。これを騎馬と呼んでいいかはもうわからないが、まあ中世チャリオッツの戦車みたいなもんだろ！たぶん……

「……いくぜ！残虐非道のバトルロイヤル、カウントダウン——」

プレゼントマイクの実況でカウントダウンが始まった、いよいよだ！

「10, 9, 8, ——」

「デクさん! ホントにこの位置取りでいいの!」

「逃げ場がありませんねえ、背水の陣ですか! 目立ちますねえ、フフフフ」

麗日さんが動揺しながら聞いてくる、発目さんは……確かに言うとおりではあるが、もう好きにしてくれ!

「7, 6, 5, 4, ——」

「下手に動き回ると死角からハチマキを掠め取られる可能性が高い! だからこそ、背後を場外にして——」

「3, 2, 1——」

「——敵は全て正面から迎え撃つ!! 僕を信じてくれ!」

「わかったよ、デクさん! 私、信じてるから!!」

「頼みましたよ筋肉の人! 出来るだけ私のドツ可愛いベイ——」

誰ひとりとして僕のハチマキは奪わせない! 一位になるのは僕らだつ!!!

「スター——ト!!!」

「実質^{1000万ポイント}一位のハチマキの奪い合いだつ! よこせや!!」

「はっはー! いただくよー緑谷君ー!!」

スタートと同時に鉄哲チームと葉隠チームが仕掛けてくる、口田君に砂藤君、君達は

組むのかよ!!

「〃さあ開幕から王者緑谷に2チームが襲いかかるう!〃」

「絶対に渡さないよ!スマアツシユ!!」

僕は腕を薙ぎ払い、暴風を発生させて牽制する。

「きゃあ!?!飛ばされちゃう!支えて男子達!!」

「うおお!?!空振りでこの威力ってマジかよ!俺じやなきや踏ん張れねえぞ!!」

「まだまだあ!スマツシユ!スマアアツシユ!!」

二組とも耐えるが、僕は牽制をやめずにさらに風を舞い起こす。

「あー!!ハチマキ飛ばされたー!!バツクバツク!!」

葉隠さんのハチマキを吹き飛ばして、まず一組撃退!よし!

「〃緑谷の巻き起こす暴風で早速葉隠チームがやられたあ!〃」

「骨抜!足場崩せ、まずはケズんぞっ!!」

「了解、鉄哲!おらっ、くらえええ!!」

鉄哲君の指示で骨抜君が個性を発動する、そして僕の足元が泥のように変化し、僕の足は地面へと沈み始めた。

好き勝手はさせないってか?でも好きにやらせてもらおうよ!

「アリゾナアア!スマツシユ!!」

僕は震脚で緩んだ地面を踏み抜く、しかし今度は手加減なしの一撃。緩んだ地面はその勢いに押し出されて吹き飛び、その下の硬い地面も一気に陥没する。僕は周囲に土塊を撒き散らしながらクレーターへと沈んでいった、その衝撃と土塊で鉄哲チームも吹き飛んでいく、これで二組撃退!

「地面をぶち抜き鉄哲チームも撃退ー!しっかしなんてパワーだあ!?!やはりここでも緑谷の独壇場と化してしまおうのか!?!」

「二人とも大丈夫?!」

「大丈夫ー!」

「オツケイですよおフフ、早くから目立ってますよおこれは…」

元気に返事をする麗日さんと、ぶれない発目さん。そこまでいくとすごいな、もう!「ここは流石に不利すぎる、一旦飛んで脱出するよ!麗日さん、ハチマキ飛ばされないようにね。発目さんは敵襲に備えて警戒っ!」

「オツケイデクさん!絶対に離さないから!!」

「了解ですーさあさあぶつ飛んじやつてくくださいよおお!私のドツ可愛いベイビ——
——「せーのっ!!!」——いいいいいい!!!」

僕は二人に注意して、話続ける発目さんを気にせず一気に踏み込んでクレーターから跳びだし、バックパックを使いながら上空へと脱出した。

「〃緑谷チームここで空を飛んだー!!なんでもありかよ、すげえな!開始1分から既に大暴れだぞ!!」

「ここまで飛ばば誰もこれないだろ!少しは安心——」

「下からひとり来てますよ!」

発目さんがそう叫ぶ。んなバカな、高度20mはあるぞ?

「こうらあ!!デクウウウウ!!」

「なに!?かつちゃん!!?」

空に逃げてても、かつちゃんが爆破を使って飛びながら迫ってくる!読んだのか、マジかよ!?

「〃ここで空にも刺客が現れるう!1—A爆豪、緑谷に空中戦を仕掛けたあ!!てか騎馬組んでねえけどいいのかあれ!」

「〃地面につかなきゃセーフってことだろ」

「てめえ!なんで俺を誘いにこねえんだよ!ずっと待ってたのによおお!!」

「なんだって!?待ってたの!」

「つたりめえだろ!お前と組むなら俺しかいねえだろって!そう思ってたのに裏切りやがってえええ!!」

完全な逆恨みだが、盲点だった!まさかあのかつちゃんも僕と組む気でいたなんて!でも、確かに丸くなつてわかりあえたかつちゃんならそう思つていても可笑しくない、ていうかそれなら誘つてくれれば……いやかつちゃんはかなりめんどくさいツンデレだ、腐れ縁を遥かに超越した幼なじみの僕としたことが忘れていた!!

「ぶっ飛ばしてやるううう!!デクウウ——」

「ごめんよかつちゃん!埋め合わせはっ!また今度つとお!!」

「——ウウ ウウウウウウ——」

ハチマキなどには目もくれず、一直線に僕を狙うかつちゃん。僕はその腕を軽く弾き、そのままかつちゃんの胸の辺りを踏んで、下へと叩き落とした。下のほうでテープが伸びているのが見えるな、おそらく瀬呂君がかつちゃんを回収するのだろう。

普段の冷静なかつちゃんならこんな風に簡単にはいかなかったが、興奮していて周りが見えていなくて逆に助かった。

かつちゃんを蹴つたお陰で高度と対空時間が増えた!このまま空中に少しでも留まるか?いや、青山君のレーザーみたいな対空攻撃が飛んでこないとも限らないな、ここは地上戦に徹しよう!!

「着地いくよ!衝撃に備えてえええ!!!——」

「目立ってます!目立ってますよおおお——」

そして僕は重力に引つ張られて地面へと落下していく。

「——んしょつとお!!」

着地の瞬間に地面を蹴り込み、落下の衝撃を相殺しつつ、辺りに土塊を撒き散らして牽制しながら、僕は地上に舞い戻る。

「〃周りを巻き込んだの派手な着地！魅せるねえ緑谷!!」

周りを見てみると、二組の騎馬がそれに巻き込まれて吹き飛んでいた。

これで五組撃退！ごめんよB組の人達の二チーム！

「いまだっ！」

「なに!?——スマツシユ！」

動き出そうとした時、なにかがハチマキを掠め取ろうと伸びてきていた、僕はそれを反射的に暴風で薙ぎ払う。そして伸びているピンクのもの、ついでに黒っぽいボールを振り払った。

「流石に一筋縄ではいかないか」

「障子君！つてことは峰田君と蛙吹さんもいるな!？」

「ばれてるわよ、峰田ちゃん。あと梅雨ちゃんと呼んで」

「なんでオイラたちがわかるんだよ！しっかり隠れてるのに!」

「個性を見れば丸わかりじゃないか!!」

峰田チームが仕掛けてくる、障子君の背中に峰田君と蛙吹さんが乗ってそれを複腕と皮膜で覆う、相変わらぬいい作戦だ!

「戦場は既に大混戦! あちらこちらでハチマキの奪い合いだあ! そんな地上に降りた緑谷にも峰田チームが襲いかかっているう!!」

「でもその作戦の穴はわかったよ、まず攻撃が軽すぎるってこと! スマッシュ!」

僕はそう言いながら、風で再び舌とモギモギを薙ぎ払う。よし、これで守りきれぬな!

「そして、防衛が障子君の肉体強度頼りってことさ! スツマアアツシユ!!」

地面を浅く蹴り抜き、強烈な勢いで土塊を障子君へと飛ばす。彼の腕は塞がっている、そして障子君の身体の大きさなら避けきれまい! よし、六組目撃——

「防げ! 黒影!!」
ダークシャドウ

「アイヨオオオオ、!!!」

その土塊は障子君の後ろから伸びる巨大な影によって防がれる。そんな…! この個性は——

「常闇君!?! そんなバカな!?! まさか君まで背中に乗ってるのか…!?!」

「正解だ緑谷、俺の背中には峰田、蛙吹、そして常闇が乗っている!!」

僕の驚愕に障子君が答える。防御面で優秀な常闇君の黒影まで揃えてきたのか、峰田

君……君ってやつは、敵にまわすと厄介すぎるな！

「でも待ってよ！完全にキャパオーバーじゃないか!?」

「フツ、確かに以前の俺なら無理だっただろう……しかし筋肉同盟でお前と鍛え上げ続けた日々が俺を成長させたんだよ、わかるか?」

「つ!!膨れ上がったハムストリングと大腿四頭筋!鉄のような広背筋と腹直筋が姿勢を崩さず支え続けている!君はやはり筋肉同盟の名に恥じない筋肉だ!!まさに筋肉の重戦車と呼ぶに相応しいよ!!」

障子君が前世と比べてここまで強くなっているなんて!やはり筋肉の可能性は無限大だ!!

「ここで相手にするのはまずい!一旦端まで離れるよ!!」

「逃がすか!追えー障子ー!!完璧峰田戦車の力をみせてやれ!!」
パーフェクトミネタンク

「調子に乗ってるわね、峰田ちゃん」

「追われし者の運命だ……!」
さだめ

僕は障子君から距離をとって端を目指す。峰田君たちは騒ぎながら追ってきていた、なんだかんだでいいチームだな!

障子君の腕の中で闇を増した黒影と二人の遠距離攻撃で手一杯のところ、他の騎馬まで合流したら目も当てられない!一旦距離を離して端を背にして、遠距離攻撃合戦に

持ち込もう!!

「〃さあ王者はここで逃げの一手に出た!しかあし、それを許さないのがこの騎馬戦だあー!!〃」

僕は駆け出すが、ここは戦場だった。すぐに正面から別の騎馬がそれに襲いかかってきた。

「さつきは助けてもらったけどそのポイントいただくよ!緑谷君!!」

「えっ!?B組の人!?えっと——」

B組の巨大な拳の持ち主の女の子がそう言いながら突っ込んでくる。名前なんだっただけ……助けたって障害物競争のときか?どこで助けたっけな……

「拳藤よっ!恩を仇で返すかたちになるけど、これって戦いだからね!」

「ごめんね拳藤さん!よく覚えてないや……いま忙しいからまたあとでねっ!!」

僕は襲いかかってきた拳藤さんの拳を掻い潜り、デコピンで小さな風の砲弾を飛ばしてピンポイントにハチマキだけを吹き飛ばす。

「いまだっ!蛙吹、あのハチマキをとっちゃまえ!」

「けろっ!!」

「あー!アタシのハチマキを!!待てー!!」

後ろから迫ってきていた峰田チームが拳藤チームのハチマキを奪い去る。そして峰

田チームを拳藤チームが追いかけ始めた。

「緑谷あ！さつきはよくも——」

「どいてどいてー！スマツシユ!!」

「ぐわあー!!?」

更に復帰した鉄哲チームが立ちはだかつてきたが、後ろから峰田チームが来ている以上、いまは相手にしてられない。拳を振るい騎馬ごとハチマキぶつ飛ばす。

「あれもいたさきだ！」

「けろけろっ！」

「A組このやろう!!ぜってー逃がさねえぞ！——」

峰田チームはついぞと言わんばかりに、鉄哲チームのハチマキを回収して走り去る。そしてそのあとを鉄哲チームが追う。

「緑谷チームを追う峰田チームを更に追う拳藤チームと鉄哲チーム!!なんと峰田チーム大健闘う!この活躍を誰が予想出来たのかあ!?!」

逃げ回る僕らの目の前に、ついに一番の強敵と考えられる彼らが現れる。

「っ！轟君!!」

「——緑谷……!!」

「来るなら来いっ!!でもそこは通してもらおうよ……スマツ——」

轟君に威圧感を浴びせながら、牽制の拳を放とうとする。しかし轟君の行動は僕の予想を裏切るものだった。

「——っ! あんな長いハチマキ持つてちや、身動きとれなくなっちまうぞ! 離れる、回避だ飯田! あれを狙うのは最後でいい!!」

轟君の騎馬は急速で僕らから離れていく、そういう判断もうまいな!

「〃おっ—とお!? 轟チームここで緑谷を避ける!〃」

「〃自分達の持ち点と残り時間を考えて冷静な判断を下したな〃」

「〃なるほどお! 頭もクールに冴えてるぜアイスマンっ!! さあさあ、残り時間も半分を切ってきたあ! 一位を狙うものと勝ち残りを意識してその他を狙うもの、両極端に別れてあちこちで熱い闘いが繰り広げられるう!!〃」

——それから僕らは峰田チームから逃げながらも立ちはだかる他の騎馬を蹴散らしながら進み続けた。追う峰田チームは僕が蹴散らしたチームのハチマキをかつさりい続けて、どんどんとヘイトをためて、気がつけば僕を狙う騎馬より峰田チームを狙う騎馬のほうが多くなってたくらいだ。

しかし峰田チームのコンビネーションは凄まじく、蛙吹の舌で牽制し、常闇君の黒影が鉄壁の防御を見せ、峰田君のモギモギが足を殺す。そのためほとんどのポイントを保有したままだった。

そんな状態で残り時間は刻一刻と過ぎ去り――

「ッさあ！残り時間は一分を切ったぞ！ラストスパートだ、全員ケツに火いつけて駆け回れえ!!」

「うおおおらあ！デクウ!!モノマネ野郎も潰したし、最後はてめえの処刑の時間だぜええ!!」

「げえ!?かつちゃん!!」

僕の目の前にかつちゃんの騎馬が飛び込んできた、おそらくみんなの個性をうまく使って超加速をしてきたのだろう……これはまずいぞ……

「あとちよつとなんだ！ここは逃げさせて――」

僕はかつちゃんを避けるため、横へ大きく跳ぶために踏み込む。――その瞬間僕の横を氷の壁が覆い尽くす。くっそ！この氷は!?

「逃がさねえぞ緑谷……そろそろ……獲るぞ……!!」

「轟君つ!!そう、うまくはいかないか!」

「ああつ！私のドツ可愛いベイビーが氷漬けにいいい!!」

睨み合う僕と轟君、そこに兇目さんの悲鳴が飛び込む、ホバーブーツを凍らされてしまったようだ。

マジか!?このタイミングで仕掛けてきて、こつちの足まで奪うとか、完璧過ぎるだろ

…才能マンめ!!

「二人とも迎え撃つしかないか…!スマアアツ——」

僕は二人を吹き飛ばすため大きく構えて、スマツシユを放とうとした。しかしその拳を放つすぐに余裕はなくなる。

「いただきだぜ!!ひゃつはー!!」

「デクさんごめん!ハチマキ持ってかれた!!」

「なにいいー!?峰田君つ!!」

そこには蛙吹さんの舌を身体に巻き付けて、僕のハチマキの端を握っている峰田君の姿があつた。こつちに飛び込んできていたようだ、まったく気がつかなかつた!!

「渡すかああああ!!」

僕はハチマキの反対側を掴んで引つ張る、極長ハチマキのせいであられたが、そのお陰で取り返すこともできそうだ!

「させるか!」

「いけつ黒影ダークシャドウつ!!」「アイヨオ!!」

障子君と黒影がハチマキ掴んで引つ張り返してくる。しかし渡してやるわけにはいかない、僕は更に力を込めてハチマキ引つ張る。これくらいならまだ僕に分があるぞつ

!!

「1000万ポイントは俺のモンだああ!!」

「緑谷! お前には!!——」

かっちゃんも轟君の騎馬も乱入してきて、僕からハチマキを奪うためにハチマキを引いてくる。これはヤバい! このままだと——

「〃おお! 峰田、爆豪、轟チームの協力プレイによって、ここで緑谷がハチマキを奪われそうだ! 王者陥落なるかあ!?!」

「緑谷からハチマキを奪えー!!」

「逆襲の時間だ! ラスボスを落とせ!!」

「あいつが居なくなれば次の種目も勝てる!」

「1000万ポイントあれば一発逆転できるぞ! いけー!!」

他の騎馬も続々と集まって僕からハチマキを取り上げようと全力で引つ張られる。ハチマキは伸びきって既に30m近い長さになっている、よく切れないなこれ! 相澤クオリティってやつなのか!?!

「〃なんだなんだこの状況はー?! 緑谷のハチマキをほぼ全員の騎馬が引いているう! それに一人で対抗する緑谷あ!! 気づけば綱引きが始まってんぞおいっ!!」

「〃おい、騎馬戦やれよ」

「負けるかああああ!!」

僕は力いっぱいハチマキを引くも、数の力に負けて足がずりずりと引き摺られ始める。このままだと奪われてしまう…!ダメだ、一番になるんだ!オールマイトと約束したんだからっ!!

「発目さん!麗日さん!これから本気を出す!!両腕使うから僕の身体にしがみつきたいてくれっ!!!」

僕は全力を出すために二人に指示を出す。

「了解です!やっちゃってください、そして更に私のベイビーが目立つのです!!フッフッフ」

そう言って発目さんは僕の首に手を回して背中にしがみつく。おっふ!背中に柔らかない感触が…!ってそんなこと言ってる場合じゃ——

「発目さん大胆…!よーし、私も!!えいっ!」

今度は麗日さんが正面から首に腕を回して抱きついてきた、麗日さんは照れながらも力強く抱き付いている。もつと掴まる場所あったんじゃ!顔が近い!そして前と後ろから柔らかさといい香りのコンボがガガガガガ——

「ワアオ!!緑谷が女子にサンドイッチにされているぞお!!?そりや一体なんのパフォーマンスだあ!?!羨ましいいいい!!」

「なにふざけてんだ緑谷……それとマイク……お前あとでちよつとこい」

「ふざけんなああああ！オイラと変われ!!」

「あいつをころせえええー!!」

「あんなやつに負けられつかよおお!!」

峰田君を中心とした男子の心に火が付き、引く力が一気に強くなり、ハチマキを持つていかれそうになる。

惚けてる場合じゃない!!心を無にして乗り切れよ、僕っ!!

「フルカウルっ!!88%オオオオ!!」

ワンフオーオールが身体中の筋肉に行き渡り、僕に力を与える。そして僕とその他全員を引き合う力が拮抗する。

「劣勢だった緑谷、ここで踏みとどまったあ!!残り時間30秒!さあさあ綱引きの行方はどうなるー!!」

「いやだから、騎馬戦しろよ」

互角じゃダメなんだ!僕は勝つんだ!絶対に!!限界を超えて、Plus^{更に}Ultra^{向こうへ}

!!
「がああああつ!!——フルカウルウウ!90%オオ!!」

僕は限界を超えた力でハチマキを上を振り上げた、そしてハチマキを引っ張っていた

全員の身体がほんの少しだけ浮く。今だっ!!

「——オクラホマアアア!!ミキサアアアアア!!」

全力全開のワンフオーオールを全身に迸らせ、ハチマキを引きながら振り回し、そのまま回転する。そして回転数どんどんと上げていく。

「〃なんと緑谷、全員が掴まったままの綱を振り回すうう!!なんとというパワー!なんという筋肉!いつたいなんなんだこいつはあ!!」

「〃残り15秒だ、もはや騎馬戦ではないな」

「きゃああああ!!——」

「目立ってるうううフフフフ——」

麗日さんと発目さんの叫びが聞こえるが止まるわけにはいかない!!

「〃残り10秒!筋肉大回転によるハリケーン!吹き荒れる嵐の中で生き残るのは誰だあ!!」

「うおおお!!——」 「きゃああああ!——」 「くそがアアア!!——」

阿鼻叫喚の渦のなか僕は回り続ける、勝つために!一番に成るために!!

「〃——3, 2, 1, 終——」
了!!! さあこの綱引きの勝者はいつたい誰にいい?!!

「〃……騎馬戦だったはずなんだが」

終了の合図とともに僕は回転をやめ、静寂の中、次第に風と砂埃が収まっていく――

――生徒たちが倒れ伏し、死屍累々の中、僕はひとりハチマキを手にしたまま、二人の女子を抱えて立ち尽くす……

――ハンデを背負わされながらも全力で挑んだ、ハチマキ争奪の騎馬戦バトルロイヤル……

――全てが終わった後、ハチマキを身に付けている者は、誰ひとりとしていなかった……

――僕の全力の必殺技は、騎馬戦という競技そのものを破壊し尽くしたのだった。

筋肉を、信じろ。

雄英体育祭第二種目は騎馬戦だった、1000万ポイントのハチマキを守り抜くため、他の騎馬を蹴散らして逃げ延びた。最後にハチマキを奪われそうになり、それに対抗するため全力のオクラホマ・ミキサ―を炸裂させた。その結果騎馬は全滅、ハチマキを身に付けている人が居なくなってしまう。この場合、勝者は誰になるんだ!?

「〃なんとハチマキを持つてる奴がひとりとして居なくなつたー!!これは全員敗退になつちまうのか!?どうなんだい、主審のミッドナイト!!」

「まさかこんなことになるなんて思ってもみなかつたわ……」

「なんか、すみません……」

困惑するミッドナイトに謝る僕。僕もこんなことになるとは思ってなかつたよ……

「いてて、どうなつたんだア?」

「かつちゃん!」

倒れていたかつちゃんが起き上がってくる、みんなまだ起き上がれてないつてのに流石のタフネスだ!

「デクてめえ！やりすぎだろおい！——ん？てめえもハチマキを掴んでて俺も掴んでる……つてことはまだこれを奪えば俺の勝ちじゃねえか!!」

「——ハッ！それよ!!——1, 2, 3………14つと人数も丁度いいわく！」

「どういうことです、ミッドナイト?」

騒ぐかつちゃんとなにか閃いたように人数を数え出すミッドナイト、何に気が付き、なにがどうなるんだ!?

「最後までハチマキを掴んでた14名と緑谷チームの3名を最終種目の出場選手とします!!」

「えっ!?!」

ハチマキを持つてるから得点総分けてことか?よく分からない……最後までハチマキを掴んでいたのは——

爆豪チーム 爆豪、切島、瀬呂、芦戸

轟チーム 轟、上鳴、飯田、八百万

峰田チーム 峰田、障子、常闇

B組 鉄哲、塩崎、拳藤

緑谷チーム 緑谷、麗日、発目

——以上の17名が最終種目出場になるのか。

倒れていたみんながぞろぞろと立ち上がってくる、軽い怪我はしてても、動けないレベルにやられた人はいなかったみたいだ。ふう…少し安心したよ…!

「つまり、力が強くて根性があるやつが勝ち抜けてことか？ちよつと雑すぎねえか!?!」

「そうじゃねえな、勝ち残った奴等をよく見てみる、マイク」

「みんなハチマキ掴んでるだけじゃ？つてなにー!?!ハチマキに対して、爆豪チームは手がテープでぐるぐる巻きになってるし、轟チームは氷で固定されてる!?!」

「そうだ、ただ根性があつて力や運が強いだけじゃねえ、勝ち残ったのはチームや個人で個性をうまく使うことのできた奴等だ。あの緑谷のパワーによつて極限状態に置かれても、状況判断をしつかりできている、優秀な生徒つてことだな」

「なるほどおーそりや確かに勝ち残るに相応しいつて訳だあ!!」

相澤先生がプレゼントマイクに解説をしていく、なるほど確かに合理的な判断だ!

かつちゃんチームは瀬呂君の個性、轟チームは轟君の個性、他の人達も個性を上手に使つてハチマキをガツチリ掴んでいたんだな。——ん?峰田君は身体が軽いし飛ばされにくかつたんだらう、彼のモギモギは自身にはくつつかないし。つまり根性があつて運が良かっただけ……?いや、彼も必死だったに違いない!

「〃そうすると緑谷チームはどうなんだ？ 緑谷は当然としてもその他の二人は掴まっていただけなんじゃ？」

「〃おいマイク……あの騎馬戦のルールで緑谷と組もうっていう勇氣と判断力を評価しないでどうする……？」

「〃おおつと！ そりやそうだ、失礼したぜ!! さあ最終種目出場者も決まったところで、午前の部は終了だ！ 一時間の昼休憩挟んで午後の部だぜ!! じゃあな!!」

プレゼントマイクの言葉で午前の部は終了となった。無事に勝ち抜くことができ良かった、まあやり過ぎた感はあるけど……

「いやあ疲れたあー、お疲れー」「悔しいけど、最終種目も頑張ってねみんな!」「頼むぞー B組の代表たちー!」「オイラ勝ち残ったぞー!!」「混む前に飯いこうぜ」「緑谷ばねえな……やっぱつれえわ……」「そりやつれえつしよ……」「言えたじゃねえか」「聞けて良かった」

競技を終えてみんな思い思いにざわつきながら休憩へと向かう、そんな中僕の前に立ちただかる人が現れる。

「ああやって力でなんでも振じ伏せて、満足かよ……ラスボス!」

そんな言葉を投げ掛けてきたのは、紫の癖毛に、目の下の隈が特徴的な生徒、普通科の心操君だ。

「んだてめえ！負け犬の遠吠えなら他所でやれよ、モブがっ!!」

「かつちゃん！いいんだ、僕はこの人と話があるから先に行つてて……」

心操君に嘯みつくかつちゃんを抑えて、肩を強めに叩いて先にいくように促す。僕も心操君と話をしたいと思つていたところだ。前世では最終種目の時に話をしたが、今は彼に伝えたいことがある。

会場から人が捌けていき、人が疎らになる。僕と心操君はその端の方で話を始めた。「なかなか話がわかるじゃないか、ラスボス。さつきまであんだだけ個性でド派手にやつてたやつとは思えないな!」

「ちよつとまつて、ラスボスつて僕のこと——」

心操君の言葉が引つ掛かり、そこに突つ込もうとした瞬間頭にモヤがかかったように身体が動かなくなる。心操君の個性の「洗脳」だ。

「ほらな、どんなに強力な個性を持つても俺の個性にかかればこうさ!でも俺はこんな個性だからスタートから遅れちまったよ、恵まれた人間にはわかんないだろ!」

「——わかるよ」

「っ!?!ラスボス……なんでしゃべれる、動ける!?!なんで俺の個性が通用しないんだ!?!」

「それはね——ツ!!ちよつと話しにく——ツ!いから、個性止めてもらつていい?」

僕が洗脳から解けたことに驚く心操君、洗脳を度々解除しながら、その種明かしをするため個性の発動をやめてもらう。てかやつぱりラスボスって僕のことかよ！薄々勘づいてはいたけどさっ！認めたくなかった……

「なんなんだよ！お誂え向きの『個性』持つて生まれた奴つてのはなんでもできんのかよ！望む場所へ行ける奴等つてのはどここまでも恵まれてんな!!」

「それは違うよ、これは個性のおかげじゃない」

「なんだと!?!じゃあなんだってんだよ!」

「それはね——」

心操君の悲痛な怒りの叫びが響く、だからこそ彼に伝えなければいけない。この力は

「——筋肉だよ」

「はあ!?!ふざけんのか?お前がどんだけマッチョだからってそんなの俺の個性にはなんの関係も——」

「あるよ!関係あるんだ。まず君の洗脳から抜け出した方法、あれはジャーキングだ!」
「……?ジャーキング……?」

心操君はイラつきながら聞いてくる、まあ聞きなれない言葉だろう。

「ジャーキングってのは不随意の筋肉痙攣のことさ、寝るときにビクツとなることがあるだろう？それと同じ理屈だよ」

「それが俺の個性が効かないのとなんの関係があるんだよ……！」

「僕が洗脳状態に陥った瞬間に、無意識で身体を痙攣させて洗脳を解除してくれるんだよ。僕の筋肉が僕を助けるためにね」

「はあ?!筋肉に意思があるってのか?!馬鹿馬鹿しい!」

「ある…鍛え続けた筋肉には意思が宿る、僕はそう信じているよ!」

僕は洗脳の解除の種明かしをして、さらに筋肉について説く。

「筋肉に意思は宿る。筋肉を鍛えること、それは筋肉と向き合うってこと、筋肉の声を聞くってことだ。そうしてじっくりと筋肉と向き合い続ければ、筋肉に自分の意志が伝わり、そして筋肉の意思がわかるようになるんだ!」

「さつきから何いってんのかわかんねえよ!!それでもお前が恵まれた人間ってことに変わりないだろ……?」

心操君は僕の話を理解しようとせず喚く、もうそこに怒りはなく、哀しみを含んだ声色で僕に尋ねる。

「確かに僕は個性に……いや、人に恵まれた……」

「やつぱりそうじゃないか……生まれときから人の生き方は決まって、所詮夢は夢でし

かなくなる……」

「僕もずつと昔、おなじこと思ってたよ。でも人に恵まれた、けどそれでも足りなかったんだ！恵まれただけじゃ望んだところになんていけないんだよ!!」

僕は段々と意気消沈していく心操君へ叫ぶ。

そう、オールマイトに個性をもらつても、それだけじゃなにも出来なかった。救えないし救われない、僕の望んだ結末なんかにはたどり着けない、それを僕は知っている！だからこそ必要なのは——

「だからこそ、筋肉が必要だったんだ！筋肉を鍛えなければ僕は今の十分の一も強くなつてないだろう。そしていまも望む場所へ向かいたいから、僕は鍛え続けている。君はどうなんだ？向かいたい場所があるんじゃないのか？」

「俺だつて……俺だつて向かいたいところくらいある……俺もお前みたいな個性持つて……くっそ！——諦めたくなくて、雄英入つて、体育祭でも勝ちのこつて、ヒーロー科入つてやろうつて！そう思つてたけど……やっぱりダメだった、諦めるほかなかつたんだ」
心操君は悲しげな顔でみずからの思いを語る。まだだ、僕は彼を助けない！諦めてほしくない！

「なんでそこで諦めるんだ！昔から憧れて、夢見てきて、そのためにここまで来たんだらう!?——“ヒーロー”に成りたいって！——君もそうだったんだらう!？」

「——それは……でも……」

「だったらそれは終わってない、まだ始まってすらいないじゃないか！ちよつと長いだけのプロローグで絶望してんじゃないよ!!諦めなきや届くんだ!だからいい加減鍛えようよ!筋肉を!!」

僕は心操君を鼓舞する、まだ終わりになんてさせない!そんな幻想は筋肉でぶち殺してやる!!彼は昔の、オールマイトに合う前の僕だ。絶対に変わるはずだ!僕と同じで筋肉で!!

「筋肉を……俺が……?無理だ、お前みたいには——」

「筋肉は逃げない、逃げるのはいつも自分だ」

「——!?!」

「どこかの誰かが言った言葉だ、けど僕はその言葉をずっと裏切れずにいる。この言葉の意味、わかるよね?逃げる理由をつくって、諦めちやダメなんだよ!こんな僕だって変われたんだ、君だって!いや……ここまでこれたんだ!諦めなければ——」

僕は心操君に諦めてはいけないと、必死に説きつづける。そして僕が言われたかった言葉を彼に伝えよう、きつと彼も誰かにそう言ってもらいたい筈だ!

「——君はヒーローになれる」

「——っ!!……緑谷……なんでそれを、お前が言ってくれんだよ……」

「言つたろ? 君は昔の僕に似てるって、僕が言われたかったことを本心から言っただけだよ、嘘じゃない」

僕は心操君に笑顔で答える、彼はきつといいヒーローになれる。

あのと僕はオールマイトのその言葉に勇気を貰った、今度は僕が誰かに勇気を託す番。そうですよね? オールマイト。

「……信じていいのか? お前を、俺自身を?」

「信じていいとも! それでもなにも信じられなくなったのなら、ただひとつ——筋肉を信じろ……!」

「筋肉を……!」

「そうさ、筋肉は裏切らない! それに周りを見てみなよ!」

「周り?」

僕は心操君に観客席を見るように促す。

「かつこよかったぞ心操!」「ラスボスに一人で挑むとかすげえよ!」「俺ら普通科の星だな!」

そこには普通科の生徒たちが僕らを見守っていた、いや心操君を見守っていたのだらう。

「お前ら……」

「わかるかい？ 君を応援してくれる人がいるってことが。答えは聞かない、僕は必ずヒーローになる、その時君が——」

「俺はヒーローになるぞ、もう絶対に諦めない。筋肉を鍛え上げて絶対になつてやるからな！ そんなときは足下掬われないうようにな？」

心操君は僕の言葉の続きを待たずに、不敵な顔で笑つて見せる。

「ハハハ！ 言うね心操君！ いいよ、そのときは僕の筋肉と君の筋肉、二人で競おうじゃないか！——それじゃあ僕はそろそろいくよ、また会おう心操君！」

僕はそう言つてその場をあとにする、これ以上は不粹つてもんだらう。

心操君は諦めないと誓つた、彼が筋肉を信じ続ける限り、絶対にヒーローになれる。

——筋肉には無限の可能性があるのだから！

——心操君は将来、マッスルメンタリストヒーローとして名を馳せることとなる。それはまた、別の物語だ。

恋せよ乙女！アット・レクリエーション！

僕は騎馬戦を綱引きに変えてぶつ壊し、その勝者はハチマキを最後まで掴んでいた。7名に決定した。そのあと心操君と話し合いをして、彼を筋肉へと導くことができた。彼が将来どんな筋肉になるのか、いまから楽しみだ！

——心操君と別れてから僕は食堂へと向かう、少し遅れたこともあつて大変な混み具合だ。

僕はなんとか食事をゲットして、食べるための席を探す。

この人混みのなか、席なんて空いてるのか？立って食べようかな、いや…空気椅子もありだな！

そんなことを考えていると遠くから声をかけられる。

「おい、デクサーン！こっちこっち、席とつといたよ！」

「麗日さん、ありがとう！それにかっちゃん和飯田君もありがとう！」

「おっせえんだよデク！メシが冷めちゃうじゃねえか！」

「水臭いことをいうな、緑谷君!友達じゃないか!」

麗日さんとかつちゃん和飯田君が席をとって待っていてくれた、結構待たせたと思うのに:僕はいい友達を持ったな!!

そうして僕は雑談をしながら昼御飯を食べ始めた、そしてそろそろみんな食べ終わろうかという頃に、あの人がやって来た。

「おお!筋肉の人!さつきは私のベイビー達が目立つのに一役買ってもらってありがとうございました!いやあ企業の人達も私たちから目を離してられないくらい目立ってましたからね!!それにしてもすごいですねえ筋肉の人、個性もすごいんですけど、私になるのはこの筋肉達ですよ!どうなるとあんなパワーになるんですかねえ、気になりますねえ!フフフフフ」

発目さんが突然現れて一気に喋りだし、そして興味津々に僕の身体に触れてくる。

「普通じゃないですよねえ!この筋肉に私のベイビー達が加われれば:!!おお、いいですねえ、いいですねえ!私、楽しくなってきましたよお!!今度もっと詳しく見せてくださいよ、この筋肉!そして私のドッ可愛いベイビーが——」

「ちよつとストーツプ!べたべた触りすぎ、デクさん困ってんじゃん!——そんなん:ずるいやん」

発目さんは一人でどんどんとヒートアップしていき、僕の大腿筋や上腕二頭筋や大胸

筋などさまじまな筋肉に触れてくる。そして麗日さんが叫びながらそれを止めた、最後にゴニョゴニョいつていたが、きつと発目さんへの文句だろう。

いいぞ！助かったよ麗日さん！筋肉を褒められるのは嫌いじゃないがあんなにベタベタと触られて寄られるとこつちが恥ずかしくなってしまう!!

「それは失礼しました！じゃあ続きは工房でお願いしますね、あれやこれやと調べたいんで!!それと……今度はゆつくり見せてくださいよ?」

発目さんは自分のペースで言いたいことを言ってくる、僕の都合はお構い無しって感じだ。でも首を少し傾げながら見上げてくる姿は、年頃の女の子って感じで可愛らしい……!

「そんなときは私もいくから……いいね、デクさん……?」

「——っ?!はい!どうぞ!!」

麗日さんが僕の肩を掴み、冷たい視線を浴びせながら聞いてくる。僕は反射的に答えてしまった、僕がなにしたってんだよ……女の子ってわからない!

「あつ緑谷君じゃん!お疲れ、やっぱり優勝宣言は伊達じゃないねえ、最後のあれスゴすぎだよ!」

「拳藤さん、お疲れ様!そんなこと言いながらも拳藤さんも勝ち残ってたじゃないか、おめでどう!」

B組の拳藤さんが僕に話しかけてきた、僕は褒め言葉?を受け取りながら、拳藤さんを讃える。彼女は巨大な掌で最後までハチマキを挿んでいた、汎用性の高そうな個性だ!

「ありがと、まあ個性の相性が良かったからね。あつそうだ、障害物競争のときは助けてくれてありがとだね!じゃなきやあそこで終わりだったし」

「ああ、そのことなただけど……ごめん!どこで助けたのかいまいち覚えてないんだ!」「ええっ!? そうなんだ……ザ・フォールのところだよ、綱から落っこちたところを拾ってもらったんだけど……」

「ああ!あのとときの焦り気味の!思い出したよ、忘れててごめんね……」

拳藤さんと僕の間になんとも言えない空気が流れる……お互いに困惑した顔で苦笑いを浮かべている。

どうしようこの空気、かっちゃん騒いでくれれば流れが変わる——つてかっちゃんいないじゃん!いつの間に居なくなっただ!?くそっ頼みの綱が!!

「私、あんな風に男子に抱えてもらったのって初めてだったのにな……そっか」

「えつと、その……ごめん……」

再び僕と拳藤さんの間に気まずい空気が流れる……

「あ、私も抱き抱えて助けてもらいましたよー」

「えっ!? 貴女もそうなの!」

「へえ、デクさんは障害物競争しながら……二人も女の子を抱いたんだね」

「言い方あ!! 確かに二人とも両腕使って抱き抱えたけどさ!」

発目さんが拳藤さんに同調して言った言葉に、麗日さんが誤解を招くようなあらぬことを言い出す。間違つてないけど、それは間違っているよ!

「やりますねえ筋肉の人! 英雄色を好むってやつですね!」

「緑谷君ってそういうの盛んなんだな、私は全然だから……」

「いやいや! 勘違いだから!! 全然僕、そんなことないからね!」

「私も抱き抱えて助けられたことあるし……負けてない、私も負けてない……」

発目さんがその発言を掘り下げて、拳藤さんが乗っかる。僕はそれをすぐに否定するが、場は収まりそうにない。麗日さんもぶつぶつなにかを言つて自分の世界に入つてしまつている……!

「ふーん、でもまあ女の子にあんなことしたんだから、責任とつてもらおつかな?」

「ええ!? 責任!」——いやでも、確かに先生に助けろと言われてたとはいえ、ああいう形で女子に触れてしまったということは何らかの責任が発生するのか? つまりはそれを僕自身が選んだ行動の結果だから、これはプロになつても言えることかもしれない……なるほど、先生やオールマイトはそこまで考えて今回のハンデを言い渡していたのか

……」

「あの、緑谷君?大丈夫?ジョーダンだからね?」

拳藤さんが言った責任という言葉に、僕は一人でぶつぶつと考え込む、すでに周りの声は聞こえなくなっていた。

「あの!緑谷君!!」

「——ハイ!僕にできる範囲で責任を取らせていただきます!!」

「いや…ジョーダンだから、なんかごめん。そこまで真面目なタイプだと思ってなくて」「えっ、あ、ジョーダンね。ふう、かなり本気で考え込んだよ。でも嫌な思いさせちゃったのはホントのことだし、僕にできることならなにかしたいんだけど……」

「いやいや、別に嫌な思いなんてしてないから!むしろ助けてもらってありがとうって感じだし、初めての経験で良かったというかなんていうか……」

どうやら責任というのは冗談だったらしいが、納得がいかなかった僕は提案をする、拳藤さんは顔を少し赤くしながら僕の考えを否定してくる。お互いにやや俯きながらチラチラと目を合わせながら、またも微妙な空気が流れる…

うーん、嫌じゃなかったとは言ってくれたが顔が赤い。おそらく恥ずかしい思いをさせてしまったのだろう、なにせあの大衆の面前で人に助けてもらったのだから。なにかしらの埋め合わせはしたいんだけどなあ……

「じゃあさ……今度戦い方を教えてくれない？緑谷君って近接格闘主体のスタイルじゃない？私も同じだから是非参考にしたいんだよ！」

「そんなことならいくらでも！」

「ホント!? やった! ……あと迷惑じゃなきゃ他のB組連中もお願いしたいんだけど……」

「勿論いいよ! じゃあA組も何人が近接型がいるから、合同自主練といこうか!」

「お、なんだか面白そうですねえ。私も一枚噛ましてもらっていいですか? インスピレーションの香りがぶんぶんしますよ、そういうの!」

「むむむ……近接格闘……私のスタイルじゃない……」

拳藤さんの提案に僕は快諾して、トントン拍子で話が進んでいく。前世ではB組とあまり仲良くできなかったし、この機会に改善したいな!

「じゃあさ——」

「こういうのはどうかな——」

「こんな感じのバイビーなら——」

「それだ!——」

「むむむ……」

僕と拳藤さんと発目さんは合同自主練について話が盛り上がりつついき、段々と固まっ

て話が始める。麗日さんはその横で唸っている、そして――

「ずるーい!!」

「!?どうしたの麗日さん?」

「二人ばかりいい思いいして、ずるいやん!私だってデクさんにお姫様抱っことで優しくしてもらったのに!」

「言い方あ!確かに入試の時に抱き^だ抱^かえて助けたけども!」

「麗日さん、どうした?落ち着こ?」

「どうしました?ベイビーの話続けましようよ!」

突然麗日さんが騒ぎ、またも誤解を招くようなことをいう。拳藤さんが止めに入る、発目さんは平常運転だ、ぶれないなこの娘!てかいい思いつてなんだ……

「私だつてデクさんになんかしてもらいたい!ねっいいでしょ!デクさん!!」

「あ、うん。わかったよ、わかったから……」

「言つたね、言つたよねデクさん!絶対だよ!」

「はあ……こりや私の入る余地ないな……」

麗日さんは興奮しながら僕に言い寄ってくる、近い!近すぎるよ麗日さん!もつと距離感大切にしよう?!あと拳藤さんはどうして諦めるんだそこでえ!止めるの手伝ってくれてたんじゃないのか!?

「じゃあ、あの……その、私と……」

「ん？ なにかな？ 麗日さん」

「私とデー——」

「ピンポンパンポン、午後の競技10分前になりました、選手の皆様は競技会場へ移動してください。繰り返します……」

麗日さんは顔を赤くしながら、僕になにかを言おうとするが、そのタイミングで昼休憩の終わりを告げる放送が流れた。どうやらチャイムチャイムに救われたようだ！

「さあ、いこうか！ みんな！ ほら麗日さんも」

「よし！ 午後の最終競技も頑張ろうっと！」

「フフフ、私のベイビー達のアピールタイムですよ……」

「あー、そんなあ……」

みんなが立ち上がり、会場へと向かい始める。僕もなにか言いたげな麗日さんを呼んでから会場へ向かおうとする。

「そうだ、麗日さん。今度の休みに出掛けようか、さっきの話はそこでつてことまで！ どうかな？」

「えっ?! いいの?」

「もちろん！ 麗日さんにはいつも助けてもらってるし！ ダメかな……?」

「ダメなんてありえん!よろしくお願いします!……まさかデクさんからデートに誘ってくれるなんて…やった!」

麗日さんも、情緒と機嫌を直してくれたみたいだ。女の子がなにか言いたげなときはお出掛けに誘いなさいっていう、あの人から前に聞いたアドバイスがうまく役に立ったぞ!

そうして、ご機嫌な麗日さんと共に会場へと向う。途中で麗日さんはI—A女子一同に呼ばれて別れた、先に行って待ってよう——

——最終種目の前にレクリエーションがあるため、ほとんどの生徒が会場へと集まる。そして最後にI—A女子一同が現れたのだが——

「ん?アリヤどうした!?A組女子!」

「なにやってんだ…あいつら……」

プレゼントマイクが驚きの声をあげ、相澤生徒が呆れる。そう、I—A女子一同は今回もまんまと峰田君と上鳴君に騙され、チアリーダーの格好をしていた。八百万さんが抗議の声をあげているから間違いない、でもみんな似合ってるよ!

「ちよつとしたサプライズがあつたが、気を取り直して……レクリエーションが終わ

れば最終種目、勝ち残った17名からなるトーナメント形式の対一のガチバトルだっ
!!”

プレゼントマイクが最終種目を発表する。あれ?17名だとひとり余らないか?ど
うするんだろう…?

「さあ、組み合わせを決めのくじ引きを始めるわよ!あつ、緑谷君は特別シード枠だから
引かなくていいわ!!」

「”さっきの大暴れを考慮させてもらった、そのほうが合理的なトーナメントになるか
らな”」

ミッドナイトと相澤先生がそう説明する。なるほど、確かにやり過ぎたとは思うし、
そういう扱いになるのか…そこまで合理的か。

「——さあ、みんな引いてもらったところで、組み合わせはこうなりました!」

今回は青臭いくだりもなく、淡々とくじ引きが進んで、最後にミッドナイトがモニ
ターを鞭で指し示す。

「特別シード枠、特別過ぎんだろ!!!」

みんなの声が重なった。

いくらなんでも特別過ぎやしないか!?いきなり決勝って!!やり過ぎだろ、どうなってるんだ!?!

「いくらなんでも優遇されすぎだろ!オイラ納得いかねーぞ!」

「そーだ!不公平すぎんだろ!逆に緑谷が可哀想だ!!」

峰田君と切島君が抗議の声をあげる。逆に可哀想ってなんだよ…

「〃じゃあ聞くが、一回戦からあの化け物緑谷と戦出久いたい奴はいるか?」

「……………」

「なんか言つてよ、みんな!!」

相澤先生の言葉にみんなが黙り込む、なんてこった!ここまで警戒されてたなんて…

!

「〃というわけで緑谷。解説席に座つて、最後まで大人しくしてろ。お前が入ると競技が壊れる、俺達の推測が甘かったせいだな、すまん」

「いやちよつとま——」

「〴〵異論は認めん……理由は自分の行動を省みろ、わかったな？」

相澤先生に抗議しようとするも、目で殺される。なんでこの距離で威圧感を放てるんだ……これが抹消ヒーローの実力！

「爆豪君なら文句いいそうなのに、なんも言わなかったね」

「俺とデクがやるなら、そこが事実上の決勝戦だからな。シード枠で決勝でもなんの問題もねえ」

「すごい自信だね……」

かっちゃん和麗日さんがそんな会話をしている。君たち一回戦から当たるのに普通に話すのね。

「〴〵さあ、組み合わせも決まったし、こつからはみんな楽しく競おう、レクリエーションの時間だ!!」

プレセントマイクが告げるレクリエーションの開始、僕の抗議の時間も終わったよ、ちくしょう！

そうして、僕の抵抗もむなしく、レクリエーションが始まったのだった——

「レクリエーション第一種目は大玉転がしだ!参加チームも出揃ったみたいだぞ!そして注目は勿論こいつら!緑谷率いるチーム筋肉同盟だあ!!」

「緑谷、ほどほどにな」

プレゼントマイクが注目を集め、相澤先生が名指しで注意してくる。信頼ないなあ……よし、いくよ。障子君!砂藤君!

「ああ、見せてやろう!」

「俺達のコンビネーションってやつをな!!」

僕ら筋肉同盟は円陣を組んで気合いをいれる。僕らが来たってことを全国に知らしめてやるんだ!そう、筋肉の力を……!

「さあいくぜ!大玉転がしいい!スタートオ!!」

各チームが三人ないし四人係りで大玉を転がしていく。

「おーっと!緑谷チームはまだ動いていない!?!これはハンデか?それとも余裕なのかあ!?!」

「いや、よくみる!障子と砂藤は玉を転がさずに走り出しているぞ」

相澤先生の解説通り、スタート位置には僕と大玉だけが残り、二人は持ち場に向かって走り出す。そして二人が位置についた、作戦開始だ!

「いくよ!障子君!スツマアアッシュユ!!」

僕はそう叫んで、カーブの前で待ち構える障子君へ大玉を吹き飛ばす。

「〴〵緑谷、大玉を超パワーでぶっ飛ばしたあ！その先にいるのはチームメイトの障子だ！どうするつもりだあ!!？」

「任せろ緑谷！うおおお!!いけえ!!」

障子君は僕から高速で転がされてきた大玉を六本の腕を巧みに使って、勢いを殺さないまま絶妙な回転を加える。そして回転を加えられた大玉は――

「〴〵なんとお！障子が触れた大玉がひとりでカーブを曲がっていくう!!なんとという絶妙な回転だー！他のチームを〴〵抜きにしていくぞ!」

きれいにカーブに沿って進んでいく僕らの大玉、そしてそのカーブの終わりには砂藤君が待ち受ける。

「じゃあ！シユガー・ドロープツ!!」

砂藤君は個性を全開で発動し、高速かつ超回転の大玉をがつつりと抱え込む。そして残りの直線を猛スピードで大玉を転がしていく。

「〴〵チーム筋肉同盟砂藤！独走状態でいまゴール!!なんと蓋を開けてみれば筋肉野郎どもの力押しが圧倒的な差で一位を獲得したあ!!」

「〴〵緑谷あ…いや今回はチームだし、多目に見てやるか…」

「やったあ!!すごいよ二人とも!」

「よくやったぞ!砂藤!緑谷!」

「やったぜ!二人とも!」

「ナイス・マツスル!!」

僕らは互いを讃え合い、最後に三人で決めポーズを決める。筋肉最高!!

こうして僕ら筋肉同盟は全国にその名を刻んだのだ。その後も競技はどんどん進んでいく――

第二種目、玉入れ――

「おおお!緑谷、早く動きすぎて残像が見えるぞ!しかもそれら全部が玉を投げていやがるう!」

「ついでに投げた玉は全部籠に入ってるな、コントロールも正確だ!」

「緑谷の近くに玉がねえぞ!更地になっちゃった!」

「玉入れて響きがなんかEr――あべしっ!」

「汚らわしいわ、峰田ちゃん」

第三種目、大綱引き――

「えー、運営委員会からの通達だ!――A緑谷出久は出場を禁止する。とのことだ!

みんな安心して、ドシドシ参加してくれよな！」

「ちくしょう！だめだったか!!」

「当たり前だろ緑谷……なんでいけると思ったんだ」

そして第四種目、借り物競争——

「よし、これには出場できたぞ！」

「よかつたな、緑谷！」

「オイラも頑張るぜ！女子のなんか身に付けてるものとか借りたいなあ……」

「最高にイカれてんな、峰田」

そんな会話をクラスメイトとしながら、スタート位置につく。

「〴〵それでは借り物競争、最終レース！よいい、スタート!!」

プレゼントマイクの合図でみんな一斉に走り出す、一番乗りでお題箱に辿り着いたのは僕だ！

「なにが出るかな——つと、こつ……このお題は?！」

僕はカードを一枚とってお題を確認する、そしてその内容に驚愕したのだった。

「これに当てはまるのは一人しか僕は知らないぞ！急がなきゃ負けてしまう!!」

僕はそう言いながら、会場の外へと飛び出した——

—— Mt. レディ side in ——

「あーあ、私もデクくんの頑張ってる姿見たかったなあ」

「まだいつてんのか、警備で来てる以上はしようがねえだろ?」

「我もスカウトに勤しみたいのを押さえているのだ、我慢せよ」

私の愚痴に、デステゴロとシンリンカムイが正論をぶつけてくる。そういうのが聞きたいんじゃないのよ、只の愚痴なんだから!

「女の子の愚痴に正論とか、二人ともモテませんよ」

「そういうこといってんじゃないやねえんだけどな」

「そうだったのか…だから我は女性人気がないのか…」

デステゴロは大して気にしてないようだが、シンリンカムイには刺さったらしい、ざまあないわね!レディの扱いを少しは覚えてほしいものね。

「しかし、暇ですね。こんだけ厳重警戒で攻めてくるヴィランなんて——」

そんなことを私が言ったその直後、上からなにか落ちてきて地面が派手に土煙を立てる。

「敵襲!?!」

「構えろ、二人とも!!」

「先制必縛！ウルシさ——」

「ちよつとまつて!!僕ですよ!!」

敵襲に構えをとつたところで、煙の中から聞き覚えのある声がある。この声は——

「デクくん!?!」「デクか!?!」

「なにやつてんだ!?!競技中だろ?」

「いやあ、借り物競争のお題でちよつとMt.レディに来て貰いたいです！お借りしますね！」

目の前に現れたのはデクくんだった。デクくんは立て続けに話すと、私の手を引いて走り出した。私がお題?ということなの!?

「急にすいません、優さん。でも貴女しかいないんですよ！」

「私としては構わないんだけど、警備の方はいいのかしら……」

「たぶん大丈夫——」

「ッさあ、B組拳藤、さらにA組瀬呂！お題のものをゲットしたようで、ゴールに向かって走り出す!!」

デクくんが更になにか話そうとしたところで、プレゼントマイクの実況が聞こえてくる。

「まずい！このままじゃ、負けてしまう!!優さんすいません！ちよつと失礼っ！よいっ

しよおおおお!!!!」

「えっ?!——きゃああああ!!!!——」

デクくんは焦った声を出す、次の瞬間私を両手で抱き抱えて飛び立った。

「あん?上からなにか降ってくるぞお!?!あれは——」

「緑谷?!なんで空から降ってくるんだ……」

「誰か抱えてるみたいだぞ!そして着地だあ!!ド派手え!」

デクくんは私を抱えたままひとつ飛びで会場まで戻り、そしてそのまま駆け出した。
なにこれ!?状況が、さっぱりだわ!?

「おーっと!緑谷がお姫様抱っこしてんのは、警備で来ているMも、レディだあ!まあ、盛り上がってるし運営的にはオールオッケーだけどな!!」

「ほんとあいつは、なにやるかわからねえな」

プレゼントマイクの実況と共に会場全体の注目の的となる私達、巨大なモニターには、デクくんにお姫様抱っこされている私の姿が映し出されていた。

なにこれ!?デクくんにお姫様抱っこされているのはスッゴい嬉しいし、目立つのも超好きなんだけど、こんな、こんなのとて——

「恥ずかし過ぎるわっ!!!!」

「あー!! Mt. レイがここで巨大化あ!! そして文字通り緑谷を尻に敷いたー!!
……てかこれ緑谷死んだんじゃない?」

私はあまりの恥ずかしさから、感情が昂って個性が発動し、巨大化してしまう。そして、デクくんをお尻で押し潰してしまった。デクくん!? 死んでないよね!?

「んん!! Mt. レイが尻だけで移動しているぞお!? 某お下品アニメのあれか? あれを習得していたのかあー!?!」

「いや、あれは違うぞ!」

「死んでませええええん!! うおおお!!」

巨大化した私の身体が少しだけ浮いて、そのまま進みだす。そして下からデクくんの叫び声が響く。

「緑谷生きてたー!! てか巨大化した Mt. レイを持ち上げてそのままゴールへ向かううう!! なんてパワーなんだあ!」

「まったく、どこまでも規格外な奴だな、ホント!」

「ええつ!? ええ?」

私は混乱して、動けないまま運ばれていく。

「巨大化した Mt. レイの身体がコースを埋め尽くして、他の選手は先に進めてねえ! そして緑谷そのままゴール!! なんつー馬鹿げた作戦だあ!」

「偶然だとは思いますが、妨害とパワーの合わせ技。かなり合理的な作戦と言えるだろう」

なんとデクくんはそのまま私を持ち上げたままゴールしてしまった。

「あの、Mt. レディ……そろそろ戻ってもらいたいですどお——おお！」

「あつーごめんね!——きやあー！」

デクくんの言葉に我に帰った私は、個性を解除して小さくなる、そしてすつぽりとデクくんの腕の中に収まった。

「Mt. レディのおかげで、一位を獲れましたよ!ありがとうございます!ごぞいます!」

「そう、それはよかったわね……ところでお題ってなんだったの?」

私はまだ少しだけ呆然としながら、デクくんに尋ねる。

「なんだろう、もしかして気になる人とか?それとも好きな人とか?きやあー!どうしよー!!」

「ああ、これですよ! “自分より大きな異性”、いやあMt. レディがいなかったらダメでしたよー、ハハハ!」

「それはよかったわね……おめでどう……」

先程までの恥ずかしさの反動と、あまりにもデクくん過ぎる対応へのシヨックからここからの記憶は曖昧になっている——

M t. レディ side out

「レクリエーションもこれでおしまい！みんなで楽しく踊ろう、フォークダンスの時間だぞ！全員自由に踊りまくれえ!!」

プレゼントマイクの合図でみんな一斉に男女でペアを作り始める。そして僕の周りには話したこともないような女子が物珍しきで集まっていた。

「ねえ、緑谷君私と踊ろうよ!」「学年最強の男と是非!」「ウチもウチも!」「ワイもワイも!」

「いや、あの、その僕は……」

僕は女の子たちに囲まれてどうしていいから分からなくなる、一体なにを基準に誰と踊ればいいんだ!てかひとり野郎がいなかったか!?

そうして僕が女の子にたじたじになっていると、救いの声がかかる。

「デクさん!私と踊らない!」

「麗日さん!——うん!よろこんで!それじゃそういうことだから、ごめんねみんな!」

麗日さんが困っていた僕を誘って助け出してくれた。ありがとう、こんな状況打破できてるなんて麗日さんは天使だ!

「しかし最強無敵のデクさんがまさか女の子が弱点だなんてねえ」

「ハハハ、僕はまだ最強でも無敵でもないよ」

「その言い方だと、いざれ成るみたいな言い方だね」

「なるよ、この雄英でも、プロになっても、僕は必ず一番上に立つんだ。それが目標で約束だからね!」

麗日さんの目を見つめながら、力強く僕は宣言する。オールマイトを超えて彼を救げるんだ、それくらい成らないとダメなんだよ!

「そっか、じゃあその時に私もデクさんに対して恥ずかしくないヒーローになるように頑張るよ!」

「麗日さんならきつと成れるよ!」

「ありがとう、その時は……少しでも側に居させてね」

「えっ? 最後なんていつたの?」

「ふふ、なんでもないっ! さあ踊ろ、デクさん!」

そう言つて麗日さんは、可愛らしい笑顔を浮かべながら僕の手を引く、そして僕らはぎこちないながらも、二人でつかの間のフオークダンスを楽しんだ――

— 峰田 side in —

「誰もオイラと踊ってくれる女子がいねえ……こんなはずじゃあ……」

オイラはフォークダンスの時間なのにひとり寂しくふらついていた。さつきからい
ろんな女子に声をかけるも全戦全敗だ。

『峰田さんと踊るのはちよつと……身長も合いませんし、先ほど騙されたこと、私まだ
怒ってますのよ!』

『ないわー、まーたエツチなことしようど企んでるんでしょ!』

『えっ? 私ー? 尾白君と踊るからーごめんね!』

ちくしょう! どいつもこいつも!! オイラだって四六時中エツチなこと考えてる訳
じゃ……いや否定はできねえな。

オイラはいじけて会場の隅の方へしゃがみこむ。暫くの間、全世界のリア充が爆発す
るように呪いを放っていると、そこへ人影が現れてオイラに話しかける。

「こんなとこでなにしてるの? 峰田ちゃん」

「蛙吹……オイラを笑いに来たのか? フォークダンスの相手すらまともに見つけらんねえ
オイラを……」

「まあそんなことだろうとおもってたわ、だから私は峰田ちゃんをダンスに誘いにきたのよ?」

「えっ!」

蛙吹がオイラをダンスに?なんでだ?さっぱりわからねえ

「なんでオイラなんかを誘ってくれんだよ、蛙吹?」

「私はUSJで緑谷ちゃんだけじゃなく、峰田ちゃん。貴方にも助けられたのよ、これでもかなり感謝してるわ」

「蛙吹……オイラちゃんとお前を助けられなかったし、んでもって——」

「私が感謝してるって思ってるからそれでいいのよ。で、峰田ちゃんは私と踊ってくれないの?」

「踊ります!踊らせていただきます、蛙吹様!!」

「梅雨ちゃんと呼んでちょうだい、ケロツ!」

そうしてオイラと蛙吹は周りからは滑稽に見えるだろうダンスを踊り始める。それでもオイラは充実感に包まれていた、理由は……よくわかんねえな!

曲が変わり、パートナー交代の時間となる。そこに来たのは発目さんだった。

「やあやあ、筋肉の人！私の開発したベイビー、ダンスサポーターのテストに付き合ってもらえませんか?! いいですよね!」

「発目さんはホントぶれないよね、もちろんいいよ。踊ろうか!」

そうして、ぶれない発目さんと一曲踊り始める。ちなみにダンスサポーターの矯正効果は抜群で、発目さんはハイレベルなフォークダンスを披露していた。

次のパートナー交代で僕を誘ってくれたのは拳藤さん、ちよつと意外だ。

「私とも踊って下さる?」

「拳藤さんそんなキャラじゃないでしょ?この短期間でも分かるよ!」

「はっは、バレてたか。まあ折角だし踊ろうよ!」

「こちらこそ、よろしくね!」

僕と拳藤さんはそうして踊り始める、僕も三回目ということもあって、なかなか落ちていて踊れた。それと拳藤さんの長い髪が回転するたび美しく靡なびき、その姿はとてもキレイだった。

そしてフォークダンスも終盤、最後の曲になる。最後まで自分は自分で誰かを誘おう。そうして僕は視界の遠くに見える人に声をかけるため、小走りで向かっていく。

「僕と踊ってくれませんか?」

「——! 私!? 私は警備で……ってデクくんじゃない、まだ競技の途中でしょ?」

「ええ、だから貴女を誘いにきたんですよ、M t. レディ?」

僕は会場の端でブーツとしていたM t. レディに声をかける。

「でも私仕事が——」

「自分で連れ出しといてあれですけど、今さらじゃないですか?それにプレゼントマイクもさつきああいってましたし。それで僕と一曲どうですか?」

「んー、じゃあ。楽しましょっか! エスコートしてくださいな、ジエントルマン紳士?」

「よろこんで、レディ淑女」

M t. レディは僕の誘いをなんとか承諾してくれて、二人してキザにおどけてみせる。そして最後の曲が始まり、僕らはゆっくりと踊り始める。

「まさか体育祭でデクくんと踊ることになるとはね〜」

「僕もこんな風に踊ることがあるなんて、想像もしなかったですよ」

「ふふ、そうね。私もあと七年若ければ、デクくんと一緒に学校に通えたのになあ」

「M t. レディは若くてキレイで、それに大人っぽくてステキですよ——」

「あら、見ないうちにお世辞が上手くなったのね。誰に仕込まれたのかしら——」

「さあ、誰でしょう? ヒントは灯台もと暗しで——」

「言うわね——」

——僕は喧騒の中踊っていた。片やオールマイトの弟子で今大会の注目の選手、片や期待の大型新人プロヒーロー、そんなこともその時だけは忘れて。愉しく二人で踊り続けた。

——そして楽しいレクリエーションの時間は終わり、最終種目の準備が始まる。

——この体育祭の王者を決める一対一のガチバトル、ついに決戦の時が訪れる。

僕だけがいないトーナメント

どたばたの昼休みに、楽しかったレクリエーションも終わり。遂にトーナメントがやって来た、僕は決勝からなんだけど……みんながどんな戦いを繰り広げるのか、さあ始まりだ！

「オツケー、もうほぼ完成だよ」

セメントス先生が会場の設営の終了を告げる。いよいよ始まるんだな……！

「ありがとう、セメントス。第一試合のやつらは準備しとけよ」

相澤先生はセメントス先生に声をかけたあと、峰田君と障子君に声をかける。あれ？
なんで相澤先生が会場に？

「相澤先生……なんで会場の方にいるんですか？」

「ああ、もしもの時に備えて俺も副審として入るからだ。緑谷、お前は代わりに解説席に

いけ、というかさつきもそう言っただろ、ちゃんと話聞いとけ。」

相澤先生はぶつきらぼうに答える、そういえばそんなことも言われてたな…トーナメント表が衝撃的過ぎて忘れていた。

「ぼさつとすんな、早くいけ緑谷。もうすぐ試合開始だぞ」

——僕は相澤先生に急かされるように、会場から追い出されししぶ解説席へと向かうことにした、そしてその道中ひとりの大男が現れる。

「オールマイトの弟子…また会ったな」

「また会ったなっていうか、ここで待ち構えてたんでしよう、エンデヴァー?」

ヒーローランキングNo. 2、フレイムヒーローエンデヴァーが僕に声をかけてきた。この人が通る道は何故か火災報知器が鳴らない、という都市伝説の持ち主でもある。

「待ち構えてなどいない! たまたまだ、勘違いするなよ…!」

「わかりましたよ、じゃあそういうことにしときます。それでなにかお話でも?」

エンデヴァーは少しイラつきながら僕に言う、ホントかつちゃんによく似てるなこの人…つまりめんどくさいツンデレってことだ!

「首尾の確認に来たのだ、貴様の草案に乗ったんだ、上手く行ってもらわないと困るからな」

「うーん、上手くいくかどうかは、僕じゃなくて貴方次第ですよ、エンデヴァー。そっちの用意は出来てますか？」

「問題ない、あと一時間程で着くだろう。」

「ふむ、じゃああとは彼次第つてとこですね、上手くいくことを祈りましょう！」

僕はエンデヴァーと計画の進行を確認して、最後におどけてみせる。

「貴様！……結局はあいつ次第ということだな。わかった、ではいけ！」

「自分から呼び止めといて、ぞんざいな扱いですね。まあそういうことで、失礼しますよ」

僕はそう告げて、その場を後にする――

――僕は解説席につき、会場の準備も終わり、いよいよ第一試合が始まる。

「〴〵さあさあ、いよいよ始まるぜ！結局これだろ！？ガチバトル！実況は引き続きこの俺プレゼントマイクとお！〴〵」

「〴〵相澤先生より解説を引き継ぎました、1―A緑谷出久でお送りします！〴〵」

僕とプレゼントマイクが並んで、実況と解説を務める。まさかプレゼントマイクと並んで仕事をする日が来るとは……人生わかんないな！

「〴〵選手の入場だあ！まずはこいつ！今大会最大の体格を持つ男！そのやたらと多い腕

で勝利も掴めるか!? 1—A 障子目蔵だー!!」

「お次は同じく1—A! この男の躍進を誰が予想できたのか! ミスター予想外、今大会最小の男! 峰田実うう!!」

プレゼントマイクの実況と共に二人が入場してくる、僕もなんか言わなきゃ!

「今大会、最大と最小の二人。この90cmもある身長差が戦いにどう影響するのか、今後の展開が楽しみです」

こんな感じでもいいんだらうか…?

「おお、解説サンキュー緑谷! 確かに気になるところだぜ、さあそしてついに! ついにいい!!——」

プレゼントマイクが僕に礼を言う、どうやら正解だったらしい。よし、こんな感じでやっていこう!

「一回戦、第一試合! レディイイイ! スターー!」

プレゼントマイクの合図で戦いの火蓋が切られた。

「クラスメイトだろうと、容赦はしない…いくぞ!」

「オイラはモテモテになるために、ここで躓いてらんねーんだ!」

障子君が真つ直ぐ距離を詰めるも、峰田君は個性のモギモギを撒き散らしながら後退する。

「さあ峰田！早速個性全開で逃げ回るう！だが障子も負けじと峰田を追い詰めていくぞ！」

「体格差が大きい分、峰田君は接近戦を避けたいでしょうね。無難に個性で動きを止めて封殺狙い、といったところでしようか」

それから二人の追いかっこは続き、気が付けばフィールドは峰田君のモギモギで足の踏み場も少ない状態になっていた。

「さあ、もう逃げるのは終わりだぜ！障子、覚悟しな！」

峰田君が障子君に宣戦布告する。かなり有利な状態を上手く作り上げたな。

「なんと、峰田の個性がフィールドを埋め尽くし、そこを峰田が縦横無尽に跳ね回っているー！一方、障子は身動きがとれなくなっているぞお！！」

「峰田君のモギモギは彼自身にはくつつかないですから、それで高速移動を可能にしているでしょう。しかしこれほどのモギモギを生み出せるとは、峰田君の個性のスタミナには驚きです」

「そんなに出せばもう打ち止めだろうか？そろそろ決着をつけさせてもらおう……」

「だからどうした!? オイラのトラップに一步でも引つ掛かればお前はおしまいなんだぞ！！」

障子君は不利な状態ながら峰田君を挑発する、峰田君はそれにつて叫びだした。冷

静さを奪ったのか、さあどうするんだ？

「それはっ！どうかな！」

障子君はそう言いながら、峰田君へと飛びかかる、そんなことをすれば――

「あーつと！障子特攻ー！！しかしあと一步届かず、峰田の個性に足をとられた！」

「いや。まだです！障子君は止まっていない！」

障子君はそのまま勢いを殺さず、峰田君へ更に一步踏み込んだ。くつついたはずの足は――

「うわお！障子、なんと足を引きちぎって前進ー！なんつー覚悟だ！てかこれ放送事故になんねーか?!」

「なにいいいい!?!」

「油断したな、峰田！捕らえたぞ……」

障子君が峰田君の胸ぐらを一本の腕で掴み、持ち上げた。

「ちぎれたのは彼の個性で腕から複製した足です！峰田君の油断を誘って、自らの間に合いに捉えたんですよ!!」

「さらばだっ!!」

そして障子君はその筋肉を存分に使い、峰田君を勢いよくぶん投げる。峰田君は地面に着くことなく、自らの個性によってピンボールの様に縦横無尽に跳ねながら場外へと

飛ばされていった。

「峰田君、場外！よって障子君二回戦進出！」

ミッドナイトの勝利宣告が響き、試合は障子君の勝利で幕を納めた。

「〃一回戦から逆転勝利がでるとは！今年はほんと盛り上がるねえ!! さあ今の一戦のポイント、どうみる解説の緑谷あ!?」

「〃お互いの個性を存分に使った試合展開でしたね、ですが障子君の作戦勝ちと言えるでしょう。」

この最終種目は開けた空間での一対一の戦いですから、個性の長所を上手に押し付けられると、勝利がグッと近づくんですよ。

隠された長所を持っていた障子君が一枚上手だったんでしょう、もちろんその逆も充分にありえましたが……雄英らしい良い試合でしたね!」

僕は息をつくことなく、一気に今の試合の印象を語っていく。ほんと個性の押し付けあいって感じだったな!

「〃なっげえ解説サンキュー緑谷! さあ次は第二試合が始まるぞお!」

———その後の試合は前世と同じ組み合わせでは大体同じ試合展開だった。

轟君 対 瀬呂君、轟君が特大の氷壁で瀬呂君を凍りつかせて勝利。相変わらず会場中からドンマイコールが巻き起こった。ドンマイ!

上鳴君 対 塩崎さん、塩崎のツルの個性で上鳴君を瞬☆殺。別に殺したわけではないけど……個性の相性は大事だ。

飯田君 対 発目さん、発目さんのセールスタイムが開催されて、その後自ら場外へ。そういえば騎馬戦のときは発目さん自身が目立っていて、ベイビーたちは目立ってなかつたな、このための伏線だったのかもしれない。

芦戸さん 対 拳藤さん、これは前世にはない戦いだったが、あつさりとした決着だった。

芦戸さんの酸を拳藤さんが巨大な掌で仰ぎ飛ばして接近戦へ、酸による火傷もいわず気合いで押し切り、そのまま場外へと弾き飛ばした。運動神経抜群の芦戸さんといえど、近接格闘を得意とする拳藤さんには敵わなかったみたいだ。

常闇君 対 八百万さん、常闇君の黒影が速攻を仕掛けて、八百万さんの創造物を使わず勝利した。この形式の対一だと相性次第では黒影は無敵に近いな……！

鉄哲君 対 切島君の個性駄々かぶり対決は相変わらずドロード、あとで腕相撲で勝敗を決することとなる。

——そして麗日さんとかつちゃんとの対決の時が来た、僕の友達二人による勝負、どっちも応援しているが、丸くなったかつちゃんがどんな戦いをするのか……！

「騎馬戦では小動物のように緑谷の肩に乗っていた、注目度抜群の筋肉使い！——A、麗日お茶子お!!」

「同じく——A！騎馬戦で悪魔のごとき追い討ちをかけまくっていた男！驚異の悪人面、爆豪勝己だー!!、」

プレゼントマイクが二人の入場アナウンスをする、筋肉使いつて…言い得て妙だな！「痛えじゃすまねえからな、丸顔。棄権すんなら早くしとけ」

「爆豪君……私は勝ちに来たんだ！始めっから諦めるなんてありえないよ」

「そうかよ……じゃあ精々覚悟しとけよ」

かっちゃんも麗日さんが短いやり取りを交わす。麗日さんは気合い充分、かっちゃんも相手を軽視する様子はない、互いに臨戦態勢だ。

「『スターートツ！』」

そして、試合が始まった。合図と共に麗日さんが距離を詰め、速攻の奇襲を仕掛ける。しかしそれはかっちゃんの超反応によって失敗してしまう。

その後も麗日さんは低姿勢で突撃を繰り返し、かっちゃんの爆破による容赦ない反撃を受け続ける。

そして、爆破で散った会場の破片を個性で上空へと集め、瓦礫の流星群を降り注がせた。

しかしかつちゃんは特大の爆破でそれを一蹴した。

ここまで前世とまったく同じ展開だ……それは秘策を破られた麗日さんがキャパオーバーでぶつ倒れて負けるってことだ。

「それでも!!——私は勝ちたい! デクさんの側に少しでも居られるようなヒーローになりたいから!!!」

麗日さんは僕の記憶を裏切り、また立ち上がった。麗日さん……君は——

「麗日あ……ここで再び立ち上がるう!! なんつーガッツだ! 頑張れ麗日!!」

プレゼントマイクも驚愕の声を上げる、しっかし私情丸出しだな!

「そういうことなら尚更負けてやれねえ……ここから本番だつ!!」

かつちゃんが口角を引き上げながら麗日さんへ駆け出す、迎え撃つ麗日さんに怯えはなくその目は死んでいない。

「デクのいつちゃん側に居るのは、サイドキック相棒たるこの俺だあ!!」 BOOM!!!

かつちゃんは走りながら至近距離で爆破を放ち、麗日さんを吹き飛ばし——
「なにい!!」

——せなかつた。麗日さんはかつちゃんの腕をガッチリと掴み、爆破でポロポロになりながらも踏ん張っていた。

「なんと麗日、爆豪の近距離からの爆破に耐えたあ!! 根性はいつてんどおい!!」

「これで麗日さんの個性が——」

耐えきつた麗日さんの個性がかつちゃんを浮かす、そう思ったとき、麗日さんは力なく地面に倒れ伏した。そしてミッドナイトが二人の間に割って入る。

「うう……まだ……」

「麗日さん行動不能！爆豪君、二回戦進出!!」

麗日さんが地面でまだ蹴^もぐも、ミッドナイトが戦闘継続不可能と判断し、かつちゃんの勝利を言い渡す。

「おい……」

かつちゃんが倒れる麗日さんへつかつかと歩いて近づく。

かつちゃん、一体なにをする気なんだ…？

「なかなか根性あるじゃねえか、デクと俺のしたつぱくらいには、してやってもいいぜ……麗日」

かつちゃんはニヤリと笑いながらそう言って、ジャージの上着をボロボロの麗日さんに投げて被せた。やつぱかつちゃんって口調は荒いけど丸くなったなあ。

そうして、麗日さんを載せた担架が退場し、かつちゃんも別方向へと退場した。

「ああ、麗日……よく頑張ったよ。あ、あとバクゴー二回戦進出——」

「私情すごいですね!?!」

僕は感情丸出しのプレゼントマイクに突っ込む。

「私情と言えば、終盤二人ともお前の名前出しながら戦ってたな！そこんとこドーナノ緑谷あ!!」

「めっちゃ恥ずかしかったんだから、掘り返さないでくださいよ……けど、それと同じくらい、いやそれ以上に誇らしく思いますよ。彼らの思いに応えられるよう、立派なヒーローに成らなくちゃ、って感じですよ」

「もつと恥ずかしがるのかと思ってたのに、こいつぁ熱いな!!——しっかし、会場ボツコボコツ！会場の修繕と切島鉄哲の回復もあるし、一回戦も終わったことだし、これから小休憩だな！それが終わればいよいよ第二回戦の始まりだ、んじゃそゆことで！」

プレゼントマイクが小休憩を告げて、マイクを切ってだらけ始める。

「僕、ちよつとトイレ行ってきます！」

「おう、いつてらー。漏らすなよー」

僕はプレゼントマイクにそれだけ告げて、解説席を後にした——

—— 麗日 side in ——

「はあ、完膚なきまでに負けてしまった……」

私はリカバリーガールの治療を受けたあと、誰もいない保健室で独り言を呟きながら、ベッドに腰掛け、ぼーっと考え事をしていた。

『デクと俺のしたつぱくらいいはしてやってもいいぜ……麗日』

先程の爆豪君の言葉を思い出す。したつぱって、普通に相棒サイドキックでええやん!……:そういえば爆豪君が名前呼んでくれたの、初めてな気がするなあ……

そんなことを考えていると、ドアをノックする音が部屋に響いた。

「はい、どうぞー」

「麗日さん! 怪我大丈夫?!」

「デクさん!」

そこに現れたのは解説席にいたはずのデクさんだった。忙しいはずなのにわざわざ心配できてくれたんやろか? なんか申し訳ないけど……嬉しいな。

「リカバリーガールの治療で大体治ったよ、体力の関係で小さな傷は残ってるけど、大丈夫!」

私は笑顔で大丈夫なことをアピールする、来てくれたんやしもう心配かけれん!

「いやあ爆豪君強いねえ、完膚なきまでにやられたよ! まさかあの作戦を一撃で破られるとは思ってなかったあ!」

「……麗日さん……」

私は出来るだけ明るく振る舞う、しかしデクさんは心配そうな顔をやめない。あかん、もつと明るく元気にいかないと、デクさんに心配かけちゃう……!

「最後も気合い入れて耐えてみたは良いものの、結局力尽きちゃったし!もつと頑張らんといかんなあ私!」

「大丈夫……?」

「よつと!ほら大丈夫!意外と大丈夫!」

私はベッドから少し跳ねて立ち上がり、弱気を晒さないよう、さらに明るくおどけてみせる。大丈夫だよデクさん、私迷惑かけないからね。

「デクさんに対して恥ずかしくないヒーローになるために、まだまだ負けてられんよ!だから——」

「麗日さんっ!!」

私の言葉を遮ってデクさんが大きな声で私の名前を呼ぶ。

「どうしたん?おつきな声やね!流石デクさ——」

「もういいんだ麗日さん!——悔しかったよね…今は悔しがつてもいいんだ」

「えつと、その……大丈夫……やから……」

デクさんがそんな言葉をくれる。ダメだよデクさん、今そんな言葉もらったら私、私は……

「よく頑張ったね、だから…いまは泣いてもいいんだよ、麗日さん」

「…デクさん……」

デクさんは私に優しく語りかける。ダメダメ、堪えろ私。泣いたらあかん…これ以上は甘えたらあかん…！

「麗日さん…：負けても転んでも、また…立ち上がればいいよ。きつと君にはそれが出来る！」

「——デクさんっ!!」

デクさんがそう言いながら私に手を差し伸べる、彼には私の痩せ我慢なんてお見通しみたいだ、ホントにデクさんはすごい。

私はもう涙が堪えられず、衝動に任せてデクさんの胸へと飛び込んだ。

それから私はデクさんの胸で声を押し殺しながら泣き続けた。デクさんは時折大丈夫と言いながら、私の頭を優しく撫で続けてくれた——

——暫くして私は泣き止んだ。なにか言わなきゃって思ってたそのままの体勢でデクさんを見上げる、けど言葉が出てこない。ああ、顔あつつい！はずい！あかん…どうしよ!?

永遠にも感じられるような短い沈黙、その時だった。

「おい、生きてつかあ丸顔。そろそろ上着かえ——」

「あっ」

爆豪君が上着を取り戻しに保健室へとやってきた。互いに目が合い、私とデクさんの声が重なる。

「……」 「……」 「……」

誰もこの状況を言葉に出来ず、沈黙が流れる。

「——あー、あれだ……邪魔したな。上着は後で返しにこい」

そして爆豪君がそれを断ち切り、踵を返して立ち去ろうとする。

「ちよーちよつと待つて爆豪君!! 違うから、いや違わんけど、そういうんじゃないから

!!」

「そ、そうだよ、かつちゃん! 僕と麗日さんがそういうのとか、そうじゃないからね!

ねっ?」

私とデクさんはあたふたしながら、爆豪君によく分からない言い訳をかます。

「いや別に俺は気にしな——」

「とにかく!! そういうんじゃないの、わかった? 今見たことは忘れて、いいね……?」

「お、おう……」

私は爆豪君の肩を掴んで、有無を言わせず納得させた。

「ッさあ、会場の準備も出来て、切島と鉄哲も準備が整いそうだ！あと、緑谷クソ長くね!?早く戻ってこーい!」

「やばっ!じゃあ僕そろそろいかなきゃ!またね、二人とも!!」

プレゼントマイクの放送が入り、デクさんはそう言うと言いつつ駆け足で去って行ってしまった。やっぱり抜け出して来てくれたんだ…!

「上着は——つと!じゃあ俺もいくからな、あんまデクに迷惑かけんじゃねえぞ、丸顔」
自分の上着を取り戻した爆豪君は、私にややトゲのある言葉を残して保健室から出ていった。

そして私は保健室に取り残され、また一人になった。

はあ、デクさんはやっぱりすごいなあ、私のヒーローだよ、もう!

そういうえば——なんで私はあんなに必死に爆豪君の誤解を解こうとしたんだろ……うーん、よくわからんね!

そのあと、父ちゃんたちから電話がかかってきて、私はまたそこでもちよつとだけ泣いたのだった——

—— 飯田 side in ——

第一試合も一通り終わり、小休憩に差し掛かった。そのとき僕のポケットの中身が震えた。マナーモードに設定しておいたスマホに電話がかかってきたようだ。

「ん？母さんから……？？？いったいなんだろう？」

僕は応援席から外れ、電話に出るため移動する。

「もしもし、母さん？どうしたんだい？いま競技の間なんだが——」

「天哉……落ち着いて聞いて！天晴が——兄さんがヴィランに……!!」

「——は？」

僕は母さんの言っていることがよく理解できなかつた。兄さんが……なんだって!?

そんな……あり得るわけがない。兄さんが……僕の憧れのヒーロー“インゲニウム”が——

——
ヴィランなんかにはやられるわけがない……!!!

——
飯田 side out ——

戦いは止まらないからススメ!

遂に始まったトーナメント戦、第一回戦は順調に進み、最終試合で麗日さんとかつちゃんの戦いがあった。前世の時よりひどい怪我を負った麗日さんが心配になった僕は、解説席を抜けて保健室へと向かう。

悔しさを押し殺して無理をしていた麗日さん、僕は救きたいと思って彼女を慰めた。その現場をかつちゃんに目撃されるっていうハプニングがあったけど、少しでも助けになれたかな…?

「〴〵さて、緑谷もよーやく戻ってきたところで、早速切島と鉄哲の腕相撲対決だあ!」
「〴〵大変お待たせしてすいません!」

僕は解説席に戻り、プレゼントマイクと会場のみんなに謝罪する。

「〴〵——じゃあ、カッチカチアームレスリングウ! スターート!!」

プレゼントマイクの合図で勝負が始まる、その結果は前世と同じで切島君の勝ちとなり、二回戦進出の切符を掴んだのだった。カチカチと勝ちを掛けていたんだろうか?

——そして二回戦が始まった、第一試合は障子君 対 轟君、一回戦と同じように轟君が氷壁で障子君を凍らせて終わりだろう。そう思っていたのだから、それは僕の思い違いだった。

「轟！一回戦とは違い、ピンポイントで障子の手足だけを凍りつかせたあ!!」
 「かなり精密な個性の使い方ですよこれは！すごいです!!」

轟君は巨大な氷壁を作らず、障子君の足元と背後に氷壁を作り、その手足を拘束した。消耗も抑えて相手も抑える、まさに妙技、理想的な個性の使い方だろう。

「降参しとけ、障子。跪くと痛えぞ……」

「ぐっ……まだだ、これくらいで参るわけにはいかない……!」

轟君が降参勧告をするも、障子君はまだ諦めていない。

「筋肉同盟の……砂藤と緑谷……友と鍛えたこの筋肉は伊達ではっ!ないっ!!!」

障子君は6本の腕と2本の足の筋肉を滾らせ、氷の拘束を破壊して抜け出した。

「なんとお!障子!拘束を筋肉でぶっ壊して脱出う!パワーで力押ししだー!!」

「筋肉と個性を活用した、この場での最善策でしょう。しかしその代償として障子君の手足はボロボロです、一方轟君はほとんど消耗もなく依然として有利な状態ですね!

「

「……どいつもこいつも、緑谷緑谷、筋肉筋肉って……うるせえんだよ……」

轟君の纏う雰囲気が変わる。そして見たものを凍り付かせるような、とても冷たい視線を障子君へ向ける。あの視線に籠められているのは――

「……クソ親父……緑谷――」

「ダメだ!! 轟君つ!!」

――重く冷たい……殺気そのものだ!!!

「――見てろっ!!」

「――!! 参った!」

障子君がそれを感じとり降参をする。しかし轟君の右足はすでに地面を踏み抜いていた。

――しかし、その足から絶対零度の一撃は出なかった。

「そこまでだ、轟。障子の降参が早かったからいいもの……次やったら退場にするからな」

相澤先生が鋭い眼光で轟君を居抜き、その個性を消していた。だが会場の空気は凍りついて……

「轟、相手の力量に見合う攻撃を出来るようにしろ、ヒーローがヴィランをウツカリ殺し

てしまいましたじゃやっつけてねえぞ。実力あんだからそういうのもこれから学んでいけ」

「——っ！すいません…熱くなってました……」

相澤先生は轟君を諭し、轟君も謝る。まるで教師みたいだ……！

「障子、お前は良い判断だった。安全な状況が確保出来るなら無理せず退く、それもプロとしてやってく重要なポイントだ。もちろん退けないときもあるがな、今は地力を上げて対応出来るようになればいい」

相澤先生はさらに障子君にも評価をしていく。

「主審、ジャッジは？」

「え、ええ。障子君降参により、轟君が準々決勝進出よ！」

相澤先生がミッドナイトを促し、決着がついた。

「わりい、熱くなりすぎた……」

「真剣勝負の場だ、気にするな。いい試合だった」

轟君が障子君に謝り、二人は握手を交わす。

「クールツ！まるで教師みたいだったぜ、イレイザー!!」

「俺は教師だぞ、マイク」

「……ときどき忘れんだよな！——そーいや俺も教師だったぜ！——さあて決着がついて、

ノーサイドになったところで、どんだん次にいこうぜ！アーユーレディ!? ”

プレゼントマイクが相澤先生を弄り、その場の空気を和ませる。そして会場を煽り、再び熱気が戻ってきた。

やっぱり雄英の教師陣はスゴい、この状況をあつという間に丸く納めてくれた!

——そして、プレゼントマイクの言葉の通り、第二回戦もどんと進んでいった。

塩崎さん 対 飯田君、飯田君が開幕レシプロバーストで首根っこ掴んでそのまま場外へ、”速さは強さ”を地で行く戦闘スタイルだった。なんか飯田君のテンションがやたらと高かったが、なにかいいことでもあったんだらうか?

拳藤さん 対 常闇君、常闇君が無敵の黒ダークシャドウ影でオラオラして、一方的な試合展開で勝

利。近接格闘型の拳藤さんでは中距離操作型のスタ……個性を持つ常闇君には触れられなかった。

切島君 対 かっちゃん、かっちゃんが容赦ない絨毯爆撃で、切島君の硬化を突き破り勝利。ラッシュを決めるかっちゃんの顔はとても悪魔的で、尚且つ楽しそうだった……

また小休憩を挟んだのちに、準々決勝が始まる。一試合目は轟君 対 飯田君、登り調子の飯田君が強個性の持ち主の轟君にどのような戦いを挑むのか——

—— 飯田 side in ——

遂に準々決勝までコマを進めることが出来たぞ！確かに轟君の個性は強力だが、付ける隙が全くないわけではない！！

僕には少しの隙でも充分だ、速さでその少しを最大限に活かして、勝利を掴むのさ！！
「トーナメントもいよいよ終盤！準々決勝第一試合は轟 対 飯田の対決だあ！お互いここまで相手を速攻で仕留めてきた同士、スピード決着が予想されるぜっ！！」

「さあ、ゆくぞ！轟君！！スピードと言われては、尚更負けられない！！」

「やたらとテンションたけえな…飯田」

「ハッハ！個人的な事情だ！気にしないでくれたまえ！！」

「そうか、なら俺も個人的な事情で機嫌が悪い…先に謝っておく、やりすぎたらわりいな」

僕と轟君はそんなやり取りを交わす、互いに事情があるとは奇遇だな！だが負けられない！

僕のテンションがこんなに高いのにはモチロン、理由があるのだ。

「それではレディイイイ！スタート！！」

——それは、第一回戦終了後の小休憩の時だった。

「——兄さんがヴィランに……!!」

「——は？」

母さんからかかってきた、兄さんがヴィランにやられたという知らせ。僕は理解に時間がかかる、信じたくなかったからだ。

「兄さんは！無事なのか!?生きてるんだよな、母さん!!」

「天晴は怪我してるわ……全然無事じゃないわよ！こんなことならヒーローになんて——」

「どういうことだ!?と、とにかく、僕も直ぐに病院に行く！いまだこの病院にいるんだ!?!」

僕は母さんに兄さんの安否を訪ねるが、わかったのは怪我をすることと、母さんがとても動揺していることだけだった。こうしてはいられない、直ぐにでも兄さんの元に向かわねば!!

「なにいつてんだ天哉！お前まだ競技の最中だろ！」

電話口から母さんではない声が聞こえて、僕を叱る。なんでだ……この声は——
「兄さん!?!天晴兄さんなのか!?どういうことなんだ……兄さんがヴィランにやられたのにその兄さんが電話に!?!」

「落ち着け、天哉！俺は死んじやいない、母さんが大袈裟過ぎるだけだ」

「大袈裟なもんですか！大事な息子が大怪我したのよ？心配するじやない!!」

「わかったよ、心配かけてごめんよ母さん。でもこの通り、大した怪我じやないから！」

動揺している僕を尻目に、母さんと兄さんは電話口で言い合いをする。兄さん、思ったより元気そうだ……良かった……!

「兄さん、説明してもらってもいいかな？」

「ああ、どこから話すかな——よし、最初から順序立てて話そう」

「ならそれで、よろしく兄さん」

僕は兄さん説明を求め、兄さんがそれに答える。さあ聞かせてもらおう、なにがどうなったのかを……

「このきつかけは、今から1週間くらい前、うちの事務所に一本の電話が入ってきたんだ。相手先はなんとあのオールマイト事務所！」

内容としては俺らの活動拠点のうちのひとつ、保須市に凶悪なヴィラン、ヒーロー殺しが出没する可能性が高いから警戒するように、つてものだったんだ。

それに出没するのは路地裏なんかの人目につかない場所だとか、個性の特徴だとか、具体的な出没の日にはとか、詳しく教えてくれたんだ。超一流ヒーロー事務所ともなると、調査力も凄いいんだなって思い知らされたよ。

それで、そのアドバースに従って四人一組フォーメンセルの警戒態勢で巡回をしていたんだか、ホントに現れたんだよ、ヒーロー殺しが！

発見した途端に戦闘になってな、ホントにイカれたヴィランだったよ。直ぐに警戒中だった他の相棒連中仲間たちにも連絡して、チーム韋駄天の総勢60名近くの数で迎え撃つたんだ。

だが非常に凶悪かつ強力なヴィランでな、特にスピードが半端なかった、囲まれないように立ち回りながら、一人ひとり負傷させられたよ、その時に相棒を庇って俺もやられちゃってな。結局、数の利があったから負けはしなかったんだが、逃げられたよ……」

兄さんはホントに最初から話してくれた。そんなことが起きていたなんて……

「でも兄さん、怪我したんだろ!?大丈夫なのか!?!」

「ああ、医者が言うには特に後遺症とかも残らず、ひと月くらいで治るとのことだ」

「ああ、良かった……!兄さんが再起不能になっていたらと思うと、ゾツとするよ」

「警戒してなかったら確かに危なかったな……だが、怪我が治ったら次こそはヒーロー殺しを捕らえてやるさ!」

兄さんはそこまで重症ではないようで、再起とりベンジに燃えていた。

「ああ、兄さんならきつと出来るよ!なにせ兄さんはインゲニウムだからね!」

「ありがたいな、天哉。お前もこのあと試合あるんだろ?病院のベッドからテレビで応

援してるぞ! 頑張れよ!」

「ありがとう、兄さん! 兄さんに恥ずかしくないように頑張るよ!!」

「おう——」

——というのが僕がテンションが高い理由だ、兄さんが見ているんだ、やる気が出ない訳がない!!

「飯田君、行動不能! よって轟君、準決勝進出!」

——と思ってたのに、僕は負けてしまった……レシプロで短期決戦を仕掛けたが、カウンターでマフラーを詰まらされて、そのまま凍り付けにされてしまった。

試合後、僕は落ち込みながらとぼとぼと控え室に戻った。そして荷物をまとめて部屋を出ようとしたとき、スマホに着信が入った。

「もしもし……?」

「天哉、お疲れさん。惜しかったなあ、さっきの試合」

「兄さん……!」

電話をかけてきたのは兄さんだった、しつかりと見ていてくれたらしい……

「すいません、兄さん。負けてしまいました……」

「気にするな、ワルくない試合内容だったぞ。あと一歩で場外に押し出せたんだからな」
「でも、轟君の…彼のほうが一枚上手でした。完敗だよ…」

僕は兄さんの励ましに、なおのこと落ち込んでしまう。

「そうかも知れないな、でもお前にはまだ来年も再来年もあるじゃないか！こんなところで落ち込んで立ち止まってられないだろ？」

「兄さん…！」

「俺もお前も一度負けて、倒すべき目標が出来た。ならあとはそれに一直線に最速で向かうだけ、それが飯田家男子つてもんだろ！なあ、天哉？——」

「うん…うん！そうだね、兄さん！僕、頑張りますよ、そして来年こそは轟君にリベンジを果たす!!——」

僕も兄さんも確かに負けてしまったけれど、決して諦めはしない、僕は進む、進む続ける。

立ち止まらず、進み続ければ…必ず道が開ける。僕はそう信じているから——

——飯田君と轟君の対決も終わり、次は常闇君とかつちゃんの準々決勝が始まった。

試合は終始かつちゃんのペースで進んだ、かつちゃんは黒影に爆破を浴びせ続けて、その光で黒影はどんどんと萎縮していく。

そしてそのことに気がついたかつちゃんは止めに閃光弾スタングレネードを放ち、強烈な光で黒影を完全に鎮圧、そのまま勝利を掴んだ。

しっかしかつちゃん、このトーナメント入ってからイキイキしてるなあ：相手に向かつて存分に個性をぶちかませるのが楽しくて仕方ないんだろうか：？まあ幼い頃から僕がとめてきたからなあ、真っ直ぐ育ってくれてホントによかった。

そして休憩を終えて、遂に準決勝が始まる！

「『きたぜきたぜえー！トーナメントを勝ち上がってきた二人の猛者！王者緑谷に挑むのはいったいどちらになるのかあ！！選手入場ー！！』」

「『ここまで相手を開幕で瞬殺！試合時間の合計がまだ1分にもなってるぞ！！ヒーロー科A組！轟焦凍オオ！！』」

「『うってかわってこちらは全試合で相手を爆破し続け、爆発的に観客オーディエンスを盛り上げまくって、勝利を掴んできたエンターティナー！同じくヒーロー科A組！爆豪勝己イイイ！！』」

プレゼントマイクのアナウンスでふたりが入場してくる、轟君は冷静で無表情に、かつちゃんは悪魔的な笑顔で大胆に、対極的な表情で入ってきた。

「まともな戦いはおそらくここまで！プロヒーローたちはスカウトの用意しとけよっ！！」

「“どういう意味ですかそれ……”」

僕はプレゼントマイクに突っ込む、理由はわかるが納得は出来ない！

「“じゃ始めるぜ！準決勝！レディイイイイ！！スタアアーツ！！”」

プレゼントマイクの合図で試合が始まる、先に仕掛けたのは轟君だ。彼の右足から氷が走り、そのままかつちゃんを呑み込んだ。

「“はつや！これは早速終了かあ!?”」

「“——!!いや、まだです!”」

「——ツオラア!!終わんねえっ—の、俺が勝つまではなあ!!」

かつちゃんは氷を爆破で土竜のように掘り進み、派手に突き抜けてきた。荒々しいがあれがかつちゃんのスタイルだろう…

「単純なんだよ、半分野郎！開幕ぶっぱなんてお見通しだア!!」

「今ので終わってくれりゃ、楽だったんだけどな…」

「残念だったな、てめえが終われやっ!!」

かっちゃんも轟君は短いやり取りをしたあと、今度はかっちゃんが仕掛ける。それから結構一方的な攻撃だった、かっちゃんは轟君の左側に回りながら爆破を浴びせまくる、轟君は氷壁でガードしたり、吹き飛ばされるのを防いだりしていたが、かっちゃんに攻撃を当てられないでいた。

「開幕からうってかわって爆豪、流れるような連続爆撃で轟を圧倒!!しかも段々速くなってるねえか!?!」

「かっちゃん……爆豪君はスロースターターですからね、後半になればなるほど爆破の威力と連射速度が上がるみたいです」

「どうしたよ、半分野郎!使わねえのか左側!^{炎の方}まあ、てめえがナメプのまま終わろうと知ったこっちゃんねえがな!!」BOOM!!

「ぐっ!左は戦闘^熱においてぜってえ使わねえ!!」

かっちゃんは爆破で執拗に左側を狙う、左を使わない轟君は右で^水風ぎ払うも、それに対応しきれない。

「そうかよ!ならヒーローなんて目指すの辞めて、コンビニ店員でもやってなア!!」
「BOOM!」

かっちゃんは爆破の勢いで超加速して、轟君への距離を一気に詰める。

「——こちら暖めますか?つてよおッ!!」BOOOOM!!!

かつちゃんは勢いに乗ったまま大きめの爆破を放つ、轟君は咄嗟に氷壁を張るもそれを破壊されてそのまま場外へと吹き飛ばされそうなるが、自ら作った氷壁に激突し場外を免れた。

「お前もういいわ、本気でやんねえならそつから降りろ。俺が決勝に上がつて本気の戦いをやるからよ——デクとな!!」

かつちゃんは吐き捨てるように轟君に降伏勧告をする。しかし氷壁にもたれかかっていた轟君はその言葉を聞いた瞬間、霧囲気が豹変する。

「てめえもか……てめえも緑谷なのか……いや、お前はそういうヤツだったな……」

轟君はゆらりと立ち上がり、怒りのオーラを纏いながら威圧感を放つ。

「ああ、そうだよ……俺は奴を見返さなきゃなんねえ……お前も……緑谷も……クソ親父の個性右側の力なんて使わずに一番になって……奴を完全否定する……!」

そして障子君との戦いでもみせた冷たい殺気をかつちゃんへと……いやその向こうにいる僕とエンデヴァーへと向ける。

「ようやくやる気出したのかよ……!ならそれを上から叩き潰すまでだ!!」

かつちゃんが轟君へと駆け出す、それに呼応するように轟君もかつちゃんへと駆け出していき、互いの距離が詰まっていく。

「ツシヤア!!——空中にあげちまえばなんも凍らすもんねえだろ!」

かっちゃんの下から巻き上げるように爆破を起こし、轟君を土煙と共に舞い上げる。そして反対の掌から爆破を放ち自身も宙へと舞う。

「——そうくると思ってたぜ……」

一瞬で土煙が晴れ轟君の姿が見える、轟君は水の柱に掴まり迎撃態勢をとっていた。轟君はかっちゃんの爆破で舞い上げられたのではなく、氷柱を伸ばして自ら上に昇っていたのだ。

「——ツチ！それごと吹き飛ばしちまえば、関係ねえだろっ!!!」 BOOOOOOM!!!

「——ッ！引かねえのかよっ!!」

かっちゃんの爆破が轟君を言葉通り氷柱ごと吹き飛ばし、それと同時に轟君は氷柱を枝分かれさせてかっちゃんの腹へ伸ばして、かっちゃん身体を吹き飛ばした。互いの攻撃で宙で真逆に吹き飛んでいく二人、そしてそのまま——

「両者共に場外！よってこの試合は引き分け!!」

——場外へとぶっとんでいってしまった。主審のミッドナイトが引き分けを言い渡す。

「〃なんと爆豪、轟相討ちでダブル場外だあ!! ってことはまた簡単な勝負で勝ち負け決めるわけ?〃」

「んーちよつと面白くないけど……そうなるわね」

そして勝敗は簡潔なものへと託されることになったが……

「はあ!? ふっざげんなよ! 腕相撲なんざやってられつか!! 再戦だ! 再戦させろよ!!!」
すぐさま立ち上がったかつちゃん先生たちが噛みつく。

「落ち着け爆豪、まだ腕相撲とは言ってないだろ」

相澤先生がかつちゃんを論ず、しかしかつちゃんは止まりそうもない。

「まあ、俺はなんでも良い……勝ち上がるのは俺だからな」

「なめてんのか半分野郎! ぶっ殺してやるからかかってこいや!!」

「だから落ち着け爆豪! あんまり暴れるようなら退場にするぞ? あと轟も煽んな」

轟君とかつちゃんは互いに煽り合い今にも戦いだしそうだが、相澤先生もそれを止めようとすが、二人はまだ落ち着かない。

まずいぞ……このままだと二人ともマジで退場にされそうだ。そうなると、自動的に僕が優勝になるのか……? ——そんな締まりのない優勝があつてたまるか!

「こっちは緑谷以外に……用はねえんだ……!」

「俺のセリフじゃ、ボケカス! その半分白髪、全面真っ赤に染めてやんよ!!」

「おい……」

轟君は冷気を漂わせ、かつちゃんは爆破を掌で逆らせる、まさに一発触発の状態だ! 間に入った相澤先生のギラついた視線も目に入っていないみたいだ。まずい! マジでヤ

バイって!!

「……それなら合理的に処理しよう、爆豪!轟!二人ともまとめて退じよ——」

「ちよつと待ったー!!!!」

しびれを切らせた相澤先生が二人に退場を言い渡そうとした瞬間、僕はその言葉を遮り、待ったをかける。

そして、僕は解説席の窓を開けて、外へと飛び出した。

「——っん!!ちよつと待って下さい!!」

僕はそのまま会場へと片ひぎと拳をついて降り立つ、スーパーヒーロー着地だ!やってみたかったんだよね!

「グッゴで緑谷、解説席を飛び出して乱入だあ!!」

「なにしに来た?お前も暴れるようなら……わかってるな?」

楽しそうなプレゼントマイクといまにもぶちギレそうな相澤先生が僕に注目する。

「…緑谷あ……!」

「デク!後にしろ、半分野郎やったら次はお前との戦いだからな!」

轟君は怒りの籠った視線を僕にぶつけてくる。僕がなにをしたというのか……!かっちゃんの話は聞かないモードに入ってるな、Plus Ultra的な幼なじみの僕にはわかる。

よし、言うぞ……！気合い入れろ、心のオールマイトを呼び覚ますんだ！！

「どっちが決勝に……なんて決める必要ないですよ！だから——」

「なに!?まさか——」

僕は不機嫌な顔の相澤先生に告げる、その顔が驚愕へと変わり、なにかを察する。

「——二人まとめてかかってこい!!ハンデはそれくらいで丁度いい……」

——僕は轟君とかっちゃんに宣戦布告する。

「フフフ……いいわ！青臭くって……スゴクイイ!——」
緑谷君 対 爆豪君&轟君の変
則マツチの決勝戦を認めます!!」

僕の提案がミッドナイトの好みにはまり、主審からの許可が出た。

——僕ひとり 対 轟君とかっちゃんのふたり。

——決勝直行の特別シードがあつた超変則トーナメントは2対1の超変則マツチによって決着の時を迎えようとしている。

轟焦凍：F w：オリジン

雄英体育祭最終種目のトーナメントバトル、そのラストを飾るのは学年最強と名高い男、緑谷出久との対決となった。お前には勝つぞ緑谷……お母さんの左の氷だけでお前を超えて、俺はクソ親父を完全否定してやる……！

—— 轟 side in ——

今更俺の過去に興味があるやつがいるとは思えないが、簡単に説明すると……ヒーローランキング万年二位のヒーロー“エンデヴァー”が、絶対王者で一位のオールマイトを超えるためにとった、倫理観の欠落したクソみてえな手段“個性婚”。それによって生まれた子供たちの唯一の完成品と称された“道具”、それが俺、轟焦凍だ。

幼い頃からオールマイトを超えるため、俺は厳しい仕打ちを受け続けていた。記憶の中のお母さんはいつも泣いていた、まだ幼かった俺はお母さんがクソ親父のせいで悲しんでいるということしかわからなかった。

ある日、お母さんは俺に「お前の左側が憎い」と言つて、俺に煮え湯を浴びせた。そ

れ以来お母さんは俺から引き離され病院へ長期入院。

俺はお母さんを追い詰めたクソ親父を、お母さんの力だけで超えることを自分に誓い、強くなり続けた。

中学までの俺は他人から見て、一言で言うなら「特別な存在」だった。No. 2ヒーローエンデヴァアの息子で、成績は優秀、運動神経は抜群、将来を期待される優秀なヒーローの卵。俺は周りの評価なんて気にしていなかった、全ては親父を超えるため、自ら積み上げたものだったからだ。

そんな浮いた存在の俺に同級生は褒め称えたり、媚びへつらったり、よそよそしかったりと様々な扱いだったが、積極的に近付きたがる奴はいなくて、おおよそ友達と言えるものもいなかった。まあ気にしたこともなかったんだけどな。

雄英高校に入ってからはその環境は変わっていった、個性的で自己主張の塊みたいなクラスメイトたち、そのお陰で俺は特別浮くこともなくクラスに馴染んだ。

でもヒーローを目指すヒーロー科なだけあって、やつぱりここでも俺はエンデヴァアの息子としてしか見られていなかった。只ひとりを除いて……

緑谷出久——入学初日の朝からクラスで騒ぎを起こしていた筋肉のすごいやつ。そいつは個性把握テストの準備の時間に俺の方へ歩いてきて。

「僕は緑谷出久、よろしくね。君は？」

そう話しかけてきた。自分からやってきたくせに俺の名前も知らなかったようだ。

「轟焦凍だ、エンデヴァアの息子って言えばわかるか？」

あとからバレて騒がれるのも面倒だし自分から言ってしまうと、気まぐれにそう思っただけだ。しかし緑谷の反応は――

「そうなんだ、それじゃヒーロー目指して互いに頑張ろう、轟君！」

――それだけだった。No. 2ヒーローの息子だということを、なんてことないように普通に挨拶をしてきた。

「なんか普通はあるんだけどな……驚いたり、エンデヴァアについて尋ねたりとかよ……」

俺はついつい思ったことを口に出してしまふ、なにせ今までにない反応だったから。

「モチロン僕もエンデヴァアは知ってるし、ファンだよ！でも君は轟焦凍君でエンデヴァアじゃない、只の僕の同級生じゃないか！だから君に言うのはこれからよろしくねってことだけさ！」

そう言っただけで俺に握手してきた。こいつは俺を特別視しない、エンデヴァアの息子として見ていない。なんだかそれが少し嬉しかった、こんなやつとなら友達になれるかもしれない。その時はそう思っていた……

そして行われた個性把握テスト、そこで俺が見たのは緑谷の圧倒的で規格外の力だった。「スマッシュユ！」という特徴的な掛け声と相まって、俺には緑谷がオールマイティみた

いに見えた。

あいつは俺をあえて特別視しなかつたんじゃない、自分が規格外で特別を超えた〃なにか〃だから、俺を特別視する必要がなかつただけだってわけだ……勝手に膨らませた希望が弾けていった。あいつとは友達になんてなれねえ……あれは超えるべき壁のひとつだ……！

それから様々な訓練があつたが、俺は緑谷を超えることが出来なかつた。そして緑谷の言動や行動の節々から見えるオールマイト染みたもの、俺はあいつがオールマイトの隠し子なんじゃないかと考えたが、緑谷の幼なじみだという爆豪によつてそれは否定された。

だがあいつは俺と同じ、トップヒーローになにかを託されたものだということだけは間違いないだろうと思つた……

USJにヴィランが襲撃してきた際に直に感じた、緑谷とオールマイトの本気の力。俺はそれに気圧された、親父はこんな化け物を超えるために抗い続けてきたのか……やっぱり親父はイカれてやがると、あらためて感じた……

クラスのやつらの話を聞くと、どうやら緑谷はオールマイトの弟子だという。関係性がはつきりしたところでやることは変わらねえ、俺は右の力お母さんの水だけで緑谷を超えてトップになるだけだ。そう決意して雄英体育祭に挑む。

雄英体育祭の一週間前の夜、傷だらけの親父が話しかけてきた。内容は緑谷を知っているかというものだった、俺が「オールマイトの弟子であるということ以外知らない」とだけ伝えると、一言「そうか…」と言って去っていった。

意味がわからず俺はイラつく、何故親父の口から緑谷の名前が？オールマイト弟子の噂を聞いたのか…？

その次の日から親父は家を空けることが多くなつた、でも理由は興味なかった…

開会式前に緑谷を意識してじつと見ていると、あいつは俺に話し掛けてきて、全力で頑張れと言ってきた。俺は「お前には勝つぞ」と言おうとしたが、USJでのあの威圧感を思いだして言えなかった。俺はあいつを畏れているのか…？

第一種目の障害物競争、俺は適度に周りの妨害をしつつ、堅実に一位を獲得する走りをしていった。しかし最後の最後に緑谷が猛追してきて、地雷原に叩きつけられた。後で聞いた話だと、俺の妨害したやつらは悉く緑谷によって助けられたらしい…別に文句を言うわけじゃないが、緑谷の行動が妙にイラつく…

第二種目の騎馬戦、中盤で緑谷と対峙した俺は、直接向けられたあの威圧感に思わず、左を使いそうになった。それらしい理由をつけて、その場から離れたものの緑谷には勝てないかもしれないと少しでも思ってしまった自分が許せなかった。苛立ちが俺のなかで積もっていく…

そして最後のあの大暴れだ、すべてを呑み込む暴風、俺は氷でしがみついたものの成す術もなく、振り回されてしまった。

なんとか最終種目には勝ち残れたが、緑谷への畏れと苛立ちだけは消えないどころか増え続ける一方だった。

トーナメントの組み合わせが発表され、緑谷が決勝戦まで出てこないということに、俺は安心してしまった。そんな自分が情けなくなり、またも苛立つ。もうこのときの俺は冷静さを欠いていた……

試合直前、控え室から会場へ向かうまでの道にクソ親父が現れた。

「……邪魔だ」

ただ一言、必要なことだけを伝える、そこをどけと。

「ひどい醜態だな、焦凍。いい加減子供染みた反抗は辞めて、左の力を使え。そうすれば——」

「戦いにおいててめえの力は使わねえ!!俺はお母さんの力だけで、勝ち抜いて見せる」

親父の言葉を遮って、俺の決意を叫ぶ。どこまでも人の神経を逆撫でするやつだ……

「それではオールマイトの弟子に……緑谷出久には敵わない。お前だつてわかっているんだろう?」

「——ッ!! 黙れ! 俺は俺のやり方でめえを超えてみせる、緑谷にだって勝つてみせる!! 失せろ!!」

親父から突き付けられた客観的事実が俺の心を掻き乱す、感情のままに叫び散らし、その場を後にしようとして歩き始める。

「ふう…耳も貸さないか——頑張れよ、焦凍…」

当たり前のような親子の会話、それさえもいまの俺にはイラつく原因でしかなかった。その言葉を無視して俺はその場を去った。

感情に苛まれながら、ふと自分の姿の映る窓ガラスを見る。そこに映る怒りに満ちた自分の眼は、クソ親父のそれと全く同じものだった——

「——ああっ!!」

叫びながら窓ガラスを右手で殴って、叩き割る。俺はあんな親父みたいになりたくなくて、お母さんの力だけで戦うと決めたのに…俺が成れたのは親父と同じものなのかよ……

俺はもう自分が何に成りたかったのかということすら、思い出せなくなっていた——

そのまま苛立ちを抱えてトーナメントを戦い抜く、瀬呂は会場ごと凍らせてしまう、障子には本気の殺気をぶつけてしまう。相澤先生に叱られ、少し冷静さを取り戻して余

計な被害もなく飯田を倒した。

だが準決勝の爆豪戦、爆豪が口にした緑谷の名前に俺はまた冷静さを失う、その結果がダブル場外での引き分け。試合が終わっても苛立ちは消えず、爆豪と言い合いになる……

相澤先生が俺たちになにかを告げようとしたとき、それは上から落ちてきた。

「……緑谷あ……い！」

俺は解説席から飛び出して待ったをかけた緑谷を睨み付ける、この行き場のない感情を容赦なく視線に込めてぶつけた。

「二人まとめてかかってこい!! ハンデはそれくらいで丁度いい……い！」

大胆不敵な緑谷の言葉、だが俺にはひとりだろうと二人だろうとどうでもよかった。お母さんの力で緑谷を倒し、親父を見返す、もうそれ以外のことは考えられないほど、俺の心は掻き乱れ、ぐちゃぐちゃになっていた——

——しかし、そんなことが夢物語だと思い知らされたのは試合開始からたった数分後だった。

「クソがあ!! なんであたんねえんだよ!!」 BOOM!!

爆豪が吠えながら爆破を放つ、緑谷はそれを大回りで避けてそのまま爆豪の足を払って転がす。

速すぎる……！屋内戦闘訓練の時の比じゃないスピード。あのときはあれでも建物を壊さないようにセーブしていやがったのか……！化け物め……

「下がれ爆豪！邪魔だ！」

「俺に指図すんじゃないやねえ！半分野郎が!!」

邪魔な位置にいる爆豪を退かしてから、地面を凍らせて緑谷を包んでみても、あいつは俺の氷結をスナック感覚でポキポキとへし折り、何ごともないかのように動き出す。

くっそ！氷が、お母さんの力がまるで通用しねえ……！規模を大きくしても腕を振るわられて氷壁を破壊されちまうし……背後に氷壁を張ってなかったら何回場外になってるかわからねえ……！どうする？どうすればあの化け物を止められんだ……!!

「震えてるよ、轟君」

「——ッ!!」

「君自身耐えられる冷気に限度があるんだろ……？でもそれって左の力を使えば解決できるんじゃないのか……？」

緑谷は片手で爆豪のラッシュを捌きながら、俺に話しかけてくる、俺の許容限界を見抜いているようだ。自分でもわかってんだよそんなことは！でも——

「俺は戦闘において、左は使わねえ!!」

「……みんな全力で——ぶはっ!!」

俺が足から伸ばした氷壁を砕いている隙に、爆豪が緑谷の顔面に爆破を食らわせ、その言葉を遮った。しかし緑谷は怯むことなく爆豪の右手と右足を掴む。

「かつちゃんちよつと邪魔だ!また後でっ!!」

「んな!?!うおおおおお——」

そして爆豪を上空高くへとぶん投げる、あつという間に爆豪の姿が見えなくなってしまう。馬鹿力ってレベルじゃねえぞ!というか爆豪のやつ、死ぬんじゃないだろうな……!

「どこみてるんだ……!」

「——うぐっ!?!」

「半分の力で僕に勝つ!?!僕はまだ君に傷ひとつ、つけられちゃいないぞっ!!」

「グッハアっ!!——」

気が付くと緑谷は目の前にいて、俺の腹に拳をいれていた。立て続けに左右のパンチが伸びてきて、俺はブツ飛ばされる。

「場外なんかでまだ終わらせやしないぞ!」

緑谷は吹き飛ばす俺の足を掴んで、会場の真ん中へと投げ飛ばす。俺は地面を転がり、

踞ってしまおう。

俺はその痛みの中で……忘れていたお母さんの言葉が頭に響く。

『いいのよ、おまえは——』

その言葉の続きは思い出せない、いつの間にか忘れてしまった……

「俺は！お母さんの力でお前に勝つツ!!」

「ふんっ！——みんな全力でやってんだよ！」

俺は倒れながらも地面に氷を走らせる、しかし緑谷は腕を軽く振るってそれを粉々に砕いた。

「勝って、将来の目標に近付くために！みんな全力で!! “ヒーロー” に成るために!!!」

「——!!」

緑谷の言葉に俺はハツとして、眼を見開く。そうだ…俺は——

『でも、ヒーローにはなりたいんでしよう? いいのよ、おまえは——』

「いつだって全力で誰かを助けに行ける人を、ヒーローって呼ぶんだよ! 半分の力で助けてやろうなんて、ふざけんな! ヴィランを倒せればヒーローだなんて思ってるんじゃないだろうな!!? 君はなんに成りたいんだよ!!?」

「俺は——」

緑谷の叫びが響く、忘れかけていた俺の成りたかったもの、お母さんとの思い出、少しずつ甦ってくる記憶。

そうだ、俺は成りたかったんだ——

「だから全力でかかって来い!!使えよ!その左の力を!!」

——左の力、その言葉を聞いた途端、俺の頭の中をクソ親父への怒りの炎が焼き尽くす。

俺からお母さんを奪ったあのクソ親父……あんなやつ力なんかに俺は頼らねえ……俺はお母さんの力で……あいつを超えるんだ……!

「……クソ親父の差し金かなんかなのか……てめえは……!!」

「——!?!」

俺は燃え盛る怒りの炎をその視線に込めて緑谷を睨み付ける、俺の発する冷気で周りの空気がパキパキと音を立て凍り付いていく。そして緑谷の顔が曇った……そんな顔が見たかつたんだよ……!

「俺はお母さんの力だけでいい……クソ親父の力なんか——」

「君の！力じゃないか!!右の氷も左の炎も、どっちも君の力だ！それに左の力がエンデヴァーのヘルフレイムだっていうなら——僕が確かめてやる……！使ってこいよ……君の炎を……!!」

「——は？」

なにをいつてるんだこいつは……左の力が俺の力？そんなはずない、これは親父の力だ。それを確かめる……？

「お前は親父の炎を知ってるのか!?!あの炎を食らったことがあるっていつてるのかよ？そんなはず——」

「あるよ、だから使ってこいよ。エンデヴァーの力は本物だ……君だってわかってるんだろ？エンデヴァーの本質が何なのかって」

「——!!やめろ!!」

緑谷は親父の炎をその身で味わったという、俺だって親父の力が本物で強力なことは理解してる……でもその先は認めたくない……!

「やめない、エンデヴァーはヒ——」

「やめろつつてんだろおお!!」

話すのを止めない緑谷を黙らすために、俺は巨大な氷壁を作り出して、緑谷を覆う。くっつて、許容限界ギリギリまで力つかちまった……身体が芯から震える、それでもそ

の先を聞きたくなかったんだ……

「……確かにエンデヴァーは家庭ではダメな人だったかもしれない……君の味わった苦痛も苦悩も僕には計り知れない……簡単にわかるだなんていえないよ。でも人は変われるんだ！あの人はそのために歩き始めたんだよ！だから君も向き合わなきゃ駄目だ!!」

目の前の氷壁に亀裂が走り、そして砕け散る、中からはほとんど無傷の緑谷が出てきた。そして俺に語りかけてくる、後半はなにを言っているかわからねえ……

「……なんの話してんのか、わっかんねえよ!!」

「君らの話さ……いい加減認めろよ、君のお父さんがなんなのか、君が何に成りたくてここに立っているのかをっ!!」

俺は緑谷に喚くも、緑谷は反論しながらこちらへ走って近づいてくる。

「エンデヴァーは——『ヒーロー』だっ!!」

緑谷の拳が俺の左頬に刺さり、俺は数メートルぶっ飛び地面に倒れる。

わかってんだよ……あのクソ親父がヒーローだってことぐらい……だから俺はヒーローに成りたくなくて……それでも——

『でも、ヒーローにはなりたいたいんでしょう？いいのよ、おまえは——強く想う将来がある
なら——』

「立てエ!!焦凍オオ!!」

クソ親父の声が聞こえる、観客席から叫んでんのか……！
うるせえよ……！言われなくても立つってんだ……俺は俺の力で立ち上がれる……！

『血に囚われることなんてない——』

「!!!」

俺はよろよろと立ち上がり、喚く親父を睨み付けるため観客席に目をやる、しかしそこに見えた光景に言葉を失った。

「なんで……どうして……そこに……そんなところにいんだよ——」

「——お母さん!!」

親父に寄り添うように立つお母さんの姿……その横には姉さんの姿も見える。

俺の理解を超える光景に頭の中がぐちゃぐちゃになる、いろんな感情がごちゃ混ぜに

なつてなにも考えられない。

「……頑張つて、焦凍」

本来なら会場の喧騒に吞まれて聞こえない筈の、お母さんのちいさな声、でも俺にはお母さん声援が確かに聞こえた…

『——なりたい自分に、なつていいんだよ』

忘れていた、お母さんの言葉が甦った。

瞬間、頭の中が真っ白になり、俺の左側から炎が吹き出す。燃え盛る炎の熱で、身体の震えが止まった。

「緑谷……おまえがなにをしたのかも、これから俺はどうしていけばいいのかも、今はわからねえ……でも、お前を全力で倒す！——俺だつて、ヒーローに…!!」

俺は緑谷と再び対峙する、今度は親父とお母さんから授かった俺の力を携えて、俺の持ちうる全力で挑む…!

「来いよ！轟君!!……でもその前に——」

緑谷は俺に言葉を投げながら、上を向く。なんで上なんかを…?

「榴弾砲着弾!!」
ハウザーインパクト

「——スマアアツシユツ!!」

上空から爆豪が必殺技を放ちながら落ちてくる、緑谷はそれに対抗するため、アツパーを放ち暴風を生み出す。爆破と暴風、2つの衝撃が打ち消しあい、辺りには激しい風が巻き起こりすべてをふきとばさんとする。俺は吹き飛ばないように、姿勢を低くして耐えた。

「おかえり、かつちゃん」

「おかえりじゃねえわ!!殺す気か!!てか俺じゃなきや死んでただろあれ!!」

「かつちゃんなら大丈夫かと思って……!」

「まあいい、話は終わったか?まあもう待つ気なんてありやしねえがな!」

緑谷と爆豪があんな衝突の直後だというのに、普通に会話をしている。なんなんだこいつら……

「爆豪、俺ひとりじゃ緑谷は倒しきれねえ、手を貸してくれ……」

「ああ!勝手にしろ半分野郎!俺はひとりでも挑むけどよお!!」

「ふっ……じゃあ勝手にやるぜ。それと俺はもう——半分野郎じゃねえ」

爆豪と協力して緑谷を倒す、そして俺は全力の証明に左の炎を燃え盛らせる。

「——……そうかよ——んじゃ遅れんなよ、轟!!」

俺と爆豪は二人で全力で緑谷に挑む、俺の氷が足を奪い、爆破と炎がその身体を襲う。冷気と熱気と爆風の嵐の中、緑谷はそれら全てを正面から振り伏せた。二人がかりで全力でもまるで敵わないってのか……!

「爆豪！小技じゃ罅が開かねえ、大技で一氣に決める……！合わせる!!」

「てめえが俺に合わせろや!!」

「いくぞ……!!」

俺は全力で氷の力を使い、会場を覆い尽くす巨大な氷塊を作り出して、緑谷を閉じ込める。これで封殺出きるような相手ではないのはわかっている。

「いいね……君らの全力……！なら僕も全力中の全力で答えなきやいけない!!」

氷の中から楽しそうな緑谷の声が聞こえる、この状況で笑っていやがるのか……!だが、俺も爆豪も気が付けば頬の端を吊り上げながら戦っていた。

氷がビキビキとひび割れていく、砕かれた瞬間が勝負の時——

——そして氷塊が内側から砕かれた。

「いまだッ!!!」

左の力を全開で使って、砕けた氷を全て溶かし、さらに蒸発させる。冷えた空気が熱

で膨張し、氷が水蒸気となりその体積を爆発的に増したことで、何者をも吹き飛ばす熱風が辺りに吹き荒れる。自爆同然の範囲攻撃、しかし今の俺はひとりじゃない——

「ぶっ飛べ、デクウウ!!」

爆豪の全力の爆破が俺らに向かう熱風を相殺し、緑谷のだけがその熱風に呑み込まれ吹き飛ばされる——

——はずだった……炎を放つ瞬間氷の向こうから聞こえた声……

「——100%……DETROIT・SMASH!!」

俺らの放った熱風は、緑谷が放ったであろう超暴風に呑み込まれ、遥か上空へと霧散させられる、その余波ですら今までの暴風の比では無いほど強力で、叩きつられた空気の影響によって俺は背後の水壁ごと吹き飛ばされ、爆豪もその暴風を相殺出来ず紙切れのように宙を舞う。

気がついた頃には……俺ら場外の観客席の壁に打ち付けられて、横たわっていた……

——勝てなかったか……応援してくれてたのに、ごめんお母さん……これから謝る

よ、今までの分まで。

—— だからこれからたくさん話をしよう……これまでの空白を埋めるように。

—— だって俺の、いや俺たち家族はやり直しのスタートラインに立てたんだから……また、一から始めよう、間違ってしまった道のり、そのやりなおしを……！

—— 轟 side out ——

オールマイトの弟子

雄英体育祭最終種目のトーナメント決勝戦、僕 対 かっちゃん&轟君の変則マッチ、轟君を救うため僕には、彼に思いを伝えることと、全力でぶつかることしかできない。

そしてエンデヴァーが病院から連れ出した轟君のお母さん、その姿を見て轟君はついにヒーローに成るために全力で戦うようになった。更にかっちゃんも戻ってきて、二人は僕に全力をぶつけてくる。

僕はその全力に対して、全力の全力で答える。

100% DETROIT・SMASH —— オールマイトの全力の一撃を僕は放つ
のだった。

「なにが起きたんだあ!? 爆発に次ぐ爆発! どうなってんだお前のクラスのやつらあ!」

「知らねえよ、あいつらが勝手に火い付け合った結果がこれだろ」

100%のスマツシユを放った反動で右腕が痺れて痛む、一時間くらいはまともに動かすことも出来ないだろう……ナイトアイからは反動ありきのリスキーな技は平和の象徴に相応しくないから使うなって言われてたな、でも使わなきゃ負けてたし今回は許して欲しいもんだよなあ。

土煙と蒸気が晴れて、会場が見渡せるようになる、会場に立っていたのは僕ひとりだけだった。

「爆豪、轟、両者共に場外!!!つまり、優勝は最初から最後まで圧倒的な強さを見せつけた、緑谷出久だああ!!!」

「特別シード枠において、ホントによかった。あとおめでどう、緑谷」

プレゼントマイクが僕の優勝をアナウンスして、相澤先生はホツとしたように呟いて、ついでのごとく祝ってくれた。

——そのあとは僕が倒れた轟君を起こして、かっちゃんに絡まれつつ、保健室で皆揃って治療を受けた。そして長かった雄英体育祭も表彰式を残すだけになったのだが

……

「んんー!!!んん、っ!!!」

相変わらずかっちゃんは表彰台にがんじがらめにされ、口枷をつけられて、暴れ跳いていた。

一位の台には困り顔の僕、二位の台には暴れるかっちゃんと家族に照れながら手を振る轟君、三位の台には引きぎみの常闇君と胸を張って直立不動の飯田君が立っている。

このなんともカオスな締まらない状況のきっかけは保健室での治療が終わった直後、かっちゃんが三位決定戦として轟君との再戦をしたいと言い出したことだ。

相澤先生らは時間の都合でそれを止めるも、かっちゃんは聞く耳を持たず暴れまわった。そこで僕がかっちゃんを抑えつけ、相澤先生たちと協力してそのまま表彰台に縛り付けた形になる。

そんな締まらない表彰式だが、ミッドナイトがセクシーに場を納めて進行していく。

「——今年メダルを贈呈するのは、もちろんこの人!」

「私が!メダルを持つて来——「我らがヒーロー!オールマイトオ!!」——た…?」

ミッドナイトの振りでオールマイトが登場するも、見事に台詞が被る。ドンマイです、オールマイト!

そんなハプニングがあつたものの、気を取り直してオールマイトは褒め称えながら常闇君と飯田君にメダルを渡していく、そして次は轟君の番だ。

「轟少年、おめでどう。最後の特技は本当に凄かったな、プロも目を丸くしていたよ。——それと、君が成りたいものはなんなのか、わかったようだな？」

「はい、緑谷のおかげで自分が何に成りたかったのかを思い出せました。これからみんなで、また始めていきたいと思います」

決勝戦での轟君の言葉をオールマイトが尋ねると、轟君は観客席のほうを見上げながらそう言った。

「君らなら、きつと大丈夫だろう。彼がああなつてしまった原因の私が言えたセリフではないのだが……応援している！」

「ありがとうございます……オールマイト……！」

オールマイトが轟君の肩を軽く持ちながらエールを送る、轟君は目を潤ませ、頭を下げてオールマイトへ礼を言う。彼がどんな気持ちでオールマイトにそう言ったのかは僕にはわからない……でもきつと轟君とエンデヴァーなら諦めず、やり通せると僕は信じている。

「さて次は爆豪少年だな——つとこりやあんまりだ……素晴らしい戦いだっぞ！おめでどう!!」

「ぜんっぜんめでたくねえんだよ！オールマイト!!俺に並び立っていいのはデクだけだ!!そこんところはつきりさせてやつから、コレ外してくれや!!」

オールマイトはかっちゃんの口枷を外して褒め称える、しかしかっちゃんは悪魔のような形相で騒ぎ続けていた。

「H A H A H A!!それは出来ないな!この相対評価をされ続ける世界で自分だけの価値観を持つのはいいことだがな!

それに結果は出たんだ、あの準決勝で押しきっていれば、決勝戦で少しでも長くその場に留まっていられれば、君はひとりですごくに立てただろう。

今回はこれを『傷』として忘れぬよう、受け取っておけよ!」

「……クソがつ!!次はねえぞ、半分野郎つ!!」

「……さつきも言ったが、俺はもう半分野郎じゃないぞ?」

「……………おう……」

オールマイトの正論にかっちゃんは強引に納得して、とりあえずみたいな感じで轟君に喧嘩を売る。そして轟君は天然を炸裂させて、かっちゃんを困らせていた……

「最後は緑谷少年!有言実行、見事だったな!様々な逆境にも負けず、圧倒的な力を見せ、一位を獲得して期待に答えてくれた!!まさに素晴らしいの一言に尽きるよ、おめでとう!!」

「ありがとうございます、オールマイト!」

オールマイトは僕も褒め称えてくれて、僕はそれに対して頭を下げて礼を言ってメダ

ルを受けとる。……ん？期待に応えてとか、あのときの密談の話をここで出してもし良いもんなんだろうか？まあ、他人からしたらよくわからないから、オツケーってことなのか？

「さあ！今回は彼らだった！しかし皆さん！この場の誰しもここに立つ可能性はあった！！」

「いや一位は違うだろ……」「うん、一位は無理」「一位は不動じゃね？」「一位はな……」

オールマイトの言葉に会場中からぼやくような突っ込みが入る、オールマイトと僕は苦笑いするしかなかった……やっぱやり過ぎたみたいだ……

「と、とにかく……ご覧に頂いた通りだ！——競い！高め合い！更に先へと登っていくその姿！！次代のヒーローは確実にその芽を伸ばしている！！」

オールマイトは僕たちや選手一同を手で示して、高らかにそう宣言する、みんなの表情が引き締まり会場中の期待がみんなに降り注ぐのを肌で感じる。

「それと、個人的にひとつ——」

オールマイトは僕の方を向き、目を見つめながらニヤリと笑う。なんだこの展開！？僕はこの知らないぞ……！？

「皆さま薄々と気が付いているでしょうが、ここにいる緑谷出久は——私の弟子です！！」

「……えっ!？」

オールマイトは公共の電波に乗るこの場所で、全国に向けて僕が自らの弟子であることをカミングアウトした。

ちよ、ちよつと待つて、待つてよオールマイト!! そんなことしたら——

「こんなところでそんなこと言っちゃったら僕、超有名人になっちゃやうじゃないですか!!」
「H A H A H A !! いずれ成るんだ、今から慣れておきたまえ! それもまた修行だ!! それに、学生のうちのほうが皆まだ遠慮してくれるしね!」

動揺する僕にオールマイトは笑顔とサムズアップで答える。この人、全然悪気なくやつてるな……まあ言ってることは正しい……覚悟を決めるとしよう……さらば、僕の平穩な日常……!!

「弟子が生徒だと鼻屑があるんじゃないかって思う人もいるでしょうが……ご覧の通りです! 彼には鼻屑など必要ないくらい圧倒的な強さがある! むしろ他の生徒より厳しい環境にいるくらいでしょう……!」

オールマイトが雄英の世間体を取り繕う発言をする、勿論その犠牲者は僕だ。また厳しい修行が学内でも始まるのか……!

「彼は将来! 私に継いでヒーロー界を率いる存在に必ず成るでしょう! そして先程も述べたように多くの優秀な将来のヒーロー達が育ち続けている!! てな感じで最後に一言

！皆さん！ご唱和ください！せーの——」

「プル——」「プルス——」「plus——」

「おつかれさまでした!!!」

「プルス——」「——ウルトラ」「えっ?」

「そこはプルスウルトラでしょ！オールマイト!!——」

「あとその弟子！——」

僕とオールマイトの声だけが揃う、一人にはしませんよ、オールマイト!!

そして他の皆からブーイングが鳴り響きながら、最後になんとか締まらない感じで、ドタバタだった僕の雄英体育祭は幕を下ろした——

——その日の晩。

「——うん、じゃあそんな感じで！明日はよろしくね!!—— はい、おやすみなさい
!」

僕はそう告げて電話を切る。しかし本当に長い1日だったな：明日と明後日が振替休日で良かったよ、ゆっくり眠れるし……!

そんなことを考えていると、スマホに着信が入る。ディスプレイには知らない番号が表示されていた。

「もしもし、緑谷です。えっと、どちら様でしょうか？」

「もしもし、俺だ…轟なんだが」

「えっ？轟君!?なんでこの番号を？」

電話をかけてきたのは番号を交換してない筈の轟君からだった。

「ああ、上鳴のやつから教えてもらってな…迷惑だったか？」

「いやいや、全然大丈夫！そっか、上鳴君クラスの皆と番号交換してたもんね。まあ男子は女子のついであって感じだったけど」

「そうだったのか…ついであつたとは知らなかったな」

「上鳴君らしいよね、ところでなんで僕のとこに電話を？」

僕は他愛のない話のあとに、轟君に用件を尋ねる。

「ああ、お前にどうしても礼が云いたくてな…！ほんとなら直接がいいんだろうけど、いろいろあつてこんな時間になつちまって、それで電話だけでも…って思つてかけた」

「礼…？」

「そう、礼だ。姉さんから全部聞いたよ、緑谷お前、親父をお母さんと…家族と向き合うように説得しにきて、家であの親父と大喧嘩したらしいな。家が壊れるかと思つたつて

姉さん大慌てだったみたいだぞ」

轟君はなんだか楽しそうに話す、不穏なワードが多かったと思うんだけど？

てかやつぱりお姉さんには迷惑かけてたか……でも先に手を出したのも、個性を使つたのもエンデヴァーが先だ！僕だけが悪いわけじゃないだろう……！……たぶん

「なんか迷惑かけたみたいでごめんね、轟君」

「いやどうせ悪いのは俺の親父だ、カツとなつて手をあげてきたんだろ？とにかくそこは気にしないから大丈夫だ。」

それよりも……そのおかげで親父は家族と向き合うことを決めた、なんでも次の日から毎日足繁く病院に通つていたらしい……お母さんと話をするために……

今日あの場にお母さんが来れたのも、親父が根気よく病院の先生を説得してくれたからって話だ。あの親父がそんなことするなんて、ほんと想像もつかないぜ……

まあそれで今晩は家族みんなで食事をしてきたんだ……家を出てた兄さんたちも集まつてくれて、何年振りかもう分らないくらい久々の一家団欒つてやつだ。さっきの話もそこで聞いたんだ、親父の照れ臭そうな顔なんて初めて見たな……」

轟君は本当に楽しそうにそして嬉しそうに語る、電話越しでもわかる、きつと彼は今笑顔なのだろう。僕は時々相づちを打ちながらその話を聞いていた、轟君は家族に救われたんだと、そう思えた。

「——それもこれも、みんなお前のおかげだ、緑谷……ホントに……ありがとな」

「僕はきつかけを作っただけだよ、轟君。向き合うって決意して、頑張ったのはエンデヴァーだし、更にそれに向き合うって決めて、これから頑張っていくのは君だ……！」

「それでもそのきつかけのおかげで俺たちは変われたんだ、俺の抱えてたもん全部まとめてぶっ飛ばしてくれたんだ、だから……ありがとう緑谷！」

俺にどんな恩返しができるか考えたけど、さっぱり思い付かなかった……だからこれから先ずつと……少しずつお前に返していく——」

「ちよつと待つてよ！僕はただ自分のやりたいことをやりたいようにやってみただけだよ！そんな恩返しだなんて——」

「だったら俺もやりたいことをやりたいように勝手にやるだけさ、だから気にすんなよ」
僕と轟君は言いたいことを相手の言葉を遮りながら話す。まさかそう返されるとは

……

「まったく……ずるいなあ轟君は」

「お前ほどじゃねえよ、緑谷。あと、あのときは言えなかったけど、今なら言える……」

「あのときって？」

「入学初日の時だよ、あのときはしつかりと言えなかったから……これからよろしくな、緑谷……！」

「こちらこそ、改めてよろしくね、轟君！」

「ああ、それじゃあまた学校でな」

「うん、また学校で——」

僕らはまたあの学校で会うことを約束して電話を切る。

こうして僕は轟君と改めて友達に成ることが出来た。

——前世とは少しだけ変わってきた僕のヒーローアカデミアでの生活、僕らのその生活はこれからも続いていく。

——それにオールマイトを救^{たす}けるための最高のヒーローに成るための物語は、まだ始まったばかりだ。ここまでは前半戦なのかもしれないし、もしかしたら長い導^{プロローグ}入なのかもしれない。

——僕の再履^{やりなおし}修は終わっていない、オールマイトと僕の運命を変えるための本当の戦いはここからだ!!

デクのヒーローアカデミア 再履修！

第一部 《オールマイトの弟子》

— 完 —

— D a r k s i d e i n —

薄暗い部屋、ごちゃごちゃと様々なものが散乱したその部屋で、二人の男がテレビから流れる雄英体育祭の中継を観ている。

「よく見て備えろ、死柄木 弔。彼らは……いずれ君の障壁になるかもしれない」

顔のない男、オール・フォー・ワンがもうひとりの男に語りかける。その全身には多くのチューブのようなものが繋がれており、おそらくその命を繋いでいるのだろう。

「ハッ……糞みたいな話だな……」

死柄木と呼ばれた、顔色の悪い青年は気だるそうに答える。彼を象徴する無数の無機質な手は体のどこにもついてない、オール・フォー・ワンの前では彼が安心しているという証だろう。

「それにしても……本当にいい眼をしているなあ……彼は」

オール・フォー・ワンはテレビの方を向きながら呟く。本来なら目があるべき場所になにもない筈なのに、そう呟いたのだ。

「見えてんのかよ……先生……でも俺はそんなことどうでもいいよ……それよりこいつだ……！」

死柄木は素直な疑問をそのまま口にする。だがすぐに興味を失い、興奮ぎみにテレビの中の人物を指差す。

「オールマイトの弟子……緑谷出久……!!——こいつだけは俺がこの手で必ず殺す……！」

死柄木は眼を血走らせて、緑谷への殺意を込らせながら、その殺害を宣告する。

「ああ、そうだね、死柄木弔。平和オールマイトの象徴もその弟子も僕らの手で終わらせよう……！」

「大丈夫……僕には……視えるんだ。——これから楽しい時代が……必ず来るよ」

オール・フォー・ワンは無い筈のその瞳でなにを視たのかは分からない。

しかし、緑谷出久という光が強く輝けば輝くほど…闇もまたその濃さを増して、蠢^{うごめ}いている。

光と闇、決戦の時は迫っていた。

— D a r k s i d e o u t —

第二部へと物語は続く——

— 予告編 —

—— オールマイトを救うための物語は新たな局面へ

「もう大丈夫！僕が来た！！」

「遅いわよ！——デクくん！！」

「緑谷少年！」「デクウ！！」「デクさん！」「緑谷君！」「緑谷！！」

—— 躍動する筋肉

「筋肉同盟、突撃——！！」

「うおおおおお！！」

「今日は上腕二頭筋のキレが最高潮さ！」

「大胸筋なら大丈夫だ」

「うまいこと言ったつもりか、マッチョメン……」

——デクを巡る争いの行方は

「さつすが私のデクくん！」

「いつてめえのになつたんだよ、クソババア……」

「デクさんは私のヒーローだから……」

「俺にとつてもヒーローだ……」

「デクさん（緑谷）はすごいなあ……」

「——あのね、デクさん……！私……私は貴方のことが——」

——そして動き出す闇、ヴィラン連合との戦い

「オツカシイぜお前え!!」

「二人ともカアイイねえ」

「偽物は……ハア……俺が……全て殺す……」

「緑谷出久を……殺せええええええ!!!」

「さあ、終わりにしようか、オールマイト」

—— 出久とオールマイトの運命は

「さらばだ……緑谷少年……君に出会えて本当に良かった。—— 悔いのない、いい人生だったな……」

「——オールマイトオ!!!!」

「運命なんてこの腕で、筋肉で！好きな形にねじ曲げてやりますよ!!———そうですよ、ね、オールマイト！」

デクのヒーローアカデミア 再履修！

第二部 《平和の象徴の後継者》

「えっ筋肉を育てる秘訣？———そうですねえ、まずはトレーニングをして筋肉を動かし、負荷を与えることが全ての基本です。ただ闇雲に強い負荷をかけるだけじゃなくて、育てたい部位や筋肉の種類によってかける負荷や回数を調整してやると、理想の筋肉に近

づけますね！——それと勿論大切なのが栄養補給です。プロテインをただ飲めばいいってもんじゃないんです、飲むタイミングや量にも気を使ってあげないとダメなんですよね、これが。プロテインだけじゃなく、BCAA：つまりアミノ酸ですね、これもトレーニング中に摂取したいところです。あるとないでは効果がぜんぜん変わってきますから。——他にもですね……………」

—— 近日公開予定 ——

第六章 僕の名は。 — my name. —
遊ぼう、振り替え休日!

雄英体育祭を終え、轟君とエンデヴァーは家族として再スタートを歩むこととなり、僕は全国にオールマイトの弟子として知られることとなった。

前世とは少しずつ変わってきた僕のヒーローアカデミアでの生活だけど、これからも頑張っていくぞ!

雄英体育祭の次の日、僕は待ち合わせをしているため、駅前に来ていた。誰と待ち合わせしているのかわかって? それは——

「お待たせー! おはよ、デクさん!」

——と考えていたら、早速待ち合わせをしていた麗日さんが来た。いつもの制服とは違い、オリーブ色のジャケットにデニムのスカートを合わせたカジュアルな格好で、髪もハーフアップにまとめてある。うん…いいね!

「おはよう麗日さん、私服だといつもと印象が変わっていいね!」

…ところで午前11時の挨拶っておはようでいいのかな？」

「あ、ありがとう…つと、デクさんも私服かつこいいね！なんか勝手なイメージだけど、おつきく「Tシャツ」って書かれてるようなTシャツとか着てると思ってたよ！」

…あと、その日一番の挨拶だし、おはようでいいんじゃない？」

僕は素直な感想を述べて、麗日さんも僕の服装を褒めてくれた。僕の今の服装はオフホワイトのシャツにグレーのジャケット、カーキのチノパンといったシンプルなものだ。

それと…確かに昔はそんな感じの格好をしていた…まあ、ある人に「ブツ！デクくん私服ダツサ!!」と言われてその後に矯正され、こんな感じの格好をするようになったんだよね。

「——ところでデクさん、そのサングラスと帽子なに？服装と合っていないような…？」

麗日さんが怪訝な顔で尋ねてくる、気になっているのは服装のさらに上、この大きな黒いサングラスと深く被った黒のキャップみたいだ。

「これは変装だよ、変装！昨日の体育祭で目立つちゃったじゃない？周りにばれたら騒がれちゃうよ！」

「変装…でもデクさんの場合あんまり意味ないような…？ほらだって——」

僕は麗日さんに説明するも、麗日さんはなんだか納得してない顔をしている。しかし

「あれ、あそこにいんのオールマイトの弟子の緑谷じゃね?」

「おお! マジだ! グラサンと帽子があつてもあの緑髪とムツキムキの筋肉、間違えようがねえぜ!!」

—— 既にばればれのように周りからそんな声が聞こえてきた。

「—— ねっ? 背丈と筋肉でわかるよお…私だつて遠目でもわかつたんだもん!」

「この鍛え上げた筋肉が裏目に出ることがあるなんて…!」

麗日さんは両手で小さくガッツポーズを作りながら、僕を見上げてそう言う。ふう…筋肉は否応なしに周りに影響を与えるということなのだろう…:…これもまた筋肉だ。

「隣にいるのつて筋肉使いの娘じゃない?」

「あつほんとは! 緑谷の肩に乗つてた気合いの入った女の子よね!」

「そんな二人が街にいるつて…:…あつ (察し)」

「まだ高校生だぜ、そつとしといてやろう…:…」

段々と辺りの騒ぎが大きくなっていくが、話しかけたりする人はいなかった。

なんか気を使われているみたいだ…:…オールマイトの言つた通りだな! 流石オール

マイト!!

「今のところ話しかけてくる人はいないけど、騒がれてきたしそろそろいこうか!」
「そうだね……うん、いこつ」

僕はサングラスと帽子を外してから、歩きだした。一歩後ろを歩く麗日さんは少し顔を赤くしながら俯きがちになっていた、注目され慣れてないから恥ずかしいのだろうか……僕は昔に騒がれてたから慣れちゃったし。

そうして僕らは二人で街に繰り出した

「ターゲット、移動を開始」

雄英体育祭の次の日、俺は駅前から少しだけ離れたところに来ている。俺の予定ではひとりでのこの場にいるはずだったのだが――

「なんでてめえら、ここにいんだよ……」

「居たら悪いのか?」

「なんでなんて……この状況でわかんדרろ?」

「俺達の目的は同じだ……そうだろう爆豪?」

――この場にいるのは、元半分野郎の轟、タラコ唇の砂藤、タコの障子、そして俺の四人だ。俺の目的と同じだと……?

「「緑谷が麗日とデートすると聞いて」」

三人の声が合わさり、その目的を告げた。

確かに同じだ……昨日の晩に今日の予定をデクに聞いたたら、「明日は麗日さんと出掛けるから遊べないんだ、ごめんねかつちゃん」と普通に教えやがった。この三人も似たようなもんなんだろう。

「俺はデクの相棒サイドキックとして、見届ける義務があんだよ! それにあの丸顔がデクにバカやるかもしれねえから……!」

「俺は緑谷に恩義があるんだ……だから二人に近づくと不審者を排除するためにここに

…

俺の言葉に轟がそう返す、いやてめえが不審者そのものじゃねえか!

「友の行方を見守るのも、筋肉同盟として当然のことだ。それに俺の個性でよく見えるし聞こえる」

タコのやつ…：なんかいいこと言ってる風だけど、只のデートの尾行だからな? しかしこいつの個性は使えるか…：…?

「俺は緑谷がどんなデートをするのか気になって来ただけだ!」

素直か!! タラコ唇はバカなのかもしれない。

「いいからさっさと失せろてめえら、監視も護衛も尾行も俺ひとりで充分だつーの!!」

「おい、緑谷が動き出したぞ…：!」

「ターゲット、移動を開始」

「おお! なんかそれっぽくていいな!」

「人の話聞けや!!」

バカどもは俺の話も聞かず、尾行を開始した。こいつらに構うのは後だ、今はデクを追っかけねえとな——

——二人は少し歩いたあと、こじやれたレストランへと入っていった。

「まずはランチで腹ごしらえか、緑谷は堅実なデザートをすんだな…」

「おいおい、高校生が入るにはちよつと大人っぽい店だな。普通ファーストフードとか
ファミレスじゃね？」

「俺たちと昼飯といつたら大体そうだな、友とは違う感じだ」

「デクをためえらの基準で考えてんじやねえよ」

三人が思ったことをいうが、どいつもこいつも的はずれだ。常識に囚われちまうようなデクじゃねえってんだよ！

「俺達も入るか？」

「バカかてめえ、バレンだろうが！」

「俺、つまめるもん買ってくるわ！なんかいるか？」

「辛いもん」「たこ焼きで頼む」「…ざるそば」

「ざるそばってつまめるもんじやねえだろ…轟——まあいつてくるわ！」

バカな会話をしながら砂藤が買い出しに向かう、その間にもデクと麗日は普通に樂しげに話をしながら食事をしていた。

なんつーか、甘い雰囲気ってよりは、いつも通りのほんわかした感じの会話してるっぽいな……なにやってんだ麗日…デクは手強いぞ…！

——暫くして砂藤がやや駆け足で帰ってくる。

「買ってきたぞ、ほら、クレープ!!」

「辛いもんつつたろうが!真逆じゃねえか!!」

「俺は構わないが、何故クレープなんだ?」

砂藤のバカは何故かクレープを抱えて戻ってきやがった、障子が当然な疑問を口にする。てか話聞いてなかったのかこのバカは……

「いっつも並んで買えない人気店がなぜか知らがらでな!つい買ってきちまった!すまねえ!……でもうまいぞ!」

「どれ……確かにウマイな、やはり砂藤のスイーツセンスに間違いはない」

「俺はざるそばが良かったんだが……ん……うめえな……!」

「だろ、前から気になってたんだよなあこれ……やっぱうめえわ!」

男子高校生三人がクレープ片手にレストランの様子を伺う。なんだよこの状況……

「爆豪も食えよ、ほら!」

「いらねえ、甘いもんはあんま好きじゃねえ」

「そつか。これ緑谷も好きな味だと思うんだけ——「よこせ」——おう……」

「お前緑谷が絡むと急に寛容になるな……」

なにやら言われているが、関係ねえ。デクがどうのと言われて引く俺じゃねえんだよ!

……甘えな…悔しいが確かにウマイ。

「緑谷にもメツセでオススメしておこう」

「いいアイデアだ、砂藤」

「砂藤、お前はいいやつなんだな。俺も緑谷になんかオススメとかしてやりてえと思うんだが……」

「おい、デクたちが店出んぞ! いくぞおい!」

砂藤の提案にあれこれと言っているやつらをおいて、俺は動き出す。まあ一応声はかけといてやったが——

——そのあとデクと麗日は街をぶらついて、服やアクセサリーなど見て回る……のかと思いきや、スポーツ店やヒーローグッズショップなどデートには似合わない店ばかり回っていた。

麗日のアホめ……大方デクに「行きたいところ? デクさんの行きたいところがいいよ!」とか言っただろう、こうなるに決まっただろ!!

まあ普通に二人とも楽しそうだし、いいのか? …いや、麗日がダメなことに変わりは

ねえか。

暫くして、二人はゲーセンへと入っていった、俺達もそのあとを追ってゲーセンへと入る。

「ゲーセンとか久々だなあ！」

「俺は初めて来たな、ゲーセン」

「そうなのか。騒がしいが慣れれば楽しいぞ、ゲーセンは」

「てめえら……」

三人はデクたちよりもゲーセンに興味がいつてやがる、砂藤に至ってはもう尾行に飽きてんだろ……まあ俺ひとりでもいくがな！

「おい見ろ、エアホッケーあんど！しかも結構でかくて本格的なやつ!!」

「これがエアホッケー……初めて見た、やってみたかったんだよな……」

「そんなに感慨深くなるのか轟よ。ならやっつていこう、何事も挑戦だぞ」

エアホッケーを見つけてはしゃぐ砂藤と轟、そして障子がそれを肯定する。

しかし、エアホッケーか……中学んときにデクと対戦して、途中までいい勝負だったんだが、デクのやつがマレットをうつつかり握り潰したせいで、結局それで終わっちゃまったけなあ……

「くだらねえ…俺はいくからな!」

「待て爆豪…俺は初めての対戦相手はお前がいい…」

「はあ? んなもんしるかよ! 勝手にやってる半分野郎が!!」

轟が何故か俺を指名するが、付き合っつてやる義理はねえ。俺はこいつらをほつていこうするが――

「お前とは体育祭での決着がついてねえ…はつきりさせようぜ爆豪。どつちが二位に相応しかったのか、緑谷の次に並ぶのか…!」

「チョーシのんじゃねえぞクソが…! いいぜ、叩き潰してやんよ!!」

轟が聞き捨てならないことを言いやがる、ふざけたことをぬかしやがって…! デクの次に並ぶのは俺以外ありえねえんだよ!!

そうして俺と轟はエアホッケー対決を始めた。互いに一步も引かない一進一退の攻防、轟は初めてプレイにも関わらずその才能を發揮して、右でも左でもマレットを使いこなしていた。

俺も反応速度で対抗し、そして3分の時が過ぎる。

「ここでも引き分けかよ、お前らすげえな!」

砂藤が驚きの声を上げる、結果は引き分け、またしても決着がつかなかった。

「ふう、また引き分けか…!」

「納得できるか！もう一回だ、轟！！ぜってえ俺が勝つ……！」

俺は再戦のために金をいれようとするが、誰かの手に遮られる。

「次は俺がやろう」

「じゃあ変わるか、障子？」

「いや——」

割って入ってきた障子は、おもむろに2つのマレットと一回り小さなマレット2つを四本の手で掴み、腕を広げる。

「——二人まとめてかかってこい！！ハンドはそれくらいでちょうどいい……！」

目の前のタコはどこかで聞いたようなセリフを吐きやがった！

「上等だタコ野郎！！ぶっ潰してやんよ！そして俺にそのセリフを吐いたことを後悔させたるわっ！！」

「緑谷のセリフか……かつこいいな。俺も今度使おう……！」

「呆けてねえでやんぞ、轟い！！全力だあ！全力でやれえ！！」

そして俺らは障子と全力のエアホッケー対決を行った。闘いは白熱し、俺と轟は死力を尽くしてマレットを振り抜き、パックを弾く。障子は4つのマレットを別々の生き物のように扱い、時に守り時に攻めてきた。

——3分間の激闘の末、俺達は勝利した……あの体育祭の決勝での雪辱を少しでも晴らせた——そんな気がした。

——こうして俺達はデクを見失ったのだった……

それから俺達は開き直って普通に遊んでいた、俺も最初は探しにいこうとしていたが、砂藤の「あいづらなら大丈夫だろ?」という言葉に妙に納得してしまった。

確かにデクなら特に問題ないし、更に言えば何かあつて困るのは恐らく麗日だけだ、やっぱり問題ねえな!

ゲーセンを満喫した俺らは、次に何をすることも決めずに街をぶらついている。俺はそろそろ帰るかと考えて始めていた、その時だった。

「あそこのクレープ屋の列に並んでんの緑谷達じゃねえか?」

「お、ホントだ。あれってさっきのクレープだろ? 律儀だな緑谷」

「あれは律儀つーより、いいこと聞いたから早速行ってみようって感じだな。デクは行動はえーからな!」

砂藤がデクたちを発見し、轟が続く。俺はデクの行動原理をこいつらに教えてやる。おそらく間違いない、デクにとっての一番の幼馴染みの俺にはわかる。

「いくぞ、おい。もう大丈夫だろ、なにせデクだからな！」

俺は他の奴等連れてその場を後にしようとする、デクなら大丈夫だし、なによりデクも麗日も楽しそうだ。俺達が心配するような事態にはなんねえだろう……うん？…
麗日はどうでもいいか——

「誰か助けてえー!!! ヴイランだわ!!」

突如女性の叫び声が離れたところから聞こえた。

くそがっ!! 平和に過ごしてたらこれかよ!! んったくヴィランってのはいつでもどこでも湧きやがんな!

「おい! いくぞ!! プロが来るまで時間稼ぎと避難を——」

「かつちゃん! それとみんな!!」

「——デク!? なんでここに!? 気づいてたのか?」

俺が他のやつらに指示を出そうとした時に、いつの間にかこちらに移動していたデクが声をかけてきた。

「結構前から気づいてたよ! それよりヴィランだ!! みんなは避難誘導をお願い!! 僕はプロヒーローが来るまで時間稼ぎをしてくる!!」

「おい！ちよつと待てデク！」

デクはそう言つて現場に向かおうとする、俺はその手を掴んで引き留めた。

「いくらお前でも『個性なし』で、ひとりじゃ無理だろ！俺もいく!!」

「大丈夫！僕、仮免持つてるから!!——それじゃあ避難誘導頼んだよ!!」

「はあ!?!」

デクはとてつもない速度で現場へと走つていった。仮免つて、ヒーロー資格の仮免許のことだよな?……おまえなんでそんなもん持つてんだよ!?!

——そのあとはプロヒーローが到着する前に、デクがヴィランを行動不能にして警察に引き渡した。デクは聴取があるとかなんとかで警察と共に行つてしまい、俺らもその日は解散したのだった。

——デク、お前はいつたいどれだけ先にいるんだよ。

—— 爆豪 side out ——

雄英体育祭から二日後、振り替え休日も終わり学校が始まった。

僕は麗日さんと出掛けていた時にヴィランの騒動に立ち会ってそのまま別れてしまったんだけど、麗日さんは「あそこで動かなかつたらヒーローなんてなれないよ！だからいいよ！」っと許してくれた、やっぱり麗日さんはいい子だなあ…

そういえばその日はかっちゃんや轟君と砂藤君と障子君が四人で遊んでるのを見たな、珍しい組み合わせだったけど、何してたんだろ？

「おはよう、早速だが授業始める、今日のヒーロー情報学はちよつと特別だぞ」

そんなことを考えていると相澤先生が教室に入ってきて授業を始める。えっと、確か体育祭明けの授業って——

「『ゴードネーム』ヒーロー名の考案だ——」

「胸膨らむやつ来た——!!!」

相澤先生の言葉にクラス中が騒ぎだす。しかし相澤先生はそれを目で殺し、静まらせたのちに説明を続ける。

プロヒーローからのドラフト指名と今後にある職場体験のためにもこのタイミングでヒーロー名を考えなければならぬのだ！

「例年だったらもうドラフト指名の集計が出てるんだが……誰かさんのせいで体育祭が

荒れてな……まだ集計が終わっていない」

相澤先生が僕を睨みながら説明をしていく、僕だって荒らしたくてやったわけじゃないのに……! 言い訳すると怒られそうだから黙っておこう……

——そしてミッドナイトの監修の下、ヒーロー名の考案と発表会が始まった。

相変わらず大喜利みたいな雰囲気が始まり、その流れを蛙吹さんがぶったぎる。クラスの大半は前世と同じヒーロー名を名乗ることになり、残るは僕、飯田君、再考案のかっちゃんの三名になっていた。かっちゃん、爆殺から離れようか……

「じゃあ次は飯田くんね! はいどうぞ!」

「はい! 俺のヒーロー名は——インゲニウム2号……です!」

「2号って……それでいいのかよ、飯田!」

飯田君のまさかのヒーロー名に、たまらず切島君が突っ込みを入れる。似た名前どころが、まさか同じにするとは……!

「もちろんいいとも! 俺の成りたいヒーローってのは兄、インゲニウムそのものだ。兄のように人々を導き守れるヒーローに成りたいと、心の底から思っている。

兄とも話し合ってたんだ、叶うなら同じ名前を名乗りたいと。兄は了承してくれたよ、お前が望むならってね!」

「じゃあその2号ってのは?」

「ああ、これは昔見たレトロヒーロードラマでそっくりな見た目のヒーロー達がいるね、その二人目は自らを2号と名乗っていたんだ。そのリスペクトさ!!」

飯田君のインゲニウムに対する思いは本物だ、きつと兄弟でヒーローとしてやっていくということなのだろう。

そういえば僕もそのレトロヒーロードラマ見たことあるな。たしか主人公が悪の組織にバッタの力を持ったヴィランに改造されそうになったけど、なんとか抜け出してその組織と改造人間の力で闘うっていう話だったかな？

超常黎明期の更に前のドラマだった気がするけど、飯田君よく知ってるな!

「さつき切島君にも言ったけど、憧れの名を背負うつてのは相応の覚悟がいるわよ?」

「承知の上です……俺は必ず兄と肩を並べるヒーローに成る、その第一歩がこの名前なんですよ!」

ミッドナイトの問いに飯田君はハッキリと言い切る。やっぱ僕にとつてのオールマイトが彼にとつてはインゲニウムなのだろう、気持ちはすごくよくわかる!

「いいわあ〜!——つと、じゃあ再考の爆豪君どう?」

「爆殺卿!!」

「違う、そうじゃないわ」

続いてミッドナイトはかっちゃんへ発表を促す、でも違うな……

かっちゃん、ヒーローが殺しちゃだめだよ!!

「じゃあトリは緑谷君ね、まあ私はトりにしようと思つて指名しなかつただけ、貴方もそうなのね?」

「ははは、そこまでは考えてなかつたんですけど、そうなっちゃいましたね!」

ミッドナイトが僕を茶化しながら教壇へ呼ぶ、ホントにトリを飾ろうとか考えてたわけじゃないんだけど、みんなの名前が気になってたらこうなつてたんだよね!

「僕のヒーロー名は——これです!!」

「えっ?その名前つて……」

「おいおい、そこまでやるかよ緑谷!」

「それでこそ、デクだぜ……!」 「デクさん……!!」

僕のヒーロー名の発表にみんながざわつく。やっぱこの名前はインパクトあるみたいだな……でもそれでいい!!

——僕のヒーロー名は前世とは違い、“デク”じゃない。

——ある人につけてもらった、今の僕を象徴する大切な名前だ。

——そのきつかけはオールマイトとの修行時代まで遡る……

BIG3?パワーリフティングの話ですか?

雄英体育祭の振り替え休日も終わり、僕は再び学校が始まり最初の授業はヒーロー名の考案だった。みんな僕の前世の記憶通りの名前を名乗る中、飯田君のヒーロー名はインゲニウム2号だった。

そして僕はヒーロー名を発表する、「デク」ではないやりなおし再履修での僕のヒーロー名、これからするのはその誕生の昔話だ。

——記憶はオールマイトのあの衝撃の一言まで遡る。

「今日から家を出てこの街に住んでもらうから、そのつもりでよろしく!」

「えっ?……エエエツーーー!!?」

オールマイトの衝撃の宣告に僕は驚きの声を大きく上げる。どういうことなんだ!「この街つてこのヒーローズマンションタウンにですか!」

「そうだよ、ここなら修行に更に打ち込みやすいし、親元から離れることで君の精神的な成長も見込めるだろう!」

オールマイトは僕の驚きなんて気にせず、当たり前のように話をする。

ヒーローズマンションタウンってのは今僕らがいるこの街の愛称みたいなもんだ。

ここはヒーローの後援者達が共同出資で造り上げたマンションが中心の住宅街だ。プロヒーローの資格を持っている人なら格安でいい部屋が借りれるという、若手駆け出しヒーロー達に人気の物件なのだ。

そんなわけでヒーローが多く在住する土地なので治安が格段に良く、そのため一般人が部屋を借りたり家を建てる時はかなり割高になっている、しかし後援者やその親族は大体お金持ちなので部屋も土地もバンバン売れていく。

ヒーローにも市民にも得があるまさにWin-Winの街なのである。

「勿論親御さんの許可は得てるからね！じゃあ手続きにいこうか!!」

「えっ!? あ、はい!」

オールマイトの根回しは完璧だったみたいだ、母さんも知ってたなら教えてくれてもいいのに……

その後トントン拍子で事が進んでいき、僕はヒーローズマンションタウンに住むことになった。その日は荷物をまとめるため自宅……いや、実家に帰り、そして衣服などの手荷物だけを持って僕は引越した。

次の日、昨日と同じ公園に来るようにとオールマイトに言われていたので、向かって

みるとそこには四人の人影が、そのうちのひとりにはサーナイトアイだ。

「遅いぞ、緑谷出久! ヒーロー足るものもつと迅速に行動しなければならぬぞ!」

「すいません、お待たせしましたサーナイトアイ!」

会ってから早々にサーナイトアイに叱られてしまった……まだ待ち合わせの時間前
なんだけど……!

「と……ここでそちらの方々は?」

僕はさつきから気になっていた後ろの三人について尋ねる。

ナイトアイの相棒サトキョウかな? でもそれにしても若すぎる気がする……でもどこかで見たこ
と有るような……?

「ああ、紹介しよう。彼らは雄英高校の二年生、そしてこれから雄英ビッグ3と呼ばれる
であろう才能を持った子達だ、つまり雄英入学を目指す貴様の先輩にあたる。

そしてそれぞれプロヒーローの下でインターン中だな、今回はその合間をぬって来
てもらったというわけだ」

「雄英高校の先輩!?! しかもビッグ3……?」

なんと三人とも高校生だったとは! でもビッグ3ってなんだろう? あとインター
ンってなに!?!

僕の知っているBIG3はベンチプレス、スクワット、デッドリフトの三種の神器と

も言える筋肉トレーニングのことなんだけど……たぶん関係ないだろう！

「こつちの黒髪が天喰 環、ファットガム事務所にインターンしている」

「……よろしく……」

黒髪と尖った耳、そして俯きがちでもはつきりとわかる三白眼が特徴的な天喰先輩、よろしくとは言うもののなぜか頑なに目を合わせてくれないな……僕が何かしただろうか……？

それにファットガムって言えばあのBMIヒーローのファットガムか!? 江洲羽を中心に活躍している人気ヒーローじゃないか！

つまりインターンってのは、職場体験の延長みたいなものなのだろう……！

「この娘が波動ねじれ、インターン先はリユークュウ事務所だ」

「ねじれちゃんだよー、よろしくね!——ほら天喰くんも下ばつか向いてないで握手握手! わつ! 君、手えおつきいね!!」

「波動さん……! わかった、わかったから……!」

波動先輩は名前の通りねじれた水色のロングヘアが良く似合っていて、くりつとした大きな目が可愛らしい、まさに美少女って感じの人だな……! でもぐいぐい来るタイプの人みたいでちよつと苦手かも……僕も天喰先輩もたじたじだ!

「そして最後が——」

「通形ミリオだよーサーの下でインターンしてるよね！よろしく!!」

「よろしくお願ひしますー!!」

サーナイトアイが紹介する前に、つぶらすぎる瞳、金の短髪をソフトモヒカン風に立てている、そして笑顔の通形先輩が握手をするため、手を差し伸べてくる。僕は笑顔で返しながらその手をがっしりと掴んだ——そのとき身体に衝撃が走る!!

この人……!とてつもない筋肉の持ち主だ……!!掌から筋肉へその力が伝わってきて、僕の筋肉が荒ぶっている!

「……………」

ちらりと通形先輩の顔を見ると先程までの笑顔はなく、真剣な表情へと変わっていた、僕の筋肉を彼も感じ取ったらしい……!

「すごいですね……通形先輩……!」

「君もやるじゃないか……!!」

僕は握手をしながら不敵な笑みを浮かべて互いを評価する。

そしてその手がほどけたと同時に少しだけ距離をとる、更に通形先輩の上着がまるで身体をすり抜けたかのように地面に落ちた。

「!?!」

僕はその光景に目を丸くする。いったいなにが起きたんだ!?

だがそれは始まりの合図に過ぎない――

「POWERRRRR!!」

――「サイドチェスト」!!?なんてキレのある大胸筋なんだ……!無駄なものなどない!それに上腕筋群もキレッキレだ!!これが雄英ビッグ3の実力……!

「――&……POWERRR!」

そのまま今度は「サイドトライセツプス」に移行した!?!くっ……!やはり大胸筋の魅せ方が上手い!!素晴らしいキレだ!!それにズボン越しにもハムストリングがキレているのがわかるかのようにだ!!

――僕も負けてはいられない……!

僕は着ていたTシャツを脱ぎ捨て筋肉に力を込める。

「スマアアツシュ!!」

力強い掛け声と共に僕は「フロントバイセツプス」で対抗する。上腕二頭筋を中心に前面の筋肉を引き締める!!

「――!!」

ポーリングを決めたままの通形先輩の顔が少しだけ曇る。よし、もうひと押しだ!

「今日は上腕二頭筋のキレが最高潮さ!――スマアアツシュ!!」

僕はそのままクルリと半回転して「バックダブルバイセツプス」へと移行する、しか

し目線だけは逸らさない。見よ!この上腕二頭筋と僧帽筋と広背筋の織り成す隆起を!!

僕と通形先輩の視線だけが火花を散らし、静寂が流れる……そして二人同時に動きだし、素早く手を差し出して固く握手する。

「素晴らしいよね!上腕二頭筋のキレも勿論だけど、広背筋がデカイのなんのつて!!最高だよね!」

「通形先輩もとてつもない大胸筋のキレでしたよ!しかもただキレてるだけじゃない、適度なバルクの中に際立つそれは、まるで筋肉の山脈って感じてましたよ!!」

「ミリオって呼んでくれよ!後輩君!!」

「ミリオ先輩!僕は——ハッ!」

僕らは上半身裸で握手をしながら互いを誉めあう、筋肉が筋肉を認め僕らをそうさせたのだ。そしてミリオ先輩に名前を名乗ろうとした時——背筋がゾクリとした。

「……気はすんだか……?」

サーナイトアイの重く静かな一言が僕らの耳を貫く、ギギギときこちなく二人してサーナイトアイの方を向くと、彼はこめかみに青筋を浮かべながら眼鏡の奥から鋭い眼光を覗かせていた。

「サー、イエッサー!!」

僕と通形先輩はビシツと敬礼をしてサーナイトアイに向き直る。

「……よろしい。最後に、この緑髪の筋肉が緑谷出久だ、三人よりふたつ年下……15歳だ。事前に話した通りだが……こんなのも一応オールマイトの弟子をやっている……!」

「よ、よろしくお願ひします……」

苛立ったままサーナイトアイが三人に僕の紹介をする、僕は恐縮したまま、小さく挨拶をした。こんなのですいません……

「ミリオ、緑谷君、いきなり人前で裸になつてはいけない……びっくりするだろう……それに今は波動さんもいるんだそ……?」

「スツゴい筋肉だねー、ねえねえそれって生まれつき?それとも筋トレの賜物?もしかしてプロテインの副作用!?!」

「アツハハハ!悪かったよね!!でも波動は気にしてない感じだよね!」

三人がそれぞれ言いたいことを言っている、天喰先輩はかなり常識的なようだが、波動先輩もミリオ先輩も自由すぎる……まあ今の僕が言えた立場ではないんだけども……

「無駄話はそのままで、今日貴様達に集まつてもらったのは雑談をするためではない……」

「……そういえばなんのために僕らは顔合わせしたんですか?」

「それをこれから説明する、話の腰を折るな……!」

僕は疑問を口に出してしまい、またもサーナイトアイに睨まれる。

「貴様達にはこれから合同で訓練を行い、そして互いを高めあってもらおう」

「はいはい、訓練つてなにをするの?もしかして筋トレ?通形とか緑谷君みたいにマツチヨなるの?私やだなー」

サーナイトアイの言葉に波動先輩が拳手をして質問から感想まで一気に喋り抜ける。ホントに自由だなこのひと…!

「いや、そういう基礎的なものは各自でやってもらおう、合同で行うのは戦闘訓練だ、まあ形式はその都度変える予定だがな」

「戦闘訓練ですか、分かりやすくいいですね!サー!」

サーナイトアイの説明にミリオ先輩が納得したように返事をする。戦闘訓練つてことは僕が先輩達と闘うのか…?

「お言葉ですが、サーナイトアイ。やめておいた方がいいんじゃないですか…?緑谷君がいくらマツチヨでオールマイイトの弟子だからとはいえ、まだ中学生です。加減を間違えれば大怪我することだってあり得るし、なにより彼の心が折れてしまうかもしれない…:特にミリオは手加減が下手ですから…:」

「くう〜!言うねえ環。バツサリだよね!!」

天喰先輩は俯きながらサーナイトアイに忠告する、ミリオ先輩は笑いながらも否定は

していないみたいだ。僕の身を案じての発言なんだろうか……先輩達の実力が未知数な以上、ないとは言い切れないけど……

「確かに年齢や実戦経験を考えればそうも言いたくなるか……よし、なら見て確かめるのが早いだろう。向こうにヒーロー用の訓練場がある、そこでミリオと緑谷出久で闘ってみろ」

サーナイトアイはそう言つて歩き始める、僕達は少し戸惑いながらもついていった。

訓練場では既に何人かのプロヒーロー達が訓練をしていたが、サーナイトアイが話を通してその一画を借りる。そしてサーナイトアイの指示で僕とミリオ先輩が闘う準備が整った。

「サーナイトアイ、ホントにやるんですね……ミリオ、やり過ぎるなよ……」

「通形は最近メキメキ強くなってるからねー、緑谷君これは辛いよー。ボコボコされて泣いちゃうかもよ？ねえ天喰くん？」

「ミリオは昔から強いよ……ただ最近目に見える形になっただけさ」

天喰先輩と波動先輩のそんな会話が聞こえてくる、二人とも僕がやられたあとのことしか心配していないみたいだ。

ミリオ先輩はそれほどまでの実力者なんだな……油断はしない、全力でいこう……そして僕の力を先輩達に認めてもらおうんだ！

「加減かぁー！そーゆうの苦手なんだよね！でもまあ気を付けるよ！」

「ミリオ、先に言っておく。全力で行け、オールマイトの弟子を名乗るってのは甘くないぞ。緑谷、貴様も全力で行け、私の育てたミリオは……強い！」

ミリオ先輩とやり取りをしつつサーナイトアイは僕にも活を入れる。言われなくとも……ですよ!!

「それでは——始め!!」

サーナイトアイの掛け声で闘いが始まる。

まずは速攻！先手をとって優位に立つ!!ワン・フォー・オール——フルカウル80%

!!

「——スマアアツシユ!!」

僕は跳躍して一気に距離を詰めて、拳がギリギリ届かない位置で腕を振り抜く。ワン・フォー・オールの超パワーで振るわれた腕はその衝撃を空気へと伝播させ、その結果激しい風が巻き起こる。

オールマイトのSMASH!!を見て、その余波である暴風を攻撃に転用した、僕が最近になって開発した必殺技——非殺傷牽制・遠距離攻撃用エアスマツシユ!……やつぱこの名前長いな、打つときはスマツシユだけしとこう、なんかこの先やたらといっぱいこの技を使うときが来る気がするし!

僕のスマツシユの暴風は猛烈な勢いでミリオ先輩の身体を吹き飛ばす——

「——ツ?! いない!?!」

——吹き飛ばされたのはミリオ先輩が着ていた服だけだった、そこにミリオ先輩の姿はない。

「——いったあ!!……後ろ?!」

疑問に思う間もなく、首の後ろに強い衝撃が襲い、身体のバランスを崩してコケる。「あれ? 今ので終わりだと思っただけど……んー、予想より全然頑丈だよね!!」

後ろを振り向くと、腕を手刀の形に構え、首を傾げてすつとぼけた様子のミリオ先輩がいた——全裸で。

思い出したぞ……どこかで見たことある顔だと思ったら去年の雄英体育祭で成績こそ振るわなかったもの、やたらとインパクトを残していった全裸の人だ!

こんなに強い個性だったのか?……いや、おそらく強い個性に仕上げたのだろう、今の一撃からは研鑽された鋭さを感じた。

「まだまだ!……こんな程度じゃやられませんよっ!——」

僕はコケたままの姿勢から地を跳ねて、低い軌道で接近して一步踏み込んで、そのままアツパーを放つ。

「——すり抜けた!?!」

僕の拳はミリオ先輩の身体になんの感触もなく沈んでいき、そして身体を突き抜ける、やはりすり抜ける個性か! 攻撃無効とかありかよ!?

一見物理攻撃に対して無敵な感じだが……地面に立っている以上、足はすり抜けれないってことだろ? ならそこを狙う!!

「これどうだっ!」

僕は地面を抉るように足払いを仕掛ける、ガリガリと地面が削れて、足がミリオ先輩の足に触れると思った瞬間——

「狙いは悪くないけど、甘いよね!」

——ミリオ先輩の身体が地面へ沈んだ。さつきまでミリオ先輩いた場所には僕が作った爪痕だけが残る。

消えるからくりはそういうことか! 地面まですり抜けるとは……なら出てくる位置は恐らく——

「——死角だろ!」

腕を後ろに振るいながら振り返る、そこには予想通り地面から飛び出たミリオがいた。そして僕の腕がミリオ先輩の顔面へと突き刺さる。

「うおっ!?! 予測してカウンターしてきたのか! やるね、でもそれを更にカウンターするよねっ!」

突き刺さった腕は顔をすり抜け空を切る。ミリオ先輩は驚きながらも、しつかりとカウターパンチを僕の腹にくらわせてくる、が…僕の鍛え上げた腹筋がそれを弾いた。

「くっ!!」

僕は咄嗟に手でミリオ先輩の胸を風呂払うが、またも腕は身体をすり抜けた。ミリオ先輩はそのまま地面へと沈み、すぐに僕の正面5メートル程のところにワープでもしたかのように出現した。

ワープまで出来るのか!?!…:おそらく違うな。どういう理屈かはわからないが、地面に沈むと高速移動が可能に成るのだろう。

移動まで出来る攻撃無効のすり抜けの個性…:ホントに強いぞこの人!——待てよ?物理的干渉が不能なら、なぜ攻撃してこれる…?」

「!?——また後ろかつ!」

考えこんでいると目の前のミリオ先輩の姿がまた消えた、僕は再び後ろに回り込まれたと思ひ振り返りながら回し蹴りを放つも、その蹴りは正真正銘空を切った。

「後ろの後ろは正面だよねっ!!」

僕の背中の方から声が聞こえると同時に背中に衝撃が走る、僕は軽くぶつ飛びながらも受け身をとって体勢を立て直す。

裏をかかれたか!でも予想通り、攻撃は出来るようだ。

そういうえばさっきの腹へのパンチ…あれはどう見ても急所であるみぞおちを狙ったものだった、しかし実際に当たったのはそのやや下の腹直筋だ。

やはり攻撃の瞬間には実体化するんだ…それでその部分が僕の振るった腕の起こした風にあおられて、攻撃位置が少しだけずれたのだと思う。つまり勝機はある——

「カウンター対決といきますか！根比べの時間ですよ、ミリオ先輩!!」

僕は全身に力を込めて構える、実体化した瞬間に一撃をお見舞いする、それしか攻略法がないだろ!!

——それからはミリオ先輩が消える、僕が出現位置を予想してカウンターを放つ、ミリオ先輩がそれを躲しながらカウンターを入れてくる。

僕のカウンターで軸のぶれたミリオ先輩の攻撃は僕の筋肉に阻まれ、大きなダメージにはならない、しかし僕のカウンターもミリオ先輩に当たらない。

その繰り返しだった。

しかし、僕のカウンターは段々とミリオ先輩を捉え始めて、ミリオ先輩のカウンターも少しずつ鋭さを増していった。

「——そこお!!」

僕とミリオ先輩はクロスカウンターで拳を出しあう、僕の拳はミリオ先輩の頬を掠めた、ミリオ先輩の攻撃は僕の顎へとヒットするも、腕だけの実体化だったので軽いパン

チになっていた。

よし！掠めたただけだが、攻撃を当てられるようになったぞ！！

でも今もらったのはヤバかったな、体重が乗ったパンチなら決定打になりかねない

……！！

「やるね、今の一発は危なかったよ！」

「先輩こそ流石ですね！僕の自慢のパワーがまるで当たらないですよ……！」

僕とミリオ先輩は会話をしながら息を整えつつ、攻撃のタイミングを見計らう。

次だ……次の一撃で完全に決める！それ以降は対応され始めてるし、もう当たらないかもしれない……！！

かすり傷でも相手を下ウンさせるんだ、僕の全力の一撃で！！

「そろそろケリをつけるよね！絶賛開発中の超必殺——！」

なんとミリオ先輩の方から仕掛けてきた、そうくるのか!?

だが僕も決めにいく！ワン・フォー・オール……80%——

「フアントム・——」

「デトロイトオ!!——」

僕とミリオ先輩が互いに互いを仕留めるための必殺技を繰り出す——

「そこまでだ!!」

そこに中断を告げる野太い声が響く、声の主はサーナイトアイじゃない……この力強い声は——

「オールマイイト!!」

僕とミリオ先輩、そして離れたところにいる波動先輩と天喰先輩も驚きの声を上げる。

「いかにも! 私が来た!」

「オールマイイト、なんでここに?」

オールマイイトは胸を張っていつもの決め台詞を言う、僕はその理由尋ねた。

「何故かって? 弟子がこれからお世話になるからね、その挨拶のために来た!」

「ありがとうございます……! オールマイイト!」

オールマイイトの言葉に僕は感激する。わざわざそのために出向いてくれたとは……師匠としてもオールマイイトは最高だ!

これからつてことはまた先輩達と訓練することがあるってことかな?

「ねえねえ! 天喰くん! オールマイイトだよ! オールマイイト! 本物だよ、ねえつたら!」

「見えてるよ波動さん、初めて生で見た……俺には眩しすぎる……!」

波動先輩が天喰先輩を引っ張りながらこちらに向かつてきている、かなり興奮ぎみだ

！でも気持ちにはよく分かる、僕も初めて会ったときはヤバかったもんなあ。

「は、はじめまして、オールマイト！サーの下でインターンをさせてもらってる通形ミリオです！」

「ああ、ナイトアイから話は良く聞いているよ、そして実際見ても強いな君は！これから私の弟子、緑谷少年をよろしく頼むよ、先輩としてフォローしてやってくれると助かるかな！」

「はい！オールマイトにそう言ってもらえる日が来るなんて思ってたんです！はい！」

それに緑谷君もめっちゃ強いですね、流石オールマイトの弟子って感じで！！これからみんなで頑張つて強くなりたいと思います！！」

いつの間にか服を着ていたミリオ先輩は緊張しつつも、とても嬉しそうにオールマイトと握手をする。オールマイトも笑顔でそれに答えた。

そのあと波動先輩と天喰先輩もオールマイトと少し話をして握手を交わしていた、波動先輩はオールマイトに対してもその自由さを発揮していて、それにはオールマイトも苦笑いだった。波動先輩、ぶれないなあ……

「さて、緑谷出久の実力もわかってもらえたようだし、オールマイトも来た。そろそろいきますか？」

「そうだねナイトアイ、じゃあみんないこうか!」

サーナイトアイとオールマイトは僕らを引き連れて訓練場を後にする、そのとき周りにいたプロヒーローたちはみんな直立不動でめちやくちや恐縮してたな…若手の訓練場にナンバーワンヒーローが来ればそうなるよね!

そして、ついた先は20階はありそうな高層マンションだ。ここに今日から僕が住むことになるのか…?てかなんで先輩達もここまで来たんだろ?ついでかな?

「はい、ついたよ!ここが今回借りた部屋だ!!」

エレベーターに乗って到着したのは最上階、そしてまさかの角部屋だ。

「ここメチャクチャいい部屋なんじゃないですか?」

「この街の組合長も一緒に不動産屋に行ったのだが…弟子が住むからって話して物件探しを頼んだら、この部屋を格安で貸してくれるってことになったのさ!ありがたい話だ!!」

「そりや、偉い人と凄い人が一緒に訪ねればそうなりますよ……」

オールマイトから経緯を聞くと不動産屋が可哀想になってきた……たぶん震え上がってたんじゃないか…?

「部屋は家具家電付きのここにしてもらったから今日から住めるぞ!さあみんな中に入って荷物を置こうか!」

オールマイトはそう言つて部屋の中へと入つていく、僕らもそれに続いてゾロゾロと中に入る。

ん？ちよつと待て、みんなつて言わなかつたか今!?

「オールマイト！みんなつてなんですか?」

「みんなつてそりや、君たち四人のことだよ。これから四人で共同生活を送つてもらふんだよ！あれ、ナイトアイ？言つてなかつたのかい?」

「聞かれてなかつたので言いませんでしたね。それに本人達も親御さんも家を引越すことに同意してくれてたので、問題ないかと」

オールマイトとサーナイトアイはそれぞれ納得したように頷いている。いやいや、あるでしょ!!

「ミリオだけじゃなく、他人との共同生活なんて……俺に出来るだろうか……いや無理だ……迷惑をかけてしまう……」

「そうネガティブになるなよ環！大丈夫さ、なんとかなるつて！四人もいるんだしなんでも解決できるよね!!」

「みんな一緒つて楽しそう！天喰くんは楽しみじゃないの?なんで?ねえねえ?」

天喰先輩はなんかジャンルの違う心配してるし、ミリオ先輩はやたらと前向きだ……!

波動先輩は……うん、自由すぎて僕の手にはおえないな!!

「オールマイト、なんで僕らに共同生活をさせよう?」

「それは私から説明しよう、まずこの共同生活の基本は貴様らのチームワークの向上だ。今後プロに成れば他のヒーローや自らの相棒などと連携して事件解決に挑むことになるだろう、そこで必要なのがチームワークだ。その基礎をここで育もうというわけだ。

次に緑谷出久、貴様には一ヶ月後にあるヒーロー資格の仮免試験を受験してもらう。B I G 3の三人は既に仮免を取得済みだ、対策などを教えてもらうといい。

次からは四人で戦闘訓練を行ってもらう、そのために四人まとまっている方がこちらで予定が管理しやすい。あとミリオ、次からはコスチュームを着ろ、毎回全裸で訓練するわけにはいかないからな!

以上三点がこの共同生活を送る理由だ」

サーナイトアイは駆け足で説明を行っていく、僕は口を挟むことも出来ず納得するしかなかった。

共同生活、チームワーク、仮免、全裸……情報が多過ぎて展開についていけない!

まあ、なんでも唐突なのが、オールマイトとサーナイトアイとの修行なんだけどさ……慣れてきた自分があるぞ……!

「部屋がいっぱいありますねオールマイト!どの部屋がいいかなあ?うーん……」

「H A H A H A!! 3 L D Kの部屋だからね!まあ部屋割りは後で決めるとして——ま

ずはお隣さんにご挨拶にいかうか！これから騒がしくなることもあるだろうしね！」

部屋のドアを開けて回る波動先輩にオールマイトが返事をしつつ、挨拶回りを提案する。

「まだお昼過ぎですよ？お隣さん部屋にいるんですかね？」

「いなかっただらまた伺えばいいさ！それにこれもあるしね！」

僕はオールマイトに尋ねると、オールマイトは乾麺の蕎麦を片手に笑顔でサムズアップをしてくる。まあ挨拶は早い方がいいんだろうな。

僕らはまたゾロゾロと部屋を出て隣の部屋の前に行く。オールマイトが代表として先頭に立ち、インターフォンを押した。

暫くの静寂が流れる……やはり不在なのだろうか？

「〃——はあい？どちらさまですか？〃」

インターフォンから眠そうな女性の声が聞こえてきた、どうやら寝ているところに来てしまったらしい……

「お休みのところすいませんね！隣に越してきた者なのですが、引越しのご挨拶に参りました！」

「〃ふあゝ、そうですか。〃丁寧にも……今出ます」

オールマイトが元気良く挨拶をするも、お隣さんはどうにも気だるげだ、まだ寝起き

でボヤツとしてるようだ。

というか、玄関開けたらオールマイト! ってどんなドッキリだよ! ……絶対驚くでしょう…ごめんなさい、お隣さん…!

「はい——ってオールマイトオ!!」

ドアが開いてお隣さんが出てきた、そして案の定オールマイトに驚いていた、僕からはオールマイトの背中でのその姿は見えないけど、さぞ驚いた顔をしているだろう。

——あれ?今の声って…どこかで聞いたことあるような…?誰だっけな……つい最近に聞いた声だ。

「——こんにちは—」

僕は疑問の答えを求めてオールマイトの背中から、挨拶をしながらひよっこりと顔を出す。そこにいたのは——

「えっ?!——デクくん!!」

……
——更に驚きながら僕のあだ名を呼ぶ、寝癖をつけた金髪のロングヘアーの女性

——
M t. レディこと、岳山優さんがそこにいた。

ルーム・イン・コミュニティライフ with クラブ

サーナイトアイの紹介で通形ミリオ、天喰環、波動ねじれ、未来の雄英ビッグ3と出会った僕は、ミリオ先輩との戦闘訓練でその実力を知り、そして僕の実力を認めてもらえた——とおもったらその三人と一緒に暮らすことに。

そして挨拶に出向いたお隣さんは、なんとMt.レデイこと、岳山優さんだった！

「えっ!?——デクくん!?!」

「岳や……優さん!?なんでここに!?!」

「なんでって……それはこっちのセリフよ!なんでデクくんがここに!?!それにオールマイトと一緒に……」

僕と優さんは互いに驚く、そして優さんは僕の質問に当然の質問を投げかけてくる。そりゃそうだよな……えつとどこから説明すればいいんだ?

「ああ、昨日の女性か!確かMt.レデイだったね!」

「え?そうですけど……オールマイトとお会いしたことありましたか?それに昨日……」

「？」

「あつ……！」

オールマイトが昨日のことを思い出すも、あのときはトゥルーフォームだったので、優さんには認識されていない、完全に失言だったようで額に冷や汗が滲んでいる。

ヤバイ！オールマイトの弱体化がバレてるのはこの場では僕とサーナイトアイだけだ！なんとかフオローしないと！！

「実は僕はオールマイトの弟子をやってまして、昨日会ったことをちよつと話しちゃったんですよ……ごめんなさい！！」

「えっ!? オールマイトの!? しかも昨日のつて……あれ話しちゃったの!!?」

「そ、そう！何を隠そう緑谷少年は私の弟子なんだ！昨日会ったつて話だけしか聞いてないんだがな!! H A H A H A !!」

「そ、そうだったんですね……オールマイトが現れたと思つたらデクくんまでいて、その上弟子つて……もうなにがなんだか……！」

優さんは情報の多さにやや混乱しているようだが、なんとか納得してくれたようだ。サーナイトアイ流、情報量で強引に納得させる作戦は有用だな!!

「Mt. レディ……最近人気急上昇中の若手だったな、隣人が知り合いの上にヒーローとは都合がいい」

「へ!?!サーナイトアイまで!?!それによく見たら他にも三人いるし……えっと、皆さんで隣に越してきたんですか?」

「いや違う、ここに住むのは四人の子供達だけだ。私とオールマイトはその指導者とあったところだな」

サーナイトアイが横から入ってきて、更に驚く優さんに説明をしていく。オールマイトのインパクトが強すぎて霞んでいたが、僕達は引越しの挨拶にきたんだったな……

「その三人とデクくんが隣に……?」

優さんはアゴに手を当ててなにやら考え込んでいる。

「ねえねえ、デクくんってなに? 緑谷君の名前は出久だよな? 木偶の坊みたいだね! でも緑谷君そんなに無能だったの?」

「えっと波動先輩、デクってのは僕のあだ名です。出久って文字がそう読めるでしょ? でも僕は頑張れっ! って感じで好きなあだ名なんですよ!」

僕は不思議そうな顔をした波動先輩にあだ名の説明をする。

「そっか、じゃあ私もそう呼ぶねデクくん! 私はねじれちゃんでもいいよ!」

「ええ? 先輩に対してそれは……ダメでしょ、波動せ——ひゃい!?!」

「ねじれちゃんだよ! ねえデクくん? 私がいいって言うならいいんじゃない? どうして駄目なの? ねじれちゃんって呼んでみてよ、ほらほら!」

デクというあだ名が気に入ったようで、自分もあだ名で呼ぶように言ってくる波動先輩、僕が断りを入れると両頬を掴まれてぐいぐいと引つ張られる。近い！距離感が近すぎるよ波動先輩！

「ねえなんでー？オールマイトやサーナイトアイはそう呼んでるのにー！」

「ひよれはヒーローめえでふひ……（それはヒーロー名ですし……）」

「私のヒーロー名もねじれちゃんなんだよ！じゃあオツケーだよね！ほら言ってみよー！」

「そういうことならまあ……じゃあ、ねじれちゃん？」

「はいはいー！」

そして僕の頬はようやく解放される、ていうかヒーロー名だったのかねじれちゃんつて。ホントに自由すぎるよねじれちゃん！！

「波動、後輩が出来て嬉しそうだよね！」

「今は興味の対象が緑谷君なんだろう……頑張れ……」

ミリオ先輩と天喰先輩は止める気が無いようだ、つまり僕は為す術なく弄られ倒すのだろうか……!?!

「ふふ、楽しそうね、デクくん……？」

そこに優さんが笑顔で僕に話しかける、だがなんだこの背筋の凍るような悪寒は……

!?まさかプレッシャーを感じているのか!?というかこの状況のどこが楽しそうに見えるんだ…!」

「こんな可愛い子とこれからひとつ屋根の下で暮らすんですって…?そりや楽しみよねえ?」

「Mt. レデイにかわいいーって言われちゃった!」

「その、これは修行の一環なので、それが楽しみってわけじゃ——」

「えー、デクくんはみんなで暮らすの楽しみじゃ無いの?なんで??嫌だった…?」

「別にイヤって訳じゃあ——」

「ふうん、嫌なわけじゃないんだ?」

「ひっ…!」

プレッシャーを放ち続けながら僕にニコニコと語りかける優さん、割って入ってきて話を掻き乱していくねじれちゃん、縮こまる冷や汗まみれの僕。なんだこの状況…!僕が悪いのかこれ…!?

「さあ、挨拶も済んだところで、そろそろお暇しようか!それじゃあMt. レデイ、失礼す——」

「ダメです、オールマイト」

「エツ?」

「この娘も交えた同居なんて許可できませんよ?」

オールマイトが助け船と言わんばかりに帰ろうとしたが、Mt.レディが笑顔のままそれを止める、なおプレッシャーは無くなっていない:そこどころか少しづつ増している気がする……!

「貴様にそれを決める筋合いはないだろう……?」

サーナイトアイが横から入ってきてMt.レディに苦言を呈する。

「筋合いも何もないでしょ!こんな年頃の女の子が男たちとおんなじ部屋で暮らすって……なにかあったらどうするんですか!」

「こいつらは遊びに来てるわけではない、それにそんなことを犯すような奴はヒーロー失格だ。それくらい弁えるだろう……!」

「そういう問題じゃないでしょ!常識的に考えてダメです!!私はヒーローとして、女としてこんなことは認められませんっ!!」

優さんは笑顔から一転してすごい剣幕でサーナイトアイを捲し立てる。なんて常識的な正論なんだ……!僕も変にオールマイトたちに慣れすぎてたんだ、確かにねじれちゃんと同じ部屋で共同生活ってまずいだろ……

「ならどうするつもりだ?我々はそんなことしたくはないが……波動だけ追い出すか?」

「ええ……私だけ仲間はずれ?……むう……嫌!」

「——ッ！なら最低限寝ることかだけでも別にしないと!!」

「そのために部屋を借りろと?その用意を貴様がしてくれるのか?」

「——じゃあ、この娘は私の部屋で寝泊まりしてもらいます!それでいいでしょ!」

言い合う二人だが、最終的に優さんはサーナイトアイに自分の部屋にねじれちゃんを住まわせる提案をする。ねじれちゃんは「Mt. レディと一緒に寝るのかあ、楽しそう!」とか言ってるしオツケーみたいだが…

「ふむ……よし、いいだろう、オールマイトはどう思いますか?」

「ああ、いいんじゃないか?女性の問題は私たちも配慮が足りてなかったようだし、まあ恋に落ちるくらい別にいいと思ってたんだがね!」

「わかりました。それにしても女性の問題か……ふむ……」

サーナイトアイはオールマイトに確認をとると考え込む。ていうか恋に落ちるのはいいのか……?オールマイトはそういうの疎いのかと思つてたよ。

「Mt. レディ、貴様には子供達の生活指導をしてもらおう、私もオールマイトも常にごこに來られるわけではないからな。貴様の言うところの問題、とやらが起こらないように監督してくれたまえ」

「はあ!?!そりゃこの娘——「ねじれちゃんです!」——ねじれちゃんを寝泊まりさせる責任は持ちますよ!でも、そこまで面倒と責任は持てませんから!」

——それに私だって仕事して稼がなきゃヤバいんですよ……ああ事務所があんなことにならないければ……」

サーナイトアイは僕らの生活の監視を優さんにやらせようとする、優さんは横からひよこつと出てきたねじれちゃんを撫でながら反論し、最終的にぶつぶつと呟いて落ち込んでしまった。

「ほう、稼ぐためか……確かに我々も大人だ、責任には金が付いて回る。なら——」

サーナイトアイは鞆からペンと小切手をとりだして、さらさらと書き込んでいく。よく見えないけどゼロがいっぱい並んでないか!? 大人ってそういうものか……?

「——ひとまず一ヶ月、この額でど——」

「やりますー!」

優さんはくいぎみに即答して、サーナイトアイが提示した小切手を奪い去った。いったいどれだけの額が書かれていたんだ……!?

——こうして僕と三人の先輩達、そしてその監督役の優さん、五人の共同生活が始まったのだった。

それからは僕らの部屋では、なにをやるにも賑やかで、騒がしくて、でも楽しかった。

——食事の時も。

「環の個性を最大限に使える食事ってなんだろうね！」

「得意なのはタコだ……」

「じゃあ海鮮料理だね！天喰くん、いっぱい食べよう！」

「天喰先輩！絶対蟹ですよ！硬い甲殻に、鋭く力強いハサミ、正に最強じゃないですか！！」

「蟹ー！Mt.レディー、蟹食べようよ蟹！」

「蟹なんて高いじゃない！カニかまにしときなさい、サラダに乗せといてあげるわっ！」

「カニかまは蟹じゃない……昔食べたら見たこともない魚が生えてきて……」

「あー、あれはビビったよね！見ちゃいけないものを見たぜ……！」

——買い物の時も。

「もうっ！好き勝手買い物のかごに商品入れるんじゃないわよ！ねじれちゃんはお菓子戻ってきて、せめてひとつにしときなさい。デクくんもミリオ君もササミばかり持つてこないで、もっというんな種類のお肉食べなさいよ……！」

「ササミは低脂質で高たんばくで筋肉にいいんですけどねえ…」

「はいい……Mt・レデイってなんだかお母さんみたい！」

「おかつ！——ガフツ!!……」

「優さーん!!!」

「Mt・レデイが死んじやった!」「このひとでなし!」

「俺がトイレに行ってる間になにが……?!」

——朝起きたときも。

「おはよー、三人とも起きてるー?私、今日早いからも行くわね——ってなんで裸なのよミリオ君!!」

「おはようございませす!——なんでって朝なので?……まさかいきなりドアが開くとは思わなかったよね!」

「ミリオは昔から寝起きは全裸だ…」

「冷静に言っただけで早く服を着なさい!」

「どうしたんですか朝から——ってミリオ先輩また全裸でぶらついてたんですか…」

「おはようー!ねえねえ、早くご飯食べようよー!」

「ちよっ！ねじれちゃん来ちゃダメよ!!ミリオ君がまだ裸なの!」

「通形の裸?もう見慣れたよ!いっつも裸だし。それよりもご飯作る!」

「私がおかしいのかしら……」

勿論楽しく過ごしていただけではない、昼はそれぞれ学校や仕事に行き、夜には仮免取得のための対策などを練っていた。そしてオールマイトやサーナイトアイの都合のつく日は必ず戦闘訓練を行っていたのだ。

「――POWERRR!!」

「――なんのお!」

ミリオ先輩の奇襲に僕はきっちりとカウンターを入れる、しかし透過で透かされてしまふ。

「いまだ環!!」

「任せろミリオ!!」

その隙に天喰先輩が「個性」の蛸足で僕の全身を拘束する、流石全身筋肉の蛸足つ!
とんでもないパワーだ……!!

「ぐっ……フルカウル――」

「グリングウエイブねじれる波動!!」

蛸足を剥がそうとワン・フォー・オールの出力を上昇させようとした瞬間、上から見えない衝撃に押し潰される。ねじれちゃんの「個性」波動だ!!

「よし! いいね波動、環! そのまま拘束するよね!!」

「……んんっ! 負けるかあ!!——82%!! スマアアツシユツ!!」

ワン・フォー・オールを今使えるフルパワーで全身に纏う、そして突き上げるようにスマツシユを放ち、蛸足を引きちぎって波動を打ち消した。

「そこまで!」

訓練の中断を告げるオールマイトの声、僕は戦闘態勢を解いて環先輩へと駆け寄る。

「大丈夫ですか、環先輩!! すいません、やりすぎました!」

「いてて……大丈夫だデク、個性の足は千切れても痛いだけだから!」

僕は倒れた環先輩に手を貸して起こす、環先輩は僕を気遣ってか、少し苦笑いでそう言った。

「私の波動もぶっ飛ばされちゃったの! デクくんやりすぎ!」

「波動少女の言うとおり! なんでも強引に力だけでやればいいってもんじゃあないぞ、

緑谷少年!」

更にねじれちゃんと、オールマイトからも叱られてしまう、ホントすいません!」

「緑谷少年の課題は相手に応じて如何に力を調整できるかだ、もしこれが千切れると本

人にダメージがいくタイプのヴィランだとしたら確実にやりすぎだろうか？」

「はい……すいませんオールマイト……」

「素直でよろしい！ 因みに今みたいに全身を拘束されたときの抜け出し方はね、こう、自分の手足をプロペラだとおもって大きく振り回して——OKLAHOMA・SMASH!!——つとこんな感じで相手を自重で吹っ飛ばすように抜け出せば余分な力が要らなくなつて、致命傷も避けられるぞ！」

「はい！ ありがとうございます！」

オールマイトは僕に駄目なところを指摘しながら、改善法まで授けてくれる、流石は師匠つて感じだ！

「三人はいい連携だったぞ！ でも相手の力量が自分達より上の時は、攪乱↓消耗↓拘束の方がいいだろう。時には相手を弱らせることも重要だ、誰でも一撃で倒せるわけではないからね!!」

「二「はい、オールマイト!」」

「よし! いい返事だ!! じゃあ今度は組み合わせを変えて通形少年を捕らえてみようか!

——」

「ええ……無理なんじゃ——」

「なんでもトライするべきさ! ——」

こうして仮免試験までの時間はあつという間に過ぎ去っていく、他にも語りきれないほどの出来事があつたけど、全部話すと長くなるから割愛する。

——そうして試験前日の夜を迎えた。

「いよいよ明日か……」

僕はリビングで座布団に座りながら、明日のことを考えていた。準備や出来る限りのことはしてきたし、あとはもう寝て待つくらいしかないかな……

「デクくん、いよいよ明日は——ってあれ、ねじれちゃん寝ちやつたの?」
「優さん。ええ、ちよつと前までテレビ見てたんですけど……」

そこに優さんがビール片手に入ってきた、そして優さんの言った通りねじれちゃんはカーペットの上で寝ていた——僕の太ももを枕がわりにして。

この一ヶ月でねじれちゃんの距離感にもかなり慣れた。始めは戸惑うことも多かったが、冷静に考えたら僕は精神年齢26才でねじれちゃんよりかなり年上ということになる。

そのことに気がついてからはその子供っぽい性格も相まって、ねじれちゃんのことを妹のように思えてきていた。だからこんな風に甘えてくることにも動揺することが無くなったのさ!

フフフーもう女性にどぎまぎすることも無くなるんじゃないか、これは？

「まあ今日の訓練張り切ってましたからね、僕との最後の訓練だから超本気出すー！とか言ってる……最後の最後で負けちゃいましたよ！」

「そうだったのね——よいしょっ！……頑張りすぎね、送り出すのに打ち負かしてどうするのよ、この娘は……」

優さんは僕のすぐ隣に座り、言葉とは裏腹に優しそうな表情でねじれちゃんの頭を撫でる——前言撤回……！めっちゃドキドキする!!

お風呂上がりで頬はほんのり赤くて、髪からは良い香りが漂って鼻を撥くすぐる。いつもはキリツとした目付きも今は優しいものになっていてそのギャップがまた……なんかいい！

一ヶ月経つても全く慣れないな……優さんだつて精神年齢的には年下のはずなんだけど、明らかに大人の女性だからか!?だからドキドキするんだろうか……？まあ言うほど僕も大人じゃないのはわかってるんだけど——

「何、デクくん？お風呂上がりでスツピンだからそんなに見られると恥ずかしいんだけど……」

「あーその……いやなんでもないです……すいません」

優さんが頬を赤くしながら恥じらう、僕はどぎまぎしてまったく返せなかつ

た。そんなにガン見してたのか……うわっ顔が熱い！——たぶん今、僕の顔は真っ赤だろう。

「そういえばデクくん、ヒーロー名つてなににするか決まってるの？聞いたことないんだけど」

「えつと、そのまま『デク』でいこうかなあと思ってますよ」

「えっ!?なにそれダツサ!!」

「ひっ、ひどい……」

優さんにヒーロー名伝えると、バツサリと切られてしまった。ダサイかなあ……やっぱり……

「ゴメンネ！いやあだ名としては悪くないんだけど……こう、オールマイトの弟子としてはちよつと箔がないっていうか、ぶつちやけシヨボいわ!」

「ぶつちやけましたね……じゃあどんなのがいいですかね?」

「うーん、そうね……私が考えといてあげる!」

優さんはぶつちやけた後に僕の疑問に答えるために考えるが、すぐにやめてしまった。そんなにダメかなあデクつて名前、オールマイトには見劣りするのはわかってるんだけど、他の名前なんて思い付かない……

「デク!いよいよ明日だよね——ってみんないるね!」

「波動さんはまたデクの膝で寝てるのか…」

風呂上がりのミリオ先輩と部屋から出てきた環先輩がそれぞれ飲み物を持ちながらリビングに入ってくる。

「こんなところで寝たら冷えるだろうに……」

「起こすか？それとも毛布でも持つてくるかい？」

「いやいい、さつき唐揚げ食べたから……ふっ！——つとこれでいいと思う」

環先輩はねじれちゃんに苦言を呈すも、ミリオ先輩の提案を断つて自らの背中から鶏の翼を出してねじれちゃんの身体を包む。何だかんだでねじれちゃんに一番甘いのは環先輩だろう、ねじれちゃんもそれをわかつて環先輩にお願いするのをよく見かけた。

「環君はねじれちゃんに甘いわね、その調子じゃ確実に将来尻に敷かれるわよ」

「いや……尻に敷かれるとかそういう関係じゃ……」

僕が思つてたことをズバツと環先輩に言う優さん、そして追い討ちの一言に環先輩は顔を真っ赤にして俯いてしまった。

「ハハハ！それはそれとして、デク！いよいよ明日だよね！」

「ええ、明日の試験で仮免取つて……そしたらこの共同生活も終わりですね」

「そうだよね……いつの間にか五人で暮らすのが当たり前になつた。明日で終わりなん

だ…」

ミリオ先輩が助け船として話題を変えるが、二人してこの生活の終わりを感じてなんだかしんみりしてしまう。

「なーに暗い顔してんのよ！そのために今日まで頑張ってきたんでしょ？だったら笑顔で終わりなさいな！」

「優さん…！」

優さんが沈みがちだった空気を払拭するするよに笑顔で僕らに話しかける。そうだよな、そのための共同生活だったな！

「じゃあデクくんが合格してきたらお祝いとして、明日の晩は蟹にしましょう!!」

「——！蟹——!!」

蟹という単語に反応したのか、寝ていたねじれちゃんがかツと目を見開いて起きる。食べたかったんだな、蟹。

「蟹かあ！いいね！」

「デク、絶対合格してくるんだ……蟹が待っている……！」

「かーに！かーに！」

「僕の合格より蟹がメインになってません!？」

「蟹だもの、しょうがないわ……！私も食べたいし!!」

——こうして前日の夜は蟹ムード一色で終わった、まあ変にしんみりしてるより僕達らしいかな！

——そして試験当日、僕は四人に見送られて、ひとり会場へと電車で向かう。会場に着いて説明も坦々と進み、ついに一次試験の開始の時間だ。

一次試験はボール当て。手持ちの6つのボールを使って相手の身体にある3つのターゲットに当てて、一人脱落させれば合格の簡単な試験だった。まあ合格率五割の試験の一次試験なんてこんなもんだろう……来年は厳しくなつてたりしてそうだな、なんとなくそう思う。

僕は一人での参加だったので、集団に囲まれてしまったが、一斉に投げられたボールをスマッシュの暴風で跳ね返したら、見事に何人かのターゲットに当たって余裕の通過だった。

二次試験は救助演習。ヴィランによって引き起こされた大規模災害で要救助者が大量に出てしまい、仮免保有者としてどのように対処するかというものだ。

僕はそこで全力を出して、オールマイトの弟子としての真価を發揮する——

「見えるか!!？」

「もう100人は救い出してる!!やべえって!!まだ10分も経ってね——って!!やべえって!!」

「H A H A H A H A !!!」

「めっちゃ笑ってんよ!!」

「もう大丈夫!何故って?——僕が来た!!」

——僕はその試験でオールマイトのヒーローデビューの再来を果たし、要救助者を救いまくって、見事に仮免試験に合格した。

後で聞いた話によると、その時の二次試験の八割の受験者が補講送りになるという、前代未聞の試験となり僕の所業は伝説に成ったらしい……なんかごめんなさい…

出来たてホヤホヤの仮免を貰って、僕は帰り道や電車の中で何度もそれを見返す。こ

うした正式な免許を貰うのは初めてだったし、なにより憧れのヒーローの仮免だ！嬉しくないはずがない！！

おかげで最寄り駅に着くまで合格の連絡をするのを忘れてしまったが……

電車から降りると早速僕は歩きながら優さんに合格報告の連絡をする。

「もしもし、デクくん？どうだった？」

「優さん！合格して来ましたよ！！みんなのお陰ですよ、ホント！！」

「良かったじゃない！おめでどう、デクくん！」

僕が興奮ぎみに合格を伝えると、優さんは嬉しそうな声で僕を祝ってくれる。

「まあそうだと思って、実はもう買い物に来てるのよね！」

「まさか……」

「ええ、そのまさかよ——蟹を買いに来ています！！」

「ひやつほー！行動が早いですね、優さん！！」

優さんの蟹買います宣言におもわずテンションが上がる僕、蟹の魔力は美味し……恐ろしい！！

「じゃあ僕も合流しますよ、いま駅なんで！いつものスーパーですか？」

「いえ、今日は奮発して商店街の鮮魚店に行くわ！」

「品は良いけど高いからって滅多に行かなかったあの商店街ですね、わかりました！す

ぐに行きます!!」

優さんはスーパーの安物ではなく商店街の高級食材の蟹を調達するつもりらしい：
！節約家の優さんがそこまでやるとは…本気の手料理が炸裂する気がする！

「待ってるわ、じゃあ——きや——誰か助けてえ！　　ヴィランだ、逃げろ！」

「悲鳴?!どうしたんですか優さん！」

「ヴィランが出たみたいね！私は行くわ!!デクくんまた後で!!」

優さんがそれだけ告げると通話が切れた。

くっそ！ヴィランだ?!このヒーローズマンシヨントウンで?よっぽど腕に自信がある強力なヴィランなのだろう…!!ってことは——優さんが危ないっ！

——そう思ったときには僕は考えるよりも先に身体が動いていた。

——僕は商店街に向かって全力疾走で駆けていく、ヴィランからみんなを…そして優さんを救^{たす}けるために!!

『大丈夫』

先輩達三人とその監督役としてMt.レデイも参加して、僕らは五人で共同生活を送ることになる、騒がしくも楽しい日常と厳しい訓練の繰り返しで、あつという間に一ヶ月は過ぎていった。

オールマイトの再来ともいえる形で仮免試験に合格した僕は、電話でそれを優さんに報告する、その最中彼女にヴィランの魔の手が迫った。

急げ、みんなと優さんを救けるんだ!!

—— Mt.レデイ side in ——

—— デクから電話が来る数十分前。

「来ないわね…デクくんからの連絡…」

私はスマホを弄りながらデクくんからの合格の連絡を待っていた。もうとつくに試験は終わっててもおかしくない時間なのにまだ連絡はない、なにやってるのかしら？

「まさか落ちたってこともないでしょうし…」

私も受けた仮免試験だ、かなり楽勝な試験だったと思うのだけど…それにあのデクくんが本気で挑んだのだから落ちるはずがないわ!

「よし、ちよつと気が早いけど、買い物にいこつと!」

私は財布と買い物バッグだけを持って部屋を出る、目指すは商店街の鮮魚店、目的は勿論…蟹だ。

普段だったら行かないであろう鮮魚店、確かに品質はいい、しかしその品質と割りに合わないくらい高いのだ、コスパを求めるなら大型スーパーに行くほうが間違いない…でも今日はお祝い!奮発しましょう!!

十数分程歩くと目的の商店街のアーケードが見えてきた、少し古くさいが味のある屋根付の商店街、なんでもこのヒーローズマンションタウンができる前からこの街にあって、長年民間人の生活を支えていたそうだ。

私とそのアーケードを潜^{くぐ}ったあたりでスマホに着信が入る。

「もしもし、デクくん?どうだった?」

電話はデクくんからだった、無事試験には合格して今からこつちに向かうらしい。デクくんと二人で買い物かあ…あんまりない機会だしちよつと楽しんでしまおうかしら?

「待ってるわ、じゃあ——」

「きゃー！誰か助けてえー！」

「ヴィランだ、逃げろ！」

電話切ろうとしたその瞬間、商店街の奥の方から悲鳴が聞こえてきた。ヴィラン!? タイミングの悪い…こちとらオフだったのに…!でも民間人が危ないわ、いかなきゃ!!

「悲鳴!? どうしたんですか優さん！」

「ヴィランが出たみたいね!私に行くわ!!デクくんまた後で!!」

私は電話を切って現場へと走り出す、すぐに他のヒーローが来るだろうが、それまで時間を稼がなきゃ!

現場に着くとそこには怯え惑う民間人と、その中心に一人の男がいた。

このヒーローズマンションタウンで事件を起こす癖に単独犯!?正気じゃないか、はたまたそれだけ強力な個性持ちなのか…?どちらにせよ油断はできない…!

「んー?気分はどうだ?フヒヒ、苦しいか。ならもつと苦しめよ…」

男はこちらに背を向けながらなにやらぶつぶつと独り言を呟いている、不気味だわ…!それにこれだけ民間人が怯えてるのに辺りには破壊の痕が少しもない…これはいったいなに…?…?

「みんな逃げて!すぐにヒーローが来るわ!!走って、早く!!」

私は大声で民間人達に逃げるように指示する、破壊の痕がないからといって、ここには危険なのは間違いない。

「まあたヒーローが来たのか？——つて只の女じゃないか！」

「残念ながらオフのヒーローよ！この街で暴れようなんて大した度胸ね！でもヒーロー達が好き勝手はさせないんだから!!」

男がこちらを振り返り私を嘲笑う、私はそんな男に啖呵を切る。

男の身体は大きく二メートルくらいはあるだろうか？その足元にはまるでヒーロースーツのようなド派手な衣類が落ちていて、その手には人形らしきものを握りしめている。

大したことなさそうなヴィランだけど、ここは狭いアーケード街：周りにまだ民間人もいる……それにスーツも着てきていない……巨大化はできないわね……それでも応援のヒーローが来るまで一人で持ちこたえて見せる!!

「おい、ヒーローが来たぞ？お前も助けてもらえるかもなあ……！フヒヒ！」

ヴィランは人形に向かって話しかける、その巨体と相まってとても不気味で気持ち悪い!!…なんなのこいつ……!

「貴方わかつてるの？ここには多くのヒーローがいるわ！直ぐに——」

「ヒーローが何人こようと関係ねえんだよ!!オラア!!」

ヴィランは私の話を遮って痲癩を起こしながら、人形を壁に投げつけた。話しかけるほど大事にしてたんじゃないの!? ホントなんなのよ!!

だが、叩きつけられた人形が地面に落ちる瞬間に人ぐらいの大きさに巨大化し、そして地面に横たわる。

「——えっ?!?!」

私は目の前の光景に目を疑った。人形じゃない?!?もしかしてあれは——

「フヒヒ!!俺の縮小の個性にかかればヒーローなんざいくら来ても一捻りだ!!そいつと同じように虫ケラみたいに蹴散らせるんだよ!!」

ヴィランは得意気に叫びこちらを睨み付ける。

縮小の個性:!?巨大化の個性を持つ私だからこそよく分かる:身体大きさの違いは圧倒的な戦力差になることを:!!それならひとりでこの街に乗り込んできたのも領けてしまうわね:~

「一撃で決めてあげるっ!!」

私は駆け出して、滑り込みながらキックを放つ。多少周りに被害が出て、個性を使われる前に仕留めなければ応援に来るヒーロー達が全滅してしまう!!

「もらっ——?!?」

巨大化して相手を蹴散らすはずが、私の身体は大きくならず、私のキックはヴィラン

の足にペチリとあたり、なんのダメージにもならない。

まさかこいつ…見るだけで発動する個性なの!? やられたっ…!!

「なんでちいさくならねえんだ!? —— お前…まさか巨大化の…Mt. レディか!!」

たった一度の攻撃で私の正体が暴かれてしまう、なんて察しのいいやつなの!? ——

いや、もしかしたらヒーローを倒すために念入りに計画を立てたヴィランなのかも…!

「トップヒーロー以外で一番警戒してたヤツが真っ先に来るとは…でもてめえをぶつ潰

せばあとは有象無象のゴミヒーローしかこの街にはいねえ!!」

「誰がアンタなんか潰されるかっ!!」

「っ!!…軽いなあ…まあ巨大化しないでめえなんて怖かねえな!!」

私は素早く起き上がってハイキックを側頭部に叩き込もうとするが、ヴィランの太腕に阻まれてしまう。そして足を捕まれて投げ飛ばされた。

地面を数回跳ねながら転がり、身体の至るところをぶつけてしまう。単純に体格差で負ける…!こんなことなら真面目に格闘術でも学んでおけばよかつたわ…

「てめえに勝ち目はねえ…!とつと潰れちまいなっ!!」

ヴィランがこちらに走りだして、体勢を崩したままの私に蹴りをくらわす、私は咄嗟に両腕でガードするも、そのガードごと吹き飛ばされる。

痛っ!!…左腕…折れたかも…

「くっは……！」

壁に激突し、背中から走る衝撃に肺の中の空気が一気に吐き出され、呼吸もままならない。

ダメよ、気を抜いたら巨大化が解けて一撃でやられてしまう……！でも身体が……動かない……

「さて、厄介なのは片付いた！次のヒーローが来るまで……一般人でも潰して遊んでるかあ、フヒヒ！」

ヴィランが笑いながら醜悪な遊びが始めようとしている。

誰かが止めなきや……誰が？——

「……ヒーロー」だ……ヒーローが奴を止めなくちゃいけない。じゃあヒーローは——

『Mt. レディ。貴女は立派なヒーローです、胸を張って名乗ってもいいと思いますよ』

——私だ。デクくん^{たす}に教えてもらった、私がヒーローだって！ならここで戦わなきや……みんなを助けなきや……私はデクくん^{たす}に胸を張ってヒーローだって言えなく

なってしまう!!

「——どこへいくのかしら……?」

「てめえ! まあだ動けたのか!」

私はゆらりと立ち上がり、それを見てヴィランが驚く。

「私はM t. レディ! 巨大化出来なくなつて……ヒーローよ!!」

何してるの貴方達! 早く逃げなさいっ!! ——あのヴィランは私が止めるわ……!」

私はヴィランと民間人の間に立ちはだかり、彼らに向かって叫ぶ。貴方達が逃げるまで、必ず持ちこたえて見せるわ……!」

「お、おい! 逃げるぞ!!」 「ありがとう、M t. レディ!」 「頑張ってくれえ!!」

怯えていた民間人はなんとか自分の足で立ち上がってくれた、そして私にエールを送りながら走り出す。

「ああっ?! 逃がすか——ぐへあ?!」

民間人を追っかけようとしたヴィランに私はタックルをしてその体勢を崩す。

「邪魔すんじゃねえよっ!」

ヴィランは直ぐに体勢を立て直して、私の頭を鷲掴みにして地面へと叩きつける。その衝撃で額が割れて血が流れ出す、意識が飛びそうになるが、なんとか堪える。

まだ……まだ倒れるわけには……いかない!!

「つたくしつけえやつだな……まだ立ち上がんのか!」

「みんなのそこには行かせないわよ……!」

私は再び立ち上がり、ヴィランが呆れたように吐き捨てる。額からは血が流れ左目の視界が潰れて、痛む左腕は上がらない、それでも私は立ち上がる……少しでもみんなの逃げる時間を稼ぐため……救うために……

「あーあ、パンピーどもみーんな逃げちまったよ。どうすんだよてめえ?」

「あら……それは残念、私の勝ちみたいね?——ざまあないわ!!」

「……………ぶっ殺す!!」

どうやら民間人はみんな逃げ出せたらしい、私は勝ち誇るように笑ってやる。ヴィランは怒り狂って、その太く贅肉だらけの腕を大きく引いた。

ふふ、最後の最後に言っただけ……でもあれ食らったらもう立てないかも、そして個性が解けて……考えるのは止めよう。

——デクくん……私、〃ヒーロー〃出来てたかな?褒めてくれたら、嬉しいな……

そしてヴィランの腕が私に振り下ろされ——

——ることはなかった。私は殴られる衝撃ではなく、暖かな太く逞しい腕に優しく包み込まれる。

「——やめろおおおお!!」

そう叫びながら、とてつもない勢いで割って入ってきた影がヴィランを足で蹴り飛ばして、腕で私を抱きしめる。

「もう大丈夫!!僕が来たよ!優さんっ!!」

その影:いやその人はデクくんだった、そしてデクくんは力強い優しい声で私に話しかけてくる。

「大丈夫」……その言葉に胸の奥が安心したように暖かくなり、途切れかけた意識がハッキリとしてくる、そして力尽きそうだった身体に再び力が籠ってきた。

「優さん、立てる?——大丈夫、あいつは僕が倒すから:~!」

「ええ:~なんとか立てるわ。気をつけてデクくんあいつは——」

「うおおおっ!!痛え!痛てえよおおお!!許さねえぞてんめえ!!」

デクくんが私を気遣ってくれる、しかしその目には正義の信念が燃えている。私はひとり立ってデクくんに忠告しようとしたとき、ヴィランが大声で喚き始めた。

大きな身体して行くせにあの程度で喚くんじやないわよ……!

「見たぞ……見たぞてめえ!!」

「ダメ!デクく——」

デクくんの姿がヴィランに捉えられてしまった、このままでは奴の個性で小さくされてしまう……!私はデクくんの名前を叫ぶが——

「テキサス・スマッシュ!!!」

「——んっ!!——えっ……?」

——私が叫び終えるより先にデクくんはヴィランを殴り付けて地面に沈めており、殴られたヴィランは地面に横たわりながらびくびくと痙攣していた。

速すぎてなにも見えなかった……!デクくんってこんなに強かったの!!?——まるでオールマイト……いや、デクくんは弟子だったわね……!

「終わりましたよ、優さん——つと、大丈夫ですか?」

デクくんが笑顔で振り返り私の名前を呼ぶ、私はその光景に安心して足に力が入らなくなるが、デクくんが私の身体を抱き止めて支えてくれた。

デクくんの腕の中、凄く安心する……!デクくんはまるでヒーローみたいだ。いやもうヒーローなのだろう……!「ヒーロー」……?

デクくんの腕の中、急に頭の中で言葉がぐるぐると回る。

「ヒーロー」、オールマイトの弟子、デクくん、大丈夫」

——閃いた……これだわ!!

「ねえ、デクくん？」

「なんです？ 優さん」

「急なんだけど、貴方のヒーロー名を思い付いたの……」

「それはまた……急ですね！」

私の言葉にデクくんは苦笑いをする、自分でも急だとは思う、でも閃いてしまったのだから仕方がないわ。

「デクくんの口癖……大丈夫って意味の——

ALLRIGHT
「オールライト」——ってどうかしら？」

「オール……ライト……？」

「オールマイトの弟子でとても強くて、とても優しい、そんな貴方にぴったりだと思うの。その名前……私のヒーローに成ってくれないかな……？」

「優さん……」

私はデクくんに名前を提案してみる、デクくんはそれを聞いて少し考える。最後は泣き落としみたいになっちゃったけど……

「……いい名前ですね、名乗らせて貰います！——そういえば約束しましたよね、僕が貴

方のヒーローに成るって。

僕は貴方のヒーロー、オールライトです!……なんて言ってみたり……」

デクくんは名乗りをあげた後に少しおどけながら笑う。

「ふふ、やつぱり合つてると思うわ、その名前——救けてありがとう、私のヒーロー、オールライト……」

つられて私も笑ってしまった、デクくんはその笑顔で人々を安心させるヒーローにきつとなるだろう。ううん、今日この日から——

——デクくんは私のヒーロー、〃オールライト〃に成つたのだ。

—— Mt. レディ side out ——

「——つとまあ、そんなこんなで僕のヒーロー名はオールライトになったんだよ!」

僕はそう言って話を締めくくる。

時は放課後、かつちゃんのヒーロー名の再考案のために僕とかつちゃんと麗日さんは

教室に残って話をしていた。飯田君と轟君も残ろうとしてただけど、二人とも家族の関係のことがあるからと先に帰っていった。

その時にかつちゃんから僕のヒーロー名がどうやって決まったかを聞かれたので、暫く僕のヒーロー名誕生の話を語っていたわけだ。

「それでその後はどうなったの!?!」

「その後? ああ、そのあと皆で蟹を食べたんだよね、いやあ美味しかったなあ…あの蟹!」

「蟹はどうでもいいんだよ! 事件の顛末を聞いてんだつつの!」

「ああ、そっちなか…!」

続きを聞いたがる麗日さんに蟹を食べたことを伝えると、かつちゃんがそれを否定してきた。蟹の件じゃなかったか…!」

「そのあとヴィランを拘束してすぐに警察に引き渡したんだよ、Mt.レデイのおかげで民間人への被害はゼロ、怪我をしたのはプロヒーロー2名だけだったよ。それで助けられた民間人の中にたまたま治療系の個性持ちがいてね、プロヒーロー二人も治療うけて…結果的に怪我人ゼロ。そのおかげで全然大した事件にはならなかったんだよね!」

「だから蟹はもういいって!!」

「そう……」

やっぱりかっちゃん蟹の話を中断してくる、もう言うの止めとこう……それにしてもかなり強力な個性のヴィランの事件にしては小規模だったな、全てはヒーロー達のおかけだ。僕はたまたま駆けつけて、ヴィランをぶん殴っただけだし……

「それがデクさんのヒーロー名のきつかけかあ……M t. レデイにつけてもらっただ……？ すっごい急に言われてそのまま名乗っちゃうんだ……？」

「う、うん。僕じゃ “デク” 以外思い付かなかったし……確かに急だったけど、たぶんその時M t. レデイは頭を強く打ってみたいで混乱気味だったんだよ——でもまあ、それでもいい名前だと思っただからね！」

麗日さんがジトーとした目線を送ってくるが、僕は説明しながら胸を張って答えた。なんで睨まれるんだろう……？

あの時の優さんは混乱していたのは間違いないだろうな、頭からかなり血も流してたし……だから事件が解決した後抱きついてきたり、やたらと手を繋ぐことを強要してきたりしたのだろう。

ふむ、もしかしたらねじれちゃんに限らず、女の子ってのは甘えたがりな生き物なのかも知れないな……やっぱ女の子ってわからない……！

「にしてもデク、“オールライト” なんて大きく出たな！」

「そうかな？ オールマイトの弟子っぽいし、それにいつか越えるってことを目標にしてるなら大きく出たって程じゃなくない？」

「いやいや、^{All-Right} 全ての正義^{Right}、なんて普通恐れ多くて名乗れねえぞ！ 流石デクだな！！」

「えー？ 違うよ爆豪君、^{All-Right} 全ての光^{Right}、でしょ？」

「ちつ違うって二人とも！！ 大丈夫って意味のオールライトだよ！」

かつちゃんと麗日さんがオールライトの意味を曲解していたので、慌てて訂正する。いくらなんでも大きく出すぎだろそれ……！ これからは自分から意味を吹聴してかないと勘違いされるかも……

「そ、そんなことより！ かつちゃん、何かヒーロー名思い付いた？」

「そうだな、いつこ思い付いたぜ——爆殺帝！」

「爆殺から離れようか！！ 完全にヴィランのそれだよ……」

爆殺から一向に進まないかつちゃんに突っ込みを入れる。もはや逆に拘ってるのかもしれないな……ってダメだろ！

「じゃあ将来成りたいヒーロー像からイメージしてみるのはどうかな？ 例えば僕だったらオールマイトみたいなヒーローに成りたい！ って感じだよ」

「んー、それならお前の相棒^{サイドキック}だな！ 俺の将来と言えばそれしかねえ！！」

「あ、ありがとう……！」

僕の提案に恥ずかしげもなくそう答えるかっちゃん、こっちが恥ずかしくなってしまうじゃないか！まあ嬉しいけどさ。

「なら爆豪君は憧れのヒーローとかいないの？デクさんで言うところのオールマイトみたいなー！」

「ああ？……強いて言うなら俺もオールマイトだ。ガキの頃からデクがずーつと見せてきたからな、嫌でも好きになるわ」

「なんか……ごめん？でいいのかな？無理強いてたつもりはなかったんだけど……」
「嫌いじゃねえつつつてんだろ？気にすんなよデク」

麗日さんの質問にオールマイトと答えたかっちゃん、確かに家に遊びにきてた時はずっとオールマイトの映像みてたんもんなあ……気がつかないうちに洗脳してたのか……？いやいや、オールマイトには誰だつて憧れるだろ！

「ならよ、デクがつけてくれよ、俺のヒーロー名を！」

「ええっ!?僕がかっちゃんの……？いいのそれで……？？」

「お前だつて他人ひとにつけてもらつてんじやねえか、んでなんかねえか？」

かっちゃんは今ワクワクしながら僕に尋ねる、僕は自分のヒーロー名すら思い付かなかったんだけどなあ……

うーん、かっちゃんといえ……爆破、爆発、悪人面、めんどくさいツンデレ、丸く

なったとはいえず怒る……まるで爆弾みたいな人間だ……爆弾？——閃いた!!

「ボンバー○ンなんてどうかかな！」

「バーイ、ハドソンっ!!」「あいた!？」

僕は閃いた名前をかつちゃんに提案したら、なぜか肩をどつかれてしまった。

「デク……それはダメだろ……！なんか常に裏声で喋らなきゃいけない名前の気がする

……悪いが却下だ！」

「ダメかあ……うーん、どうしようか……」

僕らは二人してアカン予感のするその名前をやめておくことにした。どうしようかと悩んでいると、麗日さんがずいっとこちらに身を乗り出してくる。

「私、思い付いたよ！爆豪君のヒーロー名!!」

「却下だ、丸顔」

「まだなんもいってないじゃん!!それに私は麗日！こないだみたいに名前前で呼んでよ!!」

麗日さんがなにか思い付いたようだが、かつちゃんは即座に拒否する、そしていつもの言い合いが始まってしまった！どんな名前か気になる！僕よりは遥かにいいネーミングに違いないしな。

「まあまあかつちゃん、そう言わずに聞いてみようよ！で、麗日さんが思い付いた名前つ

て?」

「ありがとうデクさん!爆豪君の爆破とオールマイトからもじつて——ダイナマイト」なんてどうかな!」

「ふーん……」

麗日さんの提案した名前にかっちゃんの表情が変わる。あの顔は……いい名前だっと思ってたけど、さつき即答で否定してしまったもんだから素直にいいと言えないからどうするべきか……とか考えてる顔だ。

もう何回も気まずい雰囲気を作り出してはなんやかんやで解消する…みたいなことを繰り返してきた幼なじみの僕にはわかる。

「オールマイトっぽさとかっちゃんらしさが合わさっていて、なおかつすぐにどんなヒーローか分かりやすく、さらに覚えやすい。凄くいい名前だと思うよ!」

「デクがそれでいいなら、その名前でもいいぜ……!」

「判断基準デクさんなんだ……」

僕がフオローするとかっちゃんは直ぐ様乗ってきた、それを見て麗日さんが少しだけ呆れている。

大丈夫、麗日さん。かっちゃんはちよつと素直じゃないだけでいいと思ってるから認めたんだよ。まあこれいうと「そんなことねえわ!別の名前にしろお!」とか騒ぎだす

だろうから言わないけど！

「きつとその名前ならミッドナイトもオーケーしてくれると思うよ！決まってよかったね、かつちゃん！」

「おう、これならあのババアも納得するな！——それと一応礼を言う……麗日……」

「ふふーん、どういたしまして！」
こうしてかつちゃんのヒーロー名も無事に決まった。まったくかつちゃんは丸くなつたな……！

「つーことでだ、これからはオールライトの相棒、ダイナマイトとしてやってく——よろしくな、オールライト！」

「うん！よろしくね、ダイナマイト！」

——僕とかつちゃんはそう言つて拳を合わせた。

「じゃあ私もデクさんの相棒、ウラビティだよ！」

「はあ？デクの相棒は俺ひとりで十分なんだよ、丸顔オ！」

「なんでよ！こないだは認めてくれたじゃん!!——」

「それはしたつばとしてだ!!——」

「ひどーい!! ねえ酷いよねデクさん! 私も相棒でいいよね!?——」

「勿論さ! 麗日さんには助けられてばかりだし、これからもよろしくね!——」

「おい、デクウ! 勝手に決めんなよ——」

——これから先の未来、僕らはオールライト、ダイナマイト、ウラビティとして、共に平和を守るヒーローとして活動する……そんな楽しい未来がその時の僕には見えていたのだった。

第六章

僕の名は。 | my name. |

第七章 ヒーロー×ヴィラン×ヒーロー殺し 保須SO

S

おじいちゃんの家は独特の匂いがする

Mt. レディこと岳山優さんにつけてもらった僕の新しいヒーロー名は大丈夫って意味の「オールライト」だ、それとなかなか決まらなかったかつちゃんのヒーロー名も「ダイナマイト」で決まった。

近い将来……僕、かつちゃん、麗日さんの三人でヒーロー活動していけたらいいな！

黒かびとヒビの入り乱れた外壁の古びたビル……入口に立つ僕はその独特な雰囲気
に呑まれ息を飲む。

「すいません、雄英高校から来た緑谷ですけど。いらっしやいますか？」

意を決してドアをノックしてみる、ドアは軋みながらガタガタと音を立てるが、返事はなく中から人の気配はしない……

「出掛けてるのかな…？」

独り言を呟きながら何の気なしにドアノブに手をかけると、ドアは床と擦れながらギギと鈍く音を上げて少しだけ開いた。鍵がかかっていない…？

そしてその隙間から僕の目に飛び込んできたのは、床に伝う“赤”……

僕は驚いて勢いよくドアを開ける、古ぼけたドアからは割れたような音が聞こえてくるが、目の前の光景に比べれば大したことではなかった。

僕の眼前に広がる床一面の“赤”……その中心には、ひとりの老人が倒れ伏していた……

なぜこんなことになってしまったのだろう……この発端はおよそ1週間前に遡る

——
かつちゃんのヒーローネームを決めた翌日、相澤先生の発表によって僕らのクラスはざわめいていた。

「ようやくプロからのドラフト指名の集計が終わった、指名の有無に関わらず職場体験にはいつてもらうから渡した資料確認しとけとよ。それで結果はこんな感じだ」

相澤先生は黒板に写し出された映像を指差しながら、みんなへ説明と忠告を行う。それで集計結果は……

爆豪	3, 840
轟	3, 840
常闇	360
飯田	301
上鳴	272
八百万	108
切島	68
麗日	40
障子	29
峰田	18
瀬呂	14
緑谷	2

「だー、白黒ついたー!」

「ずば抜けてつけど爆豪と轟はここでも同着かよ、とことんだな!」

「てか緑谷すつくな! 2票つて!」

「当たり前だろ? オールマイトの公式の弟子、緑谷にオファーだすつてことは、自分の事務所はオールマイトのどこより有意義ですよつていつてるようなもんだぜ?」

「そんな恐れ知らずいんのかよ……二人も……」

クラスメイトはそれぞれ言いたいことを言つていく、大方その通りなので反論とかはないけどさ。

この2票、おそらく一人はM t. レディだろう、そしてもう一人はあの人だな。優さんには悪いがその人のとこにいかせてもらう、でもまだこつちじゃ会つてないんだよね……どうなるだろうか……?

「——じゃあ今週末までに決めて出せよ、以上」

そうこう考えている間に相澤先生の話は終わったように退室を始めていた、クラスメイトがどこの事務所に行くか悩みながら騒いでいる中、僕は手渡された資料をみて自分の予想が間違つてないことを確認していた。

やつぱり優さんとあの人だったか……よし、さつさと書いてオールマイトと話し合わないとな!

「デクさん！もう決めたの!？」

「やあ麗日さん、まあ二件だけだし……行きたいところから指名が来てたからね」

「それってMt. レデイのところ……？」

麗日さんが僕に話しかけてくる、質問に僕が返すと麗日さんはジトーつとした目線でさらに質問を投げってくる、なんで睨まれてんだろ……？

「いや、違うよ、もうひとつの方。えーと……オールマイト関係って感じかな!？」

「そっかそっかー! そうなんだ! まあデクさんはオールマイトのお弟子さんだもんね! そっかー!」

僕の答えになぜか表情をコロツと変えて満面の笑みになる麗日さん、いったいなんだったんだよさっきのは!?!……女の子って難しいなあ……

「ところで麗日さんはどこにする予定なの?」

「私はバトルヒーロー『ガンヘッド』のどこ! 指名来てた!」

「武闘派の門を叩くんだね! 僕に手伝えることがあつたらいつてね、力になるよ!」

「ありがとう! 見聞を広げようと思つてね、それに強くなりたいとつてこないだの試合で思い知つたから……だからやるんだ!」

「うんうん、いいね! その心がけは大切だよ、麗日さん! ——つとちよつとまつてね……」

麗日さんの職場体験先とその理由を聞いて、僕は早速少しでも力になるためスマホを弄る、麗日さんはその様子を不思議そうに眺めていた。

……今度僕の友達が職場体験に行くので、ご指導よろしくお願いします——つと、こんな感じでいいかな？

「——つと送信！」

「どうして急にスマホを？誰かに返信？」

「ああ、ガンヘッドにメッセ送ってたんだよ。麗日さんがお世話になるっていうからね——！」

「ええ!?デクさんガンヘッドとも知り合いなの!!？」

「う、うん。昔にちよつと会う機会があつて……そつからはトレーニング友達みたいな感じだよ」

僕がガンヘッドと知り合いだということに麗日さんが驚きながら一歩近寄ってくる……近い近い！髪の手香りが漂うくらいだ！一歩下がってくれ麗日さん!!

「よおデクウ！俺はNo. 4ヒーローのジーニストのところにいくぜ！相棒がいくからよろしくつて連絡しといてくれよな!!」

「かつちゃん!?……ジーニストは知り合いじゃないからちよつと厳しいね……」

「爆豪君！そういつた無茶ぶりはやめたまえよ!!」

「ああ？ んだ堅物メガネ！ デクならやりかねえだろうが！」

「む、確かに……!!」

かつちゃんか麗日さんを引き下げながら割って入ってきて僕に無茶ぶりする、飯田君はそれを止めに来たようだが逆に納得させられてふーむ…と唸っていた。納得しちゃうのかよ！ 僕だつてなんでもありの人間じゃないぞ…

「飯田君はどこにするか決めたの？」

「モチロン、兄のインゲニウム所属のチーム韋駄天さ！」

「だよね！……でもインゲニウムの体調は大丈夫なの？」

「直ぐに復帰できると言っていた！ それに優秀な相棒の先輩方もいる！ 学べることは多
いヤニ！」

飯田君はやはりインゲニウムの所に行くらしい、前世よりだいぶ軽い怪我らしいけど、流石にまだ動けないよな……

「んで、デクはどこいくんだよ？」

「ああ、僕はグラ——」

「私が小急ぎで来た！ やあ緑谷少年、ちよつといいかね!!？」

かつちゃんの質問に答えようとしたときに、教室のドアが開いてオールマイトが独特な姿勢で現れた。

オールマイトも弟子を公言して以来、結構オープンな形で学校内でも話しかけてくれるようになったなあ。

「はい、僕も伺おうと思ってたんですよ。それじゃみんなまた明日！じゃあね!!」

「おー、またなー緑谷ー!」

「いつてらっしやい！デクさん!」

「緑谷君、また明日だ!」

「明日ちゃんと教えろよ、デク！じゃあな!!」

みんなが挨拶を返してくれる、そして僕はオールマイトといつもの仮眠室へと向かった。しかし友達がいっぱいつてのはホントに賑やかでいいな！

「時間を取らせてすまないね、緑谷少年」

「いえ、こちらこそ職場体験の相談をしようと思っていたので、ありがたいですよ!」

「そうか…私もその話をしようと思っていたのだ…」

仮眠室に着くとオールマイトは鍵を閉めてトゥルーフォームへと戻る、そして冷や汗を流しながら会話を始めた、この時期のオールマイトの焦燥顔はホントにレアものだ! 「それで緑谷少年、Mt.レディと…あの方から指名が来てたよね?どつちに行くか決めたのかい?」

「あの方って……ものものしいですね。Mt.レディには悪いですけど、やらなきやいけないことがありますからね、だからグラン——」

「ああ、わかった！皆まで言うな！やはり行くんだな……先生のところへ……」
「そうですけど……」

オールマイトは僕の言葉を遮りいつそうダラダラと冷や汗を流す、何回みてもビビりすぎだろう……オールマイトエ……

「前世で会っているということだったね……君なら大丈夫だとは思うがくれぐれも失礼のないように……存分にしごかれてくるといい！」

「ええ、オールマイトの顔に泥を塗ることがないよう、全力で取り組んできますよ!!」

「いや全力はまずいよ！緑谷少年が全力を出すと何かしらぶっ壊れちゃうから……私が言えたことじゃあないんだが……」

「き、気を付けます……」

オールマイトが激励の後に忠告をしてくる、痛いところ突かれたなあ……確かに全力でやると体育祭みたいになっちゃうか？いや……職場体験はプロの現場だ、全力でやるに越したことはないだろう……それに奴と戦うには全力でやる以外ない……!!

「ホントくれぐれも、く・れ・ぐ・れ・も……よろしく頼むよ、緑谷少年!!」

オールマイトが武者震いをしながら肩を掴んで念を押してくる、よし……僕がオール

マイトを安心させてあげなきやな！弟子だもの!!

「任せてくださいオールマイト！貴方の最高の弟子として、僕もオールマイトも大丈夫ってことを伝えてきますよ!!」

僕はオールマイトに最高の笑顔でサムズアップで答えた。

——それからの日々はあつという間に過ぎて、職場体験の出発の日になった、僕らはコスチュームを手それぞれに体験先へと向かう、新幹線に揺られること45分……そこから少し移動したあと……目的地に着いて今に至るわけだ。

とりあえず僕は床一面の赤の中に倒れる老人に声をかけることにした。

「ねえ、生きてるんでしよう、グラントリノ?」

「——生きとる!!」

「やっぱり……!」

倒れてたはずのグラントリノはガバツと起き上がり元気に返事をしてくれる、やっぱり生きてるよね「いやあーやつちまったあ」とかいつてるし相変わらず元気なご老人だ。

「まさかケチャップを容器ごと潰しちまうとはなあ!——ん?誰だ君は!!」

「雄英から来た緑谷出久です、オールマイトの弟子をやってます!」

「ほうほう、オールマイトの……」

グラントリノはとぼけたように名前を尋ねてきたので、僕は胸を張って返事をする、そうするとグラントリノは少し考え込んだあと——突如、僕の目の前から消えた。

「——つとー」

——消えたわけではないな、高速で移動しただけだ。残像を目で追うと僕の真後ろの壁に張り付くグラントリノと目が合う。

「ほう、見えるか……オールマイトの弟子なんだろう？ 打ってきなさいよワン・フォー・オール。どの程度扱えるのか知っておきたい」

グラントリノは少しだけ驚いたあと僕に語りかける、なかなかギリギリだったけど見えてよかった……！

「いやこんなところで打ったら、このビルぶつ壊しちゃいますつて！ それに口で説明すればいいんじゃないですかねそれ!?」

「グダグダ言つてないでかかってこいや、有精卵小僧!!」

僕がグラントリノに反論するも聞く耳持たずといった感じで、グラントリノはまたも高速で移動した。この話を聞かないところかオールマイトそっくりだな……！

グラントリノは部屋中を縦横無尽に跳び跳ねながら、フェイントを織り交ぜつつ常に僕の死角に入ろうとする、僕は身体を少しだけ捻りながらその動きをしつかりと追う。

やっぱり速い…ギリツギリだ!!

ワン・フォー・オールを全身の筋肉に滾らせ準備をする、そしてわざと目線をフェイントに釣られたように見せ掛ける、次の瞬間グラントリノが視界から消え去る。んでもって狙いは死角からの一撃だろう?ならそれを――

「――そこお!!」

「なにい!？」

――グラントリノは死角から飛び蹴りを放ったが、僕は片手でそれを受け止め、グラントリノに驚愕の表情が浮かんだ。だがグラントリノは僕の掌を軽く蹴って軽やかに着地する。

結構重い!出力下げすぎたあ!!でも止められたからセーフだろう……!

「死角からの一撃を軽くないなされた…こりゃ釣られたか――今でワン・フォー・オールはどんくらいだ?」

「えっと、今使ってたのは5割くらいです」

「ふむ、んでどこまで使えんだ?八割くらいか?」

「つい最近フルで90%まで使えるようになりました!」

「ふむふむ……」

グラントリノは少し呟いたあと僕に質問を次々投げかけてくる、僕はそれにトントン

と答えるとグラントリノはそのまま考え込んでしまった。

ダメだっただろうか……？全力でいってボコボコにしないと認めてくれないのか？いやいや、そんなことしたらこのビルなくなっちゃうよな……！

「——ごうかーく!!やるじゃないの、緑谷出久！」

「えっ!？」

「まだまだ若いのによく鍛えてあるな！個性に振り回されてる感じもないし、動きも予測も考え方もいい。まったく俊典もこんないい弟子がいるならさっさと紹介しとけっつんだよな……」

グラントリノは大声で僕に合格を告げると立て続けに喋りだす、認めてくれたってことでもいいんだらうか？

「ありがとうございます！あとこれお土産のたい焼きです」

「おお、俺の好物まで持ってくるとは！俊典から聞いたのか？」

「え、ええ。オールマイトから聞いていたので、手土産として……」

「気が利くじゃねえの！俊典は平和の象徴としてはうまくやってたが、教育者としてはずぶの素人だからなあ……心配してたんだが、ここまでしっかりとした弟子を育て上げられるたあ驚いたぜ！

……おつとこの話は俊典には言うなよ、あいつは誉めると直ぐに調子に乗るからな」

グラントリノはオールマイトを手放して誉める、でも内緒なんだ……まあ僕から伝えることじゃないし、その内本人から言うんじゃないかな？

「さて、じゃあこのたい焼きでも食べながら話を聞かせてもらおうじゃねえの！オールマイトの弟子としてな！」

「はい、じゃあ暖めてきますね。電子レンジお借りします——」

こうして僕はたい焼きを食べながらグラントリノとたくさん話をした、主にオールマイトとの修行の日々の振り返りだ。

グラントリノはその話を聞くといっそう笑顔になり、僕をよく頑張ったと誉めてくれた、それからのグラントリノは僕を孫のように可愛がってくれたんだよね……ちよつと恥ずかしかつたけどグラントリノが楽しそうで良かったよ。

職場体験の初日と二日目は僕の基礎能力の確認をしてもらい、手合わせをしたり高速移動のコツを教えてもらったりして過ごした、お陰で低出力の室内移動の速さが大分上がったぞ！やはりスピード関連の訓練をグラントリノに頼むのは大正解だったな！！

——そして可愛がってもらいつつも修行に打ち込みながら職場体験の三日目の朝を迎えた。

「グラントリノ……！お願いします！」

「いつになく真剣な顔じゃねえか……決意した眼をしている……言ってみな……!」

僕の真剣な表情にグラントリノは僕の眼をしっかりと見ながらニヤリと笑いそう告げた、悪いがおふぎけはなしだ……!

「今日、保須市に行きたいんです—— “ヒーロー” として……!」

「“ヒーロー” として……? それに保須市だと……? 出久……その目的はまさか——」

僕のお願いにグラントリノが鋭く眼を光らせ尋ねてくる、僕の目的も大方予想がついているに違いないだろう、だからこそ直接言うんだ……!

「——ヒーロー殺し……ステインを捕らえます……!!」

僕は真つ直ぐグラントリノの眼を見ながらその目的を告げた。

「……ダメだ、危険すぎる!」

「そんな!そこをなんとか——」

だが即答で却下されてしまう、僕はそれに食い下がろうとしたがグラントリノに手で遮られた。

「——つと、普通ならそう言うところだが……実はお前が来ることになったときに俊典からも言われててなあ、「自分の弟子がもしかしたら突拍子もないことを言い出すか

も知れませんが……ですが一度だけでもその話を真剣に聞いていただけないでしょうか」ってな！まったたく弟子のことをよくわかってるよ俊典は……！」

「オールマイト……！」

グラントリノの口からまさかの事実が語られる、オールマイトは僕のことをよくわかってる……きつと僕の前世の話を覚えててくれたのだろう。

「つーわけで、この一回だけ出久のわがままを聞いてやろうじゃねえか……！」

「グラントリノ……ありがとうございます！」

「但し！俺も一緒にやるからな！わかったか!？」

「はい！グラントリノ!!」

グラントリノは腕を組みながら不敵に笑い僕のお願いを承諾してくれた、僕はそれに笑顔で大きく返事をする。

——僕とグラントリノの保須市への遠征パトロールが決定した。

——
待っているヒーロー殺し！今度は僕がこの手で捕らえてやる！！

急げよ若人、ダツシユ

職場体験でグラントリノの事務所に向かった僕は彼にオールマイトの弟子として認めてもらい、修行をしながらも孫のように可愛がられて二日間を過ごした。

そして三日目、僕はグラントリノと共に保須市へと向かう、ヒーロー殺しを捕らえるために。

僕とグラントリノは保須市へ向かうため、駅に来ていたのだが――

「えっ?! 運行休止?!」

「はい、申し訳ありません…保須の方面行きの列車は大型のヴィランとヒーローが戦闘になりました、その影響で線路が崩壊してしまい、現在運行を見合わせております」

僕が驚きながら尋ねると、駅員は申し訳なさそうに答えた。なんてこった…超人社会だからそういうこともあるだろうが、よりにもよって今日ここで起きるとは……

「只今振替輸送を行っておりますので、一度反対方面へと向かっていただき、別の路線から保須へ向かっていただければと思います。お手数おかけして申し訳ありません……」

「わかりました…行きましようグラントリノ！少し遅れますが、夕方前には保須に着けるはずです」

「行かないってのは——」

「無しでお願いします…！」

駅員の案内に従って遠回りで保須に向かうことにする、グラントリノの提案には喰い気味に却下をした。今日いかなきや意味ないんだ…：奴の被害者が増える前に確実に止める!!

逃がしはしないぞ、ヒーロー殺し“ステイン”…!!

—— 飯田 side in ——

「今日も平和だね、兄さ…：インゲニウム！」

「ああ、そうだな天…：2号！」

僕は兄、インゲニウムと並んで保須市のパトロールをしている。互いにコスチュームを着ているためここでは飯田天晴と天哉ではなく、インゲニウムとインゲニウム2号なのだ、間違えてはいけないな！

なぜ僕が兄さんと並んで保須市にいるのか、それは勿論職場体験の為だ、僕が行くな

らここしかない……兄さんもそれをわかって指名を入れてくれたのだから。

「いやあそれにしても怪我が治って良かったね、にい……ンゲニウム!」

「ああ、ホントついてたな。まさか俺の入院してた病院にたまたまリカバリーガールの出張診療が来るなんて」

「なにか作為的なものを感じるね……」

兄さんは笑顔で僕に答える、対して僕はあまりにも出来すぎた出来事に勘繰りを入れてしかめっ面になってしまった。しかしなぜリカバリーガールが保須に……? ヒーロー殺しの件が結構広まって事態を重く見られていたのか……?

「あんま変に考え込むなよ、て……2号。お前は昔っから視野が狭くなりがちだからな、もつと色んな方向で物事を考えてみるって!」

治ったもんは良いことだろ? ならそれを活かしてガンガンヒーロー活動をしてリカバリーガールにこいつを治して良かったなって思われるように活躍しないと!」

「そうだね、兄さん!」

「今はインゲニウムって言ってるだろ?」

「すいません、インゲニウム!」

兄さんの前向きな姿勢に感心して思わずいつも通り呼んでしまった、兄さんはそれを苦笑いしながら訂正し、僕はそれに直立姿勢で元気よく返事をした。

「よし、じゃあパトロールの続きだ。今日は日が暮れるまで市内を巡回するぞ」

「了解、^{ラジャー}いかに平和でも市民に顔見せをして安心させるのもヒーローの仕事だったね！」

「そうだ！地味だなんだと言われても小さなことからコツコツとだ！」

僕は兄さんとパトロールを続行する、ヒーローにとってこれも大事な仕事だからな！
兄さんの下に職場体験で来て本当に良かったな。

こうして僕らはまだ平和な市内のパトロールに精を出していた――

―― 飯田 side out ――

「なあ出久、一つ聞いてもいいか？」

「なんですグラントリノ？あと今はオールライトって呼んで下さいよ、コスチューム着てるんですから…」

保須市へと向かう迂回電車でグラントリノが僕に話しかけてくる、二人してヒーローコスチュームなもんだからそれなりに人のいる車内ではシュールな光景が生まれている。

保須市まではあと一駅、この調子なら日が暮れる前には保須へと着くだろう、そしてら奴との決着を……ヒーローとして……!

「バカ野郎、コスチューム着てようが着てなからうが出久は出久だろ? それともコスチュームを着てなかったら誰も助けねえってのか、出久は?」

「そんなことはないです……!」

「そうだろ? だから出久は何時だつて出久なんだよ」

「……!」

グラントリノが少しだけ笑いながら僕へ諭すように話しかける、僕は声にならない声を出す。

グラントリノの言うとおりだ……コスチュームがなくても僕は誰かを助けたいし助けきたじゃないか! 当たり前のこと過ぎて忘れていた……そうだ、ヒーローだから誰かを救けるんじゃない……誰かを救けるからヒーローなんだ!!

「ありがとうごさいます、グラントリノ。その通りですね、ちよつと気が急いていたのかも知れませんが……!」

「わかりやいいんだよ。そんなもつて聞きたかったのがそのことだ——出久がヒーロー殺しに拘る理由ってのはなんだ?」

「それは……!」

グラントリノが神妙な面持ちで尋ねてくる、返答に少し困り僕は言い淀む。僕がヒーロー殺しを追うと決めた理由……簡潔に伝えるなら――

「――ヒーロー殺しはオールマイトの信念を歪んだ捉え方をしているからです……奴と僕は同じ人に憧れたはずなのに……！」

だから僕が止めるんです、オールマイトの弟子として！」

僕はグラントリノへ自らの考えを伝える、必ず止める……そして奴には一言言つてやらないと気がすまない。

「出久、そいつア――」

「――非常停止信号です、列車緊急停止致しますー」

グラントリノがなにかを言い出そうとした瞬間に、列車が急停止を始める。そして電車が止まり車内が騒然とする。

「いったい何が起きたってんだ!？」

「これは……」

グラントリノが少しイラつきながら辺りを見渡す、怪我人とかはいなさそうだ。このタイミングでの緊急停止……まさか――

「保須市で大規模なヴィランの活動が発生したとのことです、当列車は安全確認がとれるまで停車致します。活動現場から当列車までは距離が離れているので、被害が及ぶ可

能性は今のところございません。落ち着いて車内で待機をお願い致します…」

落ち着いた声の車内アナウンスが流れる、お陰で車内のパニックはなさそうだ。

ヴィラン連合の襲撃…！ちよつと早すぎないか!?まだ日も暮れてないってのに!!こ
うしちやいられない、車掌さんには悪いけど——

「——行きましょうグラントリノ!!」

「行くって保須にか!?まだ距離が離れてるって言ってたじゃあねえか、どうするつもり
だ!!?」

「決まってるじゃないですか——走って行くんですよ!!」

それだけ言つて僕は電車の窓を開けて外へと飛び出した、グラントリノが慌てながら
窓から飛び出し僕はそれを受け止め小脇に抱えた。

「非常事態です、飛ばしますよ!!ワン・フォー・オール、フルカウル90%オ!!——」
「おい!?おおおおおおお——」

そして個性を全身の筋肉へと滾らせて保須へ向かつて全速力で駆け出した——

—— 飯田 side in ——

「兄さん!あの爆発音は!?!」

「十中八九ヴィランの襲撃だろうな！緊急事態だ、職場体験は切り上げて事務所に戻つてろ!!」

パトロール中、少し遠くから聞こえた爆発音と微かに見える黒煙。兄さんは僕に短く指示すると即座に行動を始める、こんな時に待つてるだけなんて……!

「——そうだ、スクランブルだよ！待機中のメンバー連れて市内に展開、戦闘班は現場へ急行！サポート班は避難誘導しつつ頃合いを見て現場へ行くんだ!!スピード勝負だぞ、チーム韋駄天！」

兄さんは無線を通してチーム韋駄天のメンバーへ指示を出していく、その姿は僕が憧れるヒーローそのものだ。

!!
何か、何か僕にも出来ないか!?!なんでもいい……兄さんの……いや皆の助けになりたい

僕は兄さんの後を追いながら走り、何が出来るかを考え込む。

実戦経験皆無の学生でしかない僕には現場へ行くのは無理だ……避難も僕抜きでも充分に回るだろう……速いだけの僕の個性では……いや待てよ!?!——そうだ！これなら

!!
「兄さん！僕に個性の使用許可を出してくれ!!」

「なんだ急に！戦闘に参加する気か!?!ダメに決まってるだろ!!」

「違う！逃げ遅れてる人を助けたいんだ！大通りとかは他のヒーローや警察が避難誘導をしているけど、この騒ぎだ。路地裏なんかの普段から人気の無いところまでは手が回らないかもしれない……!!」

俺の速さなら被害が拡大する前に細かいところを見て回れるだろ!?……俺も誰かの役に立ちたいんだ！頼む、兄さん……いや、インゲニウム!!」

僕は走る兄さんを見ながら頼み込む、兄さんはチラリとこちらを見ると唸りながら考え込む。

「あーっ！そんな頼まれ方したら断れねえじゃねえか!!」

いいか天哉、救助と避難だけだ！それだけなら個性の使用を許可する、戦闘は絶対禁止だからな!!」

「兄さん……!!わかってるさー!」

「——なら行け！インゲニウム2号、その速さで誰かを救うために!!」

兄さんは少しジタバタしながら僕の願いを了承してくれた、そして肩を叩いて僕にエールを送ってくれる。

兄さんに少しでも近づく……そして救うために、いくぞ!!

僕と兄さんは個性のエンジンを唸らせてそれぞれ別の方向へと加速して走り抜ける、闘うため、救うために——

飯田 side out

—— 走ること約5分、僕とグラントリノは保須へと辿り着いた、既に街には火の手が上がっておりヴィランによる襲撃が始まっていることが改めてわかる。

「くっそ！ 始まっている!! —— てことはもうステインもここにいるはず……!」

「おい出久、いい加減下ろせ! もういいっ!」

「すいませんグラントリノ!」

辺りを見渡す僕にグラントリノが怒鳴る、かなり強引に担いできてしまった……! そりゃ怒るよな……! でも今はそれどころじゃない!!

「急ぎましょうグラントリノ!」

「どこへ行くつもりだ!?!」

「どこって……現場ですよ! ヒーロー殺しも確実に来ています!」

僕らは話ながらビルの上を跳ねていく、まさかとは思いますが飯田君がステインと出会ってるなんてことになってないか心配になってきた。

「——!!あれは—」

「なんでえあのヴィランは?」

僕らが跳ね飛ぶビルの更の上、そこに翼の生えた脳ミソ剥き出しのヴィランの姿が見える。あれは脳無!やっぱりの騒動の原因はヴィラン連合か!!

今は相手にしてはられないってのに!でも既に被害が出てきてしまっている以上、放置は出来ないか……なら!!

「モンタナ・スマアツシュ!!」

「——ブゴオ!!」

僕はビルの屋上を強く踏み込んで回転しながら翼の脳無に接近し、その背中に踵落としを放つ。僕の急襲に反応できなかった脳無は叩きつけられた踵の勢いによって地面へと落下していった。

その様子を確認しながら僕はグラントリノのいるビルの上に着地した。

今の一撃で無力化出来たとは思われないがダメージにはなっただろう!脳無たちによる町の混乱もどうかしないと……!

「グラントリノ!今のヴィランを追ってください!!それとこれだけ大きな騒ぎです、おそらく他にもヴィランがいるはずなのでそれらの対処を!!」

「そりやもちろん行くが、出久はどうすんだア!」

「このままヒーロー殺しを叩きます!!じやあまた後で合流しましょうっ!!」

僕はグラントリノにヴィランの対処を託す、驚いたグラントリノを短いやり取りをして、僕は再びビルの屋上を蹴って日の落ち始めた街へ繰り出す。ヒーロー殺しを捕らえるために……!

「おい!!——いつちまいやがった……! ったく強さだけじゃなく自分の正義を信じて突っ走るとここまで俊典に似やがって!!この事件^{ヤマ}が終わったら二人まとめて説教だ……」

—— 飯田 side in ——

「誰かいますかー!!」

僕は路地裏に向かつて大声で叫ぶ、それに対する返事はなく誰もいないようだ。

既にくつつかの路地裏を見て回ったが今のところ逃げ遅れた人はいなかった、やはりこんなところに行く人はいないのだろうか……いやいや、他のところには居るかもしれない

ない！兄さんや他のヒーローも頑張っているんだ、僕だって諦める訳にはいかないだろう！！

僕は走って離れたところにあつた路地裏を覗く、そこには二人の人影が見えた。

「お——ツ!!」

避難をしてもらおうと声をかけようとしたが、その内の一人の姿を見て僕は言葉を失い、咄嗟にビル影に隠れた。

血のように赤い巻物と全身に携帯した刃物、もう一人の頭を鷲掴みにして刃物を抜いている。

もう一人は黄土色の全身スーツに派手な飾り付け、おそらくプロヒーローだろう……つまりアイツが「ヒーロー殺し」で間違いない……!!

「こちら2号。インゲニウム、聞こえますか？」

「どうした2号、要救助者を発見したのか？ならサポートチームを——」

「違うんだ！ヒーロー殺しを発見した！」

僕はヘルメットに内蔵された無線を兄さんに繋げて小声で話す、まさかこんなことになるなんて……

「何!?!お前、いま何処にいる!!?」

「ポイントXXX—Xの路地裏にいるよ、もうヒーローがやられそうだ……!」

「了解、10分で向かう。戦闘は避けて監視に徹しろ、スグに行くからな!!」
「でも……」

「でもじゃない!お前、殺されちゃうぞ!!俺らが行くまで絶対手を出すなよ、危険を感じたら全力で逃げろ。お前なら逃げきれはるはずだ」

兄さんがこちらに急行してくれるらしい、しかしもう目の前でヒーロー殺しの犯行が……だが兄さんの言うとおりだ。兄さんがチームで挑んで敵わなかったヒーロー殺しに僕が何か出来る訳がない……ここは指示に従うしかないか……

「了解、インゲン——」

兄さんにそう告げようとしたその時、ヒーロー殺しか行動を起こした。手に持ったその刃を振りかぶり、ヒーローに止めを刺そうとしている。

目の前の光景に僕は気が付けば考えるより先に身体が動いていた。

「やめろおおお!!」

叫び声を上げながらヒーロー殺しへと駆け出していく、ヒーロー殺しの腕が止まりこちらをジロリと睨んできた。

ジリジリと肌が焼けるような殺気に足が止まりそうになったが、それを堪えて進み続ける。

「天哉!早まるんじゃねえ!」

無線から僕を制止する兄さんの声が聞こえてくるが、一步また一步と足を進めていく。あと一步で僕の蹴りの間合いに入る、というところでヒーロー殺しが動き出す。

ヒーローの頭を左手で驚掴みにしたまま、右手に持っていた刃を返して僕の方へと向けて振り抜く、その動作は僕があと一步を踏み出すよりも速い。そしてその刃の狙いは僕の首だった――

「天哉――」

僕は上半身を反らして刃を避けようとする、おかげで首を落とすことは避けれたが、刃は僕のヘルメットに食い込んでそのままヘルメットを弾き飛ばされる。その衝撃で僕は尻餅を突いてしまった。

ヘルメットの無線から聞こえていた兄さんの声が無くなり、本当に一人でヒーロー殺しに立ち向かわなくてはならなくなってしまった。

「スーツを着た子供……何者だ？」

刃を僕の眼前に突きつけ、明確な殺意を宿した眼で僕を睨みながらヒーローが尋ねてくる。

生まれて初めて向けられるおぞましい感情、僕はその殺意に当てられ身体が思わず固まり全身に鳥肌が立つ。

「……ハア……消えろ、子供が立ち入っていない領域じゃない」

ヒーロー殺しはそれだけ言う刃を下げて見知らぬヒーローの方へと振り向いた。視線が逸れた瞬間に僕に当てられていた殺気が消えた、僕はそこでようやく自分の身体が震えていたことに気が付く。

怯えていたのか、僕は……ヒーロー殺しはそんな僕を見て只の子供だと思ったのか？
……でも助かった、これで——

『兄のように人々を導き守れるヒーローに成りたいと、心の底から思っている。』

——いいわけがない……僕はかつてなんと行ってこの名を名乗ると決めたんだ？
の成りたいと望んだヒーローはこんなところで震えて怯えるのか？自分さえ助かればいいと思うようなものなのか？

……そんなはずはないっ!!僕が成りたかったヒーローは……いや、もう既に俺は——

「——待て、ヒーロー殺しステイン！俺が何者かと尋ねたな？なら教えてやる!!」

「……ハア……口の利き方に気を付けろ。場合によつては子供でも標的になる」

俺は素早く立ち上がりヒーロー殺しへと叫ぶ、奴は気だるそうに振り返ると再び殺気を飛ばしながら告げてくる。

「——ッ！俺は……俺はインゲニウム2号!!お前を止めるヒーローだ!」

俺はヒーロー殺しの殺気を押し退けて名乗りを上げた、そう俺はもうヒーローとしてこの場にいるんだ!

「ヒーローを名乗るか……ハア……そうか、死ね」

ヒーロー殺しが眼を細めながら眩き、俺に向かって刃を振り下ろす、俺は大きく後ろに跳ねてそれを躲した。こいつ本当に人を殺すことに躊躇がない……!

「レシプロバーストっ……!」

俺はエンジンを暴走させて最速でヒーロー殺しに接近する、しかしヒーロー殺しが対応に遅れることはなく俺の胴に向かって刃を薙ぎ払う。俺は奴の間合いに入らないギリギリの半径の弧を描いた軌道で後ろへと回り込む、だが奴の視線は振りきれない。

「なかなか速い……!」

ヒーロー殺しは一言呟くもしっかりと俺を捉えている、俺は一気に切り返し敢えて

真つ直ぐ奴に突撃する。意表を突かれたのか奴の眼が見開かれる、それでも奴は刃を既に返しており俺の眼前には鈍色の光が迫っていた。

「——そこだあ!!」

俺はヒーロー殺しの左側へと姿勢を落としながら刃を避ける、躲しきれず頬を刃先が切り裂くもかすり傷だ。俺の狙いは最初から奴への攻撃ではなく……その左手に捕らえられていたヒーローだ!!

ヒーローを奴の手から奪い去り、そのまま路地裏からの脱出を目指す。レシプロの馬力なら五歩も走れば大通りへと抜けられる筈だ!!

「……狙いは最初からそいつを救けることだったか……」

一歩、二歩、三歩と大きな歩幅で走り抜ける、しかしヒーロー殺しが追ってくる気配はなく、奴はその場で眩くだけだった。

「——だがあと四ミリ、踏み込みが足りない……!!」

ヒーロー殺しの意味不明な眩きを余所に、俺は四歩目を踏み込もうとした、その瞬間全身が硬直する。自らの加速した勢いに乗って俺は無様に地面を転がっていく。

身体が動かない……!?これは——しまった、奴の個性か!!

「いきなり子供が邪魔をしに来て只の殺気で震え上がる……かと思えばヒーロー名乗って人助けとは……ハア……面白い……!」

「……ぐつ……くそお……」

ヒーロー殺しが不気味に笑いながら一歩ずつ悠々と近づいてくる。なんとか身体を動かそうとしてみても、首から下が全くといっていいほど動かない、これが奴の個性……兄さんから話は聞いていたの!!

「……ハア……危険を省みず人を救けようとする勇氣と……そして貴様の研鑽された速さ……及第点といったところだな」

ヒーロー殺しは僕らの下までたどり着き、襟首を掴んで路地裏の暗がりへと引き摺っていく、その間も奴の独り言は止まらなかつた。

「貴様には本物の可能性を感じる……この偽物と違つてなっ!!」

ヒーロー殺しは奥まで進むとそれまでの眩きとは打って変わって語気を強めてヒーローをぶん投げた。

くそっ! なにもできなかった!! 兄さんの話をもつとよく聞いていたら……あの時刃を完璧に避けてさえいれば……邂逅の時にヘルメットを弾き飛ばされていなければ……!! そんなたればの想像をしたところで最早すべてが遅かつた。

「今日のところは貴様は見逃してやる……ハア……本物の英雄を目指して精進するといひ――」

「いったい何を言っているんだ……!?!」

俺はヒーロー殺しの眩きに口を挟む、ヒーロー殺しは舌を這いずらせて言葉が続ける。

「——この偽物は別だ、こいつは今ここで殺す」

ヒーロー殺しは殺気を撒き散らしながら、気を失っているヒーローを睨み付ける。ダメだ、そんなことはさせない！そう思ってみても身体は全く動かない、結局の所最初から何も出来ないことは判っていた…だがそれでも俺は止めたかった、救いたいんだ！

「やめろーおい!!ヒーロー殺しーやめるんだ!!」

唯一動く口を使って必死に叫ぶ、ヒーロー殺しはそんなこと構わないといった様子でヒーローの顔を掴んでその首筋に刃を添わせていく。

俺は無力だ…こんなとき兄さんならもっと上手くやれたんだろうか…

俺の最強の友人…彼ならこんな時も笑顔で全てを解決してしまうんだろうか…

虚しい後悔と想像だけが俺の頭を埋め尽くす、眼からは涙が滲み出て視界がボヤけていった。

「じゃあな、正しき社会への供物——」

ヒーロー殺しが最後を告げるセリフを吐いてヒーローの首に刃を当てる。

ちくしょう！ちくしょうっ!!許さない…許さないぞヒーロー殺し…必ず…必ず—

「——インゲニウム。この名を生涯忘れるな！お前を倒すヒーローの名だ!!」

——必ずお前は俺が…俺達が捕まえてみせる!!

「…ハハア……それは楽しみだ……いつでも来い——だが偽物として来た時は……俺がこの手で殺してやろう……」

——俺が自らに誓い、ヒーロー殺しがそれを嘲笑ったその時、それは空から落ちてきた。

一迅の暴風が路地裏に吹き荒れ、俺もヒーローもヒーロー殺しも巻き込まれて飛ばされた。

俺は壁に背を打ち付けながらも眼を見開く、そこに映るのは見慣れた緑色の癖毛と筋骨隆々な肉体の持ち主。

「もう大丈夫！僕が来た!!……なんとか間に合ったかな?——助けに来たよ、飯田君！」

颯爽と現れて笑顔で話しかけてくる俺の最強の友人、こんな状態なのに俺もつられて思わず笑みが溢れてしまった。

——彼はどんな困難も窮地も全てを壊していく、そして前へ前へと進んでいく、そんな「ヒーロー」だ。

「——まったく……ホントに君はなんでもぶち壊していくな、緑谷君！」

路地裏の英雄問答

グラントリノと共に保須へ向かう僕、しかし交通トラブルに巻き込まれて到着が大きく遅れてしまい、既にヴィランが保須を襲撃していた。

グラントリノにヴィランを任せてヒーロー殺しを探す僕、そして辿り着いた路地裏で飯田君とプロヒーローネイティブを襲うヒーロー殺しステインと対峙する。

「また邪魔モノか……ハア……貴様は？」

ステインが僕へ得物を向けながらため息を吐きながら尋ねる、その刃は既に血で濡れていた。

「僕はオールライト！お前を止めに来たヒーローだ!!もうお前に誰も傷つけさせやしないぞ、ヒーロー殺しステイン！」

僕はステインを指差しながら名乗りを上げる、奴は殺意を宿した眼で僕を睨んでくるが、殺気程度で怯むような柔な鍛えた方はされてきてないんだよ……!

「オールライト?……そうか、どこかで見た覚えがあるな……ハハハア……貴様、オールマ

イトの弟子の緑谷……出久か……!!」

ステインは僕の顔を見て思い出したかのようにオールマイトの名を出さず、そして口角をつり上げて不気味に笑い始めた。お前の口からオールマイトの名前を聞きたくない。「貴様が本物かどうか、いつか確かめたいと思つていたんだ……ハハア……それがこんなところで叶うとはな」

「本物か確かめる?じゃあ身分証でも確認するかい?」

「……違うな——こうするんだっ!」

ステインがネイティブから手を離して僕と会話をする、が話を切り上げてナイフを投げてきた、眼を狙つて真つ直ぐと飛んできたナイフを僕は手刀で上へと弾く。

小粋なジョークで気を逸らそうとしたらこれだよ……: やっぱ僕はナンセンスらしい。

「いきなりかよ!——スマッシュユツ!」

牽制としてデコピンの砲弾を飛ばす、ステインはそれを難なく躲していく。

やはり素早い……遠距離攻撃は当たらない、かといつて範囲攻撃の拳圧を使えば二人に被害が出てしまう。——なら、二人の救助が先だな!

僕は飯田君へ駆け寄ろうと地面を踏み込む、しかし同時に二本の投げナイフが飛んできた。

僕は踏み込んだ足を軸にして回し蹴りを放つてそのナイフを弾き飛ばし、ステインを睨むも、奴はその長い舌を見せつけるように口を開いて嗤っていた。

「簡単には救わせせないってか……ならお前を倒してから救けるよっ!!」

僕はステインの方へと地を蹴って跳ねる、一步もあれば十分な距離だ。それに対してステインは後ろに跳ねながらまたもナイフを投げつけてくる、だが咄嗟のことで狙いが逸れたのかナイフは僕の顔の10センチ横の辺りを通る軌道を辿っている。

焦りが出たか？よし、このまま突っ切って殴り付けて……待てよ、まさか狙いは僕じゃなくて——

ナイフが僕の顔の真横を通る、その狙いは僕の頭ではなく……その後ろで倒れている飯田君だということに気が付いた。

その瞬間、僕は空中で身体を振って飛んでいくナイフへと手を伸ばす。

——くっそ！間に合ええええっつ!!!

限界まで腕を伸ばすが、ナイフは既に僕の手首より先に向かっており掴めそうになり、それでも諦めずに手を振りきった。

ナイフに指が触れる感触はなかった……そしてナイフはそのまま飯田君の頭へと一

直線に飛んでいき——眼前に突き刺さった。

なんとか触ることが出来たようだが、目の前にナイフが突き刺さる光景に飯田君は目を丸くしていた。

ギ、ギリギリだったあ!!ごめん、飯田君……!

空中で姿勢を崩したため僕は背中から地面を擦っていく、そのまま止まって安堵する間もなくステインの攻勢は続いており、僕の頭上には既にステインの振り下ろした刀が迫っていた。

「——つぶな……!」

ステインの刀が僕の頭を真つ二つに切り落とす前に、僕は白刃取りで刀を止めることが出来た。

寝転がった姿勢のまま蹴りを放つが、既にステインは刀を捨てて僕の傍から離れていったため当たらない。

ここまで攻防にかかった時間は30秒にも満たないだろう、グラントリノと高速戦闘の訓練をしていなければ対応出来なかったかもしれない……

ステインの速さは脅威だ、地上戦に限ればグラントリノと同じくらいの速さだろう……つまりそれは対応圏内の速さってこと。

にも関わらず攻めきれず守りに徹しているのは飯田君とネイティブ、二人の救助とス

テインの打倒が同時に出来ていないため……いや、させてもらえてないのだろう。ステインの立ち回りが厭いやらしく上手い……さて、どうする……？

「ハハハア……速さもパワーも最高峰……そして常に人質の救助を優先している姿勢……間違いなく本物だ、貴様は……！」

僕が対応を考えていると、ステインがニタリと笑みを浮かべながら話しかけてきた。こいつ……でも今は会話に乗って注意を僕に向けさせてた方がいいか。

「そりやどうも、お前に褒められても嬉しくないんだけどね……どういう意味だ？」

「そのままの意味だ。ハア……嘆かわしいことに英雄ヒーローが本当の意味を失い、この社会には贗者にせものが蔓延にっている……英雄気取りの拝金主義者共が……！」

僕が苦い顔で尋ねると、ステインは両手を広げて演説でもするかのように語り始めた。

「“ヒーロー”とは偉業を成し遂げた者にだけ許される“称号”！強い信念を持つてその覇道を歩み続けた結果として至るのが本物の英雄なんだ……！」

「本物の英雄……それってオールマイトのことか？」

「そうだ！彼こそが本物の英雄!!どんなヴィランも敵わないほどの至高の力、全ての人を救わんとする慈愛の心！それらを口先ではなく行動によって示す、まさに平和の象徴

たらん姿だ……!!

ヒーローとは彼の為にある言葉であり、それを名乗る以上後に続く有象無象も彼の道を辿らねばならん……故にお前には本物の英雄資質がある……いや……既に本物の英雄に至りつつあるだろう！」

ステインは声を少しづつ大きくしていきながら講釈を垂れる、その姿からは狂喜的な英雄信仰を感じる。

こいつ……イカれてるな——僕の言えた義理ではないけど……

「……ハア……それに比べてプロヒーローなどと名乗る輩は本当に弱い……そこに転がる贗者のように……こいつらには信念がないんだよ、信念が！」

だからこそ、俺が教えてやらねばならない！貴様らは弱い、信念がないんだと、その身に刻んでやっている……！」

「だから傷つけるつてののか！」

「そうだ！俺の刃で傷として刻み……ハア……命に刻み付けて、肅清する！全ては正しき社会の為に……俺は英雄を忘れてしまったこの社会への警鐘だ!!」

「お前っ!!……っ……！」

ステインの身勝手な暴論に思わず叫び声を上げそうになる、心の底から怒りがこみ上げてきたがグツと堪える。まだだ……まだ奴の気が二人に向いている……！僕だけを見る

ようになるまで堪えなくちやな……!

「お前の言う信念ってなんなんだ……? 僕はそんな大層なもの持ち合わせてないぞ」

「ハハア……! お前はホントに良い……!! 信念とはその者の行動原理……何故、人を救けるのか……ということだ。本物の英雄の信念……お前もわかるだろう? —— お前は何故人を救ける?」

「救いたいから救ける、それだけだ! 信念なんて ——」

「それだよ!! 救うことだけを考えて行動する、素晴らしいつ……! 贖者共は金や名声を求めて人助けの格好だけをしている……本来そんなものは後から付いてくるだけの付属品だと言うのに……」

—— やはりお前は本物だ!……ハア……ずっと待っていたぞ……お前のような本物の英雄の跡を辿る者を……そしてついに俺の前に現れたっ!!」

ステインはその狂喜に満ちた眼で僕の眼をしつかりと見ながら楽しげに囁する、こいつはホントに ——

「—— 楽しそうなどこ悪いけど、お前の言ってることはこれっぽっちもわからない!!」

「……は?……何故だ? 何故わからない! お前のような本物が……どうしてわからないんだ!!」

「理解できるわけないだろう! そもそもお前の言う本物だの贖者だのってというのがおか

しいんだ!!」

僕は率直にステインの理論を否定する、ステインはそのことに納得が出来ないためか、マスク越しでもわかるくらい困惑の表情を浮かべていた。

「人を救ける為に行動できる人はヒーローって呼ぶに相応しい、そこに贖者も糞もない」

「バカな……お前と違つて金の為に動いているような偽の善行だぞ!? そんなものをヒーローと呼べるわけがないだろう!!」

「確かに僕は本当に救いたいものを救けられるならお金なんていらぬよ……でも僕の考えはあくまでも僕だけのものだ、お前の価値観だつてそうだ……それを人に押し付けるなんて間違つてんだよ!

それに偽善の何が悪いんだ! 人の為に善しとする行いだぞ、いいことじゃないか! 自分のために動いてるような僕よりよっぽど立派だと思えるけど?」

僕とステインの意見のぶつつけ合いが始まり、段々と熱を帯び声を荒げていくようになる。それにつれて堪えていたイラつきが涌き出てきた。

まずい……冷静にいられなくなつてきた……でもこいつの注意は僕だけに向いてる様だし、今はこれでいい。

ヒーロー殺しに殺害された17名、再起不能になつてしまつた23名。それらの

ニユースを見るたび僕は悔いて、鬱憤を溜めてきた……その感情が今解き放たれようとしていた。

「ヒーローは自分を捨てなければならぬ！私欲で動くなど論外だ……!!そんなものはヒーローではないっ……!!」

「ヒーローかどうかを決めるのは僕やお前じゃない！助けられた人の気持ちの人がヒーローにすんだよ!!」

お前が贖者つて蔑むプロヒーロー達だつて、何時だつて命懸けで誰かを救けてんだ！だからみんなからヒーローだつて認めてもらえてるんだろ!!

それをお前のいい加減な匙加減で否定して、肅清とか言いながら無意味に傷つけるなんて——お前の方が全部間違つてんだ!!」

「……貴様ア!!何故だ！本物の筈のお前が、オールマイイト本物の英雄に教えを請うてそこに至った筈のお前が……贖者などを認める!？」

僕はステインへと怒りを言葉にして投げつける、ステインもそんな僕を認めたくないようで顔を歪ませて叫び返し、そして僕の中の地雷を踏み抜いていく。

「まただ……またこいつは言いやがったな……!」

「僕が一番腹が立つのはそこだ！自分の都合で悪行を重ねてる癖に、その理由に

僕の最高のヒーローを含めてる!! そんなお前の口からオールマイトの名前を出すなよっ! 汚すなよ!! オールマイトに憧れてるんじゃないのかよ!!」

「俺の粛清は正しく悪だ……それは認めよう……! だが必要なだよ! この社会には蔓延る悪を駆逐するためには、本物の英雄が一人では足りない……!! ……ハア……だから悪と共に贖者の正義も狩る。オールマイトやお前のような本物を生むために……!!」

ステインは狂った信念をその瞳に宿しながら語る、だが僕は認めないし許さない、これだけは言わなくては——

「それがおかしいって言ってるだろ!! なんでそうなんだよ!! 悪からみんなを救けるために英雄が必要だってわかかってんじゃないか!

—— だったら最初にお前が成れよ! 本物の英雄に!!!」

「—— ツー!」

「自分が出来ないことを人に押し付けて満足してんのか?! ふざけるな! 絶対に認めない……!! お前と違って僕は成るぞ、ヒーローに……! ……そして必ずオールマイトを超える!!」
僕の言葉にステインが眼を大きく見開く、反論させる間もなく僕は言葉を続けていった。

オールマイトを救けるために、跡を追う、並び立つ、そして超える……! その時オールマイトが「頑張ったな」って言うてくれるだけで、僕はそれでいい。

オールマイトにはヒーロー殺しの詳細については前世のことは話していない、もしヒーロー殺しが自分の影響で生まれたことを知ればオールマイトは黙っていないだろう。

そして自らヒーロー殺しを捕らえ……傷つくだろう、誰にも悟られることなく全てを笑顔の下に隠して……

オールマイトにそんな思いはさせたくない！僕がやるんだ、同じ英雄オールマイトに憧れた僕が――

「――だから僕はお前を止めるぞ……ヒーロー殺しステイン！」

「……ハア……お前は俺を止める、だが俺は止まれない……俺には贖者を殺す義務がある。ぶつかり合えば当然――弱い方が淘汰されるわけだが……さあ……どうする？」

僕の宣言にステインは殺意で返事をする、今更そんなもので怯むことなどない。

「来いよ！ステインツ!!僕がこの手で終わらせてやる……!!」

「俺は終わらない……この社会を直すために……行くぞ……オールライトオ!!!」

僕とステインは同時に倒すべき相手に向かって踏み出す。

ステインが左手でマチェットを投げつけてくる、僕は走りながら左腕でフックを放つてマチェット横から殴り付け、甲高い金属音を響かせながらマチェットは弾きとんでい

く。

その弾かれたマチェットが壁に刺さるより速く、ステインは右腕に持った刀を振り上げていた。

「…死ぬ!!」

ステインが刀を振り下ろして僕の首を落とさんとするが、僕は左腕をそのまま正面に構えて防御する。

肉を切らせて骨を断つ……左腕はくれてやるよ!

「…ツ!!」

刀が僕の腕に食い込んでいく、その刃が筋肉まで達したとき——僕は腕の筋肉を締めめた。

それによって僕の腕から血が吹き出すこともなく、刀が引けないことにステインが気が付くも……もう遅い。

「——90%!アイオア・スマアツシュツ!!」

予想外の出来事に動揺しながら空きなステインの鳩尾に僕は右腕で振り抜き拳を振じ込んだ。

ステインの身体をスマツシュの衝撃が駆け抜ける、衝撃は消えることなくそのまま慣性となりステインをビルの外壁へと運んでいき、壁がヒビ割れる程の勢いで叩きつけ

た。

「…それでこそ…本…物…」

ステインはそれだけ眩くと地面へと倒れ伏し気を失った。

僕はそれを確認してから左腕の力を抜く、刀が地面へと落ちてカラカラと音をたてる。

腕を動かして見ると筋を傷つけられておらず問題なく動く、切られた場所からは血が滲んでくるが吹き出すほどでもない、肉も切らせず骨を断つことが出来たみたいだ。

——お互いに譲らなかつた問答…その後の僕らの戦いは一瞬で決着がついた。

ステイン…最後までぶれない男だ。最後の攻撃も僕を殺す気などなかつたのだろう、それくらい浅く軽い一閃だった。

——その信念の強さだけは本物だったよ、ステイン。

「大丈夫、飯田君!？」

「ああ、すまない緑谷君。せめて邪魔にならないように黙って存在感を消して見ていたのだが……」

「ありがとう、お陰で奴が僕だけに執着して正面から撃ち合うことが出来たよ!」

僕はまだ動けていない飯田君へと駆け寄って肩を貸す、飯田君は申し訳なさそうな顔をしていたが、僕は笑顔で彼に礼を言う。

口を挟んでいたら真っ先に狙われていたかもしれない……最高の判断だったよ!

ステインから武器を取り上げて拘束する、今度は手首の暗器もしっかりと取り上げておいた。

縛っている間に飯田君の麻痺が解けていたので気を失ったままのプロヒーローネイティブを担いでもらって、僕はステインを引き摺りながら歩いて路地裏から抜け出していく。

「しかし緑谷君もあんな風に声を荒げて怒ることがあるんだな!」

「いやあ情けないところを見られちゃったね……ちよつと私情も入っちゃつてたから……」

飯田君が意外そうな表情で聞いてくる、僕は苦笑いでそれに答えた。

こんなに怒つたのは前世以来かもしれないな……

「インゲニウムとヒーロー殺しの因縁もこれで終わったんだな……ありがとう緑谷君
！」

「僕は僕の為にやつたみたいなものだから、気にしないでよ！むしろ獲物を取っちゃつてごめんね……」

「いやいや！正しい行いだ、謝ることではない!!」

僕と飯田君は互いに頭を下げながら歩く、相変わらず飯田君は真面目だな！

気がつけば街の騒ぎの音が少なくなっている、もしかしたらヴィラン連合の方もヒーロー達が終わらせたのかもしれない。

——前世と違い僕一人でステインを倒すことが出来た、小さなことだが運命は少しずつ変わってきているのだろうと実感する。

僕らはすっかり夕陽によつて染められた大通りへと出た、射し込んだ斜陽が目に入り眩しさに眼を細める。

長いようであつという間だつたヒーロー殺しのこの事件、時間にしたら五分も経つていないかも……でもこれで終わりを告げた——

——突如おぞましい殺気が浴びせられ背筋が凍る。

「——飯田君つ!!!」

僕は咄嗟に飯田君を後ろに押しだす、その直後僕の身体は横から強い力で殴り飛ばされた。
れた。

道路を転がりながらブツ飛んでいき、路上に駐車されたトラックに背中から衝突して

止まる。

あまりの唐突な出来事に頭が混乱しそうになるが、眼を開けて状況を確認する。そこに見えた光景は僕の理解を超えたもので益々混乱しそうになる。どうなってるんだよ……これ……!!

夕暮れに浮かぶ三つの影……それは――

「――三人の……脳無……!?!」

ここには一人しか現れなかった筈の脳無、それが三人になっている……!?!

少しずつ変わってきていると思った運命、だがしかし……それは僕だけに限られた話ではないのかもしれない――

斜陽に燃ゆる街

ヒーロー殺しステインの狂氣的英雄信仰、僕はそれを真つ向から否定する。互いに譲らぬ問答は鬨いによって決着をつけることとなり、そして僕は勝利した。

飯田君とネイティブを助け、ステインを拘束して路地裏を抜けて大通りへと戻る。この事件ももう終わりだと思った時、僕らの目の前に現れたのはここにはいない筈の三人の脳無だった。

—— Dark side in ——

ビルの屋上の貯水タンクの更の上、二人の男が双眼鏡を片手に騒乱に堕ちた保須市内を眺めている。

「そうだ、ぶっ壊せー全部滅茶苦茶にしてやるんだ!!——はあ……やっぱいいなあ脳無」
掌を顔に着けた白髪の男、死柄木弔は自らが解き放った脳無が街を破壊しヒーローを倒してく姿に恍惚と見ている。

彼にとってこの惨状は只のゲームに過ぎない、自分が配置した三体のユニットが街を壊せばスコア上昇、そしてヒーロー達は敵ユニットでそれを倒せばまたスコアになる。

この現実をそんな風にしか捉えていないのだ、だからこそ脳無の活躍に無邪気にはしやいでいた。

「……」

黒い霧状の身体にきつちりとしたスーツ姿が不思議なギャップを生み出しているもう一人の男、黒霧は物思いに耽りながら死柄木の背を静かに見つめていた。

——USJの一件から大分成長しましたね…死柄木弔。自制が利かないものだと思っていました、先程までのヒーロー殺しとの交渉見事でした。

煽られてもキレなかったですし、目的と信念を伝えて頭の固そうなヒーロー殺しを納得させて、一時的にとはいえ仲間に取り入れるとは！

最近はおールマイトのニュースを見てもテレビを壊さなくなりましたしね、先生〃の仰る通り彼も成長を続けているんですね。

黒霧の心労も最近減ってきていた、死柄木の拭いきれなかつた小物感も払拭されたと、黒霧が安心していた時……脳無の侵攻に変化が起きる。

ビルの上空を飛んでいた翼の脳無が何者かによって叩き落とされたのだ、黒霧は事態

の急転に驚きながら慌てて双眼鏡を構えた。

「あれは——」

「……緑谷出久うううう!!!」

脳無を地面へと落とした人物の姿を黒霧が確認する、その名前を死柄木が憎しみを込めた唸り声で呼んだ。

そう、あのときの出久の行動はピルの屋上にいた死柄木達から丸見えだったのである。

「黒霧！脳無を全部集めろ！今すぐにだっ!!」

「ええっ!? 戦闘中の個体もいるんですよ、そんな無茶な……!」

「無茶でもなんでもいいから早くしろ!」

「ええ……」

死柄木は怒鳴りながら黒霧へ指示を出す、黒霧は困惑しながらも戦闘中の脳無を確認しながら個性を発動させた。

激しい戦闘の隙を見ながらヒーローを巻き込まないように慎重に脳無を転移させていく黒霧、そして一体、また一体と脳無を回収することに成功した。

黒霧は3分ほどで翼の生えた個体、四つ目の個体、最後に顔無し個体と三体すべての脳無を無事に自らのいる屋上へと転移させたのである。

戦場の乱戦の具合からすれば恐ろしく早い所業、黒霧も自身を誉めてあげたいくらいだった。

「おつせえぞ黒霧！なにやってんだ!!もう奴は路地裏に入っちゃったよ……!」

「そんなあ……私も結構頑張ったんですけれど……」

そんな黒霧の努力も死柄木には認められない、誉めるどころかさらに怒鳴る次第だ。まさにジャイアニズムの化身、大人子供の本領を余すことなく発揮する。

「まあいい、次はこいつらをあそこの路地裏前に飛ばせ、それでお前のポカはチャラにしてやるよ」

「……ふう、わかりましたよ、死柄木弔。それでどうするんですか?」

「決まってるんだろ——」

死柄木は自分本意なスタイルを維持しながら黒霧へ命令に近い指示を出す、黒霧も今更この程度で文句を口にするほどではない、彼は死柄木の無茶な注文を幾度となく受け続けているのだ。

そして黒霧が手際よく指定の場所にゲートを出現させた。

「——殺すんだよ!あの正義面したクソガキをな!!脳無ども、出撃だ……緑谷出久を殺せえええ!!」

死柄木が騒ぎながら脳無達に命令を下していく、脳無は返事をすることもなく一人ず

つゲートへと入っていった。

「あなたは行かないので？」

「さつきも言ったろ？怪我してんだよ、それに脳無をまとめて送ったんだ。いくら化物だといえど三人に勝てるわけがないだろ？」

黒霧が素朴な疑問を口にする、死柄木が首をポリポリ掻きながら答える。

「それもそうですね、それじゃあここから見てみましょう。緑谷^{あの化け物}出久が死ぬところを……」

黒霧はそれに納得すると双眼鏡を構えて路地裏の入り口を覗き始めた。

殺せ、殺せと呟きながら双眼鏡を覗く死柄木、それを聞きながら黒霧は思った。

——なんだ、落ち着いた訳じゃなくて執着の対象が入れ替わっただけだったのか……

ヴィラン連合一番の苦勞人、黒霧の受難はまだまだ続きそうだ——

「ネイティブを連れて逃げろ！飯田君!!」

僕は立ち上がりながら飯田君へ叫んで指示を出す、三人の脳無は既に行動を始めていた。

いち早く僕へと接近してきたのは四つ目で四足歩行の脳無だ、始めて見る奴でどんな個性を持っているかわからない。

「しかし緑谷君、君はどうするんだ!?!」

「——スマッシュ……見ての通り、戦うのさ」

飯田君は動揺しながら僕に尋ねる、僕は四つ目に牽制の拳圧の大砲を飛ばしながら飯田君に返事をした。

四つ目に暴風の砲弾が直撃するが、その身体を吹き飛ばすようなことはなく、四つ目は足を止めてその場に留まる。

防御系の個性か!?!牽制とはいえ、少しも効いてないのは予想外だな!

「しかし緑谷君、それでは君が……!」

「ここでこいつらを押さえられるのは僕しか居ない!それに——ぐおっ!?!」

「緑谷君——!!!」

まだ飯田君はなにか言いたげだが、僕は一方的に説明を始めようとした時、暴風が僕

の身体を直撃して吹き飛ばされる。

僕は先程の荷台を壊したトラックに再び突っ込み、その衝撃でトラックは大破し火の手を上げる。

今のは間違いなく僕の放つた風の砲弾だ、つてことは四つ目の個性は反射？ いやラグがあつたな…吸収と放出とかそんなところか？

てか煙が上がってる、燃えてんのかこのトラック!?

「——熱っ!!……つてくそっ!」

燃え盛るトラックの荷台から慌てて飛び出す、熱さにやられる暇もなく目の前には上顎から顔の無い黒い肌の脳無が迫っていた。

「ふんぬっ!——なにしてんの飯田君! ネイティブ…気絶したその人を助けられるのは君だけだ!!」

「そうだが、戦う友を置いて逃げるなんて!」

腕を振り上げていた顔無し脳無と両手を使って取っ組み合いになる、僕はそのまま動かない飯田君へ檄を飛ばす。

力強い! 負けることは無さそうだが全力じゃないと振り払え無さそうだ! 飯田君早く行ってくれ…!

「今の君はヒーローだろ! 救けるために走れ!!——うぐっ!?!」

「緑谷君!! いまたすけ——」

「早く行け!! 僕が足止めしてる間に応援のプロを呼ぶんだ、その足で直接! 君の速さで僕を救ってくれ!!!」

腕に力を籠めながら飯田君へと叫ぶ、その間にも脳無達の攻勢は続き、四つ目が取っ組み合いをしている顔無しごと僕を多岐に割れた舌で拘束してくる。

飯田君がこちらに来ようとするがその一步を踏み出す前に僕は大声で飯田君に応援を頼む、気持ちは嬉しいが今は余裕がない。

これだから多対一の戦いは嫌なんだ! くっそ気持ち悪いなこの舌……!
「くそお! すぐに戻る!! それまで無事でいてくれ、緑谷君!!」

「大丈夫! 任せたまよ、インゲニウム2号!!」

飯田君はネイティブを背負って全力で戦場から離れていく、脳無達がその後を追う様子はなかった……むしろ僕を締め上げる舌の数と力が強くなっている。

そして三人目の翼の生えた脳無が空中から僕へ向かってその鋭い鉤爪を振り下ろそうと迫っていた。

僕だけが狙いつて訳か……! なら好都合だ、飯田君も離脱したし——全力で暴れさせてもらう、周りの環境はちよつと気遣ってられないな。

ワン・フォー・オール……フルカウル90%——

「——オクラホマ・スマッシュッツ!!」

僕は全身の筋肉のバネをフルに活用し、全身をプロペラに見立てて回転する。身体に絡みついていた舌が引き剥がれて、その勢いで四つ目が壁にぶち当たり、顔無しはブツ飛んでいった先で翼の奴と衝突し絡まりながら地面に落ちた。

どうだ、これがオールマイイト直伝の技だ！止めにはなっていないが、少しは効いたろ？スマッシュによって散らばった脳無達はすぐに立ち上がり僕へと向かって雄叫びを上げながら突撃してくる。

「やっぱり立つか…なら迎え撃つだけさ！——つとお前はあつちだー」

僕も負けじと脳無に向かって突撃する、その時に縛られて地面に倒れたままのステインを路地裏の奥へとほうり投げておいた、これから起きる激しい戦闘に巻き込まないためのせめてもの配慮だ。

「キエエエエ!!」

まず最初に接近してきたのは一際足の速い四つ目だ、気味の悪い声を上げながらいくつものに裂けた舌を伸ばしてくる、僕はそれをサイドステップで躲して反撃の拳を構える。

「カンザス——つうお?!」

今にも拳を振り抜こうとした時、僕の身体がまるで上から押し潰されてるかのよう

急に重くなる、十中八九敵の個性だろう。

この全身に重りがぶら下げられた様な感覚……重力操作か!? なら使用者は——翼の脳無に違いないだろう……あの巨体をあの程度の翼、そして羽ばたきで浮かせられる筈がない!

その証拠と言わんばかりに翼の脳無は飛ぶのをやめて地へと足を着けてこちらを睨んでいた。

そんな推理をしている間にも脳無達の連携は終わっていなかった。左側から顔無し
の黒い剛腕が襲い、右からいつの間にか肥大していた四つ目の巨腕が襲いかかってくる。

「——んがあ!!!」

動きを封じられていた僕は剛腕と巨腕のクロスボンバーに挟まれる、両腕でそれを受け止めギリギリ耐え抜く。

だがそのまま二人は腕を押し付けてきて万力のような力で僕を押し潰そうとしてきた。

負けるかあ! パワー勝負で僕に勝てると思うなよ!! 唸れ僕の両腕筋群ツ!!!

僕は挟まれた状態からその腕を筋肉で少しづつ押し開けていく、そしてふと身体が軽くなった瞬間に一気に両腕を振るって二人の脳無を左右へブツ飛ばすことに成功した。

重力が消えた？効果時間切れか!?——

身体が自由になったことに疑問を抱いていると、足元に大きな影が浮かんでいた。

慌てて見上げるとそこには今まさに鋭利な爪を僕に振り下ろそうと急降下してきている翼の脳無の姿があった。

僕の頭を切り裂くために迫る爪を上体を限界まで反らして躲す、翼の脳無の爪は僕の顔の数センチ上を通り抜け前髪を掠めていく。

ギリギリ避けられた！なら反撃といこう、逃がさないぞ!!

やられっぱなしではいられないと奮起し、通り過ぎ去ろうとした脳無の鳥のような足を左手でガツチリと掴む。

脳無の急降下の勢いに身体が持つていかれそうになるが、筋力と個性ちからで強引に引き寄せて、そのまま翼の脳無を振り回す。

このまま全力で地面に叩きつけてやる!……いやまてよ、こいつの個性は非常に厄介だった。

空を飛べる個性を持ったヒーローは少ない、かといってこいつに地上戦を仕掛けるのは難しいだろう、その上重力操作こいつの個性で飛べる人は叩き落とされてしまうだろう……ザ・フライ“みたいなヒーローなら一撃でやられてしまうかも……!

つまり後続の応援の被害を減らすためにも、こいつはここで確実に行動不能にしま

きやいけないってことだ、翼のタフネスは高い…さつきも出会い頭に叩き落としてやったのにピンピンしてたもんな…!!

僕の全力では足りない、ならば全力の全力で——

「——100%!!MARYLAND・SMASH!!」

考えている間も振り回し続けていた翼の脳無をオールマイトの力で地面へと叩きつける、地面がクレーター状に沈みクモの巣の様なヒビが走る。

翼の脳無が痙攣しながらその中心にめり込んでおり、死なずに無力化出来たことを表していた。

その光景に安堵すると同時に僕の左腕に激痛が走る。

痛つつつ!!!なんだ!?!前より反動が大きくなってる!?!?——

——そんなことを考える暇もなく僕の身体は何か縛られながらビルの外壁へ押し付けられる。

「キエエエエエエ!!!」

痛みに気を取られていた僕は左から迫っていた四つ目の奇襲に反応できず、その多岐に割れた舌に絡まれて壁に叩きつけられたらしい。

「くっそ……」

全身を叩きつけられた衝撃と100%の反動による痛みと痺れから意識が朦朧として、僕の口からは思わず悪態が漏れてしまった。

流石に考えなしでリスクありきの技を使うもんじゃなかった……変なところで追い詰められて無茶するあたりあんまり前世と変わってないとは……笑えないな。

痛む身体を動かそうとしながら眼を細めて前を向く、そこには走りながら僕へとタツクルを仕掛けようとする顔無しの脳無の巨体が迫りつつあった。

戦いは終わってなどいない、相手は三人も居たのだから。

その現実を僕に叩きつけんと言わんばかりに顔無しは速度を上げて迫ってきているが、ダメージがモロに響いている今は四つ目の舌を引き剥がすことも出来ない。

「あつ……やば——」

突如、視界が燃え盛る炎で埋め尽くされ、その灼熱は顔無しの脳無を呑み込む。

「ゴオオオオンツツ!!?.....」

一瞬に全身を焼かれた顔無しは唸り声を上げたあとその場から動かなくなる、鼻には焦げ臭い臭いが漂ってきて顔がヒリヒリと熱いことに気がついた時に僕はようやく頭が回ってきた。

この全てを焼き付くす業火は、まさか——

「来てくれたんだ!エン——」

「てめえら……緑谷になにしてやがる……!」

「——デヴァー……じゃない……?」

僕がその名を呼ぼうとした時、炎の中から聞き覚えのある声が入る、しかし、それは僕の想像していた声よりもずっと若く、ずっと聞き慣れた声だった。

「緑谷、無事——じゃなさそうだ……いま助けてやるからな……!!」

彼は僕へ語りかけながら脳無の舌に捕らえられている姿を確認する、そしてその言葉の続きには……はつきりと怒気が籠っていた。

地面を炎上させていた炎が氷によつて押し退けられて、そこから彼の姿が現れる。

燃えるような赤と凍てつくような白の髪を靡かせ、左に炎を右に氷を携える半冷半燃の少年。

「……轟……君……?」

僕は未だにやや混乱しながら、確かめるように彼の名前を呟いた。

——燃え上がる炎と溶けた水によつて辺りが蒸し暑くなってくる、轟君は明確な怒りをその眼に宿しながら此方へ一步を踏み出した。

小さな大戦の終幕

斜陽の射す保須の街で三人の脳無と対峙した僕は、数に圧されながらもそのうちの一人、翼の脳無を100%スマツシユで倒す。

しかしその反動による隙を残りの二人に突かれてしまいピンチに陥る、そんな僕を救うために怒りと炎を燃やしながら轟君が現れるのだった。

「緑谷を…離せこの野郎っ!!」

轟君は口調を乱しながら四つ目の脳無に向かってその左手から地を這うような炎熱を放つ。

四つ目の脳無は轟君の炎に反応して、舌を収めて僕を解放し迎撃態勢に移っていた。

「——っは！ダメだ轟君!!」

僕は叫びながら地面に着くと同時に轟君に向かって駆け出す、四つ目の脳無は既に轟

君の炎を吸収しており、轟君はそのことに驚いているようで足が止まっている。

「なん——」

カッと目を見開いた四つ目は先程の吸収した炎を放出し轟君の身体が呑み込まれそうになる。

「危ないっ!!」

「——んだとおおおお!!!!」

炎が轟君に届くよりも早く脳無を蹴り飛ばしながら近づいて、僕は轟君を右腕で抱き抱えながらビルの外壁を登って屋上へ逃れた。

「轟君、大丈夫!?!」

「あ、ああ。俺は大丈夫だ……」

僕は抱えたままの轟君に話しかける、轟君は動揺しながら返事をしていた。

「間一髪つてところだったな……! 身体が動いてくれてよかったよ、まあ左腕は死んでるけど……」

「というか轟君、なんでここにいるのさ?! ここは最前線だよ? プロの引率も無しにきたらダメじゃないか! それにヴィランに個性も使って……」

「ああ、悪い……説明するからとりあえず下ろしてくれ……な?」

僕は興奮ぎみに轟君を揺らしながら質問責めにする、轟君は俯きながら顔を赤くして

そう言った。

「はーん、さては助けに来たつもりが逆に助けられちゃったんで恥ずかしいんだな？稀にあることだよ、うん。ここは黙ってスルーしてあげるのが優しさってもんだらう。」

「やつらもすぐに動き出すだろうから手短にね！で、なんでここに？」

「おう、緑谷の気配がしたから……来た」

「……え？」

轟君の説明にならない説明に僕は間抜けな声を出す、きつと顔もひきつっていることだろう。

「気配がしたから……？つまり勘つてこと？なにそれ怖い。」

「あー……その……冗談だ……」

「あつ、うん。冗談ね！ハハハ！轟君もそういう冗談言うんだね！ハハハ……うん」

「……………」

轟君は少し困ったような顔をしてそう言う、僕も苦笑いで返してしまい互いに微妙な空気が流れてしまう。

「そっかー、冗談だったかあ……ならいいんだけど、かなりマジっぽいからちよつと焦っちゃったよ！」

「親父と保須に出張。パトロールに来ててな、んでこの騒動に巻き込まれたんだ。

親父には後ろで見てるって言われたんだが……ビルの上で跳ねながらヴィランを
ブツ飛ばしてどっかにいくお前の姿が見えて、んでイヤな予感がしたから後を追ってき
たら……こんな感じだ」

轟君は沈黙を破って坦々と説明をし始めた、なるほど……そんなに目立ってたのか、僕
は……でも今の話だと……

「そうだったんだ……ってエンデヴァーからの戦闘許可は!? 貰ってないの!？」

「ああ」

「ああって！ダメじゃないか!! 助けられた僕が言うのもなんだけど、許可も無しに個性
をヴィランにぶっぱなすなんて……!」

「緑谷を助けられたなら、後悔はねえ……!」

なんと轟君はエンデヴァーからの個性の使用許可をとらずに戦うつもりだったらし
い、キリツとした顔で言っている轟君だがダメなことはダメだろう。

イケメンだろうと許されないこともあるのだ。

ああ……エンデヴァー、御愁傷様です。今回も減給コースみたいです……

「もうやってしまったものは仕方ないけど……これ以上の戦闘はダメだよ。僕は仮免が
あるから闘うけど、轟君はとにかくエンデヴァーを急いで呼んできて!」

残りは一人だけど、応援は必要だと思っから……じゃあよろしくねっ！」

半分やけくそ気味に轟君へ一気に言葉を投げかけて僕はそのままビルの屋上から大通りへと飛び降りた。

しかし轟君は氷でスロープを創りながら一緒に大通りへと降りてきていた。

「なんでさ!？」

「緑谷、よく見ろ。相手は一人じゃねえ……！」

「マジか……！」

轟君の発言に驚きつつも正面を見据えると、そこには既に臨戦態勢の四つ目の脳無と先程轟君にやられたはずの顔無しの脳無が立っていた。

顔無しの肌は再生をしているようでボコボコと蠢いている、少し経てば轟君の炎のダメージは無くなるだろう……良かったねエンデヴァー、減給は避けられそうだ。

おそらく超再生の個性……あのハイパワーだけじゃなかったか……いったいなんなんだよ脳無達ってのは!ポンポンと個性を出して来て……!!全国の無個性に謝れよ!主に前世の僕とかさ!!

「相手が二人だろうと、轟君が闘うのはダメだよ……ここは僕一人で受け持つ」

「でもよ……！」

僕が轟君に意思を告げると彼は納得がいかないよううで抗議の声をあげようとする。

しかし脳無達は既に行動を開始しており左右にバラけながらこちらに向かつて走っていた。

「でもじゃないっ!!」

「キエエエ!!キエ!？」

僕もワン・フォー・オールを全身に纏って四つ目の脳無へと駆け出す、四つ目は割れた舌を伸ばしてくるが、僕はそれを右手で束にして掴む。

「ミネソタ・スマツシュツ!!」

「ゴオオ!!」

舌を握ったまま思い切り引いて四つ目の身体が浮かび上がり、そのまま片腕の全力で顔無しの脳無へと叩きつける。

二人はまとめてビルの外壁へ突っ込んでいく、振り回しと叩きつけの余波で辺りには暴風が吹き荒れた。

「…前にも言ったけど僕の全力は周りを巻き込んでしまうんだ!わかったら——」

「こつちで勝手に合わせるから気にすんな、もうお前を一人にはしねえぞ、緑谷!」

「轟君!ダメだつてっ!!」

轟君は僕の忠告を聞かずに脳無達へと向き、右足で地面を凍らせて脳無達を狙う。

それに反応した四つ目の脳無が這いつくばるように四足で前に飛び出し、その手に氷

結の波が触れた途端に吸収されていく。

どういいう理屈か知らないけど近接攻撃以外は吸収されてしまうのか!……つてことはこれも——

「キエエエエ!!」

四つ目の脳無は奇声を上げながら辺りを凍りつかせるような冷気を放つ。やっぱり放出してきたか!

「ちい!燃えろ!!」

轟君は冷気を迎え撃つべく左腕から炎熱を放つ、だがその判断は微妙だろう。

仮に炎熱で冷気に打ち勝てたとしても今度はその熱を吸収し放出されてしまい、それに冷気を放つことになって堂々巡りになってしまいう可能性がある。

「それじゃダメだ——ペンシルバニア・スマッシュユッ!」

僕はそれらを考慮してアツパーカットのスマッシュを放ち、炎熱諸とも冷気を暴風で真上へと吹き飛ばした。

冷気と熱気が混じり合い辺りには水蒸気が立ちこめて視界が一気に悪くなっていく。

炎熱も暴風も相手には届かなかったため、脳無達はそれぞれ駆け出して僕を狙って攻撃してきたのが霧の中でもなんとかわかる。

「ゴオオオオア!!——ゴッ!?!」

「キエエエエエ!!——キエ!」

脳無達は雄叫びを上げながら僕へと向かう、顔無しの脳無は飛びかかろうと上に跳ねて、四つ目の脳無は殴りかかろうと腕を歪に巨大化させて振り上げる。

しかし四つ目の振り上げた腕は飛びかかろうとしていた顔無しに直撃して二人は絡み合つてその場に転んだ。

「!——スマアツシユ!!」

僕はその隙を見逃さず駆け出して、二人の脳無をサッカーボールのようにまとめて蹴り飛ばす。

しかし蹴りを放つ直前に四つ目の上半身が肥大化して顔無しと絡まりながら飛ばされていったためダメージは少ないだろう。

なんだ今のは…? 視界が悪くなった途端に連携がとれなくなった…?

やつらの連携は互いを視認しながら行っている様なものじゃないように見えたけど…

「また来るぞ、緑谷!!」

「あつちよつと待つて轟君! 四つ目の方は吸収と放出が個性に含まれてる、轟君の直接攻撃はダメなんだ…よつ!」

辺りの霧は僕のスマツシユの余波で晴れており、轟君の言う通り二人の脳無は適度な

距離を保ちながら僕へ向かってきていた。

轟君の迎撃を手で抑えながら僕は脳無達へと近づいて腕を振るう。

「ふっ！はっ！よっとお！」

「緑谷！やつぱり一人じゃ……！今助け——」

「大丈夫！僕が一人で——」

脳無二人の連携攻撃を時に避けて時に弾いて捌き続ける僕、そんな様子を見て轟君は助けに来ようとするが僕はそれをまたも止めようとする。が、ひとつそこで閃く。

轟君はきつと止めても僕が少しでもピンチになれば手を出してしまうだろう、気持ちはわかるがやはり無許可の個性でヴィランに攻撃するのを見過ごすわけにもいかない。

ならいつそのことこつちで指示を出して個性を使ってフォローしてもらえば危険が少ないのではないか？

それに轟君の個性なら試したいことも出来る！

「轟君！手伝ってもらって、いいかな?！」

「!——おう、いいぞ緑谷!」

「なら僕とこいつらをつ！囲いきれるドーム状の水壁を創ってくれっ!!出来る!」

僕は脳無の攻勢をギリギリで捌きながら轟君に聞く、轟君は少し嬉しそうに返事をしてくれた。なら早速頼みたいね、なかなか余裕がない……!

「出来るが……どうすんだ!？」

「暴れるっ!!」

「——っ!了解だ!!いくぞー!」

「オツケー!!」

轟君は戸惑いながらも右足を前につき出して構える、僕はそれを確認すると脳無二人の身体を掴んで引き寄せた。

轟君の足先から氷柱が伸びてきて僕らの周りを囲んでそこから更に縦へと伸びる、その間僕は二人から抵抗の殴打を受け続けた。

轟君の氷壁はあつというまに僕と脳無達を閉じ込めるドームを造り上げた、その半径は五メートルといったところだろう。

「さあ、反撃だ……!」

僕は掴んでいた脳無の身体を地面に力で叩きつけて一歩後ろへと跳ねる。

叩きつけられた脳無達はバラバラのタイミングで立ち上がりながらこちらを睨んでいた。

「……………」

1秒弱の無言の睨み合いが終わり、僕に向かってそれぞれが別々に動き出す、そこには先程までの連携のようなものはみられなかった。

やっぱりな！どこからか僕らを見ながら指示を出していた奴がいたのだろう、そして轟君の水壁によってそれが防がれたから脳無達は連携がとれなくなっただんだ！

ならこの最大のチャンス逃すわけにはいかない、こいつらがその気になればこのくらしい氷壁ならすぐに壊してしまうだろう…！

一瞬で勝負をつける…！——よし、覚悟を決めろよ緑谷出久！！

「オクラホマ・スマッシュ！！」

「ゴオオ！！」「キエエー！！」

僕はワン・フォー・オールを全身に満たし、脳無達に向かって身体をプロペラの様に超高速で回転させながら飛ぶ。

その衝撃が空気を掻き乱しいつもの如く暴風が発生する、そして氷壁によって密室になったドーム中を逃げ場のない風が勢いを増して吹き荒れていくことで脳無達は動けなくなっていた。

足止めは成功…！まずは四つ目を仕留める！！

顔無しよりも動きが速く一歩だけ前にいる四つ目の脳無、僕はそれに狙いを定めて回転の勢いを殺さないように足を踏み込んでいく。

「100%！！——PENNSYLVANIA・SMASH！！」

踏み込みの衝撃と回転の遠心力、そして全力のオールマイトの力が合わさったアッ

パーカットで四つ目の脳無の顔面を地面スレスレから一気に撃ち抜いた。

四つ目の脳無はその力を全て食らって真上にぶっ飛ぶ、吹き飛ばされた四つ目の身体は氷壁のドームの天井をぶち破っていった。

限界を大きく超えた力の奔流に耐えられなかった僕の右腕には強烈な痛みが走る、しかし来るとわかっていれば堪えられない程ではない。

僕はスマッシュによって更に増した回転の勢いを活かして顔無しの脳無へ迫っていく。

顔無しもこのまま仕留め切る…でもこいつは超回復持ち…！一撃でやれるか…？

いや、やるんだ！前世でオールマイトが脳無を倒したときのように！！

オールマイトの本気の一撃を思い出せ、あれは只の100%じゃなかった筈だ…：…：発の中に100%以上の…！！

僕の身体は回転しながら顔無しの頭上へと進む、超高速の回転の中で僕は冷静に狙いを定めて右足を振りかぶった。

右足に力を籠めろ、流し込め、オールマイトの力を…！100%のその向こう側へ！！

もつと、もつとだ！！ワン・フォー・オールを！僕の持てる全てを！この脚に、この一撃に！！更に向こうへ——

「——FLORIDA!!! S M A A A S H!!!」

ワン・フォー・オールを溢れるほど宿して振り抜いた僕の右足が顔無しの脳無の左肩に直撃して、肉を断ち骨を砕きながらその巨体を地面へと叩きつける。

「ゴオオオオアアア!!!」

衝撃は顔無しの全身を駆け抜けていき、耐えられなかった部分から破壊していく。

破壊されるのは衝撃を叩きつけられた地面も例外ではなく、表面のコンクリートは砕けて散り、その下の土も吹き飛びクレーターを造った。

飛び散った地面の破片と巻き起こる暴風が氷のドームを破壊して、瓦礫と氷が舞い上がり、雨のように辺りに降り注いでいく。

「勝った…のかな?」

僕はクレーターの中心で仰向きで転がりながら、横目で見た顔無しの脳無が地面に埋まりつつ痙攣して動かない姿を見てそう思う。

左腕、右腕、右足、五体のうち三つが痺れてまともに動かないや。これじゃ立ち上がれもしない…でもなんとか倒しきれて良かった…

「あ、やば——」

目の前を見てみるとそこにはさつき僕がぶつとばした四つ目の脳無が直撃コースで

落下して来ていた。

今の僕に躲す余裕はない、当たったら痛そうだなあとそんなことを思いながら覚悟を決めて目をぎゅつと瞑る。

あれ？まだ降ってこないのか？……外れたかな？

何時まで経っても落下してくる脳無の衝撃が襲ってこないので疑問を感じていると、誰かが僕に話しかけてきていた。

「おい……これアいったいどういう状況だ？説明してもらおうか、出久よ」

そこには少し息を切らしているながら四つ目の脳無を掴んでいるグラントリノがいた。
「大丈夫か！緑谷！！」

轟君が慌ててクレーターの中へ駆けつけてくれる、そして僕は轟君に肩を貸してもらいながらクレーターから抜け出した。

「ごめんね、轟君」

「気にすんな緑谷、お前は俺の恩人だからな。むしろいつだって俺を頼ってくれていいんだ」

「はは、ありがとう、轟君」

「おう、緑谷……」

肩を借りながら轟君とそんなやり取りを交わしていると、僕らのいる大通りに集団で人影が現れた。その先頭にいるのは――

「飯田君！」

「すまない！待たせたな緑谷君!!応援のプロを――つてもう終わってるではないか!!?」

「終わってる?おい出久、いい加減説明してくれねえか?」

「あ、はい。すいません、グラントリノ！」

飯田君は僕の言うことを聞き入れてプロヒーロー達をかき集めてくれていた、その様子にグラントリノは更に混乱したのか僕に急かすように説明を求めた。

こんなに早く、しかもたくさんプロが来てくれるなら無理に頑張る必要なかったのは……? いやいや、無事に全員倒せたんだ、良しとしよう!

そういうえばあれほど酷使したはずの右足がそんなに痛まないな……両腕よりマシなくらいだ。

つとそれよりグラントリノに説明しないと! いい加減痺れを切らしてるし!

「えつとですね、ヒーロー殺しを探してここまでやってきたんですが、友達とプロヒーローがヒーロー殺しに襲われてたので救出するために戦闘になりました……倒しました。今はその路地裏に縛って寝かせてます」

「バカ野郎！二人でやるっていつた筈だぞ？……つたく無茶しやがる……んでこいつらは？さつきまで街で暴れてた奴らだよな？」

「すいません……そのヴィランはヒーロー殺しを拘束したあと襲ってきた集団でして、そのの彼に応援を呼んでもらってる間足止めしようと思ったんですが……三人とも倒して無力化しました！」

飯田君にも肩を貸してもらい立ちあがり、僕はグラントリノの質問に簡潔に答えていくと、グラントリノは怒りながらも段々とあきれた様子で僕の話聞いていた。

「ハア……お前は全く……！変なところで師匠譲りなところが多すぎる!!なつとらん!!」

「ひい！すいません!!」

「無事だったからいいものの……ん？おい待て出久、三人だと？」

グラントリノは僕を叱り、僕は平謝りする。そのときグラントリノが懐疑的な顔でよくわからないことを言い出す。

「ええ、三人の脳無……変わってるヴィランで——」

「ここには二人しか倒れてなかったぞ……？」

「——え？」

グラントリノの突然の指摘に僕は理解が追いつかない、三人の脳無が二人に……？それはいつたいたいということなんだ？

僕がそんなことを疑問に思って考え込むより早くその答えはやって来た。

地面に大きく浮かぶ黒い鳥のような影、見上げるとそこには鉤爪を立てながら僕に向かって急降下する翼の脳無の姿があつた。

「まだ動けたのか！——くっ！！」

僕は迎撃しようと拳を構えようとするが、100%の反動が身体に響いているためまともに対応出来ない。

グラントリノは予想外の襲撃に反応できておらず、その爪は一直線に僕を狙って迫る。

ザクリという鋭い音が聞こえた後、辺り一面に暖かな血が飛び散り僕も赤に染まつた。

翼の脳無が僕の上をすり抜けて地面に墜落する、その背にはこいつの象徴である翼もろとも貫いて刀が刺さっていた。

「偽者が蔓延るこの社会も——」

その男は倒れ伏した脳無の前に現れ、その背から自ら投げたであろう刀を引き抜きながらしゃべりだす。

「徒に^{いたずら}“力”を振り撒く犯罪者も——」

その男は刀を翼の脳無の頭に突き立てて言葉が続ける。人を殺すことを当然のように、なんの躊躇もなく……

「粛清対象だ——」

その男は突き立てた刀を抜いて……僕らに突き付けながら顔を上げた。

その拍子にその男の目の周りを覆うぼろ切れが外れて全貌がわかるようになる。

「——全ては正しき社会の為に……」

「ステイン……!」

狂った信念を炎を絶さず瞳に宿し続けた“ヒーロー殺し”ステインが、自らの信念を貫き通すため僕らの前に立つ。

突然すぎる出来事の連続とステインの放つ強烈な殺気によって僕もグラントリノも

駆けつけたプロヒーローも、誰一人動き出せずにはいた。

「……数多くの…偽者……正さねば——」

ステインはグラントリノ達を一瞥したのち、呟きながら先程よりもさらに殺気を増していく。

「誰かが血に染まらねば……！」

ステインが刀をその場で振り下ろす、その血濡れた刃から鮮血が飛沫^{しぶ}く。

「『英雄』^{ヒーロー}を取り戻さねば!!」

ステインが一步踏み込んでこちらへ向かってくる、迸る殺気や威圧感には僕が戦っていた時の比にならないほど熾烈で、その場に居る者全てを戦慄させていた。

「来い——来てみる偽者ども」

皆が気圧される中、ステインだけが立ち止まらず前に進んでいく。

「俺を殺していいのは——本物の英雄だけだ!!」

大人も子供も、ヒーローも素人もない、全ての人を呑み込む狂気の信念の中——

「——ふざけんなよお前え!!!」

「——僕はぶちギレて叫んだ。

「オールマイト本物の英雄も！認めた者も！お前を殺したりなんてするものかよ！！僕はお前を認めない！！——」

僕は身体の動くところにワン・フォー・オールを滾らせて威圧感を放ちながら叫び続ける。

オールマイトを汚すこいつはだけは、ここで止めなくては！！

「お前を狂気の象徴になんてさせない！只の犯罪者として捕らえてやるっ！！」

僕は動く左足だけで跳躍してステインへと迫る。

「ハッ……貴様は本物だあ！！オールライトオ！！」

ステインは僕の突進をヒラリと躲して、背中に蹴りを叩き込んできた。

左足しかまともに動かせない僕はそれを避けることも叶わず吹っ飛ばされた。

しかしステインを氷の柱が襲う、僕に合わせて轟君が動き出していたのだ。

それでもステインは後ろに跳ねて氷柱を躲してしまふ。

「避けられたか！でも本命は俺じゃねえ……いけ！——」

轟君は悪態をつきながらも少し余裕のある顔をしていた。

そして氷柱の影からステインに向かって飛び出すのは——

「——飯田あ！！」

轟君の叫びと共に飯田君がステインに迫っていた、二段構えの攻撃……あの一瞬そこまでやってたのか！

「うおおお！レシプロ・エクステンド!!!」

「お前もやはりいい……!——」

飯田君は雄叫びを上げながらエンジンを暴走状態で回し超高速の蹴りをステインに放つ。

ステインはニヤついた表情で飯田君を睨みながら更に後ろへと大きく跳ねて蹴りを回避しようとする。

「——だがあと一センチ足りなかったな……!!」

飯田君の蹴りはステインの目の前を空振りしてしまい、奴は宙に舞う。

くっこそ!!逃げられる……!!ここまで追い詰めたのに……

「だが俺も本命じゃない、ちようど10分……流石だ——」

「何……?」

飯田君は蹴りが外れても冷静にステインを見続けていた、ステインもその余裕の意味が分からず困惑の表情を浮かべている。

だが少し離れたところに居る僕からはその余裕の訳がはつきり見えた。ステインよりも更に後ろから迫る超高速の人影が——

「いつけええ！兄さん!!!」

「うおおおおお!!!」

その影はターボヒーローインゲニウムであり、既に宙に浮かんでいるステインに逃げ場はなかった。

「俺達の因縁もこれで終わりだ！ヒーロー殺しい!!!」

「偽者がああー!!!」

ステインは怒号を上げるもインゲニウムの肘のエンジンによって超加速したパンチを避けることなど出来ず、その鳩尾に拳が振じ込まれる。

インゲニウムはそのまま拳を振り抜きステインを地面へと叩きつけた、ステインはピクリとも動かずその場で気を失う。

「捕らえたぞ！———んでこれはいったいどういう状況なんだ？」

着地したインゲニウムはステインを取り押さえながら、あっけらかんとした顔で僕らに笑いかけるのだった。

———その後すぐに警察とチーム韋駄天のメンバーが駆けつけて場を収め、この保須

の騒動は終わりを告げる。

それから遅れて駆けつけたのはエンデヴァーだ、轟君が場所も告げずに居なくなつたのでずつと探していたらしい。

轟君と飯田君はヴィランに直接的な危害を加えた証拠がなかったため罪に問われるようなことはなかったが、個性の無断使用と危険な現場に飛び込んだことに対して警察とそれぞれの監督ヒーローにこつてりと叱られていた。

僕は仮免を持っていたから事情聴取のみで終わったんだけどね。

ヒーロー殺しステイン、ヴィラン連合の脳無三名、時間になると10分程度の戦闘だったが……僕にはとても長く苦しい闘いだつた。

おまけに最後は戦闘不能になつてしまつたし……もつと、もつと強くならなきゃいけない……!この筋肉と個性チカラで——

——この変わり始めた運命に負けないくらいに。

「おい出久、これから雄英に向かうぞ！」

「えっ？なんでまた雄英に??いまから行ったら夜になっちゃいますよ？」

唐突なことを言い出すグラントリノに僕は困惑しながら返す。

グラントリノは少しだけニヤリと笑うがすぐに怒りの形相へと変わった。

「夜でいいんだよ……お前と俊典……これから一晩中説教だぁー!!!」

「えええええ——」

——それから本当に一晩中グラントリノの説教は続き、僕とオールマイトは二人して戦慄しながら正座で夜を明かすこととなり、僕の再履修やりなおしでの職場体験は締め括られたのだった。

第七章 ヒーロー×ヴィラン×ヒーロー殺し 保須SOS

Dark side in

「ああ……ちくしょう！なんなんだよあの化け物は!!ハイグレード高性能脳無三体を一人でボコるなんてありかよ…!!」

くそが……絶対に殺してやる…緑谷出久…!」

ヴィラン連合のアジトの隠れ家のバー、そのカウンターを叩きながら死柄木は悪態をついて殺意を振り撒く。

「しかしエンデヴァアの息子の邪魔もありましたし、なにより奴が規格外過ぎるのでよ……もう奴にこだわり続けるのは——」

「うるせえぞ黒霧!それでもアイツは殺さなきゃダメなんだよ!!」

黒霧は死柄木を宥めようとするが逆効果だったようで、死柄木は更に荒れて叫び散らす。

高価なグラスや酒は片付けておこう……黒霧が心の中でそう思ったとき、奥の方にあるモニターの映像が切り替わり通信が入る。

「やあ、また負けてしまったようだね……死柄木弔」

モニターには薄暗い部屋に居るような人影が映る、ヴィラン連合の真の親玉、オール・フォー・ワンが死柄木に語りかける。

「先生……やられたのはあの弱つちい脳無どもだ！俺はまだ負けてない!!」

「なに別に君を責めているわけじゃないよ、でもあの脳無達も弱い訳じゃない。

緑谷出久が強いんだ……今の君よりもね」

「——ッ……わかつてる……わかつてるよ、先生……!」

興奮する死柄木にオール・フォー・ワンは諭すように言葉を続けていく、そんな先生の正論に死柄木は悔しさを隠しきれずにいた。

「……強くなりたいとは思わないかい？」

「……なりたい、なりたいよ先生。アイツよりも……誰よりも強くなりたい……!!」

先生からの問いに普段の無気力な様子とはうってかわって真剣な表情で強くなりた
いと願う死柄木。

「フフフ、それでいいんだ……死柄木弔」

そんな死柄木をオール・フォー・ワンは笑いながら肯定する、全てが思惑通りに進んでいくことを確信しながら。

「君に『チカラ』を授けよう、使いこなせるかどうかは……君次第だが」

「先生……！ありがとうございます、必ず先生の期待に応えて見せる」

「礼はいいよ。何故なら僕は君の先生だからね、君を教え導こう——強くなれ死柄木
弔」

「ああ、了解……先生。俺は必ず強くなって——緑谷出久を殺してやる!!」

まるで普通の先生と生徒のような二人のやり取り、オール・フォー・ワンと死柄木弔はそれぞれの思惑と決意を持って行動を始めていく。

——
緑谷出久と死柄木弔、正義と悪、ヒーロー偉大な師を持つ正反対の二人が、サイラン奇遇にも同じ時に強くなるに己に誓うのだった。

— D a r k s i d e o u t —

幕間 第七・ 五章 魁!! 緑谷塾

徒手空拳は拳法じゃない

僕は三人の脳無に限界を超えた力を何度も使い、ギリギリで勝つことが出来た。

しかし翼の脳無はまだ動けたしステインもどさくさ紛れに逃げようとするので詰めがまだまだ甘かった……インゲニウムがステインを捕まえてくれて良かったよ。

もつと強くならなくてはいけない、そう誓って僕は職場体験を終えたのだった。

「——そこで刀をガツと受け止めて、奴の胴にドカンっとお見舞いして一撃で仕留めてしまったんだ！そして俺達は救けられたんだよ！」

「おおー！一撃なんて普通考えられないよね！」

「そこはアイツだから……としか言い様がねえな」

賑やかな教室の中から一際大きな飯田君の興奮ぎみの声が聞こえる、なにやら飯田君の話でみんな盛り上がっているようだ。

僕は開いているドアから教室に入る、教室の前の方で飯田君を中心にいつものメンバーが集まって話をしているのがそこでわかった。

やたら盛り上がりつつあるけどなんの話してんだろ？楽しそうだから僕も混ざりたいな！

「俺の時も敵に反撃されてヤバかったところで……俺を庇いながら抱えて救ってくれたんだ」

「私も前に抱えて救って貰ったなあ」

「む？麗日もなのか？」

「まあね！」

今度は轟君が話をはじめて麗日さんがそれに乗っかる、そして二人は互いを見合つて若干のドヤ顔を浮かべていた。

あれ、この話つてもしかして——

「デクさんは私のヒーローだから……」

「俺にとつてもヒーローだ……」

「デクさん（緑谷）はさすがだなあ……」

「ん？」

麗日さんと轟君はセリフをハモらせて又も向き合う、仲良しなのかな？

——つて、やっぱり僕の話じゃないか！恥ずかしいから止めてもらおう……悪口よりはマシだけどマジマジ聞いてられるものじゃない…!!

「おはよう！みんななんの話してるのかな?」

僕は思いきつて後ろから声をかける、こういうときは正面突破だ！

きつと気を使つて止めてくれるだろう…！本人の前でわざわざ話すことはあるまいし。

「おはようデクさん！」「おはよう緑谷」「おはよう緑谷君！」

「よお、デク。保須じや大活躍だったらしいじゃねえか？」

「そんな大活躍なんて…僕は出来ることを出来る限りやっただけで——」

「謙遜するな緑谷君！あのときの君は大活躍といつても過言ではない成果を上げていた！流石だ!!」

みんなが挨拶を返す中かっちゃんに僕に尋ねる、僕はそれを否定しない程度に訂正するが飯田君がそれをさらに訂正する。

「そうだよ！流石はデクさん！」

「略してさすデクだな！」

「おお！さすデクだ！」「さすデクか…いいな！」

「いや、その…ちよつと…」

「さすデク！さすデク！」

麗日さんが言ったことをかっちゃんか謎の略語に変えてしまう、そしてみんながそれに乗ってコールを始めてしまった。

なんだこれ！？なんだよさすデクって！！正直恥ずかしすぎるから止めてほしい！！

「お？なんだ？緑谷持ち上げ祭りか？」

「なにににー？さすデク？」

「さすデク！ウエーイ！」

「さす！デク！」

「さす！デク！」

教室の前で騒いでいるのを切島君を筆頭としたパリピ勢が聞き付けてさらに乗っかってきてしまった。

気がつけばクラス中がさすデクの波に吞まれて、その中心ではかっちゃんが音頭をとり、僕が恥ずかしさで悶えるというなんともカオスな状況が生まれていた。

恥ずかしい！なんだよこれ！！高校生のノリって怖い……！

——誰か、誰かこの空気を止めてくれ！！

「騒がしいんだよA組！！もうすぐ授業だつてのにろくに準備もせず騒ぐのが君たちのや

り方なのかい？

まったく…なんで君たちみたいなのが世間から持ち上げられてるんだか…」

教室の後ろのドアを大きな音をたてるように叩きながらB組の物間君が空気に水を差すように入ってきた、おかげで教室中がシーンと静まり返る。

普段なら死ぬほど空気が読めない物間君だが正論を言わせるとこんなに刺さるのか！でもありがとう…このよく分からない空気を止めてくれて！

「まあこんな調子ならすぐに僕たちB組が君たちを置き去りにしてしまっただろうね。いか？スゴいのは君たちA組じゃなくて緑谷君個じ——んがっ!?!……………」

「ふう、なんで注意しに行つたのに煽つてんだよ」

相変わらずのA組への煽りを発揮していた物間君、それを気絶させて止めたのは勿論拳藤さんだ。

恐ろしく速い手刀、僕でなきや見逃しちゃうね。

「悪いなA組、でもさっきのは流石に騒ぎすぎだと思ふよ。こつちの教室までさすデクコールが響いてたんだから」

「ご、ごめんね拳藤さん……僕が始めた訳じゃないけど…ごめん」

「いやいや！この感じ緑谷君も被害者つて感じでしょ？」

「あ、うん。そうなんだけど…でも原因は僕だから……」

「とにかくくーあんまり騒ぎすぎなきやうちらも気にしないから、緑谷君もそんな謝あやまんないでよ……」

僕が物腰低く謝り続けているので拳藤さんも言い過ぎたと思わせてしまったのか少し困った顔をしてしまい、僕と拳藤さんの間になんとも微妙な空気が流れる。

クラスの皆も自分達が騒いだのに僕が謝っているという罪悪感からか静かにこちらを見守っている、かつちゃんに至つては自分の煽りのせいでこんなことになってさぞや気まずいと思つているだろう。「あれとつてくれ」で醤油を渡せるレベルの幼なじみの僕にはわかる。

前にも拳藤さんとこんな空気になった気がするなあ……そういえばその時、拳藤さんとなんかあつたような……体育祭の昼休みに麗日さんと発目さんもいて……はっ！ 思い出した!!

「拳藤さん！話したいことがあるんだ、今日の放課後空いてるかな!!」

「へ?」

僕の言葉に拳藤さんはすつとんきような声を出してそれまで襟首を掴んでいた物間君を床に落とした。

「はああああああああああ!!?」

白目を剥きながら床に転がる物間君、赤く染まった頬を隠すように手を添えて動揺す

る拳藤さん、絶句するクラスメイト、そんなカオスな教室に麗日さんの絶叫が響くのだった——

——時は放課後、僕らはいつもの駅前のファミレスに集まっていた。但し、居るのはいつもの筋肉同盟のメンバーではなく——

「それでデクさん、わざわざ放課後に呼び出してまで拳藤さんに話したいことって何かな？」

「いや麗日さんにはあんまり関係な——」

「それとも私がいると言いいにくいことでも話そうとしたの…？」

「いえ、同席してもらって結構です！」

僕に詰め寄る麗日さんの迫力に負けて二つ返事で了承してしまう、ちなみに学校を出たときから麗日さんはこんな調子で落ち着きがない。

誰かに助けを求めたいがここに居るのは——

「ファミレスの呼び鈴ってこんな風になってるんですね、シンプルな構造…面白くないです！」

「ちよ、発目さん！お店のモノ壊しちやまずいって！」

「壊してませんよ？ちよっと私なりに手を加えようとしてるだけです」

「それがまずいんだって……自分のモノじゃないんだから。いいから早く元に戻しな
？」

「ふーん、まあそれもそうですね。いずれは私が開発したモノを使ってもらおうとしま
しよう」

「

「なんか大きいんだか小さいんだかよく分からない野望……」

——自由奔放な発目さんとそれを止めるので精一杯な拳藤さんだけだ。というか
発目さんはホントにぶれないな……！

轟君も飯田君も麗日さんの迫力に負けて来なかったし、同盟の二人は生暖かい目で見
送るだけだったし、頼みの綱のかっちゃんは用事があるとかで帰っちゃうし！

この状況をなんとか出来るのは僕しかいない、てかわざわざ二人を呼び出したんだか
ら本題に移ろう、そうすれば麗日さんも落ち着く筈だ——

「二——ヒーロー科A・B組合同の自主練!」

麗日さん、発目さん、拳藤さんが声を揃えるが、その表情は疑問だったり、ワクワクしてたり、驚いたりと三者三様だ。

「そう! 近接格闘を主体とした人達のね。体育祭の時やるって約束してたよね?」

「あー、ありましたねそんなこと。すっかり忘れてました!」

「緑谷君覚えててくれたんだ、アタシだけかと思ってたよ」

「うーん、言ってた様な気もする……覚えてらん……!」

拳藤さん以外の二人は忘れていたらしいが僕も正直なところ今朝拳藤さんの顔を見るまでは忘れていた。よく覚えてたなあ拳藤さん、流石はB組の姉御的存在だ!

「期末試験も一ヶ月後に迫ってるし、やるなら今かなって思ったんだよね」

「試験対策かあ……でも緑谷君は自分の特訓とかはいいの? アタシらに教えながらじゃ敵しんじゃない?」

「人に教えるのって自分でやるときより見方が変わるし復習にもなるしね! それに他の人から新しいインスピレーションを得られる気がするんだ」

「そっか、じゃあお願いしようかな!」

「任せてよ、オールマイト流で教えてくからね!」

僕と拳藤さんはそんな会話をしながら話を進めていく、僕はオールマイト達に教わっ

てばっかりだったしきつとこれは現状を打開するきつかけになる!!……答だ…

——その日は細かい段取りなどは決めず、僕がA組、拳藤さんがB組の人達に声をかけるといふことだけ決めて解散となった。

A組の近接格闘タイプの人……筋肉同盟の二人は当然として、あとは飯田君、切島君か？意外と少ないな。

次の日、僕と拳藤さんは職員室を訪れていた、自主練をやる場所……演習場か運動場の使用許可を先生に取るためだ。

「——Aの緑谷です、入ってもいいですか？」

「——B拳藤もいます！管先生いますか？」

僕はドアをノックしてから名乗り、拳藤さんもそれに続く。管先生……ブラドキングに頼むつもりなのか、僕話したことないんだよなあ。

「緑谷か、それに拳藤もいるんだな？わかった、そこで少し待て——」

ドアの奥からブラドキングの声が聞こえる、少し待ってことはオールマイトがトゥルーフォームでいるんだらう……今日も朝から大活躍だったらしいし活動時間を使いきってるに違いない。

「——いいぞ、入れ」

「失礼します！」

「俺になにか用か？緑谷……！」

ブラドキングの指示に従って僕らは入室する、そこには椅子に腰掛けながら僕を睨みつけるブラドキングの姿があつた。なんで威圧されてるんだよ……

「あの……個性を使った自主練をしたいので演習場か運動場をお借りできないかと相談してきました！」

「……なぜ相澤先生ではなく俺に聞きに来た？」

「えーと……」

僕がブラドキングに尋ねると彼は眼光をさらに鋭くしながら尋ね返してくる、だからなんでそんな怖い顔してんだよ……！

「はい先生！それはアタシから説明させていただきますい！」

「ほう……拳藤、どういうことだ？」

「アタシが緑谷君に訓練をお願いしたんです、そしたら緑谷君はアタシだけじゃなくB組のみんなにも一緒に教えてくれるといってくれたので、是非ともお願いしたいんですよ……！」

訝しげな顔のブラドキングに拳藤さんが元氣よく説明をしていくとその険しかった

表情が段々と解れていった。

「なるほど、事情はわかった。だが緑谷にひとつ聞きたい、なぜライバルである我々B組に協力を？」

「きつかけは拳藤さんへのお詫びだったんですけど……B組の人達と話したことってあまりなかったのだからこれを機に仲良くなりたいたってのがひとつですね。

それに……僕らは好敵手ライバルであっても、敵ライバルと一緒に戦う仲間です！ だったらみんなで強くなったほうがいいでしょう!!」

僕はブラドキングの質問に答えていき、その最中で段々と言葉に熱がこもっていった。

「緑谷……お前ってやつは——」

「——はっ!? すいません! 生意気言って……」

気がつけばブラドキングは俯いて肩を震わせていた、僕は慌てて謝るも手遅れかもしれない……まずい、怒らせてしまったか？

「——いいやつだな! すまない、お前は自分だけが圧倒的に強くて、力を鼻にかける奴だと勝手に思い込んでいた!」

オールマイトの弟子とはいえお前はまだ子供だしな、その時は矯正してやろうと日頃から思っていたのだが……まったく俺の落ち度だ、彼は師としても一流なんだな!!」

「えっ、あ、ありがとうございます」

ブラドキングは顔をあげると僕の肩を掴んで職員室中に響くような声で話す、そして豪快に笑いながら僕の肩をバシバシと叩いて話を続けていく。

「で、演習場が借りたいんだっとな、緑谷！俺に任せておけ、 γ でも β でも好きなどを借りられるようにしといてやる！

それに監督役がいるなら俺が引き受けよう！拳藤、B組連中を頼むぞ、みんなで強くなれ！！」

——こうして、やたら熱血なブラドキングのおかげで僕らは自主練のために演習場を借り放題になったのだった。

そして翌日から僕らの「A B組合同近接格闘自主練会」が始まった。

「これで全員かな？」

「ええ、みんな集まったよ！」

僕は隣に立つ拳藤さんに尋ねると、拳藤さんは明るい声で答える。

僕らの前には集まってくれたA B組のみんながいる、その面子は……

A組

障子君、砂藤君、飯田君、切島君、麗日さん。

B組

庄田君、鉄哲君、拳藤さん。

それとサポート科から発目さん：以上で9名か、思ったより多いかな？

「あれ？B組ってもう少し近接格闘のやついなかったか？」

「あー、体育祭で緑谷にトラウマもつちまったやつが結構いてな：これたのは俺と庄田くらいだ」

「気合い入ってんな、男らしいぞ!!」

人数を数えている最中、切島君と鉄哲君がそんな会話をしているのが耳に入る。

体育祭のトラウマ……十中八九騎馬戦だろう、序盤、中盤、終盤、隙なくB組の人達を蹴散らしてしまったと思う……ごめん。

にしてもそんな中でも庄田君は来てくれたのか、前世でのトーナメント直前でも男らしく棄権していたし彼はホントに強い人なのだろうな。

ん？棄権といえばんか忘れてるような……まあいいか、思い出せないってことは大したことじゃないんだろう！

「集まったみたいだし、じゃあそろそろ始めようか——」

「おーい！ちよつと待ってくれ!!」

僕が開始の号令をかけようとしたその時、少し離れたところから大声で待ったがかけ

られた。

出鼻を挫かれてしまったな、いったいなんだっていうんだ!?

「どうして誰も俺に声をかけてくれなかったんだ!!?」

「あ、尾白君! そういえば忘れてた!!」

「忘れられてたのか……」

声をかけて来たのは焦りが顔に出ていて動揺した尾白君だった。

そう……僕らは誰一人尾白くんの存在を思い出すことなくここに集合していたのだ、武闘ヒーローテイ尔マンといういかにもな近接格闘タイプなのにも関わらず、尾白猿夫君のことを誰も思い出せなかったのである!

ごめんね尾白君、でも逆にすごいよ……!!

「と、とにかく! 尾白君も一緒にどうかかな?」

「あ、ああ、勿論一緒に鍛えさせてくれよ! 俺ももつと強くなりたいんだ!!」

「うん! じゃあ気を取り直してこれから1ヶ月、頑張っていこう!」

「おーおー!!!」

なんとか勢いに任せてその場を凌いで、尾白君も含めた全十名で僕らの自主練は始まった。

——これが後の世に“緑谷塾”と呼ばれる雄英高校伝統の近接格闘を主体とした徒手空拳の生徒団体、その設立の瞬間になることをこの時の僕は知る由もなかった。

雄英高校一年A B組合同近接格闘自主訓練会

準備を終えてついに自主練会の開始だ、さあみんなで強くなるぞ！

まず僕が教えたのは基礎トレーニング、それも筋肉を増強するものではなく体幹を鍛え上げて体力をつけるようなものだ。

フォームチェックとメニューの内容決定は筋肉同盟の二人にも手伝ってもらって全員統一したメニューにしてみた。

えっ？全員ひたすらムキムキに鍛え上げて強くするのかと思っただって？

んなバカな、ひとそれぞれ個性があるのに 闇雲に筋力を増したところであまり効果はないだろう…筋肉同盟ですらそれぞれ鍛え方が違うというのに…！

それでも近接格闘で戦い抜く以上は基礎体力とぶれない体幹は必須項目と言ってもいいだろう、なにせ体一つで攻撃も防御も行うのだから。

三日間、みっちり基礎トレーニングを教えた後は各自で継続してもらおう、そして今回の本題に移ろう——各々の個性を活用した特訓だ！！

— そのためにひとり一人と話し合つて内容を決めていく必要があるな……まずは—

—— 庄田二連撃君の場合

「庄田君の個性はツインインパクトだったよね？ どういったものなのかな？」

「僕の個性は打撃を与えた箇所に追加で更に強い衝撃を与えるって感じの個性なんですけど……」

「なるほど…それって追加するタイミングや威力の調節って出来るのかな？」

「威力は上げられるけど、タイミングは試したことないですね…」

僕は庄田君と問答を繰り返していく、そのなかで閃いたことがひとつあった。

もしも彼の個性で衝撃を自在に操れるようになればあの技が使えるかもしれない

……

「庄田君、僕も理論しか知らないんだけど “破壊の極意” とも言われている技をひとつ試しに覚えてみる気はないかい？」

「“破壊の極意” …?! そんなものがあるんですか、でもそんな強さそうなものに習得出来るのでしょうか…」

「むしろ君にしか出来ない技かも知れないんだ！ツインインパクトを持つ君にしか！！もつと自分に自信を持つんだ、君の個性は素晴らしい！」

「僕にしか……！緑谷君、是非ともその理論を教えてくれないでしょうか！！僕も君みたいに強くなりたいんです！」

僕の話に庄田君は食いついてきてくれた、その漢気溢れる強い人になろうという姿勢は本当に刺激になる。

「庄田君、理論自体は単純明快でね……一撃目で物体の抵抗力を殺し、瞬時に二撃目を打ち込むことで完全に破壊する……二撃必殺の技さ。君のツインインパクトならこれが出来るよ、僕はそう思うんだ！」

「二撃必殺の技……してその技に名前はあるんでしょうか!？」

「あるよ、その名は——」

立て続けにしゃべっていた僕は息を吸ってその技の名を伝えることにする。そうその名も——

「——二重の極み!!!」

——飯田天哉君の場合

「こないだは不甲斐ない姿を見せることになってしまった…次はああはならないために……緑谷君、俺はどうすればもっと速くなれると思う？」

「ステインが強すぎただけだとは思うけど……速さかあ……うーん、そうだねえ……」

飯田君は僕に悩みを吐露しながら尋ね、僕は言葉に詰まり考え込む。

飯田君の個性だと画期的に速くなる方法ってこの短期間では身に付かないと思うんだよなあ……かといつていつも通り鍛えてくれつつのものなんか違う気がするし……うーん……

「やや！お悩みのようですね、体育祭のメガネの人!!」

「なっ!?!君は——」

「——発目さん?」

二人して頭を抱えているところに割って入る楽しそうな声、そちらを向くとやたら笑顔の発目さんがいた。

もうわかる、これはろくなことを考えていない……というより自分の興味100%と言ったところだろう。

「そうだ、発目君だったな！なんの用かな？」

「貴方のヒーローコスチュームを見させてもらつたんですよ。貴方……速さに悩んでいますね？」

その原因はあのスーツにあつたんですよ！まずラジエーターの性能が微妙なんですよあれ、きつと貴方の個性に合わせて小型化したせいでしょうね。私ならもつと冷却性能の高いベイビーを同じサイズで搭載できます、まだ開発段階ですが大丈夫でしょう！ついでにベルトのあたりに吸気口でも付ければさらに出力を上げられますかね……

それにスーツの材質自体も改良の余地ありますね、もつと軽くて同等以上の強度に出れば完璧ですね！いやあ全身フルアーマー鎧は弄り甲斐がありますねえ！私、ワクワクしてききましたよ!!」

発目さんは相変わらずの超絶マシンガントークで言いたいことを言っていく、この強引さ……見習いたい！

「おい、なにを勝手なことを——」

「いいんじゃないかな、スーツの改良！」

「えっ!？」

「おお！流石筋肉の人、話がわかりますねえ！」

飯田君が苦言を呈するも僕はそれを肯定する、そのことがあまりにも意外だったのか

飯田君は少し間抜けな声をあげ、発目さんはキラキラとした目でこちらを見てきた。

別に考えなしで言っているわけでない、飯田君の戦闘スタイルは既に確立されていてレシプロという必殺技もある。はつきり言って僕が口を挟む余地がないのだ、後は飯田君個人の地道な努力で個性と技を磨くしかないだろう。

その点、発目さんのスーツの改良という提案はこの短期間で確実に成果をだせるし、場合によっては大きな戦力アップも期待できるだろう。

そしてなによりスーツの改良なんてのは僕や飯田君には出来ないことだ、こればかりは否定しない。

「じゃあメガネの人借りてきますね！いきますよ!!」

「ちよっ！おい、話を聞いてくれ発目君——」

発目さんは笑顔のままジタバタと暴れる飯田君の首根っこを掴んで引き摺っていつてしまった。

実のところ、発目さんの突拍子もない発想と暴走はいい方向に行けばいいが…ダメなことの方が多そうだし今回の合同近接格闘自主練を荒らされる可能性があった。

飯田君の犠牲は必要だったんだ……!

さらば飯田君！君のことは忘れない…!!

——尾白猿夫君、麗日お茶子さん、障子目蔵君の場合

「あれ、私たちはまとめて呼ばれるんだね？」

「ああ、それはね、君達三人は僕とは大きく異なる個性とそれを軸にした戦闘スタイルをしているじゃない？それだと基礎は教えられるんだけどあとは模擬戦形式で地力をあげてもらおうか思い付かなくてね……」

麗日さんが三人で呼ばれたことを疑問に思っていたのでさくつと説明して話を進める。

「なるほど、それでまとめて呼ばれたわけか。して緑谷が俺達の相手をまとめてするということか？」

「それだと僕も身体が足りないから、助っ人の力を借りようと思っててね——というわけで雄英BIG3を連れてきたよ！」

「雄英BIG3？」

疑問の尽きない三人を尻目に僕はトントン拍子で話を進めていく、多少強引なくらいがちようどいいってオールマイトから僕は学びました！

「カウンターの専門家、通形ミリオ先輩」

「うっす、よろしくだよね!!」

笑顔で軽く手を上げて登場するミリオ先輩、なぜか既に上半身裸だ……うーん、今日もいい大胸筋だな!

「蛸足操作の専門家、天喰環先輩」

「蛸足操作?!……まあその通りではある、頑張ります……よろしく……」

環先輩も相変わらずの人見知りを爆発させて、口ではよろしくと言うもののうつ向き加減でみんなと視線すら合わせようとしない。この人には年下だとかそういうのは関係ないんだろうか……?

「超能力・波動の専門家、波動ねじ——ぐえっ?!?!」

最後のひとりを紹介しようとした瞬間、声が出せなくなり呼吸が出来なくなる。

「デクくん! やーつと学校で私らに頼ってくれたね!! 雄英に来たらなんでも教えてあげるって言ったのに、もう7月になってようやくだよ! デクくんが雄英に通うのを楽しみにしてた私らがバカみたいじゃない!!……って聞いているのデクくん!?!」

「波動さん、いきなり後ろから飛びかかって首を絞め落としてはいけない。デクが呼吸が出来てないぞ……」

「完全に極キマってるよね!」

「あつ！ごめんね!!」

「——つぶは！死ぬかと思った!」

首を極めていたねじれちゃんの細腕が少しだけ緩み再び呼吸が出来るようになる、だがねじれちゃんも僕の背中にしがみついたまま離れてくれない。

「あのねじれちゃん？そろそろ背中から降りてくれませんか?」

「やだ!これは私たちが学校で頼らなかつたセイサイなんだから!!」

「制裁って……」

「ねえデクさん……その子誰?っていうかデクさん女の子苦手とか言ってたよね?なんでもそんなに仲良……普通にしてるのかな?」

「ひえ!」

背中にしがみついたままのねじれちゃんと不毛な会話をしていると、刺すような視線と冷たい声が麗日さんから発せられる。僕は思わずビビってしまい情けない声を出してしまっていた。

ヤバい、麗日さん怒ってるよ……いきなり呼び出されたのに身内ノリでグダグダしてたらそりゃ不機嫌にもなるよね、急いで話を進めなきゃ!

「あのね麗日さん……こちらは波動ねじれ先輩、超能力系の個性の持ち主なんだ!そんなもってこの三人は雄英の三年生で以前一緒に鍛えさせてもらってたね、それで今回はこ

の三人にみんなの訓練を手伝ってもらおうと思つて呼んだんだよ！」

「そうなんだ……で、なんでその人はずっとデクさんに抱きついてて、デクさんもされるがままなん!？」

「えつと、なんていえばいいんだろう……ねじれちゃんは妹みたいなものだからあんまり緊張したりしないんだよねえ、あとねじれちゃんもそろそろ降りようか！」

「私のほうがお姉さんなだけどー！」

「そういうところが妹っぽいよね！なあ環？」

「俺に振るのか……波動さん、折角デクが頼ってくれたんだしそろそろ降りて本題に移ろう」

「それもそうだね天喰君！よつと、じゃあお姉さんたちにまつかせなさいー！」

グダグダが続くなか、環先輩の説得によりねじれちゃんが僕の背中から飛び降りてから誇らしげに胸を張る。ありがとう環先輩、このグダグダを収めてくれて!!

「というわけでこれからみんなにはマンツーマンで特訓してもらいます！んでその組み合わせは——

まずミリオ先輩と尾白君！格闘戦のなんたるかを教わってみてね！」

「よろしく、尻尾の尾白君。俺、手加減とか苦手だからダメそうならいつでもいってほしいよね！そこで終わりにするからさ!!」

「よ、よろしくお願いします、俺は生き残れるのか……」

ミリオ先輩は物騒なことを言いながらひきつった顔の尾白君と握手をかわす、いやいやある程度加減して欲しいんだけど……まあ大丈夫だろ……大丈夫だよな？

「次は環先輩と障子君！同じく身体変化系の極意を是非とも教わって欲しい！」

「障子目蔵です、よろしくお願いします、天喰先輩」

「障子……なるほど俺も呼ばれた訳がわかったよ。出来る限りのことはしよう……よろしく」

障子君と環先輩は目を合わせずに握手をしていた、何となくだが環先輩と障子君の相性はいいと思う。

障子君もともとそんなに喋るタイプじゃないし、環先輩も基本は物静かな人だし、黙々と手足が蠢く光景が今から目に浮かぶな！

「最後はねじれちゃんと麗日さんね、ねじれちゃんはこう見えてトツプヒーローばりの超能力系の使い手だからなんでも聞いてみて、女の子同士のほうが話が進むと思うんだ！」

「お姉さんに任せといて！バリバリ教えてあげるんだから！よろしくね〜麗日ちゃん」
「えっ、あ、はい、よろしくお願いします……デクさんと一緒に過ごせると思ってたんだけどな……」

「ん？デクくん？いいよー、じゃあ最初はデクくんについて教えてあげるね!!」

「え、あ、はい！よろしくお願いします!!」

よくわからないけどねじれちゃんと麗日さんは二秒で意気投合してしまった、僕のこ
とって……

まあたぶん僕の動きの癖とか立ち回りでの隙とかを教えてあげるのだろう、ねじれ
ちゃんとは模擬戦で散々戦ってきたからその辺はお見通しだと思うし。

ぶつちやけ僕の専門外の三人の特訓もこれでなんとかなりそうだ、頼みますよ先輩方
……そして頑張れみんな……その先輩達の天然具合に負けないように!!

——鉄哲徹鐵君、切島鋭児郎君の場合

「切島君、鉄哲君、君達の個性はともよく似ているね、硬い！固い！堅い！いい個性だ
!!

さて突然だけどそんな君達の共通の弱点があるんだけど……なんだと思う？」

「うーん、機動力がねえことだろ！結局固くなると動きが鈍るからなあ」

「あー、それもあるけどよ、攻撃力の低さっーか決定力のなさじゃね？俺らの個性だとパ

ワーが上がるわけじゃねえし」

僕は二人に話題を振って自身について考えてもらおう、切島君と鉄哲君は互いに納得したような顔をして共感していた。個性のただかぶりだと考えも似たようになるんだな！

「なるほどね、まあ確かにそれもあるんだけど、それらは君達の個性の強みでなんとなかなる部分だね。機動力がないなら攻撃を耐えて相手に近づけるし、攻撃力が無いっていつても君達のパンチは鋼鉄のハンマーでぶん殴るくらいの威力はあるし、十分だとは思うよ！」

「えー、じゃあ俺らの弱点ってなんなんだ？」

僕の回答に切島君が怪訝な表情を浮かべながら聞いてくる。

「それはね、君達の個性の使い方さ。二人ともまったくいいほど回避をしないよね？確かにその防御力があれば大概の攻撃は効かないし、正面から敵とカチ合って叩くつてのが正攻法になるだろう。でもね……」

「でも、なんなんだよ、緑谷？」

僕の言葉に鉄哲君が少しだけイラつきながら言葉の続きを尋ねる。

「世の中には絶対に食らっちゃいけない攻撃つてのを持つてる奴も結構いるんだよ、君達の強固な防御を貫くほどのね。」

——だから君達にはそれを体感して対応できるようになってもらう！僕の筋肉でその攻撃を再現してあげよう、君達はそれを躲す訓練をするんだよ、無論避けるだけじゃ訓練としては微妙だから耐えられる攻撃と混ぜながらランダムで仕掛けていく。受けるか避けるか常に考えて、感じて、勿論反撃も行う、君達は僕とそんな模擬戦を続けるんだ！

足腰立たなくなるまでボコボコにするからそのつもりで挑んで来いっ!!!」

「お、おう……」

僕が威圧感を放ちながら二人に説明をしていくと二人は顔をひきつらせながら返事をした。

二人にとっては過酷な訓練になるがきつと得るものも多いだろう、僕も気合いをいれていこう!!

——砂藤力道君の場合

「なあ緑谷、お前みたいなのは超パワーを出すにはどうすればいいんだろうな、シユガードーの5倍のパワーを引き上げたいんだが……肉体を鍛えるだけじゃそろそろ限界がキ

「テる気がしてな……」

「うーん、僕と砂藤君じゃ個性が近いようで違うからねえ……僕の場合は貯水槽からバルブを捻って力を全身に流し込むようにするイメージだから、パワーを上げるにはバルブを開けまくるって感じなんだけど」

「結構イメージが具体的だな、俺はなんつーか個性を使うぞ！つて思ったら全身に力がみなぎってタイマーが作動するみたいな感じのフワツとしたイメージなんだよなあ。全身に力を流し込むってのはどんなかんじなんだ？」

「えっと、筋肉をその名の通り肉の筋道すじみちにしてる感じかな。ホースに水が流れるように筋肉に力を流すんだ、でも流しすぎるとホースが破裂して反動を食らっちゃうわけ。僕はそのために筋肉を鍛えて、力の通り道を頑丈に仕上げてるんだよ！」

僕と砂藤君はお互いの個性について話し合っている、出力を上げるコツを僕から得ようとしているらしい。

「なにか砂藤のパワーアップに繋がるアドバイスができるか……」

「全身にパーっとみなぎる俺とは全然違うんだな！そーすつと俺はどうやってパワー上げるか……うーん……」

「うーん、全身に均一に力が回るならそれを一ヶ所にまとめてみるってのはどうかな？腕だけに力を集中すれば5倍の5倍くらいにはなりそうだけど」

「おお、なるほどな！力の圧縮って訳だ!!それなら確かに力の総量を変えずに瞬間的にパワーを上げられるな！よいし、試して見る価値はありそうだぜ！」

僕のなんとなくの閃きに砂藤君が賛同して、上腕二頭筋を見せつけながら楽しそうな笑顔を浮かべていた。役に立てて良かった、これが彼の個性の発展のきっかけになれば嬉しいな！

僕も自分の強化策を見いださなきゃな：現状の筋肉でワン・フォー・オールを強化するにはどうすれば……

「なあ、さっき聞いてて思ったんだが、俺はてつきり緑谷は個性で筋肉を強化して超パワーを出してると思ってたんだが、逆に筋肉が個性の下地だったんだな！」

それに例え話で筋肉をホースに例えてたけど、緑谷の筋肉はゴムホースつーより鉄パイプみてえな頑丈に出来たもんだと思うけどな！まああくまで俺の感想なん——」

「ちよつと待って！今筋肉がなんだって?!」

「いやだから、筋肉が個性の下地でホースより鉄パイプだって……」

「それだ！それだよ砂藤君!!」

砂藤君の何気ない感想が僕の頭に閃きの雷を落とした、ああ僕はどうしてそんな単純なことに気が付かなかったんだ！

「筋肉は個性チカラの通り道であると同時に個性を發揮する一番の土壌じゃないか……ああ、

シンプルすぎて思い付きもしなかった！複雑に繊細に細部まで考えることに必死すぎたせいかもな、もつと大雑把にかつ大胆に。そうオールマイトみたいになるべきだったんだ……！

昔のことや考え方を引き摺り、彼みたいには成れないと、頭のどこかで思ってしまったていたんだな……違うんだな、成るんだよなオールマイトに、その更に向こうに……！！

僕の筋肉は鋼鉄の筋道に……いやもつと柔軟で頑丈な……ステンレスを編み込んだ耐圧ホースのような……違う！もつと大胆に考えてみよう、そう、固くて柔らかく頑丈なそんなナニカにだと仮定すれば……それを作るのは僕の筋肉と個性で……

そうだ！脳無とやりあったときの限界を超えたあの力がそうだったのかも！限界なんてとうに超えた力を使ったはずなのに反動がやたらと少なかったあれだ！

あの感覚を呼び戻して……荒削りだが高めていければ今の限界を大きく超えられるだろう……！！

よーし、そうと決まればなから始めようか……精神統一か？いや実践形式のほうが僕には向いてるか？うーむ、とにかく行動を——」

「おーい、緑谷ー。大丈夫かー？」

ひとりで考え込んでいると砂藤君から声をかけられる、そこには心配そうな顔をする砂藤君。

「どうやらまた独り言を呟きながら自分の世界に落ちていたみたいだ……だがおかげで光明は見えた！」

「ありがとう砂藤君、君のお陰で僕ももつと強くなれそうだ!!」

「おう！そりや良かったぜ、一緒に頑張ろうな!!」

「「応!!」」

砂藤君がきっかけとなりついに僕自身のパワーアップに繋がるきっかけをつくることが出来た、やはり持つべきは筋友ともだな!!

——これでほぼ全員の特訓メニューが決まった、だがまだ全員ではない。最後は彼女の特訓メニューと一緒に考えること、さあ仕上げといこうか!

拳藤一佳という少女

この合同自主練もいよいよ大詰めだが、まだひとり特訓方針が決まっていない人がいる……それは誰かって？それはね——

——拳藤一佳さんの場合

「みんなの訓練内容決まったね、お疲れ様緑谷君！」

「ありがとう拳藤さん、でもまだみんなじゃないよ。拳藤さんの特訓メニューを考えなきゃね！」

「そっか、アタシが残ってたのか……なんだかバタバタしてて忘れちゃってた」

演習場の鍵を借りに職員室にいった帰り道、その演習場へと向かいながら僕と拳藤さんは話をしてた。

この合同自主練が上手くいっているのは細かいところで動き回ってくれている拳藤さんの尽力あつてのことだろう。

拳藤さん……自分の訓練のことを忘れるくらいみんなのために頑張ってくれているん

だな……よし、絶対に彼女の力になろう、それが僕に出来る一番の御返しだろう。

「拳藤さんの個性は拳を大きく出来るものだよね、随分と振り回してたしかなり取り回しがいいように見えるけど重くはないの？」

「大きくなつた分だけしつかり質量は増えてるらしいんだけど、振り回す時に重いつて感じたことはないかな。なんでそうなるかは私にもわからないんだけど……」

「ははは、まあ個性つてそういう超常現象だしそんなもんだよね、つてことはたぶん全身に個性のブーストがかかっている筈だね。ならそれを生かしていこうか！」

僕は拳藤さんの話を聞きつつ頭の中で個性の有効活用方法を考えてみる。

基本的な戦闘スタイルは近接格闘で更に言えば拳法家……巨大化する拳にブーストされた身体機能……そういえば巨大化するといえばあの人の技を参考にするのがいいかな？

「あのさ僕の知り合いのヒーローに巨大化の個性の人がいて、その技を参考にしてみようと思うんだけど……どうかな？」

「それってMt. レデイのことでしょ!?!実はアタシ彼女のファンなんだよねえ、まさに身体一つで戦う女性つて感じで憧れてるんだ！」

そういえば体育祭の時から思ってたんだけど緑谷君つてMt. レデイと仲良いよね? どういう関係なの? もしかして恋び——」

「ちつ、違うよ拳藤さん！えっと、その、彼女とはオールマイトとの修行時代にすごくお世話になった方でね、それで今もいろいろ仲良くしてもらってるんだよ。だからそういう関係とかじゃないんだ！」

拳藤さんの思いがけない発言に僕はかなり動揺してしまい早口でそれを否定する。まさか拳藤さんがM t. レデイのファンだったとは…

「ふーん、そうなんだ。やたらと否定するあたりに怪しさを感じるけど…まあいいわ！それで参考にするM t. レデイの技って？」

「それなんだけど、M t. レデイの必殺技でキャニオンカノンってあるでしょ？あれって走って加速した勢いが巨大化するときそのまま大きくなってるらしいんだよね。」

つまり約時速25 kmの勢いが巨大化して約13倍になるから…：時速325 kmに成るわけさ、更に質量も13の3乗倍になってるから…：当たったときの衝撃はもはや計り知れないものに成るんだよ！」

「そうして聞くとやっぱり巨大化の個性ってヤバイパワーなのね…流石だわM t. レデイ！」

自分で説明しててもその凄さが改めてわかる、やはり大きいというのはそれだけで有利なんだ。

パワーだけで言えばM t. レデイはヒーロー界でもトップクラスの持ち主と言える

だろう。

「そう、そこで拳藤さんの巨拳ならこれと似たようなことが出来ると思うんだよね！

そこで試してもらいたい技が——絶招歩法ぜっしょうほほう。

突きを繰り出す突進技さ、拳法家の拳藤さんも聞いたことあるんじゃないかな？」

「あー、アタシ歩法はどうも苦手で……巨拳に遠心力で振り回されちゃうんだよね」

「なるほど、ちよつとやってみようか！見ててね」

そういつて僕は拳を構えて右足を前に脚を自然に開く、そして一息。

「ハッ！」

僕は掛け声とともに左足右足の順に地面を踏み込み、そのパワーを全て乗せるようにして右の拳を突きだす、飛び出しで2メートル半、腕の突き出しで1メートル半の計4メートルの射程の突撃。

それにより空気がバンツという乾いた音を立て、辺りには拳圧によって風が流れた。

「つと、まあ個性なしで使うとこんな感じかな」

「わあ…凄く綺麗で鋭い突き…見惚れちゃった。緑谷君は中国拳法まで使えるんだ、なんでもアリって感じだわ……！」

「あはは、昔知り合いから教え込まれたもんで…それに人生の大半を力の流れを汲むことに費やしてきたから中国拳法とは相性が良かったみたいなんだよね」

拳藤さんの送る熱い視線に僕は少しだけ照れながら返事をする、再履修やりなおししてからずっとワン・フオー・オールと向き合ってきたのだから力の流れを制御することにはかなり自信があるんだよなあ。

「じゃあやってみようか拳藤さん！ 勿論個性を発動してね、タイミングとしては——」

「——右足を踏み込む瞬間、かな？」

「——だね」

僕が言おうとしたことを拳藤さんが割り込みで言う、お互いの考えが合っていたことに思わず頬が緩み、僕と拳藤さんはニヤリと笑っていた。

「すう……………ハア!!」

拳藤さんは呼吸で気を整えてから暫くして一気に動き出す、地面を踏み込む同時に拳が巨大化していき爆発的な勢いが生まれる。

拳藤さんが拳を突き出し切った頃にはそのサイズは普段の10倍くらいになっていて、拳先は元いた位置より裕に10メートル越えた先にあった。

「すごい……！ 本当に突きの距離が伸びた！ やったよ緑谷君!!」

「うん！ 実験は成功だね！ でも——」

「——軸がぶれてたよね……」

拳藤さんは技の成功を喜ぶもすぐに真剣な顔で考え込む、技自体は悪くないし力の伝

達も上手に出来ていたと思うがまだ足りない。

「そう、それに踏み込みと巨大化のタイミミングがまだ改良の余地がありそうだね。

でも今の絶招歩法を見ててどうすればいいか判ったよ、率直に言うとな半身が巨拳のパワーについていけないんだ。

だから身体の軸がぶれるし踏み込みの勢いも足りてないんだね、そこも踏まえて直せば射程も20メートルくらいになるんじゃないかな」

「20メートル……近接格闘としては驚異的な距離だね。ねえ緑谷君、アタシはどういう方向で下半身の強化をしていけばいいかな？」

僕は少し厳しい言い方をしつつ拳藤さんの技を評価する、それを受けて拳藤さんは納得したようですががるような顔で僕に尋ねてきた。

「ここまで頑張ってくれた彼女が僕に助けを求めている、皆の為に頑張れるような優しく健気な娘だ。

必ず彼女の技を完成させて上げたい、ならば僕に出来ることは――

「拳藤さん、下半身の強化なんだけど個性のブーストの調整をするのもひとつの手だとは思うんだけど……僕はもつと直接的に下半身の身体機能を底上げするのが最善策だと思ふんだ。

それでその方法なんだけど、アレをやるのが一番だと考えてる……この後、付き合っ

てくれるかい？」

「……アレ？」

—— 拳藤 side in ——

「……はあ

んっ……

ふう………」

誰が聞いても、百人中百人が艶かしいと感じるような声。

その声の出所は他の誰でもないアタシ、この口から漏れ吐き出されていた。

自分でも出したくて出しているのではない、しかしアタシの紅潮した顔がそんな訳がないと言わんばかりにそれを否定していく。

「——綺麗だよ

拳藤さん……」

そんなアタシの声とは打って変わって、低く、男らしく、でも優しげな声のアタシに投げ掛けられる。

「んっ… そんなに見られてると… 恥ずかしいよ。 みどりやくん

……」

アタシは口ではそう言うものの、緑谷君に視られているということに対して、身体を強ばらせてながらもどこか喜んでいるのかも知れない。

緑谷君の視線を意識し始めた時からアタシの身体の中から絞り出される熱い雫がなによりの証拠だ。

「 はあん…、 ああ つん …」

アタシは緑谷君に視られ続けながら行為を続けていく、無論その唇からは嬌声がどうしようもなく溢れてくるのだが。

身体がどんどんと火照ってくる、特に下半身したのほうは自分でも驚くくらい熱を帯びており… そのまま果ててしまいそうだ。

「おっと… そろそろ一人じゃ無理かな。 じゃあ僕も入るよ」

緑谷君はそんなアタシの考えなどお見通しのようで、気が付けば彼はアタシの後ろに立っており、そしてアタシの世界に踏み入ってきた。

彼の逞たくましい太腿がアタシの太腿を挟み込むように延びてきては触れていく、湿り気と熱を帯びてたアタシの太腿より彼のそれは少しひんやりとしたもので、お陰でアタシの

熱が彼に伝播していくのがまるわかりだ。

彼の鍛え上げられた両腕がアタシの両脇の下から差し込まれる、自分では女の子らしさなどとうに忘れて鍛えてきたつもりだった。

だが彼と比べればアタシの筋肉質な腕でさえも女の子の細腕と化しており、アタシが女であることを実感させられる。

彼との距離が物理的に近づいて胸の鼓動が高まっていく、この脈打つ心臓はアタシの心の叫びなのだろう。

彼の左腕はそのすぐそばにあり、胸に触れるか触れないかのギリギリの所から延びている。

いっその胸に触れて：寧ろ乱暴に押しつけて、そうしてくればこのアタシの鼓動が彼に伝わってしまうくらいに近づいてしまえば、アタシは楽になれるのだろうか。

「もつと強く抱えて離さないで」と言えれば……そんな言葉は口から出ることなくアタシの中で消えていく。

「拳藤さんっ……」

そろそろ動くよ、一緒に。

いいね？」

耳元に緑谷くんの囁きが聞こえ、それに伴う吐息がアタシの首筋を擦る。瞬間、首から背中にかけて駆け抜けるゾワリとした快楽にも悪寒にも似たような感覚、思わず腰が砕けて力が抜けそうになるが必死に堪えた。今はそれすらアタシの身体を熱くする。

「ふっ…… んんう、」

緑谷君の言葉に対してアタシは言葉で返すことができず、ただだだ吐息を漏らしながら首を縦に振る。

「じゃあいくよ、　　せーのっ——」

緑谷君の掛け声に合わせてアタシは腰を下ろす、しかし彼の動くタイミングとアタシの動きがずれてしまった。アタシの柔らかな膨らみをもつ果実が、彼の鋼鉄のような二本の大樹の幹の根元へと堕ちていき波打ちながら形を変えていく。

「——ああっ……」

アタシは思わず声を上げるも、それは驚嘆というよりも喜悦の声と呼ぶに相應しいものとなっていた。

アタシは彼に目線で抗議をする、彼は「ごめんっ……」と一言だけアタシの耳元で囁いた。

熱い雫が再び湧き上がる。

「はあ……　　はあっ……　　んっ。　　」

「ふっ… ふっ… ふんっ…」

アタシと彼の行為はそれから繰り返されていく、互いの漏らす吐息と言葉にならない熱の籠った声だけがその口から発せられる。

アタシが腰を下ろしては上げ、彼もそれに合わせて器用に身体を動かしていく。

次第に彼の身体も熱を帯びていくのがわかる、彼と触れあっているアタシの一部にその熱が伝わってくるからだ。

お互いの熱気が入り交じりまた身体が熱く、熱くなっていく。

アタシから滴る熱い雫が彼の身体に落ちていく、彼もまた熱き雫を迸らせながらアタシと共に動き続け、二人の雫が混じりあう。

彼と触れあっているその一部を湿らすのは最早どちらのものか分かりはしない。

繰り返される肉をうねらす上下運動、高まってくアタシの下半身した…いや全身すべてというほうが正しいだろう。

そしてついにアタシはその高まりから限界を向かえようとしている。

「はあ… みどりや…くうんっ んっ…アタシ…っ もう

」

「オツケー じゃあラストっ… 一緒にいくよっっ」

限界寸前のアタシの身体、そんなアタシの口から紡がれる言葉は息も絶え絶えなもの

で、普段の自分からは想像もつかないくらい弱々しく甘ったれた声だった。

緑谷君はそんなアタシを優しく許容して終わりを告げる、だがすぐに終わらさず最後まで苛め抜く辺りに彼の本気さを感じた。

「せーのっ——」

「あああああっん——」

緑谷君が掛け声と同時に一気に腰を上げる、アタシはそれに合わせてケダモノのような声を上げながら身体を動かし最後の一滴まで雫を捻り出し——果てた。

アタシはその場に倒れこんでしまったが、火照った身体に冷たい床が触れるとなんともいえない感覚が心地よい。

このまま床に抱かれるのも悪くないとそう思ったときにアタシに影がかかる。

「拳藤さん大丈夫？ちよつと激しくやりすぎちゃったかな……」

緑谷君がアタシの火照りきった身体にタオルをかけながらゆつくりと上体を起こしてくる。

行為が終わって自らも疲れている筈なのにアタシを労って気遣ってくれる、やっぱり彼はどこまでも優しく逞しい。

「はあ……はあ……大丈夫っ…… ありがとう」

気遣ってくれた彼に対してアタシは肩で息をしながらお礼を言う、渡されたタオルで

身体を拭いてみるとすぐに乾いていた布地が湿り重くなり、いったいどれだけの雫が湧いていたのか分かるようで少し恥ずかしい。

「やっぱり下半身を鍛えるといったらこれに限るよね——」

「スクワット!!」

彼はとてもいい笑顔でそう言った。

そうアタシが励んでいた行為、それはバーベルスクワット、緑谷君はその補助に入ってくれていたのだ。

大腿筋を中心とした全身筋力トレーニング、かなりきつかったがその分だけ成果は上がるだろう。

それに——

「ねえ緑谷君……また付き合ってくれ……?」

「勿論さ! トレーニングならいくらでも付き合うし、なんでもいってね!!」

アタシが一言だけ尋ねると、緑谷君は笑顔を絶やさず返す。

純粋にアタシが筋肉を鍛え上げるのが嬉しいのだろう、先程までのスクワットでもその熱気がわかったくらいだ。

「じゃあ…… また、よろしく……ね？」

アタシは口元に流れついた熱い雫を舌で舐めとりながら彼にそう告げた。

—— それにこれは……クセになりそうだ。

—— 拳藤 side out ——

合同近接格自主練が始まってもうそろそろ一ヶ月が経とうとしている、月曜火曜は訓練、水曜日は休養としてみんなで勉強会、木曜金曜にまた訓練、土曜は自由参加の基礎トレ日、日曜は完全休日……そんなサイクルで過ごしていき、そして今日は最後の日だ。流れはいつもと同じ基礎トレーニングで身体を暖めてから各自の特訓メニューへ、そ

して最後は僕ひとり対全員の戦闘演習だ。

演習ではみんなが鍛え上げた必殺技や連携を駆使して僕を追い詰めてくる、庄田君の二重の極みや拳藤さんの絶招歩法などどれも強力で僕も捌くのが大変だったりした。

それ以外にも飯田君のV3スーツだったり尾白君のミスディレクションアタックだったりといういろいろあったのだが、詳しく話すと滅茶苦茶長くなっちゃうからその話はまたの機会にとっておこう。

「お疲れ様でした!!」

全員の揃って締めめの挨拶をする、僕らはこの1ヶ月の間にかかなり強くなれたと思う、僕も新技を完成させられたしね。

「明日はいよいよ期末試験だ、皆の今日までの頑張りは決して無駄にならない! 気合い入れていこう! 以上解散!」

「ありがとうございます!!」

僕が合同自主練の締めめの言葉を述べて、全員で礼を言って終わる。武道は礼に始まり礼に終わるのだ。

—— ついに期末試験が始まる、僕の実技の相手は前世と変わらずオールマイトになるだろう。

—— 話は少し逸れるけど、僕とオールマイトが本気で闘う舞台が整うのは実のところ初めてじゃないんだけどね。

幕間 七・ 五章 魁!! 緑谷塾

第八章 筋肉バカとテストと相棒

緑谷出久、相棒（サイドキック）になる。

僕は1ヶ月のAB組合同近接格闘自主練会を終えた、なかなか辛く厳しい特訓だったがみんなでソレを乗り越えて、一段と強くなれたと実感できた。

そして期末試験が始まる：僕の実技試験の相手はおそらく前世と変わらずにオールマイトなるだろう。

だが僕とオールマイトが闘う機会は過去にもあったのだ。

なぜそのようなことになったのか、記憶は仮免試験を合格した次の日まで遡る――

「さて、まずは仮免合格おめでとう、緑谷少年！」

「ありがとうございます、オールマイト！」

僕はオールマイトから賛辞を送られる、オールマイトに褒められるのは何回だって嬉

しいもんだ。

ここは僕らの暮らす……いや今日からは僕だけが暮らすあのマンションの部屋だ。

そこにオールマイトがやって来た、理由はこれから明かされるだろうが……おそらく今後の修行の内容についてだろう。

「それでオールマイト、今日はどうしたんですか？やはり今後のことまで？」

「H A H A H A！気が早いな緑谷少年！そんなに私からの修行が楽しみなのかね？まあその話もあるのだが、まずはこれ！」

そう言うときオールマイトは楽しそうに笑いながら僕に金属製のスーツケースを渡してきた、僕はそれを受けとるが結構な重みがあり少しバランスを崩しそうになる。

片手で受けとるのはちよつとキツイぞこれ……！

「アカイケースですね……なんですこれ？」

「フフフ、それは私からの合格祝いだよ！開けてみるんだ！さあ！さあ!!」

「ご、合格祝い!?ありがとうございます、じゃあ早速失礼して——」

待ちきれないといった感じの表情のオールマイトに急かされて僕はケースを開いた。

そこ入っていたのは——

「これはっ！オールマイトの銀時代シルバーエイジコスチューム後期型!!…の緑色のカスタムカラー

!?!それに同系色のバイザー付きのヘルメット……?」

意外なプレゼントに僕は動揺しながらその中身を物色しては口走る。

なんで急にコスチュームを…？それにこのヘルメットのデザイン…昔読んだバトル漫画の主人公の息子がヒーロー変装する時に被ってたやつにそっくりだな。名前はなんだったかな、確かグレートタイヤマン？いや違うな…駄目だ思い出せない…！

「H A H A H A！驚いたかね緑色少年？これが私からの合格祝い、君のヒーローコスチュームだ!!前に君が持ってきていたやつは大分ボロボロになっていたからね、私のスーツ開発をしているとこに作ってもらったのさ!!機能の詳細はその説明書を読んでくれ！」

僕はご機嫌なオールマイイトに促されるように説明書を読み込んでいく、どんな機能が…？

なるほど、スーツは頑丈でブーツはスパイク付なのか。(詳細は第二章三話の通りです)

そしてこのヘルメットとマントは…カッコいいと思うのでつけときましたっけ感じだな、特に変わった機能はなさそうだ。でもなんでヘルメットなんてつけたのだろうか…？

「本当にありがとうございますごさいますオールマイイト!でもこのヘルメットってなんでつけてるんですかね?サポート企業の趣味ですか?」

「ホントいいところに気がつくな緑谷少年…!!私がこのタイミングで君にコスチュームとヘルメットを授けた意味…それはね——」

僕の質問にオールマイトは含みのある笑顔で答えていく、いったいなんの為に…?

「君にこれから私の相棒^{サイドキック}として私について回って回って実戦を経験してもらうためさ!!!さあ修行も最終段階へと突入だ!!!」

「え?」

オールマイトの言っていることの意味がよくわからず僕は間抜けな顔で間抜けな声を出してしまう。

そして数秒考え込んでから僕はその言葉の意味を理解した。

「エエエエー!!?!?僕がオールマイトの相棒^{サイドキック}にいい!!?!?」

オールマイトの突然の宣告、僕は前世から続く憧れの存在オールマイトの相棒^{サイドキック}としての活躍が始——

始ま——

——結論から言うと、始まらなかつた。

「またやつたんですか、オールマイト?!」

「すまない、ナイトアイ! つい……」

「これで7日連続ですよ!?! 本末転倒つてもんじやすまないですよ……」

オールマイトの衝撃の宣告から一週間が経った今日、僕の目の前ではサーナイトアイがオールマイトに苦言を呈していた。

その原因は僕……というより僕に対するオールマイトの扱いだ。

「緑谷出久に実戦経験を積ませるために相棒サイドキックという形をとつたのに、貴方が一撃でヴィランを倒してしまつたら意味ないでしょう!?!」

「いやあ……ヴィランの強さも未知数だし……返り討ちにあつて大ケガでもされたら困るし……なによりヴィランが目の前に現れると身体が勝手に動いてるんだよね! 私の中の正義が止められないって感じでき!!」

「その心意気は素晴らしいですが、今回は話が別です。緑谷出久に強くなつてもらわなきゃならないでしょ? というか緑谷出久なら大概のヴィランには負けませんよ……過保護すぎるんだオールマイトは!!」

二人の話し合いは白熱していく…僕の相棒^{サイドキック}生活が始まらなかったのは概ねサーナイトアイがいった通りだ。

この一週間、相棒^{サイドキック}としてオールマイトに着いて回っていたがヴィランと闘う機会は一切訪れず、相棒^{サイドキック}というよりサポーターというほうが相応しいなにかになってしまっていた…まあオールマイトの活躍が最前線で見られて僕^{デク}としては最高ののだが、オールマイト^{オールマイト}の弟子としては全くもって最低だろう。

「……やはりオールマイトではなく他のプロヒーローの相棒^{サイドキック}として着けるべきだったんですよ、いきなり業界最高のヒーローオールマイトの相棒^{サイドキック}は無理があつたんだ！」

「緑谷少年は私の弟子なんだけど…それにそんなに都合のつくヒーローがいるかね？ ナイトアイはほとんど戦闘には出掛けないだろう？ いるかなあ？ なあ緑谷少年？」

「えっ!? 僕に聞きますか…!」

サーナイトアイの別計画^{アナザープラン}にオールマイトは顔をしかめながら僕へと話を振る、僕は完全に聞きに入っていたので動揺して返事をしてしまった。

オールマイト…やっぱり師匠として僕を育て上げたいんだろう…でもサーナイトアイの言うとおりではあるからなあ。

オールマイトは厳しい修行を課してくるものそこには自分が何とかするという絶対の自信があるからこそその厳しさがあるのだ、しかし、ことヴィランとなるとそうはい

かない。

相手の実力は未知数、手加減もしない、危険な一線も越えてくるだろう。プロヒーローとして最前線を走り続けているオールマイトだからこそヴィランの恐ろしさを誰よりも分かっている…それ故、過剰なまでの心配をしている…筈だ。

つまりオールマイトが心配しないくらいヴィランとも渡り合えるってことを証明するためにも他のプロヒーローの相棒として働くのは最適解と言える…サーナイトアイはよく考えているなあ。

でも問題が一点、こればかりはなあ……

「しかし実際のところそんな都合のいいヒーローが居ますかね？端から見たら正体不明の新人ヒーローですよ僕は…」

「ふむ、確かにな…緑谷少年が私の弟子だと知っていて、尚且つまだ中学生の仮免所有者ということに理解があつて——」

「私のような調査中心の事務所ではなく、ヴィランとの近接戦闘を常に前線で行っているようなタイプで——」

「僕がヴィランと闘えるだけの實力があると信頼してくれて、個性の使用許可を出してくれるようなプロヒーローなんて——」

「……」

「……」

「……」

「「——いるじゃないか!!!」」

——それから一ヶ月後、僕はある人とともに市街地でヴィランとの戦闘の最前線にいた。

「——ヴィランが巨大化した!?……まあ相手が悪かったわね、私なら問題ないわ! 一撃で決める、準備してオールライト!」

「わかりました! いつでもいけます!!」

僕は彼女からの指示を受けて大きく返事をしながらしやがみこんでからワン・フォー・オールを全身に巡らせて、こちらに駆けてくる彼女を受け入れる体勢をとる。

そして彼女が僕の手の上に足をかけた瞬間——

「——いつけええええ!!」

巨大化したヴィランの顎に向かって抉り込むような角度で僕は彼女を射出した。

彼女は矢のようにヴィランに向かって飛んでいく、身長162センチの女性としては少し大柄な彼女だが僕の投げた勢いとその質量だけではあの巨大なヴィランを倒せないだろう。

だがソレだけで終わるようなひとはない、彼女はヴィランに向かう最中、自身の強力な個性を発動し——巨大化した。

「グラウンド・キャニオンカノンツ!!」

彼女は叫びながらそのまま飛び蹴りを放ち、僕の投擲と巨大化による超質量が合わさった圧倒的な衝撃がヴィランの顎を撃ち抜く。

巨大なヴィランは一瞬で意識を失いその個性が解けて、空気の抜けたアドバルーンのように小さくなりながら地面へ倒れ伏せた。

おっと、あのまま地面に落ちたらその質量で街に甚大な被害が出てしまう、賠償金は少ないに越したことはないだろうしさっさと僕が動かなきや!

「キャッチします! そのまま戻ってくださいっ!!」

僕は叫びながら地面を蹴りあげて彼女に向かって跳躍する、そして僕の言葉のままに個性を解除して元のサイズになった彼女を抱えて、地面を滑るよう着地した。

「お疲れ様です、大丈夫ですかM t. レディ?」

僕の実戦研修に付き合ってくれているそのプロヒーローの女性、M t. レディに声を

かけながらそつと下ろした。

こうなったのは一ヶ月前、三人揃ってM t. レデイの存在を思いだしたその瞬間からだった。

その場でM t. レデイに連絡をしてトントン拍子で話が進んでいき、気がつけば僕はオールライト事務所からM t. 事務所に貸し出された相棒サイドキックという形でM t. レデイと共に現場に立つことになった。

「デクく…オールライトもお疲れ様、今日もバッチリだったわね！」

M t. レデイが僕を労いながらこちらへ笑顔でサムズアップをしてくれる、今回もなんとかうまくやれていたようだ。

ほどなくして警察がヴィランの身柄を引き取るために到着した、これでこの事件も解決だ。

「今回もスピード解決でありますな、M t. レデイさん、オールライト君！」

ではいつものようにオールライト君はこちらの書類に署名を、M t. レデイさんはあちらへ…」

「玉川さん、お疲れ様です！いつもすみません、助かります」

「こちらこそ事件が大きくなる前に解決してくれるので助かってばかりだよ、将来プロに成ったときもよろしく頼むよ」

何名かの警官の中から僕らの元へひとり駆け寄ってくる猫顔の警官、というか猫そのものの顔をした警官、玉川三茶さんが話しかけてくる。

この1ヶ月で玉川さんとも何度も会うことになり、その度にやり取りをしていたため今ではこんなに簡潔に事が運ぶようになった、オールマイトと塚内警部が仲良しな様に僕と玉川さんもかなり仲良しになった：と思いたい、やはり警察関係者の知り合いは欲しいよね。

僕はM t. レデイの相棒^{サイドキック}として放課後や休日にはほぼ休みなく働いており、それに加えて筋肉を鍛えぬくためのトレーニングも平行していた。身体はかなりキツかったが確実な経験と実力が備わっていくのを肌身で感じる事が出来ていたので辛くはなかったかな。

ちなみに僕は仮免所有の一般人扱いなので手柄は全てM t. レデイのモノになる、僕としては経験を積むことが出来ればなんでも良かったので特に気にはしなかったんだけどね。

M t. レデイのマネージャー兼相棒^{サイドキック}の人の話では今月の収益が今まで類を見ないくらい的大幅黒字になっているらしく、「このままここで働かないか？」と何度も誘いを受けたくらいだ。

それからM t. レデイの相棒^{サイドキック}モドキとしての生活は続いていき、様々な現場で時

に闘ったり、救助を行ったり、他のプロヒーローとのチームアップをしたりと、駆け出しヒーローとしての経験を一気に積むことが出来た――

――そんな生活を続けて更に1ヶ月の時間が過ぎ、11月も終わろうとしていて本格的な冬の訪れを感じる日の帰り道ことだった。

僕のスマホにオールマイトからの着信が入った、いつもの進捗確認だろうか？

「やあ緑谷少年！ なかなかいい感じに実戦経験を重ねてるようじゃないか、私も最近ちらほらと君の噂を聞くようになってきたよ。Mt.レディがとんでもない新人ヒーローを相棒サイドキックに引き込んできたってね！

私の弟子で私の相棒サイドキックなんだ！ って言ってる回りたいのはやまやまなんだが、中途半端な実力の内に凶悪なヴィランに目をつけられても困るからやめてくれってナイトアイに止められてしまっただけでああ……」

「そんなことになってたんですね……確かにプロの方々には比べれば僕なんてまだまだですから仕方ないですよ」

「君は恐ろしく自己評価が低いな！ ナンセンスだよ!! 客観的に見ても君は大分強いと私は思うんだが……そこで、君の下馬評を覆すためにも試験をする!!」

「試験……ですか？」

電話口からオールマイトの張った声が響いてくる、僕は少し疑問を口に出しながら話を聞き続けていく。

「そう、試験さ！君の強さを皆に知らしめてやろうじゃないか！

ナイトアイと決闘をしたあの闘技場を覚えているかい？あそこに明日の朝から来てくれ、全てはそこで明かそうじゃないか！」

「いつものように急ですな…でもわかりました！明日ですな、気合い入れていきます!!」
「いい返事だ！それでこそ私の弟子だ!!ではまた明日会おう!!」

オールマイトの満足げな声で彼との通話が終わった。

オールマイトが急なのは本当にいつものことなので僕もいい加減慣れたけど……試験かあ、いつたい今度はなにをやるのだろうな？無人島の時みたいな死にかけるようなやつじゃなきゃいいんだけど……覚悟だけはしておこう……

そうこう考えている間に僕の部屋の前まで着いていた、僕はドアの鍵を開けて中に入ってそこで違和感を覚える。

部屋の明かりが点いてる？それになんだかいい匂いがする、これは――

「あつ、デクくん！おかえり、もう晩御飯は出来てるわ。食べるでしょ？手を洗ってきたかい！」

「優さん、ただいまです。いつもすいません…」

「2ヶ月経つてもそういうところは変わらず謙虚ね…まあいいわ、食べましょ？」

部屋に居たのはM t. レディこと岳山優さんだった、今日はオフだったのか僕より早く部屋に来て夕飯を作ってくれていたようだ。

僕がいつもといったようにこの2ヶ月の間も優さんはこうしてよく晩御飯を作りに来たりしてくれている。

おそらく先輩たちとの共同生活が終わった後も同じように僕の生活の監督を任せられているのだろうな。

僕はひとりじゃあまりまとまな生活しなさそうだしな…いまも優さんに頼ったり叱られたりすることが多いのは母さんには内緒だ。

「そういえばさつきオールマイトから電話があつて、明日に試験をするって言われたんですよね」

僕は優さんと夕飯を食べ終えたあとソファに腰掛けながら、先程のオールマイトの話をしてみる。

「試験ねえ…もしかして卒業試験なんじゃない？私のところで実戦経験を積むって言うってから大分経つし、そろそろオールマイト自身の相棒として迎え入れるためのね」

「卒業試験…それに僕があのオールマイトの相棒に…はあ…」

優さんの推察に僕は納得しつつ感嘆のため息が漏れる。

優さんの下での修行も終わってついに憧れのオールマイトの相棒サイドキックに成れるのか！
……でもなんだろうすごく嬉しいはずなのに素直に喜び切れないというか、なんかモヤモヤするっていうか……なんだこれ？

「そつかあ、デクくんもついに私の下から飛び立っていくのね……じゃあついでに言っちゃうとね、私からもひとつ話があるの」

「優さんから……？」

優さんは少し優しげな表情をしたあと真剣な顔になって話始める、僕はいつもと少し違う彼女の雰囲気になんか戸惑いながら話を聞くことにした。

「再建中だった私の事務所がそろそろ完成しそうな、最近デクくんの手伝いもあって黒字も伸びてきてて資金源もバッチリだしね」

「ハハハ、おめでとうございますMt. レディ！」

「うん、ありがとう……それでね、急なんだけど来月の頭には生活も事務所の方に戻そうと思ってるの。」

ここに住んでたのはあくまでも事務所再建までの仮住まいの予定だったし……まあ四人も学生の面倒をみることになったり、オールマイトと知り合いになれたり、優秀な相棒サイドキックを仮にだけ雇えたりするとは思ってもみなかったけど……」

優さんは表情をコロコロと変えながらこの3ヶ月のことを振り返りながら話している、本当に優さんにはお世話になりましたね。僕は……！

「デクくんとかこうしてゆつくり過ごさせるのも今日で終わりかもしれないわ、明日からは引越してか新しい事務所の準備とかもあるしね」

「そうなんです……あの！僕、引越しても準備でもなんでも手伝いますから！優さんにはとてもお世話になってきたし……そう、本当にこの3ヶ月間優さんには世話になりました。ありがとうございました、まだお返しもお礼も出来てない！だから……！その……」

優さんが告げるこの生活の終わり、僕はいろんな考えが頭に浮かんで混ざってきてそれを口にしていく、しかし次第にこんがらがっていき……最後にはなにを言っているかわからなくなってしまった。

「ふふ、ありがとうデクくん。でもね、改めてお礼やお返しなんていらんないの。」

サーナイトアイからは契約金だって貰っていたし、みんなと過ごした生活は確かに大変だったけどとっても楽しかったもの！

それにデクくんには仕事だって手伝ってもらってたし、大切なことも教えてもらったしね……」

「そう……ですか……」

「そうよ……（ちらちら）そありがとうね」

優さんは普段のキリツとしたものとは違う優しい顔で、混乱気味の僕に諭すように語りかけてくれる。そして最後には微笑みながら僕にお礼を言ってくれた、僕はそれに對して黙ってしまいなにも返せずにいた。

僕らの間に沈黙が流れていく。

僕はオールマイトの弟子として更にステップアップをしていく、優さんも事務所をしつかりと構え直して元の生活に戻る。

互いにいい方向へと進んでいく筈なのに僕はそれを素直に喜べないでいる……何故なんだろう……：自慢の筋肉もそんなことは教えてはくれない。

そんなことを考えていると優さんが遂に沈黙を破って僕に話しかける。

「ねえ、デクくん……？ 最後だからさ……：思い出、作らない？」

「はい……?! お、思い出?!」

隣座っていた優さんは肩が触れ合うくらいの距離に近付いて目を見つめながらそんなことを言ってくる、僕はというと急に近くなった優さんにドキドキしてしまい混乱気味だった頭がショート寸前まで混乱しきっていた。

「お、お、思い出……はっ！写真とかですかね!! えつとスマホ、スマホ……は……!!」
僕は動揺と混乱に飲まれながらなんとか優さんの言葉の意味を考えて、ポケットに入っている自らのスマホを取り出しそうとするが、伸びてきた優さんの手によってそれは遮られた。

「馬鹿ね、そんなことなわけないじゃない?……ほら、眼……瞑つて……?」

優さんは伸ばした手で僕の手を握りながら、やや紅潮した妖艶な微笑みを浮かべて、ゆつくりと、ゆつくりと顔を近づけてきた。

思い出!? 思い出つてそういうあれなのか!!? いやいやいや、僕はまだ15歳でそういうのはまだ早いって言うか……いや精神的には26歳なんだけど、そういうのよくわからないし!!

どうすればいいんだ!? 教えて筋肉! 助けてオールマイト!!……返事がない、圏外のおうだ。肝心の時にほんとに役に立たないな筋肉は!!

と、とにかく一旦、優さんに待つように言つて——

「……嫌?」

優さんは困り顔で囁くように僕に尋ねる、その吐息が僕の顔にかかる距離でだ。

「嫌じゃ……ないです……」

僕はそれだけ伝えて、眼を閉じた。

そして僕の額に強烈な衝撃が与えられる。

「痛ったあ!!?」

僕はその衝撃に驚きながら眼を開けると、そこにはしたり顔の優さんが僕の額を弾いたであろう指を見せつけながら立っていた。

「ふふふ、冗談よ。期待させちゃったかしら? デクくんにはまだ早いわ!

さて、明日もあるし帰ろつと。デクくんも大事なオールマイトの試験があるんでしょ

？

あとさつき言ったなんでも手伝いますって言葉忘れないからね、存分にこきつかってあげる！じゃあまたね、おやすみ〜」

「……………えっ……あ、おやすみなさい……………」

優さんはイタズラに笑いながら口早にそう告げて去っていく、なにが起きたのか未だに理解しきれていない僕は虚ろげに返すことしかできなかつた。

暫く独りでぼーっとしてから段々と頭が回り始めた。

「か、からかわれたああー！！！！」

誰もないマンシヨンの一室に僕の独り言が木霊した。

ダメだダメだ！まださつきまでのドキドキがとれない！！なんだったんだよあれえ……………こういうときは落ち着くために——筋トレをしよう。

そうして僕は黙々と腕立て伏せを始めた、心が落ち着いて眠れたのは既に日付が変わった頃だった——

デクくんの部屋から戻った私はベッドに飛び込んで枕をちぎれるくらいに強く抱き締めて顔を埋めた。

「なにやっつてんのよ私はああー!!!」

枕に向かつてモゴモゴと叫ぶ私、叫ばずにはいられない。

私は！中学生相手になにをしようとしていたのか！年の差とかそういう話ではなく事案になるところだったわ!! 仮にもヒーローが犯罪ストレスの危ない橋を渡ってどうするとか!!

この生活の終わりに寂しさを感じて心が変な方向へ躍進してしまった…でも寸前のところで留まって上手く誤魔化せたと思うし、きつとセーフね!…危ないところだった。

これからはもう少し距離感を大事にいきましょう…この引越しいい機会だったかもしれない、物理的に距離があれば今日みたいな暴走することなんてなくなるだろうし。

「やっぱりこの気持ちは墓まで……いやそれは長すぎるわね。うん、デクくんが大人になるまでしまっておこう…」

——私はそう自分に誓ってそのまま眠りについた、いつかこの思いを届けられるようにと願いながら。

—— 岳山 side out ——

次の日、僕はオールマイトに言われた通りあの闘技場に着いたが、そこには誰もいなかった。

あれ？オールマイトもサーナイトアイもないなんて珍しいな…とりあえず電話してみようかな。

「もしもし、オールマイト？闘技場についたんですけど、どうすればいいですかね？」
「やあ緑谷少年、私もナイトアイもちよつとたてこんでてね、その入り口から入ってくれたまえ、係りの者がいると思うからあとはその指示に従ってくれればいいからさ！じゃあよろしく！」

それだけ告げるとオールマイトとの電話は切れてしまった、どういうことだ…？

とりあえず言われたまま入り口のドアを開けるとそこにはいかにもな黒服のおじさんがおり、そのまま更衣室に案内された。そこには僕のコスチュームが置いてあり、それに着替えてから別の部屋に移動するらしい。

着なれたコスチュームとヘルメットを装着して黒服のおじさんのあとについていく、そして着いたのは闘技場の会場に繋がる大きな扉の前だ。

中からは人の気配がする、そして同時になにか嫌な予感も……

そして扉が開き、中から眩い光が溢れて僕の眼を眩ます。

黒服のおじさんに促されて中へと進んでいくと、そこには闘技場の真ん中の辺りに10人ほどの人影が見えてきた。

そしてその中でも一際目立っているのはマイクを手にしたオールマイトだった。

いったいこれは…? それに集まっているのは…プロヒーロー!? しかもみんな見たことある人達ばかりだ!! なにがなんだかさっぱりわからない…!

『そして最後の挑戦者が今、入場だあ!! 新進気鋭! 正体不明のニュービー、オオオオールウツ! ライトオオオ!!』

マイクを通したオールマイトの声が闘技場に響いて僕の名を超巻き舌で呼ぶ、まるでそれはK-1やプロレスの入場アナウンスのようだ。

えっ? どういうこと!? 最後の挑戦者? それになんだよこの状況!! オールマイトの試験ってなんなんだ!? 今まで以上に訳がわからなすぎる!!

『——以上の八名を挑戦者として……第10回オールマイト杯^{カップ}の開催をここに宣言します!!!』

——オールマイトのその一言が止めとなり、僕はこの状況を理解するのを諦めた……もうどうにでもなれよ!!!

オールマイト杯（カップ）開幕！

Mt.レディの相棒^{サイドキック}として日々を過ごしていた僕にオールマイトから突如与えられた試験。

それはオールマイト杯^{カップ}なる謎の催し^{もよお}だった、いったいなにが始まるのか……

『さあ、数年ぶりの開催となったオールマイト杯、今回も審判を務めさせていただきますことになりました、サーナイトアイです。私からルールを説明させていただきます』

オールマイトの宣言と入れ替わるように話始めたのは審判服姿のサーナイトアイだ、あなたもそつち側なのか……！

『近接格闘ヒーローナンバーワンを決めるこのオールマイト杯。真つ向から殴り合い、叩き潰して勝ち進む、まさに漢の闘いの祭典！故にルールは3つのみ！

ひとつ！己が肉体を持って相手を打ちのめすこと。遠距離攻撃などもつての他ア！
ふたつ！リングから出ないこと。自ら離れることはおろか、相手に弾き出されるのも

許されない！闘いの場に留まらない者に勝者の資格などありはなし！

みつつ！降参を認めること。相手の力を認め、己の未熟さを認めることもまた漢オ！相手の弱さを認められないものは漢に在らず！！』

サーナイトアイは普段とは違うテンションで声を張りながらルールを説明していく、なるほどこの催しの趣旨とルールはわかったぞ！問題はこの場に僕が呼ばれた理由なんだけど……

『そしてこの八名から勝ち上がった一名のみが——最強にして最高！無敵の絶対王者オールマイトへの挑戦権を得ることが出来るのです！！』

その頂上決戦を制す者……それはすなわち最強の近接格闘ヒーローとなるのです！

さあ血肉を沸かせろ！その力を示せ！今宵、最強に牙を突き立てる獣となれ！英雄を名乗る戦士達よ！！』

サーナイトアイは全身を使って感情を身ぶり手振りで爆発させながら言葉を締めくくった。

あれだな……サーナイトアイは役に入り込むとことんやりきるタイプだよな、いかにも日本人らしい。

僕がこの場にいる理由……皆に僕の強さを見せつけるというオールマイトの言葉……なんだ、超簡単じゃないか。

勝ち残って示せばいいんだ、僕の強さを。この場の皆に、サーナイトアイに……そして闘って、示せばいいんですよ、オールマイトに!!

リングの設営のため僕たち挑戦者一同はがらがらの観客席へと移動する、こんな一大イベントだというのに観客と思わしき人は極僅か、テレビカメラも1台たりともない。

自他共に認めるオールマイトマニアの僕がこの激アツイベント知らなかったのはこの徹底した秘密主義が原因だったのか! だって10回もやっていたのに噂すら聞いたことがなかったんだ、この僕が! くそう……いつからやってるのか知らないけどもう一度過去に戻って最初から全部見たい……!!

「おい新人、大丈夫か? すげえ顔になってんぞ、緊張してんのかそれ?」

独りで思考の中で悔しがっていると隣に腰掛けてきたヒーローに話しかけられた、どうやらめちやくちや顔に出ていたらしい……恥ずかしい!

「あつ、デステゴロ……さん。大丈夫です、ちよつとした持病みたいなものなので」

「そうか……大変だな……あー、確かMt. レデイのときの相棒だったよな? 現場で何度か顔を合わせてたと思つたが、デステゴロだ。よろしくな」

「正確には相棒見習いですけどね、オールライトです。改めてよろしく願います」

僕は挨拶をしながらデステゴロと軽く握手をする、彼の言葉の通りだがMt. レデイ

と活動地域が近いのため互いに現場で見かけたことがあったのだ。

「ここにいるヒーロー達はこういう基準で集められてるんですかね？近接格闘ヒーローの上位陣：？とはまた違いそうですし」

「聞いた話だとオールマイトが闘ってみたいヒーローを独断で決めてるらしいぞ。前回は五年前だったか：？俺もまだ参加2回目だから偉そうなこと言えないが」

僕の疑問にデステゴロが飄々と答えてくれる、完全にオールマイトの趣味で開かれるのかコレ：！だから収益を無視した運営してるんだな。

「Mt.レディは呼ばれてないんですね、期待の新人であんなに分かりやすい近接パワータイプなのに？」

「サーナイトアイが言ってたろ？漢の祭典だったな。それにあのリングはアイツには小さすぎるだろ」

デステゴロが軽く笑いながらそういって、小型の重機によって運ばれてきたリングを指差す。

運ばれてきたのは高さ1メートルほど、4本のコーナーストとそれを取り囲むロープが張られた定番のリングだ——但し、大きさは15メートル四方で普通の倍くらいあるし、ロープはロープじゃなくてどうみても鉄柱だし、コーナーストも金属剥き出しだし、フロアマット床敷きの下は鉄板というよりは鉄塊と言ったところだろう、置いたとき

の音でわかったぞ。

殴り合うには広すぎるが、僕たち個性を持った超人達にしてみればあのリングは確かに狭いな……それがMt.レディみたいな個性なら尚更ってわけだ。

「だから今回の新顔はお前とあと一人、あの金髪のバイザーのヤツだな。見たことねえが……お前、知ってるやつか？」

「ああ、よく知ってますよ彼は——」

『お待たせ！対戦の組み合わせのくじ引きが終わったぞ！それではモニターをどうぞ！！』

デステゴロの質問に僕が自信ありげに答えようとした矢先、オールマイトの声が辺りに響き皆の視線がリングの上に吊るされた大型モニターへと移る。

もう一人の新顔、それはトーナメントで僕の真逆にいるルミリオン……ミリオ先輩だ。

先輩もここに呼ばれていたなんてな…勝ち残ってくれば準決勝で闘うことになるのか。いや気が早いな、まずは僕が一回戦を勝ち抜かないと！

「まさか初っぱなからお前と当たるなんてな、知った顔だからって手加減はしねえぞ？」

「まさか、僕だつて全力でいきますよ！よろしくお願いしますね、デステゴロさん」

隣に座るデステゴロは不敵な笑みで話し掛けてくるが僕も負けじと笑顔で挨拶を返した。負けるわけにはいかない、僕はオールマイトに挑まねばらないのだから！！

『さあ早速、一回戦第一試合を始めると致しましょう！』

今回初参戦、その実力はいかに!? ナイトアイ事務所所属、ルミリオオオオンツ!!

VS バーサス G・M・A ガンヘッドマーシャルアーツ でお馴染み! バトルヒーロー、ガンナーヘッドオオオオ!!

オールマイトのアナウンスにより二人がリングへと向かう、いきなり先輩の出番か…この試合が祭りの始まりを飾る。

『さあさあ両者揃いました! それではいきましよう!! レディイイ!』

「待ったあああ!!」

リングに選手が揃い、サーナイトアイが開始を告げようとした瞬間、闘技場の大扉が蹴り開かれて待ったがかけられた。

「オールマイトオ! なぜ今回も俺…いや私を呼ばないのだ!! 貴様を倒すのはこの私以外

いないだろうが!!」

現れたのは黒を基調とした炎柄の覆面を被った身長190センチオーバーの筋肉質の大男だ、ちなみにマスクやコスチュームの端々から炎が漏れている。

あれは!!? ——

「えっ!!? エンデ」このマスクド・ファイアが今回こそ貴様に挑むのだ!!」……は?」

そういいながらマスクド・ファイアを名乗る乱入者はリングに上がっていった。

「いやいや! どうみたってエン——」

『マスクド・ファイア! また君か!! 呼んでもないのに現れて……毎回いったいどこから情報を仕入れてくるのやら……』

「オールマイトまで!!」

オールマイトすらその覆面男をマスクド・ファイアだと認識していた、一体なにが起きているんだ……!?!

「いきなり乱入とか出端を挫かれたよね……」

「ふん! こんな新顔が出場しているなら私の方が適任ではないか!」

「なかなか言うよね」

マスクド・ファイアはミリオ先輩を指差しながら悪態をつく、ミリオ先輩もいつもの笑顔はなりをひそめて明らかに困った顔をしていた。

『言ってくれるなマスクド・ファイア、ならば倒してみるがいい…私が育て上げたルミリオンをな！』

「こいつは貴様の弟子だったか…：しかしいいのかな？大怪我をしてしまうだろうよ。なにせオールマイトの雑務をやるために相棒に成ったヤツの弟子だからなあ…：事務作業でもしてたほうが身のためだぞ？」

マスクド・ファイアはサーナイトアイとミリオ先輩を嘲笑する、チラリとミリオ先輩の方を見てみると明らかに怒っているといった具合で拳を握りしめていた。悪役ヒールなのか知らないけど流石に言い過ぎだ！

「言いたい放題言ってくれるじゃないか、だったらその身体に分からせてやるからさつさとかかってきなよ…この闘いのルールは知ってるな？まあ俺としてはあんたがルールを守らなくても全然構わないけどね!!」

「小僧…俺が誰か分からないのは仕方ないが、あまり調子に乗るなよ!!」

「いいからさつさとかかってこいよ、ビビってるのか？」

ミリオ先輩は苛立ちを隠さずマスクド・ファイアに突つかかかっていく、おまけに挑発も添えて。

「ナメるなあ!!!」

ミリオ先輩の挑発によってマスクド・ファイアは頭に血が昇ったようで、苛立ちを声

に乗せながらミリオ先輩へと向かっていく。

「痛いでは済まさん！燃え尽きろっ!!」

マスクド・ファイアは律儀にルールを守りながらも拳に灼熱を宿しながらミリオ先輩のみぞおちめがけて殴りかかった。

普段のように遠距離から牽制しつつ炎を出していればなんとでもなったただろうが：個性不明の相手に自らの個性を見せながら、しかも得意ではない接近戦など愚の骨頂。その結果は火を見るよりあきらかだ。

「…………ぬ？」

「サーをバカにしたことは許せない……歯あ食いしばれっ！」

マスクド・ファイアの拳はミリオ先輩の腹に文字通り突き刺さり、透過によって貫通していた。ミリオ先輩は拳に力を貯めて引いており、既にマスクド・ファイアに逃げ場はなかった。

「POWERRRR!!!」

ミリオ先輩の拳がマスクド・ファイアの顎を撃ち抜き、そしてそのまま場外へとブツ飛ばしていった。

場外に落ちたマスクド・ファイアはすぐに立ち上がり明確な敵意を瞳にのせてミリオ先輩を射ぬく。だがその場に緊張は走らなかつた、何故なら……

「貴様あ！俺が本気を出せば今のようにはいかな——!!!」

彼は声を荒げながら掌をミリオ先輩にむける、しかしそこであることに気がついた。

そう、彼のマスクが先程のミリオ先輩のパンチによってほぼ脱げかけており、湧き出る炎のせいでその正体がバレそうになっていたのだ。まあ…バレバレなだけだ。

「くっ！覚えておけれルミリオン!!この借りは次のオールマイト杯で必ず返す!!さらばだっ!!」

彼はそれだけ言い残すと素早くマスクを被り直しながら豪快に扉を蹴り開けて去っていった。

マスクド・ファイア……一体何デヴァーだったんだ……

騒動がひとしきり片付いた後、直ぐに第一試合は開始したのだが、決着はすぐに着いた。

「勝者、ルミリオン！」

審判であるサーナイトアイのコールが響く、リングに立っているのは息を切らしながらも無傷のミリオ先輩だけだ。

一流ヒーローのガンヘッドをもつてしても、ミリオ先輩の透過を捉えることができなかった。無論ガンヘッドが弱いわけではない。

ガンヘッド個性「ガトリング」は攻撃的だが防御には転用し難い、それに今回のルーは遠距離攻撃禁止：すでに長所を潰された状態で挑んでいたのだから仕方ないと言えるだろう。

ダメージを負わないミリオ先輩とあの筋肉に殴られながら透過を攻略しなければならぬガンヘッド、その結果は攻略前に力尽きてしまったと言うわけだ。

しかしガトリングをパイルバンガーのように撃ち込むあの必殺技、ヒーロー活動ではみたことなかったけどこよかったなあ！

相手が無敵の防御を持つミリオ先輩でなければかなり強力な技だった、僕だって無傷では済まないだろう。

「アイツの個性は無敵に近いな…といつても万能じゃ無さそうだし、研鑽の結果だろうな。サーナイトアイも恐ろしい弟子を育てたもんだぜ」

デステゴロがミリオ先輩を見ながら呟く、流石にプロは鋭いな。僕なんか最初見たときは絶対無敵の個性だと思っていたのに：

そうこうしているあいだに第二試合が始まっていた、対戦カードは四つ腕の任侠ヒーロー・フォースカインド 対 関西で活躍中のBMIヒーロー・ファットガムだ。

この闘いの決着もあっさりとしたものだった、一言で言うなら：相性が悪かったの

だ。

明晰な頭脳でヴィランを追い詰めて4本の豪腕で仕留めるフォースカインドの戦闘スタイルがこの闘いでは全く通用しない、そして相手はあの近接格闘殺しのファットガムだ。

迂闊に手を出せないフォースカインドだったが、手を出さなければ闘いにならない。攻めに転じた瞬間、ファットガムの個性の脂肪吸着に腕が一本ずつ捕まっていき……ファットガムの勝利となった。

僕だったらどうするかな……うーん、とりあえず脂肪のほぼない関節や額に狙いを絞って高速移動してからの連打とかなら攻略できるかな？

「あれ？第二試合もう終わっちゃったの？」

「えっ!?ガンヘッド!!」

「おう、一歩遅かったなあ。たった今終わっちゃったぜ」

僕らの後ろからひよっこり顔を出したのは先程まで傷を負っていたはずのガンヘッドだ、しかもほとんど無傷の状態で。

「怪我は大丈夫ですか!?かなり殴られてたはず……？」

「ああ、君は新顔の……オールライト君だね。なら知らなくて当然か、この大会では敗者は

直ぐに治療してもらえらんだよ。

リカバリーガールって知ってる？あの修繕寺一族の中に格闘ヒーローマニアがいてね、この大会を観戦するために治療を一手に引き受けてくれてるんだ。

だから僕は今こうしてピンピンしてて、ここに戻ってきたわけなんだね」

ガンヘッドはピースサインを作りながら軽い口調で説明をしてくれた、てか喋り方がわいいな！意外なプロヒーローの一面だ。

「あれ？でも試合も終わったのにどうしてここに？」

「この場にいるならわかるんじゃない？見たいでしょ、ここにいるヒーロー同士のガチンコ！」

だから僕らは参加するし闘う、それでこうして他の人と話ながら熱い闘いを観る！最高だよ、オールマイイト杯は……！」

ガンヘッドは少し興奮ぎみに語る、そりやそうだよな……こんな最高の大会に出られるし観れるんだから、そこはみんなも僕も変わらないじゃないか!!

「それもそうですよね……失礼しました！変なこと聞いてすみませんでした！」

「いいよ、君も緊張してそこまで余裕ないんだろし。でも来た以上は全力で闘って、全力で楽しんだ方がいいよ。先輩からの老婆心と思つて聞いといて……つと、さあ次の試合が始まるよ」

僕はガンヘッドに謝つてから促されてリングの方へ共に視線を移した。

「第三試合！ワイルド・ワイルド・プツシーキャッツ所属、闘う漢女え！虎あ!!! VS
本年度ヴィランっぼいヒーローランキング第三位！そして今大会の優勝候補、ギャ
ンローグツ！オルカア!!!」

舞台上上がった両者をサーナイトアイがアウンズし、闘いの火蓋が切られた。

個性「軟体」を持つ虎と個性「鯨」を持つギャングオルカ、地上と海の虎の対決はまさに技と力の応酬。近接格闘ヒーローが集うオールマイイト杯を象徴する闘いだつた。

そして「柔」と「剛」のぶつかり合いを制したのは——
「勝者、ギャングオルカ！」

——剛の方だ。闘いの前に水を大量に浴びたギャングオルカはそれはそれは強かつた、ナンバーテンヒーローの名は伊達ではない。

超音波という最大の武器を封印してもなお脅威だつたのはあのタフネスだろう、鯨の特性である分厚い脂肪が打撃の威力を霧散させていくのだ。

それに加えて野生の獯猛さを持っている、僕も身をもつて知ってるが…あれは恐ろしいものだ。

そしてギャングオルカが勝ち進んだということは…次は僕が闘う番だ。

「一回戦最終試合！警戒色の鉄腕は相手への警告、筋骨隆々のパワーヒーロー！デステゴロオオ!! VS 新進気鋭！正体不明のニュービー相棒、オーールライトオ！」

サーナイトアイのコールが響くなか僕らはリングの上で向き合った。

「さあ、あのパワーを俺に見せてみるよ新顔！」

「いきますよ、デステゴロ！」

デステゴロの煽りに対してファイティングポーズで返事をする僕、互いに準備万端だ。

「レディイイイ!!ファイ!!」

サーナイトアイの合図と共に駆け出す僕とデステゴロ、互いの個性は既に単純な増強系というのは割れているため正面からかち合うのみだ。

まずは様子見だな…それに一回戦で消耗し過ぎると後が辛くなるだろう…：：：ならば！

ワン・フォー・オール・フルカウル——55%!!

「スマアツシュ!!」

僕は姿勢を落としながら右手で振りかぶるように拳を放った。

しかしその拳はデステゴロの大きな左掌に握り込まれて止められてしまった。この握力…尋常じゃないぞ!?

「なめてんじやねえぞ！新人！ここは漢の闘いの場つてんだ!!」

デステゴロはそのまま左腕を振り下ろす、それに振り回されて僕は体勢を大きく崩してしまった。なんてパワーだ！これがデステゴロの個性による力なのか!?

「それに前から個人的に気に入ってわねえことがある——」

デステゴロの右手が僕の頭をヘルメット越しに鷲掴みにして自らの方へと引き寄せ、その凄まじいパワーの前に体勢を崩した僕は為なされるがままにされていった。

「——ん・な・も・ん・つ・け・て・気・取・つ・て・ん・じ・や・ね・え!!」

そしてデステゴロのヘッドバッドが炸裂した、僕のヘルそんメなットとデステゴロのヘッドギアがぶつかり鈍い音を立てていく。

衝突によって生み出された衝撃は弱い方へと流れていく…つまり僕の方だ。

ブツ飛ばされていった僕は鋼鉄のボールに直撃して背中を打ちながら止まった。

くそっ…頭がフラフラする……視界もひび割れたバイザーで見えにくいし、ヘルメットも今のでかなり歪んでしまった。

だが今のは僕が悪い、様子見だとか後のことを考えてとか言つて自分の力をセーブしてしまつたからだ。

「どうした、もう終わりか？それともソイツが壊れちゃ闘えねえか!？」

「まだ…終わりませんよ…！今度はちゃんと見せますよ、僕の本気のパワーを!!」

デステゴロに煽られながら僕は立ち上がる、そう手を抜いてはいけなかったんだ。これは漢の闘いなのだから……!

ワン・フォー・オール、フルカウル——85%!!!

「なら——やってみろよ!」

「言われ——なくともお!!」

既に僕に迫っていたデステゴロは両腕を広げて僕を捉えるために振り下ろしてくる、恐らく得意の掴み技に持つていくためだろう。

だが僕も負けじと両腕を広げて正面からデステゴロの掌を掌で受け止めて組み合う形になった、ここからはパワーとパワーのぶつけ合いだ!!

85%の力を持つてもデステゴロをねじ伏せることが出来ない、それほどにデステゴロのパワーも強大なのだ。身体一つ、拳を武器にこの業界を生き抜いているプロヒーローはやはり強い。

ならば他の手を出すべきだが、生憎両腕はうまってしまっている。かといって蹴りを放つために脚を浮かそうものなら重心が崩れてまたやりたい放題されてしまうだろう。

——なら頭を使うしかないよな!!

「その面、拜ませてもらわず新顔!!」

僕が頭を振りかぶると同時にデステゴロもその頭を振りかぶっていた、考えることは

同じだったようだ。

振り下ろされた互いの頭と頭がアメリカンクラッカーのようにかちあたり、弾けた。衝撃でバイザーはバリバリにひび割れて最早前が見えない、しかしやることは変わらない。

正面からデステゴロを打ち破る！！

「バーモントオー・スマアアッシュュ!!!」

全身のすべての力を頭に、いや額に乗せて振り下ろす、それに合わせてデステゴロのヘッドバッドも迫る。

三度の衝突、ついにヘルメットが耐えきれずに碎けて割れる。だが僕のヘッドバッドは止まらない。

額と鋼鉄のヘッドギアがぶつかり甲高い音をたてる、その正面衝突の軍配は僕に上がった。

デステゴロのヘッドギアが真つ二つに割れ、額から血が滲むが僕はまだ止まらない。

僕の額とデステゴロのさらけ出された額がかちあたり、それが最後の衝突となつて僕は遂に止まった。

「てめえは……ヘドロ事件……の——」

デステゴロはヘルメットが割れて露になった僕の顔を見て驚愕しながらその場に崩

れ落ちていく、そしてリングに立っているファイターは僕だけとなった。

「デステゴロ、ダウン！勝者、オールライト!!」

サーナイトアイのジャッヅが下されて右手を掴まれたときにようやく自分が勝ったことを実感した。

勝った…勝ったぞ！プロヒーローに、あのデステゴロにだ！よし…先ずはひとつ目の関門突破だ!!

僕が勝利を噛み締めていると、リングの上のモニターにマイクを持ったオールライトが映し出される。

『一回戦の全ての試合が終了、今回も熱い闘いが繰り広げられて…ああ私も早く闘いたくてウズウズしてきたあ！』

二回戦に勝ち進んだのはルミリオン、ファットガム、ギヤングオルカ、オールライトの四名だあ！さあさあ私の対戦相手は誰に成るのか!？」

オールライトは選手一同に目を向けながら話していく、そんなオールライトを見つめているとモニターの中のオールライトと目があつた気がした。

『勝ち残って私の元にきたまえ———』

オールライトがそう言い残すと、モニターの映像は消えてオールライトの姿が見えな

くなる。

あれは……僕に対する言葉で間違いないだろう。

了解、オールマイイト。僕のこれまでの鍛え上げた力をこの場にいる全ての人に……そしてなにより貴方に見せて、勝ち残って——闘いましょう。

通形ミリオ：ライブル

漢の祭典オールマイト杯、8人の近接格闘ヒーローが闘いその勝者だけが王者オールマイトへの挑戦権を得るといふこの大会。

僕は渾身のヘッドバッドでデステゴロを打ち破り一回戦を突破し、オールマイトに認めてもらったため優勝目指して闘い抜くと決意したのだった。

「お疲れ様、熱いぶつかり合いだったね！それに君、意外と若いんだねえ…まるで学生みたいだ」

試合が終わり観客席へと戻った僕に話しかけてきたのはガンヘッドだ、そのマスクで表情はわからないが話し方から楽しそうなのが伝わってくる。

そうか、さっきの試合でヘルメットが割れたから……ここにいる人達に素顔を見られるのは問題ないのかな？オールマイトもサーナイトアイも特になにもいつてなかったし。

「ハハハ、まだ15歳なもので」

「15!? まだ私の半分の年齢ではないか!」

僕のガンヘッドへの返事に大きな声で驚いたのはワイルド・ワイルド・プッシーキャッツの虎さんだ。

僕らがそんな会話をしている間に次の試合の準備は進んでいて、もう既にリングへミリオ先輩とファットガムが上がっていた。

「若いのにやるじゃねえか、オールライトだったな? お前、オールマイトのなんなんだ?」

「フォースカインド! えつとそれは……」

後ろから核心をついた質問を投げたのは先程ファットガムと闘ったフォースカインドだ、僕はその答えを言ってもいいものかと悩んで言い淀む。

ヘルメットは無くなって顔は割れているし、技も見れば一目瞭然だし…もう言ってもいいんじゃないかな?

「あー、僕はオールマイトの——」

「おつとすまん、着信が入った。少し失礼する」

僕が自らの関係を明かそうとしたところでフォースカインドがスマホを取り出す、どうやら緊急の着信が入ったようだ。

「俺だ、今日はかけてくるなど…なに!? 奴等に動きが…よし、そのまま監視を続ける——」

「おっとそろそろ切るぞ、後でかけ直す！」

フォースカインドが相棒サイドキックと連絡をとっているが、試合は既に開始寸前だ。こんなときにも連絡が来るのか、組織が大きいプロは大変なんだな。

「——レディツファイ!!」

フォースカインドとの話の途中ではあったがそんなことはリング上の二人には関係ない。そしてサーナイトアイの合図で試合が始まっていく。

終始優勢なのはやはりミリオ先輩だ、透過の個性でファットガムに打撃を加え続け、尚且つその身体は吸着に捕らわれない。

ファットガムは反撃を行うもそれすら透過の餌食になっていた。

しかしダメージが積み重なっていく中でも諦めることなく彼は懸命に反撃のタイミングを見計らっていた。

「——ここやつ!!」

ファットガムのトトロのような身体が一瞬にして引き絞られた筋肉質の身体に変わる、なんとというキレのある筋肉群！余分な脂肪が一切消えたキレの化身みたいな肉体だ!!

そしてファットガム最大の反撃がミリオ先輩の胴体へと放たれた、その威力は余波で

生じた風が観客席にいる僕らまで届き目が開けられない程だ。

だが、それだけだった。ミリオ先輩の身体はその場から微動だにしていな、つまり…透過によって外されたのであった。

「これを躲されるとは……俺の負けや、降参する」

「勝者、ルミリオン!!」

最高の一撃を避けられたファットガムが降参し勝敗が決した、鋭く狙い済ました一撃だったがカウンターを常に受け続けてきたミリオ先輩の方が一枚上手だったようだ。

「決まったか……次は我々の番だな、オールライト君?」

「ギヤ、ギヤングオルカ、それは……」

勝負を見届けたギヤングオルカは落ち着いた声色で僕に話しかけてくる、僕は笑いを堪えながら返事をしようとするも言葉がでない。

別にギヤングオルカが話しかけてきたのが面白い訳ではない、その格好が問題なのだ。

彼は携帯用のプールに寝そべって顔だけを水上に出しながら試合を観ていたのだ。

その姿はさながら幼児用プールに浮かぶシャチのおもちゃフロートのようだった、というかそれにしか見えない。

「これか?お前は強い、間違いない今まで闘ってきた中でもかなりの強者の部類だ……」

よって出来る限りの水分を取り込んでおく必要がある。理解できたか？」
「ええ……り、理由は……」

ギャングオルカは真剣な眼差しと渋い声で僕に語る、だが僕はその光景とのギャップに更にこみ上げる笑いを堪えるのに必死だった。

駄目だ、笑っちゃいけない……！ギャングオルカは真剣に僕との勝負に備えているんだ
！

決してふざけてるわけじゃないし、僕を和ませようとしてるわけじゃないんだ!!だから笑ってはいけない……!!

「さあ！死合おうぞ、若き強者よ!!」

渋い声のギャングオルカが辺りに水を撒き散らしながらピツチャピツチャのスーツ姿で立ち上がる。

僕はそれが止めとなり、ついに吹き出して笑ってしまったのだった——

「第二回戦、第二試合！レディイイファイトオ!!!」

サーナイトアイの気合いの入った合図で試合が始まる、気まずさが心に有るが全力で

「スマアツシュ!!」

叫びと共に僕は拳を振り抜く、狙いはヴィランっぽいヒーローランキングに名を連ねる元凶の凶悪な顔面だ。

——正面から闘うしかない。

「重く鋭い一撃……まさしく強者の拳だ……面白い!!」

ギヤングオルカは僕の拳を片腕で受け止め不敵に笑っていた、強力な膂力と研ぎ澄まされた戦闘センス……やはり強い！水を得た魚とまさにこのことだろう。

「時間は掛けんツ！」

ギヤングオルカの腕が僕の顔に向けて振り下ろされる、僕もそれを片腕で受け止めその場に留まった。

重く勢いが乗った一撃、いつかの日に対峙した熊を思い出させるような野生の一撃だ。

膂力は互いにほぼ互角、この勝敗を分けるのは——

「ハアツ!!」

僕が考える間もなくギヤングオルカは次の一撃を放ってくる、僕はそれを受け止めつつ反撃をしていく。

激しさを増しながら吹き荒れる嵐、長くも短いそのチカラのやり取りの勝者は――

「勝者、オールライト!!」

――僕だ。目の前には吹き荒れた暴風によって渴き切ったギヤングオルカが倒れていた、勝負の分け目はここが水場ではなく固い鋼鉄のリングの上だったという他ないだろうな。

「素晴らしい死合いだった…オールライト強者…」

「ギヤングオルカ…ありがとう…ごさいました…!!」

「勝てよ、次もな…」

「…はい!」

ふらふらと立ち上がるギヤングオルカと短く言葉を交わす、この試合に勝てたということとは次がオールライトへの挑戦権を賭けた最後の戦いとなる。

休憩を挟んであつという間に時は過ぎ、僕は再びリングの上にいる。

「準決勝……ここまで無傷の圧倒的な勝利を掴んできた脅威の新人、ルミリオオオオンッ！！」

対戦相手はトーナメントの反対側を勝ち抜いてきたルミリオンこと、ミリオ先輩だ。「まさかの二人目、こちらも新人！ここまで血と汗を流し勝ち進んだ男、オールツライトオオ！！」

ミリオ先輩達と過ごした一ヶ月間の共同生活が今や遠い昔に感じる……たった二ヶ月前のことだつてのに。

これまでもミリオ先輩とは戦闘訓練という形で何度も拳を交えてきた、勝つこともあれば負けることもあったが、どちらが強いかという明確な勝敗を着けた勝負はしたことがなかったっけな。

「ルミリオン……まさかこんなところで先輩と決着がつけられるなんて思っても見なかったですよ」

「俺もだよ、でもまあ折角のタイマンでやりあえる機会だから……全開でいく！勝つのは俺だ——来いよ、オールライト！！」

「絶対に負けませんッ！！」

バイザーの中から僕の目を見据えるミリオ先輩と言葉を交えて火をつけ合う、僕はこの人に勝ちたい……！

「オールマイト杯準決勝！レディイイイ——」

四人で行ってきた戦闘訓練と共に過ごしてきた日常、互いの癖や弱点などは既に分かりきっている。

だからこそ序盤の様子見とか分析だとか牽制などは一切なく……勝負は一瞬、いや一撃で決まるだろう。あれらの全てが僕らにとつての探り合いに他ならないのだから。

「——ファイツ!!」

「必殺——フアントム・メナスツ!!」

ミリオ先輩はなんの容赦も躊躇いもなく最初の一手から必殺技で仕掛けてきた。ミリオ先輩の身体は鉄塊のフロア、ロープ、コーナーポスト、リング上のあらゆるところに透過しては反発し縦横無尽に跳ね回り狙いを絞らせてくれない。

考えていることすら同じだったようだ……やはりカウンターを合わせて倒すしかない。だが訓練の時とは違う。

『——今だよ、デクくん!!』

波動で動きを止めるねじれちゃんも……

『——いけ！デク!!』

多種多様な手足で翻弄する環先輩も……いない。僕独りだ。

「裏の裏のは表……と見せかけてその裏だっ!!」

だから僕は狙いを研ぎ澄まし、予測に予測を重ねて拳を振りかぶる。

そこには僕と同じく拳を振りかぶり必殺の一撃を放とうとするミリオ先輩がワープしていた。

タイミングと狙いはバツチリ、だかミリオ先輩もそこまでは予想済みだろう……だからこそ予想の一步先をいかなくは!

ワン・フォー・オール——フルカウル……88%!!!

僕はミリオ先輩の知る僕の力よりその先へ踏み込んでいく、まだだ!まだ予測を振りきれないっ!!

「POWEEEEERRRR!!!」

「ワシントン・スマアツアアシユツ!!!」

僕とミリオ先輩の拳が同時に伸びていく、ミリオ先輩の狙いは僕の顎で一撃で意識を刈り取るつもりだろう。

僕の狙いは急所である顔面の顎や胴体の鳩尾……ではなく僕に向かって伸びてくるその拳だ。

拳と拳が正面から激突した、そこには透過で透かされるような感触はなく衝撃が腕に走った。

だが僕の腕に加わった衝撃はあくまで副産物、ほぼ全ての衝撃はミリオ先輩の腕へと流れていく。

つまり僕とミリオ先輩のパワーのぶつかり合いは僕に軍配が上がったということだ。

ミリオ先輩の身体に衝撃が駆け巡り、そのままリング外へと弾き飛ばされる。

ドサツとした音と共にミリオ先輩は地面に落下し、辺りには静寂が流れた。

「……俺の負けか……」

地面に仰向けに倒れたままミリオ先輩が静かに呟く。

「勝者、オールライト!!」

サーナイトアイの勝利宣告が響き渡り、ついに勝敗が決した。

オールマイトの修行の中でも一番のライバルだったミリオ先輩への勝利、拳を合わせた右腕に残る痛みが何よりもそれを実感させてくれた。

——こうして僕はオールマイトと闘う資格を掴みとったのだった。

—— 通形 side in ——

「負けたなあー……」

治療を終えた俺はベッドの上で独り言を呟く、他のヒーロー達のように終わり次第すぐにでも会場に戻るべきなんだろうけどなぜだか身体が動かない。

試合が終わってから大分時間が経つ、もうデクはオールマイトと闘っている頃だろうか？

デク、緑谷出久、オールライト……雄英での後輩になる予定の中学生で、みんなで暮らした一ヶ月間の訓練生活での大事な仲間……オールマイトの弟子、そして俺の……最高のライバルだ。

「勝ちたかったなあ……ちくししようっ……!!」

悔しさが心の奥底から一気に込み上げてきて、望んでもないのに眼からは涙がポロポロと流れ落ちる。

勝ちたいと思っていた。オールマイトの弟子とかサーナイトアイの弟子とか、仲間と

か後輩とか、そういうことなんか関係無しに……ただただライバルであるアイツに勝ちたかったんだ。

「ミリオ、起きているか？ 入るぞ」

急にドアがノックされサーの声が飛び込んでくる、俺は急いで鼻をすすって涙を乱暴に袖で拭った。

「はい、起きてますよサー。もうデクの試合は終わってたんですか？」

「いや今は奴の休憩とオールマイトの準備の途中だ……どうして会場に戻らない？ まだ傷が深いか？」

「いえ、傷の方はほぼ治してもらいました。最後の試合も一撃でケリが着いちゃいましたし……」

俺の体調を気遣うサーに話をしながら最後は自虐的に締める、おかげで体力だけは余っているしな。

「開始10秒でカウンターパンチでの一発K.O.。正に瞬殺としか言いようがない試合だった」

「……すいません、サー。俺はサーの弟子として闘ってたのに……あんな無様な……負け方を……」

「まあ確かに最後のあれは端から見れば無様だが、お前らの訓練を知っている者が見れ

ば——ミリオ、お前泣いているのか？」

サーの問いかけにより俺は自分が再び悔し涙を流していたことに気が付く、よりにもよってサーに涙を見られてしまうとは……

「すいません、本当に：俺、アイツに勝ちたくてっ！でも……」

「謝ることはない、悔しきは次に繋がる。その気持ちは強くなるためのバネになるからな。ただなミリオ、強くなる目的を違えてはいけないからな」

「……目的」

サーの言葉を思わずおうむ返しにしてしまう、俺が強くなる目的ってなんだったか。

「そう、目的だ。目的と手段、よく似たそれらを一緒にしてはダメだ。ミリオ……いやルミリオーン！お前はなんだ？その名の意味はなんだ!?百万の敵を倒す者か!?……違うだろう？」

サーの問いが俺の忘れかけていた目的を思い出させる、こんなことをサーに言わせてしまうなんて俺はまだまだだな。

「サー……俺は……俺はルミリオーン、百万を救う——ルミリオーンです!!」

俺は未だに涙目のままだがしつかりとサーの目を見て宣言する。

「そうだミリオ！お前は救うために強くなれ、緑谷出久に負けても構わない、いつか救いたい誰かを救けられるならそれでいいんだ！」

「はいっ……サー。サーナイトアイっ！」

俺は見失いかけた道を示してくれたサーに感謝の気持ちを込めて名前を呼ぶ。

「ん……でもやつぱり弟子としては強い方がいいんじゃないんですか？そのためにサーは俺を鍛えてくれたんでしよう？」

「それは強い方がいいに決まっているだろう……そういえばお前には私がお前をスカウトした理由を話していなかったか。私がユーモアを大切にしているのは理解しているな？」

「ええ、〃元氣とユーモアのない社会に明るい未来はない〃、サーの理念ですものね」

「そうだ、私がお前をスカウトした理由……それはお前が強かったからではない」

「えっ!？」

坦々と語るサーの言葉に驚きが隠せない、じゃあなんだ？強くなりそうだったから……とかか？

「お前を最初に見付けたのはお前が一年の頃の雄英体育祭だ、所々で全裸になり悪目立ちしつつも大した成績は残せていなかった」

「……」

「だがお前の周りには常に仲間や競っていた筈の生徒までもが集まっていた。その中心には笑顔のお前がいたんだ。」

私はその光景を見て思ったんだこいつは私の求めるユーモアを持った社会を守れるヒーローに成れるとな。だから私はお前をスカウトし育てた、はじめはオールマイトの弟子にしようと思っていたんだがな」

「オールマイトの!?!」

「ああ、お前にはオールマイトの後を継げるくらいのユーモアがあると思っていたからな。まあ結果としては緑谷出久の登場によってそれは無くなったのだが……それでもお前のその笑顔はオールマイトにも劣らない、人々を導く眩い光を持ったヒーローのそれだと私は確信している。

未来を予知するまでもなく、お前は必ず立派なヒーローに成れる——」

サーはそこまで言うとい呼吸して改めて俺の目を見据える。

「——だから笑ってろ、ミリオ。」

サーは優しく微笑みながら俺にそう言ってくれた。

「——はいっ!サー、ナイトアイ!」

俺は精一杯の笑顔でその言葉に答えたのだった。

「さあ戻るぞミリオ、私も仕事が残っているし。お前もオールマイトの勇姿を目に刻め!」

「はい、デクとオールマイトの一戦！見逃すなんて出来ませんね！……そういえばデクにもユーモアを感じて育てようと思っただんですか？」

「いや？アイツにはユーモアのセンスが無い——」

「ハハッ、確かにそうかもですね——」

「たぶん人気投票とかでも万年3位とかだろう——」

「万年3位って——」

俺は必ず『立派なヒーロー』に成る、サーの下でならそれが叶うと俺は信じられるから。

——だから俺は、その日まで笑顔を絶やさずいてみせるさ！

—— 通形 side out ——

「ついにこの時がやって参りました、オールマイト杯決勝戦っ!!選ばれた精鋭の漢達の中で勝ち抜いてきたニュービー!挑戦者、オールツ!ライトオオオ!!」

僕はサーナイトアイの紹介と共に右腕を掲げながらリングへ上がっていく。

「そしてそしてえ!満を持してのご登場!!日本ヒーロー界最強にして最高の漢!!トップオプトツプ!王者!^{チャンピオン}オールツ!マイトオオオオオ!!!」

「私が——挑戦を受けに来た!!」

オールマイトはどこからか飛んできてリングへと着地し、画風の違うオーラを纏いながら立ち上がり胸を張る。

「約束通り来たな……緑谷少年……いや“ヒーロー”オールライト!!さあその力私にも存分に見せつけたまえよ!!!」

オールマイトは僕を指差しながら力強く話しかけてくる。

——人生26日目…僕とオールマイト、一対一での初めての真剣勝負が今、始まろうとしている。

『相棒』

漢の祭典オールマイト杯、僕はデステゴロ、ギャングオルカ、そして修行生活のライバルだったルミリオンことミリオ先輩を破りオールマイトに挑戦する権利を掴んだ。

オールマイトと一対一でのガチバトル、憧れと緊張と喜びが入り乱れてどうにかなくてしまいそうだ!!

僕とオールマイト、そして審判のサーナイトアイがリング上で互いの顔を見合う。

リングの周りには観客席から飛び出てきた今回の参加者であるプロヒーロー達がこの闘いを間近で見ようと集まっていた。

「本当にこの場に辿り着いたな…我が弟子よ!」

オールマイトが声を張ってあえて周りのヒーロー達に聞こえるように話す、この場に
いる者達に僕の紹介をしているようだ。

「ここにひとつ皆に謝らせて欲しい。ここに立つヒーロー、オールライトは私の新たな

相棒で…そして私の弟子だ！まあ隠すつもりも無かったから皆気が付いてたとは思
けどね!!」

「でしようね…」

「そして今回このタイミングでオールマイルト杯を開催した理由、それはこのオールライ
トの実力を見定めるためだったのだ。

彼が一人でも凶悪なヴィランと闘えるほどの力があるのか、君達のような素晴らしい
ヒーロー達に肩を並べる存在足り得るのかを…

そんな個人的な理由で君達を招集してしまったことをここに詫びたい！すまなかつ
た!!」

オールマイルトは僕らを見上げるヒーロー達に頭を下げる、僕とサーナイトアイもそれ
に合わせて頭を下げて彼らに許しを乞う。

まさかこのためだけにオールマイルトがこんな豪華な面子を集めてくれていたなんて
…もう素直に感謝しかない。

「オールマイルト、一つ聞かせてくれ。本当にその為だけに呼んだのか？いつものアレも
含めて俺らを呼んだんじゃないのか？」

ヒーロー達を代表するようにギャングオルカがオールマイルトに問う。いつものアレ

…？

「えっ、ああ……正直そつちの方が大きかったんだよね……強いヒーローとガチバトルしたいっていう方が。その中で緑谷少年が勝ち残ったら嬉しいなあーくらいの気持ちでいたんだ！ごめん緑谷少年!!」

「え、ええ……」

「なら俺らはそれで満足だ。きつかけはどうあれ俺らは拳を交えて充分分かった、オールマイトが確めたかったことの答は……彼がその場に立っているってことでな」

ギヤングオールカはニヤリと笑いながらオールマイトに告げる。

正にその通りだろう、始まりは眞贋かもしれないが僕は闘ってきた人達に恥じることはない闘いをしてきてここに立っているつもりだ、彼らに懸けてそれを否定することは出来ない。

「ありがとう皆！本当にありがとう、集まってくれて、闘いを見せてくれて……なら最後は私のこの拳で確かめるとしよう。」

我が弟子、オールライト！皆に恥じない闘いをする準備は出来ているか!？」
「勿論ですよ！オールマイト!!」

「よろしい——さあ始めようか!!」

僕とオールマイトは互いに拳を構えてその場に緊張が走り静寂が流れていく——

———がその静寂を破ったのは僕でもオールナイトでもましてやサーナイトアイでもなかった。

それはピロピロとした携帯電話の着信音だった。

「…すまない…俺だ」

そう言つて申し訳なさそうな顔をしていたのはギャングオルカだ、先程まで綺麗に場を納めていただけにかなりバツが悪いだろう。

だがそれで終わりではなかった。電子音、バイブの振動音、様々な音が響いて次々とヒーロー達の携帯に連絡が入ってきたのだ。

ヒーロー達は顔を一瞬見合わせた後、それぞれ電話を手に取り通話してしていく。

なんだ!? いったいなにが起こってるんだ!! 嫌な予感がする……

「なに!? 遂に奴等が動いた!? もう始まってんのか!! こいつは……やべえな」

「大規模なヴィランの集団が!? はあ? 80名を超えてまだ増えてるだど!」

「場所は——なるほど……近い……」

僕の疑問に答えるようにヒーロー達の会話が聞こえてくる、僕はゆつくりとオールマイトの方を見るとその視線が合った。

「私達は—— “ヒーロー” だ! きつと皆が私達を待っている……さあ、いこうつ!!!」

「「おう!!」」

オールライトが先陣を切って会場を飛び出していき、皆がその後が続いていく。

「ヴィランの数が90名を超えたらしいぞ!」

「なら一人頭10人がノルマになるな…」

「楽勝だ! 自信がないなら俺が余分に倒しておこうか?」

「フンツ…なにを、我とて楽勝だ!!」

ヒーロー達は互いを煽りながら現場に向かって駆けていく、幸運にも現場はすぐそばでもうすぐ到着するだろう。というかオールライトはもう既に着いている筈だ。

「ハッ!? しまった…ヘルメットが壊れてるの忘れてた!!」

このままじゃ世間にはプロになるまで隠しきる予定だったオールライトの正体が…そんなことを言ってる暇はないな、救けることが最優先だ!!

「デク! これをつけとけよ! ほらっ!」

「助かります先輩! ……でもいいんですか?」

「ああ、俺はもうインターンと雄英体育祭で大分正体が割れてるんだよね! だからそれは貸してやる、サーとオールライトの考えを守るなら問題ないよね!!」

ミリオ先輩が投げ渡してくれたコスチュームのバイザーを身に着けて僕は再びその

正体を隠す。

ありがとうミリオ先輩！さあ、正体不明のオールマイトの相棒^{サイドキック}、オールライト！出陣だ!!!

———その場に駆けつけたオールマイトをはじめとした格闘系ヒーロー9名とサーナイトアイ。そしてなぜか現場近くにいたフレイルムヒーローエンデヴァアの活躍により総勢93名にもなるヴィランの超大規模活動はその人数のわりに合わず小規模な物的被害が出ただけで鎮圧された。

巻き込まれた人びとにとっては奇跡、緻密に計画を練っていたであろうヴィランにとつては悪夢のような出来事だっただろう。

最も活躍したのはやはりオールマイトだ、一人で20名以上のヴィランを倒していたからね！

……だが大活躍のお陰で活動時間を使いきってしまったこと。そしてその事件が解決して警察関係者から解放されたのが日を跨ぐくらいの深夜になってしまったこと。それらのために僕とオールマイトの対決は有耶無耶になってしまった。

そして僕の実力を見定めるといふ目的は達成された、ということとでオールマイト杯の

再開は無しに成った。

これでいよいよオールマイトの相棒^{サイドキック}生活が始まる——つと思っただけど、そうは問屋が卸さない。

オールマイト杯に参加してくれたヒーロー達から僕を相棒^{サイドキック}として貸し出してくれという声が多々上がったのだ。

個人的なお願いとして集まってもらった手前オールマイトも断りにくく、更にヒーロー達は僕にそれぞれの戦闘技術を伝授してくれるとまで言っていた。

僕が強くなるなら、とオールマイトは渋々貸し出しを許可。その日以降僕はオールマイトとオールマイト杯の参加ヒーロー6名、そしてMt.レディの計8名のプロヒーロー^{サイドキック}の相棒として目まぐるしく忙しい日々を送ることになったのだ。

でもその相棒^{サイドキック}生活のお陰で僕は様々な戦闘スタイルを学習出来たし、多種多様なヴィランへの対処も学べた。僕が色んなプロヒーローと仲が良かったのも、格闘技全般が出来るようになってたのもこれの結果だね。

まさに良いこと尽くしだったんだけど、あまりの忙しさに3ヶ月の日々があつという間^間に感じたよ。

その後はみんなの知つての通り、雄英高校の一般入試の朝に繋がるってわけさ。

あ、そういえば推薦入試の当日に古くさい極道組織をミリオ先輩達とオールマイト達

と一緒に叩き潰したって事件があつたなあ。まあそれは機会があつたときにでも語る
としようか！——

——時は現在へと戻る。僕は期末試験の筆記テストを無事に終えて、これから始まる実技演習試験の説明をクラスメイトと共に相澤先生とその首元からひよつこり出てきた根津校長から受けているところだ。

「——というわけで諸君らにはこれから二人一組でここにいる教師一人と戦闘を行つてもらおう！」

試験内容は前世と変わらず教師陣との戦闘演習、発表されていく生徒の組み合わせも同じくだ……ということは僕の相方は彼になり、そして対戦相手は——

「——最後、緑谷と爆豪がチームだ。で……相手は——」

「——私がする！」

「まあ、緑谷がいる以上オールマイト以外はあり得ん。頑張れよ爆豪」

やる気に満ちたオールマイトとダルそうにかつちやんを労う相澤先生、対極的な二人によつて僕らの試験が決定した。

半年越しに ついに実現したオールマイトとのガチバトルの機会、喜びと気合いに満ち溢れた僕だがその頭の中にはこの闘いにかっちやんを巻き込んで良いものなんだろうかと いう考えが過っていた。

「しゃあーデク、やんぞ！俺らの力を見せてやろうぜ！！」

隣ではしゃぐかつちやんを尻目に僕はそんなことを考えながら演習場までの移動バスに乗り込む。

僕らの演習場は校舎や市街地から最も遠い場所になるらしい、おそらく僕とオールマイトの激しい戦闘を考慮してのことだろう。

このバスが演習場に着く頃には他の皆の試験は始まっているだろうし、もしかすると早い人は終わっているかもしれない。

そういえば一緒に期末試験対策をした彼らは無事に試験を突破できるのだろうか？

俺は今、期末試験の実技試験で尾白君と共にパワーローダー先生に立ち向かっている。

パワーローダー先生の個性のせいで既に地面は大小様々な穴が空いており、非常に動きづらい状況になっている。

だが今の俺にはそこまで大きな問題ではない、なぜなら俺には緑谷塾で発目少女に開発してもらったこの「V3スーツ」があるのだから！

詳細は省くが以前のものより遥かに軽く丈夫な材質と改良された冷却機能ラジエーターにより俺エンジンの個性ジンの出力は倍増した。

よってこのような悪路でも問題なく走り抜けられるのだが、問題が一点……このスーツの開発に発目少女と共に関わっていたのは他の誰でもないパワーローダー先生なのだ。このスーツの性能もそれに俺の個性を加えた性能スベックもすべて把握済みだ。

故にこの試験に合格するためには相手である尾白君の——
「あれ!?尾白君!?どこだ!!」

「いかん!尾白君の姿が見当たらない!!……まさかもう既に先生にやられてしまったのか!」

「いやずつと隣にいたよ!!」

「おお、尾白君!もう入っていたのか」

「まだ使ったつもりは無かったんだけど……」

緑谷塾で尾白君が特訓の末に身に付けた新技“ミスディレクション”。視線誘導など用いて人の判断力を狂わして誤認識させる、手品などで使われる技法だ。

『影が薄いならさ、むしろそれを極めたらいいよね！』

通形先輩のそんな一言が尾白君を前に進ませた。

緑谷君いわくカウンターの専門家である通形先輩は尾白君に視線誘導やブラフの散らし方などの極意を教えた。それらを元にして尾白君は絶え間ない訓練の果てに——
—自らの存在を消した。いや正確には消えたと錯覚させる技術を身に付けたのだ。

手合わせをしたがあれは凄かった、目の前で闘っているはずなのに尻尾以外見えなくなるのだ。また尾白君の姿が見えたと思えば今度は尻尾が見えなくなる、それが彼の“ミスディレクション”だ。

「尾白君！俺が先生を攪乱する、君はその隙に止めを頼む！」

「了解！いこう、飯田君！」

俺と尾白は軽く掌を合わせてから散開する。

「うおおおおおっ——！！レシプロバースト・V3!!」

俺は全力で駆け出しながら必殺技を発動する。V3スーツにより持続時間と馬力が強化されたレシプロで荒れた戦場に大きな砂埃を巻き上げながらド派手に走り回る、並

の人間なら目で捉えるのがやつとな速さだろう。

「力と技の融合、V3。スバラシイ速さだ……だがそのスーツを誰が造ったとオモツている？全部見えてるぞ、飯田……」

パワーローダー先生はしっかりと俺を注視して捉えている……流石だ——だがしっかりと釣れた!!

「——俺は見えてましたか？先生？」

気配を消し去っていた尾白君がパワーローダー先生の背後に既に立っていた。

そして首をトンツつてやるやつを先生の首にトンツつと当ててその意識を絶つ。

「尾白……いつの間に……でもアマいな！俺も雄英教師、プロヒーローなんだよ。この程度で気を失ったりはしない……!」

パワーローダー先生は首をトンツつてやるやつを受けてなお健在だ。流石は雄英教師……!感心するがこれはまずい!

「先生、これもブラフです……ほらソレ」

俺の焦燥をよそに尾白君は冷静にそう言いながらパワーローダー先生の手首を指差す。

先生の手首には試験前に配布された拘束用のハンドカフスがしっかりと嵌まってい

た。

「なるほど…スバラシイ。派手な飯田の動きも鋭い手刀も全てがこのためのブラフか……くけけ、飯田・尾白組文句無しの合格だ」

先生が合格を告げる、俺は駆け足で尾白君の下へと向かう。

「やったぞ尾白君！合格だ！君の影の薄さのおかげだよ!!」

「くけけ、尾白の影の薄さは尋常ではなかったぞ」

「誉められてんだよな、これ……」

——俺達は実技試験に合格した、他の塾生は大丈夫だろうか？いや彼らならきつと乗り越えられるはずさ!!

—— 飯田 side out ——

—— 切島 side in ——

「うおお！やべえよこれ！壊しても壊してもきりがねーよこの壁エ!!!」

俺と砂藤はセメントス先生との試験に挑むが苦境に立たされていた。

「ああそうだな、この生え続ける壁をチマチマ削ったところでラチがあかねえだろうな……」

「だったらお前も見てねーで手伝ってくれよっ!!」

俺は何故か傍観をしている砂藤に文句を言いながら壁を殴り続ける。

そして次の文句を言おうとした時——砂藤の雰囲気が変わった。

「だからよお……俺の最大火力で砕ききるぜ……!!」

「はあ? おまえ何言ってる——」

「シユガードープ——濃縮還元フロムコンセントレイト元!!!」

砂藤が個性を発動しその身体にパワーが滾る、だがそのオーラは普段の砂藤の比にならないほど強烈なものに見えた。

これ……緑谷の「ぐらっちやいけなやつ」の時に似てる!!!

「おいおいおい、なんだよそれ! 大丈夫なのか?」

「シユガードープの制限時間を3分から1分に濃縮したつ……糖分の消費が半端ねえがパワーは1.5倍になる、俺の新必殺技だ……!!」

砂藤はかなりきつそうな表情で俺に説明する、要するに短期決戦型の新技か!

「シユガアアア! パウンドツツ!!!」

「——んな?」

超パワーを蓄えた砂藤の拳が目の前の障害を一撃で粉々にぶち破る、その砕けたコンクリの壁の先でセメントス先生が驚愕の顔を浮かべていた。

「ゴールまでぶん投げるぞ切島っ!!お前ならきつと耐えられる!いけるか?」

「おまえがそこまでやってくれたんだ!俺だつてなんだつて耐える、漢気見せるぜ砂藤オ!!!」

「いいぜ切島——いっけええええ!!!」

砂藤が俺を掴んで力任せに射出、先程のパンチにも劣らないパワーが俺の全身に加わった。

「——ッ!行かせないよ!!」

それに気付いたセメントス先生は咄嗟に俺の行く手を阻む障壁を造り上げていく。

「この壁は——耐えられるやつっ!!!」

俺は全身を個性でガチガチに硬化させてその壁へとぶち当たる、そしてその壁を突き破つてゴールへと一直線に飛んでいき——そのままゴール前へと着弾した。

激しい衝撃が全身を襲うが硬化した俺の肉体は砕けることなく五体満足のままだ。

「うお……お……こりゃ確かに俺か鉄哲じゃなきや耐えられないかもな……!でも最高だったぜ砂藤、これで試験クリアーだっ!!」

俺はボロボロに成りながらもゴールゲートを抜ける、ゲートに描かれた根津校長の吹き出しが「がんばれ!!」から「よくぞ!!」へと変わった。

「これで合格……だよな? だぁー疲れたぁ!!」

ゴールした安心感からか疲労が込み上げて、俺はその場に大の字に寝そべる。

砂藤の超パワーに俺の硬化……どっちが欠けても突破できねえ試験だった。砂藤ひとりじゃ時間切れを起こしてただろうし、俺ひとりじゃ壁に吞まれて終わってた……流石は雄英、よく考えて出来てる試験だわ。

しかし、やっててよかった緑谷塾。キツかったけど得るものはでかかったぜ!

そういえば緑谷と爆豪はあのオールマイトが相手だったな……いくら緑谷とはいえオールマイトは……いやアイツならきつといける! なんてったって俺らの塾長だもん
な! ——

—— 切島 side out ——

—— 僕とかつちゃんそしてオールマイトは未だに演習場へと向かうバスに揺られ

ていた。

「おいデク、大丈夫か？ さつきからずーっと黙ったまんまだけだよお」

「ああ、ごめんかつちゃん。ちよつと考え事してた」

隣に座るかつちゃんが肩を揺すつてきたことで僕はハツとして返事をする、心配されるほど考え込んでしまったのか。

「僕が先程から考え込んでいたのはこの闘いにかつちゃんを巻き込んでいいものか？ ということだ。」

僕とオールマイトの闘い……きつとこれまでで最強の相手、そして最大級の規模の闘いになるだろう。その余波は辺りを破壊し尽くしてまう、そんな危険な場所にかつちゃんを……やつぱりダメだ、ここは僕から言っただけでかつちゃんを止めよう。

「あのねかつちゃん、さつきからずつと考えてただけだ——」

「さあついたぞ！ 演習場だ!!」

僕がかつちゃんに話しかけようとした瞬間、バスは目的地である演習場に到着してしまっただけだ。

「さあ、やるぜデク!!」

やる気満々のかつちゃんはスタスタと先にいってしまい話が出来ない。このままじゃまずいのに……!

「さあ集まってくれ！試験内容の説明をするぞ！」

オールマイトに呼び出され僕とかつちゃんはその前に並ぶ。ヤバいつてオールマイト、わかってますよね？

「つと思っただがな……悪いが期末試験は無しだ」

「えっ!?!」「はあ!?!」

「おつと、今からちゃんと説明するから慌てなさんな、お二人さん」

オールマイトの発言に口が出そうになる僕らだったが、オールマイトは手でそれを止める。

「まずぶつちやけちやうとね緑谷少年には期末の実技試験なんてのは必要ないんだ。これまで色々あったお陰で緑谷少年には既にプロヒーロー並の戦闘能力や判断力、行動原理が備わっている。これは身内最良なんかじゃなくて客観的な事実だ。

でも私としては緑谷少年がどこまで出来るのか確認がしたいんだ、そう……あの日出来なかった闘いの続きとしてね！」

だからこのハンドカフスも……サポート科謹製超圧縮重りも……無しだ！私は私の全力で緑谷少年と闘う!!」

オールマイトが話ながら小物を投げ捨てて威圧感を放つ、でもこの会話はまるで……「日本のトップヒーローである私とその最強の弟子である緑谷少年の全力のぶつかり合

いだ、この演習場は日本一危険な戦場にたちまち変わってしまうだろう……そんな危ない場所にはいち高校生である爆豪少年を巻き込む訳にはいくまい……

そこでだ！爆豪少年には速やかに再試の場を用意する、もちろんこの今回の試験が赤点になるわけではないので安心して——」

「——ちよつと待てオールマイト！なんだそりや、ふざけんな!!」

興奮気味のかつちゃんはオールマイトの話に割って入る、オールマイトは僕の考えなどお見通しだったのか。

「ああ、爆豪少年……まあ嘗められてるみたいで納得いかないよな。だが本当に危険なんだ！君の身を案じて言っているんだ、別に嫌がらせをしたいわけじゃない。

それに君に対してだけ手加減を加えて戦えば緑谷少年が全力の私と戦うのは無理だろう？それは明らかな私の隙になる、それを見逃すほど甘い修行はしてきてないんだよ、私の弟子は……

——おっ！じゃあこうしよう！この日本一危険な戦場を駆け抜けてゴールへと辿り着ければ君は合格だ！これなら元の試験のルールにも則ってるし、君がゴールした後、私と緑谷少年はガチでやればいいしな！我ながらナイスアイデアだ！」

「そういうことじゃねえんだよオールマイト!!」

かつちゃんはまたしてもオールマイトの話を遮り叫ぶ、プライドが高いのは知ってい

たけどあの丸くなったかつちゃんがここまで食い下がるのは珍しい……この危険性を理解してないはずがないのに。

「俺はな——」

「かつちゃん、もうやめよう。実は僕もオールマイルトと同じ事を考えてたんだ、この闘いはかつちゃんには危険すぎる。もしかしたら怪我じやすまない、命を落とすことだつてあるかもしれないんだ！僕はかつちゃんを——」

「——デク!!てめえもなのか!?!わかっちゃいねえよお前も、オールマイルトも!!」

僕がオールマイルトに賛同してかつちゃんを止めようとするも、かつちゃんはそれにすら突つかかってくる。

どうしたんだよかつちゃん……こんなに言ってるのにどうして。なにがかつちゃんをそこまで意固地にしてるんだ？

「ホントにわかってねえな……俺だつてなあこの闘いがやべえつてことぐらい理解してるよー!」

「でもそれならなんで……」

「なんで?なんでだと、てめえ!!俺は!お前の相棒サイドキックだろうが!!俺はあの時あの校舎前で決めたんだよ!それはいつかじゃなくてあの時から俺はお前の相棒サイドキックになつたんだ!!」

かつちゃんはキレながら僕の胸ぐらを掴んで話を続ける。

「一緒に闘えば命が危ない？ 当たり前だろうが！ 俺らが成るのはヒーローの頂点だ、命のやり取りだつて何度となくやることだろうよ。でもなあ俺はこの試験の……いやこの雄英で過ごすことだつておんなじ覚悟でやってきてんだよ！」

それにてめえが俺に教えてくれたんだろうが！ ”ヒーローはいつだつて命懸け” つてなあ！ ちげえかデク!!」

かっちゃん言葉に僕とオールマイトは目を見開く。

ヒーローはいつだつて命懸け、それは僕がオールマイトから受け継いだ教えだった。

かっちゃんは僕を軽く突き飛ばして胸ぐらから手を離した。そしてすぐに僕の手を握る。

「なあデク、俺の手は震えてるか？ 俺がビビっちゃまってて闘えねえように見えるか!? あの時から俺はずつと……！ お前となら死ぬ覚悟だつてできてんだ!!」

汗ばんだかっちゃんの掌から伝わってくるのは熱い情熱、そして強い強い意志だった。

「俺はオールライトの相棒、サイドキックダイナマイトだ！ やろうぜデク！ 二人でオールマイトに勝つんだつ!!」

かっちゃんは僕の目を見据えて真剣な眼差しで訴えてくる。

「ごめん……かっちゃん——」

「——僕が間違つてたよ、危ないからって理由で君と一緒に闘わないのは違うね。かつちゃんは僕の相棒サイドキックなんだから……一緒にやろう!!」

「デクうー!」

「オールマイト……」

僕は拳を合わせたあと、オールマイトの方へと二人して向き直る。

「H A H A H A!!……すまなかつたな爆豪少年! 私は君の覚悟とその想いを軽く見ていたようだ、これでは教育者としてはまだまだ三流だな! いいよ、二人で私を倒しに来るといい。

——但し……やるからには私も本気でやる、手加減も余力も一切無しで全力で君達を倒しに行くから……そのつもりでかかってこいよ! 未来のトップヒーロー達!!」

オールマイトは威圧感を全開にして宣戦布告する、だがそれに呑まれる僕たちじゃない。

「いこう、かつちゃん!」

「ああ、いくぜデク！」

「二人でオールマイトに勝つツ!!」

—— 僕らは前世と変わらず二人でオールマイトに挑む。でも前世とは違い、僕らにはヒーローと相棒サイドキックという確かな絆を持っていた。

—— そういえば前に本で読んだことがある。超常黎明期よりも遙か昔、ヒーローがまだ空想の存在だった頃の話。

その頃の相棒サイドキックってのは今のプロヒーローの部下みたいな意味合いじゃなくて、主人公と対等な関係で肩を並べて立つ—— 相棒パートナーだったらしい。

PLUS (プラス) ULTRA (ウルトラ)

オールマイトとの修行の日々は多くのヒーロー達の相棒サイトキックとなることで目まぐるしく終わった。まあお陰で強くは成れたんだけどね。

そしてついに始まった期末試験実技演習。僕はかつちやんの熱い想いを知り、二人でオールマイトに立ち向かうことを決めた。さあ闘いの始まりだ!!

試験会場であるビル街が再現された演習場を指定の配置に着くために、僕とかつちやんは歩きながら作戦会議を行う。

前世のように逃げか闘いかではなく、二人で如何いかにしてオールマイトを打倒するかを話していたのだ。

「——つとまあ作戦としてはこんな感じかな」

「デク…それ作戦って言えんのか……？」

「下手に細かく決めるより臨機応変に対応したほうが今回は良いと思うんだよね！」

僕とかつちゃんは大通りの真ん中で立ち止まる、そろそろ演習場の中心だろう。

「まあそうかもしれないが…でもよデク——」

かつちゃんがなにか言いかけたとき遠くの方から聞こえる爆発のような破壊の音と吹き込んできた風…間違いないくオールマイトの登場だろう…！

「どうやら話はここまでみたいだ、僕はかつちゃんならやれるって信じてるよ！」

「つたくしようにがねえな！やってやんよ！俺はお前の相棒だからな…いつてこいデク！！」

「任したよ、相棒！じゃあいつてくるっ！！」

かつちゃんに見送られて僕は地面を大きく蹴って跳ねる、目指すは破壊の震源…オールマイトだっ！！

ビルの上を跳ねて暫くすると倒壊したビル群の中心に立つオールマイトの姿を見つけた。先制攻撃といこうか！

「92%！フロリダ・スマッシュ！！」

僕はビルの上から飛び下りながらオールマイトへと強襲の回し蹴りを放つ、だがオールマイトは既に僕を発見しており対抗する拳を構えていた。

「OREGON——SMASH！！」

オールマイトのアップパーカットが僕の蹴りと衝突する、力と力のぶつかり合いは辺りへ鈍い音と衝撃を撒き散らした。そして衝突の軍配はオールマイトに上がった。

オールマイトのパワーに負けた僕は弾き飛ばされて、ビルの壁面へクモの巣の様なヒビをたてて突き刺さる。

蹴りがパンチに力負けするなんて……！想像以上に力の差が開いてるのか!?

背中に走る衝撃に目を細めるが、迫る気配を感じて直ぐに目を見開く。

そこには既にオールマイトが拳を引いて迫り来ていた。

「まだ一合目だぞ？そんなもんじゃないだろう君の力は——SMASH!」

握力でコンクリートの壁に指をめり込ませて慌ててその場から転がる、先程まで僕がいた場所にオールマイトの拳が振り抜かれビルの壁を吹き飛ばした。

その衝撃で僕は道路へと投げ出されて落下するが、体勢を立て直して着地する。

ひとつ訂正だ……オールマイトが砕いたのはビルの壁じゃなくて——ビルそのものだった。

「これがオールマイトの本気……滅茶苦茶だ……!」

「君だつてこれくらいは出来るはずだろう……？出来なきや困るんだがなあ……」

立ちこめる砂ぼこりの中にうつすらとオールマイトの影が見え、こちらに向かってゆっくりと歩いて来てる。

「くっそー！これでどうだっ!!」

僕は路上に置いてあつた軽自動車を両手で掴んで、力任せにオールマイトへと投げつける。

砂埃の中に軽自動車は消えていき、ゴシヤリという音だけが響いた。

やったか…?!? と思つた瞬間砂埃を吹き飛ばしながら軽自動車だつたであろう鉄塊が飛んでくる。

僕はそれを間一髪で躲す、だがその鉄塊の真後ろにびつたりとくつつく様にオールマイトが走り込んできていた。

「おいおい、搦め手にもなつてないぞ? そんなもんか緑谷少年!」

「――!スマツシユツ!」

僕は反射的にオールマイトの顔面へ左のストレートを放つも、右手で受け止められちゃう。

立て続けに右のフックを打つてもそれすらオールマイトの大きな左手に捕らわれる。

「このまま力比べといくか?」

「ぐうううう……」

がっちり取つ組み合うがオールマイトのパワーに僕は徐々に上から押し潰されて

いく、踏ん張った地面がヒビをたてて足が沈んでいった。

このままじゃまずい！潰される前に抜け出さなくては！！頭を使えよ緑谷出久！

「バーモント・スマッシュ！！」

「VERMONT—SMASH!!」

僕の考えは読まれていたようで、オールマイトは僕のヘッドバットにきつちりとヘッドバットを合わせてきていた。

オールマイトの頭はその場から動かさず、弾かれたのは僕の頭だけだった。

「ダステゴロには通用したようだが、私には効かん！地力が違うんだよ!!」

脳震盪を起こしかけている僕の頭にオールマイトの声が響く。

そしてオールマイトは僕の身体を片手で振り上げて、そのまま地面へと叩きつける。

僕はフラついた頭でなんとか考えて咄嗟に海老反りになって足から地面に落ちた。

背中から叩きつけられるのは回避出来たが脚に強烈な衝撃が加わり、地面をクレーター状に陥没させていく。

「うまく耐えたな！だがまだ私の攻撃は終わってないぞ！」

オールマイトは僕を振り上げて軽く上へと投げ飛ばす、しかしその勢いは大したことではなく空中にふわりと浮く程度だった。

だがそれこそがオールマイトの狙いの高さ。オールマイトは間髪開けず僕に向かっ

て跳躍してきていた。

狙いは——不可避の一撃…!!

「KAN SAS—SMASH!!!」

身動きの取れない空中でのオールマイトの一撃、僕は両腕を重ねて防御する他ない。

そしてその腕にオールマイトの破壊の一撃が突き刺さり、僕の身体をゴミクズのように吹き飛ばしていった。

建ち並ぶビル群を次々とぶち壊しながら吹き飛んでいく僕。そして四棟目のビルを倒壊させてぶち抜き、つつこんだ五棟目のビルの半ばあたりで僕の身体は勢いを止めた。

「(…これが本気のオールマイト…強すぎる…!」

倒壊しかけのビルに埋まりながら、ボロボロになった僕は呟く。

全てが僕の上位互換、僕の全力^{2%}で打ち合ったところでラチが開かないどころが追い詰められていく。技術で…いや無理だろう。なら発想で不意をつくか、それとも100%で

——僕の思考を遮るようにズシリとした衝撃が辺りに走り、何かに脚を掴まれる。

「お早いお休みだな緑谷少年…まだ寝るには早すぎるぞ!!」

オールマイトは僕を瓦礫の中から引き摺りだして自分の目の前に投げ捨てる。

「終わりか？全力でこれなら結構ガツカリだぜ少年？」

オールマイトは倒れたままの僕にげんなりした声で語りかける。

まだ、まだだ！やれることは……ある!!不意討ちみたいで悪いがそのまま攻める！

「——テネシー・スマツシュ!!」

僕はオールマイトに足払いをかけながら立ち上がる、オールマイトは足下を払われたせいで体勢を崩していた。これで倒れないのは流石としか言いようがない!!

「まだ僕は——出し切つてないっ!!」

崩れたオールマイトの腕を掴んでは、身体を起こす勢いと共に上空へとぶん投げる。そしてすかさず僕も上空のオールマイトを追いかけるように跳ねる。

空中なら逃げ場はない！さっきやられてわかったよ!!

「お返しです！カンザス・スマアアツシュツ!!」

僕は身動きの取れなくなったオールマイトに反撃の拳を振り抜いた。

だがその拳は空を切る、避けられない筈の一撃を躲されたのだ。

「——NEWHAMPSPHIRE—SMASH!!」

何が起きたか理解する前に僕の背中に激しい衝撃が走り、対空ミサイルに撃ち落とされたかの如く地面へと墜落していく。

両腕について地面に着地した僕、そしてその目の前に軽やかに着地するオールマイト

が現れた。

「空中に打ち上げたのに……」

「あー、緑谷少年にはまだ空中での移動の仕方を教えていなかったか。もう教えることないと思っていたが……ホントに私は教育者としては三流だなー」

オールマイトは笑いながらゆっくりと近付いてくる。

空中での移動……からくりはたぶんわかった。空中で微調整を加えたスマッシュを放つてその反動と暴風を使つて移動するのだろう。今わかったところで後の祭りだが……

「いよいよ打ち止めかな？ さあどうする……もう止めるか？ というか爆豪少年はどうした？」

「まだ終わりにじゃないっ!!」

僕は跳ね起きてオールマイトから距離をおく、オールマイトは敢えてその行動を見逃して自らも体勢を整える。

やはり100%でしかオールマイトには対抗できない……！今こそ特訓の成果を発揮する時だ。

ワン・フォー・オール——プルスウルトラ……!!

「100%オオオオ!!」

「まあ、そうくるだろうな!」

僕とオールマイトは同時に駆け出して右腕を引いて拳を構える、狙いも技もおそらく同じ…!

「——DELAWARE——SMASH!!」

二人の拳が寸分の狂いなく正面から衝突する。その力は完璧に拮抗しており、すべての衝撃が空に舞う。

「これで右腕が使えなくなったわけだが、次は——」

「——ワシントン・スマッシュ!!」

僕はオールマイトの左胸に向かって右腕を振り抜く、だがその拳はすばやく構えられたオールマイトの両の腕に遮られて上から叩く形になる。

衝撃はオールマイトの身体を突き飛ばすも、その脚は地面から離れることなくアスファルトに二本の深い轍わだちを刻んだ。

「ほう……これは……」

オールマイトは両腕のダメージを確認しながら感心したような声を出す。

ワン・フォー・オール・プルスウルトラ。オールマイトに対抗するため僕が編み出した新技だ。

ワン・フォー・オールで個性チカラの通り道である自身を筋肉を……その血管一本一本までも強化していき、100%のチカラが流れ込んでも大丈夫な最強の筋道へと昇華させてく。

ワン・フォー・オールのMPをとてつもなく消費しまうが、100%を反動無しで撃てるようになった。もちろん……無制限ではないが。ちなみにMPってのは……マッスルポイントの略だ。

「——まだまだこれからですよ、オールマイトツ!!!」

—— 爆豪 side in ——

「はあ……」

デクとオールマイトの闘いを遠目で観察しながら俺はため息を洩らす。

破壊による波がビル群が倒壊させ、その欠片が四方八方へと飛散してまた破壊を生み

出す。

そして戦場の中心には二人の巻き起こす暴風とそれで舞う破壊の残骸が吹き荒れており、とても人間が近付いていいような場所ではなくなっていた。

「アイツらホントに人間かよ……」

俺は想像を絶するスペクタクルな光景に呆然としてしまう。

危険すぎるのは分かっていたつもりだったが、覚悟もある。しかし目の前に起こるとここまで現実外れなものだとは思ってはいなかった。

あ、またビルぶっ壊れた。

俺は先程までのデクとの作戦会議を思い出す。

『かつちゃん、まず始めに言うておくけど、この闘いはかつちゃんが入る余地はほぼないと思っいてくれ。理由はわかるよね……?』

『……俺がオールマイトの攻撃に耐えられねえってことだろ』

『そうなんだよ。オールマイトの本気の一撃、いくらかつちゃんのタフネスといえど、かすれば行動不能になるし、当たれば間違いなく死ぬ。かつちゃんと僕が肩を並べて闘おうとすれば——』

『お前は俺を庇わざるをえない、んでデクがやられちまえば俺に勝ち目はねえってことだな……』

『そういうこと、でも大丈夫！モチロンふたりに闘う作戦を考えみたんだ！』

んで今回の作戦なんだけど君には僕が止めを刺すための隙を作ってもらいたいんだ』

『おう、いいぜデク！そんでどうするつもりだ？』

『僕が編み出した新技があるんだ。それを使えばオールマイトと同等の一撃を10発だけ放てる……いや、拘束や移動も考えると9発が現実的な限界になるかな。』

とにかくそれを使って僕がオールマイトに一瞬の隙を作り出す、かつちゃんはその隙を見計らって最大級の攻撃を与えて欲しいんだ！』

そうすればオールマイトの隙は限りなく大きくなるはずだから、僕がそこに止めを打ち込めれば……きつと勝てる!!』

『なるほどな……んでその隙つての作る合図はどうする？』

『ない』

『ねえのかよ!!なんかあんだろ叫ぶとか名前を呼ぶとかよ!』

『ああそういう……でもそこじゃないんだよ問題は。オールマイトに対して僕がどれだけやれて、いつ隙が作れるか僕にも分からないんだ…』

『マジかよ……』

『でも必ずやりとげる。だからかっちゃんには僕を信じてその瞬間を見極めて欲しい、そしてここだっ! って思うタイミングで飛び出してきて欲しい。』

滅茶苦茶なこと言ってるってのは分かってる——でもかっちゃんにしか出来ないことだと僕は思う……信じてるよ、かっちゃん!』

『デク……』

『つとまあ作戦としてはこんな感じかな!』

そのあとやってやるっていった以上はやってやるけどよお……この状況は予想外過ぎるぜ。

そんなことを考えていると遠くの方から何かが飛んでくるのが見える、それは真っ直ぐにこちらに飛んでくる人の影……

そしてその人影が俺の真横のビルにぶち当たった。

「——痛たた……」

「おい! 大丈夫かデク!!」

その人影の正体はデクだった。デクはよろよろと立ち上がると再び元いた場所へ戻るために跳躍の準備に入っていた。

「ボロボロじゃねーか! ホントに大丈夫か!」

「大丈夫だよかっちゃん。そろそろ終わりが近い、準備しておいてくれ! 頼むよ、相棒!!」

じゃあよろしくっ——」

俺の心配を余所にデクは言いたいことだけいつて跳んでいつてしまった。

「つたく……あんな風に言われちゃやるつきやねえよなあ!!」

俺は掌から爆破を放ちながら飛んでいく、目指すは破壊の嵐の中心部。

——デクの待つ命懸けの戦場の真っ只中だ。

——爆豪 side out ——

「——CAROLINA—SMASH!!」

僕とオールマイトの袈裟斬りの手刀が交差して弾き合う、吹き荒れててく風に乗って僕はオールマイトから距離をとった。

これで八発目……!後二発は撃てるけど次で決めなきや後がなくなる。

オールマイトとの激闘によりOFFA—PブルスウルトラUの制限回数10回のうち既に8回を使いきっている。オールマイトにダメージや疲労を与えることは出来ているだろうが、まだ決定的な隙を作れていなかった。

「強くなったな緑谷少年。修行生活の中でも、雄英に入学してからも君は努力を絶やさなかった。それが如実に表れた結果がこれだ、こうして私と同等に打ち合い今もなお闘い続けている。」

そんなことが出来る人間はこの日本にはほほいないだろう。

もう一度言おう緑谷少年、強くなったな！」

オールマイトは少しだけ笑いながら軽く手を叩いて僕を賞賛する。

オールマイトに認められるのは嬉しいけど今この場じゃなくても…

「——だが緑谷少年……私の全力に対抗するためのその『技』、かなり無理して使っているな？」

「——ツ!!」

オールマイトは僕のOF^{プラス}A^{ウル}—P^{トラ}Uの弱点をしつかりと見抜いていた。

この技は反動こそ無くせるものの異常なまでの消耗を生み出す、故に普段の全力に比べるとかなり無理をしてる状態なのだ。

「何を焦っている少年？君の成長速度を鑑みるに卒業するまでには……いや今年の終わり頃には私の力を超えるだろうってのに……」

オールマイトは呆れたような声で僕に問いかける。

確かにそうなるかもしれない、オールマイトの言っていることは正しい。でもそれじゃ駄目だ、卒業まで？今年の終わり？遅すぎるっ!!

「オールマイト……そんな悠長なこと言つてられない、僕には……僕らには無いんですよ！貴方だつてわかつてるんでしょ？」

——僕らの命はあと数週間後に終わるかもしれない！時間が無いんだオールマイト!!」

僕らの制限時間タイムリミット、神野町でのオール・フォー・ワンとの決戦の日。僕らはそこで死ぬ。

「かもしれないな……だかしかし君はその運命を乗り越えるために強くなった。今の君なら前世と違う、未来を……君一人なら余裕で生き残れるだろう」

「それじゃ駄目なんだ!!僕ひとりが生き残つても……僕はあなたを救いたい!!そのためだけに僕はここにいる!!」

僕はオールマイトを助けかけた、だからあの時僕は駆け出した。文字通り死ぬほどの思いで。そして今も走り続けている、オールマイトを救うために……!

「だから超えます……オールマイト……!!」

僕はそれだけ呟いて拳を握り、オールマイトへ向かつて駆け出す。同時に駆け出してオールマイトも僕へと駆け出てきていた。

ワン・フォー・オール！オール！プルスウルトラッ!!!

「DETRORITTTT!!!」———」

オールマイトと僕、またしても同時に拳を引いて飛び出す。速さも力も気迫も全てが同等、対等な技のぶつけ合いとなる。

それじゃ駄目だ!! オールマイトを超えるために……もつと先へ———101
%オオオオオ!!

「————SMASH!!!」

この闘いが始まってから幾度目か分からないほどあつた展開、同時に振り抜かれ激突する二つの拳が破壊の衝撃波を放つ。

だが今回だけはその結果が変わる。

僕の拳がオールマイトの拳を撥ね飛ばし、彼の身体を数十センチほど宙に浮かした。

次の一撃を叩き込めるかどうかのギリギリ隙、だがそれはこの闘いで初めて生じたオールマイトの明確な隙だった。

溜めが必要なOFAPUブルスウルトラを振じ込むには時間が足りない、ギリギリ僕の全力92%の一撃を叩き込めるかの隙。でも僕らにとっては十分な隙だ。

足りない分は相棒が埋めてくれる———

「————APHEインパクト徹甲榴弾・着弾オオ!!!」

僕の背後から超高速で飛び込んできたかっちゃん、爆破範囲を極端に絞った最大火力の爆破をオールマイトへと炸裂させる。

爆炎がオールマイトの身体を呑み込んでいく、だが僕はオールマイトがかっちゃんの急襲にも反応し腕で防御をしようとしていたのを見逃さなかった。

自らの爆破の反動で真後ろにぶっ飛ぶかっちゃんと入れ替わるように僕がオールマイトへ向かって飛び出していく。僕はかっちゃんの一撃を信じてその拳を再度引き絞る。

「はあああああ!!!」

僕の突進じみた飛び出しの勢いは暴風を巻き起こし、オールマイトの姿を隠していた爆炎を振り払っていく。

そしてそこに見えたのはかっちゃんの一撃によって防御を崩されて無防備になったオールマイト姿だった。

「——スマアアアツシユツツ!!!」

僕は無防備になったオールマイトの胴体、その左脇腹……A F O の 傷痕宿敵の残滓へ狙いを済ました拳を振り込む。

ごめん、オールマイト!ごめんなさい!!これしかなかったんだ!!

僕は振り込んだ拳を振り抜いて、オールマイトをアスファルトへと叩き落とす。

背中から叩きつけられたオールマイトは地面に大きなクレーターを作りながら沈んでいく。

僕はそのクレーターの縁へと降り立ち、中心に沈むオールマイトの姿を確認した。

頼む、もう立たないでくれよオールマイト……これ以上は……!

だかそんな僕の祈りとは裏腹に、ボロボロに成りながらもオールマイトはクレーターの中でよろつきながら立ち上がる。その眼は平和の象徴として強い光を宿したままだ。

まだ……! まだ闘えるのか……!? やめてくれ……! オールマイト……! もうこれ以上やつたら死んでしまう!!!

「本当に強くなつたなあ……緑谷少年……! そして爆豪少年も素晴らしい一撃だった——」

オールマイトはボロボロの右手で僕といつの間にか横に駆けつけていたかつちゃんを指差す。

「——君たちの、勝ちだった……」

オールマイトが僕らの勝利を告げ……そして吐血しながらその場に前のめりに倒れていく。

「オールマイト!!」

僕とかつちゃんは倒れたオールマイトへ駆け寄るためにクレーターを滑り降りてい

く。

その瞬間、オールマイトの身体から煙が吹き出して辺りを包み込みその姿を隠した。急に重たくなった身体を引き摺りながら失われた視界の中でオールマイトを探すが見当たらない。

「おいおい、なんだよこれ!!」

少しだけ煙が晴れていったその矢先、かつちゃんの叫びが響く。

「だ、誰だてめえは!?! オールマイトは? まさか偽者か!?!」

どうやらかつちゃんがオールマイトの姿を発見してしまったらしい……見られてしまいましたか、オールマイト。

「かつちゃん、それもオールマイトなんだ。真トウルーフオームの姿のね」

僕は説明をしながらかつちゃんの声のする方へと歩く。こうなった以上、オールマイトの真実をかつちゃんにも教えなきゃな。

煙が晴れた先には口元から血を流しながら苦笑いをするトウルーフオームのオールマイトと警戒しながら掌をむけて構えるかつちゃんが見えた。

「かつちゃん! ちよつと待って!」

「こりゃなんなんだよデク——誰だてめえは!?!」

「えっ!?!」

かっちゃんを止めなくては! そう思って声をかけた僕だったが、かっちゃんの返事は予想外のものだった。

「緑谷少年……君もトウルーフフォームになっちゃってるよ」

「えっ……!!!」

よくみると低くなった視界と小さくなった手足、前世での僕の矮小な身体。力を使い果たした僕もトウルーフフォームに変身してしまっていた。

どうしよう! オールマイトだけじゃなく僕の秘密もかっちゃんばれてしまった!!

「おい! 誰か説明しろお……!!!」

——— かっちゃん叫び声だけが破壊の痕が残る演習場に響き渡ったのだった。

再履修（やりなおし）

オールマイトとの決戦、全力と全力のぶつかり合いは演習場を破壊しながら白熱していった。

僕の新技ワン・フォー・オール・プルスウルトラとかつちゃんのアシストのお陰で僕は二人でオールマイトに勝つことができた。

でも力を使い果たした僕とオールマイトはトウルーフォームへと戻ってしまい、あるうことかかつちゃんにその姿を見られてしまった。

どうするオールマイト？どうする僕!?

「だからてめえらいつたい誰なんだ！デクとオールマイトをどうしやがった……！返答次第ではぶつ殺す……!!」

かつちゃんは眼を血走らせて僕らを射ぬく、僕らつてのはトウルーフォームになってしまった僕とオールマイトのことだ。

かつちゃん、かなり混乱してるな！まあさつきまで闘ってた相手と仲間が突然消えて、死にかけの痩せ男と馴れ馴れしいチビが現れたらそりやそうなるよな…

「かつちゃん！信じがたいかも知れないけど、そこに座ってるのがオールマイトで、僕が緑谷出久…デクなんだ!!」

「んなわけあるか!!てめえらとあの二人、似ても似つかない…ああ？面影は…：…なくはない…：…つてどうみても別人じゃねえか！

オールマイトはこんな骸骨みてえなやつじゃねえし、デクはてめえみてえな陰キャっぽいナード野郎じゃねえ!!」

「骸骨…：…」

「陰キャナード…：…」
かつちゃんのストレートな身体的特徴を捉えた暴言が突き刺さり凹む僕とオールマイト。事実を言われるのが一番辛いとはよくいったものだ…：…

「いやいや！シヨックを受けている場合じゃない！かつちゃんの誤解を解かないと僕らはまとめて爆破されてしまう。爆発落ちなんてサイテーだよ!!」

「本当に僕らなんだ！かつちゃん！ちよつと力を使い果たして二人ともこんな感じの姿になっっちゃってるんだけど…でも僕は僕だ、信じてくれよお！」

「なんだその取って付けたみたいない設定は!?! そんなもんデクから聞いたことねえぞ!」

「言えなかったんだよ、力を出しすぎると弱くなりますーなんて普通誰にも言えないよ!! どうしたら信じてくれるんだ…!」

「まだ言うかこの…!——じゃあひとつ聞かせろ…:俺とデクしか知らねえ筈のことをな。てめえがデクだつてんならわかる筈だ」

かつちゃんも猜疑心にとらわれながらも僕にチャンスを与える。よしこれに答えてバッチリ信じてもらおう!!

「俺とデクの約束…:今何個目だ? さあ答えてみるや!!」

「えっ…:や、約束の数う…:…?」

やばい! 何を約束したかってのはだいたい覚えてるけどその数は覚えてない! うーん、確か前に聞いた気がするんだけど。

…:…:思い出せない! 適当は数を言うか?! いや外れたときのリスクがデカイ…:…:ここは素直に答えよう!

「ごめんかつちゃん! 覚えてないや…:…:前にも聞いた気がするんだけど忘れちゃって…:」

「またかてめえ! また忘れやがったのかよ!!——はあ…:俺の予想したデクの答えそのものを寸分の狂いなく言いやがって…:…:マジでデクなのか?」

かつちゃんはため息をつきながら呆れたような顔で僕に尋ねる。

「どうやらこれこそが正解だったらしい。流石は僕の幼なじみ、僕がかっちゃんの超高校級の幼馴染なら彼もまたしかりだったということだね！」

「緑谷少年…マツスルフォームに一瞬でいいから成ってみてはどうか？ごほっ…私は今ちよつと成れそうにないからさ」

「オールマイト！大丈夫ですか!?!そうかマツスルフォームに成れば全部解決じゃないか……」

「おい！俺を無視して訳わかんねえ会話すんじゃねえ!!」

「ごめんかっちゃん！でも今僕がデクだつて証拠を見せるから！見ててね……」

オールマイトがかなりきつそうだ、早く保健室に連れていくためにもこの場を収めなくては！

ワン・フォー・オール——フルカウル……!!

僕の矮軀に個性チカラが流れ込んでいき、その肉体を変化させていく。全身にチカラが行き渡ったとき僕の身体は——身長190センチ、体重128キログラム、髪は緑、筋肉モリモリのマツチヨメンに変身した。

「マジでか……デク……?」

「マジで僕だよかっちゃん。そんでソコにいるのもマジでオールマイトだ、見ての通り結構重症だから早く保健室に連れていこう。話はそこでもいいかな?」

僕は身体に鞭を打って格好だけの変身をする、そしてようやく納得したかつちゃんに問いかけた。

「あの身体がどうなっかってこうなっちまうんだ…?」

「ちよつ!かつちゃん、擦りたいよ!あつ——」

かつちゃんがペタペタと僕の身体に触れてきて、僕は擦ったさで力が抜けて思わずトウルーフオームに戻ってしまった。

僕とかつちゃんは気まづくなつて黙りこむ。その沈黙にオールマイトの病的な咳払いだけが木霊する。

「……………いこうか」

「……………おう」

——オールマイトを乗せた担架をロボットが運んで救急車に乗せる、それを運転するのもロボットだ。ロボット大好きだな雄英高校。

その救急車に乗り込んだ僕とかつちゃん。そして僕はかつちゃんに自身とオールマイトの身体に起こった変化について説明していった。

「——ほー、個性被りとエネルギー切れによる弱体化のリスクねえ……」

かっちゃんも納得したようなしてないよな声を出して微妙な顔をしている。でも嘘は言っていない、というか僕はかっちゃんにうそがつけない。ついても直ぐにバレるだろうし……

かっちゃんに説明したのは以前からオールマイトと二人で考えていたカバーストーリーだ。

オールマイトと僕はまったく同じような個性を持った、所謂個性被りでそのリスクとして弱体化してしまうこと。そしてオールマイトは過去の怪我が原因で更に弱体化が進んでいるということ。

「今まで言えなかつた事情はわかつた……特にオールマイトのはな。平和の象徴として抱えるもんがでかすぎる、そりゃ他人にはこんなことになつてゐるなんて言えねえわな」
「そうなんだよーんで持つて僕もその後継者として世間に知られちゃつてゐるわけだから——」

「でもな、デク。てめえは駄目だ!!」

「ええっ?! なんてでき!?!」

理解を示してくれていた筈のかっちゃんも僕の言葉を遮つてダメ出しをする。まさかの幼馴染の裏切りである。

かっちゃん、やつぱり僕に実はこんな弱つちい一面があつたことを怒つてゐるのかなあ

……そうだよな、今の今まで最強だと思つて慕つてた相手が弱く為ります、なんてなつたら怒るよな。

「てめえ……そんな重大な弱点があるならなんで俺に言わねえんだよ！」

「ごめん……それは他人には知られちゃいけない秘密で……」

「ああ!?!他人には!!?!俺はお前の相棒サトキックだろうが!!弱つたときに支えるくらいするに決まつてんだろ！」

かっちゃんの怒りの理由は僕の予想とは違うものだった。

「かっちゃん……それつてその……どういう意味？」

「——っ——!!あーもうっ!だからな、お前が弱つてる間は俺が守つてやるし、秘密もばらしたりしねえ!というか周りにばれないように手伝うつての!!」

……俺はお前の相棒だからよ、お前の秘密も弱さも全部一緒に背負つてやるつて言つてんだ。つたくこんなこと言わせんなよ……」

かっちゃんは頭を掻きながら恥ずかしそうに俯く、僕は呆氣にとられて口を半開きにしたままだ。

あのかっちゃんがここまで僕を信じてくれていたなんて……僕はバカ野郎だな。こんなことまで言われないと気が付かないなんて……

かっちゃんは前世のかっちゃんとは違うんだ、僕以上に僕のことを信頼してくれてい

る。その想いに答えるには僕も……

「かつちゃん、ありがとうっ!!まさかかつちゃんがそんなこといっでくれるなんて
~~~~~!!」

「うおっ!!汚ね!!なんだその涙の量!」

僕は感激のあまり、眼から滝のように涙を吹き出しながらかつちゃんに感謝する。この身体だと涙腺がぶちギレてるので涙が止まらない……!!

「秘密を分かち合って友情が深まったな、少年達……」

「オールマイト!気がついたんですね!!よがっだー!!」

「うぜえ!泣くのやめろデク!!」

「元氣だな君たち……」

そんな一幕のあとオールマイトがかつちゃんに話しかけた。

「あまり緑谷少年を責めないでくれたまえ……秘密を厳守するように指示したのは私なのだ。次代の平和の象徴である彼の最大の弱点だからな、なによりも隠さなくてはと思っただよ」

「……わかった。誰にも言わねえし教えたりしねえ、デクだけじゃなくあんたの秘密もな。まあオールマイトにまで俺を信じろとは言わねえけど——」

「いや、信じるよ。私の弟子が、緑谷少年が信頼して認めている男だ。私も、君を信じる

……!

「……ありがとう」

そんな会話をして二人は握手する、オールマイトは信念の籠った瞳をかつちゃんに向け、かつちゃんはどこか照れ臭そうに嬉しがっていた。

なんで分かるのかって？かつちゃんもオールマイトの大ファンだからさ！前に言っ  
てたしね！

オールマイトに認めてもらって満足げなかつちゃんは急に身体をクルリと僕の方へ  
むけて含みをもった笑みを浮かべる。

「さてデク……てめえまだ俺に隠していることあんだろ？この際だ、ここで全部話せー」

かつちゃんは笑顔で、だがしかし僕に拒否権はないといった雰囲気ですう言い放つ。

なんでわかるんだよ!!身体の秘密だけじゃなく他にも言っていないことたくさんある  
けどさあ!!超能力……?いや、新手の個性か!!?

「えっ?!いや……その——うわっ!?!」

僕が言い淀んだところで救急車が停まって後部ドアが勢いよく開けられる。

「オールマイト!あんななんて無茶してんだい!!自分の限界くらい、いい加減把握しな  
ー」

そこに飛び込んできたのは我が校の保健教諭のリカバリーガールだ、その老人とは思

えない機敏さと気迫にオールマイトもたじたじだった。

「あのリカバリーガ——」

「あんたも弟子ならもうちよい加減しな！つてあんたその身体……かなり限界が近いね。それじゃ治療もできやしない！寝てな！」

「——ル……かつ!?!」

リカバリーガールは早口で僕を叱るとどこからともなく取り出した注射を僕に突き刺す、その瞬間から意識が遠のいていく。

「ババア！話の途中だったのに！」

「ん？あんたは元氣そうだね。チュー——!!つとほら完治だ、相変わらず体力お化けだねあんたは。さあさっさと教室に戻りな——」

「ババア!!ソレいきなりやんなっていつも——」

リカバリーガールとかっちゃん騒ぐ声を聴きながら僕は意識を失った。

——目を覚ますとそこはベッドの上だった。臭いからしてたぶん保健室、窓の外



を横目でみると日が沈みかけていた。

腕には点滴の管が刺さっていて、その先を追っていくと空になっている点滴パックが見えた。

試験が始まったのが昼前だったから……六時間くらい寝ていたのか。強制的に変身が解けたのは限界突破マラソン以来だな……そりゃこれくらい眠るよな。

——ハッ！オールマイトはどうなったんだ!? 真剣勝負の結果とはいえ、古傷に思いつきり拳を振り込んでしまった！生きてるとは思うけど重症なのは間違いないはず……!!

「オールマイトオオオ!!!」

「呼んだ?」

「ふあ!?!」

飛び起きて叫ぶと隣から気軽なオールマイトの声が聞こえる、そこには僕と同じくベッドに寝かされていたオールマイトの姿があった。

「オールマイト!大丈夫ですか!?!って全部僕がやったせいでこうなってるのか……すいませんオールマイト。今の僕じゃあの傷を狙うことくらいでしか貴方に勝つ方法が思いつかなくて……」

「謝らなくていいよ緑谷少年。今回の闘いは全力の真剣勝負、相手の弱点を狙うのは常

套手段さ。それに……よつと、この通り！わりと大丈夫だ！リカバリーガールのお陰でいつも通りの不健康だろ？」

オールマイトはベッドから軽やかに立ち上がり、細腕を振り回しながら僕に話しかける。

「それに君たちは私を打倒した、それは間違いなく事実で誇つていいことだよ。まあ私自身が言うのはちよつとおかしな話かな？」

とにかく！自信を持ちたまえ緑谷少年！君は私を自らのチカラで超えたのだ、胸を張れよ。次代の平和の象徴、オールライト！」

「…はい！ オールマイトっ!!」

オールマイトが僕の大胸筋を軽く叩き、僕はその言葉とオールマイトから伝わる熱に背筋を伸ばして答える。

「そしてついに私を超えたということ……卒業祝を渡そうじゃないか。これは君が勝ち取ったものだ……つと言つてもあまり大したものじゃないんだが——」

オールマイトは後ろを向いて俯きながらそんなことを言う。卒業祝……？嬉しいけど保健室にそんなもの持ち込んでたのか？たぶんオールマイトも寝たきりだったと思うんだけど……

そしてオールマイトはトゥルーフオームからマッスルフオームへと変身して、画風の

違うオーラを纏わせていく。

「食え」

オールマイトは一本の髪の毛を手に、いつも以上に濃い顔で僕へそう言った。

「へあ!?あのオールマイト、僕もう持つてるんですけど……」

「知ってるよ、だからこれはとりあえずの形だけのワン・フォー・オールの継承だ。別に今すぐ君に渡そうとは思ってないよ?五年後かも知れないし十年後かも知れない。

うーむ、君が100%の力を使いこなせるように成ったときに譲渡するのもいいな!総量が200%になってまた倍の修行が出来るかもしれない!そもそも既に持つてる人間に譲渡するとなが起ころるか予想もつかないが……ほら受けとれよ!」

オールマイトはあれこれ考えていたこと口にしながら、最終的に僕の手に髪の毛を少し強引に渡す。

「あ、あの!それなら誰か他の人に渡せば……その……ミリオ先輩とか……」

自分で言ってるんだが虚しくなる。その方が合理的なのは確かんだけど、僕がオールマイトに認められて得たこのチカラが他の誰かに渡されていくのは……オールマイトを盗られたみたいでなんか嫌だな。

「本当にナンセンスだな君は!このチカラはほいほい誰かに渡していい代物じゃないんだ!私を含めた八人の正義の意思とその積み重ねたチカラの継承……それがワン・

フオー・オールだ！

別に通形少年が悪いわけでないが……私は君こそが私のチカラを受け継ぐに相応しい人間だと確信している！君との出会いが、過ぎた日々が！君の輝きが私にそうさせるのさ!!」

「オールマイト……」

「それにこれは個人的なエゴなのだが……君がどこの誰とも知らんオールマイトのチカラを使つてこれから活躍するのは……緑谷少年を盗られたみたいでなんか嫌だ！

頭では同じものだということは理解している。でも私の心が、魂が、それらは違ふと叫んでいる！

君はこの私の弟子なんだ！他の誰でもない、私自身のチカラを継承して、平和の象徴に成つて欲しいんだよ!!」

オールマイトは拳を握りこんで力強く叫ぶ、僕にはその熱意が痛いほど伝わってきた。似たようなこと考えてとは……嬉しいな。

「ありがとう、オールマイト……！大丈夫、僕は貴方の弟子です。そして貴方の後を継いで、必ず平和の象徴に成つて見せます。だから——大丈夫です！」

僕はオールマイトへ笑顔でそう告げた。そして渡された髪の毛を口に含み一息で飲み込んでいく。

今いるオールマイトは僕があの時助けられなかったオールマイトではないかもしれない、というか違う人間なのだろう……それでも僕はオールマイトを救いたい。過去への後悔や贖罪だけじゃない、僕はオールマイトの未来を守りたいんだ。

オールマイトだけじゃない、このやりなおしの人生で出会った人たちは前世で僕が出会った人たちと同じように違う人なんだろう。

この二回目の人生で積み上げた努力も、育んだ友情も、結んだ絆も、全てが僕を支えて作り上げていると感じている。

だからこれは敷かれた運命のレールを再び走るだけのやり直しじゃない。

再び運命の道を、オールマイトのチカラを履いて、自らの足で……力で修める——  
 やりなおし  
 再履修だ!!

僕はやりなおし  
 僕は再履修の人生で最も変わった彼に……いや新たに出会えた爆豪勝己に。僕を信じて慕ってくれるかっちゃんに。こんな僕でも支えてくれると言ってくれた最高の相棒に。

全てを——

「大丈夫かい、緑谷少年？ さつきからずっと黙り込んでしまっているが。もしかして髪

の毛クソ不味かった!?へアケアはしっかり行っていたつもりだったんだが……」

「いえ大丈夫ですオールマイト!初めてではないので……!ただ少し考え事をしてて」  
「悩み事かね……折角だ、私に話してみないか?」

オールマイトは考え込む僕に助け船を出すように語りかける。

僕のことだけじゃ駄目だと思う、このチカラ……オールマイトのチカラを授かったことも。

オールマイトに聞こう、これだけは僕だけの問題じゃないからな。

「オールマイト……僕、かっちゃんに全部話そうと思ってるんです」

「全部……とは?」

「僕の再履修<sup>やりなおし</sup>のこと、僕らのこれからのこと……そして僕の、僕たちのこのチカラのことを……です」

「そうか……」

オールマイトは僕の言葉を受けて俯きながら考え始めたのだが――

やはりダメだろうか、オールマイトがその師匠から受け継いだ大事なチカラのことだ。既に僕が持っていたとはいえそのチカラを授かる資格を得た直後だし……

「私はいいと思うよ、話してしまっても」

「ええっ?!?そんなあつさり?!?」

「うん、そもそも君が今日まで鍛え抜いてきたチカラは君自身が持っていたものだし、私ごとやかく言うことじゃないよ。」

それにかくいう私も相棒であるナイトアイには全部話しているしね！」

僕の心配していたことなど全くの杞憂、オールマイトは飄々と言葉を續けていく。

「なによりも君が話したいと、伝えたいと思ったのだろう？ならばそうするべきだ。」

まだ私は君にこのチカラを譲渡してはいない。だがこのチカラを授けようと思ったその時から、その秘密も、その先の行方も、全部君に託したんだよ。だから私から止めることも奨めることもない。

ただひとつだけ君の師匠として言えるのは——君が信じた相手なら…私も信じている。ということだけさ!!」

オールマイトは力強い笑顔で僕にそう告げた。僕はその言葉に思わず涙を流しそうになるが、ぐつと堪えてオールマイトへ無言で頭を下げた。

オールマイトは足踏みしていた僕の背中を押ししてくれた。ならその期待に答えなきゃな…!!

その後、僕はオールマイトと別れて家路に着いた。かつちゃんへの連絡を入れなが

ら——

——時刻は夜10時、僕はかつちゃんを携帯で呼び出してひとり公園で彼を待つ。昔はこの公園でかつちゃんとよく遊んだものだ。

「よおデク！お前がこんな時間に呼び出すなんて珍しいな」

「やあかつちゃん。ごめんね、こんな遅い時間に…でも大切な話があつて、直接会いたかつたんだ」

かつちゃんはやや息を切られせながら公園に現れた。どうやら走ってきたみたいだ、なんだか急かしてしまつたみたいで申し訳ない。

まあ僕も気持ちが悪く落ち着かずランニングしながら来たのだが。

「なんだそのマジな顔は？もしかして告白でもするつもりかあ？」

かつちゃんは冗談めいた話し方で僕に尋ねる。かつちゃんに言われて気がついたが僕の表情はかなり余裕のないものになっていた。

これから僕がかつちゃんに話すのは僕の隠し事の全てだ、それを察して告白という表現をしたのだろうか？かつちゃんはやっぱり鋭いな。

「告白か……確かにそうとも言えることかも知れない」



「えっ!?……いやいや急にそんななられても困んだろうが……」

かつちゃんは自分の言ったことなのに復唱しただけでなぜか動揺していた。……ん？ どういうことだ？ まあいい、話せば全てが始まる。

「かつちゃん、僕はこれから突拍子も無いことを言うよ。にわかには信じられない話かもしれないけど、かつちゃんには信じて欲しいんだ。他でもない相棒の君だから——」

そうして僕はかつちゃんに全ての隠し事を打ち明けた。

オールマイトの下で修行をしてきて、ヒーローとして成長してきたこと。

オールマイトからワン・フォー・オールを受け継いだこと。

未来から過去へと戻り、再履修やりなおしの人生を歩んできたこと。

そして……僕とオールマイトは近い将来殺され、命を落とす運命にあるということ……全てはそれに抗うためだったということ。

かつちゃんは始めは冗談だと思っていたのか、にやけた顔をしていたが……段々とその表情は固くなり、そして真剣な顔になり、最後には項垂れるように俯いて話を聞いていた。

「——これが僕の全てだ」

全てを明かした僕は俯いたままのかっちゃんを見据えながら立ち尽くす。

暫く沈黙が流れた後、かっちゃんは俯いたまま話始めた。

「……これで全部か？これだけのことを今の今まで俺に隠して生きてきたってのか……！  
おい！答えろデクウウウウ！！」

かっちゃんは顔を伏せたまま僕へと怒鳴り込む。

かっちゃんが怒るのも当然だろう……強いと思っていた、そして慕ってた僕が、  
再履修やりなおしなどという反則染みた方法で自分に勝っていて、本来ならまったくもって大したことのない人間だったということを告げられたのだから。

「ごめんかっちゃん……そりゃ怒るよね。今までこんなズルみたいな方法で君に勝ってしまっていて。本当なら君は僕なんか及ぶような相手じゃなかったのに。」

でもオールマイトを救うためになりふりを構っていられなかったんだ……だからごめ——」

「ちげえよアホっ!!俺が怒ってんのはそこじゃねえ!!」

「ええっ!?!じゃあオールマイトの秘密を僕だけが知ってたことに怒って——」

「んなわけあるかボケエ!ぜんっぜんちげえわ!マジでデクだなお前は!!」

かっちゃんは僕の謝罪と答えを聞いて更に熱を上げてぶちギレる。僕には最早なに

が悪くてなにがいいのかわからなくなっていた。

「なんでもっと早く俺に言わなかった!?!なんで俺に助けを求めなかった!?!」

「その……言っちゃいけないこともあったし。なにより信じてもらえないと思つてたし

……」

「バカ野郎!信じるに決まつてんだろが!!何度も言うが俺はお前の親友で相棒だろう!?!」

かっちゃんは僕の胸ぐらを掴みながらキレ続ける。

「僕が実は弱かつたつてことに怒つてないの……」

「そんなんはどうでもいい!いいかよく聞けデク。俺は前世とやらでのお前なんてのは知らねえ!そしてお前が出会つてた爆豪勝己とかいうやつも知らねえ!!」

お前にとつては同じ顔の同じ人間に思えるかもしれないが、俺は……今ここにいる俺は!この世界で生きてきたお前と過ごしてきた俺だ!

お前を認めて、お前に認められた、そんな俺なんだよ!どこぞのクソを下水で煮込んだみたいなのと同じにすんなよ!!」

僕は本当にバカ野郎だ……オールマイトにもかっちゃんにもおんなじことを言われてしまった。僕もそれを信じてここに来たというのに……

「じゃ、じゃあかっちゃんはなんでそんなに怒つて……?」

「ああ!? だからいつてんだろ! お前が俺に助けを求めなかったからだ!

お前の話を信じるなら……お前は近いうちに死んじまうかもしれないねえんだろ?

だったら言えよ、俺に! 運命に抗うために救けてくれって、力を貸してくれってよお!!」

「かつちゃん……」

「俺はそんなに頼りないか……? 俺は命を預けるに値しないような相棒なのか……? なあデク……」

かつちゃんは普段絶対に見せないような、むしろ今まで見たことがないような、すがりような、悲しむような、寂しいような……そんな眼で僕を見つめる。

「そんなこと……そんなことないよ! 僕がかつちゃんを信じてる! だから今だって全部話そうって思えたんだ。全部話せたんだよ!」

隠し事の多かつた僕だけど、嘘はつかない! かつちゃんは僕の一番の親友で、最高の相棒だよ!!」

僕がかつちゃんにありのままの思い浮かんだことを伝える。そこには一切の嘘偽りは無い。

「デク……ありがとうな。わざわざ口にさせちまったが、俺もお前を信じる。俺はお前の相棒だからな!

それにヘド口から救けてもらったときのこと覚えてるか? 今一度言うぜ——」

かつちゃんは先程までと打って変わって自信に満ちた表情で話していく。

「次は俺がお前を救けてやる!!」

かつちゃんは笑顔で僕にそう告げて、拳を突き出してくる。

僕はかつちゃんに負けなくらいの笑顔で拳を突き出し、正面から合わせた。

——かつちゃんが僕を救けて、支えてくれると言ってくれた。僕にはこんなにも素晴らしい相棒がいるじゃないか!

いや、かつちゃんだけじゃない。オールマイトも、サーナイトアイも、Mt.レディも、ミリオ先輩達もオールマイト杯のみんなも……僕を育て支えてくれた。

——僕は本当に人に恵まれた。僕だけのチカラじゃない……この筋肉と、皆の力をひとつにして、必ず運命に打ち勝って見せる!!!

## 第八章

### 筋肉バカとテストと相棒

サイドキック

「デク、もう隠してることはねえよな？」

「あー、ないんじゃないかなあ」

「いや待てよ……そういえばお前が死んじまうかもしれないん事件のきつかけを聞いてなかったな。それさえ潰せば案外いけるんじゃないやねえか？」

かつちゃんは閃いたようで、僕に尋ねる。

あの事件のきつかけ……神野町に僕とオールマイトがいたのは……

「いや、その……それは……ごめん、言えな——」

「デク。もう隠し事は無しにしよう……なあデク？」

またあの眼だ。困ったような、情けなくも見えるような、でも真剣なかつちゃんの眼。

僕はどうかやらの眼に弱いらしい……

——僕はこの時のことを後に後悔のちすることとなる。あのとき黙り通していれば、〃適当な嘘でもついておけば……あんなことにはならなかったのに、と。

「わかった、話す。話すよかつちゃん」

「それでこそデクだ！」

僕が根負けすると、かつちゃんはいつもの勝ち気な顔に戻る。こりややられたかな。

まあいい、かつちゃんならきつと信じてくれる。わかつてくれるはずだ。そうならな  
いために協力だつてしてくれるだろう、だから正直に話そう。

「かつちゃん、よく聞いてくれ。あの事件のきつかけは……これから行われる予定の林  
間合宿にヴィラン連合が襲撃してくるから始まる。」

USJの時とは違って生徒にも多くの被害が出た。そして……かつちゃんはヴィラ  
ン連合に拉致されてしまったんだ。

オールマイト達トップヒーローが集結してかつちゃんの奪還作戦が神野町で行われ  
てね。当時、僕は轟君や切島君らと一緒に極秘の奪還作戦を実行して神野町にいた。

そしてそこにヤツが現れたんだ……諸悪の権現、最悪のヴィラン、連合の親玉、オールマイトの宿敵、オール・フォー・ワンがね。」

僕はヤツの姿を思い出しながら力強く拳を握りしめた。

「ヤツの登場でヒーロー達はほぼ壊滅的、オールマイトだけがヤツに立ち向かったんだ。でも僕らは戦場の混乱に乗じてなんとか、かつちゃんの救出に成功したんだけど……僕は止まれなかった。劣勢だったオールマイトを救いたい、そんな一心でほぼ無意識で戦場にひとり戻ってたんだけだ。」

力もないのにそんなところに向かうべきじゃなかった……今だから言えることだけだね。

その結果僕を庇ってオールマイトは死んだ。そして僕もついでに殺されて……さっきの話に繋がるんだよ」

僕は愚かな自分の過ちを語りきった。今口にしても酷いもんだな……

僕の話を黙って聞いていたかつちゃんは気がつけばまた俯いていた。故にその表情は読み取れないが、肩が震えているのはわかる。

「それが真実なのか……」

かつちゃんは俯いたまま僕へ問う。

「そうだよ……これが愚かな僕の過ちの全て——」



「なにがお前の過ちだ!!全部、全部俺じゃねえか!!全部のきつかけが俺から始まって——俺がお前を!オールマイトを終わらせちまつてんじやねえか!!」

かつちゃんは顔をあげると、眼を泪で滲ませながら叫ぶ。

「それは違うよ!悪いのは僕だ、思いのままに飛び出した…僕が悪いんだよ!」

「ちげえだろうが!!なんでだよ!どうしてお前は俺に関われんだよ!俺が捕まらなきゃ…俺さえ見捨てればお前は死ななかつたのに!オールマイトもだ!!」

なんでそんな人間と人生やり直した先で仲良くできんだよ!!?

わからねえ! 理解できねえ! 意味わかんねえんだよ!!!」

「違うっていつてんだろ!!!かつちゃんこそなんで分からないんだよ!」

僕とかつちゃんは互いに譲らず、ただただ言葉のぶつけ合いが加熱していく。

「かつちゃんだつて言つてたろ、前世の君と今の君は違うつて!!」

「てめえがさつき言つてたろ!この世界でも前世の運命を辿つてゐるつて!!だつたらそれは、その運命のきつかけは変わらねえ!全部俺から始まるんだろ!?!——運命を覆すんじやねえのか!?!なら端はなから見捨てろよ!救きたいなんて思うなよ!!!」

「見捨てるわけないだろ!僕が!君を!! 僕は運命なんかには負けない!オールマイトだつて救けてみせる、君も僕が救けるんだ!!そのためだつたら僕の命なんて——」

「ふっぎけんなあああ!!!てめえ!自分の命より大切なもんなんてあるわけねえだろ!—

度はやり直せたって、次があるとは限らねえだろう!!? イカれてやがるよ、てめえはっ!!!」

かっちゃんは怒りに任せて僕の胸を強く叩く。だが鍛えぬかれた僕の身体はその拳では倒せない。

「……こんなに強くなつてんだろ？俺なんか見捨てればお前は生き残れるじゃねえか……オールナイトだつて救けられるだろうが……」

「駄目だ。僕はもう諦めないつて決めたんだ。手の届くもの全てを救っていくつて……決めたんだ」

かっちゃんは涙を流しながら今度は弱々しい拳で僕を殴る、そこにはもう先程までの勢いはなかった。

「話が平行線だな……」  
「……」

「今日はいろいろ有りすぎて、俺にはもうなにか正しいのかわからねえ……暫くひとりで考える……」

かっちゃんはそう言うのと目を袖でゴシゴシと拭つて、僕に背を向けて歩き出した。そして公園の入口まで歩いたところで立ち止まり、此方へと振り向く。

「じゃあなデク——もう俺に関わるな……」

かつちゃんは悲しむような、寂しいような、でも真剣な眼で僕に一言だけ告げて、その場を後にした。

僕は拳を固く、固く握りその場に立ち尽くすのだった——

—— M i x e s   s i d e   i n   ——

オールマイトは一人、ベッドの上で静かに窓から月を見上げていた。

—— 緑谷少年について資格を渡せた。そしてチカラを譲渡する時もそう遠くはないだろう。そして私のチカラを継いだとき、彼は平和の象徴となる筈だ。

オールマイトは一人、己に誓う。

—— 例えこの先ヤツがどれだけ手を伸ばそうと、私の命が尽きようとも、緑谷少年

……君だけは——

爆豪勝己は独り、夜道を歩きながら空に一際輝く一等星を見上げる。

——デクの話した突拍子もない秘密。おそらくあれは全部本当のことだ、俺がデクの嘘を見抜けない筈がないからな。

だからこそ……アイツに嫌われようと、なんだろうとあいつを俺から引き離さなきゃならねえ。絶対に救いたいなんて思わねえように。

爆豪勝己は独り、己に誓う。

——例え俺がどうなろうと……デク、お前だけは——

緑谷出久はひとり、夜の公園で満天の星空を見上げる。

——かつちゃん……僕は君にどれだけ嫌われようと、拒絶されようと、僕は構わない。いくらでも手を伸ばし続けよう。

運命が僕らを呑み込むのならいくらでも足掻いて、乗り越えて見せよう。

緑谷出久はひとり、己に誓う。

かつちゃんを——そしてオールマイトを——

——  
“たす救ける”。

——  
M i x e s   s i d e   o u t  
——

第八章 愚者とテストと相棒  
サイドキック

## 【番外編3】メリッサ・シールドの日記【劇場版公開記念】

これは、一人の少女の日記である。

その少女の名はメリッサ・シールド。 “I・アイランド” のアカデミーに通う二年生の16歳、ブロンドのロングヘアとメガネをかけた整った顔立ちが特徴だ。

そして個性研究で有名な天才科学者のデヴィット・シールドの一人娘である。ちなみにデヴィットはオールマイトと学生時代からの親友で、勿論彼女も面識があることを補足しておく。

ではこれからそんなうら若き乙女で科学者な彼女の日記の一部を盗み見していきましょう。

4月上旬のある日

今日はパパの機嫌がとても良かった。理由を聞いてみると、パパの親友のマイトおじ

さまから久々に連絡があったらしい。

数年前からパパはマイトおじさまの話になると沈んだ顔をしていたから、たぶんにかおじさまに良いことがあったに違いない！

でもなにがあつたんだらう？パパはそこまでは教えてくれなかった。

4月下旬のある日

パパの機嫌が良かった理由がわかったの！

なんとおじさまが弟子をとつたらしい。それでその育成に必要な機材を作ってくれないかと頼まれたんだって。今の自分の研究をやらないでそちらに掛かりきりになるのよね。

それで今回頼まれたのは腕時計。GPSで位置と走行距離が割り出せて、何日も充電が要らないやつで、とにかく頑丈に作ってくれて言われたらしい。

「トシに頼まれて何かを作るなんて何年ぶりか分からないけど、久々に頼ってくれたから気合い入れて開発する」とか言ってもうやる気満々！

でもいくら頑丈だからって超重量の合金で腕時計作ってたから「腕時計なのにそんなに重くしたら不便じゃない？」って指摘したらシユンとしてたのは少し面白かった。

パパだったらマイトおじさまの事となると周りがすぐ見えなくなっちゃうから私がついてあげなきゃダメかもね。

5月上旬のある日

この間おじさまに送った腕時計からデータが転送されてきた。でもデータが不可解なのよね……

まず不思議なのが連続走行時間。なんと72時間ほぼ止まらずに動き続けてたらしい。それも似たような範囲を1日ほどかけて回るように走っていた。うーん、自走する何かに取り付けたのかな？でもそれならなんで腕時計に……？

次に不可解なのがその速度。始めの12時間くらいは時折、休憩のように止まりながら、時速40〜50キロくらいで動いていた。これだけなら車みたいな乗り物に乗って動いてたと予測できるのだけ……

そこから段々と速度が落ちてきて最後の12時間はほぼ止まらず、時速10キロ以下でゆっくりと動いていたの。スタートからほぼ72時間でスタート位置に戻ってて、それから電源が切られたみたいで、そこで記録は終わってた。

いったいおじさまはあの腕時計を何に使ったのかな？まさか腕につけて走ってたと



か……いや、ないない。

### 6月下旬のある日

最近は定期的におじさまからパパに電話が来る。内容は弟子の育成に関しての相談や簡単な愚痴だ。でもパパはおじさまに何かを教えるのが楽しいらしくて、いつつも楽しそうに電話をしているのを見かける。

なんでも弟子がスランプに陥っているみたいだ。私もパパも研究者でたまにスランプに陥る時があるから、その気持ちはよくわかる。

そしたらパパが「スランプなんてデカイショックがあれば一発だ！」なんて言い出して、それに同調したおじさまが大規模な特訓を思い付いたって言うってたわ。弟子の彼も可哀想、思い付きで特訓が始まっちゃうんだもの！

### 7月上旬のある日

パパにマイトおじさまからまた依頼が来た。この間のおじさまの特訓に必要な機材を作ってほしいと。

今回のオーダーは発信器。緊急時に使うものらしく、遮断されにくいかなり強めの電波を使って、外部動力要らずで1ヶ月くらい充電せずとも作動する仕様にして欲しいとのことだ。そして頑丈に作ってくれとまたも言われる。

パパは内部に動力炉を組み込んだ、強力な電波を発信し続けられる発信器を設計し始めた。けど1メートル四方くらい大きさの物が出来そうだったから「外部動力要らずってことは持ち運び出来ないダメなんじゃない？それに緊急用って言ってるんだから作動した時だけ電波を送受信出来ればいいじゃない」って提案したらシヨボーンとした顔になった。

結局私の案が採用されたらしく、完成したのはサッカーボールくらいの大きさの発信器だ。球状で衝撃にも強いとパパは豪語してた。

でもパパ、ビルの5階から落としてもピタリと止まるくらいの衝撃吸収構造はやり過ぎだと思うの……

9月中旬のある日

なんと！パパと一緒にヒーローコスチュームを造ることになった！

それを着るのは彼だ。そう、マイトおじさまの弟子の彼！

と言つても昔におじさまが着ていたコスチュームの改良品を造るだけなのだけれども。

それでも昔からの夢だったヒーローコスチュームの製作に携われるのは嬉しい！しかも一流研究者のパパと肩を並べて研究するのは、ひとつの到達点だったので尚更嬉しい。これで私も誰かのヒーローに近付けるかもしれない。

早速送られてきた身体データに目を通すと、彼がかなり逞しい身体なのがすぐわかった。これから予測できるのは、歳は二十代前半、恰幅の良さから純粋な日本人ではなくハーフかなにか、増強系の個性で長年筋肉を鍛え上げている、といったところかな。

たぶんだけど、おじさまは新人のプロヒーローを弟子にとつたんじゃないかな？

また9月中旬のある日

コスチュームの改良は大方終わった。元々の機能は削らず、材質を今のおじさまのものと同じにしたり、カラーを指定されたグリーンにしたりするだけなのであつという間だったね。

でも顔を隠せるようにして欲しいというオーダーに苦戦中……

成長するまで誰か分からないようにしたいってことらしい。今時、秘密のヒーローな

んて流行らないと思う！

私は認識障害装置を着けたらいいんじゃないかと提案したんだけど「トシにはそういう高度な技術の精密機器は使いこなせないから無理だな。聞いた話じゃ弟子も似たようなもんらしい」とバツサリ切られてしまった。

悔しかったのでパパのラボに無造作に置かれてたレトロコミックのヘルメットを着けた登場人物が目だったので、「じゃあこんなんでもいいじゃない？」と投げやりに言うてしまった。

そしたらパパは「おお！コミックからのオマージュか！いいじゃないか、メリッサもなかなかロマンが判って来たね」と誉められてしまった。

嬉しいけどなんか釈然としない……！

10月1日

今日で私は17歳になった。アカデミーの皆やパパ達に祝って貰ってとても幸せな日だった。

そんな中でも一番の驚きはいつになく真剣な顔のパパからの言葉だった。

「メリッサ・シールド。トシ…いや、オールマイトの弟子のサポートチームへの君の加入

を正式に許可する。アカデミーには私から話を通して単位も出るようにするから、本格的にヒーローのサポートをしてみないか？」

私は二つ返事でイエスと答えた。私の夢への大きな一步を踏み出せる。新人のヒーローとはいえ、あのマイトおじさまの弟子……断る理由はないよね！

この日から私の人生が大きく変わる。そんな予感がした。

10月上旬のある日

完成したコスチュームをマイトおじさまに送ってから1週間が経った今日。おじさまからコスチュームを身に付けた彼とおじさまのツーショット写真が送られてきた。ヘルメットのおかげで顔は分からないけど、筋骨隆々な若者がそこに写っていた。

同時にヒーローネームも添付されてきたから、「登録し直さなきゃいけない」とパパがぼやいていた。「大丈夫」って思いの込められた名前……きつとおじさまと同じで優しく強い人なんだろう。

パパと一緒に自分の手掛けたアイテムがこれから誰かを救ける支えになると思うと喜びで思わず顔がにやけてしまう。

でも最悪なことにその姿をパパに見られちゃった。

パパとの開発の成果を喜んでた、と言うのが恥ずかしかったので「彼にコスチュームを渡すことが出来て嬉しかったのよ」と誤魔化しを言ってしまった。

それを聞いたパパは「娘は渡さんぞお！トシイ！」と言って泣きながら部屋を飛び出していった。

……なにかおかしな勘違いをされた気がする。

11月中旬のある日

彼があのコスチュームを着て、既にヒーロー活動をしているとパパから聞かされた。

なんでそんな大事なことを早く言わないのか。パパに聞いたですと、おじさまの下じやなくて他のプロヒーローの下で実戦形式の修行をしているだけだから、自分にとつては本番じゃないと言われた。

そう思ってるのはパパくらいよ！もう！

更にパパを問いたですと、「M t. レディ」というヒーローの下で相棒見習いをしていることが分かった。

M t. レディ…調べてみたけど、とつても綺麗な女性だった。ただホームページや彼女が活躍した事件の記事などを見ても彼のことは欠片も書かれていなかった。なんで

…？

Mt. レディと彼は歳も近いし、きつと仲良く活動しているとは思う。もしかしたらヒーローと相棒以上の……（この先は文字が消されていた）

でも私には関係ない！そう、関係ないよね。私は科学者で彼はヒーロー。ただサポートするだけの間柄なんだから。

情報が少ないからだろうか。彼のことが無性に気になる。

12月初めのある日

彼のヘルメットが破壊された状態で送られてきた。

中身を知らずに箱を開けたら、明らかになんらかの衝撃で砕けたヘルメットが入っていたのだから。その時の私の動揺は酷かった。

軽さと視界の確保に重きを置いた構造をしていたとは言え、硬度に不足は無かった筈で、少なくとも人の頭蓋骨よりは頑丈に作ってあったヘルメット。それが重機で潰されたように壊れていれば、同時に彼の頭も……と想像してしまったのは当たり前のことだろう。

しかし彼が亡くなったとか重症を負ったなどの情報はこちらには来ていない。急い

でパパに問い合わせをしてもらったけど、早くても明日の朝にならないとわからないらしい。

……無事でいてね、私の——

12月初めの次の日

呆れた。彼の容態が分かったんだけど、全くの五体満足で無事だった。呆れたのはヘルメットが壊れた原因。

なんでも戦闘訓練中にヘルメットごとヘッドバッドしたら、ヘルメットだけが粉々に砕けて、彼自身はかすり傷程度しか負わなかったとか……

どうということなの!!?! 増強系ってそこまで強くなれるもの!?!

パパに聞いたなら「私も昔はよく、トシに渡したアイテムを壊して返されたもんだよ。並の強度じゃパワーについてこれないんだ。まさか弟子までそうなってるとはなあ、ハハハ」と笑って返された。

もしかしたらと思ひ、おじさまの動きを元に開発したアイテムをパパに見せたら、おじさまが三回くらい全力で使ったら壊れるかもしれないと言われてしまった。強度には自信を持って作ったものだったのでかなりショックだった。



とりあえずヘルメットの強度は倍にして送り返すことにする。

12月下旬のある日

彼は今、様々なヒーローの下で相棒として貸し出されて、経験を積んでいると聞いた。パパにおじさまから「彼は私の弟子なのに皆返してくれないんだ！」みたいな愚痴の電話がよくかかって来るようになったらしい。

パパもパパで「私もメリツサが他所のラボに入り浸ってたら盗られたみたいで嫌だから、気持ちかわかる」と言っていた。

なので「私もいつか他のヒーローの専属になったり、はたまたどこかにお嫁にいったりしたらここを出るときが来るかもよ？例えば——彼とか」と冗談混じりに返した。

そしたらパパは「ぐおおお……娘はまだまだやらんぞ！トシイ!!」と言つて泣きながら部屋を飛び出していった。デジャブ……

私は彼の顔も知らない、あくまで科学者と顧客。そんなことある筈なのに。

そういえば彼のことってそんなに知らないなと思つて、パパに聞こうと思つてたんだけど、この調子じゃ教えてくれないかも。

PS：深夜に目が覚めるとリビングからパパの話し声が聞こえたのでこっそり様子を見たら「ああ…メリッサがあ…俺のメリッサがあ…おい、トシ、わかるか？わかるよな!」とか言つて号泣しながら電話をしていた。私はそつとリビングのドアを閉めて見なかったことにする。パパのバカ…

． ． ． ． ． ．

2月下旬のある日

衝撃の事実が発覚した！なんと彼は学生だった!!しかも私より2つも年下らしい!

事の発端は彼が日本のヒーロー育成の名門“雄英高校”に入ることになったという、

おじさまからの報告だ。

教師でも始めるのだろうか？という疑問を抱き、詳細を聞いてみると……生徒として現役で合格したとのことだった。

完全に二十代前半の新人のヒーローだと思い込んでいたので、その実力と年齢のあまりのギャップに暫く理解に苦しんだ。

証拠と言わんばかりにメールには写真が添付されていた。

そこには照れ臭そうに合格通知の用紙を持つ筋骨隆々な若者の姿があった。彼の素顔は二枚目とは言えないが、優しそうな安心感のある顔をしてるなあ、という感想。

他にも写真には彼と蟹鍋を囲むように何人かの人物が写っていた。

おじさまと元相棒のサーナイトアイ、それに学生らしき男女三人組。そしてどこか見覚えのある金髪の美人なひとがひとり……記憶を辿ってそれがMt.レディだということに気がついたんだけど……なぜ彼女が？

彼女と彼の繋がりがイマイチよくわからない……いったいどういう関係なんだろう……？

3月上旬のある日

彼からコスチュームの改良の依頼が来た。しかもおじさまを通さず、直接私達サポー

トチームに対して。

おじさまには入学祝いとして許可を貰ったとのことで、無断ではないらしい。

依頼の内容はマントを火に強い材質に変えて欲しいと言ったもので、注釈には爆発にも耐えられるくらい頑丈にして欲しいと書いてあった。やっぱり頑丈さを重視してるのね。

そしてパパからは「メリッサ、これをひとりで開発してみないか」と提案された。これはオプシオン扱いの品だからと、私に研究の機会を与えてくれた！ 私は当然イエスと答える。

パパの信頼と彼の信用を裏切らないように全力で取り組んで、完璧なアイテムを造るんだから!!

3月上旬のある日

あれから1週間、最初の試作品が完成した。完成したのだが完全にやらかしてしまっ  
た……

私はこの1週間、研究を続けた。調理グッズから宇宙開発まで多くの耐火耐熱素材を調べあげて、とにかく熱に強く、燃えにくく、衝撃にも強い、そんな材質を見つけては

マントに組み込んでいった。

そして出来上がったのはビルの発破のダイナマイトでも破れることよないような強靱な対爆マントだ。確かに申し分ない性能を誇ると自負している……だけど問題が一点。重すぎるのよね……

耐熱、耐衝撃、難燃の3層構造のこのマントはその性能と引き換えに重さ約35キロの超重量マントと化した。一般人の女の子でしかない私には器具を使わないと運ぶことすら出来ない重さ。

持ち運びに手間取っていた私を見たパパが「どうしたんだい？ えっ？ マントが重すぎる？ まあパパに任せなさい、たまには運動しないと」とか言って持ち上げようとした瞬間、一発で腰を痛めた。

あの時のパパの「ふんっ——んぬうふう!？」という声は暫く忘れられそうにない。とりあえず試作品の完成と仕様をまとめた報告書を彼に送っておく。どういう風に改良するかは彼の判断を仰ごう……

## 次の日

彼からすぐに返事が来た。「その仕様で大丈夫です、それくらいの重さなら問題なく動けます」って正気……？

彼がいいと言うのだからその仕様で仕上げることはする。着脱を容易にしておいて……

カラーは……彼の緑に映える赤にしよう。黄色も考えたのだけど、なんか脳裏にMt・レディが浮かんだので却下した。

そして彩飾したマントをあくまで試作品として彼に送る。きつと使い勝手の悪さに改良を求めてくるに違いない！

#### 4月中旬のある日

彼からマントが大変役に立ったとお礼のメールが来た。そうかそうか、それは良かったと思って内容を確認すると……

「——おかげでビルの側面を半分吹き飛ばすような爆破の直撃にも耐えられました」ってバカ!!あのマント自体は爆破に耐えられても着用者への衝撃は緩和されないだから!!なんでそう変な方向にばかり思いきりがいいのよ!

それに無傷で耐えきったとメールにはあった。いったいどんな身体をしているのか……あまりの規格外さに頭が痛くなってきた。

「どうしても負けられない相手に勝てたので、本当に助かりました」とのこと……彼がそ

ここまで言う相手……余程凶悪なヴィランと闘ったのね。

この件は少しでも役に立てたと思つて、良しとしましょう。

5月上旬のある日

雄英高校にヴィラン襲撃の事件があつた。オールマイトと生徒の活躍により、大した被害はなく鎮圧されたらしい。

その生徒の中には彼も居た……もう何があつても驚かない気がしてきた。感覚が麻痺してるのかも。

5月中旬のある日

雄英体育祭の中継をパパと一緒に見た。勿論彼の出場する一年の部を。壇上に立ち、その場の誰よりも堂々と宣誓と宣戦布告をする姿はとても15歳の高校生には見えなかつた。

ちなみにパパの感想は「私の地元元州知事みたいな声してるなあ」だつた。それつて確かアーノルドとかいう人のことだよな？ そんなに似てるのかな？

競技が始まったあとは、圧巻の一言に尽きる。障害物競争では人助けをしながら一位を獲得し、騎馬戦は大暴れしたのち最後の最後でぶち壊すし、トーナメントでは決勝で現れたと思えば二人を相手に圧勝するし……

もう何があつても驚かないと前に書いたけどあれは嘘だ。

こんなもの見せられて驚かない訳がない。それに決勝で戦っていた二人の生徒はプロでも十分に通用するだけの実力があつたように見えた。それを相手に笑いながら完勝するなんて、規格外にもほどがあるでしょう……

締めめ挨拶でおじさまが彼のことを自分の弟子であると明かした。彼はこれで有名な人だろう。まあそれを抜きにしてもあの活躍は有名にならないほうがおかしいけど。

「あの破天荒さ……トシの若い頃によく似てる。こりや間違はなく将来オールマイト並のヒーローに成るな！ やったなメリッサ、このままいけば日本のトップヒーローのサポーターに成れるぞ！」とパパは他人事みたいに言っていた。それはパパがおじさまから受けた仕事だったはずなのに……

もしかしたら私はトンでもない仕事を引き受けたのかもしれない。

6月下旬のある日



アカデミーの友達から今日本で話題になっている“ヒーロー殺しステイン”というヴィランの動画を見せてもらった。

まるで悪のプロパガンダのような動画だったが、私の目に止まったのはそのヴィランではなく、少しだけ写っていた緑のコスチュームのヒーロー……彼の姿だった。

家に帰って、無編集の元動画を探すとすぐに見つかった。

そこには満身創痍ながらも叫びながらヴィランに立ち向かう彼が映っている。結果的にヴィランは別のヒーローが捕らえたみたいだったが、それでも戦い続けていた彼はまさしくヒーローだ。

血にまみれて、おそらく手足もまともに動かせず、それでも正義を貫く。体育祭の時の完璧超人のような姿とは違ってかわって泥臭く、一見惨めにも見えるような姿だったが……私はその姿に心打たれた。

この人を支えたい。

私は彼のヒーローに成りたい。

7月中旬のある日

来月の頭に“I・アイランド”で行われる祭典“I・エキスポ”におじさまを招待し

た。仕事の都合がつけば来てくれることらしい。

来てくれるといいな。おじさまに久々に会いたいし、彼のことを聞いてみたいから！

7月下旬のある日

彼のコスチュームが激しく損傷した状態で送られてきた。事前の連絡なく送りつけてくる製造会社はいつたいなにを考えてるの!?彼の悲報などはないから無事だと思うけど。

詳しい話を聞こうとパパのとこへ行ったら、同じような箱がパパにも届いてて、それはマイトおじさまのボロボロになったコスチュームだった。「最高傑作だぞ…!?嘘だろトシ…:」と唾然としているパパ。どうやら私と同じらしい。

急いでパパがおじさまに連絡すると「H A H A H A! 期末試験で二人して全力で闘ったら壊れちゃってさ。ゴメンゴメン!」とめちやくちや軽く言われた。どんな試験よそれ!

しかもおじさまは彼に負けたらしい。オールマイトが誰かに負けるって一大事だと思うんだけど、なんでパパもおじさまもそんなに上機嫌なの?

彼はどこまでいってしまうのか。私も置いていかれないように頑張らなきゃ!

## I・エキスポ前日

明日のエキスポにおじさまが来てくれると連絡が来た。

でも「——というわけで、弟子も連れていくからヨロシクね!」としれつと彼も来ることを告げる。

なんでそんな大事なことを前日に言うの!? 彼には会いたいと思ってたけどなんの準備も出来てない!

明日何着ていけば!? 美容室、朝からで間に合うかな? 聞きたいこととかまとめなきゃ。それに見せたいアイテムもあるのに整理できてないよ!!

時間が足りない……もう、おじさまのバカー!!

---

これが彼女、メリツサ・シールドの最新の日記だ。

そして今日はI・エクスボ当日。オールマイトとその付き添いの1名は既に会場に着しており、出迎えに来たデヴィットとメリッサとの邂逅を果たしていた。

「ようデイブ、元気だったか！」

「ああ、トシ。そつちこそ！」

昔からの親友であるオールマイトとデヴィットは久々の再会を喜び固く握手を交わす。

「メリッサ、大きくなったなあ！もうすっかり淑女レディに成っちゃって」

「お、お久しぶりですおじさま。会えて嬉しいですよ！」

「なんだ緊張してるのかい？昔みたいに飛び付いてきてくれても良かったのに。H A H A H A!!」

返事が一瞬裏返るメリッサ。明らかに緊張しており、オールマイトがその頭を軽く撫でる。だがオールマイトはその緊張の原因が何なのかわかっていなかった。

そしてオールマイトは緊張の原因に話しかけた。

「紹介しよう少年、こちらは——」

「デヴィット・シールド博士ですよね!!個性研究の第一人者！天才科学者と呼ばれる大物で、オールマイトのコスチュームやサポートアイテムの開発を担ってその成果は

——「ごほんごほん！あー、少年。今はそのくらいにしとこうか」あ、すいません……

ついで……」

「紹介の必要はなかったかな？デヴィットだ。よろしく」

「はい！よろしくお願ひします！」

少年のいつもの悪癖をオールマイトが止めて、二人は握手を交わす。その屈強な筋肉の塊みたいな身体とは裏腹に、彼の元来の気質はそういうものなのだ。

「こつちが娘のメリッサだ。さあメリッサ、挨拶を」

「はじめまして、メリッサ・シールドです。貴方のコスチュームの開発改良に携わつて、あなたに聞きたいこととか見せてもらいたいこととか見せたいものとか採りたいデータとかホントにたくさんあつて——「ストップストップ！メリッサ、そういうのは後にしよう。まだ彼の自己紹介も済んでない」あつ、ごめんなさい。ついで……」

緊張からメリッサは普段は初対面の人に見せないような態度をとつてしまった。デヴィットが止めなければどこまで話していたかわからない……かくいう彼女の本質も科学者として当たり前のようにそつち側なのだろう。

「じゃあ少年、改めて自己紹介を」

「はい！」

オールマイトが弟子を促し、彼は一步前に出て胸を張る。

「はじめまして！デヴィット博士、メリッサさん！僕は——」

——これは無個性だった少年が、無個性ながらも前向きに頑張る少女と出逢うまでの、ほんの小噺だ。

## 第九章 リンカン・ウォーズ 連合の逆襲

待ち人來たらず、備えよ憂いなく

かつちゃんにトゥルーフォームがバレてしまった僕とオールマイト。でもかつちゃんは僕らを信じてこれからも秘密を一緒に隠してくれると言ってくれた。

僕はオールマイトの後押しでかつちゃんに全ての秘密を打ち明ける。

かつちゃんはそれも受け止めて力になると言ってくれたが……僕の死因のきっかけが自分の拉致事件だと知ると態度が急変した。

そして僕とかつちゃんは再履修やりなおしの人生で始めて大喧嘩をしたのだった。

かつちゃんと喧嘩をした次の日の朝。かつちゃんはいつもの時間になっても僕の家を訪ねなかった。

なので僕がかつちゃんの家に登校がてら寄ってみる、もしかしたらまだ謝って許してもらえるかもしれない。

「えっ？ かつちゃんもう学校いったんですか？」

「ええ、いつもの時間に家を出ていったよ。てつきりいつも通りデク君と一緒にだと思っただけ……」

かつちゃんのお母さんである光己お婆さんの話によればかつちゃんは既に登校したらしい、しかも僕を迎える時と同じ時間に……

「もしかしてあの子と喧嘩でもしたの？ ごめんなさいね、あの子素直じゃないから」

「いえ、今回は僕が悪いんです。かつちゃんを叱らないであげてください、必ずかつちゃんと仲直りします。迷惑かけてすみません……」

僕は頭を下げながら光己お婆さんへ説明とお願いと謝罪を纏めて行う。

頭を下げたまま少ししてから両肩を叩かれる、ゆっくりと顔を上げるとそこには光己お婆さんの顔がすぐ近くにあった。

光己お婆さんの年は母さんと対して変わらないがその個性の影響で見た目20代にしか見えない、そのため不意打ちの至近距離に思わずドキツとして固まってしまった。

「ずいぶんと思ひ詰めた顔してるね。あの子もデク君もまだまだ子供なんだからそんなに深く考えなくていいんだよ。だから勝己のこと、よろしくね！」

光己お婆さんはそういういいながら少し乱暴に僕の頭を撫でる。この人には敵わないな



…

「はい！それじゃあ僕はこれで。失礼します！」

そうして僕はおばさんに大声で挨拶をしてから学校へと向かった。

かつちゃんかなり怒ってる…？いや、それほどまでに昨日の発言は本気なのかもしれない。

『じゃあなデク——もう俺に関わるな……』

関わるな、か。学校には行っているみたいだし、嫌でも会うことになる……どんな対応をしてくるのか、かつちゃんの真意はそれで分かるだろう。

そんなことを考えているうちに教室に着いた、そこには気だるそうに自分の席に着いているかつちゃんの姿があった。

勇気を出せよ緑谷出久！いざかつちゃんへ！！元気よく挨拶を…！！

「やあ、かつちゃん。おはよう！」

「……………」

僕はオールマイトのように顔を濃くしながらかつちゃんへ挨拶するが、かつちゃんは僕と顔も合わせず無言を貫いた。

シカトされたー！！見事にそっぽ向かれたよ！……まだだ、まだ諦めないぞ！

「かつちゃん、昨日はごめん。あんなこと言ったけど——」

「うぜえ。馴れ馴れしく話しかけてんじゃねえよ、クソ筋肉ナード!!」

し、辛辣う!!おそらくこの再履修の人生で最大に辛口のかつちゃん。まったくもつてとりつく島がない……ここは大人しく引き下がろう。戦略的撤退だ!!

「ご、ごめんよ。じゃあ僕はこれで……」

弱々しくかつちゃんに謝りながら僕は席に着く、そしてひとりで考え始めた。

今のなんだか懐かしい感じは……どこかで……ハッ!このかつちゃんの雰囲気、前世でのかつちゃんそのものじゃないか!

今でこそ丸くなった、というより丸い性格のかつちゃんだったが僕が前世で関わってきた幼馴染は正しくあんな感じだった。話しかければぶちギレ、目の前を通ればイラついた顔をして舌打ちをする。言葉にするとなかなか酷いやつだな。

でも僕はそんなかつちゃんとも十数年幼馴染が出来ていた、というよりは僕が勝手に憧れを抱いて付きままとつていただけだったけど。

どんな対応をするか様子見だったが、いきなり爆破を食らわせてくるようなものじゃなくて良かったな。うん、この程度なら僕はなんの問題もなく耐えられる、まあ前世じゃ日常茶飯事だったし。

それでも早いとこ仲直りはしないと……光己お婆さんとも約束したし、なにより僕

の気分がすつきりしない!

その後かつちゃんはそんな調子で一日を過ごし、昼休みにもどこかに消えてしまった。

そして午後になり、相澤先生から林間合宿の発表が行われた。ちなみに期末試験で赤点をとった芦戸さん、上鳴くん、瀬呂君はそこで補修になる。今回は切島君と砂藤君は赤点を免れたらしい、やっけて良かった緑谷塾!とかいつてたしね。

林間合宿か……かつちゃんとのこともそうだがこちらも対策をしなければならぬ。それに直近のあのことはもう動き始めないと……

そして放課後になり、麗日さんをはじめとしたクラスメイトのみんなは林間合宿のために木<sup>き</sup>榔<sup>やしく</sup>区シヨッピングモールへと買い物にいく計画を立てていた。

「爆豪もいくだろ?」

「……」

切島君がかつちゃんへと誘いをかけるが、かつちゃんは黙ったまま僕の方をチラリと見る。

「いかねえ、準備くらいひとりで出来る。群れてろ、俺は帰る」

かつちゃんはそういうとスタスタと足早に帰ってしまった。

いつになく機嫌の悪いかっちゃんにクラス中がざわめいていた。

「デクさんもいこうよ！ ショッピングモール！」

空気を変えるためか麗日さんはやや大きめの声で僕に誘いの声をかける。

「ごめんね麗日さん、その日はちよつとオールナイト関係で外せない用事があるんだ……」

「そつか……なら仕方ないよね！」

折角の誘いだが今回は断らせてもらう、本当にその日は用事があるのだ。大事な大事な用事が……

「ねえ、デクさん。爆豪君と喧嘩でもしたの……？ なんか二人とも今日はよそよそしいっていうか……」

「ああうん、ちよつとね……でも大丈夫。必ず仲直りするからさ！」

「うん！ デクさん達なら直ぐだよね。変なこと聞いてごめんね！」

「いや、こつちこそ心配かけてごめん。じゃあ僕もそろそろいかなきゃ——」

麗日さんに心配をかけているのは申し訳ないが、これは僕とかっちゃんの問題だ。僕だけでなんとかしなければ。

「——それとみんな！ 買い物に行くなら明日は木榔区ショッピングモールだけは避けておいたほうがいいよ。それじゃあまたね！」

僕はそれだけ言い残すと教室を後にした。そして向かうのは仮眠室……オールマイトのところだ。

「前世の記憶では……明日、木榔区シヨッピングモールに死柄木が現れます」

「死柄木……ヴィラン連合の中心人物だな」

「ええ、前々からお話した通りそこで奴を捕らえて……連合に打撃を与えましょう！  
オールマイト!!」

僕はオールマイトに力強く迫る。あの連合の中心人物を捕らえれば良ければ組織は空中崩壊、でなくてもその背後にいる親玉への手がかりになる。

「こちらから仕掛けられる数少ないチャンスです！やりましたようオールマイト！警察の方には僕から三茶さんを通じてある程度情報を流していますが……決定させるにはオールマイトの力が必要なんです！お願いします！」

僕はオールマイトへと頭を低く下げて請う。もう待つてるだけじゃ駄目だ、ここでやつらは終わらせなきゃ……!!

「わかった……頭を上げたまえ緑谷少年。これまで君の話した前世の出来事はほぼその通りに事が起きていた……今回もそうなるんだろう。」

警察には私からも話を通して緊急作戦を立てようじゃないか！我々の攻める番、とい

うことだな!!」

「ええーやりましょうオールマイト!!」

僕とオールマイト二人して立ち上がり闘志を燃やしては呼応させていく。

こうして死柄木捕縛電撃作戦が計画された。会議は夜遅くまで行われた、急な立案だったが前から話をしていた甲斐があつてか三茶さんと塚内さんが既に頭数の目処を事前につけていてくれたお陰で、どうにか実行することが出来そうだ。

そして作戦当日、木椰子ショッピングモール。僕はひとり、モールの中心の広場近くのベンチに腰掛けている。

ここは前世で死柄木に首と生死を掴まれながら話したベンチだ。奴はきつと同じように現れて僕へと接触する筈だ。

作戦はシンプル、僕が囷を兼ねて第一陣として死柄木を発見次第その腕をへし折る。

それが出来なかった場合は第二陣として上の階のカフェテラスで待機しているトゥルーフォームのオールマイトが直ぐ様変身しながら飛びかかり、死柄木の腕をへし折る。

危険なのは死柄木の個性だ、五本の指で触れたもの全てを崩壊させる狂気のチカラ。だが手首を掴んで腕と肩を僕らのパワーでへし折ってしまえばどうと言うことはない。

そんなことをしなくても僕らの超スピードなら死柄木は抵抗すら出来ずにやられてしまうのだが、ここは休日のショッピングモール。辺りはお客さんでごった返しているから派手な行動は出来ない。

かといってお客さん皆を避難させてしまったら本末転倒、人混みに紛れて来るはずの死柄木すら退去してしまうだろう。

だから僕とオールマイトが動き始めてから周囲に待機している私服警官が一斉に動いて市民を避難させる、そして死柄木を捕らえたら駐車場に待機しているダミートラックから移動メイデン檻と一式を揃えた部隊に引き渡してこの作戦は完了だ。

諸々で数十人単位の人が関わる大きな作戦、失敗は許されない。

だが準備もやる気も十分で充分！来いよ死柄木……今日がお前の自由の終わりだ!!!

——— 待てど暮らせど死柄木は現れなかった。昼を過ぎ、夜になり、閉店時間になっても死柄木は僕の前に姿を現さなかった。

作戦は……失敗に終わった。

もしかしたらオールマイトや警官がいることがバレたのかと思い、徹夜で監視カメラの映像を総出で確認したが死柄木の姿はどこにも映ってはいなかった。つまり、死柄木はシヨツピングモールに一切訪れなかったということだ。

諦めきれなかった僕は次の日、日曜日もひとりでシヨツピングモールに朝から晩まで張り込んでいた。けれども……死柄木は姿を現さなかった。

「くそおつ!!なんで出てこないんだ、死柄木い!!こんな筈じゃなかったのに……!!」

僕は苛立ちを募らせては自らの太股を叩く、脚に走る痛みが少しだけ頭を支配して落ち着けた。

「君だけのせいじゃない、どこかで作戦が漏れたのかもしれないし、私がヒーローとして活動をしていなかったことに警戒した可能性もある……」

「オールマイト……すいませんでした。僕の立てた作戦のせいでオールマイトにまで迷惑を……」

警察まで巻き込んで起こした作戦の失敗、それは僕の……いや僕とオールマイトの信頼の損失を意味する。



死柄木が現れるという他人から見ればなんの根拠もない情報のもと始動した今回の作戦は、ほんの少しばかりの僕の実績とオールマイトが長年積み上げてきた実績を担保にして協力してもらっていた。

いざ蓋を開けてみれば死柄木の逃走を許したとか、甚大な被害が出たとかではなく、そもそも死柄木が現れないというある意味最悪の結果に終わったわけだ。

これで僕の信頼は警察内では地に落ちたといつてもいいだろう、まあ元から大した積み重ねではなかったが。一方オールマイトの信頼はこの程度で消えるものではない、だが確実に僕のせいでその顔に泥を塗ってしまったのだ。

僕は悔しさに肩を震わせながらオールマイトに頭を下げ続ける。

「過ぎてしまったことはしょうがない、失った信頼はまた積み重ねていけばいいさ。だから前向きに考えようじゃないか！」

来るはずだった死柄木は来なかった、これまでも君の前世とは違う結果になったことは多々ある。つまりこれは運命が変わり始めているというなよりの証拠だろう？やはり運命は変えられる！そう、筋肉でな!!」

オールマイトは僕の肩をバシバシ叩きながら強気に話す。

そうか……オールマイトの言うとおりだ。落ち込んでいる場合じゃない！次に進むんだ、今やれるベストを尽くす!!

「ただその変わり始めた運命が良いものか悪いものなのかはまだ分からないが……」

オールマイトは少しだけ俯きながら冷静に状況を読んでいた。

「大丈夫です！運命なんてこの腕で！筋肉で！好きな形にねじ曲げてやりますよ！そう  
でしよう？オールマイト!!」

「ああ……ああそうだな緑谷少年！やろう、私達の腕で！筋肉で!!!」

僕とオールマイトは互いの手をとり、闘志を満たして叫んだ。

——立ち止まってる場合じゃない、次の準備に早速取りかからなきゃな!!

—— D a r k   s i d e   i n   ——

ヴィラン連合のアジトである隠れ家のようなBAR、その奥の一室に男の呻き声が響  
き渡る。

「ううううう……痛い、痛いなあ……あああつ!!」

その声の主はヴィラン連合の中心人物、死柄木弔だ。薄暗い部屋のなか、狂喜の顔を浮かべながら部屋の片隅にうずくまっている。

「大丈夫ですか、死柄木弔？やはりその腕は……」

その様子を見かねて気遣うのはヴィラン連合屈指の苦勞人、黒霧だ。

「大丈夫なわけねえだろ……めっちゃくちや痛えよ。でもな、今俺は最高の気分だぜ」

「そ、そうですか……」

死柄木の状態と相反する言葉のギャップに困惑しながら目を細める黒霧。

その視線の先は死柄木の異形の右腕だ。

その腕は本来の死柄木の細腕とは大きく異なり、無数の腕が重なりあい、鉦石のような結晶が所々に埋め込まれ、死柄木の胴よりも太く、禍々しく狂氣的だった。

「あのとき」のオールマイトが見れば言うだろう……「あのとき」のオール・フォー・ワンの腕の様だと。

「ホントに最高の気分だあ、この痛みが教えてくれんだあ腕が馴染んでるってことをな……」

ははは、もし今日が最悪の気分だったなら……シヨッピングモールにでもいつて気晴らししてたんだろうけどな。それどころじゃあねえわ」

死柄木は乾いた笑い声で軽口を叩く、あるはずだった予定を消し去りその場にいる理

由を明かしながら。

「おい黒霧、連中の用意は進んでるんだろ？な？」

「ええ、予定通りに。今は闇のブローカーからの商品の納入待ち、といったところですね」

「折角集めた駒達だ、決定打にはならないにせよ少しは役立ってもらおうなあ」

死柄木は薄ら笑いを浮かべ、今後の未来を夢に見る。

闇は深さを増し、光へと迫っていく。

「そして俺は……先生にもらったこの腕で……必ず殺す。緑谷出久を!!!」

——死柄木弔の夢の果て、それは誰にも分からない。そう、今はまだ……

—— Dark side out ——

「これはいる……フラッシュライトに……これは要らないかな。あとこれもいるな……」

あの作戦から数日後、僕はオールナイト事務所で林間合宿に必要な物品のリストアッ

プに励んでいた。

林間合宿を中止するようにオールマイトから先生方を説得してもらったが、根拠の不足から宿泊先の変更までしか出来なかった。場所も同行者も教師以外には直前まで明かさないう超極秘合宿になるらしいが……おそらく前世と同じでワイルド・ワイルド・プツシーキヤツツの下に行くのだろう。

運命が大きく変わっているのなら襲撃そのものが無くなるのではとオールマイトは言っていたが、その可能性は低いだろう。だからこそ僕はこうして備えに励んでいるのだが。

「——って感じでないこうと思うんだが……って緑谷少年聞いてたかい？」

「勿論ですよ、オールマイト。僕らが合宿に行っている間はオールマイトがド派手にヒーロー活動を行いまくってヴィラン連合の目を自身に向けるんですね」

「端的に言えばそうなるな！陽動は私に任せておきたまえ!!」

胸をドンツと張ってドヤ顔をするオールマイト、だが今はトウルーフフォームのためやや迫力が足りていない……

オールマイトは良くも悪くも目立つ、居れば勿論心強いのだが……合宿への同行はしないほうが良いという結論に至った。

これまでの運命の変化について振り返ってみたのだけれど、僕らはあまり二人でしっ

かりとした対策を立てないほうが良いのかもしれない。

事前から二人で計画したUSJの時や死柄木捕縛作戦の時は、運命が悪い方へと大きく変わった。

一方、僕が個人である程度の準備をして後はアドリブと力押しで乗り切った、体育祭や保須事件の時はわりとよい方向へ運命が変わっていた。

今回もそれにかけてみる、故に僕は着々と必要な物を購入するために事務所にいるのだ。個人では買えないものも事業者向けなら買えるしね。

「大丈夫です、オールマイト。何かあれば僕がなんとかしてみます！この全力を持って…!!」

「頼もしくなったな、緑谷少年」

拳を構える僕へとオールマイトは感心した声と視線を投げかける。

——来るなら来いよヴィラン連合……今度は敗けない！僕がこの手で叩き潰してやるっ!!

「——ハッ！しまった、大事なことを聞き忘れてました!!」

「どうした緑谷少年!!?なにを忘れていた!!?」

「あの、オールマイト——」

僕とオールマイトに緊張が走る。僕はなぜこんな当たり前のことを忘れていたんだ、準備に一番必要なことじゃないか……

僕は今までより顔を引き締めてオールマイトへ尋ねた。

「——これ……経費で落とせますか…!?!」

## 林間合宿は青春の1ページ

死柄木捕縛電撃作戦、前世の記憶を元にフラッとシヨツピングモールに現れるであろう死柄木を取っ捕まえてやろうという警察と連携した作戦だったが、その作戦は死柄木が現れないという形で失敗に終わった。

そして決定してしまった林間合宿、僕は準備を万端にして望む。ヴィラン連合が襲撃してこようと僕がこの手で叩き潰してやるさ!!

林間合宿当日、僕たち雄英高校ヒーロー科一年一同はクラス毎にバスへと乗り込み、合宿所を目指す。

バスの最後部の五人掛け座席の窓際にはかつちゃんの不機嫌オーラを全開で座っており、誰にでも噛みつきそうな爆弾の隣には誰も座ろうとしない。

そんな中、僕は臆することなくかつちゃんの隣に座る、そして僕の隣には麗日さんと飯田君が座った。一見すればいつもの仲良し四人組が並んで座ってるようにしか見えないだろう。何度も言うがかつちゃんが滅茶苦茶不満げなオーラを放ってること以外



は……

麗日さんや飯田君と軽く雑談をしながらバスに揺られる、かつちゃんはチラチラこちらを見てくるが話には入ってこない。そうして幾ばくかの時間が流れた。

「——そうだ、僕飴持ってきたんだよ。はい、かつちゃん、ハツカ好きだったよね?」

「おう、サンキュ——」って話しかけてんじやねえよクソが!!いらねえよボケ!!」

しれつとかつちゃんに飴を渡すとかつちゃんはさらつと受け取りそうになるが、思い出したかのようにぶちギレ始めた。

そして最終的にそっぽを向いてふて寝をしてしまった。

やっぱりかつちゃんはわざと僕に対してキレる振りをしてるみたいだな……

「ねえ、デクさん大丈夫? 爆豪君、デクさんにだけやたらと怒ってるけど……席変わろうか?」

麗日さんは顔を少し近づけて僕に耳打ちしてひそひそと話し掛けてきた。

耳に息がかかかってこそばゆい! ってそうじゃない、麗日さんに心配をかけちゃってるな……とりあえず安心させるためにもこの状況を伝えておこう。

「大丈夫だよ麗日さん……かつちゃんは本気で怒ってるじゃなくてキレた振りをしてるみたいなんだ。反抗期みたいものだろうし、僕がなんとかするよ……だから心配しないで」

「そそ、そうなんや……わかった。わかったから……!」

僕は麗日さんの耳元まで口を寄せて囁いて返事をする。すると麗日さんは縮こまり顔を真っ赤にして俯いてしまった。

こそばゆかっただろうか?でも僕もやられたし、おあいこだろうか?

その後バスが停車するまでかちちゃんはふて寝、麗日さんは俯きながら黙ったままだった。結局気まずい雰囲気になっちゃったよ……!!

バスが停まったのは何もない崖だった。そこには僕らを待ち構える三人の人影

……

「煌めく眼でロックオン!!」

「どこからともなくやってくる……」

「キュートにキャットにステインガー!!」

「「ワイルド・ワイルド・プッシューキャッツ!!」」(三人ver.)

ポージングと共に現れたのはマンダレイ、虎さん、ピクシーボブの三人だった。

「虎さん!お久しぶりです!皆さんもご無沙汰してます」

「久しいなオールライト、息災だったか?」

僕はひとりクラスから離れて虎さんと挨拶を交わす。短い間だったが相棒としてワ

イルド・ワイルド・プツシーキャッツに入ってたので多少の恩があるからね。

その間にも相澤先生はクラスメイトを集めてマンダレイとピクシーボブの紹介をしていた。

「お陰さまで。あれ、ラグドールと洗汰君は？」

「二人なら合宿所で留守番だ、元々私も待機の予定だったのだがお前が来ると聞いて会いに来たのだ」

「そうだったんですね、ありがとうございます！僕も会えて嬉しいですよ」

僕と虎さんは握手をしながら再会を喜んでいた。

会うのは七ヶ月振りくらいだろうか？あのときは虎さんの紹介でワイルド・ワイルド・プツシーキャッツの皆と訓練したり救助活動をしたりしてたんだよなあ……思い返してもとても有意義な時間だった。

「悪いね諸君、合宿はもう、始まっている」

「うおおおおっ!!?!」

叫び声に反応して後ろを振り向けば、クラスの皆がピクシーボブの操作する土砂流に呑み込まれて崖下へと落ちていく様子が見えた。のだが……

「……あつぶねえ!!?!」 BBBBBOOO——

かっちゃんは只ひとり土砂流に反応しており空中に爆破で浮かんでいた。あれを避けるとかマジかかっちゃん…!?

「いや、お前も行くんだよ」

「くそがああああああ——」

相澤先生が睨みを効かすとかっちゃんの個性が消えてそのまま断末魔をあげて落下していった。

「僕は行かなくて良かったんですか、相澤先生?」

「お前が行つても訓練に成らんだろう、お前は今回の合宿では教師側だ。合宿まで壊されちゃ堪らんからな」

「ええ?そんなことないと思いますけど……」

相澤先生のあきれたような視線にビミョーに納得いかないが、とりあえず深くは反抗しない。体育祭でのことをまだ根に持つてゐるみたいだ。

「さてキティたちは魔獣の森を抜けられるか楽しみだねえ」

「ああ、あの土塊との戦闘訓練ですか。楽しいですよねえあれ、ぶっ壊し放題で」

「緑谷、そういうとこだぞ。ほんと」

素直な感想を述べたらまたも相澤先生に呆れられた。僕の力で壊しても壊しても再生するからストレス解消には持つてこいだと思うんだけどなあ。

話もそこそこに僕と相澤先生、マンダレイと虎さんはバスへと乗り込み合宿所を目指す、そのなかで今回の合宿の流れを話し合っていく。因みにピクシーボブは皆の訓練に合わせて進んでくるそうだ。

「——というわけで、二日目と三日目は個性を伸ばす特訓でいきたいと思います。四日目……」

「あの、ちよつと良いですか？」

「なんだ緑谷？まだ途中なんだが……」

僕は相澤先生の話を遮って話を仕掛ける。折角教師陣に混じってこの合宿を過ごせるんだ、ならそのことを最大限に活用していこうじゃないか。

「今回の合宿中にヴィランの襲撃があったらどうします？」

「はあ…それを避けるための今回の合宿構成だぞ？ 出発前の説明聞いてなかったのか？」

「もちろん聞いてましたよ。それでも万が一、ということがあるじゃないですか！ だからお願いがあるんです、虎さん」

「我か!？」

僕の言葉に虎さんは驚くも僕は話を続けていく。

「万が一、今回の合宿中にヴィランが襲撃してくるようなことがあったら……生徒達に個性の使用許可を出してもらいたいんです……！マンダレイを通じて、全員に伝わるように！！」

「お前はなに言ってるんだ！ヴィランが来るかもなんて前提で動くやつがあるか。それにもし仮にもそんなことがあったとしてもそれは俺の管轄の仕事だ……！虎さんが考えることでも、ましてやお前が考えることでもない！」

「それでも僕はこの現状でそれを考えずにはいられません。勿論相澤先生が許可を出すのがベストなのでしょう。でも！相澤先生がマンダレイの近くにいない状況なら？事態をすぐに把握出来ない立ち位置だったなら？それじゃあ間に合わないことだってあるかもしれない、皆を無防備に無責任に放って置くことなんて出来ないじゃないですか……！！

本当なら僕が皆に許可を出して全部、全部受け止めたい……！でもまだ今の僕にはその力も権限もない……だから虎さん、お願いします！僕を……僕らを助けてもらえないでしょうか！お願いします！お願いします！！

僕は虎さんに向かって一心不乱に頭を下げ続ける。何も無い僕にはそれしか出来ない、でもそれでも少しでも何かしたい。

「緑谷……いい加減に——」

「よい、イレイザー。お前は我が拳を合わせて、短い間だが共に闘い、そして力を育んだ仲間だ。そして我が認めた漢だ！ そんな漢が真剣な目で必死に頭を下げてまでした願いだ！ 顔を上げろオールライト、我に任せておけ……その時は漢として我が全ての責任を持つ、そして共に再び闘おう！」

「……虎さん！ ありがとうございます！ ありがとうございます……!!」

僕は虎さんに再び頭を下げ続ける、今度は感謝を伝えるために。

「つたく!! 虎さんが認めるならそれは虎さんの問題ですね……でも俺がそんな事態に気が付いたならすぐに俺の管轄の権限にしますよ。緑谷もそれでいいな？」

「はいっ！ お願いします相澤先生！」

「ハハハ、というわけだマンダレイよ。その時はよろしく頼む、勝手を言ってますまぬ」

「……ええ、その時は……」

僕はこうして虎さんと相澤先生に襲撃に備えてもらえるようになった、これで僕の手が届かない範囲も少しは安心できる。

その後マンダレイの顔が暗いままだったのが少し気になったが、僕らは合宿の計画を練りながら宿泊施設までバスに揺られていた。

「おかえりーみんな！ それとあちき達の施設へようこそオールライト！」

「……」

施設に到着した僕らを迎えてくれたのはいつも通り元気なラグドールとこちらもいつも通り斜に構えた冼汰君だ。

「お久しぶりですラグドール。それと久しぶり、冼汰君」

「……」

僕はラグドールに挨拶をしつつしゃがみこんで冼汰君と目線を合わせる。

冼汰君は僕と目を合わせると目力を強めて——股間を蹴りあげてきた。僕はそれを軽く掌で受け止める。相変わらず容赦ないなこの子……

「そこはあんまり鍛えられないからダメだ……でも大胸筋なら大丈夫だ！」

「……うまいこと言ったつもりかマツチヨメン」

僕は腰に手を当てて胸を張りながら話しかけるも冼汰君は更に不機嫌になって踵を反して去っていつてしまった。

「こら冼汰！……ごめんねオールライト、あの子は……」

「大丈夫ですよマンダレイ、冼汰君の心境を考えれば僕らは認めがたい存在ですし。それにきつかけさえあれば彼も変われると思いますよ」

「そうね……きつかけか……」

僕とマンダレイは施設へひとりで向かう冼汰君の背を見つめながら彼の今後を憂う。



—— 洗汰君、君だけは絶対に僕が救けてみせる……!

夕方になつてクラスの皆が宿泊施設に到着するまでの間、僕は周囲の散策とマツピング、そして電波式火災報知器を設置して回つた。

前世での襲撃では森林火災とガスの個性を持つヴィランがいたことが被害を拡大した原因らしい。らしいつてのは僕も前世では襲撃への対処で大怪我をして入院してたし、クラスメイトから話を聞いたこととニュースの内容くらいしか情報がないのだ。

だからこうして煙を感じする火災報知器を森中に仕掛けておけば何処から敵が動くのかいち早く察知できると思う。因みにこれは経費で買った、何せ数が数だから僕のお小遣いではまったく足りないのだ……オールナイト、出世払いでお願いします!

皆が戻つて来るなり直ぐに食事の時間になった、僕も仕込みは終わつたので合流だ。  
クラスの皆と食事をとり、そして入浴の時間になつたのだが——

土くれの魔獣に襲われながらの過酷な進軍、それを抜けてオイラを待つていったのは暖かな宿泊施設だった。こんなきついなら合宿なんてくそ食らえと思いつながら晩飯をかきこんでいたけど……本当のご褒美はそのあとにやってきた。

「——求められているのはこの壁の向こうなんすよ……」

温泉にはしゃぐクラスのやつらを尻目にオイラは高い木製の壁を見上げる。そしてその壁の向こうからは女子達の声が聴こえてくる、間違いねえ。

そう！オイラが求める理想郷ユートピアはこの壁の向こう！女子達がいるヌードピアだ！！

「今日日男女の入浴時間をずらさないなんて、これはそう……事故。事故なんすよ……」

「峰田くんやめたまえ！君のしようとしていることは己も女性も貶める恥ずべき行為だ！！」

「やかましいんすよ……」

オイラを止める飯田の声が聞こえるが、すべてを超越して高鳴ったオイラはもう止められない。

はあああああ！オイラのリトルミネタはもうスーパービッグミネタトランスフォームに変態しよう

準備を始めている！ならばあとはオイラに残された仕事はこの壁を……登りきるだけだ！いくぜ！！

「なにを騒いでいるのかな……峰田くん？」

「やっぱり止めにきたか……緑谷出久……！」

「なぜフルネーム!？」

オイラを次に止めにきたのはクラスの……いや雄英のラスボス緑谷出久だ。

だがいくら緑谷といえど今のオイラは止められない!これが乗り越えるべき最大の壁だと言うのなら……オイラは超える!プルスウルトラさ!!そしてオイラはヌードピアへ……!

「いくぜええええ!!」

「っ……いかせないよ!——」

オイラが一步を踏み出した瞬間、緑谷はそれよりも速く動き両腕を広げて立ち塞がる。

ここまででは予想通りだったが、予想外の出来事が起きた。緑谷の腰に巻いてあったタオルが激しく動いたせいでスルリと落ちたのだ。

「な……いや、そんな……馬鹿な……?!」

そこに見えた光景にオイラはしどろもどろになり言葉がうまく紡げなくなった。

それは#自主規制#と呼ぶにはあまりにも大きすぎた。大きく 分厚く 重く

大雑把過ぎた。それはまさしく鉄塊だった。

なんだよそれ！ホントにオイラのミネタと同じ#自主規制#なのか?!…!個性か?!  
 そういう個性なんだな!!体の一部を巨大化させる個性つては割りというしな、Mt.レ  
 デイだつて巨大化の個性だし…!ハハハ……

緊急発進寸前だったオイラのリトルミネタは緊急停止して<sup>エマーゼンシー</sup>どんどんと萎縮していく。  
 現実逃避をしても事実は変わらない、圧倒的な戦力差は多少の変身程度では埋まらな  
 い。

「……デクさん……」

オイラの後ろから悲しげな、男としての大切ななにかを打ち砕かれた、そんな眩きが  
 聴こえてくる。

「えっ?なに?どうしたの、みんな?」

「いや……なんでもないですデクさん。俺、先に上がります」

「えっ、なんで敬語!?!」

「俺も……じゃあ失礼しました……」

ひとり、またひとりと、風呂場から人が消えていく。虚ろで悲しげな表情を浮かべな  
 がら………そして最後にオイラも温泉を後にする。

——完全敗北。

1—A男子14名のうち、緑谷のデクさんによって意識朦朧の重

体4名、心の重・軽傷者8名。無傷だったのは当人と幼馴染みの爆豪の2名のみ。その緑谷を残し…他の生徒は跡形もなく姿を消した。

オイラの楽しみにしていた入浴時間は、最悪の結果で幕を閉じた。

—— 峰田 side out ——

峰田君を殴ってでも止めるつもりでお風呂にいったんだけど、何故か直ぐに引き下がってくれた。しかもクラスの間みなも沈んだ顔をしながら……もしかして皆覗きに……？……そんなわけないか。

入浴時間も終わり、あとは就寝を残すのみとなった初日。だがここに集まるは青春を謳歌する高校一年生、少ない空き時間も楽しむため各々集まり好きなことをギリギリまでしている。

そんな中僕はひとり宿泊施設を出ていく、「話がある。施設の裏手で待ってる、来てくれ」という簡潔なメッセージをかつちゃんに送って。

おそらくかつちゃんは来る。僕の呼び出しの理由を問うためか、はたまた僕に文句

を言うためか、どちらにせよ来るだろう。

「よお……」

「やあ、かつちゃん。わざわざ呼び出して悪いね」

やっぱりかつちゃんは来た、苛つきとも落ち込みとも見える微妙な顔をしながら。

「……俺に関わんなって言わなかつたか？」

「言つてたね。でもそれに対する僕の答えは、ノーだ。君に突き放されようと僕は君

に関わるし、必ず救ける……」

「……んだよそれ。気持ち悪い……勝手にしろよ、じゃあ。俺は俺のやり方でいく」

かつちゃんは顔をしかめながら吐き捨てるように呟く。

そして踵を反して立ち去ろうとしたが、僕が肩を掴んで無理やり振り向かせる。

「勝手にするといいいさ、でも僕も勝手にやる。だからここに君を呼んだんだ、これを渡

すためにね」

「は？……なんだよこれ？」

「これは超小型のGPS発信器だ。小指の先ほどの大きさだし電池駆動式だけど1週間

は持つだろうね」

「……なんでこんなもんを渡すんだ？俺が本当にやられると、そう思つてんのか……？」

かつちゃんは鋭い目付きで僕を睨みながら呟く。

「君が簡単にやられるとも思つてないし、奴等に良いようにさせるつもりなんて微塵もないよ。でも、それでも僕は最悪を考えずにはいられない、分かるだろう？ だから僕は君にこいつを絶対に渡すんだ。後悔したくないんだよ……！」

僕はかっちゃんに必死に思いの丈を伝える、思わず肩をつかむ力が強くなつていることにも気がつかないくらいに。

「痛えよ……放せ」

「ごめん……でも……」

「わかつたよ、こいつは受け取つていてやる。でも受けとるだけだ、これを身に付けるかどうかは俺が決める！それでいいな！」

かっちゃんは僕の手から発信器をひったくるとそのまま歩きだした。

「ああ、僕はかっちゃんを信じるよ。それと三日目の夜だ……全ての分け目はそこにある」

僕の最後の警告に一瞥だけして舌打ち混じりにかっちゃんはこの場を後にする。

今のかっちゃんが僕の言うことを素直に聞いてくれるとは思わないが、なにもしないなんてことは出来なかった。襲撃なんてないに越したことはないが、ある前提で動く方が良いだろうな。

「よし、やるぞ！——っ！誰だ!？」

気合いを入れた瞬間、誰もいない筈の雑木林から音がした。もしやヴィラン連合?!も  
う偵察に来ていたのか!?

なら牽制して、取っ捕まえてやろうじゃないか!唸れ筋肉!ワン・フォー・オール、フ  
ルカウル——

「甘かったなヴィラン連合!くらえデトロイトオオオ!——」

「ちよちよつ!ちよつと待って!私だよ!!」

僕が牽制のスマツシュを放とうとした時、雑木林に隠れていた人物が飛びだしてき  
た。

「麗日さん!?なんでここに:~?」

「ごめん、二人とも居なかったし:~様子が気になっちゃって……」

「話を聞いてたのか:~:~:~うーん……」

「ホントにごめん、聞いてた:~内容は理解できなかったけど、よく分からなくても、二人  
が喧嘩してるんだなつてのは分かったんだ」

「そっか……」

麗日さんは僕らの会話を盗み聞きしていたようだが内容までは分からなかったらし  
い。

原因まで聞かれてなくて良かった。でもまた麗日さんに心配をかけてしまった



なあ……出来れば僕とかっちゃんの中で終わらせたかったけど。

「それでデクさん！私、二人の仲直りを手伝いたい！爆豪君はいつつもツンケンしてるけど、デクさんがいれば楽しそうだった。私はそんな二人と過ごすのが、その、す、す……好きだから……だから！すこしでも早く仲直りしてもらいたって思ったの。」

迷惑かもって思ったけどでも……なんだろう、考えるより先に身体が動いちゃったんだよ。デクさん、お願い！私にもなにかさせて!!」

麗日さんは真剣な表情で僕の目を見つめながら、助けになろうと乞う。

そうか、これは僕とかっちゃんだけの問題じゃなかったんだ。逆の立場になってみれば……かっちゃんと麗日さんが喧嘩をしてたら僕は本気で間に入って仲直りさせようとするだろう。

麗日さんも同じだ、友達同士がいつまでも喧嘩してるから……

「麗日さん……ありがとう。こんな僕なんかがこんなに人に恵まれていいのかなって思うけど、かっちゃんも麗日さんも大切な友達だ。だから僕の方からお願いますよ、僕らの仲直りを手伝ってくれないかな?」

「もちろん！私にやれることならなんでも任せてよ!」

麗日さんは僕へ明るい笑顔を向けてそう言ってくれた。やっぱり麗日さんは天使だな！

「じゃあそろそろ施設に戻ろうか、なんだかんだで結構長いこと経ってるし」

「そうだね、皆にバレる前に戻らなきゃね！」

僕らはそう言いながら施設に戻るために歩き始める。

「しっかし、麗日さんにはいつも助けてもらってばかりだなあ」

「デクさんってよくそれ言うけど、私が助けてもらってばかりだと思っただけど！私、いつもデクさんを助けたいって思ってたんだから!!」

「こつちの話って感じかな。僕が助けられてるって思ってるんだ、それでいいんじゃない？」

「えー、なんか納得いかないような……うーん」

麗日さんは僕の発言の意味が分かりきらないようで唸っている。

本当に麗日さんには前世から助けられてばかりだから、この人生では出来る限り救って、助けていきたいと思ってるんだ。まあ麗日さんからしてみればなんのことうて感じなんだろうけど。

そのうち麗日さんには僕の秘密を打ち明けなきゃな……でもそれは僕があの日を越えてからにしよう。これ以上心配はかけられないし、何よりこの心優しい娘を巻き込みたくない。

僕が自分に心の中で誓ったとき、背筋が凍るような悪寒と鋭い視線を感じた。なんだこれは!!?

「これはこれは緑谷、こんな遅くに施設外で逢い引きとは……随分といいご身分じゃないか」

「あ、相澤先生……!」

「ち、違いま——」

「——黙れ」

僕と麗日さんが言い訳をしようとするが相澤先生に目で殺される。

「俺はな生徒同士の交遊についてどうこう云うつもりはない、合理的ではないとはいえお前らも青春真っ只中の高校生だからな。だがそれがルールを守らない理由にはならん!! よつてお前ら二人とも補修組に混ざつて反省文だ……書き終えるまで寝かせねえからな……!!」

相澤先生は目をギラギラと光らせ、謎の負のオーラを身に纏いながら僕らを引きずつていく。

「……、誤解なんです——!!」

—  
夜の森林に無慈悲に運ばれる僕の悲しき叫び声が木霊した。

## マツチヨと愉快な仲間達

ついに始まってしまった林間合宿。今回の僕は教師陣として参加になり、僕はヴィラン連合の襲撃に備えて出来る限りのことをしていった。

喧嘩をしていたかっちゃんとも何とか会話をして、発信器を渡すことが出来た。ただそのやり取りを麗日さんが見ており、僕らの仲直りを手伝ってくれることになった。さあ合宿はこれからが本番だ！

「おい、聞いたか……緑谷と麗日の……」

「ああ……深夜に逢い引きしてたらしいな……」

クラスメイトが僕の方をチラチラと見ながら何やらこそそこそと話している。僕と麗日さんが相澤先生にしよつびかれた話は既に噂になつていようだ。まだ消灯時間前だつたと思うんだけど……噂には尾ひれがつくもんだなあ。

「——や……おい、緑谷！聞いてんのか？」

「あ、はい！なんでしようか相澤先生！」

「あ、はい。じゃねーだろ、だからお前の担当はお前が期末テスト前に集めてた……緑谷塾だったか？あのメンバーで、午後の訓練ではお前の担当だって話だよ」

少しブーツとしていたところを相澤先生に叱られる。僕は教師陣なんだからしっかりしないとな。てか緑谷塾って先生達の間でも広まってる名称なのか……

「というわけで午前中は個性を伸ばす訓練、そして午後は各自さらに細かく別れて訓練となる。じゃあ早速開始！」

相澤先生の号令でみんなが散らばり、各々の個性を伸ばすための訓練が始まる。

僕はその中を見て周りアドバイスを出していくつて形になる。ちなみにこの担当は増強型の人たちだ。虎さんに混ざりつつ生徒達の攻撃を捌くこともあった。

そんな感じで滞りなく午前中の訓練は終了した。生徒達が疲労困憊してる中、僕は元気に昼食の用意をしていた。

僕はほとんど見てるだけだし、あんまり疲れなかったな。さあ本番は午後だな……！ここで皆に如何にしてヴィラン連合への対策を授けるかだ！

「さあ、どこから来るかな？」

時は正午過ぎ……僕はひとり、雑木林の中に立っていた。いずれ襲い来る敵対者を迎えながら。

「……来た……」

僕は呟きながら拳を構える。右にひとり、後ろにひとり、正面から二人か……：なかなかうまく包圍してきたな。

「気配の消し方が甘い！スマツシユツ!!」

僕は正面の雑木林に拳圧の砲弾を飛ばす。その圧は暴風を生み出し、木々の枝をへし折りながら僕の正面一帯に吹き荒れる。

「ぐあああつ!!」「ばれてるぞ!!」

正面の雑木林に隠れていた切島君と鉄哲君が風に煽られながら吹き飛んでいく。それと同時に右と後ろにいた人物も飛び出して来て僕へと襲い来る。

だが既に後ろからの気配を察知していた僕は振り向きながら身体を沈めるように踏み込み、後ろから飛びかかる砂藤君の足を掴んで右から来た者へと投げつけた。

「二重の——うわあつ!!」

「ぐおおおつ!!」

投げられた砂藤君の巨体は拳を引いていた庄田君の腹に直撃し、二人まとめて雑木林





木を飯田君が避けることは叶わなかった。

「最後は司令塔だつ!!」

僕は叫びながら手にしていた大木を真後ろの雑木林へと投げる。

「ぐはあつ?!……バレていたとは……」

そこに隠れていたのは最後のひとり障子君で、大木の直撃をくらいその場に倒れた。やばっ!やりすぎちゃったか……?

「はい!じゃあ終了——痛っ!」

訓練の終了を告げようと手を叩きながら歩き出すと、首筋に衝撃を感じて言葉が止まる。

「あー、気配が完全に消えててわからなかったよ。尾白君……」

「それは誉めてるのか貶してるのか——「てい!」——かぺっ!」

僕の脛椎を狙った攻撃は尾白君の手刀だったが、僕の鍛え抜かれた僧帽筋には通用しない。お返しに首筋にチョップを落とすと尾白君は立ちながら気絶してしまった。

「はい、じゃあ改めて終——了!集合してー」

僕が再び合図を出すと、やられたみんながフラフラと集まってくる。

良かった、行動不能になる怪我を負った人はいなかったようだな!手加減が上手くなったなあ、僕。

なぜこのような状況になっているのか……それは僕が緑谷塾の皆に訓練を付けているからだ。

やることは実にシンプル。ヴィラン役の僕がこの森のどこかに現れる、そして皆は連携を取りながら僕を叩く。という索敵と戦闘を兼ねた集団戦の訓練だ。

僕が皆に教えたかったのはとにかくヴィランは数で圧倒して袋叩きにするのが一番手っ取り早いということと、それに必要な連携の取り方を学んで欲しかったんだ。

この訓練がうまく機能すればヴィラン連合が襲撃してきた際にも、連携を取ってヴィランの各個撃破が容易になるだろう。勿論、僕が撃ち漏らした場合に限るが。

僕は今の訓練の総評を終え、再び皆を散らせ訓練を繰り返す。その後三回ほど索敵と戦闘を繰り返して、その日の訓練終了時間となった。

前世と同じく食事は全て自分達の手で作る、僕は体力に余力があったので積極的に動き回る。ここでもかっちちゃんの意外な家庭的スキルがクラスのみんなに露呈し、才能マンとして大活躍をしていた。

夕食のカレーが完成し、僕は皆より早めに食事を終えて席を立つ。そして一皿のカ

レーを持って食事場を後にした。 向かうのは――

「やあ、洗汰君。 お腹すいたでしょ？カレー食べない？」

――崖の上の秘密基地にひとりいる洗汰君のところだ。

「……いらねえよ、俺のひみつきちから出ていけ!!」

「ハハハ！相変わらず手厳しいね……まあまあそう言わず、ね？」

「何笑ってんだ!!お前と……いやヒーローになろうなんて奴とつるむつもりはねえー!」

洗汰君は僕の方を睨みながら叫ぶ。 以前プツシーキャッツの下へ来たときも仲良くなろうと頑張ってみたが、このとおり邪険にされてしまう。

洗汰君がこう成ってしまった原因。 それは前世と何一つ変わらない。 両親である  
“ヒーロー” ウォーターホースの死だ。

前世でのことを覚えていた2年前の僕は……オールマイトにまだ出会う前の僕は、少しばかり力があるだけの中学生だった。 それでもなにかできないかとウォーターホースを探し続けたが、運命の流れに吞まれていた僕は彼らと出会うことはなかった。 そしてニュースに流れるウォーターホース殉職の報道を聞き、ただ無力さと後悔に苛まれながら拳を握ることしか出来なかったのだ。

だから僕は決めた。この合宿で冼汰君だけは必ず救ける、僕の手の届くところにいるのだから。僕の手の届くところでは全てを救けると決めたのだから———手の届く者は必ず救ける。

とはいっても肝心の冼汰君には嫌われっぱなしだ。せめて笑顔だけは絶やさないように心がけているが、効果のほどは微妙だ。

「おーい、緑谷ー？」

思考に耽つていると僕を探す声が聞こえる。この声は……

「さ、砂藤君!?! どうしてここに……？」

「いや、緑谷がさっさと飯食つてどっかいくのが見えたからな。どーしたのかなーっと思つて追つてみたんだわ」

「ああ、そうなんだ……ごめんね心配かけて。彼にカレーを持ってこうと思つてね」  
僕は冼汰君を手で指しながら砂藤君へ説明をしていく。

「なるほどなあ。でもよ、それ中辛だろ? その子にはまだ辛えんじやねえかな?」

「はっ! そう言われてみれば……ごめん冼汰君! すぐ甘口のカレーを———」

「いらねえつて言つてるだろ! ソロソロ増えて俺のひみつきちに入つて来やがつて! 出てけよ!」

僕らのやり取りを聞いていた冼汰君は怒鳴り散らして僕らを敵視する。

「お！ここは秘密基地なのか！良い場所じゃんか、俺らも仲間に入れてくれよ。なあ！」

「ダメだ！ヒーローになりたいなんて奴らはこのひみつちには入れてやんねー！」

「そう言わずにさ。ほら、仲間に入れてくれるならこのお菓子を分けてやるぞー！」

「えっ！お菓子!!？」

砂藤君も僕のように邪険に扱っていた冼汰君だが、砂藤君がポケットから取り出したお菓子を見た瞬間目の色が変わった。さっきまで敵視したのが嘘のように年相応、5歳児の顔に早変わりしたのだ。

「っ！……いい、いらん！俺はヒーローなんかとはつるまねえ！」

「つるむって…なかなかませてんな。まあそんな難しく考えるなよ、俺はただお前

と一緒にこのお菓子を食べたって思ってるだけだ」

「嘘だ！お前らはヒーローに成りたくてここにきてんだろ！だから僕にヒーローはすごいって…パパとママは偉いって…僕を置いていっちゃったのに……そう言いに来たん  
だろ！マンダレイ達みたいに!!」

論すような砂藤君の言葉に冼汰君はまたも怒鳴ってしまう。まるで僕らが……いやヒーローが、大人が、皆敵に見えてしまってるみたいだ。

「お前がヒーローをどういう風に捉えてる……えーと、思ってるかってのは俺にはわからねえけどさ。俺はお腹を空かしてる子供がいたら一緒にになってお菓子食べる、そんなもって一緒に笑顔になる。そんな人間に成りたくて頑張ってるだけさ。今のお前みたいなきとな。だからさ、難しいこと考えず一緒にこれ食べようぜ！」

「……」

砂藤君はしやがみこんで少し微笑みながら冼汰君へとお菓子を差し出す、そして冼汰君はそれを無言でジーツと見つめていた。

「……べるだけ……」

「ん？」

「……うう……お菓子を食べるだけだ！それだけならここにいてもいいっていいってんだよ！」

冼汰君が顔背けながら言った言葉に、僕と砂藤君は思わず顔を見合せ……そして笑顔になった。

ヒーローそのものを認めてくれてはいないけど、今までより冼汰君が心を開いてくれた。砂藤君はすごいな、やつぱり持つべきは友。僕も冼汰君と友達に――

「でもマッチョ、てめーはダメだ」

「あれえ!!」

「お菓子マンは友達だけど、マッチョは違うからな」

「まあ居るだけなら緑谷もいいだろ？ほらこいつはマッチョだけど悪さはしねーからよ！」

「……お菓子マンが言うなら……居るだけな！」

—— たぶん友達に成れたと思う。うん、前よりは関係も良くなってるし、良しとしよう！

こうして僕らの合宿二日目が終わりを告げようとしていた。僕らの中では……

— D a r k   s i d e   i n —

夜も更け始めた頃、出久達のいる合宿施設を見下ろすように崖の上に立ち、禍々しき心配を漂わす四人の人影があった。

「早く始めようぜ、もうワクワクが止まらねえんだよ」

「黙ってる、今回は偵察だつて出る前からわかってたろ」

「わかってるぜ、でもよお…もう今から面白そうな祭りが楽しみで楽しみでしょうがねえんだよ」

至極愉しげな大男 “血狂いマスクキュラー” に窘めるように悪態をつくのは顔面継ぎ接ぎの優男 “茶毘” だ。

「茶毘の言うとおり、今日の目的は偵察です。どうかあなたは呼んでなかったのに来てたんでしよう…：今回必要なのは森を焼く茶毘と——」

「毒のガスで奴らを煙に巻く役の僕でしょ？」

その隣にはヴィラン連合の苦労人 “黒霧” と、マスクキュラーに向けて自らを指差すジェスチャーをするガスマスクを被った小柄な少年 “マスタード” だ。

「この作戦には慎重さと迅速さが求められているのです…：なぜなら相手にはあの緑谷出久…：オールマイトの弟子がいる」

「だーから、そいつをぶっ殺すのが俺の役目だろ？ なら俺がいいじゃないやんあ!？」  
黒霧は自信満々なマスクキュラーを尻目に双眼鏡で合宿施設を観察しながら考えていた。

マスクキュラーひとりなら呆気なく緑谷出久に敗北してしまっただろう。あの人物はそういう類いの怪物なのだから…：だからこそその策が、奥の手が必要なのだ。マスクキュラーが緑谷出久を相手に時間稼ぎが出来るようになるための…：



「駄目ですよ、貴方アレ持つてきてないじゃないですか」

「あー、死柄木から貰ったあの玩具な。そんなに大事かねアレ」

「当たり前じゃないですか、アレは緑谷出久に対抗するための切り札なので」

黒霧は呆れたようにマスキュラーへと語る。筋肉を操る彼の頭の中は筋肉でできているのだろう、そうに違いはないと思いつながら。

「へいへい、じゃあ俺にも双眼鏡貸せよ偵察してやるよ」

「あつー……まったく……」

マスキュラーは黒霧の手から双眼鏡を奪い取ると鼻唄まじりに偵察ごっこを始める。黒霧はいつでも被害者体質、相手が勝手気ままなら誰に対してもそうなる運命なのかも知れない。

「——ん？建物から誰か出てきた。あれ……緑谷出久じゃね？」

「なんですって!?!ちよつと、返して下さい!」

「アイツが……楽しめそうだぜえ。はああ……痛め付けて、蹴つて、ぶっ殺してやりてえなあ。今すぐにも!!」

出久を見かけたマスキュラーは黒霧の焦燥を余所に、殺意を全身から迸らせながら狂喜の笑みを浮かべていた。

「あ?アイツ、なんかこっち見てね?」

「な!?!いい加減返しなさい!——っ!!」

マスキュラーの言葉に本気で焦った黒霧はマスキュラーの手から双眼鏡を奪い返すと直ぐ様覗きこんだ。そしてレンズ越しに出久と目が合った。

そして出久は鋭い目付きになった後、黒霧達のいる崖の方向へと駆け出して来たのだ。

「こちらに向かつて来たあ!!?」

「はあ?何キロ離れてると思つてやがるいくらなんでも気付かれるわけが……」

「いいから撤回しますよ!早く!急いで!!ほらこのゲートに!!」

「流石に慎重過ぎるんじや——うわっ?押さないでよ!」

黒霧はアジトへと繋がるゲートを作り出すと即座に真横にいたマスタードを押し込める、次いで茶毘の手を掴んで引つ張つていく。小柄なマスタードと抵抗のなかった茶毘は直ぐに送れたがマスキュラーはそうはいかない。

「貴方を早くゲートへ!もう時間が無いですよ!!」

「ああ?命令すんなよ!来るわけねえだろ!てかヤツから来るならここで潰すまでだっ!!っーわけで俺は——」

「黙りなさい!」

黒霧は頑なに動こうとしないマスキュラーの足元にゲートを作り出し、そのままアジ

トへと送り付けた。後で文句を言われるだろうがこの場から逃げることの方が優先なのだ。

そして自らもゲートに飛び込みその場を後にした。

距離が有ろうと目視してなかりうと、間違いなく緑谷出久はマスクュラーのあの殺意を察知していた。あの化け物ならやりかねない。そう考え即座に行動に移ったのである。

四人が消えた崖の上、黒霧のゲートが消失したその三秒後のことだ。大きな砂埃をたてながらひとりの男が舞い降りた。

——緑谷出久である。

「あれ？誰もいない。確かにこの辺から殺気を感じただけどなあ……」

直感が外れたことに納得がいかないように後頭部を掻きながら呟く出久。

その感は外れてないし、行動も迅速だった。しかし黒霧の危機回避能力が、出久に対する危険性の認知が一枚上手だっただけの話なのだ。

マスクュラーのせいで碌な偵察が出来なかったヴィラン連合だったが、その日の晩のうち襲撃メンバーが集合した。

計画の実行は変わらず明日の夜。出久とヴィラン連合の衝突はもうすぐだった。

林間合宿三日目、今日も朝早くから訓練が始まる。僕の役目は変わらずみんなの教官だ。

やることも昨日と同じで午前中は個性を伸ばす訓練、午後は集団戦の訓練を行った。昨日より軽めに…

——そうして遂にあの時間がやって来たのだ。

「次は——肝を試す時間だ！」

芦戸さんが元気よく叫ぶ。

肝試しの時間がやって来た、前世ではこのタイミングでヴィラン連合の襲撃があった。

だが今回は来るかどうかもわからない。死柄木のように来ない可能性もある。でも僕は奴らが来るだろうと思ひ、準備をしてきたんだ。それに昨日の夜に感じた殺気……

あれのお陰で迷いはなくなった。

前世と変わらないA組とB組の対抗肝試し。補修組は既に相澤先生が引き摺っていった。そしてある程度の仕込みを済ませた僕は振り分けのくじを引く。

A組生徒は20名、補修で三人抜けて二人一組のくじ引きを行うと……

「……やつぱりひとり余る」

組み合わせは前世と変わらず、余り物は僕だった。

なんでだよ！砂藤君と切島君が入ってるから結構確率変わると思ったのに！……まあいい、ひとりの方が警戒はしやすい。寂しくなんてないさ……！

一組目の障子君常闇君ペアが出発し、その後も3分おきに轟君とかっちゃん、葉隠さんと耳郎さん、八百万さんと青山君のペアが出発した。

「じゃあ次はケロケロキティとウララカキティ！GO！」

ピクシーボブが元気よく二人を送り出すが、ふたりはそれとは対称的で落ち着いている蛙吹さん、そして麗日さんは怯えていた。

ここまででは特に問題なく進んでいる……肝試しではなくこの合宿自体が。昨日感じた様な殺気もないし、報知器にも反応がない。

「このまま何もなく終わればそれでいいよな」

僕は独り言を呟きながらスマホを見つめる。用意してきたものは全て無駄になってしまっけど、平和に越したことはないよね。

僕がそんなことを考えていたその時、手に持っていたスマホがけたたましい警告音を鳴らす。仕掛けていた火災報知器が作動したというサインだ。

瞬間、背筋にぞわったした感覚があり、かなり近い位置で殺気を放たれていると分かる。

「きゃあ!？」

「ピクシーボブ!!」

ピクシーボブの身体が近くの雑木林に吸い寄せられていきそうなところを、間一髪で腕を掴んで引き留める。殺気はその先から放たれている。

「あら、飼いの猫ちゃん取れなかったわ。噂通り力強いのね」

雑木林からサングラスをかけたロン毛の男が姿を見せていた。その口調は明らかにおかまだが……前世でも見かけたヴィラン連合の一員だ。

「渡すもんか…!!」

ピクシーボブはかなり強力な力で吸い寄せられているが、僕の筋肉よりかは強力では

ないようだ。

徐々にフルカウルの出力を上げて引き返そうとするが、ピクシーボブの顔が苦悶に歪み、痛みで声を上げる。

このままではピクシーボブが持たない！

僕はピクシーボブの腕を放して、全力で駆け出す。そして引き寄せられるピクシーボブを追い越して、ヴィランに向かった。

「速っ——」

「イリノイ・スマッシュ!!!」

オカマのヴィランが驚きの声を上げるより速く接近して、勢いの乗った前蹴りをその鳩尾に叩き込む。オカマは吹き飛んでその真後ろにあった木へと激突し、僕は素早く振り返ると引き寄せられていたピクシーボブを両腕でしっかりと受け止めた。

「大丈夫ですか!？」

「え、ええ…ありがとうございます」

僕はピクシーボブを気遣いながらゆっくりと地面へと下ろす。どうやら怪我などはしていないさそうだがヴィランの急襲に動揺しているみたいだ。

「もうひとり隠れているな?出てこい!」

「やはり気付いていたか……流石は彼が認めた本物」

僕が雑木林の方へ叫ぶと、オカマの気絶していた木の奥から爬虫類のような異形型のヴィランが満足げに現れる。

こいつは確か……ステインの信者だったか？

「緑谷出久、お前はステインの求めた本物。お前と争うつもりは——」

「……」

トカゲのヴィランが誇らしげに語る中、僕は無言でそいつへと駆け出す。

トカゲは慌てて、背負っていた刃物を束ねた剣のようなものを構えようとしたが、僕が放った回し蹴りがその刃を捉えバラバラに砕く。

「待て待て待てまつ——」

「ウイスコンシン・スマッシュッ!!!」

制止を求めるトカゲを無視し、僕はその顎に右フックを振じ込んでブツ飛ばした。

もうコイツみたいだなステイン信仰者とは話すことなんてない。ステインと分かり合うことなどないと、僕は保須の一件で知っていたからだ。

僕は気絶した二人のヴィランを見下ろしながら、拳を握り締めて突き出す。



「——死柄木から聞いてなかったか？……お前からヴィラン連合は僕が必ず潰すと……」

## 不確定要因（イレギュラー）

合宿三日目。前世と同じく肝試しの時間になり、遂に現れたヴィラン連合。でも前世と違い今の僕には力がある！

手の届く者は必ず救ける。そしてヴィラン連合：お前らは僕がこの手で必ず潰してやるっ!!

「ピクシーボブ、この二人のヴィランをお願いします！ マンダレイ、みんなの避難を！ 虎さん、急いでラグドールの下へ！ ヴィランの数がわからない以上、単独行動は危険です！」

ヴィランの襲撃に備えていたため、余裕のあった僕は、ヴィランの急襲により動揺した三人へと指示を出す。

「それと虎さん……皆をお願いします。ここにむぎむぎとやられるなんてさせられな

い。出来る限りのことをさせたいんです、全力で皆が抗えるように——」

「よい、我に任せておけ。全ての責は我が負う、お前はお前の力を全力で使うことを考えておけばいい」

覚悟を決めた僕と虎さんは多くの言葉は交わさなかった。漢同士の約束はいま果たされるだろう。

「マンダレイよ、頼む……」

「虎……わかったわ」

虎さんとマンダレイの短いやり取り。マンダレイもまた覚悟を決めたようで、この合宿施設全体に伝わるようなテレパスを発信する。

『『ヴィラン二名襲来！他にも複数いる可能性有り！動けるものは直ちに施設へ!!——そしてヴィランと遭遇した場合は、A組B組総員、プロヒーロー、ワールド・ワールド・プツシーキャッツ』の名に於いて、戦闘を許可する！ 繰り返し、ヴィラン襲来。個性による戦闘を許可する!!』』

テレパスが僕の頭を駆け抜けていく。だがその内容は僕が想像していたものとは少し違っていた。

マンダレイの出した指示だと虎さんだけじゃなくてチームが戦闘を許可した形になっちゃってしまわないか!?

「マンダレイ！それでは我のだけの問題では——」

「そうよ、貴方の抱える問題は貴方だけじゃなくチーム皆のものなんだから。昨日三人で話し合って決めてたの。虎が覚悟を決めたなら私たちも……ってね！」

「すまぬ……そしてありがとう……」

ワイルドワイルドプッシューキャッツの団結は僕の想像なんて遙かに越えるくらい強かった。そんな様子を見て僕は、相棒であるかつちゃんのことを思い出していた。

かつちゃんを救けなきや……きつと奴らの目的はかつちゃんだから——でも今は先にやる必要がある。

「ありがとうございます!!僕は洗汰君の保護に向かいます!きつといつものところにいるので!!」

「オールライト、洗汰をお願い!!」

「任せました、必ず救けます!!」

僕は洗汰君のいる崖道の秘密基地を目指して駆け出す。その身体にワン・フォー・オールを全開にして纏わせながら——

「……ふう、これでヒーロークビになったらどうしよっか?」

「その時は……若いツバメをいただくとしましよう?」

「それ、いいわね。じゃあ私はオールライトにしようかしら」

「ピクシーボブ……まあ、あのMt.レディから奪えるならそれも面白いかも知れぬな」

洗汰君のいる秘密基地までの道中には、先程作動した火災報知器の最初の二つの反応のうちの一つがあつた場所を横切る形になる。もしかしたらヴィランとかち合うかもしれないな。

などと考えながら駆け抜けていると正面の木の影からひとりの男が走って出てきた。

「げっ、緑谷出久……!」

「誰だ?! いや、奴らの仲間だな?」

「ちっ……俺の担当はお前じゃない。でも遭つちまったからには燃えてもらおうつ!!」

不意に遭遇した顔面継ぎ接ぎのヴィランはその手から火炎を放ち、なんの躊躇ためらいもなく僕を炎で焼き殺そうとしてきた。

「僕もお前に構つてる暇はない! ネブラスカ・スマッシュユ!!!」

僕は火炎をしゃがみこんで避けながらヴィランに接近して、その鳩尾にアッパーを叩き込む。だがその感触は相手の横隔膜や腹直筋を捉えたものではなく、なにか柔らかな水風船を殴ったようなものだった。

そしてヴィランの腹が文字通り弾けとんで、その身を散らした。

「しまった！殺し——」

「おいおい、無傷かつ一撃かよ。容赦ねえな……もう会いたくねえ、あばよ」

それだけ言い残すと、ヴィランの身体がドロリと溶けていき、黒いヘドロのようなものが地面に残った。

さっきの炎が個性じゃないのか!?これは幻覚……?それとも液化か? それに複数の個性を持つなんて……

「復活する様子も、辺りに気配もない……別の奴の個性を使つたのか?」

暫くその場で警戒していた僕だったが、相手が現れないことからこの場は制圧したと考え、次の行動を起こす。

「洗汰君の元へ急ごうっ!!」

数十秒だが、明らかに時間を使ってしまった!無事でいてくれ……、洗汰君っ!!

## 相澤 side in

「ブラド、ここを任せた。俺は生徒の保護に向かう！」

マンダレイからのテレパスを受けて、俺は即座に行動を開始する。

宿泊施設から外に出る。そこに広がっていた光景は、炎に包まれ明るく燃え上がる森だった。

ヴィランの襲撃……まさかホントに来るとは……今回の合宿では情報が漏れないように万全を期した。こんな襲撃があるはずがなかったというのに。

ここにヴィランが来てないことを考えると、奴らの狙いはやはり生徒達である可能性が高いか。

「……マズいな」

考えたくはないが、やはりいるのか？ “内通者” が……

『今回の合宿中にヴィランの襲撃があったらどうします？』

まさか緑谷、お前が……いや、そんな筈はない。襲撃者の味方がわざわざそれを示唆することを言うのは合理的じゃない。

それに緑谷が敵になるとしたら、この状況は最悪過ぎる。さらにその師であるオールマイトですら敵に……そんなことになっているとしたら。

——日本の超人社会の崩壊を意味する。

いや待て、度が過ぎる悪い方への想像は合理性を欠く。とりあえずは保留しとくべき考えだ。

今とはとにかく行動を。生徒の保護とヴィランの掃討を優先すべきだな。それにマンダレイに接触して戦闘許可の権限を俺に移して貰わなければならない。

「……やるべきことが多い」

——そうして俺は燃え上がる森へと向かっていった。

—— 相澤 side out ——



マンダレイのテレパスから約2分後。僕は冼汰君の秘密基地がある崖の下へとたどり着いた。そして大きくその場で踏み込んでその崖の上へと跳躍していった。

そこで僕の目に飛び込んできたのは、いまにも冼汰君に襲いかかろうとしている黒衣の大男の姿だった。

「——っ！ 冼汰君!!」

僕はその間に割り込み、左腕で振り下ろされたヴィランの腕を弾きながら、右腕で冼汰君を抱えて大きく右へと跳ねた。

「っ痛てえー……てめえは緑谷出久……!」

僕に弾かれた腕をさすりながら僕を睨み付ける大男。被っていたフードは脱げていて、抉られた痕の残る顔が見える。

血狂いマスクュラー、冼汰君の両親の命を奪った凶悪なヴィランだ。

僕は冼汰君を地面に優しく下ろして、目線の高さを合わせて冼汰君へ語りかける。

「冼汰君大丈夫？ 怪我はない？ 急いで宿泊施設まで走って逃げるんだ」

「でもアイツが……」

「大丈夫……アイツは僕が倒すから……!」

僕はマスクュラーへと振り返り、力を込めて握りしめた拳を構えた。

「お前が俺を倒す? ちげえよ、俺が! お前を! 殺すんだっ!!」

「走って!!」

冼汰君へ櫛を飛ばしながら、襲い来るマスクュラーを迎え撃つ。

個性によって筋肉(肉物)を重ねて膨れ上がったマスクュラーの腕と個性を巡らせて強化された僕の腕が衝突し、辺りに衝撃波が走る。

吹き飛んだのはマスクュラーの方だった。腕だけで振るわれた一撃を、僕は全身の筋肉本物を使って、身体を地面から生える柱のようにして迎え撃つため、揺るぐことなく力勝ちしたのだ。

「やっぱり強つええな! ならこっから先は本気の義眼で——ぐふうっ?!」

吹き飛んでいったマスクュラーが体勢を立て直しながら、義眼を交換しようとポケットに手をつ突っ込む。僕はその隙を逃さず、がら空きの顔面にフックを食らわせた。

マスクュラーが大きく仰け反ると共に填めていた義眼が外れて飛んで行く。

「お前の遊びに付き合ってやる理由はない……次で終わりにしてやる」

「があっ! くっそ強ええ……もつと遊んでいたかったが……」

ダメージが重なり片膝を着くマスクュラー。僕は止めの一撃を食らわせるために、拳を引きながら踏み込んでいく。

「100%！DELLAWARE——」

「——やれっ!!!」

最後の一撃を放とうとしたその瞬間、マスクユラーの叫び声と共に僕の背中にまるでオールマイトに殴られたかのような衝撃が加わり、崖の壁面へと吹き飛ばされた。

「くっそーなにが……っ!!」

衝撃で崖に埋め込まれた僕だったが、直ぐ様抜け出して戦闘体勢をとる。しかしそこにいる筈もない人物の姿に思わず言葉を失った。

「どーよ緑谷あ、痛えか。これが死柄木から貰った俺の玩具……脳無だ」

そこに居たのはUSJ襲撃事件で僕が取り逃した、オールマイトを殺すためのヴィラン連合の切り札「脳無」だった。

こんな予想してないぞ……！オールマイトすら倒せるかもしれない奴とマスクユラーのタッグ、勝てるのか？

「いや、やるしかない!!スマアツシユ!!!」

僕は脳無の胸板に拳を叩き込む。だがその衝撃は脳無の個性「ショック吸収」によつて無力化されてしまった。

脳無が反撃の拳を僕の顔に向かって振り抜くが、僕は身体を少し捻ってそれを躲し

た。

やはり生半可な一撃じゃ通用しない、もつと速さとパワーがいる！僕はここでコイツらを倒して洗汰君を……しまった！

考えを巡らせて洗汰君の方へと振り向いた時にはもう遅かった。

「洗汰君!!」

「遅せえよ、ガキならもうここだぜ?」

マスキュラーが片腕で洗汰君を脇から抱え上げて捕らえていたのだ。

「放せ!放せよ!!パパとママを殺したクソヤロー!!」

「うるせえガキだなあ……今すぐぶつ殺してやる!!」

「ひっ……」

「……と言いたい所だが、今のお前は人質ってヤツだ。さあ緑谷、このガキを殺されたくなかつたら動くな!ってなあ!ハハハツ!!」

僕を嘲笑うマスキュラーの声が木霊する。洗汰君を人質に取られてしまい、今の僕に出来るのは奴を睨み付けることぐらいだ。

「おお、怖い怖い。目線だけで殺されちまいそうだ。でもお前は動けない……ヒーローだもんなあ?ハハツ!」

「くっ!!」

「さて、動くなよ緑谷。つてもスグに壊れちや面白くねえな……じゃあ防御だけはしてもいい。但し、反撃をしようもんならこのガキの首と身体が離ればなれになっちゃうぜ？わかったか？わかったよなあ!!!?」——「やれ、脳無」

マスクユラーの言葉を受けて脳無が動き出してくる。僕は両腕を身体の前で固めて防御の姿勢をとった。

——そして、脳無から繰り出される殴打の嵐を、サンドバッグのようにこの一身に受け続けた。

— D a r k   s i d e   i n —

ヴィラン連合「開闢行動隊」が合宿施設を襲撃した、その同時刻、ヴィラン連合の隠れ家であるBARでは、死柄木と黒霧がその襲撃について話をしていた。

「配置については計画通りに……」

「一先ずは完璧だ。作戦が成功するかどうかはあんまり重要じゃない。この襲撃自体が起こったという事実が重要なんだよ」

「ではやはり……彼らは捨て駒ですか？」

「バカ言え、俺がそんなに薄情な奴に見えるか？」

黒霧は「見えます」と思わず言いそうになるのを堪えて死柄木の話の続きを待った。

「それに虎の子の切り札脳無を二枚も切ったんだ。ある程度は成功して貰わなきゃ困るつてもんだ」

「作戦の成功は、マスキュラーと対オールマイトの最高性能脳無ハイエンドがどこまで緑谷出久に通用するかにかかってるわけですね」

「そうだ、その他のプロヒーローなんて脳無に比べればカス同然。奴を抑えればこの闘いは勝てるんだよ」

自慢げに語りながら死柄木は左手で右手を啜えこむジェスチャーをする。

「まあ俺の腕もまだ安定してないし、ここはアイツらの頑張りに期待して待つてるとするよ」

「……そうですか」

他人事みたいに語る死柄木に、このあと彼らを迎えに行く仕事を思い出した黒霧は、何とも言えない気持ちになる。

その場にはない彼らに知る由はなかったが、連合の立てた作戦は死柄木が想定したよりも遥かに巧く機能していた。

同時刻、合宿施設では――

「全然足りてねえぞ茶毘！もつと燃やせ！　いや、十分だ！最高だぜ茶毘!!」

「二人も自分があるってのは変な気分になるな」

トウワイズが増やした茶毘と本体の二人が森林を個性で燃やし続け、辺りを火の海にしていた。

「雄英のエリートども……！死ね！死ねっ！僕のガスに吞まれて死んでしまえ!!」

マスタードが発生させた有毒ガスは既に広範囲に広がり、その脅威を満遍なく発揮する。

「ネホヒャン！ネホヒャン！」

「こやつ……強い……!!」

もう一体の脳無はラグドールと虎にあいたい相対しており、奇襲によりラグドールに深傷を与えていた。

「二人ともカアイイね。麗日さんと蛙吹さん！」

トガヒミコは麗日と蛙吹に襲いかかり、敵対していた。その手には麗日の血のついたナイフを構えながら。

「あああ、綺麗だ……綺麗だよ。もう仕事しなくていいかな……」

脱獄死刑囚ムーンフィッシュは蹲りながら囁いていた、地面に転がる誰のものとも分からぬ切り落とされた腕を眺めて。

「さて、目的の彼はいったいどこにいるのかな？」

Mr. コンプレスは闇夜の森を跳ねながら標的を探し続けている。それすら楽しみに変えて、この最高のショーを成功させようとしていた。

スピナーとマグネは既に出久の手によってやられてしまっていたが、その出久はマスクュラーと脳無によって追い詰められている。

本来、オールマイトの弟子として実力を付けた出久が、マスクュラーと脳無の二人を相手にしても、苦戦することは有れど遅れを取ることはなかっただろう。黒霧の予想通りに時間稼ぎにしかならなかった筈だった。

しかし出水洗汰という、死柄木達にとって予想外の不確定要因<sup>イレギュラー</sup>が、出久にとっては最悪、マスクュラーにとっては最高の形で作用していたのだ。

—— 際限のない悪意が蔓延り、絶望がヒーローたちを呑み込もうとその口を大き



く開けて待ち構えていた。

— D a r k   s i d e   o u t —

— 出水   s i d e   i n —

「気分はどうだ緑谷？ だいぶポロポロになってきたなあ！ いいぜもつと血い見せろや  
！」

「ぐっ……！」

「この脳無はお前をぶつ殺すつてことを条件に死柄木に貰った玩具なんだ。 いいぜえ  
こいつ。 好きなだけ殴つても壊れないでスグ直るし、うだうだと小言も言わねえしな  
！」

僕を捕まえたヴィラン、パパとママを殺した犯人、マスクユラーは笑い続けている。

あのマッチョは僕のせいで動けないで殴られ続けているのに……

「なんでだよ！ なんで逃げないんだよ！」

「ハハッ！ ホントだよなくそガキ。 アイツは強え、俺よりもかなり強えよ。 他人なんて

見捨てて逃げるなんて楽勝だろうし、その気になりやぶつとばせるのにな！損な性格してるぜまったくよお!!」

マスキュラーが僕に同調するようにアイツを嘲笑う。どうして、どうして何にも知らないくせに…僕なんかを……

そして殴られまくったマッチョはついに地面に膝を着いてしまう。

「……うぶ……」

「ああ!?!なんだって!?!」

「……大丈夫!?!…必ず救けるよ…洗汰君」

全身ポロポロの血塗れになりながら、それでもアイツは僕に向かって満面の笑顔でそう言った。

なんで…!?!そんなになってまで…!?!僕を救けるなんて言えるんだよ!?!おかしい、おかしいよ!!」

「オツカシイぜお前!!必ず救ける?そんなぼろ雑巾みてえになって何言ってるんだ?もうすぐ死ぬんだぞ!!?!ああ!!?!ハハハッ!!」

「笑うなあああ!!お前みたいな奴が、パパとママを殺したお前が!」

「お前の方こそなに言ってるんだよって感じだぜ、くそガキ」

僕はがむしやらにマスキュラーの腕の中で腕もがく。だけど腕は固く閉ざされて、全く

抜け出せる感じがしなかった。

僕がこいつから逃げられれば、きつとマッチョが自由に動ける。だからどうにかしてこいつの不意をつければ……

「さて、そろそろ終わりにしてやつかな。そんだけズタボロならもう勝てんだろうし。

止まれ、脳無」

マスクュラーは余裕の笑みを浮かべて、アイツへと歩き始める。

「抑えとけ脳無。これでオシマイだ！じゃあな緑谷!!——」

マスクュラーがアイツに止めを刺そうと筋肉だらけになった腕を大きく振りかぶった。

「止めろおおお!!」

僕はマスクュラーの顔に目掛けて、個性で掌から水流を出した。

「あ?」

水を浴びせられたマスクュラーは、不意の出来事に対応できず、一瞬動きが止まった。「うおおおおお!!」

その隙を逃さずアイツは立ち上がり、もうひとりの化け物を投げ倒してから、僕に向かって必死に手を伸ばす。

でもその手は届かない。化け物が倒れながらもアイツの足をしっかりと掴んでいたからだった。

「あー残念。届かなかったな？　しかし、いろいろ合点がいったぜ、その個性……ウオーターホースか」

「ひいつ……」

「緑谷も約束破って動いちまったし……そろそろお前も殺すか」

マスキュラーは僕の首根っこを掴みながらまるでイタズラした仔猫を叱るような態度で、命を終わらせようとする。

「精々あの世でパパとママに甘えるんだな、くそガキい!!——」

マスキュラーは僕を軽く真上に放り投げると、その下で僕を殺すための拳を構えた。

「や、め、ろおおおお!!」

アイツは必死に化け物を振り払おうとするが抜け出せない。そのまま倒れ込みながら、ギリギリ届いたマスキュラーの足を掴むけど、マスキュラーの拳は少しずれただけで変わらず僕を捉えていた。

死ぬ。死んじゃう。殺されちゃう。

絶対に死ぬってわかっているのに、僕はそれでも最期のお願いをしてしまう。

「——誰か、救けて……」

僕は心の底から思った気持ちを、祈るように呟いた。

そこから先はなにが起こったか、僕にはよく分からなかった。

僕はまだ生きていて、気がつけば暖かくて力強い腕と大好きなお菓子のような甘い香りに包まれていた。

僕を抱き上げる人の顔を見上げて確かめる。

「……お菓子マン?」

「おう、救けに来たぜ、洗汰」

につこりと優しく笑うお菓子マン。僕はその腕の中で泣き出していた。

僕は昔にマンダレイに言われた言葉を思い出す。

『あんたもいつかきつと出会う時がくる』

ボロボロになりながら立ち上がり、僕を救けると言ってくれたアイツ……

『命を賭して、あんたを救う』

僕の願いを叶えて、救ってくれたお菓子マン……

『あんたにとつての……』

僕の………

——僕のヒーロー達。

——出水 side out ——

ぶちこめ、1000000%!

ヴィラン連合襲撃——僕は何人かのヴィランをこの拳で倒してから、秘密基地へと向かい襲われそうだった冼汰君をマスキュラーから救けるため闘う。

そこにUSJの脳無が現れたことと冼汰君を人質に取られたことで窮地に陥ってしまった。

大丈夫、必ず救けるよ、冼汰君。

「さて、そろそろ終わりにしてやつかな。そんだけズタボロならもう勝てんだろうし。

生まれ、脳無」

脳無の猛攻により全身ボロボロになった僕へとマスキュラーが止めを刺そうと歩いてくる。その顔には余裕と悪意が入り交じった笑みが浮かんでいた。

どうにかして隙を見付けて冼汰君を救けなきゃ……まだやられていられない。

「抑えとけ脳無。これでオシマイだ！じゃあな緑谷!!——」

「止めろおおおお!!」

「——あ?」

両肩を脳無に押さえつけられた僕へマスキュラーの殺意の籠った拳が迫る。だがマスキュラーの腕の中の冴汰君が個性によって、その顔面目掛けて放水したことにより動きが止まった。

——今だ!!!

「うおおおおおお!!」

僕は全身にワン・フォー・オールを巡らせて最速で動き出す。世界がスローモーションになるような錯覚を覚えた。

押さえつけられた肩から腕を振り払うため身体を捻りながら回転する。そのまま脳無の片腕を引き、脚を掬うように蹴りを放ち、脳無を投げ倒した。

倒れた脳無には目もくれず僕は動き続けていく。

蹴りの回転を止めずに回るように立ち上がり、右足に力を込めて地を蹴る。目の前には冴汰君を抱えて目を点にしているマスキュラーの姿が写っていた。

冴汰君の奇襲によって集中を欠き、全身の筋肉が弛緩してるのがわかる。つまり、冴汰君を捕らえているその腕も例外ではない。

あの腕を振り払えば冴汰君を救け出せる!!



左足を前に、そして右腕を大きく冼汰君に向けて伸ばす。地を蹴った右足が伸びていき、冼汰君への距離がグングン近づいていく。

30センチ……15センチ……あと10センチ……!

収縮していた筋肉が伸びきり右足が地を離れると、左足が地面を再び蹴る準備を始めていた。

もう一步踏み込まずとも手は届く。

冼汰君を救けるため、マスキュラーの腕を弾こうと僕は右腕を振り上げていく。

そしてその腕を振り下ろした瞬間、冼汰君へと向かう僕の身体が制止した。

何かに右足をガツチリと掴まれたからだ。そしてその何かとは、先程地面に投げ倒した脳無に他ならない。

右腕が空を切り、僕の手はマスキュラーの腕に……冼汰君に届かなかった。

「あー残念。届かなかったな? しかし、いろいろ合点がいったぜ、その個性……ウオーターホースか」

「ひいっ……」

「緑谷も約束破って動いちまったし……そろそろお前も殺すか」

マスクュラーが洗汰君の首根つこを掴みながら殺気を撒き散らす。僕は脳無に脚を引かれながらも、地面を蹴いて引き摺られないように洗汰君を指す。殺させてたまるかあああああ!!

「精々あの世で。パパとママに甘えるんだな、くそガキい!!——」

マスクュラーは洗汰君を軽く真上に放り投げ、殺すための拳を構えた。

「や、め、ろおおおお!!」

地面に左手を押し込み、強引に這い進む。そして僕の右手がマスクュラーの足首に届く。

右手の力を最大限に活かすため首を左に向けて、腕に力を込めようとしたとき……視界に予想外の人物が見えた。

それは飛び蹴りの体勢でこちらに向かってくる砂藤君の姿だった。

だが砂藤君の蹴りの速さではまだ足りない。様々な格闘技を見て、食らって、教えて貰った僕には、マスクュラーの拳が洗汰君に叩き込まれる方が早いことがわかる。

砂藤君の蹴りが間に合うように僕が時間を稼ぐ!!

僕はマスクュラーの足首を思い切り引き寄せる。するとマスクュラーの巨体が傾い

て拳の狙いが逸れた。だがマスキュラーは身体の軸がぶれたことに気がつく、放つ拳の速度を緩めて軌道修正をかける。

外れる筈だった拳が再び冴汰君を捉えた。

だが問題はない。その一瞬の減速：僕の狙いはその一瞬だったのだから。

そしてマスキュラーの拳と砂藤君の蹴りが衝突する。

「シユガードーフロムコンセントレイト!!  
S・D・F・C!!!」

個性によって超強化された砂藤君の一撃は、辺りの音が消える程の衝撃を生み出しながらマスキュラーの腕を弾き飛ばす。

そして砂藤君は落下してくる冴汰君を優しく抱き止めながら、僕らから数メートル先の地面へと着地した。

「お菓子マン……?」

「おう、助けに来たぜ、冴汰」

冴汰君は砂藤君の腕の中で泣いていた。それが恐怖から解放された安堵から来るものなのか、それとも他のものなのかは僕にはわからない。でもそれはとても素晴らしいものだ、僕は思う。

そんな光景をぶち壊そうとマスキュラーはまた動きだそうとしていた。

コイツらヴィランは絶対に……いや、この偽筋野郎だけは絶対に許せない……!!

「洗汰君を連れて逃げろっ! 砂藤君!!」

「なっ!? てめえ放せっ!!」

「緑谷!? お前そんなボロボロで……! 無理だろ!!」

「大丈夫!! だから早く僕から離れるんだ! 巻き込みたくない!!」

マスクュラーに足蹴されながら砂藤君へと叫ぶ。砂藤君は少しだけ困惑したが、僕の言葉を意味を理解すると踵を返して駆け出していく。

「洗汰は任せろ! やっちまえ、緑谷あ!!」

洗汰君を抱えたまま全力で崖を駆け下る砂藤君。すぐにその姿は見えなくなった。

ありがとう砂藤君……不甲斐ない僕を……なにより洗汰君を救ってくれて。さあ、ここからはもう抑える必要はなくなった。大事な者は友に託し、僕は託された使命を果たす。

ワン・フォー・オール、フルカウル……92%——

「ロードアイランド・スマッシュ!!!」

僕は地面に寝転んだ状態で身体と手足を捻る。無論その手足にはマスクュラーと脳無が付いたままだ。

ブレイクダンスの要領で回転を起こして、脳無とマスクュラーを壁にぶん投げてか

ら、そのまま勢いよく立ち上がる。二人がぶつかった崖の壁面は砕けて、辺りに飛び散つていき僕の身体にも礫つばてがいくつも当たっては弾けていく。

「僕はまだまだ半人前でね……全力で敵を倒して、全力で誰かを救けるってことが上手に出来ないんだ。だから今、お前らを全力で倒す……!!」

「バカな……！てめえそんな血塗れの癖になんでそこまで力強く動ける?!」

「決まっている……筋肉のおかげだ」

「!?!」

マスキュラーは自分から尋ねてきた癖に、僕の答えを聞いて驚愕していた。

シンプルな話だ。脳無の猛攻は確かに僕の皮膚を打撃によって切り裂き血を流させた。だがその下の筋肉……そう、僕の鍛え上げ、個性によって硬められた筋肉は傷つけられなかったんだ。

故に見た目は派手な怪我だが、骨や関節、臓器などの重要な器官は無傷のままだ。

僕はまだまだ闘える……！終わらせようか、脳無、そしてマスキュラー……！

「ハツタリ咬ましやがって……！やれ！脳無!!」

焦燥と動揺の入り交じった声でマスキュラーは脳無に指示を出す。その声に従い、

脳無が声もあげずに僕に向かって迫る。

この脳無は普通には倒せない。その身に宿す個性で、衝撃を呑み込み、いくらでも再

生する。僕が知っているこいつの倒し方は只一つ——圧倒的パワーとスピードでその個性の許容限界を超えてしまうことだ。そう、前世でオールマイイトがやったように。今の僕ならそれが出来る。

ワン・フォー・オール：プルスウルトラ——フルカウル・100%!!!!

ワン・フォー・オールが僕の全身の筋肉を包み込み、強靱な筋道に昇華させていく。続いて本来なら扱いきれない程の強大で莫大なチカラが筋肉に注ぎ込まれていき流れゆく。筋肉から溢れたチカラの奔流は体表面を駆け抜けて、まるでイナズマのように弾けながら迸っていった。

「SMASASHHH!!!」

チカラを纏った僕と脳無の拳が同時に振り抜かれ衝突する。拳は互いにその場に留まり、衝撃波だけが一面に広がっていく。

だが拳の衝突は一度ではない。何度も何度も拳のぶつかり合いは起こる。その速度はまるで機銃の掃射のようだった。

殴打、衝突。殴打、衝突。殴打、衝突。殴打、衝突。殴打、衝突。

僕と脳無が巻き起こす衝撃は最早一つの災害とも言える規模になってきていた。しかし、僕はラッシュの速さを更に上げて拳を放ち続けていく。

もつと!もつとだ!もつと速く!もつと強く!——プルスウルトラアアアア!!!!



マスキュラーはその醜い塊を見せつけながら啜う。それに対して僕は――

「ふっざけんなあああああ!!!」

――ぶち切れた。

「そんな肉塊もが。個性で増減するようなそんなものが……筋肉であつてたまるか!!! 筋肉とは育むもの! 筋肉とは共に生きるもの! 筋肉は自分で、自分は筋肉なんだよ!!!」

「なに言つてんだてめえはあ!!!」

「お前のその偽物の下に埋もれた筋肉が泣いている……本物の筋肉をお前に教えてやるよ!」

僕は拳を構えてマスキュラーへと叫ぶ。マスキュラーは理解を拒み喚くだけだ。

「死いねええええ!!!」

マスキュラーが肥大化した腕を振り下ろし、僕を叩き潰そうと動き出した。同時に僕も拳を引いた。

僕と冼汰君の思い……そして全世界中の筋肉達の怒りを籠めて!!!

「10000000%!!! DELAWARE—DETROIT—SMASH!!!」

爪先から拳の先まで、全ての筋肉を総動員し、連動させた本物の一撃スマッシュを放つ。!!それは前世で放つた苦し紛れの一撃とは比にならない威力だった。!!

僕の拳とマスキュラーの腕が交錯するも、一瞬の均衡もなくマスキュラーを弾き飛ば



す。更にマスキュラーの偽物の鎧を剥ぎ取りながら衝撃が駆け抜けていく。そして衝撃はマスキュラーだけに留まることなく辺り一面に広がっていった。

僕のスマツシユの衝撃はマスキュラーを崖に叩き込むよりも早く、崖そのものを砕いて消し去った。

拳を振り抜ききつて微動だにしない僕の身体に、衝撃の余波、空気が裂ける爆音、そして吹き荒れる風が駆け抜けていった。

土埃が止んだあと、僕が見たのは土砂に埋もれて頭だけが地面から生えているマスキュラーと脳無の姿だった。

生きてる…？あつ、息してる。よかつたあ…しかし1000000%とか言つたけど実際は只の100%プルスウルトラ。要は気合いの問題なんだよ。

「とりあえずコイツらはここに放置だな。暫く目を覚まさないだろうし、起きてもまとも動けないよな。さて、まずは砂藤君と合流して洗汰君を宿泊施設の先生のとこに連れててつてもらわなきゃ……」

額に流れる血を拭いながら肩で息をしながら独り言を呟く。

ヴィラン連合の襲撃はまだ終わってない。やることは山積み……まだまだこれから

だ!!

—— 砂藤 side in ——

緑谷の後ろを追って洗汰の秘密基地まで来た俺は、倒れる緑谷とヴィランに捕まった洗汰を見つけた。洗汰を宙に投げ、ヴィランが襲いかかるのを見て、慌てて個性を全開で発動して駆け込む。

そしてSDFCを込めた蹴りを食らわせながら洗汰を拾い上げて着地。

離れろという緑谷からの指示を理解した俺は洗汰を抱えて崖を駆け下り、離れた場所へと到着した。

「お菓子マン！ちよつと待ってよ！アイツ置いてきて良かったのかよ!?!やられちやうじやんっ!!」

「大丈夫だ、アイツは……緑谷は強い!」

緑谷が心配で焦る洗汰の頭を撫でながら落ち着かせる。

「俺たちがいたら緑谷は本気を出せないからな。だから大丈夫、すぐにあのヴィランをやっつけてくれるさ」

「でも！僕のせいですが、い怪我を——」

洗汰がそう言いかけた時、さつきまで俺らが居た方からドカンという音が聞こえてきた。

「えっ?」

驚く洗汰を抱えながら崖の方を見つめる。そして暫くするとまた音が聞こえてきた。

ドガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガ——つと、まるでマシンガンや掘削重機を使ったような音が鳴り響く。その音は10秒近く鳴り続けていた。

「今のアイツが……?」

「……たぶんな」

洗汰と顔を見合わせながら二人して苦笑いになる。やっぱりすげえな緑谷は。

ドガアアアアアンツツ!!

気を抜いていたところに、爆発にも似た特大の破壊音が炸裂した。咄嗟に洗汰を庇うと、俺の背中に一迅の風と小石の礫つぶがてがいくつも当る。礫つぶがてが無くなったのを感じて後ろを振り返った。

「いったいなにが——」

そこに見えた景色に言葉を失う。さつきまであったはずの崖が上半分まるつと無く

なっていたからだ。

「ハ、ハハハ……」

俺は最早乾いた笑いしか出てこなかった。今まで知っていたつもり緑谷のパワーはあくまで訓練用の抑えたもんだと……これがアイツの本気なんだと。

「これもアイツが……?」

「たぶん……離れてて良かっただろ?」

「……うん」

俺と冴汰は啞然としながら立ち尽くしていた。

「おーい! 大丈夫だった!」

そこに崖の方から飛んで、緑谷がやってきた。俺らの気も知らずにいつもの笑顔で。

むしろ緑谷の出血の方がやばそうだったので大丈夫かと尋ねると、筋肉のおかげで表層しか傷ついてないから大丈夫だと返されてしまった。あの大暴れを見た後だとなにも言えねえが。

現状確認とこれからの行動のすり合わせを緑谷とする。

「それじゃあ冴汰君を先生達によろしくね、砂藤君」

「ああ、わかったぜ。でもお前はどうぞすんだ?」

「僕はまだ残ったヴィランを倒しに行くよ。怪我なら大丈夫、まだまだ動けるから！」

緑谷はサムズアップと笑顔で答える。俺も俺の出来る限りのことをするぜ。

そして緑谷は俺らに背を向けて森の奥へと向かおうとする。

「み、みどりや！」

「……ん？どうしたの冴汰君？」

「その……ありがとう。救ってくれて……」

緑谷を呼び止めた冴汰は恥ずかしそうにお礼を言っていた。

「どういたしまして！ 冴汰君、君のその個性が今必要なんだ。わかるよね？君のチカラでみんなを救って欲しいんだ」

「うん……でも僕なんかに出来るかな……」

緑谷は笑顔で答えるとしゃがみこんで冴汰の頭を撫でて言葉を続けた。

「出来るよ。なんかじゃない、君にしか出来ないことなんだ！大丈夫、砂藤君もいる、みんなが力を貸してくれる。頑張って冴汰君！」

「おう、任せろ冴汰！」

「………わかった。頑張るよ！」

冴汰はその小さな身体で強く返事をする。緑谷は満足げに頷いて立ち上がり、森へと駆け出した。

俺が洗汰を守る、そう心の中で決意してその背を見送った。

「がんばれ！がんばれー！！」

洗汰が緑谷に向かって精一杯のエールを送る。緑谷は後ろ手で手を降りながらそれに答えたあと一気に加速して、すぐに姿が見えなくなった。

「ねえ、お菓子マン。僕もマッチョになれば、みどりやみたいなのヒーローになれるかな？」

洗汰は俺の顔を見上げながら少しだけ不安げに聞いてきた。

鍛え上げたところで緑谷みたいな超人になれるかと言われると、それは無理だ。でも今聞かれてるのはそういうことじゃない。そんな風に答えるのは無粋だな。

「ああ、成れるぜ。鍛えた筋肉と誰かを救いたいって気持ちがあれば……お前は立派なヒーローになれる。筋肉の可能性は無敵だからな！」

洗汰にわかってもらえるように、そして自分に言い聞かせるように、俺はそう答えた。

「そっかあ……僕、がんばる！」

「おお、がんばろうな……じゃあまずはここのみんなを助けようぜ！二人で！」

「うん！いこう、お菓子マン！」

二人して頷いた後、俺は洗汰を肩に乗せて施設に向けて走り出した。

—— 成ろうぜ、ヒーロー。

—— 砂藤 side out ——

雄英高校 VS 開闢行動隊 [前編]

復活改人脳無と偽筋マスクュラーを僕の本物の筋肉のチカラで撃破した。

でも思った以上に時間をとられてしまった……ヴィランと遭遇してしまった他の皆は大丈夫なのだろうか。

——時は出久がマスクュラーと遭遇した頃に遡る。

—— 相澤 side in ——

施設をブラドに任せ、俺は道を逸れて暗い雑木林の中を走っていた。先輩達の待機していた広場ではなく、肝試しのコースとなっていた方へショートカットしながら向かう。



あつちは先輩方に先ずは任せる。俺は生徒の保護を急がねえと……  
すると正面に複数の人影が見えてきた。あれは……

「相澤先生!!」

「無事だったかお前ら……いや、それでもねえか……」

最初に声を上げたのは青山だ。そして俺は生徒達の顔を見回していく。

青山、八百万、B組の小大に、骨抜、泡瀬……それに八百万と泡瀬が背負ってるガスマスクを着けた二人の生徒は……

「おい！大丈夫か、葉隠！耳郎！」

「へんなガスみたいなのが出て来て、それで二人が……」

「そうか……大変なことになってやがるな……よく頑張ったお前ら、あつちに行けばすぐに施設に着く。そしたら——」

「……せんせえ……?」

八百万達に指示を出していく俺の言葉を止めたのは弱々しい囁き声だった。

「葉隠！大丈夫か!?!」

「意識が戻りましたのね！よかった……!」

「……あいざわせんせえ……焦った顔、はじめてみた……」

葉隠は弱々しく眩きながらも小さく笑って俺の顔を見る。

更に泡瀬に背負われていた耳郎が大きく咳き込み、その目を見開いた。

「あれ…相澤先生…ここは…？」

「耳郎！大丈夫か!!」

「せんせ声でつか…うける…」

「えっ…なにこの状況…？」

困惑する耳郎と俺をおちよくる葉隠の声が胸にストンと落ちて、俺は心の中で安堵した。

意識はある。ならこのまま適切な治療が出来れば大丈夫だろう。最悪の事態を免れそうに本当に良かった…

「そんだけ話せりや上出来だ、今はお小言は言わねえよ。さあ全員、施設を目指せ。そこでブラドが待ってる、保護して貰うんだ」

「わかりましたわ！必ず皆を送り届けて見せます！」

「お前も避難するんだよ、八百万。まあ責任感が強いのは良いけどな。じゃあ任せたぞ！いけ！」

八百万に指示を出して、俺は生徒達に背を向け先を急ごうとする。

「先生！これ！ガスマスク！」

「おお？」

「拳藤と鉄哲が逃げ遅れた奴探すって言って奥に行つてる！頼みます!!」  
 「わかった、任せておけ」

泡瀬からガスマスクを投げ渡され、他の生徒の行方も教えられる。

生徒に教えられるとは……冷静さが足りてねえな。まずは生徒の保護だ。それからマンダレイに合流……出来たらいいか。

——頭を切り替えて優先順位をつけて行動を始める。そして俺は雑木林の奥へと走っていった。

—— 相澤 side out ——

—— 拳藤 side in ——

毒ガスの渦巻く森の中をそのガスの中心を目指して駆けていくアタシ達。アタシ達つてのはこのガスの元凶を叩きにいくと息巻いた鉄哲とそれに賛同した庄田、そして途中で合流した切島君だ。

なんでも切島君は緑谷君を追いかけて砂藤君と走ってたけど途中で振り切られて、道に迷いながらふらついてたらしい。ひとりでヴィランに遭遇したらどうするつもり

だったんだろう……

「ガスが更に濃くなってきた！近いぞ！……だよな拳藤？」

「ああ、それであつてはるはず！」

「じゃあ！頑張るぞ、皆！」

「応！！」

先を走る鉄哲の気合いに答える男子二人。アタシはその後ろに着きながらまだ見ぬヴィランの脅威について考えていた。

おそらくはガスを自在に操る個性……そしてかなり広範囲に放てる。でも接近に気がついたらどうなる？ガスを濃縮して暴風を生み出す？それともこのマスクでも耐えられない猛毒に変えてくるか？あまりいい予測は出来そうにない。

だったらやれることは不意をついての速攻。それしかない！

考えていると、鉄哲の走る速度が一段と上がり、雄叫びを上げながら拳を振りかぶっていた。

「いいいいいいいい——」

奇襲をかけなきやいけけないのになんで叫んでるのこのバカ！！

「———つたあつ?!?!」

ガスのモヤモヤの先に人影が見えたとき、バンツ！という銃声のような大きな音と

もに飛びかかっていた鉄哲が痛そうな声を出して仰け反った。

「鉄哲——！」

倒れた鉄哲を避けながら切島君が右側から回り込むようにヴィランに近づいていく。鉄哲を庇うより今はこのヴィランを打倒するほうが優先と判断したらしい。

「こいつを倒さないと鉄哲も助けられないし！」

「大丈夫だ！俺らなら耐えられるやつだぞ切島ア!!」

「コイツ固くなる奴か！——ならコイツはいけるだろ！」

「つつたあ!! シャー！耐えられる!!」

鉄哲は無事だった。鋼鉄の個性でどうやら耐えたらしい。そして二発目の弾丸が切島君へと放たれたがそれも耐えられたようで切島君が声を上げる。

鉄哲と切島君が陽動してくれた。ならアタシの役目はトドメの二撃目ってことだ！

ヴィランは後ろに下がってその姿がガスの中に紛れる。だが距離にして15メートル、アタシの拳の射程圏内だ。後ろに跳ねた直後なら避けられない。ここだ！

「絶招——歩法!!」

タイミングを見計らったアタシは、地を両足で踏み込み、右左の順に蹴り抜き、拳を突き出す。そして個性を発動させて拳を巨大化させた。

瞬間、拳の拡大に比例するように突進の勢いが爆発的に加速し、15メートルという

距離をあつという間に詰めていく。

絶招歩法の勢いは凄まじく、辺りのガスを吹き飛ばして？拳がヴィランに当たる前にその姿を見せていた。ヘルメットタイプのガスマスクを被った学生服の小柄な男が見える……

だがその姿が見えたのは、アタシの拳の先ではなく、そこから一步横にずれた位置だった。

突きが外れたアタシは、ヴィランから目を逸らさないまま、その横をすり抜けていく。「まさかあの位置から来るとはね！でもこれでサヨナラだ!!」

勝ち誇ったように笑いながらガスマスクの小柄なヴィランはその手に構えた拳銃でしっかりとアタシに狙いをつけている。

——アタシの視界いっぱい銃口が広がる。死が口を開けて待っていた。

——拳藤 side out ——

——麗日 side in ——

「二人ともカアイイね、麗日さんに蛙吹さん！」

無造作にまとめられた金髪の学生服の少女が私と梅雨ちゃんと相対あたいしながら笑う。その手には私の血の付いたナイフが握られていた。

奇襲!?!完全にやられた!でも左腕を軽く切られただけで深傷じゃない。戦える!

「梅雨ちゃん!援護して!!」

「わかったわ!」

梅雨ちゃんに軽く目配せをした後、少女に向けて走り出す。相手も只立っている訳もなく、口元に歪めた笑みを浮かべた後、その手に持つナイフを私に突き立てようと腕を伸ばしてきた。

刃物に対しては片足軸回転で相手の直線上から消えて、手首と首根っこを掴んで……

私はイメージ通りにナイフを避けて、少女の手首と首を掴む。

そして、ここで個性発動!

少女の身体が重さを失い、その感覚に少女は目を見開いていた。

最後に回転の勢いを殺さず、縦に変えて——真上にぶん投げる!!!

遠心力と腕力で振り回された少女は上空に射出され、身動きが取れなくなつた。そして空気抵抗を受けながらも、辺りの雑木林より高いところに着いたところで、個

性を解除する。

「そんだけ高いところから落ちれば動けなくなるでしょ!!」

うち上がった少女を見上げながら、五指を合わせて叫ぶ。これが私の必殺技フロートマーシヤルアーツだ。

『とりあえず高いところに浮かせればだいたいの敵は無力化できるよ』という波動先輩のアドバイスから考案した必殺技。これでなんとかなるといいけど…

「高いです。怖いです。危ないです。でも……大丈夫です!」

少女は落下しながらも、首もとの機器からコードの繋がった何かを投げる。そして木の大枝に括り着いたコードを伸ばしながら減速して着地しようとしていた。

私はその行動を見逃さず、少女の着地点に駆け出す。そして着地をとろうと隙だらけになった少女の足を払いながら首根っこを掴んで、地面へと叩きつけて馬乗りになった。

「捕まえた!」

「うう、痛いです……」

「すごいわ、お茶子ちゃん」

「梅雨ちゃん!ペロで拘束できる!?!」

気の抜けた声で私の下で蠢く少女を抑えながら、梅雨ちゃんへと指示を出す。



やった！ひとりでもヴィランを捕まえた！……少しは私もデクさんみたいに成れたかなあ。

なんとか山場を越えた。そう思った時だった。私に組敷かれた少女の纏う雰囲気が変わり、不思議な空気を生み出しはじめた。

「お茶子ちゃん、アナタ素敵……私と同じ匂いがする。　ねえ、好きな人がいますよね？」

「何を!？」

「その人みたくなりたいてって思ってますよね？　わかるんです、乙女だもん」

「つ、梅雨ちゃん！拘束を！」

心を読まれたかのように凶星をつかれた私は、慌てながら梅雨ちゃんへ再度指示を出す。既に私も梅雨ちゃんもその少女の不思議な空気に捕まっていた。

「好きな人と同じになりたいよね。当然だよ。同じもの身に付いたりしちゃうよね」

「黙って！」

「あはは、素直じゃない麗日さんカアイイねえ。　でもだんだんそれだけじゃ満足できなくなつてきちゃうよね——」

「黙つてつてば！」

その先を紡がせないように拘束する腕に力を込める。だが動揺は止まらない。

私の何がわかるのこの娘!? 確かに私はデクさんみたいになりたいて思ってる。でもこの感情がなんなのかまだわかってなかった。好きなのは間違いない。間違いないけど、それがどんな好きなのかわからない。憧憬なのか、親愛なのか、それとも……自分の中の感情が少女の言葉で揺さぶられているのがわかる。曖昧だった自分の想いが勝手に決められてしまったような感覚に陥る。

ダメだダメだ! この子のペースに吞まれてる!? 私は……私の心は……!

「——その人そのものになりたくなくなっちゃうよね。しかたないよね」

少女の最後の一言に、心がすつと落ち着いて動揺が消えた。

「違う……」

「えっ?」

「私は貴女とは違う。あの人に近づきたいと同じ様になりたいても思うけど、そのものになりたいなんて——思わない」

私の声が静かな周囲に響き渡る。

私はデクさんにはなれない。誰もデクさんみたいにはなれないだろう、それこそ爆豪君だつて無理だ。でも、それでも私は近づきたかつたんだ。

私の想いの答えがわかつた気がした。

「そっか……残念。恋バナ、したかったなあ」

少女は眩くと身体力が抜けていく。同時に梅雨ちゃんが舌を伸ばして彼女の身体を拘束していった。

——これでひとり確保。デクさんはどうしてるかな？ 爆豪君は大丈夫だろうか

…？

—— 麗日 side out ——

—— 爆豪 side in ——

「あー！もう面倒くせえ！まとめて吹き飛ばしてやらあつ!!」  
「やめろ爆豪！ガスと森に引火したらシャレになんねえぞ！」

掌を構えたところで、肩を掴まれ轟に止められる。

さつきから俺たちは襲撃を仕掛けてきたヴィラン連合の一員と対峙していた。刃物のように鋭く、木々のように枝分かれした歯を自在に伸ばしてくるヴィランの個性に

苦戦を強いられていた。

「さっきの腕を見たら?!もうひとりはやられちゃってんだ!タラタラやってたら俺らもその仲間入りだ!!」

「だからこそ冷静に対処するべきだろ…!」

「俺はすこぶる冷静だっつーの!」

俺の小爆破と轟の氷結で攪乱しながらヴィランの攻撃を避け続ける。

「うつとおおしいいいい!肉、肉、肉面みせろおお!!」

このヴィランと対敵したとき、奴は切り落としたであろう何者かの腕の前に跪いていた。あきらかに生徒の誰かがやられた証拠だ。危険度を最大に高め、マンダレイのテレパス後に速攻を仕掛けたが、そこから地形と状況を巧く使われて、攻めあぐねていた。手足を狙った細々とした攻撃も戦いにくさを増す要因になって、更に追い詰められる。

「倒すしかねえ!そいつ背負ってちや逃げ出すこともできねえだろ!」

「そんなことは判ってる…でも短絡的にやるな!」

「うつせえ!やつば爆破で歯あ諸とも飛ばし殺す!木い燃えても氷でソッコ消せ!」

「そういうところが短絡的なんだ!」

「くそがつ!!」

轟と言い合いながらも攻撃を避けていく。なにか反撃の手だてが必要だ。

くっそ、デクさえ居ればこんなやつソッコで片付けれんに……いや、デクはここにはいねえ。巻き込むわけにはいかないし、俺が突き放したんだ。来る筈もねえ！ だったら俺がやらねえと……！ 狙いは明らかに俺の無力化で、手足を狙ったそれは殺す気なんかなさそうだしな。

「だあああ!!ヤつてやるよくそ野郎!!」

吠えながら爆破を小さく放ち、ヤツへと飛び込んでいく。

——デクが居なくても、ひとりでもやる……そして俺がデクを救けんだ!!!

—— 爆豪 side out ——

—— 障子 side in ——

「ハア……ハア……」

俺は息を切らせながら草木の影に隠れながら膝をついていた。その手には壊れたフラッシュライトが握られている。

友との約束も果たせぬままか……なんとも不甲斐ない。

俺は肝試しの出発前の緑谷とのやりとりを思い出していた。

『障子君！常闇君とペアになったんだよね？ならそんな君に渡すものがあるんだ』

『ん？なんだ緑谷？』

『うふふ、LEDフラッシュライト〜』

『あまり似てないな……』

『……ごめん。と、まあ冗談はさておき！このライトを持って行って欲しいんだ』

『どういうことだ？』

『こういうことさ、くらえ！』

『うお！まぶし！』

『ハハハ、こんな感じで滅茶苦茶明るい！』

『…確かに眩しいくらい明るいけど、肝試しにこの明るさは興奮めなのでは？』

『これはね、常闇君の保険さ』

『常闇の？』

ダークシャドウ

『ああ、常闇君の黒影は闇の深さで強力になるって言ってたじゃない？だからこの暗闇の森の中でもし個性が暴走したら…手をつけられなくなるかもしれない』

『肝試しだぞ？そこまでの脅威があるとは思えないが』

『僕もそう思うけど、不意打ちで驚いてもしものことがあつたら大変だ。だからこそあくまで保険なんだけどね』

『ふむ…』

『だから障子君にお願いだ。常闇君にもしものことがあつたら、彼を導いてあげてほしい。彼の為に…』

『緑谷……』

『君にしか任せられないことなんだ。障子君』

『わかった。俺に任せておけ、常闇は必ず俺が導こう』

『ありがとう！頼んだよ!!』

『応とも!』

など言つたくせにこの体ていたらくか……

肝試しの最中にヴィランの奇襲を受け、複製の複製腕を切り落とされ、それを見た常闇が義憤と恐慌から黒影ダークシャドウを暴走させた。

ヴィランはその様子を見て逃げ出したが……暴走した黒影ダークシャドウを止めようと飛び出したところで吹き飛ばされてしまった。その際に緑谷から託されたライトは壊れて使えない物にならない。

暴走した黒影は音を発するものに無差別に襲いかかるモンスターと化してしまっ  
た。

すまん、緑谷。俺はしくじってしまった……

心の中で諦めかけたとき、俺の耳に常闇の声が聞こえてきた。

「ア、ア、ア、アアア！」

「ぐっ……静まれっ黒……影……！ 障子！聞こえるか!?俺は捨て置け……！他と合流し、  
俺を助けだせ……!!」

常闇は苦しみ跳きながらも、誰かを救えることを忘れていなかった。己が苦しんでる  
にも関わらず、それでも他と救えと。

その時俺の脳裏に友の姿が浮かぶ。困難でも、窮地でも、なんだろうと笑顔で叩き壊  
して全てを救う、最高の友の姿が。

なにをやっているんだ俺は……！ 初手でしくじった、ライトを失った。だからどうし  
たというんだ!! 緑谷は言った——常闇を導けと。常闇は祈った、誰かを救えと。

……ならば俺のすべきことは決まっている！諦めることなど何もないじゃないか!!

盟友との誓いを果たし、俺は友を救う……!



俺は複製腕の先に複製腕を伸ばし、更に伸ばし、伸ばし、伸ばし、伸ばしていった。その先には複製の口だ。

道具がなくとも、この身体と個性と……筋肉で！やってみせる!!

「こつちだ、黒影！」  
ダークシャドウ

「ソコカア!!」

俺は走りながら伸ばしきった腕の先から叫ぶ。それに反応した黒影が腕を振り下ろしてくるが、素早く複製を解除して躲していった。

そしてそのまま走って、腕を伸ばして、黒影を引き付けて……このまま火災現場に黒影を誘導していく。  
ダークシャドウ

待っている常闇！俺が必ずお前を救けてやるからな！

——闇夜の森、影の怪物を連れて光を目指して駆け抜けていく。

—— 障子 side out ——

—— 混乱と戦闘が巻き起こる森の中に響き渡る破壊の轟音。

—— その轟く音色がこの騒動の全てを一転させていく。

# 雄英高校 VS 開闢行動隊 「後編」

デクの巻き起こした破壊の轟音が闇夜の戦場に鳴り響く。その森に居るもの全てに届く。

そしてその音はすべての状況を転じさせていく！

—— 障子 side in ——

暴走した黒ダークシャドウ影に取り込まれた常闇を救うため、俺は自分を囮にして黒ダークシャドウ影を光の元へと誘導していた。

「こっちだ！」

「アッ、アッ！逃ガサンゾオ!!!」

複製腕を囮にして黒ダークシャドウ影の攻撃を躲して走り続けると、火災の光が遠目に見えてきた。

もうすぐ常闇を救うことができるだろう……あと一息だ！

そう思った瞬間だった。爆発にも似た、何かを砕いたような音が轟いた。

「何だ!?この音は?!」

俺は慌てて音のなった方向へと振り向く。だがその轟音以上に慌てる事態が直ぐに起こっていた。

「ソツチダナ!我が敵!!絶対に逃ガサンゾオ!!」

黒 ダークシャドウ 影も先程の轟音に反応してしまい、全速力でそちらへ向かっていたのだ。その方向は火災の光とは真逆で、これまでの誘導が水の泡になる。

何だその過剰反応は! まさか今の音を常闇が新たな脅威と感じて、黒 ダークシャドウ 影が更に暴走したのか!?あと少しだったというのに…!!

「ちよ、ちよつと待て!常闇い!黒影オオ!!そつちに行くなあー!!」

大声で叫びながら後を追うがまるでこちらに「反応を示さなくなっている。とにかく今は常闇を放っては置けない。見失う前に追わなくては!!」

——そして俺は黒 ダークシャドウ 影を追って森の中へと駆け出していく。

—— 障子 side out ——

ガスのヴィランを発見したアタシ達は戦闘を開始した。だが必殺の絶招歩法を躲され、眼前に銃口を突き付けられてしまいアタシは正に絶体絶命の状況に陥った。

その時、こんな状況の中でも思わず身をすくめる程の轟音が響いた。

「何!!?」

ガスマスクのヴィランが音に気をとられて振り向く。アタシはその隙に一步後ろに跳ねて距離をとった。

「ちい!死ねえ!!」

ヴィランは直ぐに振り向き直しアタシが離れたことに気がつく、再び銃を構えてその銃口から弾丸を放った。

だがその弾丸はアタシとヴィランの間に割り込んだ影に当たり、甲高い金属音を発<sup>た</sup>て弾かれる。

「ったあ〜!」

「鉄哲!」

飛び込んできていたのは鉄哲だった。弾丸が当たった場所を痛そうに擦っているが、

無事に見える。

「このっ！離せ!!」

「離すかよこの野郎っ!!」

言い争う声に気付きヴィランの方を向くと、切島君がヴィランを羽交い締めにして押さえ込んでいる。

「いけえ!!」

「おおおお!!フタエノキワミ掌打二連撃！アーーーー!!」

そこに走り込んできた庄田が一打二撃の必殺技をヴィランの頭、ヘルメット型のガスマスクへと叩き込んだ。

ヘルメットが衝撃で砕けて、さらに頭へと衝撃が伝播していく。身体は切島君が押さえられているため衝撃が逃げられず、首から上だけがグワンッと大きく揺れたあと、ガクリと下を向くように落ちた。

ヴィランが気を失ったと同時に、周囲に広がっていたガスが霧散して消え去った。

「ガス使いがガスマスクしてりや、そりゃ壊すわな」

「どうやら終わったようですね。通用して良かった……」

「切島、そいつ生きてつか？」

「あー、うん。死んでないっ！バッチリだ」

「やったな庄田！」

「いやいや、みんなのお陰ですよ」

「やっぱ緑谷に教わった。ヴィランは数で潰す戦法。正解だな！」

「おう！こつちの被害ゼロでやれたもんな！」

アタシが呆けてる間に男子三人はヴィランを拘束しながら談笑していた。

なんの役にも立てなかったなあ……鉄哲も庄田も、切島君も頑張つて結果を出したのに。アタシには何も……

「大丈夫か、拳藤？」

ひとり落ち込んでいたアタシに鉄哲が声をかけてくる。その額にはアタシを庇ったときに負つたであろう傷があり、そこから血が流れていた。

「う、うん。アタシは大丈夫。鉄哲こそ大丈夫？アタシを庇つたせいで怪我してんじやん……」

「お？マジだ！気付かなかつたわー。あの距離だと拳銃でも割れちまうのか。気を付けねえとな」

「あんた撃たれたんだよ？その個性じゃなきや死んでたかもしれないのに……アタシがミスったせいで」

自分で自分に嫌気が差して俯いてしまう。もつと上手くやれていれば鉄哲が怪我を

することもなかったのだから。

「あー、こんな個性だからこそだ。この個性だから俺は誰かを護る盾に成れる。この個性だから護るために躊躇わずにいられる。だからお前を護れた……俺はそれで満足だぜ？」

「そっか……凄いね鉄哲は。アタシは何にも出来なかったよ」

「はあ？そんなわけねえだろ。今回の一番頑張ったのはお前だ」

「えっ？」

鉄哲の思いがけない言葉にアタシは間拔けな声を出す。

「そもそもお前がこのガスの中心を見抜けなかったら、俺ら全員ここに来れてないんだぜ？」

「そりやそうだ。庄田はまだしも、俺と鉄哲のふたりじゃまず辿り着けなかったな」

「いやいや、僕もこんな状況でそこまで見抜けませんよ。いつも塾生の皆のことを考えて、まとめてくれてる拳藤さんだからこそ見抜けたんじゃないですかね」

「そんな、たまたま予測が当たってただけだし……！」

鉄哲だけでなく切島君や庄田までもアタシを評価してくれる。アタシはそんな意外な評価にタジタジになってしまう。

「それにあいつを見付けてからも、お前が突進でガスを吹き飛ばしてくれなかったら、た



ぶん見失つてたぜ」

「ああ、なんかガスがやたらと濃くなって視界最悪だったし」

「あれは見事な連携と言えるのではないだろうか」

「いやでもヴィランを倒したのは三人の力だったし——」「あーもう、うつせ!」——  
ひゃん!」

三人の言つてることが認められずにうじうじと言い訳をしていると、突然鉄哲がアタシの両肩をガツチリ掴んできた。そのせいで変な声をあげることになるアタシ、カッコ悪い。

「四人とも頑張つて、ヴィランを倒せた!そんでガスで苦しんでた皆を助けられた!それでいいじゃねえか、なあ?」

「う、うん。わかった」

「よし!オツケー!しゃあ、こいつ連れて施設行くか!」

アタシを強引に納得させにきた鉄哲の圧力に思わず首を縦に振ってしまった。そして鉄哲たちはヴィランを担いで歩き出していく。

なんか鉄哲にすごい力技で納得させられちゃったな。まあ、うじうじと悩んでももしようがないし、切り替えてこうか。

「ちよつと鉄哲!そつち逆方向だよ、施設はあつちだつての!」



痛みを気を取られている間に、少女は身体を捻るように私を弾き飛ばして抜け出す。「逃がさないわ!」

「梅雨ちゃん! 梅雨ちゃんも血い流そ?」

梅雨ちゃんがすぐに舌を伸ばして捕らえようとするが、少女は舌をナイフで切りつけて避け、そしてコードのついた注射器を梅雨ちゃんに投げつけた。

梅雨ちゃんは舌を引き戻しつつ、左手で注射器を防ごうとするが、鋭い針が腕に突き刺さる。

「チウチウ、梅雨ちゃんカアイイねえ。血が出たらもつともーつとカアイくなるよね」

少女は追撃をかけるため、梅雨ちゃんとの距離を詰めようとしていた。

「いかせない!!」

私は右足で大きく地面を踏み込み少女へと跳ねる。そして首もとを覆<sup>おお</sup>う物々しい機械に手が届いた。

強引に引き寄せようと力を込めるが、手に伝わってきたのはすり抜けるような感覚だった。

「ソレ、可愛くないし邪魔だから麗日さんにあげるね」

目の前に立つ少女は機械を脱ぎ捨て身軽になって抜け出していた。軽口を叩きながら少女はヒラヒラと離れていく。

「麗日さん、思ったより強かったし今日は帰るね。バイバイ」

少女はそう言い残し、軽くなった身体で暗闇の森の中に消えていく。

「逃がさない！」

「待ってお茶子ちゃん、危険よ。どんな個性を持っているかもわからないわ」

「……っ！ そうだね。梅雨ちゃん怪我は大丈夫？」

「そんなに深い傷じゃないわ。お茶子ちゃんこそ大丈夫かしら？ 刺されてたんじゃ……」

「大丈夫だよ、痛むけど動けないほどじゃない」

お互いの状態を確認して周囲を警戒するが、少女の気配は既がない。

その変わりに離れたところから別の声と何かを砕いた雑音のような音が聞こえてきた。

「ア、ア、ア アアア!!」

「生まれ……! ダークシャドウ! 黒影オー……!!」

私と梅雨ちゃんは互いに顔を見合わせた。

「今のは……」

「障子ちゃんと……! ダークシャドウ 黒影 っことは常闇ちゃん？」

「確かめよう！」

「そうね、障子ちゃん達が危ないかもしれないもの……」  
 慌てた障子君の声。激しい破壊の音。いったいななにが起きてるの……？

——私と梅雨ちゃんは周囲を警戒しつつ、ゆっくりとその後を追う。

——麗日 side out ——

——爆豪 side in ——

俺と轟、刃のヴィランとの戦闘は未だに続いていた。先程響き渡った轟音で一瞬両者の動きが止まったが、この硬直状態は解消されなかった。

「ガスが消えた！おい、轟！一気に決めんぞ!!」

「まだ森に火が着くじゃねえか!?!それに視界が潰れたら不意打ちでやられちまうぞ!」

「俺が全力でブツ飛ばすから、森をやツごと一気に凍らせろ！反撃できねえように一撃で決めるっ!!」

「……っ！やるしかねえか……！」

俺の言葉にどうやら轟も覚悟を決めたらしい。

小爆破で小刻みに動いて裂けた刃を避けながら気を見計らう。

やることはシンプルだ。ヤツの刃が大量に伸びきった瞬間に懐に飛び込んで、打ち上げるようにブツ飛ばすっ！刃が縮んでる間がヤツの最大の隙だ。再度伸ばしてきたらまとめて爆破すりゃ問題ねえ！

「もう我慢出来ないいいいい！肉面見せるオオおお!!」

俺の動きに翻弄されていたヤツがついに痺れを切らして、今までとは比べ物にならない程の量の刃を伸ばしてきた。

「そいつを待ってたぜ!!」

爆破で加速し、身体を振り、刃と刃隙間に身体を振じ込ませるように前進していく。無数の刃が髪や頬を掠めるが、どれひとつ刺さることなく完璧に避けきった。

来た！このタイミングだ!!

地面等に突き刺さった刃が引き戻されていく。俺はそれに合わせて突き進もうとしたその時だった。ヤツの背後の雑木林が激しく吹き飛んで、大きな黒い影のようなものが現れた。

「何処トコロダアアアア!!」

影の化け物は叫びながら此方に向かって木々をなぎ倒して進む。

なんだよあの化け物は!!? ここに来て敵の増援なんて笑えねえぞ!

「あれは僕の肉だ! 邪魔をするなああああ!!」

ヴィランは俺たちに背を向けて影の化け物に向かって枝分かれした刃を伸ばして、その腕を貫いていった。だが貫いただけで、化け物の進行はまるで止まらない。

「退ケエ! 三下ガアアア!!」

刃が突き刺さることも厭わず、化け物はその巨大な腕を伸ばしてヴィランを薙ぎ払う。バキバキと木々が砕けていく中、それに巻き込まれる形でヴィランは抵抗することすらかなわずボロボロに成りながら吹き飛ばされていった。

「暴レ足リンゾオオオ!!」

「うおお!! とまれエ!! 黒影ー!!」

化け物が再び歩を進めようと此方に振り向いた。だがその後ろの方から聞き覚えのある声が聞き覚えのある名前を呼んでいた。

「この声…障子か!? 黒影 影 っことはこれが常闇だと…!?」

俺の後ろで轟が驚いたような声をあげる。そして化け物は少しずつ加速しながら俺たちに迫ってきていた。

あ? 常闇? 黒影…? つーことはこのバカでけえ化け物は鳥頭のクソ影か? ……ん

だよ、味方か。ならやることはひとつだな。

「我方路ヲ阻ムトハ愚ナ!!——」

化け物の巨腕が俺に向かって伸びる。だが俺は身動きひとつすることなく、掌を軽く合わせて棒立ちでいた。

「閃光弾」

「——ひゃん!」

掌から強烈な光を放つと荒れ狂うように暴れていたクソ影は甲高い声をあげて鳥頭の中にシュルリと収まった。

あんなに無敵じみた強さしてんのにこれだからな……つくづくこいつと俺の相性が残念だぜ。

「ぐっ……助かった。礼を言う……」

「……おう」

「大丈夫か常闇!」

膝を着きながら息を切らす鳥頭に適当に返事をして、その後から来たタコの障子の元へと歩く。鳥頭には轟が駆け寄っていたから問題ないだろう。

てかあいつB組のやつその場に置いていきやがった……!

まあいい、暴走してたっぽい鳥頭に話を聞くよりタコに話を聞いたほうが正確な情報



が手にはいんだろ。長いことヴィランと戦ってたから他所の状況が知りてえ。

「おいタコ！なにやってたんだよ……」

「ハアハア……爆豪か、助かったぞ常闇を止めてくれて。俺たちは口から刃を出すヴィランに襲われてな、それで常闇の個性が暴走した。火災現場に誘導しようとしてたんだが、先の轟音に黒影が釣られてしまつて……ここまでできてしまつたわけだ」

「ちっ！お前も大して情報持つてねえか……てかそのヴィランならついさっきクソ影が撥ね飛ばしたぞ」

「何!!……厄介な敵だったから結果オーライということか」

「そーなるわな。しっかし個性の暴走とかガキじゃねえんだぞ……バカが……」

思つたより情報がなかったことと、不甲斐ない鳥頭にイラつき悪態をつくが、早急な脅威が無くなったと考えると微妙な気分になる。

俺が手こずるヴィランを瞬殺……あの個性はやべえ。体育祭の時にデクが条件次第じゃ無敵に近いつつたのも納得できる。クソが。

てかデクはどうしてるんだ？さっきのバカでけえ破壊音は間違いなくデクが発信源な筈だが、その後の動向が読めねえ。クソカス連合のヴィランどもを片付けて回つてるとは思うが……

「おい、デクが何やってるか知ってつか？」

「緑谷か……すまない。俺も自分達のことです手一杯で何も知らない」

「だと思っただぜ……」

「……なんで聞いたんだ……」

「うっせえ！」

とりあえずタコに聞いても返事は予想通り。こうなったのもあのヴィランと……鳥頭のせいだな。間違いねえ。

「おい！鳥頭あ!!てめえは——あ?」

この苛立ちをぶつけようと鳥頭の方へと振り返り、そこで言葉が途切れる。

なんの気配も異変もなかった筈だ。なのに、いつの間に、なんでこんなことが起きやがる!?

「誰だてめえ……あいつらをどうした?」

「嫌な顔してるなあ。俺の名はコンプレス、二人なら俺のマジックで貫つちやつたよ」

コンプレスと名乗る仮面を着けた手品師マジシャンのような男は、愉しげな声で語る。その手には二つのビー玉のようなものが光輝いていた。

十中八九ヴィラン連合の手先だ。個性はなんだ?なんで音もなく二人が消えたんだ?ワープ系の個性……いや、それならヤツがこの場に居続けるのはおかしい。

そもそも目的はなんだ？「貰った」なんて言うからには二人は殺されてないだろう。殺害じゃなく別の目的が……？それが奴等の襲撃の目的なのか？

俺の拉致が目的……ならなんで俺は今無事なんだ？あれほど気配もなく二人をやれたならその前に俺を消せただろうに。

思考を巡らせながらいつでも爆破を食らわせられるように掌をヴィランに構えていると、再びヴィランが話した。

「なんで？って顔してるな」

「はっ！聞いたら教えてくれんのかよ」

「いいよ、爆豪君には特別サービスで教えてあげよう」

コンプレスは大したことでもないように軽い口調で俺に告げる。

なに考えてやがるこの野郎……！それすら目的の内か？それとも時間稼ぎか？わからねえ……兎に角情報を引き出させるしかねえ。

「この二人を貰ったのは簡単な理由さ。轟焦凍を連れ帰ることが俺たちの第一目標だったから。意外にあっさりいって安心してるよ。ああ、もうひとりの彼？良い個性だったからさ。ムーンフィッシュ……歯刃の男な。あれでも死刑判決を控訴棄却されるような生粋の殺人鬼だったんだが。それをああも一方的に蹂躪できる暴力性、彼も良いと思って……貰っちゃった」

コンプレスは身ぶり手振りを加えながら、自らのショータイムと言わんばかりに悠々と語る。

「ふざけるなあ！二人を返せ!!」

俺の後ろで話を聞いていた障子が憤りを隠さずコンプレスに向かって飛び出す。対するコンプレスは逃げることもなく、掌を障子に向けた。

早まりやがって……!あれが個性の発動方法……!あれはやべえ!

「させつかよっ!!」

俺は構えていた掌から大規模な爆破を放つ。爆炎が広がりコンプレスの身体を包む——と思われたが、俺の爆破はまるで切り取られたかのようにコンプレスの目の前から消えた。

余裕のコンプレス、その掌には新たな玉が握られていた。

「おお、怖い怖い。若さってのは」

コンプレスは怖いなどかけらも思っただけな口調で、先程の手に入れた玉を指で弾いて此方に飛ばした。

直後、巻き散らかしたかのような爆炎が俺の目の前に広がる。

「危ない!爆豪!!」

俺の前に走り込んでいた障子が踵を返して、俺の盾になるように爆炎をその背に受け

た。至近距離での爆破を一身に食らった障子はゆっくりと膝を着くようにしてから、うつ伏せに倒れる。その呼吸は弱々しく、すぐに立ち上がれるような様子ではなかった。

「まだ話の途中だったのに割り込むから……さて、続きだ。俺たちの目標ってのはもうひとつ有ってさ。爆豪君、君のスカウトだ」

「……はあ？スカウトだあ……？」

「そ。君さ、本当はもつと荒々しくて、暴力的な人間だろ？ヒーローとか学校とか、もつと言うと社会とか……そういう枠組みに囚われてて息苦しいと感じたこと、あるだろ？俺らはそんな柵しがらみから抜け出したいと思って活動してるんだよ。そこでだ、君も一緒に俺たちの側へ来ないかい？——爆豪勝己君？」

コンプレスは長々と高説を垂れるように語っていく。そしてある程度話し一区切りを着けたとき、掌を此方に向けて名前を呼んできた。

ヤバイと感じた俺は咄嗟に爆破まで使って後ろに跳び跳ねる。先程まで俺が立っていた地面がくり貫かれたように半円状に無くなっていた。

こいつ……指定した場所を切り取る個性か？いや、さっきの爆破の広がり方から見て、圧縮と解放って感じだな。視界を潰せば対応はできる筈だ。

「てめえ！」

俺は爆破でコンプレスをブツ飛ばす。爆炎が晴れたあと、そこにコンプレスはいなかった。

「あれまあ、交渉は決裂かな？」

「人を強引に捕まえようとしてなにが交渉だ！」

「おいおい、こつちのタネまでバレてらあ。君はあくまでついだったし、まあいいか。ヒーロー候補生、しかもトップクラスと戦ってなんかいられるかよ」

コンプレスはいつの間にか木の上に立っており、此方を見下しながら笑っていた。

「開關行動隊！目標達成だ!! 短い間だったがこれにて幕引き!! 予定通りこの通信後5分以内に回収地点へ向かえ！」

コンプレスは耳元に手を当ててどこかに通信をするような仕草をとり、わざわざ俺にも聞こえるように叫んだ。

「幕引きだあ？ふざけてんじゃねえよ！逃がすと思ってるのか!!」

「逃げれるさ、俺は逃げ足と欺くことだけが取り柄でな！それとも爆豪君、君も一緒に来るかい？」

「てめえ……」

真剣味のない声色でコンプレスは嘲る。完全に嘗めきられている証拠だった。

この野郎……ぜってえぶつ殺す。だがどうする…？ 口振りから俺を振り切るの  
容易と考えるべき。この場で仕掛けて潰し切れるか？ ここには倒れた障子とB組  
のやつもいる、派手な立ち回りは敵しい。こいつらの保護を優先するか…いや、それ  
じゃ轟と常闇をむざむざと敵に渡すことになっちゃう。

どうする、どうするべきだ？ こんな時にデクなら……くそつ……だからデクは来ねえ。  
この場にいるのはデクじゃなくて俺だ。俺だけなんだ。

だったら俺がやるしかねえだろ……全員を救うために俺がとるべき行動は。

デク……俺は

爆豪 side out

## 出久（デク）と勝己（かっちゃん）

悪意と敵対する雄英一同、多くの戦闘が起こっていたが、皆勝利を掴みとり、この襲撃も終わりに近づいていた。

—— 出久がマスキュラーを撃破した少しあとに時は戻る。

マスキュラーと脳無を打ち倒し、僕は暗闇の森の中を火災の明かりを横目に走る。

かっちゃんのいる場所を目指し肝試しのコースを駆け抜けていたが、その中継ポイントで虎さんが何者かと戦闘している姿を見つけた。

虎さんは傷付いたラグドールを背負って、背から多数の刃物や凶器を生やしたヴィランと片腕だけで戦っていた。そのヴィランの顔を見ると目元は金属のゴーグルのようなもので覆われていて、その頭頂は脳ミソが剥き出しになっている。間違いなくヴィラン連合の脳無だ。

「虎さん！ 援護しますっ！」



僕は両者の間に割って入り、虎さんに振りかかっていたチェインソーの側面を叩き割る。

急いでるつてのにまだ脳無がいたのか！虎さんも苦戦してるしここは僕が片付けて、ラグドールを助けてもらおうのがいいだろう。

「オールライト……！」

「虎さん！ラグドールを連れて撤退してください。こいつは僕がやります！」

「お前その傷でやるつもりか!? 我がやるからラグドールを連れて下がるのだ！」

「見た目ほど深くないんで大丈夫です！それに虎さんの『軟体』より僕の方が相性が——いいっ！」

虎さんと話しながらも襲い来る脳無の武器を拳で弾き、叩き折っていく。

「それに敵の狙いはラグドールじゃないんですか!?!ここにピンポイントでこんなヤツが現れてるんだから！」

「くっ……！確かにそうかも知れぬが」

「なら早く！僕の本領を知ってるでしょ！ラグドールがいたら巻き込んでしまおう！あとイレイザーヘッドを呼んできてもらえると助かりますっ！」

「ぐぬう……！わかった！すぐに戻るっ！それまで持ち堪えてくれ、オールライトッ！」

「了解ッ!!」

話し合いが済むと虎さんはラグドールを連れて全速力で撤退していく。流石はプロ、状況判断と行動が早い。

僕がそれだけ信頼されてるってことかな？ でも僕もかっちゃんの元へと急いでるんだ！ それにああは言ったけど、血を流しすぎてる…だから相澤先生を待つつもりはない…！多少の怪我は覚悟して——一気に片付けてやる！

「ネホヒヤン！」

「くそつ…こんなことなら籠ガントレット手でも持つてくるんだつたなつ！」

脳無の8本の腕から無数の刃が角度を変えて次々と襲い来る。チェインソー、ドリル、ハンマー、凶器のオンパレードだ。僕はそれらを根元から折つたり、武器の生えた腕を弾いたりして捌いていく。

無い物ねだりしても仕方ない。僕にあるのはこの身体のみ、だが鍛え上げた筋肉は最強の矛になるんだ！唸れ僕の上腕筋群！ 刃となれ、尺側手根伸筋ツ!! 必殺——

「——カロライナ・スマッシュユ!!」

僕の手刀が脳無のチェインソーを真つ二つに叩き切り、そのまま別の腕をへし折る。だが脳無は腕を背中に引つ込めると、また新たな武器と無傷の腕を生やして襲いかかってくる。

再生持ちかよ！脳無の基本個性なのか!?!でもそれ以外はそこまで脅威がないと見た。

無限に剣が出せるわけでもないだろう？なら品切れを起こすまで叩き折るまでだ!!

「うおおおおお!!!」

「ネホヒヤヤヤンツ!!!」

僕の高速のラッシュが脳無の腕と刃を折り続け、脳無も負けじと腕と刃を生成し続ける。

数分の時が経つ。幾度なく衝突を続けていき、僕の身体は切り傷が増え更に血塗れちまみになつてた。だが脳無も段々と機能を落としていき、8本あった腕は今は普通の人と同じく2本しかでなくなつてた。

「これで終わりだっ！コロラド・スマッシュ!!!」

互いに突進するチェインソーを構えた脳無とステゴロの僕。僕は脳無の胴体を狙つた回し蹴りを放つ。しかしその蹴りは空振りに終わった。

これまで猪突猛進に攻撃してきた脳無が急に挙動を停止してチェインソーを身体に収め、そして踵を返して僕に背を向けて走り出したのだ。

「えっ?!なんだよ急に……まさか……?!」

呆気にとられた僕だが、すぐに考えを巡らせひとつの結論に至る。

撤退してるのか……! ってことは作戦の目的が達成された……? つまりそれは——

かつちゃんが確保されたってこと!!?

あのかつちゃんがあつさりヴィランに捕らわれるとは思えないけど、こいつの行動はその証拠に他ならない。

今なら脳無を倒せる……でも連合の集合地点が前世と同じとは限らない。チカラをだいぶ使ってしまったがまだ100%二発分くらいは残ってるから……こいつの後を追跡して行った方がいい。そこにかつちゃんもいる筈だからヴィランを一網打尽にして救出。よし、この作戦でいこう。

——— 今後の方針を固めた僕は、撤退する脳無の後ろから気配を消して追いかけていった。

——— 麗日 side in ———

私と梅雨ちゃんは木々の薙ぎ倒された森の中を進んでいく。さつき聞こえた障子君の声と常闇君とおぼしきものを追いかけていた。散発的になにか音が聞こえていたが今は静かになっている。

暫く進んでいくと梅雨ちゃんが私の袖を引っ張って話しかけてきた。

「お茶子ちゃん見て、あそこに誰か倒れてるわ」

「あれは……障子君!」

慌てて近寄ると、そこには爆発でも受けたかのような傷を負った障子君が倒れながら身動みじろいでいた。少し離れたところにはB組の生徒がひとり横たわっているのも見える。

警戒して少し辺りを見回すせば、ヴィランこそいないものの、地面は穴だらけだし、木々は激しく薙ぎ倒れているので、破壊の爪痕がこれでもかというくらいに残っていた。

「いったいここになにが起きたの…!」

暗闇の森を見つめる。その時、木々の隙間から遠くの空に見覚えのある光がチラリと見えた。あれは——

「障子ちゃん!大丈夫!」

梅雨の声ですぐに目の前の惨状に目が戻る。梅雨ちゃんが倒れた障子君を介抱していた。

「常闇と轟が……それに爆豪……」

「無理しないで障子ちゃん、今助けるわ」

「俺はいい……皆を……」

障子君は弱々しくこの場に居ない三人の名前を出す。なにがあつたのかはわからないが、なにかあつたのは間違いない。

私は爆豪君とデクさんの力になるって約束したんだ。だったらいいかないと。

「梅雨ちゃん、二人をお願い」

「お茶子ちゃん…?」

「私、いつてくる!」

心配そうに見上げてくる梅雨ちゃんに一言だけ声をかけて私は走り出した。さつき見えた光の方へと森の中を草木を掻き分けて進む。なんだか嫌な感じだ……

——夏の夜の生ぬるい空気を肌で感じながら私は走っていく。

—— 麗日 side out ——

—— 相澤 side in ——

青山たちを見送ってから暫く経つが、あれ以降生徒の姿は森の中には見えない。ほとんどの者が肝試しのコースを辿っていったのだろう。

鬱蒼とした草木を避けながら進んでいくと、誰かの話し声が聞こえてきた。

「Mr. コンプレスが早くも成功だつてよ！ 遅えつてんだよな！」

「脳無も戻したし、俺たちも早く回収地点にいこう。緑谷出久と遭いたくないからつて離れすぎた」

「慎重なのは悪くない！ ビビりすぎだつての!!」

「そうかもな」

会話を聞く感じ、二人か…ヴィラン連合の作戦は成功しただと？ 撤退の最中だつたみたいだな……ならこいつらを逃がすわけにはいかない。

身を潜めていた俺は一気に距離を詰める。身体が当たつて草木が乾いた音を発てる。と、こちらに気が付いて慌てた様子の二人に目掛けて捕縛布を伸ばす。マスクを被つた全身タイトの男を捕縛することが出来たが、もう一人の顔面継ぎ接ぎの男は掌から炎を出して布を燃やして回避した。

「トウワイス！ プロヒーローだ!!」

「茶毘、早く助けてくれ！ 俺はいいからさっさと逃げろ！」

「逃がさねえ……！」

トウワイスと呼ばれた拘束できた方のヴィランが仲間を逃がそうと叫ぶが、茶毘というヴィランは俺に向かって来た。そして掌を俺に向けて個性を発動させようとする。

「出ねえよ」

「何!!？」

茶毘を視線で射抜き俺の個性で相手の個性を消した。その事に動揺している隙に捕縛布で茶毘を拘束する。捕らえた二人を更に一纏めひとまとにするように捕縛布でくくりつけ、きつめの尋問の用意を整えた。

イカれた言動の多いトゥワイスとか言う方はとりあえず無視だ。茶毘のほうにいろいろ聞くとしよう。

「さて、どこに逃げようとしていた？ 人数・配置・目的を言え」

「やっぱ強いなプロヒーローは。だからって答えるだけでも——」「時間が惜しい」——ぐあっ！」

「おいやめろつての！それでもヒーローか!! そいつならいくらやつてもいいぞー！」

「次は左だ、早く答えろ」

茶毘の右肩を蹴り潰しながら怒気を強める。横やりを入れるトゥワイスの言動は、予想通りあべこべのことを繰り返す訳のわからんものだった。

「痛えな…もう手遅れだぜプロヒーロー。既に目的は——があっ!!」

「だからそれを早く答えろつて言ってるんだ。足までかかると護送が面倒だ」

「そろそろ限界だ。トゥワイス、逃げられそうか？」

「無理に決まってるんだろ！ なんとかなる！諦めんな！」



「質問に答えろっ!」

左を砕いた後も茶毘は質問に答える素振りはなく、トウワイスと謎の会話を始めた。俺は靴の底で茶毘の顔面を思い切り蹴り抜く。すると茶毘の顔面：というより身体が泥のように弾けて消えてしまった。

なにが起きた? 炎の個性じゃなかったか? いや、さっきの会話から察するにこれはこいつの個性じゃない……はあ、トウワイスの方に聞いてみるしかねえのか。

「おい、これはなんだ?」

「言うわけねえだろ! 教えてやってもいいいぜ、逃がしてくれるならな!」  
「よく回るわりに役に立たない口だな……潰すぞ」

トウワイスの顎に手をかけながら眼力と言葉で脅してみる。意外にもこの行為はトウワイスに対して効果があつた。

「おいやめろ! マスクから手を離せ!! 触るんじゃねえ!」

「邪魔そうなマスクだな。こいつが無ければお前の口も素直になりそうだ」

「やめろつての!! やめてくれ!」

「ようやく意見が統一したなっ!!」

俺はトウワイスの覆面のようなマスクを、顎の下から手を突っ込んで一息に引き剥がした。マスクの下には無精髭の目付きの悪い男の顔があり、その額には大きな縫い跡

が目立つ。

「ああああ!! 裂ける……! 割れる! 俺が別れちまう!! 分裂が……分裂するう! うわあああああ!!」

「——やってみろ」

「あ……?」

俺は個性を消すためにトウワイスを目線いぬで射抜く。トウワイスは不思議そうに周囲を見渡した後に、俺の顔をじつと見つめていた。

「増えない……? 包んでないのに? ……フフフ。ハツハツハ——!! やったあ!!! 俺は——俺は俺だったんだ! やった、やった、やった——!!! 俺が俺だった!」

「……おい」

「あんた何したんだ? まあいいや! 俺は俺だったんだよ! ハハハ! 最高だあ!」

「そりや良かった。なら俺の質問に答えろ。お前らの目的はなんだ!!」

「目的? ……目的!! 俺が俺である証明だよ!! 叶った! 叶ったあああ!! それ俺の目的! 他のことなんて知らねえ! やったああ——「もういい!」——あがつ! ……」

こいつからはなにも引き出せないと判断した俺は、顎目掛けて蹴りを入れる。今度  
はしっかりと足に衝撃が伝わり、トウワイスは狂った笑顔のまま気を失った。

「イカれ野郎が……」

結局なにも判らず終いか……しかもこいつらに時間をかけすぎた。周囲に響いてた散発的な戦闘の音は既になく、静けさに満ちた森が燃え上がっているだけだ。

——俺は全員無事でいてくれと祈るしかなかった。

—— 相澤     s i d e   o u t     ——

—— D a r k     s i d e     i n     ——

宿泊施設から離れた森の中、開闢行動隊の回収地点にひとり残っていた茶毘が、他のメンバーの帰りを待っていた。

「ここは火事とガスで見えにくい筈だったんだが、ガスが晴れちまつてる。トウワイも俺の分身と出ていってから戻って来ねえ……何人やられたんだ……？」

茶毘は現状を確認するように指折り人数を数えながら独り言を呟っていた。

Mr. コンプレスから作戦成功の通信があつてから3分は経過している。そのコンプレス自身もまだ戻らない。茶毘が思案を巡らせていた時、草影一人の人物が飛び出してくる。

「ついたー。あれ？私が一番乗りですか？仁くんは？」

「トガか。お前以外誰も戻つてきてねえ……トウワイスもだ」

「そーですか」

「お前は何人分採つてこれたんだ？……ああ？というかあの変な機械は？」

「捕まりそうだったんで置いてきました！なのでゼロ人でーす！」

「おいおい、最低でも三人は採つてくる筈だったろ」

「お茶子ちゃんが思ったより強くてえ……ああ、お友達になりたかつたのになあ」

「……」

あまりにもマイペースなトガに茶毘は言葉を失う。だがあくまでもトガの任務はサブ。戻つて来たのだからこれ以上責めるのも面倒なのでなにも言わなかった。

そして次に人が来たのはその2分後……つまり回収時刻になつた時だった。黒いモヤモヤがその場に出現する。

「お迎えに上がりましたよ皆さん……つてあれ!?なんで二人しか居ないんですか!?!」

現れたのは回収係りの黒霧だ。しかし作戦成功の知らせを受けたのにコンプレスが

いないことに兎に角驚いていた。

「全然戻って来ねえんだよ。お前こそスピナーとマグ姉は？回収地点から遠いからって先に集めて来るんじゃないかったのか？」

「二人は居なかつたんですよ……恐らくヒーローどもに捕らえられたかと」

「そうか……しかしコンプレスが居ないと——「長らくお待たせ致しましたっ  
てか？ 悪い、遅くなった」——お前なあ……ああ、やるじゃないか」

作戦の失敗を茶毘が懸念したその時、木の陰からコンプレスがひよつこりと顔を出してきた。

茶毘はコンプレスの成果をみると小言もいう気も無くなり、不敵な笑みを浮かべる。黒霧も「ほお……」と感嘆の声を漏らしていた。

「ネホヒャン！ネホヒャン！」

「お、帰ってきたか。俺の脳無……ってなんでラグドールを持ってきてないんだ？失敗したのか？」

「こちらは上手いかなかつたようですね……」

元気な奇声を上げながら脳無も回収地点へと戻ってきたが、当初の目標であったサーチの個性“ラグドール”を連れ帰っていなかったことに茶毘も黒霧も落胆する。

「あとは——」

残りのメンバーの名を上げようとしたその時だった。

「ネホヒヤツ!!!」

「——何だ!?!?!」

突如上空から降ってきた何かに脳無が潰され、辺りに突風が巻き起こる。混乱する行動隊の面々だが、その正体はすぐにわかった。

「そこまでだ………ヴィラン連合!!」

「緑谷……出久っ……!!?」

「くそ！脳無を追けて来やがったのか!!」

出久の急襲に動揺する黒霧と茶毘。言葉こそ出ないがコンプレクスも同じ気持ちだったであろう。この事態を回避するために様々な手を打ったというのに、全くの無意味だったと実感させられる。

だが若干一名………トガだけは別の反応を見せていた。

「緑谷、出久くん？出久くん！出久くうん！カツコいい！血塗れでボロボロで……カツコいいよおおお！出久くうんっ!!」

「はあ!?!」

黒霧も茶毘も、奇襲をかけた出久でさえもトガの意味不明な言動に呆気にとられていた。トガは衝動のまま動きだし、出久向かってナイフを片手に突撃する。

「トガです！出久くんっ!!もつと、もおつと血い流した方が絶対カッコいいよ!だから刻むね♥ ねっ♥」

「ちよっ?!危っなっ!」

出久はトガのナイフの刺突を半回転して躲し、身体が通りすぎようとしたところで、首に腕を回して絞める。

「——アツツ♥ツ♥………」

出久の鍛え抜かれた太い腕がトガの首を裸締めして、頸動脈が圧迫されたことにより、トガは一瞬の嬌声を上げたあと意識を失う。出久はトガの意識が無くなったことを確認すると、真横の茂みに後ろ手でそつと投げ捨てた。

「ん、んっ!……さあ、次は誰だ?」

仕切り直すように咳払いをしたのち拳を構える出久。再び緊張が走る。そしてヴィラン連合の様子見る間も無く、素早く出久は拳を引いた。

「やっぱ纏めてブツ飛ばしてやる!100%!デトロイト——」

出久がフルパワーの拳を振りかぶり、自らの勝利を確信したその時だった。

——スマツシユが放たれるよりも早く、出久の身体を爆風が包み込んだ。

—— D a r k   s i d e   o u t ——

——スマツシユを放とうとした瞬間。身に覚えのある爆発が目の前に広がる。

僕は咄嗟に腕をクロスさせて防御体勢を取りながら後ろへと跳ねる。爆発の勢いに逆らわず流されたことでほとんどダメージを負うことなく身を守れた。

くっそ、なんだよいったいこの爆発は……!

爆煙を振り払うように腕を振るう。晴れた煙の先にヴィラン連合の姿が見えた。

逃げられてはいない、でもそこに見える光景に、僕は眼を疑いたくなる。

「嘘だ……なんで……? どうして……そんなところにいんだよ——かつちゃん!」

ヴィランたちと並び立つようにこちらを見据えるかつちゃん。嘘みたいな光景だった。



「今ので無傷とかマジでやってらんねえな。スーツもマントもねえつてのによお」

「何いってんだよかつちゃん？ 爆破する相手が間違ってるじゃないか…!」

「いいや？ 何も間違っちゃいねえ。俺はお前をブツ飛ばす為に爆破したんだよデク。

いや、緑谷出久!!」

かつちゃんはいつの日かの様に、掌にバチバチと爆破を滾らせながら僕を睨み付けていた。

何が起きてるんだ!? なんでかつちゃんがヴィランの側にいて、僕を攻撃してくる？

夢か、幻か?…幻覚を見せる的な個性か! いや待て、熱も風も本物っぽいし何より爆煙が手で払えたつてことは現実だろ。つてことは…かつちゃんは敵に洗脳されてるのか? だとしたら納得がいく。でもそんな個性のヤツが連合にいたか…? もっと他の可能性は…:…そうか、偽物だ! あの継ぎ接ぎの男、さつき僕が倒したヤツだ。つてことはあの泥のコピー人間みたいなのを作れる個性のヤツがいる筈!!

「お前…:かつちゃんの姿を模した偽物だな! 僕を騙そうたつて——」

「ちげえ、俺は本物だ。ついでに言えば幻覚でもないし、洗脳されてる訳でもねえ。俺は俺で、俺の意思でここにいる!」

「なっ…!?!」

「凶星つて顔してんな。おめえの考えることなんて手に取るようにわかんだよ、俺に

はな！」

「う、嘘だ！そんな筈ない!! 君がかっちゃんな訳がない!」

「おいおい、俺がわからねえのか? つい昨日72個目の約束したばかりじゃねえか? なあ親友?」

僕の考えを全て見透かし、僕ですら分からなかった約束の数まで当ててくる目の前の人物。最早かっちゃんでないことを証明するほうが難しかった。

「だとしたらなんで! なんでヴィランなんかと一緒にいるんだよかっちゃん!!」

「俺はやりたいうようにやりたくなつたんだ。理由なんてそれだけだ」

「なんだよそれ! ワケわかんないだろ!!」

「分かるだろ、お前には……俺が元よりそういうヤツだつたつてことが」

含みを持たせたかっちゃんの言い分。それは前世のかっちゃんが粗暴な性格のせいでヴィラン連合に拐われたことを意味していたのだろう。僕の頭はどんどん混乱していく。だがやるべきことは変わらない。

「だとしても……僕は……僕は君をヴィランの元へなんて行かせやしない! 力づくでも止めてやる!!」

「まあそうくると思ってたぜ……」

「やる気? ……かっちゃんが僕に勝てるでも?」

「勝てねえだろうな。でも戦う必要すらねえってことだよ」

言葉の意味はわからないが、かつちゃんは僕の眼を見て、僕の嫌いな顔でニヤリと笑っていた。前世で僕を虐めていた爆豪勝己のような笑顔で。

「こっちは轟と常闇を捕らえてる。おいお面、常闇出せ！」

「は、はあ？　まてまて俺の成果のひとつだぞ!?　そう簡単に渡せるか！」

「轟君だつて？　嘘だ！　お前らの目的はかつちゃんの筈だろ!？」

「ああ、お前は知らなかったんだっけな。こいつらの第一目標は轟の拉致。そこでオマケに俺の勧誘だったんだとよ」

かつちゃんは親しげに仮面のヴィランに話しかけながら、衝撃の情報を提示する。

いや、そんな筈はない……これは、ブラフだ！　僕に手を出させない為の嘘に違いない！

「騙されないぞ……！　僕はヴィランと一緒に君を倒す。これからの話はベッドで聞せてもらおう!!」

「早くしろお面！　ひとり残らず皆殺しにされてえのか!!　さっさと——寄越せ！」

「おい!!」

かつちゃんは仮面のヴィランのポケットからビー玉のような物を取り出すと僕に向けて投げつけてきた。僕はそれを警戒し、一步右に避けるとビー玉はスツと通り抜け

ていく。

「コンプレス！確認だ、あっちだけ『解除』しろ！」

「まったく…俺のシヨウウが台無しだぜ！」

コンプレスと呼ばれた仮面のヴィランが指を弾くと、僕の後ろから人が地面を転がったような音と咳き込む声が聞こえる。

「ゴホッ…ここは何処だ…？」

振り向くと、そこには眼を白黒させた常闇君が横たわっていた。

「常闇君…？マジか、かっちゃん…？」

「マジもマジだったの。動くなよ？お前が仕掛けると判断した瞬間、轟の方を爆破する。おい、轟貸せ」

「やだよ、爆豪君怖いっての。危なく全部台無しになるとこだったんだぜ？」

かっちゃんが再びコンプレスのポケットに手を伸ばすも、コンプレスはそれをヒラリと避けて一歩後ろに下がっていく。

「人質がいるうちに緑谷出久を処理したほうが良いのでは？」

「そうだな黒霧。こんなやべえやつは殺れるときに殺つといた方がいい」

「止めとけ。おまえらごとくじや隙を見せるだけになつておじやんになんぞ？」

「そうとも限らんだろ爆豪君。こっちは四人、相手は人質付きの一人。いくら強いって

いってねえ」

「わかつてねえなお面。轟もろとも全員やられるっていつてんだよ。只の子供とかなら未だしも、ヒーロー志望の男だぞ？ 犠牲も覚悟の上だろうし、そもそも人質として弱えだろ。轟はこつちの最終目標だろうが、あつちはそうじゃねえってことだよ」

かっちゃんはいらん達の会話に割って入り、僕の考えをまたも読んで速やかに<sup>なだ</sup>窘めていく。その姿が実に馴染んだものに見えてしまった。

僕とかっちゃん、そしてヴィラン連合の睨み合いは続き、暫く一髪触発の状態が続くが、そこに新たな乱入者が現れたことでその均衡が破れる。

「デクさん!!…常闇君!?それに爆豪…君…?…何を…?」

僕の名を呼びながらこの空間に飛び込んできたのは麗日さんだった。かっちゃんがヴィランの側にいることに疑問を覚えずにはいられないようで、かっちゃんの名を呟いていく。

「ちっ!変なタイミングでノコノコ現れてんじゃねえよ丸顔オ! おい、黒モヤ!さつさとゲート出せ、撤収だ」

「なに仕切つてんだよ、勝手に決めるな」

「ツギハギ、お前バカか? こんなどんくせえやつがここに来たってことは、直ぐにでもプロが集まって来るってことだ。イレイザーが来たらその時点で詰みだぞ? 分かっ

てんのか?」

「彼の言う通りです、撤回しましょう。それではさようなら緑谷出久。出来れば二度と会うことがありませんように…」

かっちゃんの指示の元、黒霧がゲートを複数出現させ紳士のような礼をして消えていく。他のメンバーもこちらを警戒しながらもゲートに次々と足を入れていく。

「待て!待てよかっちゃん!!まだ戻れる!来いよつ!」

「悪いなデク…俺はそっちにはいかねえ。お前の事情は呑み込んだ。その上で俺は行くんだ。俺は俺のやり方でやらせてもらう」

「だから待てって言ってるだろ!」

「轟のことなら心配すんな、俺が責任を持つて処理してやんよ。だから俺は素直にコイツらに付いていくことにした。お前ならこの意味、分かるよな?」

「かっちゃん!かっちゃんつ!!!」

「じゃあな……デク——」

かっちゃんは影の中へと消えていく。すぐるように弱々しく伸ばした僕の手は当然届かない。影は霧散して消え去り、僕の掌は空を切った。

「、——!!」  
「誰の言葉も耳に入らない。聞こえていても、聴こえなかった。聴こえるのは自らの慟哭だけ。」

僕は溢れかえる感情の波を押し付けるように何度も、何度も、地面を殴り付ける。

——むかし前世に敗北した林間合宿。僕は再履修やりなおしの人生でもかつちゃんの裏切りという最悪の形で敗北を喫した。

——かつちゃんと喧嘩をしたあの夜。あのとき黙り通していれば、適当な嘘でもついておけば、こんなことにはならなかったのに。

## 最後の希望

再びの敗北。それはかつちゃんとの喧嘩を軽く見て、その気持ちを蔑ろにした僕への当然の帰結だった。

もつと僕がすっかりしていれば……あの時になんとかしていたら……そんな「ならば」を浮かべずにはいられなかった。

地面を殴り続けた拳の痛みが僕を孤独へと誘う<sup>いざな</sup>。周囲のことなど何も判らず、僕は自らの世界に閉じ籠った。

「もつとかつちゃんのことを気に留めていられば……いや、この襲撃自体を僕がもつと素早く解決出来ていれば、かつちゃんも轟君も救けられたのに。マスキュラーに手間取り過ぎた？それとも二人の脳無が原因だったか？肝試しの組み合わせを無視してかつちゃんについていればよかったのかも。ダメだ、それじゃかつちゃんの気持ちを見無視している。そもそも喧嘩なんてしてなきゃ良かったのか。どうすればよかつ



たんだ……教えてくれ、オールマイト……かつちゃん……」

自問自答を繰り返し、意味のないたらればだけが積み重ねられていく。折れる、折れてゆく。支えを失った柱が自らの重みで折れてしまうように。

永遠にも感じられたその刻を動かしたのは、頬に走る鈍痛だった。

「しつかりせえっ！デクさんはっ……こないなとこで立ち止まっていられへんやろっ!!」

一発、二発、三発と立て続けに頬を叩かれて、目の前の人物を見る。そこには涙を流しながら必死の形相で僕へと呼び掛ける麗日さんの姿があつた。

「麗日さん……?」

「デクさん……!」

確かめるように名前を呟くと、彼女は僕の首に腕を回して力一杯に抱き締めてきた。でも僕の腕よりずっと細いそれは優しく僕を包み込む。背中に回されたその手は震えていて、どれだけ僕を心配していたのか伝わってくるようだった。

ごめんね麗日さん……やっぱりバカだな僕は。自分で勝手に塞ぎこんで、見たくないものを見ないようにしてしまつた。こんなにも僕を思ってくれる人がいるというのに……

麗日さんの言う通りだ。こんなところで立ち止まつてる場合じゃない！前に、前に進まなければ！動かなければ誰も救うことなんて出来ない。轟君も、かつちゃんも、オールマイトも…そして僕自身さえもだ。

僕は麗日さんの肩を掴んでそつと身体を引き剥がす。心地よさが失われてなんだか名残惜しい気もするが、いつまでもこうしてはいられない。

「麗日さん、ごめんね。あと、こんな僕を見捨てないでいてくれて、ありがとう」

「あつ、うん。こつちこそごめん、頬いっぱい叩いちやつた…」

「大丈夫だよ、寧ろありがたい痛みっていうか——つて麗日さん血塗れじゃないか!! 大丈夫なの!」

「え?私の傷はそんなに大したことないよ——つてこれほとんどデクさんの返り血だよ!—デクさんこそ大丈夫なの:~?」

「平気だよ、深い傷はないから。服、汚しちゃつてごめん」

「いいよ、他でもないデクさんのだもん」

麗日さんは僕の血に塗れた頬を吊り上げて笑う。こんなボロきれみたいな僕を躊躇いなく抱き締めてくれた麗日さんに、僕は返す言葉がついに無くなる。

僕はいつだつて麗日さんに助けられてばかりだ。折れる寸前の僕をこんなに優しく支えてくれた。こんなデクを支えてくれるなら折れることなんて出来ない。僕

は立ち上がらなきや……木偶ならデクなりに、愚かしく立ち続けてやる。

「麗日さん、いろいろなことがあったけど。まずはこれからのことを考えていいかな？」  
「考えてつて……またさつきみたいに塞ぎこんだりしない？今は休んでもいいんだよ、デクさん？」

「ありがとう麗日さん。大丈夫だよ、麗日さんが僕を支えてくれるから——僕はデク大丈夫でいられる」

麗日さんの手を握り、安心させるために優しく力を込めた。僕はこの手に支えられたのだから。

考えろ、この先どう動けば一番いいのかを、全てを助けられる方法を。

かっちゃんが裏切りヴィラン連合に着いていつてしまった。これは信じがたいことだが事実で……いや待てよ？ 本当にかっちゃんは僕を裏切ってヴィランになったのか？ そんなことはあり得ないんじゃないか？ 前世のかっちゃんのような粗暴な面が出てきたとしても……というか今より遥かにクソだった前世でもかっちゃんは裏切ったり、ヴィラン連合に乗せられたりしなかつたじゃないか！

「——つまりかっちゃんは裏切ってなんかいいない……」

「爆豪君がデクさんを裏切るなんてあり得ないつて、私だつてそう思うよ」

「だよね、麗日さん！ なにか……そう、なにか理由がある筈なんだ」

僕と麗日さんは協調して自らの思考を肯定的していく。

そう考えればかつちゃんの態度は度々おかしかつたように感じる。特に最後にかつちゃん様子はそれまでと違った。あのときかつちゃんが言ったことを思い出せ……あれはなにか別の意味があつたんじゃないか？

『悪いなデク……俺はそつちにはいかねえ。お前の事情は呑み込んだ。その上で俺は行くんだ。俺は俺のやり方でやらせてもらおう』

『轟のことなら心配すんな、俺が責任を持つて処理してやんよ。だから俺は素直にコイツらに付いていくことにした。お前ならこの意味、分かるよな？』

よし、要素をひとつひとつ整理していこう。気になったところは……

僕の事情つてのは再履修の話のことだと思つてたけど……だつたら普通 “分かつた” とか “理解した” とかつて言うんじゃないか？

その上でのかつちゃんのやり方とかいうのが、僕のもとへ戻らずやつらと行くつて……どういう意味だ？

轟君を処理する……ヴィラン的に考えるなら、止めを刺すつてことになるけど。なんでかつちゃんがやりたがるんだ？ 彼は連合の目標だったのに。

“素直にコイツらに付いていく”……なんだこの違和感……ここが一番引つ掛かる。

あのかつちゃんが素直に誰かに付いていくなつて……素直に……？——ハッ！

「わかった……ツンデレだ……」

「え？デクさん？」

「だからかつちゃんはツンデレなんだよ！ しかもかなりめんどくさいツンデレだったんだ！そんな男が素直になんて言うことがおかしかったんだ!!」

「よくわかんないんだけど……閃いたんだね！デクさん！」

麗日さんは両手を合わせてペアツと笑顔を見せる。「やっぱりわからんけど！」と付け加えながらだけど。

かつちゃんが素直じゃないツンデレなことを念頭に置いて考え直せば全てがわかる！ながこの意味わかるよな？だよ！ホントにめんどくさいなあかつちゃんっ！

素直に付いていくのは仕方なく付いていくってことで。つまり轟君を処理するってのは、轟君は自分がどうにかして救けるってこと。

僕の元へといかないんじゃないやなくて行けなかつたんだ！轟君が捕まってるから……これがかつちゃんのやり方で、かつちゃんが考えた救けるための行動だ。

ってことは呑み込んだ事情ってのは——

「——スマホっ……は当然壊れてるよな。 なら施設に戻らなきゃ……」

「ちよつとデクさん！ヴィランたちは!!?」

「おっと！無力化したけど、連れていこう。じきに警察がくるだろうし、引き渡さな

きゃ」

僕は脳無を引きずり、茂みに投げたトガって名乗った女の子を担いで、施設を目指して走り出す。麗日さんも僕の一步後ろにピッタリとついてきていた。

「……もしかして俺、忘れられてる？」

「ドンマイ！」

「黒影……ありがとう……」

「——なにしてんの常闇君！早く帰ろう！！」

「あ、ああ！緑谷！いま行く……！！」

施設前まで着くとそこにはA B組の生徒たちとブラド先生が集まっていた。どうや

ら整列しているあたり、点呼をとっていたのだろう。

「戻ったか緑谷！それに常闇と麗日だな！その二人は…？」

「ヴィランです！二人とも気絶してます、ブラド先生！」

「わかった！施設の地下でイレイザーとマンダレイが捕まえたヴィラン達をまとめて監視してる、そこに連れていけ！あとは轟と爆豪か…」

「わかりました…それと轟君とかっちゃんはヴィラン連合に連れてかれました！それじゃー！」

「おいちよつと待て！どういうことだ、緑谷ー！」

「常闇君、説明任せた！——」

驚きの隠せないブラド先生を置いて僕は施設へと駆け込む。きつと常闇君ならうまいこと説明してくれるだろう。

地下に行くと、相澤先生の捕縛布で縛られ目隠しをされた四名のヴィランと、それを睨む相澤先生、そして連絡役のマンダレイがいた。

「先生！ヴィラン二名追加です。女の子の方は気絶してて、こっちの脳無は動かなくなりました。捕縛お願いします！」

「緑谷、その怪我…！ 後で救急が来るから診てもらえよ…とりあえずそのデカイ方から縛る。そこに転がせ」

「はい。それと崖の上でも二人倒してます。身体を埋めといたんで逃げ出していることはないと思いますけど、警察が来たら引き渡してください」

相澤先生は脳無を手際よく器用に縛って拘束する。その間もヴィラン達をチラ見して個性を消していた。

続いて僕が小脇に抱えていたトガって子を渡そうと床に下ろしたとき、彼女が目覚ましてしまった。

「トコは……あれえ…出久くん！はああ、カッコいいねえ!!夢みたいです!——じゅるッ——ポロポロの身体、美味しいよ、出久くんッ」

トガは目を覚ましと直ぐに僕の首に手を回して、首筋の血を舐めとって甘ったるい口調で話しかけてくる。その感覚に背筋がぞわりと冷たくなつて鳥肌がたつ。

「デクさんから——離れろっ!!」  
「よくやった麗日!」

僕の後ろから飛び出た麗日さんが、トガの手首と首筋を掴んで僕から引き剥がすように床に叩きつける。すると、相澤先生が流れるような早さで捕縛布で拘束していった。

「またお茶子ちゃんに捕まっちゃつたのです……でもでも、私たちひとつになれたんだから大丈夫。だよ、出久くん?」

トガは完全に拘束されたのにも関わらず、狂喜的な笑顔で僕へ問いかける。//なに



いつてんだコイツ」と誰もが思った。相澤先生も懐疑的な目で僕を見る。その一瞬、相澤先生が目を離れた僅かな間に、トガの姿が変化していき、とんでもないパワーで縛布を引きちぎっていく。

身長190センチ、髪は緑、筋肉モリモリで、ピツチピチのセーラー服を纏うマッチョの変態が目の前に現れる——つていうか僕だった。

「気持ち悪っ!!」

「——アッ……」

僕は咄嗟にその鳩尾に手加減なしの一撃をぶちこむ。考えるより先に身体が動いていた。変態はカエルの潰れたような声を上げて気絶すると、どろどろと身体が溶けて元の華奢な女の子の肉体に戻っていった。

「忘れてください……」

「おう……」

「わかった……」

「うん……」

気まずい空気が地下室に漂っていく……誰も得しない最低の光景だった。

「つて!こんなことしてる場合じゃないんですよ! ここは任せます!」

「えっ!? おい、緑谷どこ行く気だ!!」

「部屋に戻ります!——」

我に戻った僕は本来の目的を果たすために、地下室を飛び出して、施設の自分達の部屋に向かう。

部屋に戻ると、すぐに荷物を漁って目的の物を取り出した。

「デクさん、それは?」

「スマホ壊れちゃったけど、これで代用できる! えーと、これ起動して……こうして……こうだ!——」

後からやって来た麗日さんに取り出したタブレットPCを見せながら起動していく。そしてアプリケーションを立ち上げて設定をしていった。

僕の考えが正しければ、かっちゃんは裏切ってなんていなくて……

PCの画面には地図が表示され、その中心には座標を示す赤い点が点滅している。その座標はこの合宿施設ではなかった。

——かっちゃん…君はなんて無茶なことしてるんだ……

## 爆豪 side in

黒モヤのゲートを抜けた先は、薄暗い倉庫のような場所だった。辺りにはよく分からない大型の機器が立ち並んでおり、その駆動音が広い倉庫内に響いていた。

「ここがお前らのアジトか？ 結構薄汚ねえところで暮らしてんだな」

「失礼な。ここはアジトじゃなくて見ての通りの工場ですよ。私の店はもつと綺麗なんですよ？」

「なんでこつちに來たんだ黒霧？ 今日はいろいろあつて疲れたし、あの店で早く一杯やりたいぜ」

「元々脳無も連れてくる予定でしたからね。片付けてから店に戻るつもりだったんです。まあ貴方の今日の功績を鑑みれば……高いのを一本くらい開けますか」

「お、いいねえ！ そりや楽しみだ！」

お面と黒モヤの会話を耳に入れながら辺りを見回す。階下に見えるぼんやりと光る巨大なコンテナの中には確かに脳無がいた。

なんて数だ……これ全部あの脳無って化け物なのか……？

無数に並ぶコンテナを警戒しながら見ていると、その間に黒モヤは携帯電話を片手に誰かと話し込んでいた。

「まったく……轟と常闇を救けるためにお面に付いていただけなのにどうしてこうなった！」

最初は隙を見て、二人の珠を盗んでさっさと逃げる筈だったのに、そこにデクが現れるもんだから一気に予定が狂っちゃった。

仲間になった振りをするためにデクを爆破したり、欺いたりしちまったが、そこまでは良かった。デクに奴らがビビりまくってたお陰で、お面野郎のポケットに手を突っ込めたからな。だが、まさか常闇と轟を別々に入れてるとは……いつの間にそんなことしてやがったんだよ、ちくしょうが。

常闇に続いて轟も取れば、そこでデクの方へ逃げて全部解決したってのに、あのお面野郎めちやくちや俺のことも警戒しちまった。それでもなんとか奪ってやろうと虎視眈々と狙い続けてたところにあれだ。ほんつと変なタイミングで出てきやがって麗日のやつめ……!

デクと俺、それに暴走常闇の三人ならヴィランどもを無傷で振り返りにできっけど、麗日がいたらアイツを庇わなきゃいけねえ。あのバカが来た時点で、その場で奪う作戦

は断念した。時間をかけてプロが合流したら、鼬の最後っ屁みたいに轟を殺されてたかもしれないなかつたしな。

デクのやつ、俺の最後の言葉の意味分かつたんだろうな…？奴らに悟られないように回りくどく「敵地に潜入して轟を救ける、これが俺の作戦だ」ってことを伝えたつもりだったんだが。まあデクのことだ、なんとなく伝わってるだろ。

「弔がこちらに来るようなので、少々迎えにいつてきます」

これまでの流れを思い返していると、電話を終えた黒モヤがゲートを開いて誰かを迎えていった。

厄介なゲートがない隙にやっちまうかと思つたが、黒モヤは十秒くらいで帰つて来た。焦つて仕掛けなくて正解だつたぜ。

黒モヤに続いて出てきたのは身体の至るところに手を着けた男…：USJの襲撃のときにもいた、死柄木だつた。だが前に見たときには普通だつた右腕が、今は小柄な人間くらいのサイズでゴツゴツとした、いかにも凶悪な腕に変わつていた。

「随分と数が減つちまつたな…：だが作戦成功ご苦労。よく戻つたな、茶毘、Mr. コンプレス」

「緑谷が化け物過ぎた。ありやオールマイイト級の強さだろ…：ホントよく帰れたと思う

「ぜ」

「それもこれも、素直に協力してくれた爆豪君のおかげだな。危なく轟君を投げそうになった件は、無事に帰れたことだし水に流そうじゃあないか」

「……そりやどうも。それで、あんたがボスか？」

俺はお面に軽く手を上げて、死柄木を軽く睨みながら尋ねた。

「よく来てくれた、爆豪勝己君。俺達はヴィラン連合、君を歓迎するよ」

大げさに左腕を拡げて歓迎の言葉を述べる死柄木。勧誘に来たつてのは本気だったのかと思った。

次の瞬間、死柄木の異形の右腕が俺の首と胸を掴み、壁へと押し付けられる。

「——なんて言うんでも思ってたのか、クソガキ……！」

「てつめえ……」

「動くな、俺の五本の指の内四本がお前の身体に触れてる。五本揃えば——こうなる」  
死柄木は右手で俺を押さえながら、左手で俺のポケットをまさぐりスマホをつまみ上げる。そして俺の目の前で五本の指を使って握り締めた。すると俺のスマホはヒビを立てながら崩れ去っていった。

触れたものを崩壊させる個性だと……?!? こんなん防御不可の即死攻撃じゃねえか……

!

死柄木は俺の身体を服の上から隈無く探ると、不満げな顔で俺の目を睨み付けた。

「他に持ち物は無いみたいだな。発信器のひとつでも付けられてると思っただけ、検討違いか」

「…俺はお前らに誘われたから、仲間になっただけ？あるわけねえだろ、そんなもん……！」

「そうだけ、死柄木。確かに俺も最初は疑ってたが、爆豪君はあの緑谷を撒くのに充分な仕事をしてた！」

「緑谷出久か…その緑谷が少しでも嫌な気分になるようにダメ元でこいつを勧誘しろって言ったつもりだったんだが、本当にそんな役に立ったのか？」

「ああ、それは俺も見てた。退却の成功はそいつの手柄だ」

「いったん落ち着きましょう、死柄木弔」

他の仲間が死柄木を宥めるが、俺を拘束する腕の力はまるで緩まない。

「そもそも、緑谷出久の相棒だと名乗ってる時点でお前は信用ならないんだよ」

「あの怪物の元でなら好き勝手やれる。そう思ってたが、別のいい渡舟が来たから乗り換えたんだよ……！」

「口では何とでも言えるだろ？それに仲間を簡単に裏切るような奴を信じろって言われてもな」

「はっ、その割りにはてめえも仲間の話を聞いてねえな」

死柄木と俺の間答は続いていく。何とかしてここを乗り切らなきゃいけねえ。

「それは心外だな。俺はこれでも仲間を大切にする質たちなんだ……だからこそ仲間にする奴には信頼が必要なんだよ」

「信頼だと……？」

「黒霧は勿論のこと、コンプレスと茶毘も今回決死の作戦を成功させた大切な仲間だ……そんな俺の仲間に免じてお前にチャンスやる。俺の信頼を勝ち取って見せろ」

手の隙間から覗く死柄木の冷たく眼、そして重い宣告。ここが勝負どころだと感じた。

「……俺に何しろってんだよ？」

「簡単なことだ——何もするな。おいコンプレス、珠のままでもいい、轟を寄越せ」

「はいよ、死柄木」

「おいおい、俺の時とは違ってえらくアツサリ渡すじゃねえか」

「まあこれでも俺らのリーダーだからな。断る理由もないし、そりや従うさ」

死柄木はお面野郎から轟の珠を受けると、掌で転がしてニヤリと笑う。

なんで今、轟を……？それに俺になにもするんだと？なに考えてやがるんだこの野郎。

「今回の作戦ってのはさ、雄英ヒロの合宿に襲撃を仕掛けて帰れたって時点でほぼ成功して



んだよ。轟を拐ってきたのは只の嫌がらせがしたかったからなんだ。まあ先生が気に入ってたつてのもあるけどな」

「嫌がらせ、ねえ…」

「そう、ヒーロー志望の人間が悪へ堕ちていく。その様を世間に見せつけてやるためのな。でもお前が俺たちの仲間になるってんなら、それは轟でなくてもいいわけだ…：つ  
まり轟はもう要らない」

「なんだと…？あんだだけせつせと連れてきて、要らないってなんだよ…：」

死柄木が告げた目的と結論。俺はこの段階で嫌な予感が止まらない。

「これからの五つ数えて、ひとつずつ俺の指がこの珠に触れていく。全てが触れれば…  
轟は珠ごと崩壊する。もう一度言う、何もするな…爆豪勝己」

死柄木は淡々と感情の籠らない声で俺に説明をした。これは轟の死へのカウントダウン。

「…ひとつ」

俺が考えるよりも早く、死柄木は動き出す。奴の左の掌に転がる珠を、カウントととにも親指で挟み込んだ。

どうする…：どうすれば止められる？ やつの信頼を得つつ、これを止める方法は…：！

「…ふたつ」

続いて人差し指が珠に乗せられる。

時間が足りねえ、救けもこねえ、どうする。なにか話しかけて気を逸らすか？ いや、それすら行動ととられたらそこで終いだ。

「……みつつ」

三本目の中指が珠を完全に掌に固定した。

考えろ、考えろ……！ こいつを爆破して轟を強奪、三人を攪乱しながら振り切つて脱出……無理だ。こいつの腕の強度もわからねえし、この場所が何処だかも知らねえ。建物を出れたとしても、他に仲間がいないとも限らない。

「……よつつ。次で最期だ」

薬指が横から珠を支えるように触れていく。死柄木の口から最終勧告が為された。

くそ！くそつ！くそがあ!! 解決の一手が出てこねえ。このまま轟をやられちゃここまで危険を犯してきた意味が無くなる！ だが動けばここまでの積み重ねもパーになる！ どうする!?!どつちだ!?!俺は、俺は——

「ふう……そうか……いつ——「やめろつ!!」——それがお前の選択か、爆豪」

死柄木の最後の指が珠に触れる、その前に俺は声を上げて手を伸ばしてしまつてい

た。死柄木はその手を素早く避けて、珠をお面に投げ渡す。

「コンプレス、次からはもつとしっかりと意思確認をしてから新人を連れてこい」

「すまねえ…死柄木。処分するか？なら責任を持つて俺がやるが…」

「いや、こいつはこいつで利用価値がある。でもまあ、自由はいらない…!!」

死柄木の異形の右腕から衝撃波のようなものが生じて、俺の胸部から鳩尾にかけて突き抜けていく。あまりにも突然の衝撃に胃の中身が逆流し、嘔吐しそうになるが喉元で再び飲み込み耐え抜いた。

吐き出すことだけはできねえ…! コイツらが気が付かなかつた俺の切り札。お面野郎に付いていく前にコツソリと呑み込んだ超小型の発信器の存在はぜってえ知らさせねえ…!!

「まだ意識があるのか、スゴいタフネスだな。じゃ、これでどうだ…!!」

死柄木が右腕の拘束を解いたことで俺は自由になるが、先程のダメージのせいでまともには立ち上がれない。そして地面に膝を着いた俺の後頭部に強い衝撃が走った。どうやらあの巨大な拳で直接殴られたようだった。

「——拘束してアジトに連れてけ。轟とは別の——捕らえておけば、互いを人質に——

——下手に動けな——だろ」

「——了解し——死柄木」

「アジト——つたら一杯——。黒霧が大事に——た——箱に入った——」  
薄れ行く意識の中、飛び飛びに死柄木達の会話が頭の中を巡る。

——すまねえ、デク。俺は……しくじっちゃった……

——爆豪 side out ——

PCに表示されているのはかつちゃんに渡した小型発信器の信号だ。途絶えることなく、この施設から別の場所の座標を示す。

「また移動した。でも今度はそんなに離れてないな……」

「デクさん、ここが……」

「ヴィラン連合のアジトってことになるね」

麗日さんと一緒にモニターを見ていたが、信号がある場所に留まったことで僕はそこ

が終着点だと確信した。

神奈川県横浜市神野区。ヴィラン連合のアジトがある街で、かつてのあったオール・フォー・ワンの決戦の地——そして、僕とオールマイトが命を散らした場所だ。

——待っていてくれ、轟君、かつちゃん。必ずそこへ僕が助けに行くから。

第九章 リンカン・ウォーズ 連合の逆襲

## 最終章 ONE FOR All, All FOR

ONE.

001. ODD FUTURE

かっちゃんは轟君を救うため単独でヴィラン連合の本拠地に取り込んだ。かっちゃんに渡した発信器の反応は神野区から動かない。かっちゃんと轟君を救けるために、僕もあの地へいかなきゃ！

あれから消防、救急、警察が揃って合宿施設に到着した。ヴィラン九名を警察に引き渡して、怪我人やガスを吸ってしまった人達が救急隊に搬送されていく。前世より重体の人は少なくなっていたが、被害は免れなかった。

僕も搬送されそうになったが、応急処置だけを受けて警察と先生と共に雄英高校へそのまま向かった。

かつちゃんから送られてきた情報を元にオールマイト達と作戦会議を開くためである。ついでにリカバリーガールに治癒を施してもらい、傷を一気に癒す為でもあった。

移動の車内と会議までの空き時間を仮眠にあて、襲撃の翌日の13時から会議が始まったのだが――

「貴様が居ながら何故！焦凍が拐われているんだ!!何をしていたア！」

僕は激昂したエンデヴァーによって壁へと叩きつけられる。

「やめろエンデヴァー！緑谷少年だって必死だったんだ。ヴィラン九名の内六名を撃破、更に内二人はあの脳無だったのだぞ！それに緑谷少年だって襲撃を受けた生徒。言うなれば被害者なんだ!!」

「こいつを被害者の生徒と同列に置くのか？ 貴様に鍛えぬかれ、他とは比べ物にならないほどの力を持つこいつを！……いいか、強大な力には大きな責任が伴う。力を持つたお前の弟子は皆を救わなければならない責任があつた筈だ！」

「エンデヴァー、責任と云うのであれば全ては教師である俺の責任です。オールマイトの言うとおり緑谷はよくやってくれた。誉められることはあれど、責められることはいでしよう」

エンデヴァーを後ろから羽交い締めにして抑えるオールマイト。僕の前に出て頭を

下げる相澤先生。既に会議の場は混乱を呈していた。

「ある程度の話は聞いた。それ言うなら、そもそも貴様の息子が拐われるほど弱いのが原因だろ、エンデヴァー。貴様がもつと息子を鍛えていれば拐われることなどなかったし、爆豪勝己もそれを救いに敵地に乗り込むこともなかっただろう」

「焦凍が悪いとでも言いたいのか、サーナイトアイツ！焦凍はまだ16歳の学生だぞ！  
！それをヴィランと——」

「なら緑谷だつて同じ条件だろうが！自分の息子を棚上げにして批判などするな！！緑谷はたったの一年で強くなって、貴様の息子はそうでなかった！それだけの話じゃないか  
！」

「なんだと貴様ア!!」

「落ちてけナイトアイ！エンデヴァーもだ！今は緑谷少年と轟少年を比べても仕方ない  
だろ!!」

サーナイトアイの舌戦により、エンデヴァーは更に激昂する。オールマイトが二人を止めるも火は収まりそうにない。

「さつきから何を言い合ってたんだよ!!今はこんなことをしてる場合じゃないだろ！」

僕はその場の誰よりも大きな声で心の底から叫んだ。皆の視線が一気に僕へと集まるのが分かる。



「僕は力があつたのに轟君を救えなかつた。かつちゃんも止められなかつた。どちらも事実で、エンデヴァアの言う通りでしょう。自分でだつてわかつてますよ！　だから……だからこそ僕はこの手で二人を必ず救けるっ！　そのために皆ここに集まつたんじゃないんですか？　もつとしつかりしてくださいよ！　ヒーローでしょう!？」

僕の叫びは静まりかえつた会議室に響く。オールマイトもサーナイトアイも、エンデヴァアでさえばつもの悪そうな顔をしていた。

「皆、緑谷君の言うとおり。拉致されてしまつた轟君と爆豪君を救出するために我々は集まつたんだ。ヒーロー同士の諍いさかいはここまでにして、今後の話をしよう」

「塚内さん……」

「ああ、すまなかつた緑谷少年、そして皆！」

「ふんっ……ならさつさと始めろ」

塚内さんの言葉にヒーローたちは皆席についた。エンデヴァアも轟君の心配があつての怒りだつたし、僕をどうこうしたいわけじゃないだろう。

「よし、先ず爆豪君が身に付けていた発信器の信号から敵のアジトがニヶ所判明した。どちらも横浜市神野区、距離もそう遠くはない」

「待て、発信器を敵に奪われて逆に利用されている可能性はないのか？」

「他にもふたつ根拠がある。ひとつは以前から続いていた神野区での聞き込みの結果

だ。緑谷君から神野区でヴィラン連合のメンバーらしき人物を見かけたという情報から、聞き込みをしていたんだが……その話の中に今回襲撃してきたヴィランと特徴の一致した人物が現れた。茶毘と呼ばれているヴィランが、空きテナントしかないビルに出入りする姿が目撃されていた。当時は大した情報じゃないと思われていたが、今は重要な証拠になったんだ」

以前、相棒<sup>サイドキックライフ</sup>生活をしていた頃から玉川さんをお願いして神野区の調査を行ってらつていた。根拠は僕の前世の記憶なので、適当な理由を作っていたが。

「そして、もうひとつ。こっちはなあ……」

「なんで言い淀む？ なにか問題が……？」

「いや、もうひとつは今回の襲撃で逮捕したヴィランの自白なんだ。九名の内、<sup>ふばい</sup>がわら<sup>じん</sup>とが<sup>ひみこ</sup>分倍河原 仁と渡我被身子の二名がやたらと協力的で、なんでもかんでもしやべるものだから、逆に信用出来なくて困ってる。でもどの供述も我々の裏取りがとれていたものばかりだから嘘では無いようなんだ」

「……そうなんですな」

「特に渡我の方はなんでも話すと言って司法取引まで要求してる。本人曰く「出久ぐんに会うためなら、なんだってします」とのことだが……緑谷君、彼女に何をしたいんだい？」

「えっ、心当たりが無いんですけど!? 首を絞めたり、腹に拳を振じ込んだりして気絶させたくらいしか関わりないですよ…」

皆の懐疑的な目線が僕へと集まる。オールマイト…貴方までそんな眼で僕を見ないでくださいよ。

またトガちゃんか！彼女が関わると真面目な空気が死ぬな。

「兎に角、これで居場所は掴めた。あとはかちこむだけ……この緊急事態だ、急いで人材の召集を掛けている。ここからは時間勝負！決行は明日の夜だ。各地の実力者に要請をだしているが間に合わない者もいるだろう。ここにいるイレイザーを除くプロヒーローと機動隊、そして……」

「……僕も出ます。止められたって勝手にいきますから！」

「緑谷少年……」

「当然だ！貴様のような戦力を腐らせる理由はない。むしろそのメガネの方が要らんだろ。第一線では役に立たん」

「私が戦力に成らないことぐらいわかっている。私はいつものようにバックアップに努めるから、後詰めは任せてもらおう」

「ナイトアイが後ろに居るなら安心だ。我々は目の前のヴィランをぶっ飛ばすことに集中すればいい！」

バシツと拳を合わせるオールマイトとメガネをくいっと上げるサーナイトアイ。長年のコンビだからこそその信頼関係だろう。

前世とは違う…正面から殴り込んでのかっちゃん、そして轟君の救出だ。僕の持てる全てを使って二人を必ず救い出してやる。

「近郊の若手にも緊急召集をかけた。メンバーはシンリンカムイ、Mt.レディ  
……………」

———それからも会議は続いていく。プロヒーローの威信をかけた一大救出作戦が始まろうとしていた。

———轟 side in ———

気がつけば俺はこの無いもない空間にいた。ぼんやりと会話のような音が響くがよく分からない。明るくなったり暗くなったりする、上下も右も左もわからないこの

謎の空間。

何時間経ったのか、襲撃はどうなったのか、皆は無事なのか、そんなことを考えていると突然空間が無くなり、俺は外へ放り出された。

「いった…何処だ…?」

飛び出したのはバーのフロアのような場所だった。辺りを見回そうとする前に後ろから声をかけられる。

「動くなよ、轟焦凍」

「誰だてめえら…っ！爆豪…!!」

振り向けば四人の男が立っており、その真ん中には頭に拳銃を突きつけられた爆豪が椅子に拘束されていた。そのがくりと下がった頭は意識を感じさせない。

「彼には眠って貰っているだけだ。さあ、話をしようか」

「お前…前には雄英に襲撃してきたやつらだな？」

「覚えてたか、俺たちはヴィラン連合。お前と関わるのはこれで三度目だな。雄英高校、保須、そして今回…」

「お前ら…」

俺に悠々と話しかけてくるのは顔に手を着けた白髪の男、名前は確か死柄木だった。こいつがリーダーで間違いはなさそうだ。

俺はこれまでの怒りも籠めて思い切り奴らを睨み付けた。

「おお、怖い怖い。眼だけで殺されそうだな。ホントにいい眼をするなあ、轟。先生が気に入るわけだ」

「なにが言っていてえ……?」

「俺らの仲間にならないか?」

「ふざけんな……!!」

死柄木の発言のバカらしさに一気に苛立ちが募り、よりいつそうと眼が険しくなつた。

ヴィランになれだど? マジでふざけた連中なんだな。話に聞いていた以上だ。

「怒りと憎しみの籠った眼をしてるな、轟焦凍。まるで——エンデヴァーみたいだ」

「……ああ?」

顔面継ぎはぎだらけの男が話に入って、聞き捨て成らないことをいい始めた。親父の眼だと……? バカな、親父はメディアの前ではオールマイトに対する確執をそれなりに隠ししていた筈だ。なぜこいつがそんなことを知っている……?

「憎いよなあ? 自分の子供を道具みたいに扱ってよ。要らなきや捨てちまう。成功品のお前ですら酷い扱いだもん……お母さんまで奪われてちまってよ。悲しいなあ、轟焦凍」

こいつはいったい何処まで知っているのか？そんな考えが頭の中を占めていく。「殺してやりたいと思わなかったか？思ったよな、それも一度や二度じゃない筈だろ？でもお前のやり方じゃエンデヴァーに仕返し出来ない……けど俺たちとなら出来るんだ」

俺の考えていたことまでお見通しと言わんばかりに言葉を続ける目の前の男。こいつと親父がどんな関係なのか、何を知っているのか、全てを問ひ質したくなる。

「お前を苦しめて、お前からお母さんを……家族の温もりを奪ったあの男を赦せないだろ？ 轟焦凍、俺たちと一緒に来い。エンデヴァーを……一緒に殺してやろう……！」

俺の感情が流されそうな言葉を並べ続け、最後には手まで差しのべてくる。この男は俺のことを……エンデヴァーの息子のことをよく解っている——だがそれだけだった。

「お前は今更なんの話をしてんだ……？確かに昔の俺なら思わずお前の手をとっちゃったかも知れねえが……今の俺がそんな誘いに乗ると思ってるのか？」

「………何？」

「クソ親父のことは未だに赦しきれてねえが、それでも俺達は家族として歩いていくつて決めたんだ。まだまだ始めたてかも知れないけど、それでももう失わないつて決めたんだよ……！俺も……クソ親父ですら……一からやり直そうつて頑張つてんだ、体育祭で緑

谷に救われたあの日から……」

「なんだよ……そりゃ……？ エンデヴァーが家族と……？」

「そうだよ、親父は俺たちと向き合ってたんだ。だから俺も憎しみで生きるのは辞めた。緑谷が教えてくれた、俺はヒーローに成りたかったんだってな！ だから俺はお前らの仲間になんてならない……！俺に新しい道をくれた緑谷と一緒に歩み続けて、俺は俺の人生を歩む……!!」

柄にもなく話し続けてしまった。きつと親父の話で心を揺さぶられてしまったせいだろうな。こんなとき緑谷ならなんて言うだろうか……？

信じられないといった様子の子の継ぎはぎ男。するとその隣にいた死柄木が一步身を乗り出して俺を見て話始めた。

「どうやら交渉は失敗みたいだな。　　ったくネットの情報つてのはアテにならねえよな、なあ茶毘。　　それにしてもまた緑谷か……何処までも余計なことしてくれる」

「てめえらの目的はなんだ？何のためにこんなことを……？」

「おいおい、さつきまでなに話してたんだよ。お前をヴィラン連合に勧誘するため、だった」

「だった……？」

「ああ、そのつもりだったんだが、予定変更だ。　　お前も爆豪も強情みたいだからな、別



の手を使うことにするよ。黒霧、とりあえず眠らせとけ」

死柄木はあつきりとした口調でいい放つと、黒霧がそのモヤモヤした手に持った拳銃を爆豪の頭に押し付ける。

爆豪がやられる!!——

「やめっ——ッハ!?!」

止めようと右手を伸ばし氷を出そうとしたところで、首筋に刺すような感覚が襲う。そしてすぐに身体の力が抜けていき、意識が朦朧としていった。

拳銃はブラフだったのか……やられた……! 葉かなにかを打たれた……爆豪、すまねえ。緑谷、約束果たせなくなっちゃまいそうだ……すまねえ——

——轟 side out ——

救出作戦の会議はあの後も二時間程続き、明日の決行前に再び集合するという形で終

わった。

僕とオールマイトは二人で雄英高校へと戻っていた。明日の作戦について、二人きりで話したいことが……前世の記憶から出来る限りの話がしたかったから。

そして僕らはいつもの仮眠室にいる。オールマイトとの密談といえはやはりここに限るだろう。

「緑谷少年、班分けは本当にあれでよかったのかい？ 私も救出班にいったほうが良かったのではないか？」

オールマイトが心配しているの班分け、それは明日の作戦でのものだ。僕はかっちゃんと轟君がいるであろうアジトに乗り込む救出班、オールマイトは倉庫を押さえる制圧班に組み込まれた。

本来ならオールマイトという最高戦力は救出班に充てるべきなのだろうけど、今回は救出後にも敵の襲撃があると仮定してオールマイトより力は劣るが継戦時間が長い僕が代わるという適当な理由を付けた。エンデヴァーはオールマイトの弱体化を知らないから不思議そうな顔をしてたけど……

「あのときは言いませんでした、倉庫の方にはあの男が現れます。僕らの敵——かたきオール・フォー・ワンが……」

「ヤツが……そうか、なら私が行かない訳にはいかないな!!」

「モチロン僕もかつちゃん達を救出したら直ぐにそっち向かいます。本気で飛べば30秒とかからない距離ですからね」

「うむ……しかし、奴は危険な相手だ。君を巻き込むのは——」

「オールマイト、僕もワン・フォー・オールの継承者です。僕にだつて奴と立ち向かう義務と力があるんだ。大丈夫！僕と貴方の二人なら——そうでしょう、オールマイト？」

「ああ——ああ！そうだな！やろう、緑谷少年！」

僕は力強く拳を作りながら笑顔でオールマイトへ問いかけ、オールマイトも全開の笑顔で答える。

「そのためにもですね……」

「なんだい、少年？」

「食え」

僕はオールマイトの顔真似をしながら、一本の髪の毛を差し出す。

「ええ!?どうしたんだい、少年！何故私に……」

「もしもの時のためですよ。運命は既に変わり始めてます、何が起こるか分からない

……僕にもしものことがあつたとき、僕の力を受け取つて欲しいんです。他でもない  
オールマイトに……」

「ダメだ！そんなことはさせない！君は私が必ず護るっ！だから——」

「オールマイト！……それ、僕もおなじこと思つてましたよ。オールマイトから継承  
権を託されたとき、オールマイトだつて同じ様に“もしものことがあつたら……”つて考  
えてたんでしょ？」

「それは……」

オールマイトは凶星だつたようでも小さく唸り黙り込んでしまつた。やっぱり僕と  
オールマイトは似た者同士だ。

だから言わなくちゃ、この行為で僕が伝えたかつた本当の意味を。

「だからオールマイト、これは“誓い”です。お互いのチカラを預かることで、二人揃つ  
て無事に生き残るつていう意思を形にした……僕らにしか出来ない、誓い」

僕は真つ直ぐとオールマイトの瞳を見つめる。互いに眼は逸らさない。

「緑谷少年、君は前向きだな……私は正直言うとな、頭のどこかでナイトアイの言う未  
来を受け入れていたんだ。私にもいつかは終わりが来る、その時が来るだけなんだ……と  
ね。でも君に出逢つて君を鍛えていく内に、ホントに未来は変えられるかも知れないつ  
て少しずつ思えてきたんだ。」

だが、それ以上に君を喪いたくなかった。私はいい、でも緑谷少年だけでも運命から逃して見せる！……そう思っていた。

でもそれは君だって同じだったんだよな。私を救うために未来から来てしまうくらいに私を救けたかった。そして君は強くなった！時に私を超えるくらいに！！

だからさ、私も諦めないことにした！マジに100%生き残ってやるツつてね！ 緑谷少年、私も誓うよ。君と二人で無事に生き残って見せよう！

オールマイトは大きく笑いながら僕の手から髪の毛を受け取り、一息で飲み込む。

オールマイトが初めて僕に語る後ろ向きな本音。それでもオールマイトは僕に誓ってくれた。必ず生き残ると。

「ありがとうオールマイト。二人で必ず未来を掴み取りましょう！」

「ああ！未来を！」

僕らは拳を掲げて呼応する。

——僕の中のオールマイト、オールマイトの中の僕。僕らは血よりも深い絆で結ばれている。誓いは絶対に、違ちがえない。

「いやあ、オールマイトがチカラを受け取ってくれて良かったですよ。このままだと渡我被身子が僕の唯一の継承者に成っちゃってましたからね！ハツハツハ！」

「ハツハツハ、じゃないよ緑谷少年くん！なんでそういう大事なことを早く言わないんだね！」

「無理やり奪われるもんでもないから大丈夫ですよ……もしもの時もこれで安心！」

「……あ——!!——」

そんな下らないやり取りをしていると、オールマイトの携帯が鳴った。簡単なやり

取りをしたあと電話を切ったオールマイトは僕に「Aの教室にいくように指示する。

どうやら、僕宛の連絡だったみたいだ。僕のスマホは壊れちゃってるし、代わりに

連絡がいったのか。

オールマイトと別れて教室へと向かう。そして教室で僕を待っていたのは、塾生の

皆だった。

「皆どうしたの？まだ昨日の事件の傷とか疲れが残ってるでしょ？」

「それはお前もだろ、緑谷」

「大丈夫、砂藤君！鍛えてますから！ハツハツハ……つてそんな雑談しに来たんじゃないんだよね？」

「単刀直入に言おう。緑谷、お前は爆豪と轟を救けにいくんだよね？」

「つ……それは——」

「いや、言わなくていい。というより言えないのだろうか？相澤先生も黙して語ってはくれなかった」

「だから俺達はただ伝えに来ただけだ！」

「伝えに……？」

砂藤君と障子君は僕に気を使いつつも、しっかりと意思を見せる気である。何を僕に伝えるのだろうか。

「二人を任せた！頑張れヒーロー!!」

みんなが声を揃えて僕にエールを送る。瞬間、心が震える。

前世では止めたがつっていた飯田君、障子君、麗日さんが。共に救けに行きたがつていた切島君が。関わることの出来なかつた皆が……僕に任せたと云ってくれる。こんなに心強いことはない。

「鍛えた抜かれたお前の筋肉ならきつと大丈夫だ」

「筋肉に不可能はねえ！だろ!？」

「障子君…砂藤君…!」

筋肉同盟の二人が上腕二頭筋をひとつずつ叩きながら、筋肉を輝かせた。

「漢、見せてやれ緑谷!」

「気合いだ!気合いだぞ緑谷!!」

「応とも!切島君、鉄哲君!」

ガチガチの硬化コンビが広背筋を叩いて根性を入れてくれる。

「二人を頼むぞ緑谷君!委員長の俺の思いも連れていってくれ!」

「筋肉の人!面白そうな個性のヴィランがいたら是非ともその話を詳しく!」

「君はどこまで自分本意なんだ!緑谷君はこれから懸命に人助けをだな!」

「ハッハ!相変わらずだね。飯田君、発目さん。どっちも任せてよ!」

マイペースな発目さんとそれにツッコミを入れる飯田君のやり取りに和まされた。

「僕のような者が心配するのは烏<sup>おこ</sup>濱がましいような気もしますが…:お気をつけて!」

「ありがとう、庄田君」

庄田君は大胸筋に拳を当てて、無事を祈ってくれた。

「緑谷君がいない間はアタシがしっかりと皆を見ておくよ。だからまた…:」

「ああ、戻ってきたらまた一緒にトレーニングしようか!」

拳藤さんと総指伸筋を合わせて笑い合う。



「緑谷：ありがちだけど、頑張っ——」

「あれ尾白君いたの？」

「いたよっ！最初から!!」

「ジョークだよ、ありがとう！」

尾白君に冗談を言いつつ指筋群を叩き合わせた。

最後に残ったのは——

「デクさん……」

麗日さんだ。きつと言いたいことが多いのだろう。言葉を選んでいるのか、少し俯き加減でモジモジと指あわせでまごついてる。

「じゃあアタシらは帰るよ。ほら、皆いくよ！」

「あとは若い二人で〜」

「頑張れよ……!」

何かを察した様子で拳藤さんがみんなに号令をかけて教室をあとにしていく。それに続く皆は生暖かい視線を僕らに送りながら帰っていく中、砂藤君が謎のコメントを残し、障子君が六腕全てでサムズアップしてから去っていった。

何なんだった……さつきまでの熱い空気がなんか別のモノに変わってないか？

夕陽の射した教室に残る僕と麗日さん。その間にはなんとも言えない空気が流れる。

「とりあえず、座ろうか」

「う、うん」

急く必要もないと思ったので麗日さんを促しながら僕は自分の席に座る。麗日さんのそのひとつ前の席……かつちゃんの席に着いた。

夕陽に染まる麗日さんは横向きに椅子に腰掛けて、左手でゆつくりと机をなぞつたあとに話始めた。

「……、爆豪君の席だね……」

「うん……」

「爆豪君はさ、誰にでも厳しくていつも怒鳴って、私にもキツイことばかり言ってたよね。でもその分自分にも厳しくて、出来ないことを出来るようになるためにスゴく頑張ってた。だから今回もひとりで敵のアジトに乗り込むなんて無茶もしたんだろうね。それだけに、誰かに助けに来られるなんてスツゴく屈辱なんだと思う……」

「……」

「でも、デクさんだけは違う。爆豪君はデクさんにだけは弱さを見せて認めてた。デクさんだけが爆豪君の特別だったんだよ」

麗日さんは複雑な表情で僕へと語りかけていく。悲しいような、困ったような、優し

い顔だ。

前にかつちゃんに似たようなこと告げられたっけな。僕と自分だけが特別なんだって言つてさ。麗日さんもよくわかつたなあ……

「ホントはデクさんにも危ないことなんてしてほしくない。……昨日みたくまたポロポロになつちやうかも知れない！ 今度は怪我だけじゃ済まんかもしれん！ 私はそんな嫌なんよ！」

「麗日さん……ごめん。それでも僕は——」

「わかつてる。それでもデクさんは行くんだよね。私がホントに嫌なんは、爆豪君や轟君がピンチなのになんも出来ない弱い自分……私はこんな時にまでただ見てることしかできない。ううん、何時だつてそうだった……」

そう言いきると麗日さんは項垂れてしまった。弱さを故の悔しさ、僕にも痛いほど判る感情だった。

「麗日さん、君は弱くなんてないよ。自分の力不足を素直に認めて踏みとどまれる。それは弱さなんかじゃなくて強さなんだよ。それに僕は麗日さんのそんな強さに何時だつて助けられてきたんだ」

「デクさん……デクさんはいつもそう言つてくれるよね。でもさ、デクさんが助けられたつていう私つて——私のことじゃないよね？」

僕は麗日さんの発言に呆氣にとられてしまう。鏡で自分の顔を見られるならきつと鳩が豆鉄砲食らったみたいな顔をしているだろう。麗日さんは呆氣にとられた僕を見ながら話を続けていく。

「やつぱさうだったかあ……始めは私を氣遣うために言ってるのかと思つてたんだけど、そのうち私を見るのに私じやないだれかを見てるつてことに氣付いたんだ。Mt. レデイとか波動先輩とか他の女の子かと思つたけど、二人とのやり取りを見てるとそれも違ふなつて……それで氣づいたんだ。

何て言つたらいいのかわからんのやけど……確かに麗日お茶子<sup>私</sup>への言葉なんだけど、私のことじやないのかなつて」

「……なんでそう思つたのかな？」

「勘、かなあ？」

「勘、かあ……」

僕は氣の抜けた感嘆のため息をつく。ここまで見事にバレてしまつていては否定する氣にもなれない。しかし、女の子の勘つてのはホントに凄いな。

「別にね、説明してほしいとかさういうんじゃないんよ。デクさんにそう言われるのは私宛じやないとしても嬉しいし、それがデクさんの支えになれてるのなら私はそれでもいい。ただ……」

「……ただ？」

「いつかデクさんがそれを教えてくれたら嬉しいかなって……私はそれまで待つてるから！」

麗日さんは向日葵のような笑顔で僕に告げる。僕はその姿に見惚れて言葉がなかなか出てこなかった。

麗日さんはやっぱり優しい子だ……今だつて僕に無理強いをしないで助けてくれる。こんなにも優しい子にこれ以上心配かけさせられないな。だからこそ、今はまだ……

「麗日さん、ありがとう。でもひとつだけ訂正させて欲しい。僕が助けられて、支えられているのは君にもだ。今ここにいる麗日さんにだつて僕は感謝してる。」

「いつか……いや、全てのケリがついたら、全部話すよ。だからその時まで待つてて！」  
「うん、待つてるよ。デクさん」

麗日さんはまたしても優しい笑顔で受け入れてくれた。

夕暮れの教室で僕と麗日さんの間に心地よい沈黙が流れる。暫くして麗日さんの方を見ると、麗日さんもこちらを見ていた。

少しの間、二人して眼を見つめ合う。だけど段々それが可笑しく思えてきて、二人し

て笑いだしてしまった。

友達と過ごす朗らかな時間。こんな良いものが今の僕に与えられてもいいのだからかと思ってしまうほど、心地の良い時間だった。

暫く笑ったあと、麗日さんが目尻の涙を拭きながら話しかけてきた。

「いやあ、脱線しちゃったね。なんの話をしようとしたんだっけ。ふう……爆豪君と轟君のこと、任せたよデクさん」

「うん、任された！二人は必ず僕が救けてくる。そしたら今度は二人と、それに飯田君も入れて、さつきみたいに楽しく過ごそう。この僕らの学校で、なんでもない日常を過ごすんだ」

「うん……うん！そうだね、デクさん！二人を取り戻して、そしてデクさんも必ず無事で帰ってきてね」

僕らは当たり前前の未来を思い描く。そんな当たり前を取り戻す。それが僕のやるべきことだ。

「デクさんっ！んっ……！」

麗日さんは椅子から立ち上がって拳をこちらに向けてきていた。その意味を少し考えて、直ぐに理解した僕は立ち上がる。

「——約束だ」

「うん——約束！」

僕と麗日さんは拳を軽く合わせて笑いあつた。僕とかつちゃんのこと……親友との約束の合図だ。

「爆豪君とデクさんのこれ、やってみたかつたんだ」

「ははっ、特に深い意味はないけどちっちゃい頃からずっとやってきたんだよね」

「どっちから始めたのかな？——」

「これはね——」

その後、様子を見にきた相澤先生に叱られるまで教室で話をしていた。この非常時に感じた僕の日常をギリギリまで楽しみたかつたんだ。

斜陽がかかる街を歩きながら二人で帰る。麗日さんと帰り道が分かれるまで話を続けて、そして「またね」と手を振り、それぞれの帰路を進んでいく。

——こんな日常を喪わないために、二人を必ず取り戻す。

——そして残り少ない未来を、踰いても足掻いても生き抜いて、確かな未来を掴みとってやる。

1120 001. ODD FUTURE

0  
0  
1.

O  
D  
D

F  
U  
T  
U  
R  
E



## 002. THE DAY

かっちゃんと言君の救出の為、一大作戦が神野区で行われる。仲間と過ごす当たり前の日常と自らの未来を掴み取るため、僕は改めて決意し闘いへと臨む。

家に帰ると母さんが心配そうに駆け寄ってきたが、怪我ひとつない僕の姿を見て、暗かった表情が苦笑いへと変わる。

リカバリーガールの治療のおかげで変な心配をかけずに済んだ。流石は雄英の保健教諭と言ったところだろうな。

お風呂に入つて、そのあと久々に母さんの手料理を食べる。二十年以上食べてきた母の味がなぜだか今日はとても美味しく感じた。

明日の作戦の為に早めに床につくことにし、部屋に行く前に母さんへ「おやすみ……それと、いつもありがとう」と言つたところ、照れ臭そうな母さんに背中をバシバシしばかれた。慣れないことはするもんじゃないな……

明日……明日だ。泣いても笑つても明日で全てが決まる。再履修やりなおしの12年間、そのただけにやってきたんだから。

そんなことを考えながらベッドに寝転がる。明日のためにも早く寝なくては。だが

「眠れない……」

——気持ちが悪く着かず全く眠れる気がしなかった。

こんなときは……少し筋肉を動かすか。それに限るな。

簡単に身支度を整えてランニングをするために夜の街へと繰り出していく。

走り慣れた道を駆け抜ける。少しでも無心に成れるように、このざわついた心が落ち着くようにと。

ある程度走ったとき、見慣れたとある場所で足が止まった。

「田等院商店街か……」

少し古びたアーケード街の看板を見つめながら呟く。

僕がかつちやんを救ける為に飛び出して、オールマイイトに救けられて、そして認められた場所。僕のオリジンの場所。

「あれ？デクくん？」

そんなことを考えていると後ろから聞き覚えのある声に呼び掛けられる。僕は振り返ってその姿を確認した。緩く巻いたロングの金髪、切れ長の綺麗な眼、誰が見ても間違なく美人だと言うであろう整った顔立ちの女性。

「優さん？」

そこにいたのは私服姿のMt. レデイこと岳山優さんだった。

そういえば優さん……Mt. レデイと初めて会ったのもここだったな。

「こんなところでなにしてんのよ？明日も忙がしいでしょ？」

「ランニングです。なんだか寝れなくて……優さんは？」

「仕事帰りよ。知つての通り私の事務所、この近くだからね」

よくみると優さんは真夏だったのに、長袖のシャツに長ズボンの肌を晒さない格好をしていた。たぶんこの下にあのコスチュームを着ているのだろう。

「お疲れ様です。それじゃあ僕はこれで……」

「待ちなさい。ちよつと付き合ってもらうわ」

「えっ!?!ちよつ、引つ張らないでくださいよ——」

優さんも明日の作戦があるのに引き留めちや悪いと思つていた僕だが、その優さんに急に腕を引かれて連れていかれる。

こうして急遽、二人での夜の散歩が始まった。僕は寝れなかったから全然構わないんだけど、優さんは疲れてないのか？

最近のことやそれになつわる昔話をしながら暫く散歩を続ける。そして気がつけば多古場海浜公園まで歩いてきていた。そして優さんに促されるまま、二人でベンチに腰かける。

懐かしい。前世ではオールマイトからチカラを受けとるためこの清掃をしたつけな。今世では小学生の頃に筋トレ目的で自主的に掃除してたらどんどんと人が増えて、市のボランティア活動になってたんだよなあ……

「さて、そろそろ話してもらおうかしら？」

「え？ 話すつてなにをです？」

「アクくんの悩み事よ。会ってからずっと険しい顔してるし、またひとりでなんでも抱え込んでるんでしょ？」

優さんに言われてハツとする。顔を触って確認すると、ずっと眉間にシワが寄っていたらしく、まだシワが残っていた。

こんなに思い詰めてたのか…それも顔に出続けるくらい。常に笑顔でつてのはやっぱり難しいのかな。しかし話すつたつて何をどう話せばいいんだ…？

「明日の作戦のこと？」

「あつ……はい。ちよつと緊張しちやつて…」

僕の心を見抜くように優さんが助け船を出してくれる。渡りに船といった感じに僕は在り来たりな返事をした。

緊張などと言つたものの、僕の心の奥底にあるのはそんな在り来たりなモノじゃない。考えると不意に湧き出てくる不安の種。消し去つたと思つていた闇が心の炎の隙間からこちらを覗いている。

あの絶望の姿を為して……そして目が合った。瞬間、闇が勢いを増して僕を取り込む。

——死。

僕は死ぬんだ。明日、あの場所で。あの痛みと後悔と共に。

「——デクくん!!?」

呼び掛けられながら肩を揺すられ、意識が現実へと回帰する。気が付けば僕の身体は震えていた。

「だ、大丈夫ですよ。ちよつと嫌なこと考えちやつて……」

「そう、わかつたわ……つて納得するわけないでしょう！ 何があつたの？ 話して！」

「ホントに大丈夫ですから。僕は……大丈夫じゃなきゃ、いけないので……だから大丈夫……」

俯いた顔を覗きこんで僕の眼を見据える優さんに、狼狽うろたえながら虚勢をはつた。

オールライトを救げなきゃいけないんだ。かつちやんと轟君だつて救げなきゃ。麗日さんと約束だつてしたんだから。僕が大丈夫じゃなきゃ、オールライト僕がやらなきゃ……！

「デクくんが大丈夫つて連呼してる時つて、だいたい大丈夫じゃないでしょ！ わかつてるんだからね！」

そんな優さんの言葉に何時だつたか記憶が甦る。

あれは……10月の半ばだつたかな……自主的に限界突破してみようと思つて80時間くらいぶつ通しで起きてたときだ。

部屋に來た優さんに僕は大丈夫と何度も呟きながら、そのまま目の前でぶつ倒れたんだつたよな。マッスルフォームは解けなかつたけど、目を覚ましたら優さんの顔がすぐ近くにあつて動揺しまくつた気がする。

事情を話したら「バカじゃないの」って散々叱られたっけ。

ああ、そうか……僕は優さんに甘えてたんだな。強くなるために、オールマイトにも、かつちゃんにも、自分にすら甘えを許さなかったのに。優さんにだけは僕のダメな部分を曝け出してた。それでも優さんは僕を見捨てたりせず、面倒を見続けてくれたんだ。幻滅したり、呆れられても可笑しくなかったのに。

この人の前でなら、僕は強くなかったっていいのかな。

「優さん……僕、死ぬのが怖いんです」

震えた喉で精一杯絞り出した言葉。隠し続けてた僕の本音だ。

ああ、ついに言ってしまった。自分で自分が信じられなくなると思ってた封じ込めてた本音を。こんな僕を優さんはどう思うのだろう？

優さんの反応が気になって顔を上げると、目の前が真っ暗になる。首の後ろに回された腕と包み込むような柔らかな感触で、自分が頭を抱えられ抱き締められているのだと気がつく。

「バカね……死ぬのが怖くない人なんているわけないじゃない。私だって怖いわ」

「……ですよね」

「そうよ……」

優さんの優しい言葉と暖かさに抱かれて、恐怖に震えていた心と身体が落ち着いていく。恐怖は未だ消えはしないが、それ以上に安心しているのだろう。

「優さん、ホントに怖くて恐くて堪らないんだ。僕は死にたくない。もつと生きていたい……！」

「大丈夫、大丈夫よ……」

張り詰めた心が絆ほだされていき、奥底に仕舞い込んでいた弱音が止まらなくなる。優さんはそんな僕の頭をゆつくりと撫で続けてくれた。

弱音を吐ききった。脆い部分を曝け出したけど、それでも優さんが受け止めてくれた。おかげで僕の中の別の本音も涌き出てくる。

「死ぬのは怖い……でも、大事な誰かを喪うしなうのはもつと怖いんです。だから僕は死んでも救いたい……死ぬのが怖いなんて考えるまでもなく身体が動いちゃうんです。めんどくさいやつですよね……」

「ホントに面倒なこと考えてる……でも私はデクくんのそんな優しいところ、好きよ」

優さんの抱き締める力が少しだけ強くなった。僕の全てを許してくれる優さんのことで心がいっぱいいっぱいになっていく。

闇から覗いた恐怖さえも受け入れ火に焼くべる。心の炎が揺らぎなく大きく成っていった。



「僕は救けます。オールマイトを、かつちゃんと轟君を、皆を救けます。怖くても辛くても、絶対に救けてみせますよ。ちよつと欲張り過ぎかな…?」

「いいと思うけどね、オールライトならそれが出来るって信じられるし。私はそんなデクくんを救けるわ。皆を救けるその背中を私が護つてあげる!」

「そんな…悪いですよ。僕なんかの為に——」

「だつてデクくんこんな弱虫じゃない?だから護るの、私ヒーローですから」

抱き締められたままで表情は見えないが、きつと優さんはいたずらな顔で笑っているのだろう。そんな想像をしたからか、僕も少しだけふつと笑えた。

「…笑つたわね?」

「いや、そういうつもりじゃなくて…!」

「ふふつ、冗談。やつと笑つてくれた…なら、もう大丈夫ね」

そう言つて優さんは腕をほどいて離れていき、優しい笑みを浮かべた顔が見えるようになった。

「なんて物欲しそうな顔してんのよ…」

そんなことを優さんに言われて、気がつけば僕は無意識のうちにながらに手を伸ばしていたようだ。恥ずかしさのあまり顔に熱が籠つていくのが自分でも分かる。

どんだけ甘える気だよ、僕! こんなに情けないやつ世の中探しても僕くらいじゃな

いのか!? ああ、恥ずかしい…

「そんな弱虫さんなデクくんは特別サービス——」

縮こまっている僕を見ながら優さんはニヤリと笑った。ゆっくりと髪を掻き分けるように僕の頭を撫でる。そして前髪をかきあげてゆっくりと僕の顔へ顔を近づけていき——

——僕の額に柔らかな感触。頭が蕩けるような甘い香りが鼻を攪り、チュツという小さな音が聴こえた。

「おまじない……これでもう怖くないでしょ?」

「あ……はい……」

妖艶な微笑みを浮かべる優さんに僕はほんやりとした返事しか出来なかつた。

「こんなところ私のファンに観られたらデクくんボゴボコに……されないか。強いし。でもネットでアンチスレがめちやくちや乱立しちゃうかもね!」

「それは……仕方無いですね……うん、仕方ない……」

「ちよつとデクくん? それはそれで大丈夫なの?……効きすぎちゃった?」

優さんのおまじないの効果は絶大で、僕の中にあつた恐怖どころか全ての感情と思考を吹き飛ばしてしまった。

それからのことはよく覚えていないが、ぼんやりとしたまま優さんを近くまで送つていき、その後家路につく。

ベッドに入ると寝れなかつたなんてことが嘘のように、穏やかに微睡みに落ちていった。

長かつた一日が終わり、改めた決意と希望の暖かさを胸に僕は今日を見送る。

——そして……全ての運命が決まる、その日が来た。

—— 爆豪 side in ——

「ぜつてえまけねえ！かかつてこいつ!!」

ちつぽけなクソガキがポロポロになりながら必死に声を上げている。

あれは……ガキの頃の俺か？また懐かしい記憶だな。

これが夢であると理解するまでにそこまで時間はかからなかった。

確か、小学校に入りたての頃に高学年の上級生と喧嘩したんだ。きつかけはゴミのポイ捨てだったか？ まあ些細なもんだったと思う。

「このチビまだやんのか！」

「いい加減諦めろつての、バカかよこいつ！」

「オレはてめーらなんかにまけねー！」

喧嘩にならないほど、一方的にボコられるクソガキ。

相手は自分よりもずっと大きく、それもふたり。喧嘩したところで勝てるわけがねえ。個性を使えば或いは勝てたかも知れねえが、アイツとの約束を律儀に守っていた俺は喧嘩に個性を使うことはなかった。

そんなときにアイツが現れたんだっただけな。

「コラー！ かっちゃんを虐めるな！」

「デク……」

上級生との間に割つてはいるデク。クソガキは半分ベそかきながら嫌そうな顔でデクを睨み付けていた。

あの頃のデクはまだ俺と身長も変わらず、今みてえにマッチョでもなんでもなかった。それでもアイツは臆することなく自分よりも大きな相手に凜として立ち向かって

いた。

「かつちゃんは何やらかしたかわからないけど……上級生がふたりがかりで下級生なんて寄って集って虐めちゃダメじゃないか！」

「なんだよコイツ、先生みたいなこと言いやがつて」

「生意気だな！コイツっ！——あれ!？」

説教を始めたデクに上級生のひとりが掴みかかるが、あっさりと躲されて足を払われて転ばされていく。

「だからさ、そんな直ぐに暴力に頼っちゃだめだよ。まずは話を——「このやろう!!」——おっと!？」

デクが転ばせた上級生に手を差し伸べながら説教を続行したその時、もう一人の上級生が鋭く伸びた爪をデクに振り下ろした。デクは難なくそれを躲したが、不快感を露あつわにしてため息をつく。

そうそう、勝てねえと思った上級生がここで個性を使ってきたんだよ。相手が個性を使ったから、俺も個性で反撃しようと思ってたから好都合とか思ってた気がする。

「どいてろデク！オレのケンカだ！」

「駄目だよかつちゃん、個性なんて使っちゃ。それにこの子達には……ちよつとキツめのお仕置きが必要みたいだ」

「うっ……うっせえー！」

「やっちまうぞー！」

デクの怒気にビビった上級生が個性を剥き出しにして襲いかかった。

そこからのデクは凄かった。個性を存分に使う上級生を素手で、しかも個性を使わずに体捌きだけで一方的にボコってやんの。今思えば、戦闘訓練の経験のある強くてニューゲームなデクが只の小学生に敗けるわきやねえって思えるが、当時の俺には自分と変わらないガキが圧倒的な強さで敵を蹂躪していくように見えて、なかなかショッキンクな光景だった。

「お、覚えてろー!!」

「ひええ。おかしーん!!」

「あ、おーい!もう個性を使って喧嘩なんてしちや駄目だぞー!」

逃げ出す上級生たちにデクは最後までお説教を続けていた。

「ふう……大丈夫かい、かっちゃん?」

「グスツ……たすけてくれなんてたのんでねーよ……!」

泣きベそを擦りながら氣遣ってくれたデクに文句を言うクソガキ。

こんときは安心と悔しさと驚きが入り交じって訳がわからなくなっちゃってたんだよな。我ながら情けねえガキだと思っせ。

それでもデクはいつもと変わらない調子で言ったんだよな……

「ハツハツハ！頼まれてなくつても助けちゃうんだな、これが！」

「わらつてんじゃねえ！なんでだよ！」

「だって、余計なお世話はヒーローの基本」だからね！」

不貞腐れるクソガキに対して、デクは笑顔で力強くそう言い切った。

そう、俺が忘れられなかったデクの最初の教えだ。

デクはこの頃から何一つ変わらない。そして俺はこの時からデクに――

夢の世界が途切れ、身体の痛みでぼんやりと目が覚める。身体が椅子に縛りつけられ腕にはゴツイ金属製の拘束具が取り付けられている。

何時間寝てたんだ？身体の痺れから考えるに一〜二時間じゃ、無さそうだしな。

拘束から抜け出そうと身体を振ると、椅子がガタガタと音をたてるだけでまるで抜け出せる気がしない。

「お、起きたか爆豪君」

「てめえ……俺に何しやがった？」

「ちよーとお薬で長めに寝てもらってただけだよ。酒呑んでる時に目覚められても面倒だったし。だいたい一日と半分くらいかな」

お面野郎が軽い口調で俺に語る。酒盛りのために眠らされていたとは、腹立たしい。少し見回せばそこはバーのような場所で、カウンター席には死柄木が座っており、テレビを眺めている。その正面のカウンター内には黒モヤがこちらに目を光らせていた。轟と継ぎはぎの姿が見当たらない。どこか別の場所に監禁されてるのか……？

「見ろよ……現代ヒーローってのは堅っ苦しくて大変だよな、爆豪くんよオ……」

「〃——それについては、私の不徳の致すところでありませ……」  
テレビに映るのは報道陣に向けて頭を下げる相澤先生の姿。死柄木はそれを指差し  
て嘲笑う。

「なんなんだろうなヒーローって。人の命を自己顕示や金に変換する異様な働き。それをルールでガチガチに縛り上げる社会。敗北者を励ますどころか責め立てる国民。そんなものに、お前は成りたいのか？ もっと自由に生きたいとは思わないか？ なあ、爆豪？」

「まだスカウトごっこしてえのか？」



「純然たる疑問だよ。お前らヒーロー候補生がなんでこんなやつらに成りたいのか不思議でしようがなくてな。つまらないだろ、こんな人生は」

「ハッ！わかつてねえな死柄杓。おめえはヒーローつてのを全然わかつてねえ」

「何……？」

ヒーローを小馬鹿にした死柄杓を俺は逆に鼻で笑う。

「そもそもヒーローを聖人君子か何かだと勘違いしてねえか？逆だ、逆。ヒーローなんてのはどいつもこいつも自分勝手にやりたいことやってるんだよ。そりやそのツケを払うならルールで縛られるに決まってるじゃねえか、やりたいことやって生きてるんだからよ。わかるか？」

「……続ける」

「はいはい。その癖、何時だつて後からノコノコとやって来て、こつちの事情も都合も構い無しに好き放題やった後、決まってる言うんだ「救けにきた」ってな！」

「ムカつく連中じゃねえか……やっぱヒーローなんてくそ食らえだ。成りたい理由にはならないだろう？」

「だからだよ。ルールに縛られてるんじゃないやなく、やりたいことがルールの中にあんだ。だから俺は好き放題生きてやりてえからヒーローに成る。誰よりも強くて、誰よりも自分に正直に生きる……その姿に俺は憧れた。てめえらがどんだけ御託を並べようが

…誰に何を言われようがそこはもう曲がらねえ」

俺は死柄木に言い切る。俺の憧れは、目指す場所はそこしかないのだから。

「——現在、警察と連携して捜査を進めて——」

暫しの沈黙、テレビから流れる声だけがやたらとよく聞こえる。

「思い当たる人物が二人程いたが……どっちも俺の大っ嫌いなやつらだった……」

「そりゃ気が合うな、死柄木。俺は二人とも大好きだぜ……」

「お前とはもう少し話が合うと思つてたんだが、ここまで強情だとは思わなかった。奴等も捜査を進めてるらしいし、悠長に話をするのはおしまいだ——先生、力を貸せ」

そう言いながら死柄木がテレビの方へ振り向くと、先程まで会見を映していた筈のテレビは砂嵐が流れるだけのモニターと化していた。

先生だと……？コイツらには更に上の存在が……そうか、連合の親玉。名前は確かオール・フォー・ワン……デクを殺すヤツ！ソイツが<sup>で</sup>番<sup>ば</sup>つてくれば俺らはどう足掻いても無事じゃいらんねえと考えた方がいいな。ならさっさと轟を救ってトonzラしねえと……ヤツとデクが出会えば……くそつ、来<sup>く</sup>んじやねぞ、デク……

「時間がねえか……今だ！轟い!!!」

「何い?!」「しまった!!」「何だど?」

俺の叫びにクソカスどもは揃って同じ方向を向いた。カウンターの奥、おそらく厨

房があるところだ。これで轟の居場所はわかった。あの工場みたいな別の場所じやないだけだ。いぶマシだ。

あとは俺の拘束をどうにかして、コイツらぶつ殺して脱出するだけ……！今出来ることとでこれをぶつ壊すには……死柄木に触れさせるしかねえ。危険な賭けだが、やるっきゃないだろ！

「おまえ……！引つ掻けたな……！」

「釣られるバカなお前がわりいんだよ！死ねカス!!」

「……もういい、お前は要らない。死体に成っても緑谷を苦しめる道具にはなるだろ……」  
「誰がお前……ときに殺されるか！さっさとかかってこいってんだ!!」

出来るだけ死柄木を挑発し、俺に注意を向けさせ近付かせる。触れられる直前に小爆破で動揺させられれば、この拘束具だけを崩壊させられるって算段だ。

もつと、もつとだ。もつと近寄ってこい……！

じりじりと俺らの距離が詰まり、一髪触発の雰囲気の中……突然扉をノックする音が飛び込んでくる。

「どおもー、ピザーラ神野店ですー」

「今は手が離せねえ！勝手に入ってこい！」

扉から響く男の声。呆けた奴等の顔色。俺は直感で頭を巡らせ、即興で返事をする。俺はここにいと。

「おい！爆豪君、いつピザなんて頼んだ!？」

「あ？——頼んでねえよ？」

「——ッ！ 下がれコンプレス！ドアから離れろっ!!!——」

俺の言葉を真に受けたコンプレスがノコノコと扉へ近付き、勘づいた死柄杓が叫ぶと同時に後ろのドア——ではなくバーの側面の壁が吹き飛んだ。激しい衝撃が辺りに散らばり、耳鳴りで一瞬全ての音が消える。

砕けた壁の塊と共に破壊の原因である男がバーの中に飛び込んでくる。そして無数の樹木のような触手が男の後ろから伸びて、その場のヴィラン連合の面々に絡み付いた。

殴り込んできたソイツは、昔から変わらず俺の都合も思惑も憂いもまとめて吹き飛ばしていく。俺の憧れたその姿は昔と何一つ変わらない笑顔で言った。

「——救けにきたよ、かつちゃん！」

変わらないその姿勢に思わず口角が上がる。ならば俺の言うことも昔と変わら

ないだろう。

「——頼んでねえよ、デク！」

—— 爆豪 side out ——

002. THE DAY

## 003. HEROES

皆に励まされ、支えられ、僕はここまでこれた。そして集結するヒーロー達。かつちやんと轟君を救出するための一大作戦が、今始まる。

横浜市神野区、ヴィラン連合のアジトのあるビルの前。ふたりの雄英生を救けるため、僕は集結した。

「おい塚内イ！なんでメリケン<sup>オールライ</sup>二世が突入で、俺が包囲なんだ!!焦凍が俺の助けを待ってるだろ!!」

「万が一取り漏らした場合、君の方が視野が広い。それに君がいつたら屋内を燃やし尽くしてしまうだろう？ 救出には彼の方が適任だ」

「シヤ！でもヤツはまだ高校生だろ！ここは経験豊富な俺が行くべきだ!!」

「そのために他にもメンバーがいるんだろう？ 経験豊富、目にも止まらぬ古豪グラントリノ。 隠密と素早さに長けたトップヒーローエッジシヨット。若手実力派シンリンカムイの拘束もある。彼らとの相性も考えたら、ここはオールライトがいくべきなん

だ」

「ぬう……」

塚内さんとエンデヴァーが少し突入メンバーのことで揉めていたが、あつという間に説き伏せた。

「おい！ 貴様ア！ 焦凍を救げだせよ！ 怪我ひとつなく速やかになー！」

「言われなくとも！ 任せてくださいよ」

「ひとりで気張んなよ、出久。俺たちもいる……つてもこの老体にあんまり期待されても困るがな！」

「後ろは任せて、オールライト」

グラントリノが後ろから僕の背中を軽く叩く。自虐的だが実力は本物で、僕以上に救出に必要な人物だ。それに続くのは包围担当のガンヘッド、遠近両方を得意とする彼が後詰めにいれば逃げ切れるヤツは少ないだろう。

「いやいや、グラントリノがいれば我らも百人力！ 我のような若輩がこのような大作戦に呼ばれるとは……！」

「きつとカムイなら大丈夫ですよ！」

「オールライト、お前はもつと緊張しろ……てかカムイより若輩じゃねえか？ なら落ち着け、カムイ」

「デステゴロの言うとおりですよ、カムイ。落ち着けば大丈夫！いつも通りやりましよう！」

「なんで俺は後輩にも満たない仮免に励まされてんだ…」

カムイを弄りながら少しだけ、緊張が解れていく。さっきの言葉は自分自身にも言ったことだから。

「そろそろ会見の方も終盤。あの発言を受け、その日の内に突入されるとは思うまい！さあ反撃の時だ！流れを覆せ！！ヒーロー！！！」

塚内さんの合図で機動隊とエッジショットがアジトの入り口へと向かう。そして配置についたところで、遂に作戦がはじまった。

「いきますよー——」

僕はグラントリノとシンリンカムイを抱えてビルの三階まで跳び跳ねる。そこでふたりを放して、拳を引き絞った。

「——スツ、マアアシユツ!!」

僕がビルの壁を殴り壊して中へと突入する。そこには目を白黒させて動揺する死柄木、黒霧、コンプレスの三人と「そつちかよ!?」みたいな顔をしている拘束されたかつちゃんがいた。

「先制必縛！ウルシ鎖牢!!」



続いてカムイが樹木の腕を伸ばして、三名のヴィランをそれぞれ同時に捕縛していった。流石は若手実力派、堅実な行動だ。

「救けにきたよ、かつちゃん！」

「頼んでねえよ、デク！」

笑顔でかつちゃんに呼び掛けたが、辛辣な言葉で返される。でも顔がにやけてるよ、かつちゃん。ホントは待つてたんだろ？相変わらずのツンデレだな！

「奥の厨房に轟とヴィランが一人いる！」

「おい、なんの音だ!!」

かつちゃんが叫んだのと同時にカウンターの奥から顔面継ぎはぎの男、茶毘が驚いた様子で飛び出してきた。

「襲撃?!…燃え尽き——」

「——逸はやんなよ」

茶毘がその腕から炎を出そうと構えた瞬間、目にも止まらぬ速さでグラントリノが後頭部へ蹴り食らわしてその意識を奪っていった。

「ピザーラ神野店は、俺たちだけじゃない」

エッジショットがドアの隙間からスルリと現れ、後ろ手でドアの鍵を開けると機動隊が雪崩れ込んできた。

「これでっ！終わりだ、死柄木弔！」

かつちゃんの手束を引き千切りながら、死柄木へと僕は力強く言い放つ。

「終わり…？終わりだど!?ふざけやがって…！」

「ふざけてんのはおめえだ…！俺たちを拐った段階でもう詰んでたんだよ、お前らは」

「轟君！」

「すまねえ、緑谷。手間かけさせた」

「ホントだよ！詫び死ね半分野郎!!」

「なんでかつちゃんがキレるんだ…」

その間にも奥で拘束されていた轟君はグラントリノに助けられて、バーのフロアに手足を気にしながら歩いてくる。

よし！かつちゃんと轟君は無事だ！これだけでもこの作戦は成功とも言える。でも死柄木は絶対にここで捕まえなきゃな。

「ガキども拐って、ヒーローの信頼を落として…：…これからだっただ。これからってときにお前はア！絶対に殺す!!黒霧、持ってこれるだけ持ってこい!!!」

拘束されたままの死柄木が怒りを露にして叫ぶ。だが、なにも起きなかった。

「すいません、死柄木弔…：…所定の場所にある筈の脳無が…：ない…!?!」

「…はっ。」

黒霧は冷や汗を流しながら死柄木に報告し、死柄木も掌の奥で呆けた顔をしている。切り札を切ろうとしたら、カードがなかったみたいなものだ。それは動揺するだろうな。

「出ないさ。お前らの脳無工場は既にオールマイトが抑えてる。初めからおまえの勝ちはなかったんだよ！もう一度言ってやる。ここで終わりだ、死柄木吊!!」

威圧感を全開にして死柄木を睨む。死柄木は僕を睨み返したあと、チラリと黒霧の方へ視線を向けた。そのアイコンタクトの後、黒霧が動きをみせる。ワープゲートを出現させようとしたのだろう。だがそれをみすみす許す僕らじゃない。

「させるか！忍法千枚通にんぼうせんまいどお——」

「嘗めるなあ……!!!」

黒霧を止めるためエッジショットが個性で「紙肢しし」を伸ばしていくが、死柄木は叫びながら空気の弾ける音と共に衝撃波を発して、エッジショットを吹き飛ばした。

そして死柄木はあり得ないくらいの剛力でカムイの樹木の拘束を引き千切る。すると死柄木の全貌が見えてくる……以前はひ弱だった腕が右側だけ巨大な異形の腕になっていったのだ。

「やっぱすげえなこの腕、指を鳴らすだけでこの威力だ」

「死柄木の個性は崩壊の力じゃなかったのか!？」

「情報が古いなヒーロー。そんなんだから出し抜かれるんだ……こんな風にな」

カムイが驚きを隠せず漏らした言葉に煽りをいれていく自慢げな死柄木。

あれは間違いなく「個性」……カムイの言う通り死柄木の個性は崩壊の五指だった筈。つまりあれは……

「……オール・フォー・ワンから貰った個性か……!」

「先生のことまで知ってるのか、緑谷出久……まあオールマイトの弟子なら知っててもおかしくない。良いだろう、これ。」

《筋骨発条化》《瞬発力》×4 《臂力増強》×3 《増殖》《肥大化》《鋌》《エアウオーク》《槍骨》……全部お前を殺すために先生から授かったチカラだ……!ここに

る全員を挽き肉にするのに十分過ぎるほどのな」

おびただ

夥しいほどの個性が詰まった禍々しい死柄木の右腕。その自信に満ちた顔からは僕を必ず殺せるという余裕すら見てとれる。

「今からこの腕でお前を殴る。それで全て終わりだ、緑谷出久。じゃあ——死ね」

死柄木は僕に狙いを定めて、腕を振りかぶった。圧倒的な質量と破壊力を籠めた凶悪な腕から僕へと真っ直ぐに放たれる攻撃。僕を殺すのには十分過ぎるパワーがそれにはあった。

——だが、それだけだ。愚直に進んでくる直線的な攻撃。フェイントのひとつもな

いのでアツサリと軌道が読める。右腕だけの歪な強化によって、身体の筋肉バランスが大きく崩れており、破壊力を支えるだけの下地が何一つない。腰の入っていない腕だけのテレフォンパンチ……いや、パンチとすら呼べないだろう。何故なら死柄木は自らの個性故に拳すら握れていないのだから。

「——遅いっ!」

僕は左腕でアツパーを放ち、迫る死柄木の腕を上へと弾いて破壊の行く先を変える。突き抜ける衝撃は僕や周りの人々ではなく、バーの天井を突き破りビルの屋上までまともて吹き飛ばした。大したパワーだが、当たらなければどうということはない。

弾きあげた異形の腕を右手で掴んで、片腕だけで振り回し死柄木の身体を床へと叩きつけた。そのまま馬乗りになり死柄木の左手首を左手で掴んで捻り、完全に拘束する。

「死柄木弔、今——」

「——させねえよ!!」

死柄木が拘束されたことに焦った黒霧がゲートを出そうとするが、爆速ターボで急襲をかけたかつちゃんによって胴体を爆破される。周囲に割れたグラスやボトルを散乱させながら黒霧は壁に叩きつけられ、身体から煙をあげて気絶したように動かなくなつた。

「前に言ったよなあ黒モヤア：お前は俺が必ずぶつ潰すつてよお」

「黒霧……くそっ！離しやがれ!!」

かっちゃんに至極満足げに笑っていた。余程これまでのフラストレーションが溜まっていたのだろう。僕は跪く死柄木を押さえつけながらそんなことを思っていた。直ぐにエツジショットが黒霧の体内に入り込んで気絶を確認して、こちらにハンドサインを送る。

「終わりだつて言ってるだろ、三度も言わせるな。お前みたいな三下に構ってる暇はないんだよ!!」

死柄木への再三の宣告。二度あることは三度あるというが、これで本当に終わりにさせてもらう。

ヴィラン連合は先の襲撃で半壊させたし、ここにいるメンバーも全員ヒーローの手によって拘束した。特に一番厄介な黒霧を抑えれたのは大きいな。これでコイツらが逃げ出したり、オール・フォー・ワンのいる倉庫に合流したり出来なくなつた。死柄木の腕には少し驚かされたが、あんな筋肉の欠片もないモノに僕の筋肉は負けない。

あとはオール・フォー・ワンを倒せば……全てが終わる!!

「こんな……こんなところで終われるか……これから……これからだつたんだ……ふざけ

るな……！殺す……殺す……！殺してやる……！」

「壊れちまったか……？」

死柄木がぶつぶつと呪詛のように僕の下で呟いていて、かつちゃんはその様子を哀れみの目で見ていた。だが僕にはこんな負け惜しみに付き合っている暇はない。さつさと気絶させて止めを刺すために拳を振り上げた。

その時だった。

「俺は——お前を殺す!!緑谷アアア!!」

死柄木の叫びと呼応するように周囲に無数の黒い液体が吹き出してきて、そこから脳無が続々と現れ始めた。

そして死柄木の口からも同じような液体が吹き零れてくる。

「なんだ!?!なにが起こってる!?!」

「マズイ!全員持つてかれるぞ!!」

視線をあげ見回すと、死柄木のみならず他の連合の面々も黒い液体に包まれて、飲み込まれるように消えていく。そして——

「お……!!?」「おえっ——!!?」

「かつちゃん！轟君！！」

「んだこれっ、身体…飲まれ……」

「っ!!ダメダメ、ダメだ！渡さないっ!!」

死柄木を捨て置いて直ぐにかつちゃんに駆け寄り、身体に纏まりつく液体を掻いていくが、全て無駄だと言わんばかりにどんどんと飲み込まれていく。

「かつちゃん!!!!」

「デク——」

黒い液体に飲まれ行くかつちゃんは僕へと手を伸ばす、僕もその手を取るため必死に手を伸ばすが……かつちゃんの手は僕の手をすり抜けて黒の中に消えていった。また僕の手は空を切る。

「かつちゃん……——」

今度は慟哭すら出さず、ぼそりと呟くように名前を呼ぶ。そして脱力して床に膝をついた。なにかが身体を抑えるような感覚があったが、それすら気にならないほどに身体に力が入らず、思考がまとまらない。

また、また届かなかった…手の届くところにいたのに……！これで終わりだと慢心した。目の前に集中せずにはいた。これがその結果か……前世でのかつちゃんたちの転移もこれだったのか……！黒霧の個性で来たものと思っ込んでいた。黒霧と死柄木を抑



えれば勝てると思ひ込まされていた。全部オール・フォー・ワンの手の内じゃないか……また負けるのか…僕は、ここで……

『しつかりせえつ！デクさんはつ！こないなとここで立ち止まっていられへんやろつ!!』  
あの日の麗日さんの言葉が脳裏を過つた。

そうだ、僕はこんなところで立ち止まっちゃダメなんだ!!二回目の敗けがなんだ！奪われたのなら、奪い返せばいいだろ!!

「出久うう!!」

現実に意識を戻すとグラントリノの声が耳に飛び込んでくる。立ち上がろうとしたが、身体中に何かが重く纏まりついている。それは何人かの脳無……こいつら邪魔だ。

「——オクラホマ・スマッシュ!!!」

僕は自らの身体をプロペラのように勢いよく回して、纏まりつく脳無を一気に引き剥がして弾き飛ばした。飛ばされた脳無はビルの壁を突き抜け、無くなった天井から飛び出していた。

「大丈夫か!?こいつらまだ出てきやがる!!」

「大丈夫です！それよりオールマイトの方にいかないと！」

「アイツが出てきたってことかあ……？」

立ち上がって直ぐ、グラントリノに襲いかかっていた脳無を殴り飛ばしながら話しかける。グラントリノもこの現象の原因に思い当たったようだ。

「エンデヴァー!!!」

砕けた壁から乗り出して、階下にいるエンデヴァーを呼ぶ。しかし既にビルの外も溢れかえる脳無で混乱した状況になっていた。

「倉庫に向かいます!!ここは任せましたっ!!!」

一方的な物言いになってしまったが、それでもこの場をエンデヴァーと他のヒーローに託し、僕は闇夜へと飛び立つ。

足元に街明かりが広がる中、僕は空を全身で叩いて、暴風を撒き散らしながら空中を突き進んでいく。

—— 待っていて……オールマイト、かっちゃん、轟君。今行く!!!

—— オールマイト side in ——

—— 突入直前

「皆、準備はいいか!!？」

「勿論です、オールマイト」

「任せてや！いつでもいけるでえ！」

「我もだ……！」

「ウチのサイドキックも準備できた。俺もな」

「俺の部下たちも準備万端。しかしこれほどまでの強者が集まるとはな」

「私、このメンバーだと浮いてません？」

私の呼び掛けに応として皆が答える。皆というのは、制圧班のメンバーのプロヒーローである……ジーンスト、ファットガム、虎、フォースカインド、ギャングオルカ、Mt.レディだ。他にも後方に機動隊とフォースカインドやギャングオルカのサイドキックが控えている。

「そんなことはないぞ！君の破壊力はこの面子の中でも随一！それに最初は——」

「——さあ、流れを覆せ！！ヒーロー！！」

「さあ、作戦開始だ。ド派手にいこうか！！」

話の途中だったが、インカムから塚内君の作戦開始の合図が聞こえてくる。あちらでも始まるようだし、こちらでも合わせて突入するとしよう。

「予定通り、我が弟子との技を借りる！Come on！ lady！！」

「うううなんですかそのいいかた……いい、行きます！」

私はしゃがみこんでバレーのレシーブのように腕を伸ばして構える。そこに少し恥じらったMt・レイが駆け込んで、私の腕を踏み込む。その瞬間腕を大きく振り上げながら立ち上がり、Mt・レイを上空へと射出した。Mt・レイはぐんぐんと高度を上げて、地上からおよそ40メートルほどの高さに到達する。

Mt・レイは高所から落下していく最中に、個性を発動させその名に恥じぬ身長20メートルの巨大な姿へと変身していく。

「ナイアガラ・フォール！！」

落下の勢いを利用した超質量のフットスタンプが、圧倒的な破壊力を持って倉庫の入り口……いや、入り口のある外壁を粉碎した。

「突撃イ！！！」

私の号令と共に皆が倉庫内へと突入。先の衝撃で様々な機器が散乱する倉庫に足を踏み入れる。しかし、反撃など一切なく、そこには誰の気配もなかった。ただ、散乱した機器に混じる物言わぬ脳無を除いて。

「捕らえろ！なにもさせるな!!」

ジーニストの叫びをきっかけにその場の全員が脳無を確保していく。一分もしないうちに見える範囲にいた脳無を全て捕らえることに成功した。だが、私の頭にはまだ不安が残る。

あつさりとした事が進みすぎている。これほど大掛かりな施設にも関わらず、監視や防衛の人員がいらないのが不思議だ。我々の奇襲が功をなしたと考えるべきか？いや、緑谷少年の話が本当ならここには――

「いやあ、相変わらず土足で踏み荒らすのが得意だなアヒーローは……」

「誰だ!!？」

倉庫の奥の暗闇からうつつすらと人影が見え、その声が響き渡る。先程まで気配すら感じさせなかったというのに、気が付くとそこにいたのだ。背筋が冷える感覚と心の奥底から湧き出る怒り、コイツは……ヤツだ。

「……少し間引くか」

「皆下がれエエ!! DETROIT―SMASH!!」

暗闇の人物が腕をこちらに向け、正体不明の衝撃を放つ。同時に私も腕を振り抜き、特大の暴風を放つ。衝撃と暴風が正面からぶつかり合う。完全に相殺されたというわけではなく、周囲に風と衝撃が広がり倉庫と我々を吹き飛ばした。

「皆無事か!!」

「大丈夫です……オールマイト。おかげで皆下げられました……」

返事をしたのはジーニストだった。あの風と衝撃の中でもジーニストはその個性で他のヒーローと機動隊の繊維を操り後ろへ大きく弾き飛ばして、巻き込まれないようにしていた。だが自らはモロに衝撃を食らってしまったようで、全身から血が滲んでいる。

パチパチと手を叩く音が辺りに響く。砂埃が晴れたその先に拍手をしながら宙に浮く、ヤツの姿が見えた。

「今ので君以外は全員消し飛ばそうと思ったんだが、やるじゃないか。流星はNo. 4、ベストジーニストだ」

「……オール・フォー・ワン……!!」

「その他大勢は、彼らに任せるとしよう」

両手を広げて私を挑発するオール・フォー・ワン。直後、ヤツの背後から無数の脳無が現れてきた。だがその大半は謎の黒い液体に飲まれて消えていく。それと同時にヤ

ツのそばに黒い液体が涌き出て、そこから六人の人物が吐き出されるように出てきた。「なんじゃ、こりゃあ……どこだ!？」

「先生……!!」

拐われていた爆豪少年と轟少年、そして死柄木弔をはじめとしたヴィラン連合の四名が現れる。それを機に脳無たちは一斉に動き出し、私を無視して背後へと駆けていく。狙いはプロヒーロー達か!!

「ジーニスト！皆と共に少年らを救え！それと機動隊！避難区域をもっと広げてくれ!! 私——」

「悪いね、弔。いろいろと話したいが今は忙しい。ヒーローを倒してここは逃げろ。僕は——」

「——アイツを倒す!!」  
彼

オール・フォー・ワンと私は同時に飛び出し、空中で拳と掌で取っ組み合いになる。そしてヒーロー達とヴィラン連合の戦闘が始まった。

地上では脳無とヴィラン連合が猛威を奮い、ヒーロー達がそれに立ち向かう。少年らも抵抗を続けて今にも逃げられそうだ。そして私とオール・フォー・ワンは空中で殴り合いをしている。ヤツの指先から伸びる黒い棘がまとわりつけば振り払い、私が拳を奮えばそれを受け流す。

隙をみてオール・フォー・ワンが死柄木の援護に衝撃波を放つ度にスマッシュで相殺し、じわじわと連合はヒーロー達に追い詰められていく。

「SMASH!!——」

「《衝撃反転》」

「——ツア、アア!!」

オール・フォー・ワンの顔面を殴り付けた拳にその力が全て跳ね返ってくる——が、跳ね返された以上のチカラを込めて強引に拳を振り抜いた。ヤツが被っていたガラス質のヘルメットが砕け、眼も鼻も失われた顔のない顔が露になる。オール・フォー・ワンは無い筈の眼でこちらを睨み付けてきた。

「思ってたより元気だなあ、オールマイト。僕の予測じやもつと衰えていると思ってたよ……」

「生涯現役をモットーにしてるからな。比べて貴様は大分弱くなつたな、オール・フォー・ワンツ！」

「こんな身体にされてからストックも随分と減つてしまつてね。君を殺すのにお誂え向きの個性があつたんだが……生憎ながら今は弔に貸しているんだ」

オール・フォー・ワンが死柄木の方を指差しながら語る。隙を見せないように横目で



確認すると、死柄木の右腕は見たことの無い異形の腕になっており、ヒーロー達に十分に対抗している。

なるほど、力押しに弱かった死柄木にパワー系の個性を渡したのか。かなりの破壊力を持つているだろうし、崩壊の個性と合わせれば確かに驚異的な強さになるだろう。でもこの状況では焼け石に水だ。脳無をほぼ制圧しつつあるヒーロー達。更にはここに集まったのは近接格闘を得意とするタイプも多い。付け焼き刃の死柄木の腕はいくらパワーが有っても通用しない。

「選択を間違えたなオール・フォー・ワン。死柄木弔がやられるのも時間の問題だ。そして貴様も私の手で倒し、死柄木もろとも刑務所へぶちこんでやるっ!!!」

「っ！随分と死柄木弔が追い詰められるのが嬉しいようだね、オールマイト?」

「貴様も死柄木も悪の権化のようなやつだ。この国の平和を守るために、捕らえるのが私が師から継いだ使命だっ!!」

「ハハハ、先代……志村菜奈からねえ……フフっ……」

腕と拳を交わしながらオール・フォー・ワンと私は言葉を重ねる。だがお師匠の名を聞いた途端に不気味に笑い始めた。

「何がおかしいというんだ……穢れた口からお師匠の名を出して……揚げ句嗤うだど? 許せんっ!! お師匠から受け継いだこのチカラでこいつを倒す、それで全てが終

わるのだ！チカラを貸してくださいお師匠……！

グツと拳を握る力が強くなり、そのまま腕にチカラを込めて引き絞る。

「あのね……死柄木弔は志村菜奈の孫だよ」

「……は？」

頭の中が一瞬にして真っ白になった。

直後、無防備な身体に衝撃波が直撃し、地面へと叩きつけられる。

「……ぐっ!!」

「隙だらけだったよ！オールマイトっ！」

立ち上がろうとするが立て続けに衝撃波が襲い、動くことすらままならない。

「君が嫌がることをずうっと考えてた！嘘だつて思ってるだろう？事実さっ！わ

かっているだろう？僕のやりそうな事だ！君は弟子と二人で何度も弔を下したね！な

にも知らず、勝ち誇った笑顔で!!ハハハ！いつもの笑顔はどうした？オールマイト！

……やはり……楽しいな！」

勝ち誇ったオール・フォー・ワンの声と共に何度も何度も衝撃波を叩きつけられ、全

身がズタズタになりながら地面に抑えつけられる。

私はこれまで……お師匠の家族を……私はなんということをして……

「平和の象徴は……今日ここで折れる。もう少し君の歪んだ顔を見ていたかったが、時間も惜しい。さあ、終わりにしようか、オールマイト」

先程までより強大な溜めを作りながらオール・フォー・ワンが私へ腕を向ける。私の身体は動いてはくれなかった。

もう……私は――

「――やはりきたか……!」

「――スマアアアツシユツツ!!」

それは突然の出来事だった。オール・フォー・ワンは上空に振り向いて溜めた衝撃波放つ。それに対抗する乱入者は拳を振り抜き衝撃波を打ち消していく。

緑色の影が私とオール・フォー・ワンの間に舞い降りる。

「オールマイトは絶対に殺させやしないぞ! オール・フォー・ワン……!!」

緑の髪に、緑のコスチュームを身に纏う筋骨隆々なその背中の持ち主は身体中からチ

カラを迸らせながら力強く叫んだ。

「……………緑谷……………出久……………」

——私を救うと言い続けてきた少年が、ついにその舞台に立った瞬間だった。

—— オールマイト side out ——

003. HEROES

## 004. 空に歌えば

地面に沈むオールマイト。それを見下ろし止めを刺そうとしていたオール・フォー・ワン。僕は飛び込んで、ヤツの一撃を打ち消した。

大丈夫、オールマイト。貴方は僕が必ず救けます!!

「もうお前の好きにはさせないぞ、オール・フォー・ワン! 何故かって? —— 僕が来た!!」

「師を助けに来たか、緑谷出久…本当に厄介な男だよ、君は」

拳を構えてオール・フォー・ワンと対峙する僕。オール・フォー・ワンの殺気に呼応するように、僕のワン・フォー・オールの出力が上がっていく。

先程オール・フォー・ワンの姿を捉えてからずっとだ。身体の奥底からチカラがどんどん湧き出てくる。しかも溢れるわけでもなく次々と僕の筋肉に馴染んでいくんだ。まるでこのチカラがヤツを倒せと語りかけてくるように……

ワン・フォー・オール——99%!!!!

「ワシントンッ！スマアツシユ!!」

「気が早いな!——何い!?!」

チカラを解放した僕の一撃とヤツの放った衝撃波が衝突する。そして僕の一撃が衝撃波を食い破り、驚くヤツへと襲いかかった。衝撃波に飲まれるオール・フォー・ワンだが、その身体に目立った傷は見当たらない。直接殴らなければ通用しない…か。

「想定よりずっと強いじゃないか…オールマイトの一撃と遜色無いレベルだ」

「お前を倒すために鍛えたチカラだ、負けるものかよ!お前も、その意志を継ぐ死柄木も、僕が…僕らが倒すんだ!!いけますか、オールマイト!!」

こちららを品定めするオール・フォー・ワンに拳を突き出して宣告する。オールマイトに同意を求めるが、なぜか返事がない。

「…オールマイト?」

「ああ…すまない、緑谷少年。我々がやらなければならない…そう…なんだな」

オールマイトの返事はやけに歯切れの悪いものだった。傷が見た目より深いのかと心配になってくる。ならひとりでもっと思った矢先にオール・フォー・ワンが高笑いを始めた。

「無理だよ、緑谷出久。オールマイトはもう死柄木弔を敵として見れていない。ハハハ!…(こ)まで効くとは思わなかったよ!」

「なんだと!? なにいつてんだよ! そんなわけ——」

「——あるんだよ。弔はオールマイトの先代志村菜奈の孫だつてことを教えてあげたら、さつきからこの調子さ。まあ、志村つてのは君にとつてのオールマイトで、その家族を貶めようとしていたのさ、その男は!」

「くっ……」

「嘘……ですよね、オールマイト……?」

「……」

震えながら僕から目を逸らすオールマイト。それは嘘ではないという他でもない証拠となる。

そんな……オールマイトの恩師の家族が死柄木で……ヴィランに……? なんてそんなことに————こいつ……こうなることをわかつてずっと前から……それで死柄木を育ててきたのか!? なんてヤツだ……!

「それなら僕が二人とも倒す! オールマイトを護るっ!!」

《衝撃反転》——君の力は全て君に返るっ!」

飛び上がりながらオール・フォー・ワンを直接殴り付けるが、ヤツの個性によつてその衝撃が僕の右腕に跳ね返り大きく吹き飛ばされた。

直接攻撃じゃなきゃダメージが通らないのに、物理攻撃無効だど!? 反則技じゃないか

!!……いや、まて、衝撃は無くなったのではなく、返ってきたんだ。なら、攻略法はある……!

「はああ!スマツシユツ!」

「バカの一つ覚えかな?——《衝撃反転》」

「つと見せかけてええ!!」

僕は殴る寸前に拳を止めて、ヤツの伸ばした腕を掴んで腕と胴に足を絡ませていく。そして一瞬のうちに腕を極めた。

立ち関節技…腕挫十字固め!!

完全に極った関節技からは力任せでは抜け出せない。それに衝撃を反転しても関節技は相手の力も相手に返る。蹴けば蹴くほど、衝撃がヤツの腕の中を暴れまわり痛め付けていくのだ。

「ぐああ!!離れろっ!」

「離すかつ!」

「くそっ!!!——解除。ふんっ!!」

ギチギチと極っていく間接の痛みに耐えきれず、オール・フォー・ワンは衝撃反転を解いて、棘のような触手で僕をぶん投げる。

くっ!衝撃反転には対抗できるけど、これじゃヤツに止めがさせないのは変わらない



…！やっぱり勝つにはオールマイトが要る…！

「まだだ！このっ！立って、オールマイト！！二人なら勝てます！」

「しつこいな君は…もうオールマイトは折れたのさ。大事な師匠の家族とは戦えない。僕と戦うつてのは恩人の家族の大切な人を奪うつてことだから、さあ！」

「ぐっ！ダメだ！立ってオールマイト！だつて——」

オール・フォー・ワンの攻撃を捌きながら再びを距離を詰めていく。そして再び間接を極めながらオール・フォー・ワンを抑え込んだ。

その最中にもオールマイトに立ち上がれと問いかける。心の奥底から感情が湧き出て止まらない。ひとりでも戦わねばと考えてはいるのに、心が、身体が、オールマイトが折れることを許さない。

そこから先は最早無意識に口が動いていた。まるで何かに突き動かされるように。

「——本当に大切なら止めなくちゃ！間違つた道を歩んでんだから僕らが止めてやらなきゃいけない！受け継いだのはチカラだけじゃなく、意志もだろ！？だから立て！俊典い——！！！」

「アアアアアア!!——S M A A S H!!!」

失意の底からオールマイトは立ち上がり、チカラを宿した一撃を放つ。生み出された暴風が僕が抑えていたオール・フォー・ワンに直撃し、僕はヤツを盾にして身を守った。吹き飛ばされたヤツはダメージ感じさせる飛びかたで僕らから離れていく。

「ありがとうございます……お師匠。そして緑谷少年、待たせたな。これから二人で戦おう!!」

「はいっ!!オールマイト!」

僕とオールマイトはふたり並んで、オール・フォー・ワンに向けて拳を構えて見据える。二人ならもう何も恐れるものはない。

「本当に厄介だ……志村も、君たちも。簡単に勝てるなんて思わないで欲しいな。僕だっっていなくなった仲間たちの意志を預かってここにいるんだから——ここからだ!!」

歪な信念を込めた視線が僕とオールマイトを射抜き、オール・フォー・ワンは両手を広げて吠える。

それからの僕らの闘いは熾烈を極めた。

オール・フォー・ワンは炎を燃え散らし、氷塊と共に周囲を凍てつかせ、雷電を迸らせては、衝撃波を放ち、衝撃を跳ね返し、黒き棘や槍の延ばし、時に転移を僕らに施しながら、多種多様な個性で僕らに襲い来る。

しかし、それでやられる僕らではない。

炎熱を吹き飛ばし、氷塊を砕き、手刀で真空を作り雷電を受け流す。衝撃波を相殺しながら殴り付け、反転されても二人で強引に押し返した。転移されようと振り向いて殴りかかり、槍や棘は叩き落とした。

徐々にだが僕らのチカラがヤツを追い詰めていく。短くも長い、光と闇の宿命の闘いは終わりを告げようとしていた。

「いけるぞ、少年！」

「はい！オールマイト！」

こちらに合図を送りながら駆け出すオールマイトに合わせて、僕もオール・フォー・ワンへと距離を詰める。先程まで周囲に飛び散っていた個性が鳴りを潜め、オール・フォー・ワンは静かに僕らを待ち構えていた。

「僕は君達が憎い……これで決める……《空気を押し出す》《爆裂》《炎熱》《氷結》《空気

圧縮》——《衝撃反転》……消し飛ば……！——」

オール・フォー・ワンの前方に掛け合わされた個性の塊が出現し、圧縮され、解き放たれた。これまで見たことの無いような圧倒的破壊力を持ち合わせた大爆発が巻き起こる。

僕はそれに向かって更に速度を上げて、前へと踏み出していく。僕の全力を持つてヤツの必殺の技を撃ち破る……！

——ワン・フォー・オール——プルスウルトラ!!!

「DETROITTTT!!!——SMAAAAASHHHH!!!」

迫り来る破壊の壁に向かって、全力を超えたチカラを込めた一撃を放つ。全てが光に呑み込まれていく中で、僕は更にチカラを流し込んで拳を振り抜いた。チカラと爆発が衝突し衝撃が広がって、そして——

——僕は耐えた。拳は血に塗れ、全身がズタズタになって軋むが、それでもあの一撃を打ち消し、耐え抜いた。

目には信じられないものを見るように驚愕するオール・フォー・ワンがいた。だが、僕の身体は未だに衝撃によるダメージが続き、動けずにその場に膝から崩れ落ちる。でもそれでいい……！

「任せましたよ……オールマイト……」

ヤツを打ち砕くのは、オールマイトに任せただから。僕の後ろで大爆発から逃れたオールマイトが、僕を飛び越えてオール・フォー・ワンへ迫る。

「任された……ありがとう……!!」

僕を越えながらオールマイトは小さく呟く。僕はゆっくりと倒れながらその背を見送った。

——いけ、僕のヒーロー……オールマイト!!!

UNITED—STATES—OF—SMASH!!!!

顔のないオール・フォー・ワンの“顔”に拳が突き刺さる。

それは平和の象徴《オールマイト》の揺るぎなき信念の一撃だった。

オール・フォー・ワンは地面を何度もバウンドしながら転がっていき、瓦礫と化したビルの壁面にぶつかって止まる。オール・フォー・ワンの頭は垂れ下がり、僕はオールマイトの勝利を確信した。

「緑谷少年、大丈夫か?」

「ええ……なかなか響きましたけど、大丈夫です……! オールマイトこそ……」

オールマイトはすぐに僕を気遣って手を差し伸べてくれた。その手を取りながら立

ち上がるが、オールマイトはマッスルフォームの変身が解けかけていて、限界間近と  
いった様子だ。

「終わったんですね、ようやく…」

「ああ、長かった因縁もこれで終わりだ。本当にありがとう緑谷少年！」

僕とオールマイトはゆつくりと、一步一步を踏みしめて倒れたオール・フォー・ワン  
へと近づいていく。瓦礫の山を歩き、静けさが事件の終結を感じさせた。

「…やあ、オールマイト……僕の負けだよ。君達は僕が思うよりずっと強かった……弔  
共々、捕まってしまうのだろうね」

「オール・フォー・ワン、私はもう迷わない。お師匠の家族が過ちを犯すなら、私が止め  
る……」

「そっか……僕もこれでおしまいか……やつと休める……」

オールマイトの宣言に、オール・フォー・ワンは力なく項垂れて安堵の息を吐きなが  
ら、ゆつくりと微笑んでいた。

だが、その微笑みが……凶悪で醜悪な狂気の笑みへと変貌していく。

「だから……君達も一緒に終わらせてやるっ!!」

「——ッ!!危ないっ!緑谷少年!!!!」

オールマイトに首根っこを捕まれ、猛烈な勢いで後方へと投げ飛ばされる。

直後、僕の目の前で再びあの大爆発が起きる。先のものより規模は小さいが、その破壊力は変わらない。投げ飛ばしと爆発に煽られて僕の身体は宙を舞い、そして瓦礫へと叩きつけられる。

「オールマイト!!!!」

すぐさま立ち上がり爆発に消えたオールマイトの名を叫ぶ。辺りには爆煙と砂埃が舞い、様子が伺い知れない。僕は腕を振るって風を起こし、煙を払いのける。

晴れた煙の先にヤツの姿だけが見えた。

「オール・フォー・ワアアアンツ!!許さないっ!よくもオールマイトをおおっ!!!」

僕は激情に身を任せて、オール・フォー・ワンへと突撃する。そして半分ほど距離を詰めたあたりでオール・フォー・ワンは僕に向かって何かを射出した。

「——っな!?!」

僕はそれを薙ぎ払おうと腕を奮うが、飛んできていたのはU字ロツクのような形をした黒い杭だった。腕を手首から拘束され、慣性に引つ張られながら後ろへと持つていかれる。抵抗をしようとした矢先に続けて二発目、三発目と杭が飛んできて、首と胴体。そして四発目の杭で左手を拘束され、瓦礫の山に吹っ飛ばされて、そのまま礫にされる。

拘束だど!? 時間稼ぎのつもりか…! ふざけるな!!

ワン・フォー・オール——フルカウル! プルスウルトラ!!

「——嘗めんなア!!」

僕は全身にチカラを巡らせて、強大な臂力りよりよくで腕の拘束を強引に引き剥がした。そして首の拘束を手で引き千切りながら正面を見据える。

煙が完全に晴れて、オール・フォー・ワンの手前の右側…。僕とヤツの中間辺りにオールマイトの姿が見えた。トゥルーフォームに戻り、息も絶え絶えだが確かに生きている。怒りに満ちていた頭の中がすすきりと穏やかに、それでいて冷静になった。

オールマイトが生きてる…! ならば後はオール・フォー・ワンを倒して、そしてオールマイトを助け——

「救けて……」

弱々しい女性の声が微かに聞こえた。その正体はすぐにわかる。オールマイトとは反対側、僕の左手のオール・フォー・ワンとの中間辺りに瓦礫に挟まれた女性が見えたから。

気が付いたときにはもう手遅れだった。僕は既に詰んでいた。オール・フォー・ワンによって詰まされていた。



オール・フォー・ワンはこれまでに見たどの人間よりも醜悪に、狂喜的に、そして楽しそうに口元を大きく歪ませて嗤った。

そしてその両腕を枝にも槍にも見える黒きモノに造り変える。かつて僕とオールマイトの命を奪ったあの「槍」だ。

「止めろおおおおお!!!」

叫びながら胴の拘束を引き千切り、前に踏み出した。それと同時にオール・フォー・ワンの槍がオールマイトと瓦礫に挟まれた女性に向かつて伸びる。

僕の頭が普段とは比べ物にならないほど超高速で回り、思考のスピードが身体の動きを凌駕する。まるで世界がスローモーションに見えるほどに。

どうする? どうすれば止められる!?! ふたりを救えるんだ!?! 考えろ、考えろ考えろ!!

オール・フォー・ワンを直接殴ってブツ飛ばせば、槍はふたりに届かない。でも僕らの位置関係じゃ僕がヤツを殴る前に槍がふたりを貫いてしまう。ダメだ!

ここから拳を振り抜いて暴風で槍を弾き飛ばすか? 槍が風圧で軌道を変える保証がどこにもない! ダメだダメだ! やっぱり直接触れなきや確実には止められない!!

何か物理的な干渉を……くそっ! 小粒な瓦礫しか周囲にはない!! これをぶつけても槍が止まるとは限らない……ダメだ! どうすれば!?!

僕の焦りをオール・フォー・ワンは嘲笑うようにこちらを見ている。言葉にはしていないが「さあ選べ」、そう言っている気がした。

右にオールマイト、左に女性。槍は僕から見て、奥から手前へと伸びている。どちらかに走り込めばこの手で直接槍を突き飛ばせる距離と速さだ。それを選べと…!?  
オールマイトか女性かどちらか一人しか救けられないと。

僕に両方救う手立てはない——僕は選択を迫られる。

どっちだ?どっちを救ければ…!どっちを選べば…!!

瀕死のオールマイトか?それとも瓦礫に挟まれた女性か? ずっと救けたかった憧れの存在か?はたまた巻き込まれただけの見ず知らずの存在か?

救きたいという私情か?救けなければという使命か?

救けるのは…救かるのは…僕デクか?オールヒライトか?

——僕は……どっちだ。

どちらも選べずにただ歩を進める僕。選びたくない、そんなことを思い始めた時

だった。

こんな僕に。こんな僕の為に。こんな僕だからこそ……オールマイトは最期の道を示した。

ごめん……ごめんなさいオールマイト。僕がひとりで選べないから……!!

必ず救けるって言ったのに! 皆を笑顔で救ける最高のヒーローに成るって言ったのに! 約束破ってごめん……! 嘘ついてごめん……オールマイト……ごめんなさい……

期待を裏切ってごめん……! ごめん! オールマイト!!

僕は選び、駆け出した。救ける為に。

オールマイト、オールマイト。オールマイト!! 救ける、救けるよオールマイト! 僕、救けるよ……必ず救けるから……ありがとう、オールマイト。

「——スマアアツシュツツ!!」

僕の振り抜いた拳が黒き槍を捉えて弾き飛ばす。

——僕のこの腕はかけがえの無いただひとつの命を救け、守り抜いた。

—— オールマイト side in ——

我々が勝利を確信した時、オール・フォー・ワンの顔が醜く歪んだ。あれは間違いなく、悪を為す人間の顔だった。

咄嗟に緑谷少年の首もとを掴んで、ここから離れるように投げ飛ばした。その瞬間、オール・フォー・ワンは最後の力を振り絞り、全てを呑み込む大爆発を起こしたのだ。

私は限界の身体に鞭を打ち、ワン・フォー・オールを滾らせて防御した。私は光に呑み込まれていく——

——目を覚ますと目の前には瓦礫の山が広がっていた。右を見ればオール・フォー・ワンが勝ち誇った表情をしている。なにを……嗤っているのだ。左を見れば緑谷少年が瓦礫に黒い何かで身体を拘束され跪いていた。

「救げなければ」と思い、立ち上がろうとしたが、身体が動かない。マツスルフオームの変身が解け、脆弱なトゥルフオームになってしまっているようだった。

「救けて……」

弱々しい声が正面から聞こえた。瓦礫に挟まれ動けなくなった女性が救いを求めていた。救けるぞ、今救ける……！

だが身体は動いてはくれない。限界を超えた反動が一身に響いているためだろう。

直後、オール・フォー・ワンからおぞましい邪気と殺気が放たれ、嫌な予感と共にヤツの姿を確認する。ヤツの腕が黒き槍に変化し、切っ先が私に向かって伸びてきていた。あれに貫かれれば、私は死ぬだろう。

瞬間、世界が制止したような感覚に陥る。そしてこれまでの人生の思い出が瞬く間に脳内へと浮かび上がった。

ああ、これ……走馬灯つてやつかあ……

幼き日の思い出、学生時代の決意と後悔、お師匠との約束、平和の象徴として駆け抜けた日々……そして緑谷少年と過ごしたこの一年のこと。思えば君には驚かされればかりだったな。

緑谷少年と初めて出逢ったあの日、最初に懐いた印象は「破天荒な少年だな」だった。

やたらとガタイがいいし、一人でヴィランに立ち向かっているし、かと思えば私の顔を見て失神。 起きれば飛び立つ私に飛び付くわ、後をついてきた筈なのに追い越していなくなるわ、あげく友達を救ける為にヴィランに突撃するわで、もう滅茶苦茶だったな。

スカウトしようと声をかけたのに、君はとんでもない話を次々と語ってきた。それもボロボロと涙を流しながら、必死の形相で。そして決心した顔で「貴方を救けにきた」だもんなあ……長いことナチュラルボーンヒーローやってきてた私にとつては、まさかそんなことを言われる日が来るとは思ってもみなかった。 そんな君だからこそ弟子として育てようと決意できたんだが。

弟子になってからも君は全くブレなかった。私とナイトアイの与えた過酷な課題に對して嫌な顔ひとつせず、全て全力でやり抜いて見せた。 限界を超え恐怖に苛まれても「救ける」、という一心で乗り越えてきた。 まあ流石にあの無人島生活は無茶振りが過ぎたと反省しているよ。 君があそこまで強くなったという一点を除いてね。

君はあつという間に仮免を取得して、Mt. レイのサイドキックとして大活躍し始めた。 あのとときは恥ずかしい話だが、思わず嫉妬してしまったよ。 君の活躍する姿が一番近くで見ていたMt. レイにだ。 私の弟子で私のサイドキックなのに！

……あ、そうそう、初めて君を連れてヒーロー活動をしたあの一週間。 君が手を出す

暇もなく、一撃でヴィランをやっつけてしまった時のことだが：あれは君の実力を心配していたわけじゃなかったんだ。ただ自分の弟子に良いところを魅せてやりたくて、ハリキリ過ぎただけだ。思えばすまないことをしたと：まあ、後悔はない。

オールマイト杯を経て、更に皆のサイドキックとして忙しく動き回っていた三ヶ月は、忙しすぎてよく覚えていない。君もそうだったんだろ？そういうことにしといてくれよ。

雄英に来てからは目立ちに目立っていた。入試でも入学してからも身に付けたチカラを存分に振る舞い、私以上に注目の的だったんじゃないか？ 体育祭で様々な逆境を乗り越えて一位を獲得した時、私は自分のことのように喜んだ。つい、メディアのことを忘れて弟子であることを公表してしまった。あの瞬間の君の顔は今でもたまに思い出して笑ってしまうくらい面白い顔してたな。

そして君は闘った。USJでも保須でも合宿でも、誰よりも勇敢にヴィランに立ち向かい、闘って勝って……そして救けた。学生時代から逸話を残したヒーローは数多くいるが、これほどのことをやってきたのは君くらいだろう。私にだって無理だ。

ホントに君は私なんかには出来すぎたくらい、最高の弟子だよ。

最期に緑谷少年の姿を眼に焼き付けようと様子を見る。いつにもまして必死な形相

で駆けていた。その目は右へ左へと泳いでいる。

「おいおい、なんて顔してるんだ……って、そうか……君は助けようとしてるんだな。私を……そして、目の前のお嬢さんを。」

私とお嬢さんに向かって伸びる槍。緑谷少年の位置からでは同時には止められないだろう。おそらくそうなるようにオール・フォー・ワンが仕組んだのだ。

緑谷少年は迷っている。いや、私が迷わせてしまっているのか。この身体が動いてさへくれれば……無理だ、あの反動はこの刹那には抜けきらない。

君が悩んで迷っているなら、私が導いてあげなければ……！私は君の師匠なのだから……！！

『限界だーって感じたら思い出せ』

ワン・フォー・オール……！お師匠、私は……

私はチカラを振り絞り、限界を超えた身体を動かし、最期の道を指し示す。「救え」緑谷少年……！我が後継、オールライト。

緑谷少年は私の指の先を見ると大きく目を見開き、大粒の涙を流しながら覚悟を決め、大きく左へと踏み出していく。



そうだ、それでいい。君は“ヒーロー”に成れる。

見なくてもわかるぞオール・フォー・ワン。今お前は悔しいだろう？ 緑谷少年を

追い込むために選択を迫ったのだろうか……彼は私の死を持つて完成する。かつて私がそうだったように。これで新たな平和の象徴が生まれるんだ。正義は何時だって悪から誕生する……皮肉なものだな。

さて、最期の仕事だ。私のチカラと意志、全てを君に託す……！ 受け取れ、緑谷少年……君が新たな希望だ!!

私の眼前に死が迫る中、緑谷少年が一本の槍を殴り付けて女性の命を救ける姿が見える。

これで良い。ですよね、お師匠——……

——さらばだ オール・フォー・ワン。

——さらばだ ワン・フォー・オール。

——さらばだ…緑谷少年…君に出会えて本当に良かった…——悔いのない、  
いい人生だったな——…

「——オールマイトオ!!」

——オールマイト side out ——

004. 空に歌えば

## 005. だからひとりじゃない

僕は選ばされた。憧れと夢を。ひとりでは選べなかった僕へオールマイトは道を示した。

僕は選んだ。憧れを捨て、憧れを継ぐために。僕はヒーローに成る。

「——オールマイトオ!!」

僕は槍を殴り付け弾いた後に振り向いて、大声で助けられなかった名前を叫ぶ。

後悔してもしきれない。全てが手遅れ。惨状しか待ち受けていないだろう。それでも名前を呼ばずにはいられなかった。

枝にも槍にも見えるオール・フォー・ワンの腕は、ひとりの男の腹を貫いていた。

「…………え？」

僕は気の抜けた声を出して立ち尽くしてしまふ。そこに見えた光景は、自分が想像していた悲惨な光景とは程遠く離れているものだったから。

確かに槍は腹を貫いている。金髪の骸骨のように痩せ細った男……ではなく、金の短髪の筋骨隆々の男の腹を。そこにはひとりしかいなかった筈なのに、どこからかワープしてきたようにもうひとりいた。

「ギリギリセーフ！救けられた！えっと…オールマイトですよね？」

「あ、ああ…こんな姿だが…」

「…………え？」

オールマイトを天に掲げるように両腕で持ち上げている男とオールマイトの短い会話。僕は未だに目の前の状態が信じられないで混乱していた。

頭が混乱する僕。しかしその答えはすぐにわかるようになった。

「フウーハツハツハ!!最高のタイミングだったぞ！やはり！やはり、オールマイトを救うのはこの私と、その弟子であるミリオだったな!!どうしましたオールマイト？顔が真っ赤ですよ？もしかして死ぬかと思つて、感傷的な気持ちになつてたんですか!?!大丈夫！なぜかつて？——私たちが来たつ！ハハハツ、どうだ緑谷出久！これが私の育て

たルミリオンッ！百万を救うヒーローだっ！！ハアーハッ——ツガ！……ゴツホオゴホッ……」

少し離れた瓦礫の山の上からとんでもない高笑いをしているサーナイトアイが、滅茶苦茶自慢気に僕らを見下ろしていた。僕だけでなくオールマイトも、オール・フォー・ワンですら、呆れたような視線をむせかえる彼に送る。だがお陰で頭が冴えてきた。

サーナイトアイ……貴方って人は……こんな時まで……ホントにオールマイト馬鹿ですよ。もう……ふたりともだ！

「ミリオ先輩っ！」

「よう、デク！救けにきたよね！よつと。オールマイト、救けることができてる光栄です」  
「ああ、ありがとう。通形少年……いや、ルミリオン」

ミリオ先輩は貫かれた腹の槍を何ともないように透過ですり抜けて、少し大きく跳ねて僕の傍までオールマイトと共に来た。オール・フォー・ワンの追撃があると思つてヤツを睨み付けたが、僕が自由に動けるのを見ると槍をシウルつと元の腕に戻す。どうやら二撃目は無理だと悟つたようだった。

「それに助けに来たのは俺たちだけじゃないよね！」

「それはどういふ——」

ミリオ先輩の言葉の意味を尋ねようとした瞬間、離れた瓦礫の上から大きな声が聞こ

えてきた。

「その姿はなんだ、オールマイトオ!!!」

「俊典い！出久う！待たせたなあ、無事か!？」

「エンデヴァー……！グラントリノ……!!」

現れた二人のヒーローの名をただ呼ぶ。それが終わりではなかった。

「我らは救けに——」

「——俺達は救けに来たんだ。大丈夫か、お嬢さん」

「はい……」

樹木の腕を伸ばしながら颯爽とシンリンカムイが現れた。しかしその後ろから超高速でカムイを追い抜いて紙肢を伸ばしたエッジショットが、僕の後ろで瓦礫に挟まっていた女性を救い出して、抱き上げていた。

「お、俺の伸ばした腕は……」

「一步遅かったな、カムイ。相手はNo.4だぞ?」

「まあまあ、人助けは取り合いじゃないからね」

がつくりと肩を落とすカムイの背をデステゴロが叩き、続いて現れたガンヘッドが慰める。僕が抜け出してきた救出班のヒーロー達が駆けつけてくれたのだ。

皆、あの脳無の大軍を退けて、ここまでできてくれたのか……!

「……な？」

「…はい！」

笑顔で問いかけるミリオ先輩に、僕も笑顔で返す。

僕はずっと間違っていた。僕だけが、オールマイトの死を知る僕だけが、オールマイトを救えることが出来るのだと。僕がやり遂げなくてはならないのだと。

だけどそれは独り善がりな勘違いだった。

皆がオールマイトを……誰かを救いたいと願っていたんだ。僕だけなんかじゃなかった。当たり前だよな……僕は誰かを救いたいと想っているからヒーローなんだ。そう、だからひとりじゃない。

「——僕らが来た！もうお前の好きにはさせない！ さあ、どうするオール・フォー・ワン!!」

僕は再び拳を作り構えながらヤツに宣告した。それでもまだやるつもりかという意味を込めて。

「ふう……全くこれだからヒーローってやつは嫌になる」

オール・フォー・ワンはだらりと腕を下ろしながら、タメ息交じりに話始めた。たくさんさんのヒーローに囲まれ孤立しているというのに、非常に落ち着いた様子で。

「僕の都合を省みず、いつだってノコノコと…ゾロゾロと…何処にだって現れては邪魔

をしてくる。僕の大事な仲間や、信念をへし折って、奪い取っていく。僕は君達が憎い……分かるだろう？」

「……分かるさ。私もお前たちに幾度なく壊され奪われた。罪のなき人々を、平和な日常を、私の守りたかったモノを……だから……私はお前が許せない……!!」

「オールマイト……」

少しずつ包囲されていくオール・フォー・ワンは構うことなく語り、ミリオ先輩に肩を借りて立つオールマイトが答える。トゥルーフォームになろうともオールマイトの瞳は強い信念の籠った輝きを放ち続ける。その姿は依然として平和の象徴のままだ。

「たとえ私が燃え尽き果てようと、私の意志を継いだ者が必ずお前らを止める。絶対……」

「そうか……そうだよな。だから君は育て上げた。その少年を……緑谷出久という最強の弟子を。全てを託すために……でもそれは君だけじゃない。僕も同じさ！だから僕もひとりじゃない……」

オールマイトが強き瞳でオール・フォー・ワンを射ぬく。だがオール・フォー・ワンは気圧されることなく、天を仰いで嗤いだす。

直後、空から何かが猛烈な勢いで飛来し、砂埃を巻き上げながらオール・フォー・ワンの前に突き刺さる。そして衝撃にも似た突風が巻き起こり、砂埃を吹き飛ばしてその



姿を現した。

「先生から離れろっ!!このヒーローどもがああ!!」

「よく来てくれた、死柄木弔。君を待っていた!」

傷だらけになった異形の右腕を構え、ボロボロになった衣服を身に纏い、特徴的だった全身に引っ付いていた掌さえ失っている死柄木。それでも死柄木はオール・フォー・ワンを守るために僕らの前に立ち塞がった。

僕らとヤツらの睨み合い。暫しの静寂が流れるが、すぐに多くの足音によってそれは打ち破られた。

「すまない、喋る脳無に手間取り死柄木を逃がした……ツ……ここに来ていたか……」

「ギャングオルカ!そっちはもう終わったんですね?」

「ああ、少年らも無事に取り返して避難させたし、脳無も全員無力化させた。残るは……死柄木だけだ」

ギャングオルカを筆頭に制圧班のヒーローたちまでもこの場に集まってきた。

かつちゃんと轟君は無事に逃げ出せたようだ。これで僕も憂いなくこの場に集中できる!正直ちよつと忘れてた……かつちゃんには内緒だ。

「ひとりがふたりに増えても同じ事だ。僕らがお前たちを止めるさ!」

「そうか、なら最期まで足掻くでしょう……弔」

「ああ、先生エ!!!」

ゆつくりと腕を上げてオール・フォー・ワンが最期の抵抗を始める。名を呼ばれたことに呼応して死柄木が僕らに向かって駆け出し、その異形の腕を振りかぶった。

だが死柄木の動きが止まる。原因はすぐにわかった。死柄木の胸から束ねた黒い枝のようなものが生えていたからだ。でも理由がわからない。死柄木の胸を貫いていたのは、他でもないオール・フォー・ワンの右腕だったから。

オール・フォー・ワンの突然の行動にその場のヒーロー達の足が止まり、一瞬だが硬直した。

その一瞬のうちにオール・フォー・ワンは左腕を天に掲げる。そして掲げた腕から間欠泉のように黒い枝のようなものが噴き出して、辺り一面に降り注いだ。俯瞰でこの光景を観ればそれは突如黒き大樹が現れたかのように見えることだろう。

「避けるーあれに触れるな!!」

サーナイトアイの声が響き渡る。状況は一瞬のうちに混乱したが、僕らヒーローは各々の力で黒き枝を避けたり弾いたりして凌いでいく。

噴出はすぐに止まった。無数に地面に刺さる黒い枝、その中心にいるオール・フォー・ワンの声が聞こえてくる。

「範囲を広げすぎて精度が酷いな。やはり動けるものには当たらなかつたか……まあい

い——奪わせて貰う」

オール・フォー・ワンの言葉の終わりと共に、黒い枝はスパークを起こした。そして先程の光景の巻き戻しのように枝がオール・フォー・ワンに集まり収まる。

今のは……個性を強制的に奪ったのか？！目につく範囲では食らった人はいなさそうだけど……そうか！ 動けなくなつた脳無やヴィラン連合やつらから……！

「先生え……どうして……」

「すまない、弔。どうしても必要なことだつたんだ」

オール・フォー・ワンの足元に苦しそうに踞る死柄木。その胸にはポツかりと孔が空いているにも関わらず、なぜか血は流れていない。異形だつた右腕も元のひ弱な腕に戻っている。死柄木もまたオール・フォー・ワンに個性を奪われたようだ。しかし死柄木はさすがのような眼でオール・フォー・ワンを見つめていた。

「僕の全てを君に託そう。君は戦いを続ける……死柄木弔——」

《オール・フォー・ワン》

死柄木の胸の孔にオール・フォー・ワンの黒き腕が差し込まれ、膨大な力が流れ込んでいく。直後、オール・フォー・ワンはその場に糸の切れた人形のように倒れこんだ。

「ぐあああああ——！！」

力を強引に流し込まれた死柄木が苦悶の叫び声を上げる。

オール・フォー・ワンと死柄木を捕らえようと皆が駆け寄るが、死柄木の身体からは衝撃波や炎、雷や水が吹き乱れて誰も近寄れない。

「ああああああああ!!先生え!!先生えええ——!!!」

死柄木は尚も苦しみながら、うずくま 踞もがつて跪もがいていた。　オール・フォー・ワンによつて

譲渡された力が死柄木を苦しめている。

僕は知っている。誰かに渡された個性ちからはすぐに制御出来るようなものじゃない。その力が強大ならばその分だけ、力が身体を内側から蝕み、破壊していくんだ。

だから、僕が止めてあげなくちゃ……あの苦しみから、救わなきゃ……!

「——死柄木い!!!」

僕は吹き荒れる個性の嵐の中を、全身にワン・フォー・オールを滾らせて突撃していく。僕の拳で全てを終わらせるために。今も全身が様々な異形に変化していく死柄木。だが僕の声にしつかりと反応して、底果ての無い憎しみを込めた眼で僕を睨み付ける。

「緑谷ア!出久ウウウ!!俺は!お前を殺す!!殺してやるウウ——!!!」

死柄木の憎悪の叫びと共に、今までとは比べ物にならない衝撃波が発せられ、目も開けられない程の眩い光が迸って辺りを包み込んだ。

「何が…!!?」

衝撃波に耐えながら強烈な光に眼を細めるが、そのまま光に呑み込まれた——

——衝擊波が収まり、光が収縮していく。その中心には死柄木の姿が見えた。項垂れたままの死柄木は身体を蝕む莫大な力の渦を乗り越えて、なんとか死なずに生き残っていた。だが様子がおかしい。ギリギリで生き残り、満身創痍な筈なのに、死柄木からは犇々ひしひしと威圧感が伝わってくる。

「——くはッ……」

死柄木が勢いよく顔を上げて、大きく口を開けて歪んだ笑みを浮かべた。不気味な雰囲気が一気に辺りを支配し、背筋に寒気が走り、本能が警鐘を鳴らし続ける。アイツは危険だと。

静寂が辺りを包み込む。僕だけでなくその場にいる全員が死柄木のから目を離せず、不用意に動くことすら憚られた。そんな空気の中、死柄木の身体がうすぼんやりと輝き始め、ゆつくりと宙に浮いていく。

「……」

死柄木は無言のまま確かめるように、光る自身の身体をマジマジと見つめる。そして真横に軽く右腕を振るった。

直後、死柄木の右側一帯のビル群が瓦礫へと変貌した。死柄木はただ腕を振っただけなのに、“破壊”としか表現しようのないものが吹き荒れて、風景を一転させたのだ。

何だよ……！何をしたんだ!!? 全く、何も見えなかった、わからなかった……！どんな個性で何をどうしたらこうなるんだよ!!? ——個性……そう、これはきつと個性によるものだ。オール・フォー・ワンはいったい何の個性を死柄木に渡したんだ……？

死柄木が不思議そうに自分の右手を見つめている。そんな姿を見て、僕は額から冷や汗を流しながら考えた。圧倒的などという言葉では表しきれない程の破壊。生命の危機を感じ取った僕の頭は尋常ではない早さで回り、そしてひとつの仮説に至る。

まさかオール・フォー・ワンは、持つていた全ての個性を混ぜてひとつにして死柄木に植え付けたのか……？ その結果がこれだって言うのか……!?

僕の頭の中で様々な考えが浮かぶ。その中で、オール・フォー・ワン対策で個性について調べていた時に得たひとつの知識がふと浮かんできた。個性特異点と呼ばれる終末論のことだ。

世代を重ねるにつれて深化していくことで、個性はより複雑化しより強力になっていく。そして最終的には誰にも制御出来ない程の強大な力になってしまおうというものだ。世代を経て個性が混じり合うということは……オール・フォー・ワンによって無数の個性がひとつに束ねられたことも同じだ。そしてその個性はこの特異点に到達

していると言えるだろう。

では誰にも制御出来ない筈の個性チカラを使いこなす目の前の死柄木はなんだ？ 人間が行き着くであろう終末すら武器に変え、僕らの前に現れたコイツは……人間なのか……？ 宙に佇んで僕らを見下ろし、全身から輝きを放ち続ける死柄木の姿は、どこか幻想的で……それでいて絶望的だった。

個性によって創られたこの超常社会の始まりは発光する赤子が産まれたことだったという話だ。そんな超常社会の行き着く先……混沌とした特異点に至った個性。人類の終末を身に宿し、光り輝く死柄木。特異点すら超越した存在。僕には死柄木が終末の化身に見えた。

——死柄木が動き出す。終末の化身の手によって、終わりが始まった。

「死柄木弔アア!!」

誰しもが身動きを忘れる程の威圧感と絶望感の中で、僕はヤツの名を叫びながら、チカラを全開にして殴りかかる。

やらせない。僕らの世界を、この超常な日常を壊させやしない。僕らの未来を終わらせて堪るか!!僕は護るんだ!ヒーローとして!!

ワン・フォー・オール——プルスウルトラ!!……

「DETROIT!! S M A A——」

「止まれ」

「——ッ!!?」

死柄木が静かなトーンで一言だけ呟いて、僕に掌を向ける。すると死柄木に向かつて突撃していた筈の僕の身体がピタリと動かなくなってしまった。

身体が……なんで……! 全身に何かが張り付いてるみたいにならない……!!

「緑谷出久、俺はお前が化け物だとずうっと思ってたんだ。何をやっても止められない、殺せない、勝てないってな。でも今はお前ですら、只の人間にしか見えないぜ」

死柄木が宙を滑るように僕へと近づいてくる。その口調は実に穏やかで今までに聞いたことのないような死柄木の声色だった。

「じゃあな、緑谷出久——お前が憎かったよ」

死柄木はまるで友人と帰り道で別れるときのような気軽さで僕を呼ぶ。

そして死柄木が僕を指差した。額に軽い衝撃を感じ——

——僕の視界は暗転し、意識が途絶えた。



005.  
だからひとりじゃない

## 006. アップデート

私たちは拉致された学生を救出した。いきなり涌き出た脳無も倒した。あとは死柄木と連合のボスを捕らえれば終わりと思われたこの作戦。

でも現実とは違った。死柄木は人を超えた化け物に姿を変えて私たちの前に降臨した。

死柄木が光輝く姿に変わってから、放つ威圧感というか纏うオーラみたいなものに気圧されて、身体が震えることすら出来ずに動けない。

今の死柄木は腕のひと振りだけで街を壊滅的に破壊する化け物だ。あんな怪物に人間が敵うわけじゃないじゃない……！

死柄木は私たちヒーローに目を付けて遂に動き出す。でもそれに抗う人もいた。

「死柄木弔アア!!」

それは他でもないデクくんだった。雄叫びをあげて死柄木に向かって突撃していく。

デクくんはまだ諦めてなかったんだ。デクくんは私なんかよりずっと強いから、この

絶望の中でもいち早く動けたのね。デクくんならあの怪物にだってきつと勝てるわ!

——デクくんさえいれば……なんて私の考えは幻想のようによくに打ち砕かれる。

死柄木がひと睨みするだけで、デクくんの動きがピタリと止まる。そして、人差し指でデクくんを指差す。するとデクくんはその場で崩れ落ち、地面に倒れ伏せてしまった。

「うそ……でしょ……?」

信じられない。まさかデクくんが……あの強いデクくんがあんなにあっさりと……? 何もさせてもらえず、何をされたかも分からずにやられるなんて。

倒れたデクくんはピクリとも動かず、その場で寝転んだままだ。

まさか……? 早く立ち上がって! 嘘、そんな訳ない! デクくんが……死……

「死んでないか。ふうん、殺すつもりでやったんだけど。結構頑丈だな」

デクくんを見下ろす死柄木はつまらなそうにぼやく。その言葉の真偽は定かではないが、一先ず私は安心した。生きているのなら助けにいける。だが続く死柄木の一言が事態を加速させていく。

「まあ、でも……こいつだけはしつかり殺しておかないとな」

まるでゴミ捨てを面倒くさがるような言い方で、死柄木はデクくんの命を奪おうとしていた。

なんなのよ……ヴィランとかうんぬんの前に人としてこいつは価値観がどうかしてるんじゃないの……!?

「させると思うか!？」

「出久は殺させねえぞ、死柄木」

エンデヴァーとグラントリノがデクくと死柄木の間に割ってはいる。他のヒーローたちも動きだし、死柄木を取り囲むような陣形をとっていた。どうやら数の利を生かしてアイツの破壊力に対抗するみたいだ。

私もそれに続こうと巨大化したけど、ミリオクんに手で制される。

「Mt. レディはデクとオールマイトを連れて離れて。ふたりを頼むよね。サー！さっきの女性の避難をよろしくお願いします!!」

「でも……!」

「この中でふたりを一番護れるのはMt. レディなんだよね。その個性で動けないふたりを庇ってください!」

「……わかったわ。必ず護り抜くから……!」

私が折れるとミリオくんはいつもの笑顔を見せてから死柄木の方へ向き直す。死柄木はヒーローに囲まれているにも関わらずその様子をぼーっと見ていた。

「オールマイト……?で、いいんですよね」

「こんな成りでは役に立てないか……すまない」

「いえ、ここからはみんながやってくれますよ。さあ、こちらへ」

オールマイトらしい痩せ細った男が落ち込みつつ謝る。その声でオールマイトであると確信したが、やはり見慣れない姿に動揺はある。しかし、だからこそ今は護るべき対象なのだと実感させられ、すぐに左手に招き寄せて、掌に乗せる。

「随分と勝手に話してるけど、緑谷出久を逃がすわけないだろ？ どれだけおめでたいんだ、お前らの頭ん中は……」

死柄木は呆れたように話し出す。いつ仕掛けてくるかも分からない爆弾のような存在だ。だが、そんな死柄木をヒーロー達の無数の視線で睨み、一挙一動を見逃さないようにしている。緊張感が辺りを支配する。

私が動き始めた時……デクに手を伸ばした時が始まりの時になるのよね。落ち着け、私。皆が援護してくれる。だから大丈夫…… さっと手を伸ばしてデクくんを拾い上げたらずぐに離れる。それだけよ……よし……いくわよ——

恐怖を抑え込んで、私は気合いを入れてデクくんに向かって手を伸ばした。

「かかれえー!!!」

エンデヴァアの号令と共にヒーロー達の一斉攻撃が始まった。エンデヴァアの炎は勿論のこと、ガンヘッドのガトリングを始めとした遠距離攻撃、それに力自慢のデス

テゴロの投げた瓦礫の塊などの様々な攻撃が一挙に死柄木に襲いかかる。

私はその隙にデクくんを無事に拾い上げ、胸に抱えてそのまま踵を返して走り出す。

「走れえ！Mt. レディ！！」

「——ッ！！」

走り出した直後、シンリンカムイの声が後ろから響く。言われなくても走ってるわよ

！

私は巨大化したまま全速力で走り出す。この場から少しでも離れるために。

なぜなら、背中には未だに刺すような視線と、あの威圧感が伝わってきているからだ。

あれほどの波状攻撃に包まれながらも死柄木は生きている。確実にこちらを捕捉し

て、いつでも追い掛けて来るだろう。

絶対に二人を護って、逃げ切って見せる！！

——ヒーロー達の援護の下、私の死柄木からの逃亡劇が始まった。

—— 爆豪 side in ——

「ここまで来れば大丈夫だろ」

「そうだな、爆豪。あとは警察に合流すればいいのか？」  
「まあそうなるわな」

俺の隣で少し息を切らせながら轟が辺りを見回す。周囲には人影はなく、休日 of 繁華街とは思えないほど閑散としていた。

それもその筈、この非常事態に警察は神野区全体に避難警告を発令したのだ。さつきからうるさいくらいに防災無線のサイレンと放送が繰り返されているからすぐにはわかった。

「ヒーロー達は勝ってんだろうな？」

「ああ!? 勝つに決まってるだろ、デクがいんだぞ。それにオールマイトだっている。どんな敵でも楽勝だわ!」

「そうか…お前の緑谷への信頼は凄いな」

「っ!…信じてなかったらこんなところで逃げてきてねえわ」

轟の発言を受けて思わず顔をそらしてしまった。なにも間違ったことは言われてねえが、指摘されるとムカつく。半分はこいつのせいでこんなことになってるといふのに……

謎の泥に吞まれて転移した後からはドタバタしていた。目の前にはデクとオールマイト、そしてラスボスと思わしきスーツ姿の工業地帯みたいなマスクをした男。同時

にわき出るヴィラン連合のメンバーと大量の脳無ときたもんだ。

そこにヒーロー達が駆けつけて、脳無と連合メンバー対ヒーロー達の合戦が始まった。そのどさくさに紛れて、ヒーローに促されるように俺と轟は逃げ出したんだけどな。

ヒーロー達と脳無達の戦いも激しかったが、それ以上にデクとオールマイト対ラスボス野郎の闘いの激しさがヤバかった。あれに巻き込まれないためにも、俺と轟は速やかにその場を離れたんだ。さつき轟に言ったようにデクの迷惑になるから。

「さつきのでけえ爆発音が聞こえてから急に静かになった」

「ああ、もしかしたらもう終わったのかもな…」

「アイツのことだから心配することはねえし、さつきといくぞ」

きた道を気にする轟に声をかけて先を急ぐ。俺たちの無事こそがデクやヒーロー達の勝利条件なんだ。まずは安全を確保しねえことには始まらねえ。

それは一瞬の出来事だった。俺と轟は閑散とした誰もいない歩道を歩いていたはずだった。

——気が付いた時には天地がひっくり返り、俺の身体は空中に投げ出されて吹っ飛



んでいた。

「——ッ!!」

爆破を使つて空中で咄嗟に体勢を立て直す。真上を向くと、巨大なコンクリートの塊が迫っていた。

「クソがア——!!」

両の掌から爆破を放ち、斜め下へとぶつ飛び瓦礫の塊を間一髪で躲す。躲したはいいが、下方方向へと加速したため今度は地面が一気に迫りきていた。真下に向けて爆破して、速度を殺すが、減速しきれず転がるように地面に着地した。

転がり終えて体勢を立て直し、再び上を向く。眼前に迫るは大小様々な瓦礫。意思を持っていくわけではないが、狙い済ましたかのように俺に向かって降り注ぐ。

やべえ、爆破じゃ全部は消し飛ばせねえぞ…!!

「爆豪オ!!」

耳に轟の聲が飛び込んでくる。振り向けば轟が氷を屋根のようにして瓦礫の礫を凌いでいるのが見える。だがその頭上には巨大な瓦礫が迫り、あれが当たれば氷の屋根ごと潰されてしまうだろう。でもそれは轟がひとりだった場合だ。

「目エ一杯氷厚くしとけエ!!——オラア!!」

爆速ターボで接近し、両手で限界ギリギリの最大火力の特大の爆破を放ち、迫りくる

巨大な瓦礫を吹き飛ばす。全てが塵になったわけではなく、塊は細かな礫つぶてに姿を変えている。それはさながらショットガンの散弾のように俺へと向かってきた。俺は死の礫から逃れるために轟の作った氷の屋根へと滑り込んでいく。

轟は氷塊を右から出し続け、氷と瓦礫が衝突し激しい音が数秒にわたって響いた。

「——ハア……ハア……」

「終ったか……?」

轟の脚から氷の噴出が止まる。それと同時に周囲が静けさに包まれた。どうやら瓦礫の雨は止んだようだ。だがこの屋根もいつ崩れるかわからねえ、移動しねえと。

「左のチカラ使えるか……?」

「ああ……大丈夫だ」

チカラをいすぎて全身に霜が積もる轟に肩を貸しながら屋根から出る。轟の体に熱が奪われたことで背筋が冷え込むが、すぐに轟が左の炎を灯して暖まってきた。

屋根から飛びだして辺り見渡す。さつきまで歩いてきた筈の繁華街は見る影もなく、ビルや店舗だったものの瓦礫だけが一面に広がっていた。よく見るとこの惨状はある一点から放射状に広がっていることがわかる。その一点とは、俺たちが逃げ出してきたあの戦場の方向だった。

「おい、アッチって……」

「クソ、こんなことが出来る化けもんが現れたってことかよ……!」

「……! ヒーローが……緑谷がやばい……!!?」

「待て! 何処いくつもりだ!!」

「緑谷のところに決まってんだろ!!」

「行つてどうする!? 何にも出来ねえだろうがっ!!」

「……ッ!」

轟の肩を掴んで止めると、轟は悔しそうに歯を食い縛っていた。気持ちは痛いほど分かる。だが、俺たちが行ったところでなにも変わらない。こんなことが出来るヴィランが現れた時点で俺たちがどうにか出来る範疇を越えているのは明白だからだ。

俺は積み上げられた現実を前に理性的な考えを打ち出し、即座に行動に移そうとする。

それでいいのか……? 俺は? ちげえだろ、やるべきことと、やりたいことはちげえよな。 なら俺は……どうする。 アイツなら? 俺の憧れたアイツの姿は……いつだってやりたいことをやり抜くために動いていた筈だ。

「轟い……いくぞ……!」

「爆豪っ! でもよ……!」

俺は俯きながら轟の肩を両手で掴みなおす。思わず力が籠つてしまおうが、轟は気にする様子もなく、振り向こうとしていた。

「勘違いすんな……行くんだよ——デクントコへよお！」

「……ああ、いこう！」

俺と轟は来た方向へ引き返すようにして道なき道を走り出す。目指すはデクの元、戦場の真つ只中だ。

——待つてろデク……おまえをひとりにはしねえ！

—— 爆豪 side out ——

デクくとオールマイトを抱えてこの戦場から離れる。それだけのことが今は無理だと悟った。

ヒーロー達の足止めによって、死柄木から逃げ出して逃亡劇が始まるはずだった。

「……先輩？　嘘でしょ……」

振り返った私の目の前に広がるのは破壊の痕と散りぢりに倒れ付いたシンリンカムイやエンデヴァーを始めとしたヒーロー達だ。

一瞬。あまりも一瞬だった。空気の爆ぜる音と背中に衝撃を感じて振り返れば、この光景が広がっていた。

なにをしたのかも、何が起きたのかもわからない。私の中の常識が音をたてて崩れ去り、理解の範疇を大きく越えている。

「んー、誰も死んでないかあ。いまいちヤル気が起きないな……」

死柄木は背筋を伸ばしながら、気の抜けた声で呟く。あまりにも当たり前に人の生き死にを語るその姿に私は恐怖し、気が付けば手が震えていた。

そんな絶望に震える私の掌から、ひとりの男が飛び降りた。

「何をしたんだ、死柄木……？」

平和の象徴、オールマイトだ。死柄木を見上げるようにして見据えて、冷静に話しかけている。オールマイトは骨と皮だけの姿になっても依然として平和の象徴だった。

「何をしたか……かあ。先生はさ、お前らヒーローに絶望感を与えるために個性を教えたんだよな。本来ならひとりにひとつしかない“個性”。それを無数に持っているという事実を突きつけてやるためにさ。でもお前にはどうも効かないっほいから……」

教えてやらない。訳もわからずやられてしまえばいい」

「…ならその姿はなんだ？まるで神様じゃないか。それもオール・フォー・ワンの計画通りか？」

「はっ！神様ときたか。俺の大っ嫌いな言葉だね、神様なんてのは。祈っても助けてくれない、あんなクソツタレになるわけないだろ。そうだな…強いて言うならアップデートだ。人として…生き物として俺はお前たちより上の存在になったんだよ。先生がここまで予想してたかは知らないけどな」

オールマイトの問いかけに対して悠々と語る死柄木。自分が微塵も負けるとは思わない、圧倒的強者の余裕のようなものがそこにはあったように見える。話すに値するのがオールマイトだけなのかも知れないけど……

「やけに質問が多いなオールマイト。何を考え——」

私たちを見下ろす死柄木だが、その身体が急に旋回して後ろを振り向く。理由はすぐに分かる。背後からミリオくんが奇襲をかけていたのだ。けどその奇襲にすら死柄木は反応して、襲いかかっていた拳をか細い腕で楽々と受け止めていた。

「——まあ、時間稼ぎだよな。透過の男か、緑谷の次に厄介な奴が釣れてよかったよ」

「……ぐっ……！」

「こんな感じでやればいいか？」

「つぐわああああああ——!!!」

直後死柄木の腕から電気のようなものが走り、ミリオくんを蝕む。ミリオくんは苦痛に絶叫したのち、死柄木の手から離れてその場に頭から崩れ落ちた。

「さて、ようやくだな……緑谷出久を渡せ。そうしたら見逃してやる」

「いかせると思うか……—DETR OIT—S M A A S H!!!」

オールマイトの右腕だけが筋肉質の太いものへと変化し、その腕で死柄木に殴りかかる。だが死柄木はそれを人差し指一本で防いであつた。衝撃など一切なかつたかのように、ニヤリと死柄木は嗤う。

「お前にもう用はないんだよ。退いてろロートルが」

死柄木が軽く手を払うとオールマイトの姿は瞬く間に消える。廃墟の山が砕ける音が響くことで、オールマイトが吹き飛ばされたことに気が付いた。

オールマイトでも敵わないなんて……私は……私にはどうしようもないじゃない……でもデクくんが……!私……!!

「……いい、いかせない……!」

私は精一杯の勇気を振り絞り、膝立ちで両腕を広げて死柄木の前に立ちはだかつた。手と膝も震えたまま、涙目で死柄木を睨み付ける。

「どけ、お前も殺すぞデカブツ」

死柄木から放たれる殺気と威圧感が私の心を押し潰し、身体の動きを止めた。重圧で動けない私に死柄木はすつと近づいてきた。その距離が1メートル、また1メートルと近寄る度に恐怖で身体が縮み上がっていく。

そしてその距離が0になり——死柄木は私を通り越して真横を抜けていった。身体中からどつと冷や汗が流れ出て、心が安堵する。

た、助かった…？見逃されたの…？

緊張状態から解放され、心が休まる。だがすぐに冷静になり、何も解決してないと思  
い直した。

助かってないじゃない…！救けてないじゃない…！！私は！私が護るっていったん  
じゃない！！

『私はそんなデクくんを救けるわ。皆を救けるその背中を私が護ってあげる！』

私が護る、救ける。あの優しくて大きな背中には絶対に奪わせない！ヒーローだ、私は  
ヒーローなんだ——！！！！

「いかせるかあああああああ！！！」



私は無我夢中で振り返り、がむしやらに腕を伸ばして死柄木の身体を掴み取った。

「おお！すごいすごい、まるでジェットコース——」

「つらあ!!」

「——ターみたいだ……」

私の手の中ではしやぐ死柄木をそのまま地面へと叩きつける。だがその手の下からまだ死柄木の軽口が聞こえてきた。

「ああああああああ——!!!」

私は叫び声を上げながら、両手を死柄木目掛けて振り下ろす。一度ではなく何度も、何度も、何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も叩きつける。その度に地面が少しずつ陥没していった。

こんな風個性を使って暴れることなど始めてだった。それでも目の前の敵を倒すため、護るために手加減などせずチカラを振るい続ける。

「——飽きた。もういいや。殴られたらどうなるかなって思ったけど、なんもなかったな……」

叩きつけた拳の下からあの気の抜けた声が再び聞こえてくる。さっきから何も変わらず、私の鉄槌などなかったかのように。

「きゃああああああ!!」

突如、手の下から電流のようなものが流れて全身を走り抜ける。言葉に出来ないほどの苦痛が私を襲い、断末魔のような声をあげてしまう。そして巨大化を維持できず、身体を振りながら小さくなって地面に倒れ付した。

「デク……くん……」

目の前にはデクくんが倒れている。私は痺れる身体を引き摺ってデクくんの元へと進んで、辿り着いた。

「退けつて言ってるの、わかんないかなあ」

「絶対に……渡さない……！死んだって離さないわ……!!」

死柄木は宙に浮かんで私を見下しながら呆れたような視線を送ってくる。私は氣を失って動かないデクくんを両手で抱えるように庇いながら、全力の強がりをつき捨てた。

「そっか……そんなに大事なら、一緒に殺してやるよ」

死柄木は私に興味を失った。そして殺気のない瞳で呟き、少し距離を取りながら腕をこちらに構える。デクくんを抱き締める腕に力が籠っていく。

「さっきまではイマイチ効果がわかりにくかったし、今度は塵ひとつ残さず消し去ってみるか」

死柄木の構えた手の先に光輝く光球が生み出され、徐々に輝きが強くなり、大きく

なつて力が高まつていくのがわかる。

あれにやられたら死んじやうだろうな……それにもう逃げ出すことも出来ないわね。頭の中で様々な考えと思ひ出がぐるぐると回つていく。気が付けば考えたことを口に出していた。

「ごめんなさい、デクくん。貴方のこと護つてあげられなかつた……」

瞳からは涙が流れて抱き締めたデクくんの顔に溢れ落ちる。尚も光球は高まり続けて、自らと腕の中の彼の死を確実なものにしていく。

最期をデクくんと過ごせるなら。これで最期なら……全部言つてもいいよね……？

「——好きよデクくん。大好き……愛してるわ」

死を逃えた光に照らされながら、私は心の奥底にしまいこんでいた想いを告げた。届くことのないと知つていても、それでも口にしたかつた。もう、最期なのだから。

すべてを消し去るような白の輝きが私たちを包み込む。

——ああ、やっと……言えた——……

006.  
アップデート

## 007. だってアタシのヒーロー。

特異点に至った死柄木の一撃を受け、僕は意識を失った。倒れている暇なんてない！すぐに起きて皆を助けなきゃ！！

視界が暗転する。暗闇が目一杯に広がり、僕を取り込んでいく。僕は闇の中に残りされた。

「どこだよ……」。なんでこんなに意識がはつきりしてるんだ？」

夢の中、というにはあまりにも意識が明瞭で、自分の手足もしっかりと見える。辺り一面真っ黒な闇の中だというのにも関わらず。

「誰かいますかー？……なんてね」

闇の中にひとり叫んでみる。返事などあるわけがないと思いつつもやってみてしまった。

「——いるよ」

「フア?!?!だ、誰?!」

まさかの返事である。声の主を探そうと振り返るがそこには誰もいない。しかし、この暗闇の世界に僕以外の光が現れた。ふよふよとした人魂のようなものがいくつも浮かんできて漂ってくる。数えてみれば7つの人魂が僕の前に集まってきて、段々とその炎が大きくなっていった。

そして暫くすると人魂は人影のような形に変化したのだ。どれも見覚えのない人影だったが、一番端にいる人影は女の人のようにも見える。

「やあ」

「ど、どうも……」

一番前の中央にいる人影が気さくに声をかけながら握手を求めてくる。僕はおずおずと返事をして、その手をとった。すると人影がボウツと一気に燃え上がり、そして完全な人の姿になる。僕は思わず一步後ろに跳ね退いて、身構えてしまった。

「驚かせてしまったかな? 初めまして十代目。僕は■■■■■、始まりのワン・フォー・オール所有者だよ。一先ずは■■■■■を止めてくれてありがとう……つて言語化が不完全だな。1%の弊害かな……」

目元まで隠す乱れた長髪の痩せ細った男はひとりでトントンと話していき、自問自答

して止まってしまった。

誰だよ。名前聞き取れないし……ってかここホントになんなんだ……？

「誰だつて顔してるね。最初のワン・フォー・オール……初代とも呼んでくれ。」

■…君の知るところのオール・フォー・ワンの弟だ

「オール・フォー・ワンの……ああ、昔オールマイトが言つてた……なるほど……それで初代さん、ここは何処なんですか？」

「理解が早くて助かるよ、八代目には感謝だな。ここは、そうだな……ワン・フォー・オールの意志の世界、とでもいったところかな。君の中の精神世界とも言える」

どうやら僕は精神世界に迷いこんでしまったらしい。

「どうしたらここから出られるんです？ 早く戻らないとー！」

「まあ慌てないでいいよ。ここでの時間は現実世界では流れてないからさ。たぶんね。だからちよつと話をしよう」

「え、ええ……」

困惑する僕を置いて初代は話を続けていく。

「僕らは君の中から全てを見てきた。チカラを受け継いだところから……勿論、やりなおし再履修をするところもね。まさかワン・フォー・オールを変質させて、そんな姿に成れるとはね。君が八代目と協力してオール・フォー・ワンを追い詰めたところもすっかり見たよ。

ちよつとばかりチカラを貸してあげただけど、少しは足しになつたらう？」

「あのとぎのチカラの馴染む感じ……」

「そうそう、そして追い詰めたけど……死柄木が覚醒してしまった。彼は特異点を超えたんだね。自分の策がここまでするとはたぶん兄も思つてなかつたらう。おそらく、兄にとつても賭けに近い行動だつた筈さ。おかげで七代目が責任を感じてしまつて、さつきからだんまりなだけど」

初代は親指で端にいる女性を指して、困つたような仕草をする。女性はこちらを見ることもなく、静かに立ち尽くしていた。

「八代目に喝を入れるときは君の身体を乗つ取るくらいの勢いで前に出てきてたつてのにさ……とにかく、オール・フォー・ワンという巨悪を打倒したけど、新たなに更に巨大な悪が現れてしまったわけだ」

「……だから、僕がアイツを止めないといけないんです。早く戻して下さい……」

「まあそう慌てないで。今戻つたところで、さつきみたいに何も対抗できずやられてしまふんじゃないかい？」

「それは……」

初代の正論が胸に突き刺さる。事実、僕は傷ひとつつけれないままやられてしまつたのだから。



「そのためのチカラがワン・フォー・オールだ。君はこのチカラがどんなものか分かるかい？」

「受け継がれてきたチカラと正義の意志の結晶……ですよね」

「だいたい合ってるよ。正義の意志つてのはこのことさ。意志の無い者には皆チカラを貸さない。まあそんな人は歴代にいなかったけど。そしてチカラとは何か……これは分かるかな？」

「ワン・フォー・オールの超パワーの源……わかりません……」

僕は考えあぐねて根を上げてしまう。チカラを制御することはこれまでずっと考えてきたが、それが何なのかなど、考えたこともなかった。

「それはね、個性因子だよ」

「それは……分かりますよ。個性を司る源、個性因子。体内の個性因子の働きで人は超常を得て、今の社会が出来上がったんですよ」

「そうなんだけど、そうじゃあない。ワン・フォー・オールは個性因子そのものなんだ。個性因子の力で火を出すわけでも、空を飛ぶわけでもなく、ただ純粹なチカラの塊としての個性因子。それがワン・フォー・オール、僕の《譲渡》と兄に植え付けられた《蓄積》が混ざりあつた結果だ」

「……？ つまりなんにでも成れると？」

「それは少し違うかな。色で例えるなら火を出す個性は赤、水なら青といったように、個性因子にはその人それぞれの色が出る。でもワン・フォー・オールは違う。透明なんだ。何にも染まらず、なにも反発しない。チカラの塊としてあるだけなんだ。だから他の個性を持った者に受け継がれても、オール・フォー・ワンみたいに拒絶反応が起きないわけさ」

「少しずつワン・フォー・オールの実体が見えてきたが、それがどう繋がるのかが僕にはまだわからない。」

「ちなみに譲渡されるときはその透明な個性因子のみが受け継がれる。その人が本来持っている色つきの個性因子を置き去りにしてね。そしてここからが本題だ」

「長い前置きでしたね…」

「ごめんよ、人と話すのは久しぶりで饒舌なんだ。それで、個性因子ってのは身体の何処にあると思う？」

「全身…？ いや、人それぞれの個性が発現する部位、ですかね」

「その通り！ならばワン・フォー・オールが何処に発現するのか、何処にその因子が蓄えられるのか。純粹無垢な個性因子、それは人間の一番の欲求を満たすために働く！

では人間の一番の欲求とは？——種を残すこと？ 違う！ 寝ること？ 違う！！ 食べること？ それも違う！！ 生きることだ！ すべてはその副産物に過ぎない！！」

「生きること…!!」

「そうだ！生きること！それが何かということに君は既に一度辿り着いているはずだ。生きるとは何か！ワン・フォー・オールのはそこにある！それは——」

生きる。命を紡ぐ。その根幹はもう僕の中にあつた。

「——筋肉だ」

「そう！ワン・フォー・オールは筋肉に宿る！君はなに一つ間違つていなかったんだ！僕はその気に気付くまでに百年近くかけてしまったけどね！」

「僕は……筋肉は裏切らなかつた……よかつた……！」

「ついでに言うとな発動前のワン・フォー・オールは圧縮された状態で筋肉に収まつている。発動と解放が同期してるのさ。ちなみに譲渡されたときにこの圧縮状態でも収まり切らなかつた場合……速やかに四肢が爆発四散します」

「あれホントだったんですね!?!」

急に真顔になる初代に思わず突っ込んでしまった。

でも、これ以上の筋肉は急にはつけられない。僕は膂筋を付けられないし……やっぱり筋肉じゃ死柄木には……

「大丈夫。筋肉があればワン・フォー・オールの可能性は無限大だ。そのためにここがあり、ここに来てもらった」

「それは……つまり？」

「僕は、僕らは死柄木に勝つために、最後のひと押しをしにきたんだよ、十代目！」

初代は爽やかに笑いながら僕へと告げる。僕らが信じた筋肉はなに一つ間違っていないことに心から喜びが込み上げた。

「そうだろう？ 八代目？」

「オール……マイト……！」

闇の中からひとつの人影が浮かび上がる。揺らいではいたもののそれは紛れもなくオールマイトの姿だった。

やっぱりオールマイトもこの中にいたんだ！姿が見えず不思議だったが、こういうことだったのか！ でも待てよ……オールマイトが八代目ということはその後の僕は九代目になるんじゃないのか……？ 初代の数え間違いだろうか。

僕は揺らぐオールマイトにゆっくりと手を伸ばしていく。オールマイトの影もまた、僕に向かって手を伸ばしていた。そしてその手が触れあう。

と思われたが、僕の手を横から誰かが掴み、僕はオールマイトに触れることができなかつた。

「——オールマイトに触るな……!」

僕に触れたことで人影だった腕がはげしく燃え上がり、輪郭を得る。僕の手を掴んだのは、緑色の癖毛を揺らす小柄な少年だった。

「やつと出て来たんだね、九代目……」

「初代、こいつには死柄木を倒すことなんて出来やしませんよ。救いたいものを救えず、自らすら救えない。緑谷出久にはなにも出来ないんだ」

怒りにも悲しみにも憎しみにも似た負の感情を乗せた瞳で僕を射抜く少年。それはトウルーフフォームの……否、前世の緑谷出久<sup>ホ</sup>だった。

「君は……」

「見れば分かるだろ？ すつとぼけた振りして。僕はお前だ、緑谷出久。自分の過ちによつてオールマイトを殺して、無様に命を散らした愚か者だよ」

「そんな……! 僕はただオールマイトを——」

「——救けたかつたていうのか？ その結果がああ惨状だろ! それに再履修<sup>やりなおし</sup>なんて反則じみたことをして、チカラを付けたところで、今の現状を思い返してみろ! 無闇に状況を掻き乱して、オール・フォー・ワンを追い詰めて、死柄木を覚醒させてしまった。今

度は自分とオールマイトだけじゃない。日本全て……いや、全世界の人間を危険に晒してんだぞ！バカ野郎!!」

ボクは怒り狂ったように僕に向かって怒鳴散らす。その全てが事実で、ボクは僕をよく理解していた。それも当たり前だろう……僕らは同じ人間なのだから。

本当は僕だってわかってた。これまでだって、再履修やりなおしによつて状況が悪くなつてたこともあつたことを。それが僕のせいだつてことも。

ボクから放たれる負の感情に世界が染まつていく。僕も例外ではなかつた。

「僕が何かしようとするから良くないことが起こるんだ。僕みたいな奴は物語の隅っこで大人しく端役をやつていなければならないことだよ！ 何時だってそうだつたら……僕が引き寄せる運命なんてのはあつちやいけないものだったんだ！再履修やりなおしなんてするべきじゃなかつた！僕はその夜、あの場所で死ぬべきだつたんだつ!!!」

ボクの叫びが響く。僕も初代も、歴代の継承者も皆黙つて聞いているしか出来なかつた。

ボクの言う通りなのかもしれない。というより、僕自身がなによりもボクの意見をなにな一つ否定できない。あの場所でオールマイトと共に散つていれば……こんなことにはならなかつたのか。

「だからさ……何もせず、このままここで死んでいけよ。オールマイトだつて見捨てたる

？お前は……僕はそんな程度の間人さ。居なくなつたつて何も問題ない。むしろ、その方が世界の為になる……僕は僕がこの手で殺す……！」

ボクの細腕がゆつくりと伸びてきて、小さなその手が僕の首を真綿のようにゆつくりと締め上げていく。僕は膝から崩れて、抵抗ひとつせずにもボクを見上げた。

息が出来なくなり、ゆつくりと苦しみが込み上げてくる。そしてじんわりと意識が遠退いていく。命の鼓動が弱まっていく。

これで良いのだろう。僕が居なくなればきつと世界はうまくいく。だからここで、僕の中で、ボクによって、誰にももう迷惑をかけずに死んでいけたら、それでいい。

ごめん、皆。ごめんなさい、オールライト。僕は貴方を救けられな——

「——諦めてしまふのか？」

オールライトの声が聴こえる。

「——闘うことを止めてしまふのか？」

再びオールライトの声が聴こえてくる。

「——救えず終わつてしまふのか？」

みたび  
三度オールライトの声が聴こえてきた。

「まだ諦めるには早いぞ！緑谷少年!!」

逞しい腕がボクの腕を掴み、僕の首から引き離れた。僕は激しくむせかえりながら「ぜーぜー」と再び呼吸を始める。荒い息のまま見上げると、そこには凜と輝くオールマイトの姿があつた。

「オール……マイト……?」

「そうだ！私が——君の中の来た！　つておいおい、なんだいこの辛気くさい感じは？とても正義の意志の集まりとは思えないほど暗いぞ！」

オールマイトはいつもの笑顔でこの陰気な雰囲気吹き飛ばしていく。それは僕の憧れた、何時だつて笑顔で皆を救けるヒーローの姿だつた。

「見えないで止めろよ、こっちの私！君の弟子だろ！」

オールマイトは揺らぐオールマイトの背中を叩き、こっちのオールマイトは大きくよろける。

「お師匠……なんて顔してるんですか。辛いときこそ笑顔でいなければ！　笑顔でいるやつが一番強い。ですよね！H A H A H A!!」

次に端にいる7代目に近寄り、頬を指で吊り上げて大きく笑う。オールマイトの登場によつて世界が明るくなっていった。



「待つてたよ、こつちの八代目。そしてこつちの僕たち」

「はじめましてつて…どちら様だい？」

「ワン・フォー・オール」の初代所有者だ。君は継承したその時から100%チカラを使いこなす天才だったから僕らは会ったことがないんだね」

「H A H A H A！天才だなんて、照れるな。ということとは私の中にも貴方たちがいるのか。なるほど…つと、私のことはどうでもいいな！さあ、緑谷少年！」

初代と話をしていたオールマイトは何か納得すると、ぐるりと此方に振り向き、僕を指差す。

「闘いはまだ終わってないぞ！チカラを渡してすぐにやられるとは思っても見なかったが…君は立ち上がれる筈だ」

「でもオールマイト…また死柄木にやられてしまうだけじゃ……」

「大丈夫！そのためのチカラがここにある…！」

オールマイトはドンツと胸を叩いて背筋を伸ばす。その為のチカラ……もうひとり  
のオールマイトの中のワン・フォー・オールのことだろうか。

「まだ何も為してないうちから諦められてしまったら私の立つ瀬がない。私は師匠として君を導き、このチカラを託したいんだ。そして巨悪を砕いて欲しい。闘ってくれ、

緑谷少年…!!」

「オールマイト……僕は……」

「それに、君を待っているのは私だけではない」

オールマイトは上を向いて笑う。どういう意味かと尋ねようかと思ったとき、声が聞こえてきた。

『——絶対に……渡さない……！死んだって離さないわ……！！——』

「優さん……？」

「きつと倒れた君を救けるために、戦っているのだろう。他にも先生やエンデヴァーの声も聞こえてた。皆、闘っている」

僕は焼つている場合じゃない。皆が闘っているなら、僕も行かないと。皆を助けにいかなければ……！

そう決意した時、目の前のオールマイトが手を差し伸べてくる。

「私も共に闘おう。この手をとってヒーローに成れ、緑谷少年……我が後継、オールライト」

「——はいっ！」

オールマイトの手をとると、莫大なチカラが僕の中に流れ込み、オールマイトの身体

が僕の中へと吸い込まれていった。暖かくなった胸に手を当ててみる。

わかる。僕の中にオールマイトがいる…！チカラが溢れてくる…！！

「僕らも連れていってくれ、十代目。忘れないで…悪を打ち砕くために、正義の意志はここに」

揺らいでいた歴代の人影が初代に重なり、薄ぼんやりと光輝く。そして初代の拳が僕の胸に押し当てられて、そのまま僕の中に消えていった。胸に揺るぎない正義の心が熱く燃え盛る。

暗闇だった世界に一筋の光が射し込む。そして僕の身体がゆっくりと光に向かつて浮かんでいく。なんとなく、それが外の世界へと繋がっていると感ずることが出来た。

「一緒にこいよ!!ボク!」

僕はオールマイトの登場からずっと俯いていたボクへと声をかけて手を伸ばす。

「でも、僕は…諦めて…：僕なんかにはなにも…！」

「諦めてなんかいなかったじゃないか!無意識でも個性を使って再履修やりなおしつていう奇跡を起こして。そして僕にワン・フォー・オールを譲渡したじゃないか!!それはボクがオールマイトを救いたいって、諦めたくないって、そう思っていた何よりの証拠だろ!!」

「——それは…！」

「だからいこう!まだ終わってない。僕がオールマイトを…皆を救けるんだ!!」

ゆっくりと上昇していく身体を振り、上下逆さまになりながらも手を伸ばし続ける。ボクは呆気にとられた表情をしたあと頭を大きく振ってから、僕を見据え大きく眼を見開いた。

「必ず……助けよう——!!」

ボクは大きく跳ねて僕の手をとる。ボクの身体が光の粒になって僕の掌から身体中に染み込んでいった。

——了解、緑谷出久。諦めないでいてくれて、ありがとう。

すべてのチカラを託された僕はぐんぐんと速度を上げて光に向かって突き進む。身体中にチカラが巡り、今も尚増大し続けていく。

光が近づいてくると、外からの音が大きくなる。同時に耳鳴りも始まり、この世界の終わりを予感させた。

『——んなさい、デクくん。貴方の——護ってあげ——なかつ——』

優さん……ありがとう。僕はもう何度なく貴方に護られて、救われて来ました。今度は……僕の番です。

光が視界を包み、甲高い耳鳴りが鼓膜を支配する。そんな中でも声は聞こえてくる。

『きよデクく——大——き……——してる——…』

——ええ…優さん。僕もですよ。

そして僕は暖かな光に呑み込まれた——

光に呑み込まれ、現実世界に回帰した僕の目の前にはまたしても光の塊が待ち受けて

いた。直感でそれが危険なものだと悟る。

バツと跳ね起きると、後ろから優さんの驚きの声が聴こえるが今は目の前の脅威が最優先だ。

皆から託されたこのチカラで打ち砕いてみせる——ワン・フォー・オール！プルスウルトラ！！！！

全身に今までに感じたことのないような膨大で莫大な量のチカラが駆け巡る。全身の筋肉から湧き出るチカラの奔流は体内のみならず僕の体表面にも溢れだしてくる。迸るチカラは稲妻のような形で身体をバリバリと弾けながら走り、それでも噴出を続けるチカラは炎の揺らぎのように全身を包み込む。

僕は拳を握りしめ、大きく振り絞る。チカラを籠めた腕から更にチカラが溢れだして、腕に纏わりついていった。

「DETROITTT!!SMASH——!!!」

迫りくる巨大な光球に向かって、右腕を振り抜くと、僕の一撃は強大な暴風を巻き起こしていく。右腕に集まっていたチカラが暴風に混じり合うように射出され、チカラを内包した竜巻が白く輝く光球と衝突した。チカラの塊と光球は激しい音を発てながら削り合うが、竜巻が光球を呑み込んで押し返し、余波を生み出しながら対消滅していった。消し去った光球の向こう側。宙に浮き、目を見開いて驚く死柄木の姿が見えた。

僕は振り向いて優さんに笑いかける。もう大丈夫、という想いを籠めて。

「デクくん……生きてた……!」

「ええ、戻ってきましたよ。護ってくれてありがとうございます、優さん」

「私には何も出来なかった。それにまたデクくんを救ってもらつ——」

会話する優さんと僕に向かって死柄木は重くのし掛かるような殺気を放つ。優さんがその殺気に呑まれ、言葉を発することも出来ず震えていく。

僕は優さんを庇うように前に立ちはだかり、威圧感を全開にして死柄木を睨み付ける。殺気と威圧感がバチバチと交差して打ち消しあつていった。

「何度だって——」

僕は背中に控える優さんへ言葉を紡いでいく。伝えたいことがあるんだ。僕はそのためここに戻ってきた。

「——何度だって救えますよ!だって僕はあなたのヒーローなんだから!!」

007. だってアタシのヒーロー。

## 008. ピースサイン

僕の中のワン・フォー・オールの世界。そこで僕は答えに辿り着いて、チカラを改めて託された。

優さんも、オールマイトも、皆このチカラで救ってみせる。さあいくぞ、死柄木弔！

— t h i r d   s i d e   i n —

「こりや酷いな…：神野区が半壊してるじゃないか……」

「なにぼさつとしてんだ！大スクープだぞ！早く撮れ!!」

夜空を飛ぶ報道ヘリの中で、テレビ局のクルーたちが神野区の惨状を取材していた。崩壊する街並みに現実感の喪失があるのか、ディレクターはどこか興奮ぎみだ。カメラマンは冷静に開いたドアから廃墟の群れを見下ろしながら撮影し始める。

スタジオからこちらへと中継が繋がるといふ指示を受けて、狭いヘリの内部が慌ただしくなる。そしてADの合図で現場中継が始まった。



「見えますでしようか！神野区が、崩壊しております！普段なら大勢の人で賑わう繁華街も今は見る影もなく、全てが瓦礫と化しています！詳細はわかりませんが、警察からの発表によりますと、これらはヴィランの集団的暴動による被害だということですよ！」

リポーターが感情を乗せた声で現状を伝えていく。それに合わせてカメラがぐるつと大きく見回すように動いて、崩れた街の全貌を捉えようとした。その時だった。崩壊した街の中に瞬き光る何かが動き、カメラを横切ったのだ。

カメラマンは「今なにか」と眩きながら、カメラを横切った謎の物体を追った。そしてついにカメラがその姿を捉える。

「おい見ろ！あれはなんだ!?人か…?」

「速すぎてよくわからない!」

辛うじてカメラが捉えていたのは高速で動き、時折衝突する稲妻のような人影と光のような人影だった。その動きが速すぎてズームした状態では見逃してしまうため、かなり引きの撮影をしていたのでそのようにしか見えない。

二つの人影は幾度なくぶつかり合い、緑の稲妻と白い光の残像が軌跡を描いていく。突如、白い光がへりに向かって急接近を始める。瞬く間に距離を詰め、へりの真横に空中で立ち止まった。そしてカメラに映し出されたのは、白く輝く白髪の男の姿だった。

「ヴィ、ヴィラン…!?!」

カメラマンは身体の底から湧き出る恐怖からか、思わず相手が何かも分からないのにそう決めてつけて眩いてしまう。その男から放たれる雰囲気、クルー達の心を絶望に染め上げて恐怖させた。

白い男が無表情のままへりに向けて掌をかざす。クルー達は本能的に自分達の死を悟った。このまま呆気なく、なんの感情すら持たれないまま羽虫のように潰されてしまうのだと。

だが、それは現実にはならなかった。緑の稲妻が轟くように走り、そのまま白い男を吹き飛ばしたからだ。カメラに撮られた映像には白い男と入れ替わるように、緑色のコスチュームを纏った筋骨隆々な緑髪の青年の姿が映し出される。それも一瞬で、すぐに白い男を追うように消えてしまった。

脅威が現れては消え去り、茫然とするクルー達。暫しの思考停止からいち早く立ち直ったのはクルーの中でも一番若いリポーターだった。自らの職務を全うすべく、ヘッドセットマイクの位置を調整して、力強く喋りだす。

「ご覧いただけただけでしょうか!?!街を破壊したと思わしき白いヴィランの姿を!そしてそれと闘う、緑のコスチュームのヒーローの姿を!——ヒーローが…ヒーローが闘ってます!!」

全国に中継されたその映像は、彼を知る者の元へと届く。

「いつけえ！緑谷！筋肉のチカラを見せてやれ！」

「共に鍛えた筋肉はお前を裏切らない。勝てるぞ、緑谷！」

筋肉の盟友は彼の筋肉を信じている。鍛え上げた筋肉は誰にも負けないことなによりも信じている。

「マンダレイ…マツチヨマン大丈夫だよな？勝てるよな…？」

「大丈夫よ洗汰。オールライトは…あの子ならきつとどんな敵にだって勝てるわ」

「だよな！頑張れ！マツチヨマン！頑張れー！」

彼に救われた少年とヒーローは再び彼が勝利し、救うことを願っている。

「どんな個性つかつてんでしょうか？帰ってきたら詳しくじいーくりと聞かせてもらいましょう！……だからちゃんと帰って来てくださいよ…筋肉の人……」

発明好きの少女は彼の帰りを待ち望んでいる。自分の為に、彼の為に。

「すごい！スゴすぎるぞ緑谷君!!」

「あれが天哉の言つてた友達か？強すぎんだろ、ホントに高校生かよ……」

「勿論！彼は雄英を代表する……いや、僕の最強の友達さ！兄さん!」

彼の級友は疑わない。彼こそが最強であることを。自らが目指すべき頂点であることを。

「やっぱ緑谷君ハンパないなあ。戻ってきたらもつと鍛えてもらわなきゃ。一緒に……」

彼に憧れる少女は熱くなつた身体を持って余しながら、ひとり彼の帰りを待ち続けている。

「出久……お母さん知ってるんだからね。いつもそうやってボロボロに成ってるってこと。なにもないように装って帰ってきてるって……だから今回も何もないように帰ってきて」

彼の母は知っていた。それでも静かに涙を流しながら、我が子を信じて帰りを待っている。

「デクさん——」

少女は只一言、名前を呟く。複雑に絡まった想いを込めて。彼女は祈っていた。彼を想って、静かに、ただただ祈っていた。

— t h i r d   s i d e   o u t —

「——WASHINGTON——SMASH!!」

僕の一撃が死柄木の放った白い光の壁を砕いていく。壁を砕ききり、死柄木に拳が届くかといつたところで、勢いが殺され死柄木は宙を舞って離れていく。

くっ！また逃げられたっ！！あと少しなのに…！

死柄木が離れる。僕が追う。再び死柄木が離れる。先程からこの繰り返しだ。

精神世界から覚醒した僕は、優さんや倒れた皆を巻き込まないために、すぐさま死柄

木を突き飛ばして空中戦を始めた。自由に宙を舞う死柄木に追い付くため、ニューハンプシャースマッシュの応用でチカラを背面の筋肉からジェット噴射のように放出し、僕は空を飛んだのだ。

超高速の戦闘は空中地上を縦横無尽に飛び回りながら続き、互いに致命的な攻撃を与えれずにいる。それまで死柄木が見せていた謎の技も使われたようだけど、全身から溢れるチカラが全て弾き返してみたいで、直接的な攻撃の応酬だ。

ここまで戦ってみてわかったのは、遠距離では死柄木に、近距離では僕に分があるつてことだ。今も死柄木はバレーボール大の光球を連続で僕に放ちながら逃げ回り、僕はそれをチカラを纏わせた手足で弾きながら近寄っている。

「SMASH!!」

左腕を振り抜き、チカラを練り込んだ竜巻を死柄木へと放つ。だが死柄木は光の壁を貼ってチカラの奔流からいとも簡単に逃れた。

やっぱり僕の遠距離攻撃はあまり通用しないか…当たればダメージにはなりそうだが、ほぼ確実に防がれるな。

逆に近づいて一撃でも直接殴れば状況が一転するはずだ。その証拠に死柄木は僕の接近を恐れて大袈裟なまでに距離をとっている。

そんな中、逃げ回っていたその場に死柄木が静止した。僕は何か仕掛けてくるのかと

思い、警戒して少し距離をとる。

「鬼ごっこは終わりか、死柄木?」

「まさかお前がこの領域まで至るとは思ってなかったからな……緑谷出久。だから、ちよつと警戒して戦ってみてたんだ」

「そうかい、それはお互い様だ」

「だろうな。俺も、お前も、きつとこれまでの超人社会を過去にしちまうような……新しい存在に成ったんだらう。正直ちよつと嬉しかったんだ。一人っきりの世界におんなじようなヤツが現れたつてな。まあ皮肉にもそれがあれほど憎かったお前だったんだけど」

死柄木は苦笑いを浮かべながらヘラヘラと語る。まるで僕のことを敵として見てないような発言をしているが、僕の本能はヤツが僕の敵だと叫んで止まらない。

「それじゃお友達にでもなるかい? これまでのことは水に流してさ」

「冗談が下手な奴だな……まるで笑えないぜ。お前と友達なんざ死んでもお断りだ。俺とお前が頂点なんだ、ヴィランとヒーローの。俺に傷をつけられるようなヒーローなんてお前以外に居ないし、お前を倒せるヴィランも俺しか居ない。だからだ……だからこそ、俺はお前を殺す。お前を殺して俺が……俺ひとりが頂点となつてこの腐った社会を変えてやる……!」

「させないぞ、僕がお前を止める。オールマイトとの約束は今度こそ違えない……」  
互いに譲る気はなく、気迫を込めて睨み合う。そして死柄木が動いた。しかしそれはこれまでのような逃げ回るようなものではなく、まっすぐと僕に向かって接近してくる。

「ハアツ！」

死柄木は驚くことに自らの拳で僕に殴りかかってきた。僕も負けじと拳を振り抜き迎撃する。そのパンチは僕の想像以上に鋭く、チカラの籠められた僕の拳と死柄木の拳は激しく正面から衝突した。

チカラ比べとなつた勝負の軍配は僕に上がった。死柄木は空中を滑るように回転しながら弾かれた勢いをキレイに殺していつて止まる。そして拳を見つめながらぶつぶつと眩きながらシャドーをしていた。死柄木はどうやら納得いかないようだが、僕は拳に残る感触に戦慄していた。

バカな。さつきまで素人。パンチしか打てなかった筈の死柄木が、こんなに重いパンチを放てるなんて。奴の混沌のチカラも勿論籠められていたが、なによりモーシヨンも速さも狙いもかなりの精度だったし……あれは僕のスマツシユにあまりにもよく似ている。まさかこれまでの戦いで覚えたつてのか？この短時間に!?!才能マンかよ!

「だいぶわかつてきたぜ……それ、もう一回だ!!」



「ツ?!——SMASH!!」

死柄木は光弾をいくつも飛ばしながら再び僕へと向かってくる。僕はその弾を弾き飛ばしながら先程よりも本腰をいれた迎撃の一撃を放った。弾けた光に照らされながら、先程の繰り返しのように僕と死柄木の拳がぶつかり合う。

そして、互いに振り抜いた拳の衝撃が完全に拮抗し、周囲に撒き散らされる。

「ハハッ! やった……これで完成だ。どうだ緑谷ア! お前の一撃……ものにしてやったぞ!!」

「たかだかパンチを覚えたくらいで……」

拳を合わせながら死柄木は笑顔で凄む。僕も言い返すが、もはや只の負け惜しみのようになっている。この短時間でパンチを覚えられたということは、戦いが長引くほど僕の技を盗まれるということ。つまり、僕に分があつた近距離戦すら同等になるということに他ならない。

これ以上技を盗まれる前に一気に畳み掛けて、速攻で決着をつけるしかない!!

僕は死柄木が距離をとるよりも早く拳を振り抜く。一撃では終わらせず、何度も拳を振り抜いていく。対する死柄木も僕の拳に超速の反射で拳を合わせて迎え撃つ。

「HAWAIIAN—SMASH—RUSH!!」

僕はラッシュの速度を段々と上げる。そして一撃一撃に籠めるチカラも多くしてい

く。すると直角だった僕と死柄木のラツシユの均衡が崩れていき、僕の拳が死柄木の身体に届き始めた。勝機を見いだした僕はそのまま拳を放ち続けて畳み掛けていく。

「ハアアアアア——!!」

ラツシユ対決に押され続け追い込まれていた死柄木。だが手数が足りないを見ると奴は背後からソフトボール大の光球を大量に生み出し、ラツシユを振るいながら同時に打ち出してきた。襲いくる光球に対抗するため、勝ち越していた分の拳を死柄木の身体から光球へと狙いを変えるしかなかった。

おいおいおいおい！ちよつと待て!!この光球、段々と数が増えてないか!? 只でさえ手一杯だつてのに!!!

均衡していた僕のラツシユと死柄木の拳と光球のバランスが崩れていき、僕の身体に光球が直撃し始める。身に纏ったワン・フォー・オールを貫くことはまだないが、徐々に剥がされているのがわかる。このままではじり貧になることは間違いなかった。

「KANSAAS—SMASH!!!」

僕は被弾を覚悟して左腕で防御をしながら低い姿勢で踏み込み、右腕を振り抜いて拳を死柄木の鳩尾目掛けて放った。光球が身体のいたるところに直撃し、バチバチとワン・フォー・オールの弾ける音と衝撃が伝わるが、強引に拳を押し込む。拳が死柄木の胴体を捉えていき、奴の纏うチカラと僕の拳に籠めたチカラが反発と共に削れてい

く。そして僕の素の拳が死柄木の鳩尾に振じ込まれ、その身体を大きく吹き飛ばした。吹き飛んだ死柄木は空中で姿勢を制御してふらつきながら止まり、苦しそうな顔でこちらを睨み付ける。僕も額から流れる血を拭いながら、肩で息をしつつも死柄木を睨み返した。

「痛つてえ……かなり効いたぜ。でも今のでわかった。緑谷出久、お前は俺に敵わない。チカラは拮抗してるみたいだが、個性の自由度が段違いだ。惜しかったなあ……あと一歩及ばず、お前は俺に敗れるんだ！ハハハ!!」

「くっ……まだだ！まだ終わってない!!」

「いいや終わりさーお前に何が出来る!? そのチカラ、オールマイトのだろう？ ああ!!? そんなチカラも足りない!頼みのオールマイトの瓦礫の藻屑!他のヒーローどもだつて倒れた! お前ひとりじゃ俺には届かないんだよ!!——終わりだ!緑谷出久ウ!!」

言葉の終わりに死柄木が両腕を大きく広げたと同時に、死柄木の周囲に無数の光球が生まれて視界を埋めつくす。そしてそれらは一斉に僕に向かって降り注いできた。

「SMASASHHH!!」

対して僕はチカラを最大限に籠めた拳を振り抜き、チカラの暴風を放った。竜巻と化した風と光球が周囲に衝撃を振り撒きながらぶつかり合う。だが僕の竜巻を引き裂く

ように光球の渦の中から巨大な柱のような光線<sup>ビーム</sup>が伸びてきた。僕は反対の腕にチカラを籠めてビームをアッパーカットで殴り付ける。するとビームの軌道が真上へと逸れていく、と同時に僕も腕を大きく上へと弾かれた。

「もらったア!!」

「しまっ——」

なんとか殴つてどうにかなつたと思つた矢先に、逸れたビームの影から死柄木の姿が迫ってくる。凶悪に歪んだ笑顔を浮かべながら死柄木は僕へと拳を振り抜く。先程のビームにより体勢を崩された僕は防御することも叶わず、混沌のチカラの籠つた拳によつて殴り飛ばされた。

建物だった物の残骸を砕きながら地面を転がり、数百メートルほどぶつ飛んだ後、瓦礫の山に埋もれて止まつた。

いたた：なんて強引な戦い方だ！ 殴られたのが胸で良かった。大胸筋が奴のパンチを止めてくれたおかげで肋骨も内臓も無事だし。でも鍛えてなかつたら心臓を抉り取られてたな……!

そんなことを考えていると熾烈な殺気を感じ、咄嗟にワン・フォー・オールを前面に押し出して防御体勢をとる。直後、一面が光に包まれ、僕の埋もれていた瓦礫が光に熔けていった。光が止み、瓦礫の中にぽっかりと空いた穴の中から空を見上げると、にや

けた面の死柄木の姿が見えた。

「やっぱり生きてたか。なんとなくそんな気はしてたけどな」

「生憎だけど、お前を倒すまで死ねないんでね」

「減らず口を…」

強がりと言ったが今の一撃を防ぐ時にかなりワン・フォー・オールを削られた。もう一度今のを食らって畳み掛けられたらやばいだろう。だが死柄木は既にまるで太陽のように光輝く巨大な光球を頭上に出現させて、更にチカラを高めていた。あれはホントにまずい……！

「いい加減楽にな——ッ!?!」

死柄木が僕へと腕を振り下ろし、その強大なチカラの塊が射出されようとした。その時だった。爆炎を纏った巨大な氷塊が死柄木に向かって飛来する。予想外の急襲に動揺した死柄木はその氷塊を避けることも出来ずに、圧倒的な質量と速度に負けて吹き飛ばされていった。死柄木の集めたチカラが霧散したのを確認してから、僕は氷の飛んできた方へと向く。

「よお、デク。大丈夫か？」

「救けにきたぞ、緑谷……！」

「かつちゃん……!?それに轟君まで！」

死柄木に一撃を加えてから、そこに現れたのは避難してこの場にはいない筈の二人だった。なぜここに!? という疑問が湧いてきたが、口振りから僕を助けにきたのは明白だ。

「救けに……ってダメだよ! ここは——」

「——危険だ。って言うんだろ? わかつてるぜ、デク。そんなことは分かりきってんだ。それでも助けたいって思っちまった……だから俺達はここにいます」

「だから……」

「緑谷……俺達は助けたいんだ。いや、救けるって決めてたんだ。お前に助けられたあの時から……」

「デク、お前言ってたよな? 余計なお世話はヒーローの基本って。だからよお……しきたぜえ? 余計なお世話って奴をなあ!!」

真剣な顔の轟君と不敵に笑うかつちゃんは僕に近づいてきて並び立つ。僕の返事など待つことなく動く彼らを止めることが出来ない。なぜならそれらは僕が幾度となく行ってきたことで、そこに間違いなんてなかったと僕自身が思いたったからだ。

「——くそがあ!! 雑魚が今さらワラワラと涌いてきやがって!!」

吹き飛ばされていった死柄木が、怒り心頭といった具合で飛んで戻ってきた。怒りの

対象はかっちゃんとならぬ君で間違いないだろう。つまり、彼らも死柄木の殺意の対象になってしまったわけだ。

「さっさと消し飛ばせ!!」

死柄木は極太のビームを放つ。そしてビームを中心に数えきれないほどの光球を同時に放ってきていた。対する僕はビームだけでも弾き返そうと、チカラを籠めて右腕を引き絞って駆け出した。駆け出した僕の背後から巨大な氷塊が二つ、追いつきながら生えてくる。そして氷塊はなかに爆破されたようで、粉々に砕けて散弾のように僕目の前に広がり、迫っていた光球の殆どを打ち消していった。

「IOWA—SMASH!!」

僕は残るビームにチカラを押し付けようとして勢いよく殴り付けてやった。するとビームが僕のチカラに負けて中心から掻き消される。スマッシュの余波と氷塊の欠片が入り交じり、礫の嵐となって死柄木を襲う。しかし、死柄木はバリアのようにチカラの塊を張り巡らせすべての礫を防ぎきっていた。

「それでデクさんよお? 困ってるんじゃないかねえのか?」

「俺たちだってヒーローだ。困ってる人がいれば救ける。だろ緑谷?」

自分達の迷惑通りに事が進んで上機嫌なかつちゃんと、尚も真剣な眼差しを向けてくる轟君。全ての状況を加味して僕は口を開いた。

「……実を言うところとちよつと困つてる。救けてくれるかい、二人とも?」

「任せろ! 今度は俺がお前を救けてやる! 約束だからな!!」

「ああ! あのとときの借りを返す…救けるぞ!」

僕たち三人は揃つて、宙に佇む死柄木と対峙する。　そうして僕らと死柄木の戦いが始まつた。

二人の手助けによつて戦況は大きく好転した。先程のように細かな光球等の遠距離攻撃は二人が防いでくれる。おかげで僕はデカイ一撃と、死柄木本体に集中することができる。更に死柄木に集中することで、二人を狙う必殺の攻撃も僕が防ぐことが出来ていた。戦況は再び拮抗し、光と稲妻、炎と氷と爆発が入り乱れて辺りを掻き乱す。正に混沌の戦場に迸るチカラは次第に激しくなつていった。

「危ねえ! 避けるデクウ——!!」

互角の戦いが続いて暫くした時だった。背後からかちちゃんの声が響く。僕は既に死柄木に直接殴りかかつており、視線だけを送つて背後を見た。そこにはかちちゃんの爆破が僕の背中を焼き付くさんと迫つていた。おそらく死柄木の攻撃によつて爆破の進路をずらされたのだろう。僕のパンチを両腕で受け止め、逃がさないと言わんばかり



にがっちりと押さえているのがなよりの証拠だ。

避けられない僕は背中からワン・フォー・オールを噴出し、爆破に備える。爆破が僕の背を吹き飛ばすと思われたその時、不思議なことが起こった。かっちゃんも爆破が僕の背中に吸い込まれるように消えたのだ。何が起きたかわからず一瞬の混乱。直後、背中から溢れていたワン・フォー・オールが流れに沿って爆発し、その爆風によって超加速した僕。結果、僕の拳を掴んでいた死柄木はその爆発的な勢いに負けて、すっ飛んていった。

今のはいったい…!? まるでかっちゃんの爆速ターボみたいに背中から出た爆破で加速したぞ!?

途端に熱くなる胸の奥。そして頭の中にあの世界で聞いた初代の言葉が浮かんできた。

『——ワン・フォー・オールは違う。透明なんだ。何にも染まらず、なにとも反発しない。チカラの塊としてあるだけなんだ——』

あのとときの初代の言葉…! ワン・フォー・オールは純粹なチカラの塊だから、他の個性と反発せずに一時的に取り込めたのか? それに混ざりあつてから増強して出て来たつてのか! 理屈はわからないけど、今はこの技を使わない手はない!!

「なんだ今のはア!? ふざけるな! とるにとらない雑魚が! 至つてもいない凡人風情が!

俺の邪魔をするんじゃないやねええええ!!!!」

素早く舞い戻ってきた死柄木は怒りを露にして大声で喚き叫んだ。そして、無数の大小入り乱れた光球を出現させていく。それは遊びを無くした死柄木の、間違いなくこれまでで最大級の攻撃だった。

「轟君！君のチカラを!!」

「…任せろ！ 受けとれえ！緑谷——!!」

僕は大きく両腕を伸ばして掌を背後にいる轟君へと叫ぶ。強大な冷気と熱気が背後から迫り、チカラを籠めた両腕に直撃し、そのチカラを呑み込んでいった。轟君がエンデヴァーとお母さんから受け継ぎ身に付けたチカラが、僕の両の腕に蓄えられ僕のチカラと混ざりゆく。

「消えろ！消えろ消えろ消えろおおおお!!」

怒りと憎しみの籠った叫びと共に死柄木は、天を覆うかの如く出現させてた光球を一斉に僕らに向かって放った。僕はそれに立ち向かうため、両腕を後ろに大きく振りかぶり——

「VIRGINIA!!——SMASHH!!」

——左右同時に振り抜いた。僕のチカラによって極限まで威力の増した炎と氷が、振り抜かれた腕の発した暴風に乗って射出される。炎の竜巻と氷の竜巻はうねりをあ

げて混じり合い、熱気と冷気とチカラが入り乱れてた嵐を生み出した。嵐は死柄木の光を悉く呑み込んでいき、その輝きを散らしていった。

混沌の光は全て消え去り、満天の星空が夜空に浮かぶ。その中心にはまだ死柄木がいた。僕は死柄木に向かって拳を振りかぶりながらチカラを全開で滾らせて跳躍していく。

「頂点に立つのは俺なんだア——!!」

自らの攻撃を打ち消されても死柄木は未だに余力を残していたらしく、迫りくる僕を阻むように特大の光壁を張った。僕はその壁に向かって真っ直ぐに突撃し、拳を突き立てる。チカラとチカラが凌ぎを削り、バチバチと周囲に散っていく。壁は厚く固かった。突進の勢いに追加して、背からワン・フォー・オールを噴出させて加速する。壁に大きく亀裂が走る。だがそれでも貫くまでには至らなかった。

——くっ！チカラが：足りない：!!

そう思ったとき、僕の背後からド派手な爆発音が聞こえて、背中に強烈な爆破が浴びせられる。僕のチカラがその爆破を受けて、余すことなく吸い込んでいく。つまりその爆破が個性によるものだということだ。言葉を交わすことなく、目線すら合わせずとも、最高のタイミングでチカラを貸してくれたのだ。

かっちゃん、君はやっぱり僕の最高の相棒だよ!!

「KILUA!!——SMASH!!」

背中に籠められた親友のチカラが僕のチカラと結合し、爆裂しながら噴出する。まるで火山の噴火のような勢いで、僕の拳は再び加速した。そして僕の拳は立ちはだかる壁を砕き貫き通す。それでも僕らの勢いは止まらず、死柄木に向かつて突き進んでいき——僕らの拳が死柄木に届いた。

腕を交差して防御する死柄木に、真上から拳を振り下ろした。僕らの合わせたチカラがついに死柄木を地に墮す。

「いっけええええ——!!」

かっちゃんと言葉の轟君の声が僕の背中を押す。地に墮ち、僕を仰ぎ見る死柄木に向かって、拳を引き絞って突撃する。

「これで終わりだ！死柄木いいいい!!」

全身から溢れてだすチカラが僕の身体を突き進める。僕の中の正義の意志が激しく燃え盛り、僕にチカラを与えてくれた。

——ありがとう、ワン・フォー・オール。

——ありがとうございます、オールマイト。

——さらば、僕らの宿敵、オール・フォー・ワン。

「——緑谷ア！出久ウウウウ——！！！！」

死柄木は僕の名を叫びながら、最後まで抗うためチカラの壁で僕を阻もうとする。その光は今まで一番淡く、死柄木の振り絞った僅かなチカラだということが見てわかった。それでも僕は全身全霊、渾身のチカラを全身の筋肉から引き出し、真正面から打ち砕くための拳を放つ。

これが今の僕に撃てる最高最強の一撃。

「ALL—OVER—THE—WORLD—SMASHHHH！！！！」

光の壁を突き破り、悪の化身“死柄木”の顔に拳が突き刺さる。

それは遙か昔から受け継がれてきた、揺るぎなき正義の信念の拳だった。

天から降り注ぐ雷の如く、緑の稲妻が地に落ちる。稲妻の衝撃は大地を陥没させ、周囲に暴風を撒き散らした。そして静けさが辺りを包み込む。

「先……生……俺は——……」

クレーターの底で死柄木は力無く倒れた。最後まで僕に向かって手を伸ばしながら。熱くなった胸に掌をかざし、ゆっくりと目を瞑る。静けさの中に風を切る音が聴こえてくる。僕は自らの最後の仕事を思い出し、胸を張り、拳を再び握りしめる。

——僕は平和の象徴を継ぐものとして、力強く拳を掲げた。

——これが僕の……いや、僕らの……

008. ピースサイン

最終章 ONE FOR All, All FOR ONE.

## エピソード

## 平和の象徴の後継者

特異点を超えた死柄木と二つのワン・フォー・オールを携えた僕の最終決戦。自分でも驚くくらいの超常レベルの僕らの戦いは神野区をリングにした激戦だった。

圧倒的なパワーとセンスの死柄木に僕は追い詰められたが、かつちゃんと轟君、そして歴代のワン・フォー・オールのチカラを借りて僕は死柄木を打ち倒し、拳を掲げた。

「デク!!」「緑谷!!」

息を切らせながらかつちゃんと轟君がクレーターの崖をかけ下り、僕の元へと駆けつける。

二人ともあんなに慌てて…心配してきてくれたのか？これは嬉しい。

「奴はどうなった!? 勝ったか!？」

「えーつと…気絶してる。あと、ありがとう。二人のおかげで勝てたよ」

「そうだろ？ 何せ俺はお前の相棒だからな！」

「緑谷の救けに成れたなら、それで俺はいい……」

「んだと半分野郎！喧嘩売ってんのか!？」

かと思いきや早くもいつもの口喧嘩を始めてしまった。周囲は廃墟と化した街だが、なんだか日常が帰ってきたって気がするな。

「おいデク！なに笑ってやがんだ!!」

「なにか面白い要素でもあったか……？まあ緑谷が笑顔なら俺は——」

「またそれか！しつけえんだよ、この緑谷至上主義が!!」

「いや、お前にだけは言われたくない……」

「ハハハ……まあ気にしないでよ。さて、死柄木を警察に引き渡さなきゃいけないんだけど……誰か見かけた？」

廃墟に穿うがかれた穴の底でかつちゃん顔を見合わせた。そして互いに苦笑いするしかなかった。

こんな状況で、こんなことになるなんて予想してなかったな。いるのか……警察？というか先に死柄木と戦ってたって他のヒーローやオールマイトは大丈夫なんだろうか。起きてすぐ優さんから離れて戦ってたからその辺りの事情がさっぱりわからない……誰も見当たらなかったし……まさか皆、死柄木にやられて——

「デクくーん!」



——などと考えていると、僕らのいるクレーターの上から女性の声が聞こえてきた。幾度となく聞いてきたこの声：聞き間違える筈がない。優さんの声だ。

その姿を確認しようとして顔をあげて返事をしようとした時には、優さんは既にクレーターを駆け下り、僕に向かって飛び込んできていた。慌てて飛び込んできた優さんを両腕で抱き止める。すると優さんは僕の胸に顔を埋める形で、背中に手を回し力強く抱き締めてきた。

暫しそのまま沈黙していると、優さんは胸から顔を離して僕の顔を見上げる。相も変わらず綺麗な切れ長の目。だがその瞳は赤く潤んで、目尻には光るものが浮かぶ。

「バカ！心配させないでよ！」

「ア、ハイ！スミマセン！」

突然の叱咤に反射的に片言で返事をして背筋を伸ばしてしまう。いきなり怒られたが、優さんの腕はほどかれることなく、僕の胴体を拘束している。

「ホントに心配したんだから！」

「すみません！」

「いきなり訳もわからずやられちゃって倒れるし！」

「す、すみません……！」

「全然目を覚まさないし！かと思いきやいきなり起き上がって颯爽と救けてくれるし

「！」

「すみませ…え？あ、どういたしまして」

お礼を言われたので返事をする、調子に乗らない！と鳩尾に素早く頭突きをされ、「ヴツ…！」という声が漏れてしまう。尚も僕の身体は解放されていない。

「護つてくれたと思つたらすぐに死柄木といなくなっちゃうし！それからドカンドカんと戦つてる音しか聞こえないし！めっちゃくちゃ心配してたのよ!!」

「…すみません、たくさん心配かけちゃって…」

「…バカ」

それだけというと、優さんは僕の胸に再び顔を埋める。無言だったが、その中で鼻をすすする音だけが聞こえた。暫くしてから僕は「優さん」と名前を呼び短く声をかける。すると優さんは涙目のしかめっ面で僕の顔を見上げた。

「…何よ」

「本当に心配かけてごめんなさい。それと…：…ありがとうございます、心配してくれて。待っていてくれて。おかげで帰ってこれました。僕が来たってね」

素直な気持ちで優さんへと真つ直ぐぶつけて、僕は笑顔で語りかけた。

「プツ…：なによそれ。はあ、全くデクくんは仕方ないわね。無事に帰ってきたし、今回は許してあげるわ。おかえりなさい、デクくん」

「はい、ただいま。優さん」

少しだけ吹き出すように笑うと、その後優しい笑みで僕の帰りを喜んでくれた。僕もまた優さんの元へと帰れた喜びを笑みに乗せて互いに笑い合う。僕は本当の意味で戦いから帰って来たと思えた――

——　　つてあれ？もう解放される流れだよな？なんで優さんは未だに僕の身体を離してくれないんだ!? 「んーっ」とか言つてまた顔を擦り付けてくるし！なんだこの状態!?　　いついけない！冷静になったら滅茶苦茶恥ずかしくなってきた！

僕至上最短距離に優さんがいる。

物理的な距離はゼロ！髪の毛一本入る隙もなあい！わあい！……ん？前にも抱き締められたことが在ったようななかったような……記憶が曖昧だからノーカンだ！とにかくこの距離はマズイ！近すぎるってもんじゃあない。

戦いの後で泥くさい筈なのに優さんからはなんかめっちゃ良い香りが漂って僕の鼻孔を擽る。

んんっ！頭がくらくらしてきた。それに色んなところが密着しているじゃないか！

あんなトコとか、こんなトコとか……ってなに考えてんだ僕！考えるな感じろ！ いや、感じるののもっとマズイ！ 感触が、柔らかさと暖かさが感じ取れてしまう!! ダメだ! なにも考えず、なにも感じるな。そう、無に成るのだ緑谷出久よ。お前なら出来る……!!

「でもあの化け物に勝つなんて……さっすが私のデクくん!」

優さんはそう言いながら、よりいっそう強く、そしてよりいっそう深く僕の身体を抱き締める。先程よりも全てが近付き、全ての感覚が強まった——

——武山優。またの名をMt・レディ。現在人気急上昇中の若手ヒーローである。23歳という若さで事務所を立ち上げ、鮮烈なデビューを飾りプロヒーロー業界に名乗りを上げた。彼女の最大の武器は「巨大化」による強力な攻撃。しかし彼女の人気の秘訣はその強さだけではない。誰しもを惹き付ける美貌。痩身で在りながらも高身長、故に生み出される圧倒的なスタイル。そして、何より、そのバストは——豊満であった。

「いつてめえのになつたんだよクソババア……いつまでそうしてるつもりだ! さっさとデクから離れやがれ!」

「誰がババアよ! 空気読みなさいよクソガキ!!」

「最大限に読んだ結果だろうがっ！てか惚けてねえで動けデク!!」  
かつちゃんの張り手が僕の背中を叩き、軽い衝撃が突き抜ける。

——っは!?!変な世界にトリップしてた!!救けてくれたのか、かつちゃん!君はやっぱ  
り僕の最高の相棒だよ!!

「ゆ、優さん。とにかく今は死柄杓をどうにかしましょう…」

ゆつくりと優さんを身体から引き剥がす。僕の意識とは相反して身体は名残惜し  
うにしていたが、理性で無理やりひきがす。

「むう…まあそうね。じゃあ——後で…ね?」

「——ツツ!」

優さんは上目遣いで僕の眼を見つめながら、そつと人差し指を僕の胸に当て、妖艶な  
微笑みを見せた。その仕草にドキリと胸がときめく。きつと僕の顔は耳の先まで真っ  
赤になつていることだろう。

「後にしろっ!」

「あいた!」

硬直していたところにかつちゃんが尻を蹴りあげてくる。おかげで僕はようやく動  
き出せた。やいのやいのと言いかうかつちゃんと優さんを尻目に、僕は倒れた死柄杓の  
元へ向かい、ぐつたりとして動かないその身体を担ぎ上げる。そこへおずおずと轟君が

やってきて、なにか言いたげな目でこちらを見ていた。

「何かな？」

「緑谷……俺も。俺も後で抱き締めていいか……？」

「……………えっ？」

轟君の真剣な顔から訳のわからないふざけた言葉が発せられる。意味がわからず、間抜けな声を出してしまった。きつと顔もひきつっていることだろう。

「どういうことだ……!? いつ? どこで? だれが? なにを? なぜ? ……どのようにして? 5W 1H 全てがわからない！」

「あ……その……冗談だ……」

「ああ、冗談ね! ハハハ!! 相変わらず轟君の冗談は分かりづらいなあ! ハハハ……………うん。いこうか」

「ああ……………」

僕と轟君の間に微妙な空気が流れる。かっちゃんとうやさんの喧騒をBGMに無言で二人してクレーターをゆっくりと登った。そんな一幕もありながら、崖を登り終える。

そこには僕が待ち望んだ人がいた。会って話があった人がいた。

「オ、オールマイ——焦凍オオオオオ!!」——トオガハア——

「緑谷——!?!」

ミリオ先輩に肩を借りて立つトウルフオームのオールマイトの姿を見つけた。と思つた瞬間、猛烈な勢いで駆けてきたエンデヴァーに僕は吹き飛ばされて宙を舞う。ついでに担いでいた死柄木も意識もないのに宙を舞う。

「痛た……」

「大丈夫か緑谷！」

「うん、大丈夫だよ。轟君」

「そうか……このくそ親父……！今日という今日は許さねえ！」

「感動の再会だぞ焦凍！さあ父の胸に飛び込んで——グフ オ!?!」

「これがお母さんの右の力だ……！」

僕を軽く気遣つたあと轟君は素早く移動した。両手を広げて迎え入れるエンデヴァーのから空きの鳩尾に轟君の渾身の右ストレートが炸裂する。エンデヴァーは膝から崩れ落ち、息がうまくできないのか「コヒュー……コヒュー……」と呻き声をあげていた。そんな轟親子の仲睦まじい？交流を横目で眺め、僕は改めてオールマイトの方へと向かう。

「オールマイト……ありがとうございました！」

「それはこっちの台詞さ。ありがとう緑谷少年。我々の使命を果たしてくれて。そしてヒーローになってくれてね」

「全部、全部オールマイトのおかげです！僕のチカラに全部を与えてくれた。託してくれた。だからこれは僕らで果たしたんです！」

オールマイトは細い腕を振り上げてサムズアップする。僕もそれに合わせて親指を立てて笑顔で返した。

「緑谷少年……！」

「オールマイト……!!」

「あの、止めなくて良いんですか、アレ」

「いいよ、ほとんどエンデヴァアの自業自得さ。好きにさせてあげよう」

互いに見つめ合う僕とオールマイト。そして話し掛けてきたミリオ先輩が指差すアレとは、「これは姉さんの分！これは兄貴の分！」みたいなことを言いながらエンデヴァアの頬を往復で張り倒す轟君のことだ。エンデヴァアは頬を真っ赤に腫らしながらも、どこか満足げなのでほっといてもいいだろう。

「さて、そろそろ警察も事態の収拾に駆けつけるだろう。死柄木を引き渡して終わりにしよう」

「ええ、オールマイト！」

「で、緑谷少年。死柄木はどこに……？」



「……あ……」

オールマイトの質問に僕は答えられない。そう、さつきエンデヴァーに吹き飛ばされたとき、どこかに落としてしまったのだ。

慌てて先程吹き飛ばされた辺りに眼を向ける。そこには抱えあげられた死柄木の姿があった。

その光景に緩んでいた空気が引き締まる。その抱えていた人物に僕らの視線が集まり、一気に緊張感が高まっていく。

何時の間に？ どうして？ といった疑問は尽きないが、ソイツはそこに立っていた。

「弔をお探しかな……？」

「オール・フォー・ワン……」

「弔はまた負けてしまったね。最後まで君の後継者には勝てなかった」

両腕で死柄木を抱えながら、オール・フォー・ワンはどこか哀愁の漂わせている。顔をオールマイトと合わせながら、しっかりと有りもしない眼でオールマイトの眼を見据えていた。その間に僕たちはゆっくりとオール・フォー・ワンの取り囲むように立ち回りながらその様子を眺めていた。

「私達の勝ち……いや、もう勝ち負けではないのだろう。だから終わりにしよう。オール・フォー・ワン……全て終わらせる時が来たんだ」

「終わり…か。あの時終わらせることが出来なかった僕らが、終わらせられるとでも？」  
 「もう十分足掻き、蹴いただろう。お互いにな。私達が終わらせなければ。これからの世界に私達の席はいらない」

「そうか…それが君の考えなんだな、オールマイト。よくわかったよ……」

ミリオ先輩から離れ、ひとりで向き合うオールマイトは落ち着いた口調で話す。オール・フォー・ワンはぐったりと項垂れて、咳くように答えた。

「…僕は気がついたんだよ、オールマイト。やっぱり——全部僕がやらなきゃダメだつてことにさあ……！」

オール・フォー・ワンは俯いた顔を上げ、醜悪な笑顔を浮かべる。その嗤いには強烈な悪意がこれでもかというくらい詰め込まれていた。

「NOOOO!!——」

「——《全ては僕の為に》  
 《オール・フォー・ワン》」

思惑に気がついたオールマイトが手を伸ばし近づくが、オール・フォー・ワンは既に無数の黒い枝のような指先を、死柄木の身体に突き刺していた。そして死柄木の個性を奪い取っていく。あの特異点を越えた混沌の個性を……

僕がマズイと思った時にはオール・フォー・ワンは個性を取り込んでいた。

「……………う…ぐ、ぐおおおおお——

!!!」



オール・フォー・ワンだった化け物は言葉にならない叫び声を上げる。僕はその様子を冷めた目で見つめていた。

「オールマイト……あれにはもう……」

「ああ、何の理性も知性も感じられない。奴は個性に吞まれて人であることを辞めてしまった……」

「ええ……僕らで終わらせましょう」

僕とオールマイトは寂しさすら感じた。あのオール・フォー・ワンがこのようなことになり、終わっていつてしまうとは思わなかった。

僕は一言「手を出してください」とオールマイトに告げる。オールマイトは怪訝な顔でゆっくりと差し出した手を力強く握る。そして僕は——チカラを譲渡した。

「ん、これは!？」

「このチカラはお返しします。まだその時じゃない……と思ったので」

驚くオールマイトに、僕は微笑みながらオールマイトから貰ったチカラをそのまま受け渡す。オールマイトの身体が骸骨のような痩せ細ったものから、筋骨隆々で大木のような太さへと変化していく。返されたチカラによってオールマイトは再びマッスルフォームへと変身したのだ。

僕とオールマイト——二つの筋肉が、今再び並び立つ。受け継がれた正義を乗せ

て、僕らの筋肉が躍動する。

「さあ、いきましよう！僕らが！この筋肉が！！」

「ああ！我々の筋肉で全てにケリをつけよう！いくぞ少年！」

「はい！オールマイト！！」

雄叫びを上げる化け物へと向かって、二人の筋肉がチカラを迸らせながら突撃していく。同時に拳を大きく引き、勢いを増しながら距離を詰めていく。

——二人の筋肉。

——幾つもの正義。

——全てが籠められた二つの拳が振り抜かれた。

二——W——UNITED——STATES——OF——SMASH 《ダブル・ユナイテッドステイツオブ・スマッシュ》 ——

!!!!!!  
ニ

後の世に神野区の悪夢と呼ばれる事件は幕を下ろした。

事件の元凶となったヴィラン連合の面々は全員が個性を失い、無個性となり逮捕された。そしてすべての黒幕であったオール・フォー・ワンは暴走した個性の反動で、意識の戻らない植物状態となり、現在も医療刑務所に収監されている。

神野区が半壊し重軽傷者多数。復興の目処も立たない程の大事件だったが、警察ならびにヒーロー達の懸命な活動により死者はゼロ名だった。これは神野区の奇跡と呼ばれ、悪夢とともに語り継がれている。

この事件を機にナンバーワンヒーロー“オールマイト”は、およそ二年間を目処に引退を示唆。その弱体化と相まって世間を騒がせた。

それからの僕の日常はあつという間に過ぎ去っていった。

学生的でヒーロー的な授業に課外活動。騒ぎ走り回った文化祭に、再びの体育祭。休み時間や放課後の何でもないような交流。大波乱の修学旅行。

様々な思い出を仲間達と積み重ね、忙しくも色濃く輝かしい高校生活を送っていった。

---

そして訪れる別れの季節。 雄英高校卒業の時——…

「——それで、話って何かな……麗日さん？」

桜舞う学舎の影。僕と麗日さんの二人きり。彼女はゆつくりと、だが手短に僕らの思い出を振り返って語る。そして核心へと至ってゆく——

「——デクさん……私、ずっとデクさんのことが——」

「麗日さん……僕は——…」

吹き抜ける風と共に僕は答えた。木漏れ日に照らされながら、麗日さんは頬を濡らし

ながら太陽のような笑顔を見せた——…

あの事件から随分と月日は流れ、今日はオールマイトの現役引退の日だ。僕は今日という日を忘れることはないだろう。

「——私、オールマイトは本日を持ちまして…プロヒーロー活動の第一線から退きます。事実上の現役引退…とでも言いましょうか…」

様々なメディアの記者で溢れる超満員会見場。ホールを貸し切り行われたのはオールマイトの引退会見だ。カメラのフラッシュに照らされる壇上で、オールマイトは言葉に詰まり苦笑いを見せる。

「この業界から去るわけではないのですが…ハハハ、言葉を選んでしまう。とにかく、今日という日をひとつの区切りとさせていただきます。この場を借りて、一先ずはこれ



まで私を支えてくれた全ての人々に感謝を——ありがとうございます!」

大きなお礼の言葉と共に頭を下げるオールマイトに、万雷の拍手が送られ、眩い程のフラッシュが一齐に浴びせられる。

オールマイトは頭を下げ続ける。トップヒーローとして幾年も駆け抜けてきた日々を支え続けてくれた人々へ。オールマイトを認めてくれた、ヒーローにしてくれた人々へ。幾重にも積み重ねた感謝を表すように、頭を下げ続けた。

そしてオールマイトはゆっくりと頭を上げ、いつもの最高のヒーローの笑顔を見せた。

「H A H A H A!! 堅苦しいのはこれくらいにしておこうか!! さあ! 皆様お待たせ致しました!! サプライズの時間だあ! ……つと言っても皆、今日は私の引退会見だけじゃあないって薄々勘づいてたんじやないのかい?」

空気が一転し、オールマイトはアメリカンなトークをスタートする。記者達からおおっという声が上がリ、会見場がざわつき始めた。

「なんと本日! 私の後を継ぐ新たなヒーローがデビューするのさ!! では登場してもらおう!—— come on! オールライトオ!!」

オールマイトが大袈裟に手振りをし、直後会見場が暗転する。

よっ…呼ばれた…! 行かなくちゃ。うう…緊張する。だがここで引いてちゃ始まん

ないな！よし、いくぞ！！

「Are you alright? もう大丈夫！何故かって？——」

引き上げられた緞帳のさらに上、照明やらの近くのキャットウォークに待機していた僕は、名乗りを上げながら飛び降りて膝と拳を着きながら着地する。所謂「スーパ―ヒーロー着地」だ。

「——僕がきちゃー……………来た。です……」

僕は大事な決め台詞で囁んだ。

余談だが、顔を上げながら「僕が来た！」っていうところが決め所である。

会場には疎らな拍手と失笑が広がる。ウケもスベりもしなかったという最悪のパターンだった。僕は相も変わらずユーモアのセンスがなかった。

やつ、やつてしまったあ！緊張しすぎて口がカラカラだったからか!?くそっ！本番前に水を飲んでおけば……！それか大人しくサイドバイセツプスかフロントマスキュラーのポーシングを決めとくべきだったか！筋肉は裏切らない……って今は後悔してる場合じゃない！

「HHHHHA! 登場から囁むとは飛ばしてるじゃあないか！というわけで改めて紹介しよう。我が弟子、オールライトだ！」

冷めきった空気を盛り上げるため、オールライトがずっと身を乗り出して僕を指し

た。またしても救けられてしまった……でもありがたいです、僕のヒーロー!!  
「ええつと……紹介に上がりました、オールライトです。本日よりプロヒーローとしてデビューと相成りました。これからよろしくお願いします」

僕は無難で簡単な挨拶をして頭を下げる。先程はいろいろやろうとして失敗したのだ。これくらいシンプルなほうがいいだろう。

だが会場のざわつきは収まらない。それどころかよりいっそうざわめきが大きくなりつつあった。

「えつ……終わりですか？」

「なにかもつと……一言ください!!」

「というか、緑谷出久君ですよね! 雄英高校体育祭三年連続優勝の!!」

「緑谷くん、コメントを! これじゃあ帰れんよ!」

記者の中からあれやこれやと僕への質問やヤジが飛び交い始めた。ヤバイ! なにか答えないと収まりそうもないぞ……!

「緑谷ではなく、オールライトです! はじめまして!!」

「いや緑谷君だよね!」

「今日からはオールライトでお願いします!」

「ではオールライトさん、先程の挨拶の意味は? ご説明お願いします」

「それ本人に真つ向から聞きますか!? 名前のオールライトと大丈夫をかけて、オールマイト風に登場したかったんです! 言わせないでくださいよ、恥ずかしい……!」

「何かアピールポイントがありますか?」

「この鍛え上げた筋肉です!」

「趣味は?」

「筋トレとオールマイトです!」

「オールライトさん……!」

僕が質問に答え始めたことを皮切りに、会見場は僕への特設質問コーナーへと変貌をした。僕は迫り来る質問の波を千切っては投げ、精一杯捌いていった。答えちゃダメなこと以外は大体答えてしまい、なかなか恥ずかしい思いをすることもあったがそれでも僕は答え続けたのだ。

30分程僕への質問は途切れることなく続き、最終的には大喜利のようになっていたが、僕は気合いと筋肉で乗り切った。

「——筋肉です……!!」

そしてついに記者達の質問が尽き、僕の声だけが会見場に響いた。

やりきった……! 僕は答えきりましたよ。そんな顔でこつちを見ないでくださいよ、オールマイト。僕だって必死だったんです……

でもまだ終わりではなかった。中年くらいのひとりの記者が挙手をし、質問を投げ掛けてきたからだ。

「オールライトさん。平和の象徴と謳われていたオールライトの後を継ぐということですが……貴方にそれが果たせますか？成れるんですか、平和の象徴に。この国の希望に」

空気が一転し、あれほどぎわついていた会場がシーンと静まり返った。僕も問いかけに対し言葉に詰まり、それまでのような即答は出来なかった。

それでも答えるべきことはある。伝えなくてはならないことがある。僕の想いを言葉にする必要があるんだ。

僕は一度深呼吸をしたのちに前を向き、その記者を……会場全体を見据えて答え始めた。

「オールライトは偉大なヒーローです。この場では語り尽くせない程の功績と信頼を積み重ね、この国の平和に誰よりも貢献してきました。それは皆様ご存知でしょう。そんなヒーローの後を僕のような『ぽつと出の若者が継げるのか？』そう思うことでしょうか。それは一切否定しません……今の僕にオールライトの後を継ぐなんて大それたこととは言えません」

僕の弱気にも聞こえる宣言に会場からは落胆のざわめきが聞こえてくる。そんな中、僕は言葉が続けた。

「僕一人では出来ません。だからこそ皆の力が必要なんです。オールマイトが作り上げたこの平和を僕たちが継ぐんです！僕はオールマイトからたくさんの勇氣と元氣をもらいました。オールマイトは僕にたくさんの正義を見せてくれました。みんなもオールマイトから貰ってきたんじゃないですか？見てきたんじゃないですか？…なら今度は僕らの番なんじゃないですか!？」

次第に言葉に熱が籠っていき、僕は立ち上がりながらさらに話を続ける。

「出来ることがあるじゃないですか。小さなことでもいい…困っている人がいたら笑って話しかけるような…そんなことが出来たら、それでいい。決してみんながみんな強くある必要なんてない。戦いだけが平和を守る手段じゃない。」

戦う必要があるなら、僕達ヒーローが戦います！僕がオールマイトの後を継ぐならば、誰よりもその先陣を切り戦って護ります。着いてきてください。オールマイトがくれた平和の道を共に歩み、これからも残していきましよう！だから——」

僕は声を大にして叫ぶように語り続ける。

そして目の前を大きく指さした。

「そこにいる貴方が！」

「画面の向こうのキミが！」

「平和を愛する全ての人がオールマイトの……平和の象徴の後継者ですっ!!」

——僕は今日という日を忘れることはないだろう。

——この日、僕は……僕達は平和の象徴の後継者に成ったんだ。

第二部 《 平和の象徴の後継者 》

## 少年の物語は続く

季節は春、長閑な昼下がり。のどか人も疎らな公園の木漏れ日の射すベンチに腰かけるひとりの青年がいた。

青年はやや幼さの残る顔立ちをしており、年の頃なら十代後半に見えるようや若者だ。背丈は170センチくらいで、手足は細いが鍛えているのか、わりと筋肉質である。青年がアクビをしながらふと公園の外に眼を向ければ、スーツ姿の男性や作業着を来た人などが自らの職務を全うするために忙しなく歩いているのが見えた。静かすぎず騒がしすぎない、まさに平和としか言い様のない日常の光景だ。

「んん…平和だなあ」

緑の癖毛を揺らしながら青年は微睡んだ顔で呟いた。彼はこんななんでもない平和な日常が好きなのだろう。

「お待たせー」

ぼんやりとしていた青年に向かって声がかけられた。少しだけハツとしてから青年が眼を向けると、そこには幼児わきまを抱えた女性が歩いてきている。



緩く巻いた金色のロングヘアを靡かせ、モデルのように抜群のスタイルを誇る彼女。だが、抱えた幼児に向ける眼差しは暖かく、女として成熟した雰囲気からは彼女こそがその子の母親であることがはつきりとわかる。

「何ぼーつとしてたの?」

「いや、平和だなあと思ってたさ」

「平和、かあ。そうね——」

女性は感慨深そうに呟きながらベンチに腰を掛け、青年と自分の間に抱えていた幼児を座らせた。女性は幼児の衣服を整えながら言葉が続ける。

「——だってパパが護ってる平和なもの。ねー?」

「へーわー? パパ、へーわ?」

「そうよー、平和。わかるー?」

女性は幼児の髪を手櫛でとかしながら話す。幼児も拙いながらも母親の言葉を準えなぞらて笑っていた。青年はそんな様子を苦笑いしながら眺めている。なにやら思うことが在るようで、少しだけ考える素振りをした後、幼児の頭を優しく撫でた。

「パパが護ってるってのはちよつと違うかな……パパだけじゃなくみんなが護ってるんだよ。平和を愛するみんながチカラを合わせてね」

「んー?じゃあわたしもまもるー!」

「そっか。じゃあママの言うことを聞いて、良い子になろうね」

「はーいー!」

元気よく返事をする幼児の頭をよりいっそう強く撫でながら、青年は柔らかな笑顔を見せた。隣に座る女性もそれを微笑ましいと思つたのか、優しい笑みを浮かべて眺めていた。

仲睦まじくひとつのベンチに座る三人。誰の目から見ても幸せそうで、正に平和というべき日常のヒトコマだろう。

——だがしかし、その平穏な日常は唐突に終わる。

「誰かー! 救けてえー!!」

青年らの耳に少し離れたところから、そんな声となにかが壊れるような音が飛び込んできたからだ。青年は素早く立ち上がると、先程とは打って変わって真剣な険しい表情を浮かべて女性を見つめる。

「ごめん…僕…いかなきゃ」

「ええ、アナタはそうでなきゃ。わかってる」

「この埋め合わせは必ずするから——!」

青年は振り返りながら着ていた服を瞬く間に脱ぎ捨てる。脱ぎ捨てた服の下は真っ黒で、全身を覆うタイトのような薄手のインナーを身に付けていた。

胸元に光る手のひら大のスイッチのようなものを、青年は胸を叩くように握り拳で押した。すると胸元を中心に緑の粒子が展開されて青年の全身を包み込み、ピタリと吸い付き深緑のコスチュームへと姿を変える。同時に両の手首に着けていたバングルも装甲を展開し、ガントレットへと形を変えた。

しかし驚くべきは目にも止まらぬ早着替えでも、スーパーテクノロジーのコスチュームでもない。

直後、青年は全身に力を籠めるような仕草をするとバチリと緑色の稲妻が迸った。すると痩身だった青年の身体が大きく膨れ上がり始める。背丈も同じく伸び始め、青年は一瞬で筋骨隆々な大男へと変身したのだ。その姿は――

――身長220センチッ!!体重274キログラム!!その身に纏うは筋肉ッ!そして筋肉だア――!!!

筋肉は鋼すら軽々と凌駕する鎧と成り、何物をも具に防ぐ最強の防具と化したッ!!!  
そして筋肉は漢の自慢の拳を万物を貫く最強の槍へと昇華させたアア!!!

更にその一身に秘められしチカラッ……受け継がれた正義の結晶ッ……!! ワン・フオー・オール——ッ!!!

かつて最高のヒーローと呼ばれたオールマイトと瓜二つウ!!

筋肉 × ワン・フオー・オール! それ則ち、最ッ強ッッ!!!

彼こそがッ! ヒーロービルボードチャートJPNナンバーワンッヒーローッッ!!!

「それじゃあ、優さん! 行ってきます!」

「行ってらっしゃい、デクくん!」

出久と優は短いやり取りを交わす。そして出久は地を大きく踏み込み、その場から飛び立っていった。

—— 救いを求める人々がいるなら、彼は何時だって駆けつける。

「もう大丈夫! 何故かって? ——」

—— 彼は闘う。遠い日から求め続けた高みに辿り着きながらも、受け継がれてきた

希望を灯し、己の理想を追い求め続けて。

「——僕が来たっ!!」

これは再び始まった緑谷出久が最高のヒーローに成るまで物語。  
しかし、彼の物語は終わらない。緑谷出久が願望<sup>ゆめ</sup>を現実にするまで——いつまで  
も少年の物語は続いていく。

「——S M A A A A A S H H H H  
!!!!!!」

デクのヒーローアカデミア 再履修!

—— 完 ——

「パパの話もつと聞きたーい！」

「ききたーい！」

「ええ…？うーん…じゃあ、いいよ」

「やったー！」

「でも……」

「でも？」

「良い子は寝る時間だ！大人になったらヒーローになるんでしょ？」

「うん、成りたい！」

「なりたーい！」

「じゃあ今日はもうおやすみ！」

「はーい……」

「この話の続きは——また、今度だ」

「終わり？」